

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第81集

ほ そ ぐ ち し た
細口下1号窯

こ う の す
鴻ノ巣古窯

た か ば り は ら
高針原1号窯

1999

愛知県埋蔵文化財センター



口絵1 遺跡遠景

各調査区周辺の航空写真。南側から撮影している。写真中央部に北から高針原1号窯、鴻ノ巣古窯、細口下1号窯が位置する。写真の右下には平針運転免許試験場が所在する。写真左上に写る緑地は、初期須恵器を生産した東山の丘陵。



口絵2 鴻ノ巣古窯近景

鴻ノ巣古窯の調査区を南から撮影した航空写真。調査区東側の道路は、調査時に部分開通していた国道302号線。ほぼ中央部に交差点が観察できるが、この左上に残存する緑地のすぐ北側が、高針原1号窯の調査区である。

序

名古屋市天白区・名東区は、名古屋市の東部に位置し、ベッドタウンとして発展を続けています。この地区は歴史的にも多くの文化財が知られおり、古くから繁栄した場所でもあります。

平成8年度、財団法人愛知県埋蔵文化財センターでは名古屋環状2号線建設に伴う、細口下1号窯、鴻ノ巣古窯、高針原1号窯の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、窯業に関わる遺構・遺物を確認するなど、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。そして、今回これらをまとめ、報告書として刊行するにいたりました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者の皆様方から多大なご指導とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成11年8月

財団法人愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

例 言

1. 本書は愛知県名古屋市に天白区・名東区に所在する細口下1号窯、鴻ノ巣古窯、高針原1号窯（『愛知県遺跡地図』（I）尾張地区による遺跡番号は01-10046、01-10005、01-4045）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋環状2号線（一般国道302号線）建設に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成8年4月～10月で、調査は、福岡見彦（本センター課長補佐）・後藤英史（本センター調査研究員）・池本正明（本センター調査研究員）が担当した。
4. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部・名古屋市教育委員会・名古屋市見晴台考古資料館・荒木集成館・長久手町教育委員会
5. 発掘調査時の諸記録、遺物の整理・製図などについては、以下の方々の協力を得た。（五十音順・敬称略以下）
阿部佐保子・八木佳素実（以上、本センター調査研究補助員）
加藤素輝・町田義哉（以上、本センター発掘補助員）
飯田祐子・宇佐美美幸・加藤豊子・木全典子・田中和子・土井てる子・服部恵子・服部里美・平野みどり・本所千恵子（以上、本センター整理補助員）
川波ふじ子・妹尾美佐子・高橋純子・太刀川美和子・田中由紀子・永井信子・成田敦子・森川敏子（以上、本センター整理作業員）
黒宮克宣・武田紀子・服部亜紀子・早川友司・早川義美（以上、学生アルバイト）
6. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。
青木 修・天野暢保・荒木 実・岩野見司・上村安生・内田智久・梅本博志・尾野善裕・神谷友和・加納俊介・川崎みどり・木村有作・清田善樹・小島一夫・斎藤嘉彦・佐藤由紀夫・柴垣勇夫・城ヶ谷和広・中村美枝・楢崎彰一・野澤則幸・福岡猛志・藤澤良祐・三宅唯美・宮田安志・山本直人・渡辺博人（五十音順・敬称略）
7. 本書第三章で計測値を掲載する山越1号窯資料は長久手町教育委員会が所蔵し、第四章で実測図を掲載する細口下1号窯表採資料は名古屋市教育委員会、財団法人荒木集成館が所蔵するものである。
8. 遺物の写真図版の縮尺は1/3を原則とするが、図版5、13、23は原寸、図版46は1722・1723が1/5となっている。
8. 本書で使用する色調名は『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編に依拠した。
9. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
10. 本書の編集は池本正明が担当した。執筆は池本のほかに、阿部佐保子（Ⅱ章2（2）、Ⅳ章2、4）、八木佳素実（Ⅳ章2（3））がこれに加わった。
11. 調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

第I章 はじめに	1
1 経緯と経過	1
2 環境と周辺の遺跡	2
第II章 細口下1号窯	6
1 遺跡	6
2 遺物	11
3 小結	23
第III章 鴻ノ巣古窯	28
1 遺跡	28
2 遺物	31
3 小結	49
第IV章 高針原1号窯	60
1 遺跡	60
2 遺物	72
3 小結	140
第V章 科学分析	152
1 考古地磁気測定	152
2 土器胎土分析	154
3 出土炭化材の樹種同定	163
第VI章 まとめ	170
第VII章 付 載	172
1 細口下1号窯採集遺物	172
2 細口下1号窯出土瓦についての一考察	176
3 高針原1号窯製品の変遷	184
4 土器容量の計測視点	191
付 表	198

遺構計測一覧
遺物計測一覧

挿図目次

図 1 周辺の主要遺跡……………	3	図 32 名古屋考古学会の調査成果	
図 2 細口下 1 号窯調査区位置図……………	7	と今回の調査区……………	50
図 3 細口下 1 号窯調査区全体図……………	8	図 33 計測法による比較 (須恵器) ……	52
図 4 細口下 1 号窯 SY01 ……………	9	図 34 計測法による比較 (灰釉陶器) ……	52
図 5 細口下 1 号窯 SY01 埋土 ……………	10	図 35 計測法による比較 (灰白軟陶) ……	52
図 6 細口下 1 号窯出土遺物 1 ……………	13	図 36 3 遺跡の口縁部計測法によ	
図 7 細口下 1 号窯出土遺物 2 ……………	15	よる比較……………	54
図 8 細口下 1 号窯出土遺物 3 ……………	16	図 37 鴻ノ巣古窯口縁部計測法に	
図 9 細口下 1 号窯出土遺物 4 ……………	17	よる器種比較……………	55
図 10 細口下 1 号窯出土遺物 5 ……………	18	図 38 黒笹 89 号窯口縁部計測法に	
図 11 細口下 1 号窯出土遺物 6 ……………	19	よる器種比較……………	56
図 12 細口下 1 号窯出土遺物 7 ……………	20	図 39 山越 1 号窯口縁部計測法に	
図 13 細口下 1 号窯出土遺物 8 ……………	21	よる器種比較……………	56
図 14 細口下 1 号窯出土遺物 9 ……………	22	図 40 高針原 1 号窯調査区位置図 ……	61
図 15 細口下 1 号窯出土遺物 10……………	23	図 41 高針原 1 号窯調査区全体図 1 ……	62
図 16 細口下 A 号窯……………	25	図 42 高針原 1 号窯調査区全体図 2 ……	63
図 17 鴻ノ巣古窯調査区位置図 ……………	28	図 43 高針原 1 号窯 S Y 0 1 ……………	64
図 18 鴻ノ巣古窯調査区全体図 ……………	29	図 44 高針原 1 号窯 S Y 0 1 左壁 ……	65
図 19 鴻ノ巣古窯灰原断面図……………	30	図 45 高針原 1 号窯 S Y 0 1 灰出	
図 20 鴻ノ巣古窯出土遺物 1 ……………	33	しピット……………	66
図 21 鴻ノ巣古窯出土遺物 2 ……………	34	図 46 高針原 1 号窯 S D 0 2 ……………	67
図 22 鴻ノ巣古窯出土遺物 3 ……………	35	図 47 高針原 1 号窯土坑群 ……………	68
図 23 鴻ノ巣古窯出土遺物 4 ……………	37	図 48 高針原 1 号窯灰原断面図 1 ……	70
図 24 鴻ノ巣古窯出土遺物 5 ……………	39	図 49 高針原 1 号窯灰原断面図 2 ……	71
図 25 鴻ノ巣古窯出土遺物 6 ……………	40	図 50 高針原 1 号窯器種分類図 ……	76
図 26 鴻ノ巣古窯出土遺物 7 ……………	41	図 51 高針原 1 号窯出土遺物 1 ……	83
図 27 鴻ノ巣古窯出土遺物 8 ……………	42	図 52 高針原 1 号窯出土遺物 2 ……	85
図 28 鴻ノ巣古窯出土遺物 9 ……………	44	図 53 高針原 1 号窯出土遺物 3 ……	87
図 29 鴻ノ巣古窯出土遺物 10……………	45	図 54 高針原 1 号窯出土遺物 4 ……	88
図 30 鴻ノ巣古窯出土遺物 11……………	46	図 55 高針原 1 号窯出土遺物 5 ……	89
図 31 鴻ノ巣古窯その他の遺物 ……	49	図 56 高針原 1 号窯出土遺物 6 ……	91

図 57 高針原 1 号窯出土遺物 7	93	図 88 高針原 1 号窯出土遺物 38	139
図 58 高針原 1 号窯出土遺物 8	95	図 89 高針原 1 号窯出土遺物 39	140
図 59 高針原 1 号窯出土遺物 9	97	図 90 高針原 1 号窯 S Y 0 1 左壁	
図 60 高針原 1 号窯出土遺物 10	98	改修状況	141
図 61 高針原 1 号窯出土遺物 11	99	図 91 高針原 1 号窯器種構成	146
図 62 高針原 1 号窯出土遺物 12	101	図 92 各務原市天狗谷 7 号窯	147
図 63 高針原 1 号窯出土遺物 13	102	図 93 刻書土器集成	150
図 64 高針原 1 号窯出土遺物 14	103	図 94 地磁気永年変化曲線と測定	
図 65 高針原 1 号窯出土遺物 15	105	結果	152
図 66 高針原 1 号窯出土遺物 16	106	図 95 Q T - P 1 図	157
図 67 高針原 1 号窯出土遺物 17	107	図 96 S i O ₂ - A l ₂ O ₃ 図	157
図 68 高針原 1 号窯出土遺物 18	108	図 97 F e ₂ O ₃ - N a ₂ O ₃ 図	159
図 69 高針原 1 号窯出土遺物 19	109	図 98 K ₂ O - C a ₂ O 図	159
図 70 高針原 1 号窯出土遺物 20	111	図 99 土器胎土顕微鏡写真	160
図 71 高針原 1 号窯出土遺物 21	113	図 100 高針原 1 号窯炭化材	164
図 72 高針原 1 号窯出土遺物 22	114	図 101 鴻ノ巣古窯炭化材	165
図 73 高針原 1 号窯出土遺物 23	115	図 102 細口下 1 号窯炭化材	166
図 74 高針原 1 号窯出土遺物 24	117	図 103 細口下 1 号窯採集遺物 1	173
図 75 高針原 1 号窯出土遺物 25	119	図 104 細口下 1 号窯採集遺物 2	175
図 76 高針原 1 号窯出土遺物 26	120	図 105 瓦当接合部予想図	176
図 77 高針原 1 号窯出土遺物 27	121	図 106 凸面布目平瓦叩き跡	182
図 78 高針原 1 号窯出土遺物 28	123	図 107 高針原 1 号窯主要な器形	
図 79 高針原 1 号窯出土遺物 29	125	の変遷	187
図 80 高針原 1 号窯出土遺物 30	127	図 108 高針原 1 号窯製品変遷図	190
図 81 高針原 1 号窯出土遺物 31	129	図 109 容量計算の視点	193
図 82 高針原 1 号窯出土遺物 32	130		
図 83 高針原 1 号窯出土遺物 33	131		
図 84 高針原 1 号窯出土遺物 34	133		
図 85 高針原 1 号窯出土遺物 35	135		
図 86 高針原 1 号窯出土遺物 36	137		
図 87 高針原 1 号窯出土遺物 37	138		

図版目次

図版 1	細口下 1 号窯遺構	1
図版 2	細口下 1 号窯遺構	2
図版 3	細口下 1 号窯遺構	3
図版 4	細口下 1 号窯遺構	4
図版 5	細口下 1 号窯遺物	1
図版 6	細口下 1 号窯遺物	2
図版 7	細口下 1 号窯遺物	3
図版 8	細口下 1 号窯遺物	4
図版 9	細口下 1 号窯遺物	5
図版 10	細口下 1 号窯遺物	6
図版 11	鴻ノ巣古窯遺構	1
図版 12	鴻ノ巣古窯遺構	2
図版 13	鴻ノ巣古窯遺物	1
図版 14	鴻ノ巣古窯遺物	2
図版 15	鴻ノ巣古窯遺物	3
図版 16	鴻ノ巣古窯遺物	4
図版 17	高針原 1 号窯遺構	1
図版 18	高針原 1 号窯遺構	2
図版 19	高針原 1 号窯遺構	3
図版 20	高針原 1 号窯遺構	4
図版 21	高針原 1 号窯遺構	5
図版 22	高針原 1 号窯遺構	6
図版 23	高針原 1 号窯遺物	1
図版 24	高針原 1 号窯遺物	2
図版 25	高針原 1 号窯遺物	3
図版 26	高針原 1 号窯遺物	4
図版 27	高針原 1 号窯遺物	5
図版 28	高針原 1 号窯遺物	6
図版 29	高針原 1 号窯遺物	7
図版 30	高針原 1 号窯遺物	8
図版 31	高針原 1 号窯遺物	9
図版 32	高針原 1 号窯遺物	10
図版 33	高針原 1 号窯遺物	11
図版 34	高針原 1 号窯遺物	12
図版 35	高針原 1 号窯遺物	13
図版 36	高針原 1 号窯遺物	14
図版 37	高針原 1 号窯遺物	15
図版 38	高針原 1 号窯遺物	16
図版 39	高針原 1 号窯遺物	17

図版 40	高針原 1 号窯遺物	18
図版 41	高針原 1 号窯遺物	19
図版 42	高針原 1 号窯遺物	20
図版 43	高針原 1 号窯遺物	21
図版 44	高針原 1 号窯遺物	22
図版 45	高針原 1 号窯遺物	23
図版 46	高針原 1 号窯遺物	24

表目次

表 1	調査進行表	1
表 2	釉着関係一覧	26
表 3	鴻ノ巣古窯器種構成表	51
表 4	口縁部計測による比較	53
表 5	高針原 1 号窯器種構成表 1	143
表 6	高針原 1 号窯器種構成表 2	144
表 7	考古地磁気試料一覧	153
表 8	胎土性状表	155
表 9	科学分析表 1	161
表 10	科学分析表 2	162
表 11	炭化材樹種同定結果	167
表 12	炭化材種の同定結果	168
表 13	細口下 1 号窯瓦計測表	177
表 14	軒丸瓦比較表	179
表 15	凸面布目平瓦計測表 1	180
表 16	凸面布目平瓦計測表 2	181
表 17	容量計測表	194

口絵

口絵 1	遺跡遠景
口絵 2	鴻ノ巣古窯近景

第 I 章 はじめに



調査前風景
細口下1号窯 鴻ノ巣古窯
高針原1号窯 現場事務所



春日井市

春日井市

春日井市

春日井市

尾張旭市

豊明市

豊明市

東海市

大府市

知立市

安城市

知多市

知多市

知多市

常滑市

半田市

碧南市

碧南市

西尾市

知多市

伊勢湾

三河

この地図は国土院発行の20万分の1地形図「名古屋」を基に作成されたものである。

第1章 はじめに

1 経過と経緯

建設省、日本道路公団では、名古屋市郊外の交通量調整を目的に国道302号線建設を計画した。ところがこの計画路線には、細口下1号窯、鴻ノ巣古窯、高針原1号窯などの遺跡が所在していた。このため、事前に建設省、日本道路公団と、愛知県教育委員会とがその取り扱いを巡って協議した。その結果、これらの遺跡を発掘調査し記録として保存する必要性が認められた。作業は、愛知県教育委員会を通して委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。調査期間は、平成8年度。計画面積は細口下1号窯が200㎡、鴻ノ巣古窯が300㎡、高針原1号窯が1000㎡である。なお、調査に要した日程などは、図1に示した工程による。

調査原因

調査方法は、地表面から表土のみをバック・ホウにより除去したのち、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削して遺構を検出する方法をとった。遺構測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。

調査の手順

表1 調査進行表

		調査区		
		細口下1号窯	高針原1号窯	鴻ノ巣1号窯
96年度	4月			
	5月			
	6月			
	7月			
	8月			
	9月			
	10月			
	11月			
	12月			
	1月			
	2月			
	3月			

2 環境と周辺の遺跡

遺跡の位置 今回発掘調査を実施した地点は、現在の行政区画で表現すると、細口下1号窯、鴻ノ巣古窯が名古屋市天白区、高針原1号窯が同名東区となる。それぞれの位置は、国道302号線が県道名古屋・長久手線と交わる上社JCT交差点から南方向に計測して、細口下1号窯が6.1 km、鴻ノ巣古窯が3.2 km、高針原1号窯が2.8 kmである。

周辺の地形 次に、調査区周辺の地形を眺める。現在の調査区周辺は、そのほとんどが住宅地として利用されている。しかしこれは昭和30年頃から何回かにわたって計画された土地改良事業により形成された景観である。それ以前は、標高30～90 m程度の丘陵地帯となる。そして、その間を天白川と植田川が北東から南西方向に流れ、その周囲に狭い平野が展開している風景を考えることができる。

次に、このエリアの歴史的環境を年代順に概観する。

まず、古墳時代以前の遺跡は、瓶井遺跡(01-4025)で縄文時代晩期の土器棺が単独出土しているほか、東山公園遺跡(01-5044)で、縄文土器が採集されているにすぎない。全体的に遺跡の希薄なエリアとしてとらえられることができる。

猿投窯 しかし、次の古墳時代に入ると、状況は一変し、猿投山西南麓古窯跡(以下、猿投窯)が成立する。猿投窯は、5世紀から13世紀にかけて存在した窯業遺跡である。11世紀頃にその存在が不明確になるものの、ほぼ継続して操業した国内最大級の窯業遺跡と評価されている。ところで猿投窯は面積が広大なため、通常これをさらに区分して理解されている。すなわち、岩崎地区、鳴海地区、東山地区(東山窯)、折戸地区、黒笹地区、井ヶ谷地区である。このうち、今回の調査区に直接関わる地区は、岩崎地区と鳴海地区である。また、植田川以北では、東山地区がこれらに接して存在している。周知のように、東山地区は猿投窯初期の生産活動の舞台となる。図2に示す範囲内でも、H-11号窯(01-5054)など最古級の遺跡のほか、I-17号窯(14017)、H-15号窯(01-10022)、I-101号窯(01-10007)など、発掘調査が実施されて内容が判明している遺跡も少なくない。

猿投窯では、平安時代に入ると灰釉陶器や鉛釉陶器の生産が開始される。この段階では、生産の中心が大きく二極化し、黒笹地区や折戸地区にその一つが、もう一つは鳴海地区を中心として確立する。ところで、この段階の後者には、NN245号窯(01-14023)、NN249号窯(熊ノ前2号窯 01-14022)など緑釉陶器を大量に生産した窯も知られている。なお、このうちの後者は緑釉単彩の鉛釉陶器のほか、彩文陶器も生産されている。これは、八事小堂跡(01-9002)などでわずかにその出土例が知られる製品で注目できる。

11世紀末に入ると、猿投窯ではほとんどの遺跡が、椀、小椀を主体とした単純な器種を大量に生産する窯となる。いわゆる灰釉系陶器生産の開始である。この中で東山地区ではやや特殊な動きがみられる。一部に特殊品を生産した窯が存在することである。具体的には、H-G-101号窯(01-5007)、同105号窯(01-5018)、八事裏山古窯群(01-10021)などが瓦類や仏具などを焼成した窯として著名である。なお、この傾向は天白川を挟んだ



図1 周辺の主要遺跡 (1:5000)

この地図は国土地理院2万5千分の1地形図
「名古屋南部」・「平針」を使用したものである

対岸の鳴海地区北部でも一部にうかがうことができる。本書で報告する細口下1号窯(01-10046)のほか、NN 305号窯(01-10048)、天白緑地1号窯(01-10059)、同2号窯(01-10060)、などがその具体例として知られる。

以上のように、この地域では、古墳時代～平安時代にかけて生産遺跡の存在が明確となる。しかし、窯業に関わる集団の生活域は不明な部分が多い。ここでは植田川ないし天白川周辺の平坦部に未発見の集落遺跡が存在する可能性を考えるにとどめる。なお、天白川右岸では、平安時代以後の遺物が採集される本郷畑遺跡(14173)の存在が知られてはいるが、未調査のためその内容は不明である。

猿投窯以後

中世後期～近世初頭に入ると、すでに猿投窯は廃絶し、当該地では窯業遺跡を確認することができない。一方、植田川ないし天白川周辺の平坦部では、各地で在地領主の城館が点在している。植田川沿いの一色城(01-4024)、下社城跡(01-4008)、高針城跡(01-4009)や、天白川沿の野方東城跡(14154)、野方西城跡(14155)、浅田城跡(14156)、梅森北城跡(14158)、梅森東城跡(14157)、赤池城跡(14159)平針北城跡(01-10075)、平針城跡(01-10045)、植田城跡(01-10018)などがそれである。しかし、こうした中世城館も在地領主層が淘汰されていく過程で廃城となっていく。

江戸時代にはいると、当該地には、高針村、平針村、赤池村といった名称の村落が存在している。しかし、これらの村落は基本的には丘陵地帯で占められるため、米の生産力は高くはない。むしろ、名古屋城下町の近郊集落という位置から交通の要所として発達した。ところでこの時代は、交通網の充実化にともなって名古屋城下町とその周辺を結ぶ街道整備が試みられた時期である。当該地の周辺では飯田街道が著名であるが、これにつながる街道として、高針村から岩崎村(日新市)をへて飯田街道に向かう街道があるが、高針村ではこれにともなう馬宿が設置されている。一方、岡崎街道では平針村に宿駅が設置された。

丘陵の再開発

また、この時代には耕地面積の拡大を目的とした開発活動も活発となっている。丘陵地帯のそれは、小支谷の入口を閉塞して貯水施設を設定する簡便な方法がとられた。このため、多数の小規模な貯水池が計画され、昭和30年代後期頃から開始される土地改良工事直前の景観となった。牧野池は、こうした丘陵部分を開拓して造成された池の一つである。今日では、牧野池緑地の名で保護を受け、里山ブームを追風に紅葉の名所として著名となっている。

第Ⅱ章 細口下1号窯



第II章 細口下1号窯

1 遺跡

(1) 概要

調査の概要

細口下1号窯は、名古屋市天白区中平三丁目地内に所在する。地形的には、東側にむけて傾斜する緩やかな斜面であるが、調査直前には道路の予定用地のみ島状に成形されていた。これは、本窯が新国道の側道建設および本道部分の予定用地を整備する工事を発見の契機とすることに関連している。

今回の調査区では、窯体1基を検出した。なお、灰原や窯体の付属施設などは確認することができなかった。前者は調査区外に残存し、後者は消滅しているものと考えられる。

(2) 遺構

今回の調査では、窯体1基（SY01）のほか、焼土面（SX01）を検出している。

① SY01

構造は分焰柱を有する窖窯である。残存長は5.0m。焼成室がほぼ残存するが、燃焼室、煙道部はすでに消滅していた。主軸の方向はW-25°-Sで、ほぼ東向きに開口する。

以下、窯体の各部を報告する。

まず、焼成室は全長5.0mを検出した。天井部は残存しない。壁面は、分焰柱基底部上端から計測して、1.0m地点で最大残存値0.5mをはかる。分焰柱から焼成室に向い右側（以下、右壁。なお、反対側は左壁と呼称する）の最上部が瘤状を呈する。ダンパーの痕跡か。

焼成室は、床面を二枚検出できたが、断面観察ではさらに一枚を確認できる。ここでは下層を一次窯、上層を三次窯とし、断面観察でのみ確認できた中央の面を二次窯とする。

床面の数

まず一次窯は、最大幅が分焰柱基底部上端から2.3m地点で、1.8mをはかる。傾斜角は29度。平面形はややゆがむ長方形を呈する。床面は赤褐色の被熱部分を残存させるに留まるが、後述する三次窯の床下施設設置時に剥されている可能性も考えられる(図4)。

次に三次窯は、最大幅が分焰柱基底部上端から1.8m地点で、2.0mをはかる。傾斜角は27度。平面形は一次窯とほぼ類似するが、分焰柱基底部上端から計測して、0.2m

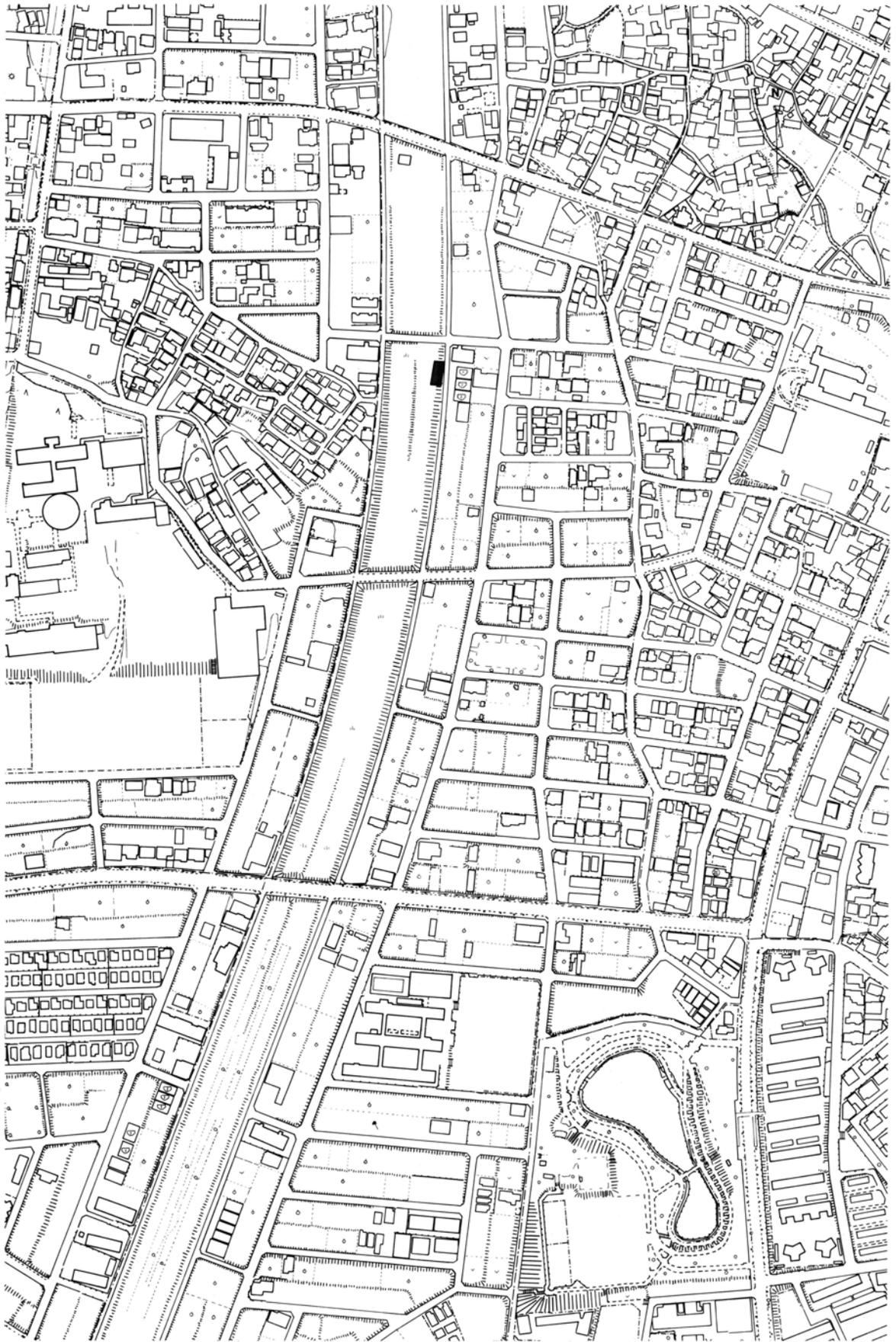


図2 細口下1号窯調査区位置図 (1:2500)

第 II 章

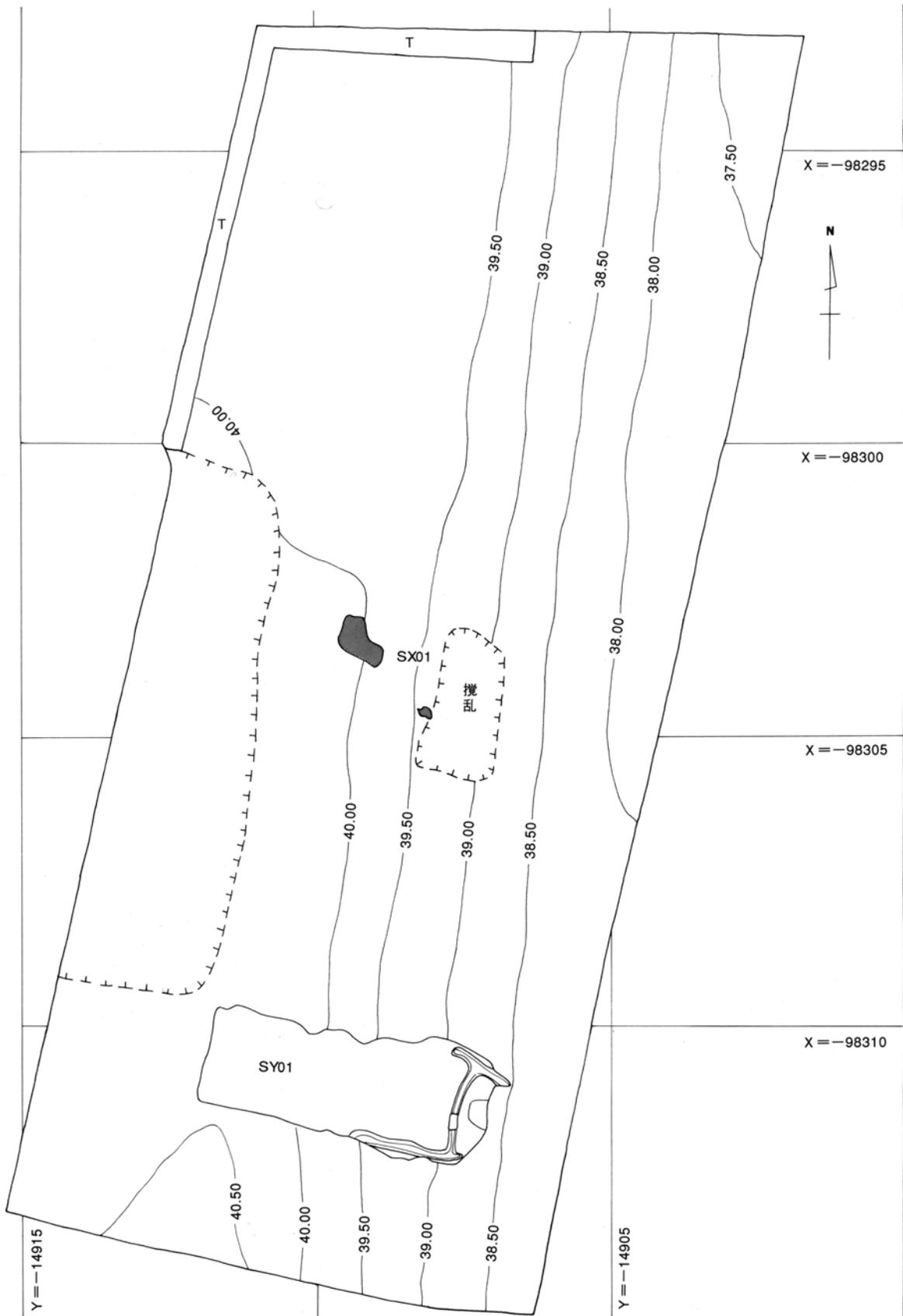


図 3 細口下 1 号窟調査区全体図 (1 : 100)

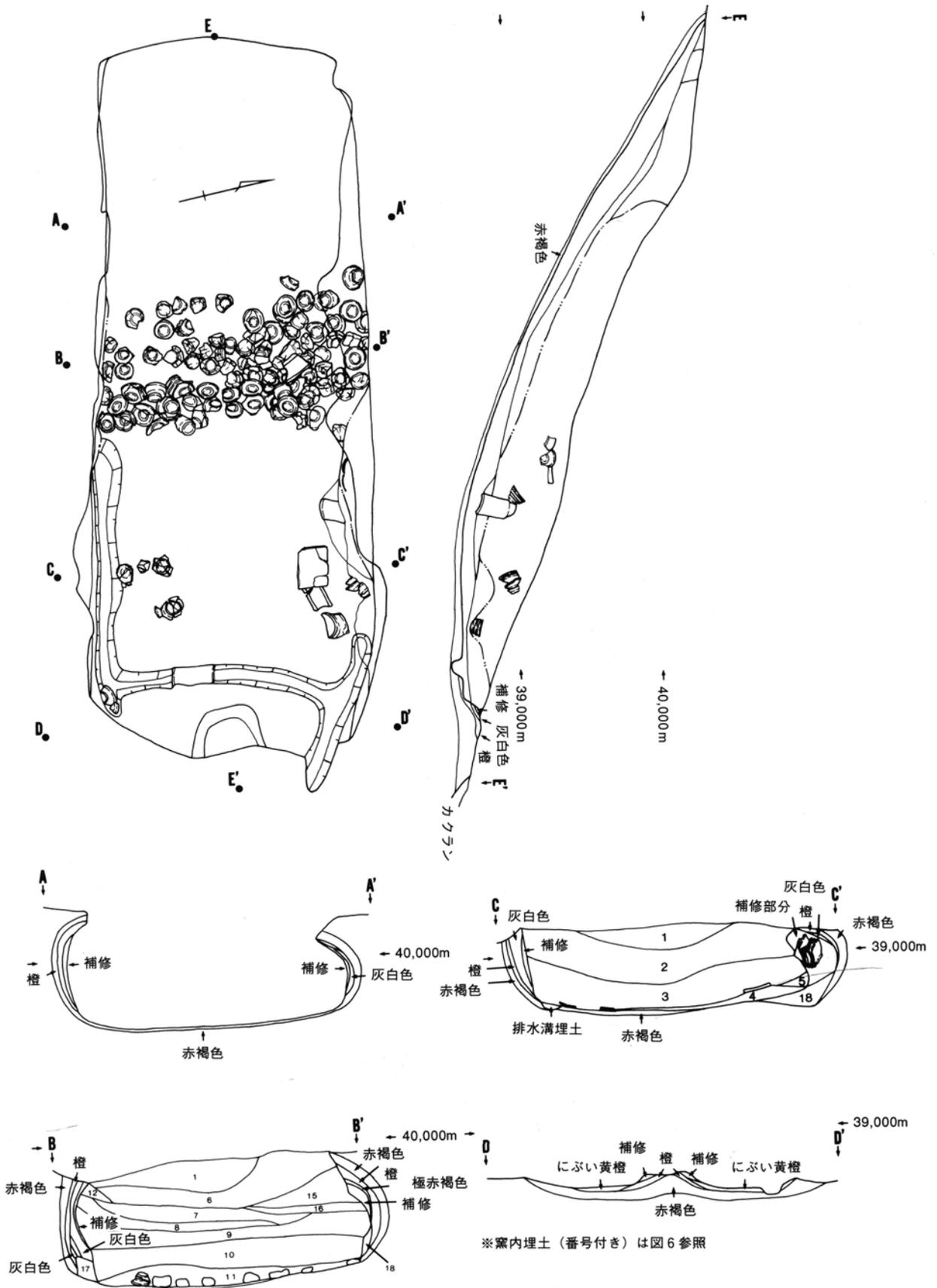


図4 細口下1号窯SY01 (1:40)

※案内埋土(番号付き)は図6参照

床面下の構造

地点から 2.2 m 地点までの右壁が、最大 20 cm 程度張り出す。壁面には、スサ入り粘土を使用し、焼成不良品、焼台、窯壁片などを塗り込めた部分が確認できる。なお、右壁で特にこれが著しい。この部分は最大で 27.0 cm と厚く、壁面の補修と考えるより、むしろ三次面設置に伴う、壁面の改修と判断できる。床面は、一次窯床面上に黄褐色粘質土、木炭層、褐色細砂などを充填しているが、そのほとんどがすでに流失している。中央部の床下には、一次窯の床面直上に焼成不良の椀を伏せ置いたり、焼台を敷き詰めた施設が確認できた。左壁側に焼成不良品、右壁側に焼台が集中する傾向がある（以下、床下施設と仮称する）。分布域は、分焰柱基底部上端から計測して 2.0 m 地点から 3.0 m 地点までに集中するが、分焰柱より上方 1.1 ~ 0.6 m 地点の左壁側にも、これと同様のものが若干確認できる。したがって、ほぼこのあたりまで床下施設が広がっていた可能性が強い。一方、焼成室下方では、排水溝が確認できた。幅は、ほぼ 12 cm をはかる。右壁と左壁に沿って設定され、中央部が焼成室を横断する形で連結する。左壁の排水溝は分焰柱基底部上端から計測して、2.0 m 地点まで、右壁は同様に 0.5 m 地点まで掘削されている。燃焼室側は右壁では残存部にまで続くが、左壁はほぼ分焰柱上端部で終息する。埋土はにぶい赤褐色の粘質土となる。一部に丸瓦（図 8 - 70）を転用した蓋が設置されているため、暗渠として機能していた可能性が強い。また、左壁側の最下部には、焼成不良品が敷き詰められている可能性を残す。

分焰柱は、焼成室側半分の基底部を残すにすぎない。残存部分は地山土の掘り残しによる。基底部の規模は、短辺 0.5 m をはかる。残存高は 8.0 cm。断ち割り調査の結果、焼成室側に二次窯に伴う補修が確認できた。

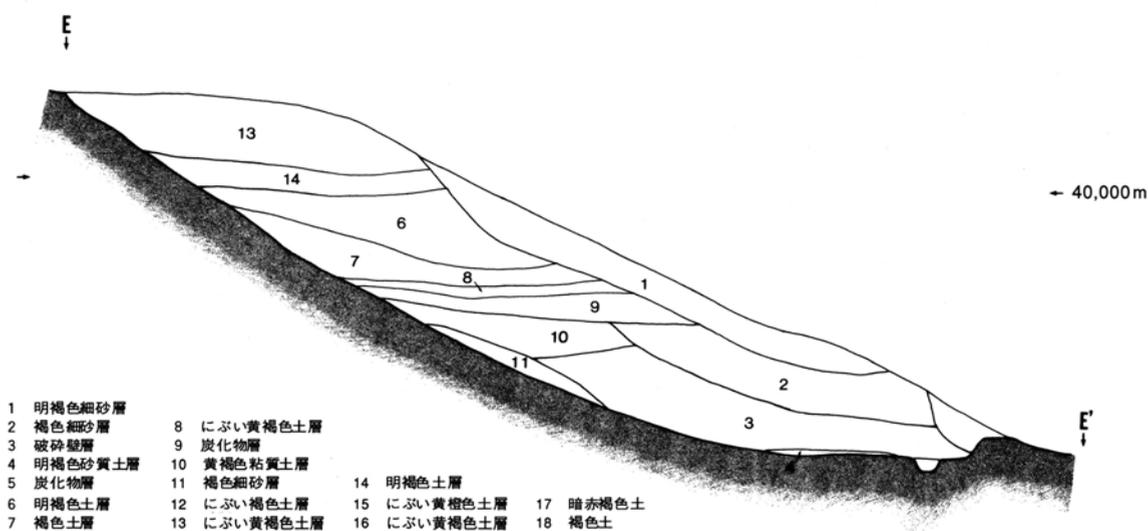


図 5 細口下 1 号窯 SY 0 1 埋土 (1 : 40)

② SX01

SX01は、SY01の南側約7m地点に位置する焼土面。近接して、二か所確認できた。面積は約0.6㎡。周囲の状況から、窯体焼成室の上部である可能性が高い。被熱の幅は3.0cm程度。出土遺物は得られなかった。

窯体の可能性

2 遺物

出土遺物の総量はコンテナ70箱で、大半がSY01またはSX01の焼成品と窯道具である。以下、これらについて具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため、事前に若干の整理を行なう。

種類

種類と器種

SY01またはSX01の焼成品種類としては、灰釉系陶器と瓦がある。

器種

器種には、灰釉系陶器には、椀、小皿、鉢、壺、瓦には軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。また、窯道具には馬爪焼台がある。

法量は巻末の付表を参照とする。

(1) 土器

今回の調査で最も多く出土している。
以下、これを器種ごとに報告する。

椀 (図6-1~38、7-39~59)

椀の分類

今回の調査で量的に最もまとったものになる。記述が煩雑になるので、事前に器種分類を試みる。ここでは三つに区分(椀A~C)する。まず、椀A(図6-1~11、24~38)は、内外面とも丸みを持った体部を有するものをまとめる。腰部はやや張る深手で、口縁部はややラフに調整され、外反する。高台はやや低くつぶれる。端部にはモミガラまたは砂粒の圧痕が確認できる。次に、椀B(図6-12~23、7-39~51)は、前者に比較して、腰部があまり張らずほぼ直線的なものをまとめる。底径は椀Aよりやや広い傾向にある。口縁部はラフに調整され、高台は低くつぶれる。端部にはモミガラまたは砂粒の圧痕が確認できる。最後に椀C(図7-53~59)であるが、全形をとどめる資料を得てはいない。形状は椀Bと類似するが、全体に調整の省力化が確認でき、口縁部は縁帯状に、内面は底部周辺に浅いくぼみが一周するようになる。高台は低くつぶれる。端部にはモミガラの圧痕が確認できる。

第 II 章

なお、椀には口径がやや小さい資料（図 8-52）が 1 点のみ含まれている。口縁部の小破片で、体部の形状は判然とはしないが、形状は椀 A または B の特徴を観察できる。

小皿（図 7-60～64）

小皿の分類

数量は乏しい。やはり器種分類を試み、三つに区分（小皿 A～C）する。まず、小皿 A（図 7-60～62）は、小皿としては深手の部類に含まれるものをまとめる。底部が疑高台状にやや突出するのが特色。体部はやや丸みを持つ。次に、小皿 B は底径がやや広く器高がやや低いものをまとめる。図示に耐える資料を得ていない。底部は平底ないしわずかに突出する。次に小皿 C（図 7-63、64）は、底部の突出が大きく、深目の形状をとるものをまとめる。全体の調整は丁寧である。

鉢（図 7-67～69）

数量は乏しい。椀を大型化して口縁部に片口を付けた形状。図示した資料は 3 点である。67、68 と 69 に形状差が指摘できる。前者は、椀 A をそのまま大振りにしたような形状。ただし、端部には面を持ち、高台はやや高い。整形は比較的丁寧である。腰部を中心に回転ヘラケズリ調整を加える。後者は椀 B 類をさらに扁平にした形状。形状は前者と類似するが、整形はやや雑となる。出土位置は、前者が SY01 の補修部裏込め、後者が窯内床面直上である。

壺（図 7-65、66）

飛雲文四耳壺

数量は乏しい。いわゆる三筋文系陶器で、2 点図示する。65 は肩部片。耳部を 4 か所に貼付した四耳壺。器壁はやや厚く肩部は張る。耳部はすべて残存しないが、剥離痕の観察から二本の粘土紐を並べたものであった可能性が強い。外面は、2 本 1 組みの沈線文で横方向に区画された後、耳部直下の区画には、線刻による飛雲文を施す。線刻は太く浅い。SY01 焼成室の破碎壁層出土。66 は胴部片。破片上方の外面には、破片上方に 2 本 1 組みの沈線文が確認できる。表採資料。

（2）瓦（図 8-70～84）

軒丸瓦 1 点、丸瓦 11 点、平瓦 4 点の計 16 点が出土している。

軒丸瓦（図 8-70）

多少歪んでいて、また瓦当部との接合部分など非常に雑な作りで、瓦当部、玉縁部は欠損しているため原型がわからない状態である。丸瓦部は凹面に布目接合部がみられることから桶巻作りである。側面は縦方向に削られ凹面側に面取りがなされる。凸面には縦方向にナデがみられる。

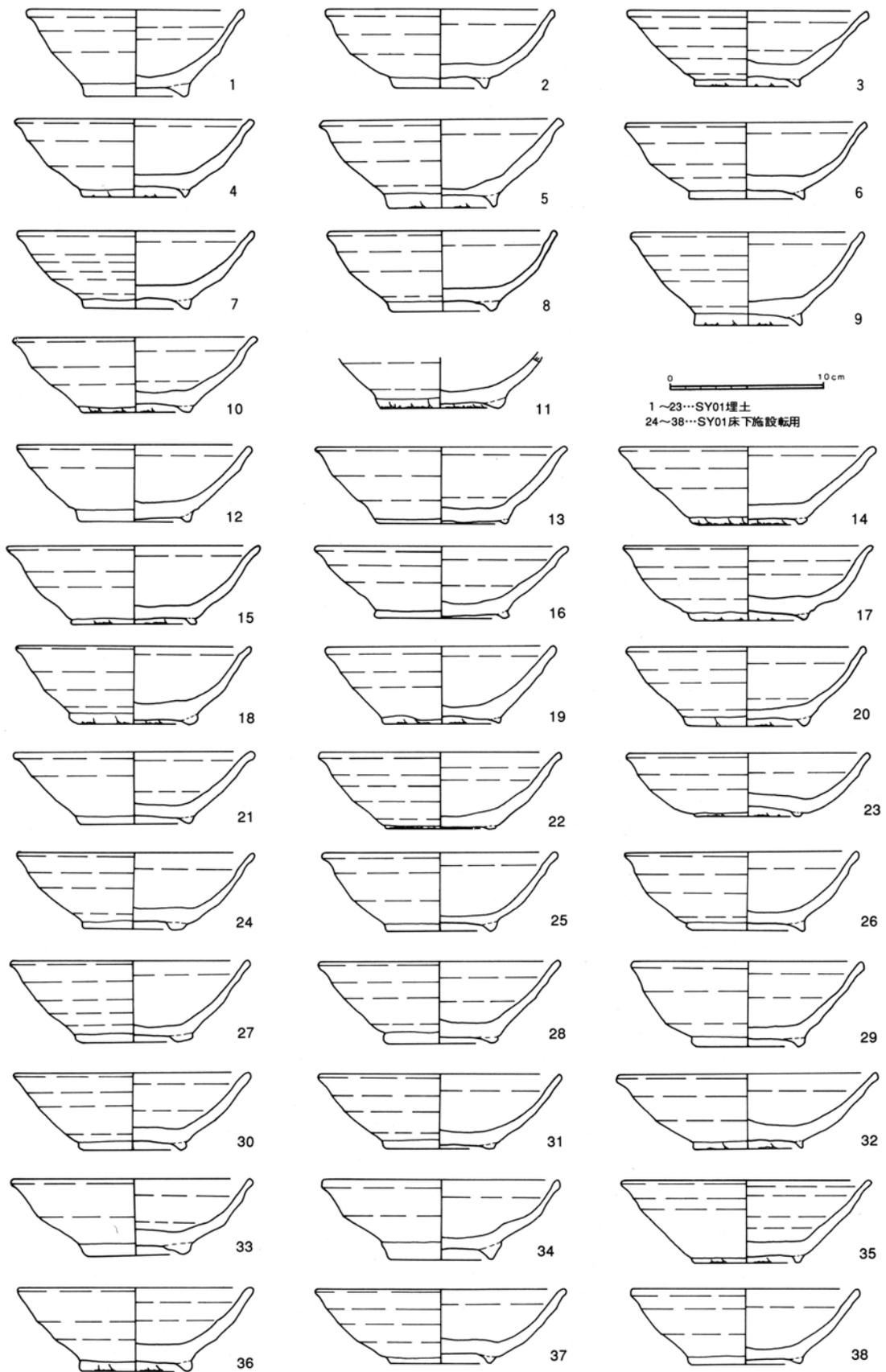


図6 細口下1号窯出土遺物1

第 II 章

この軒丸瓦は、窯の床下施設の溝を覆う状態で出土しているため、溝の蓋として使用されていたと推定される。

丸瓦 (図 9～11-71～80)

識別できるものに関しては全て玉縁付丸瓦である。全てのものが凹面に布目が残っており、(図 11-78、80) は桶跡が、(図 10-72、76) は糸切り痕が、(図 10、11-73、79) は接合部が明瞭にみられ、また直径方向に切断されていることから桶巻作りである。

凸面は横・縦のナデによる調整がされていて、指圧痕が残るものもあるため、粘土板の硬さの具合が想像できる。側面は残っているもの全てが縦方向に削られ、分割線は残らず、凹面側を面取りする。端面が残っている (図 11、12-72、77) から、前側の凹面側に面取りがなされていることがわかる。

平瓦 (図 12、13-81～84)

凸面布目平瓦

残りのよい (図 12-81) から全長 28.2 cm、幅 17.3～20.6 cm、厚さ 1.8 cm と大きさがほぼわかる。4 点全て通常凹面にある布目痕が凸面に残り、全てではないが凹面に糸切り痕、叩き跡がみられる。このタイプの平瓦は川原寺をはじめ出土している特殊な存在の平瓦である。

側面は縦方向に削り、凹面側に面取りがなされている。凸面と側面のなす角度は 86.5° ～ 117.5° で、通常、一枚作りは 120° 前後、桶 (外) 巻作りは 90° 前後であるので、断定はできないが桶 (内) 巻作りではないかとおもわれる。(図 12-81) において広端部側の端面には凹面側に面取りがなされている。

以上の瓦については、本書第七章において、さらに特徴ある点についての説明をすることにする。

(3) 窯道具 (図 14-85～93)

焼台の数量

確認できた窯道具は全ていわゆる馬爪焼台で、総重量 44143 g あった。これを完形品の平均重量 727 g で割ると、60.7 個体となる。これらは全て椀の焼成用と考えられる。いずれも砂粒を多量に含んだ胎土を使用し、その名称の語源となる馬爪形にラフに整えたものとなる。側面には指圧痕、上面には椀の高台圧痕を残す。部分的には茎などの植物圧痕も観察できる。なお、図示した資料は、全て床下施設の構造材として転用されたものである。

(4) そのほかの遺物 (図 14)

本調査区では、SY01 より年代が遡り、これと直接の関連が考えられない遺物も出土している。具体的には土器と石器があり、前者では須恵器、後者は石鏃を得ている。

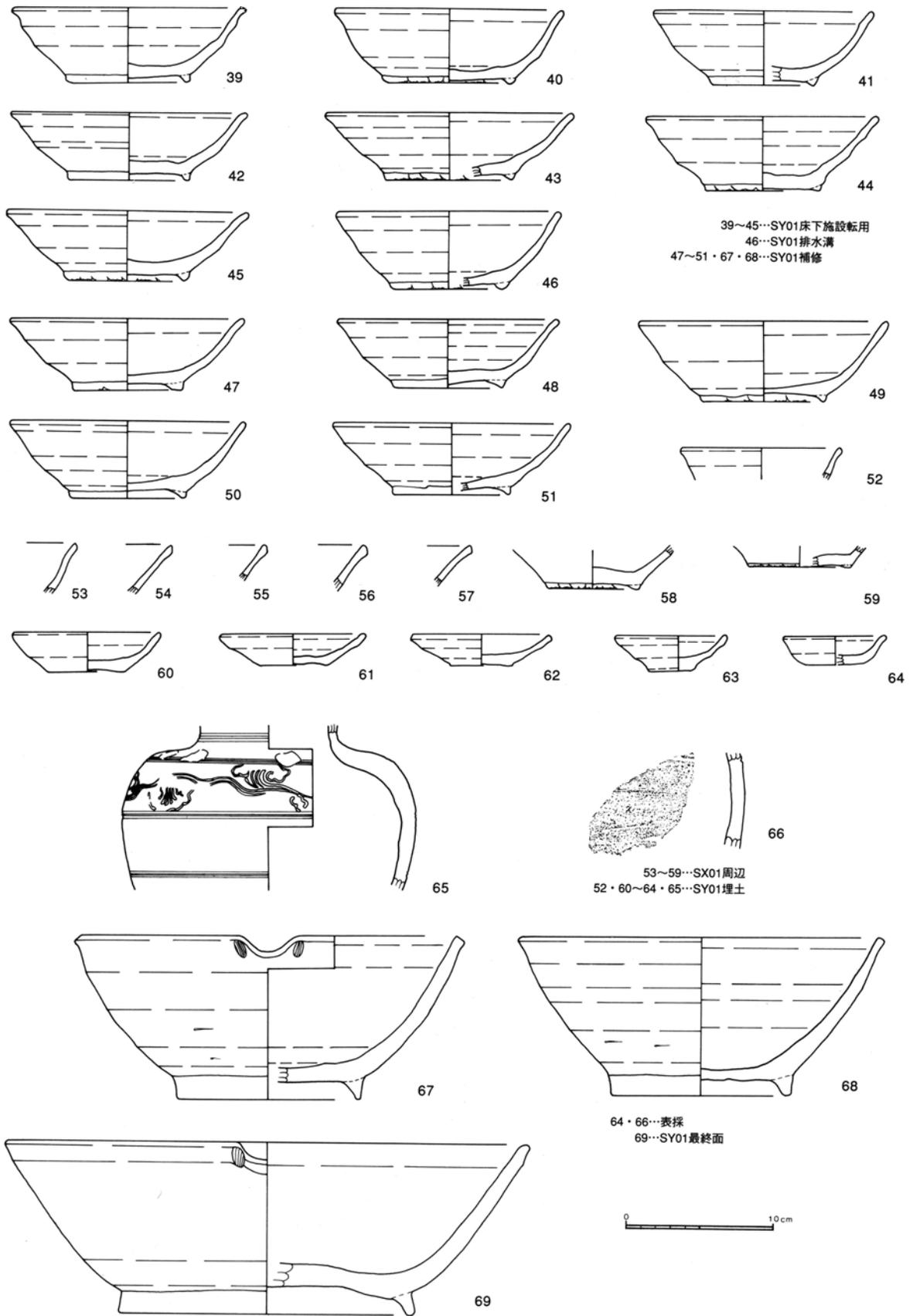


図7 細口下1号窯出土遺物2

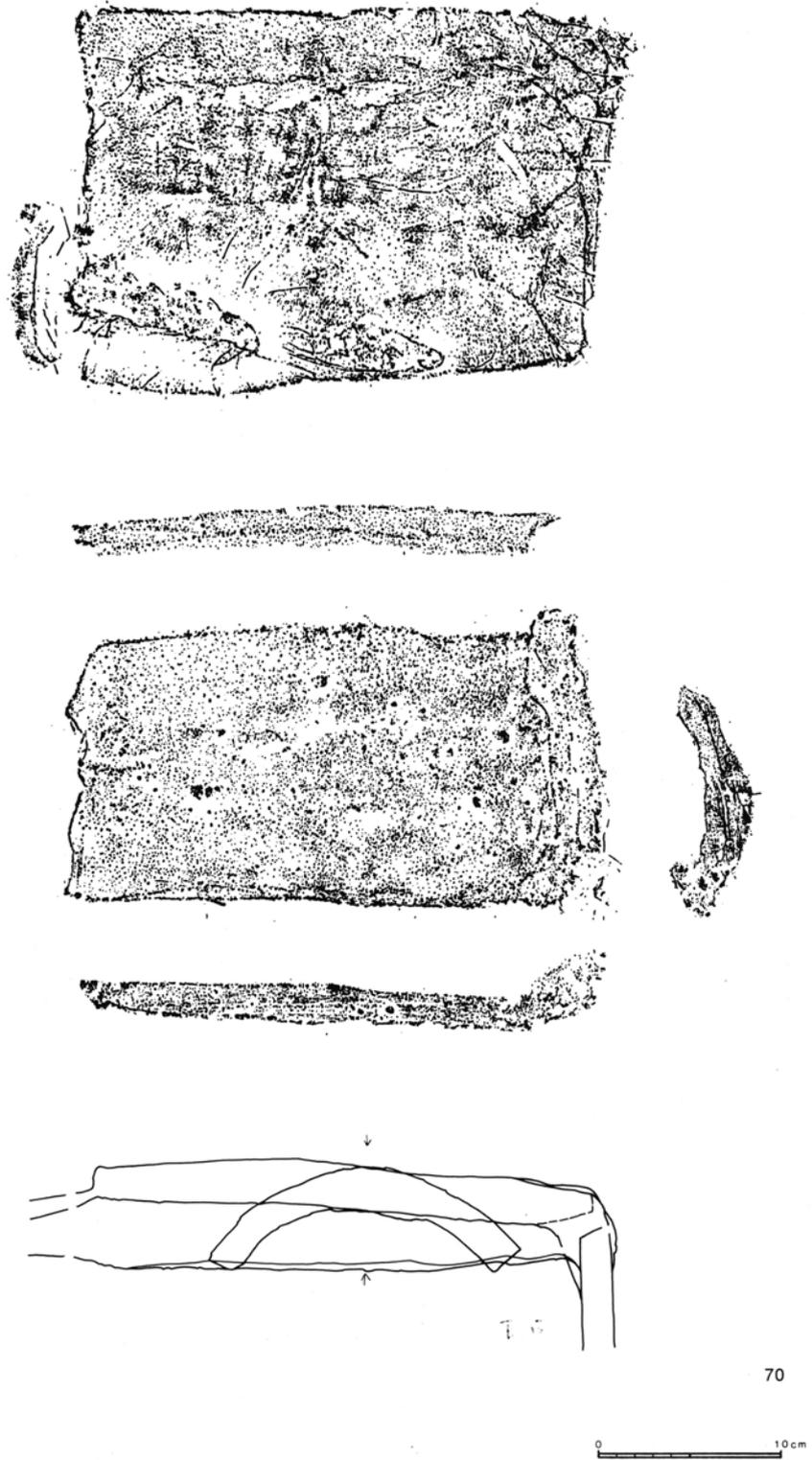


図8 細口下1号窯出土遺物3

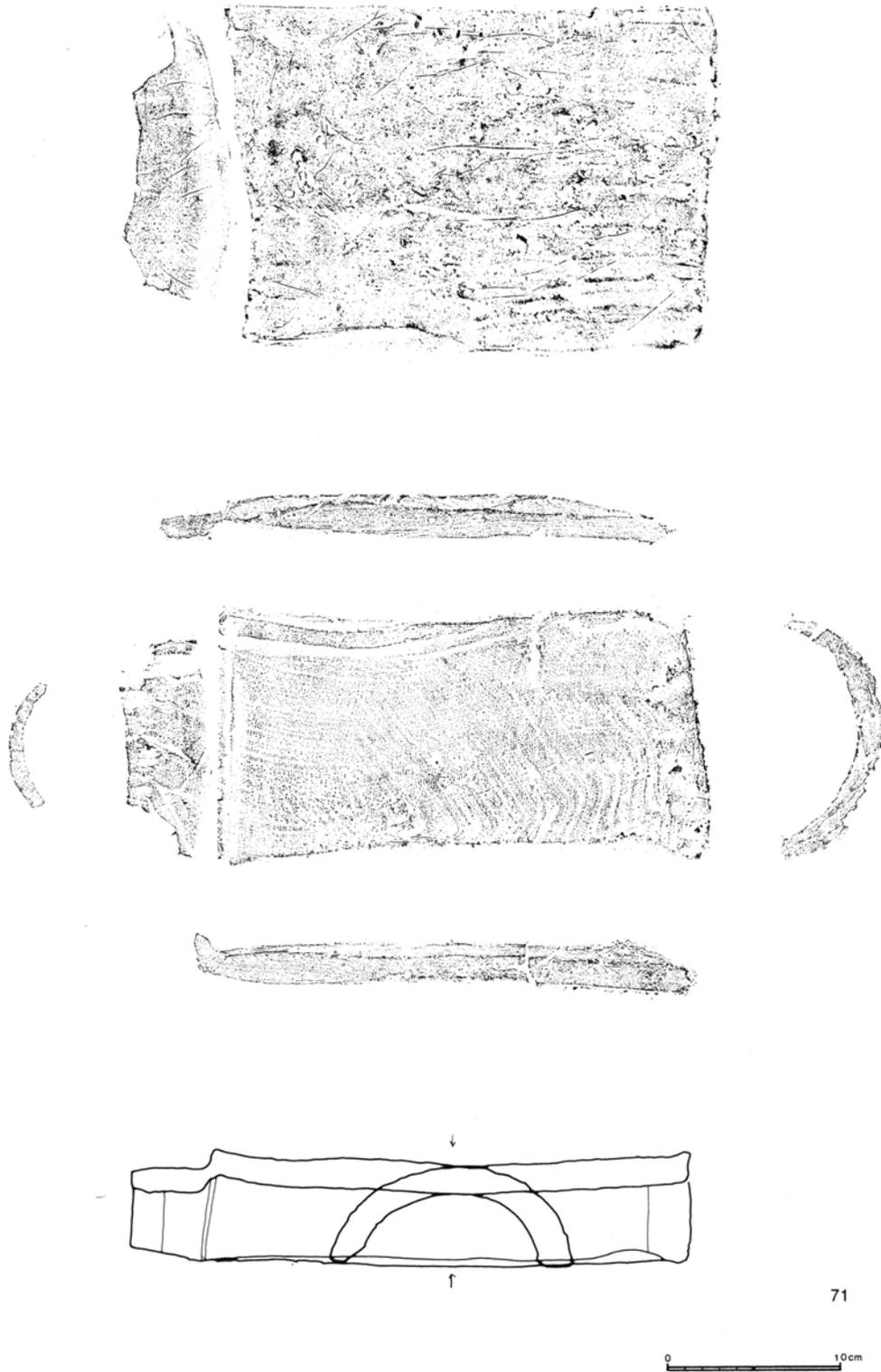


図9 細口下1号窯出土遺物4

第 II 章

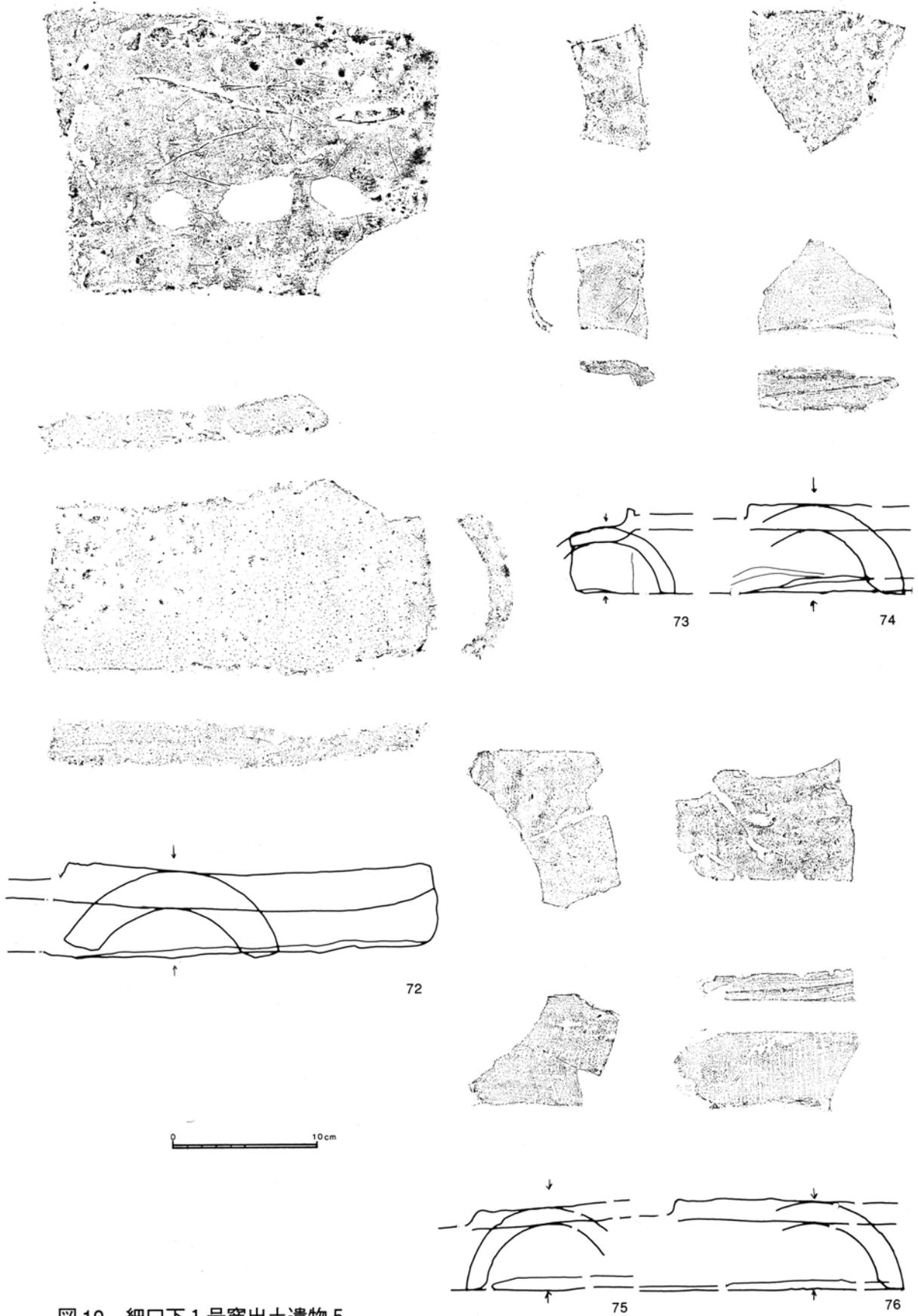


图 10 細口下 1 号窯出土遺物 5

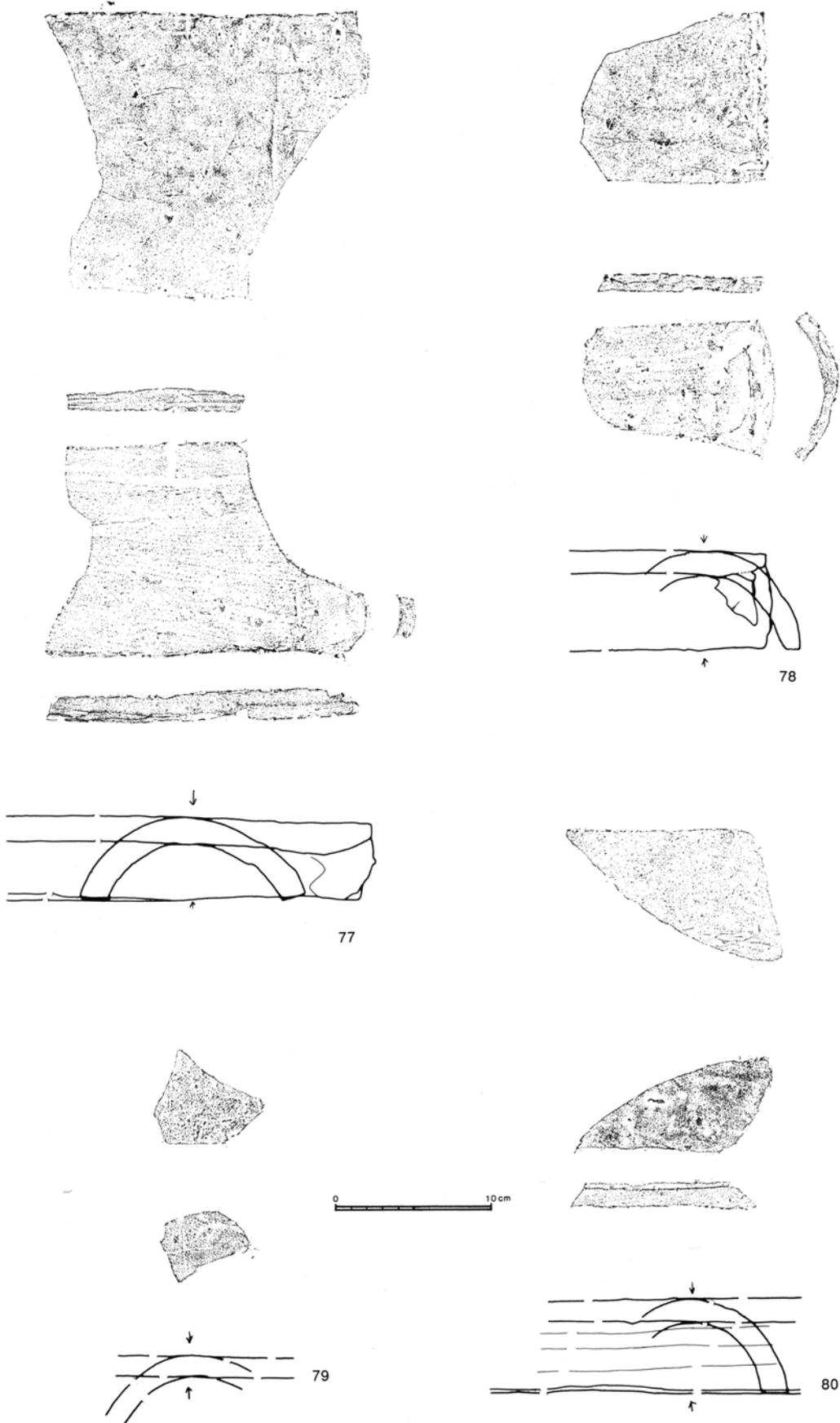


图11 細口下1号窯出土遺物6

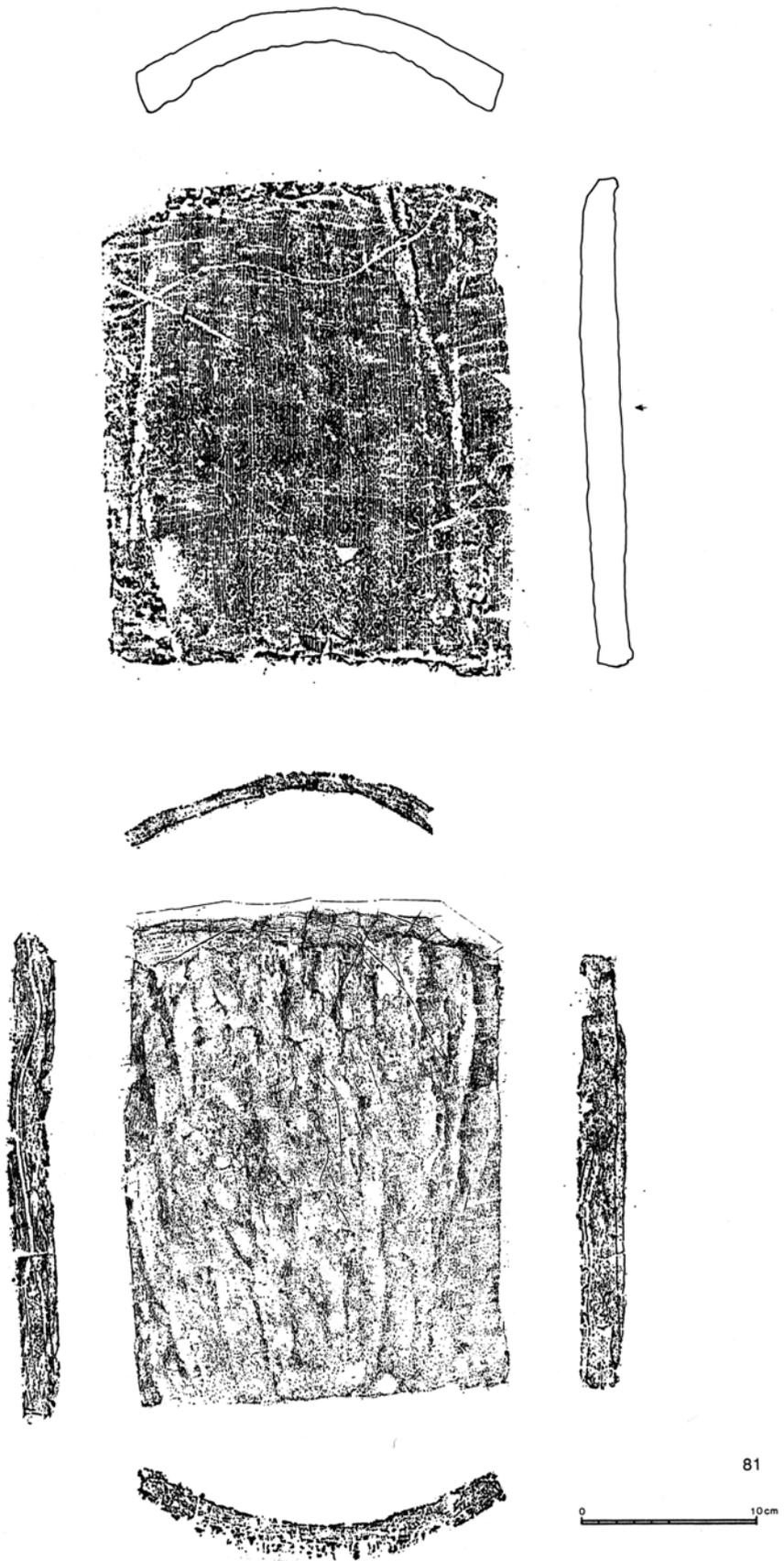


图 12 細口下 1 号窯出土遺物 7



図13 細口下1号窯出土遺物8

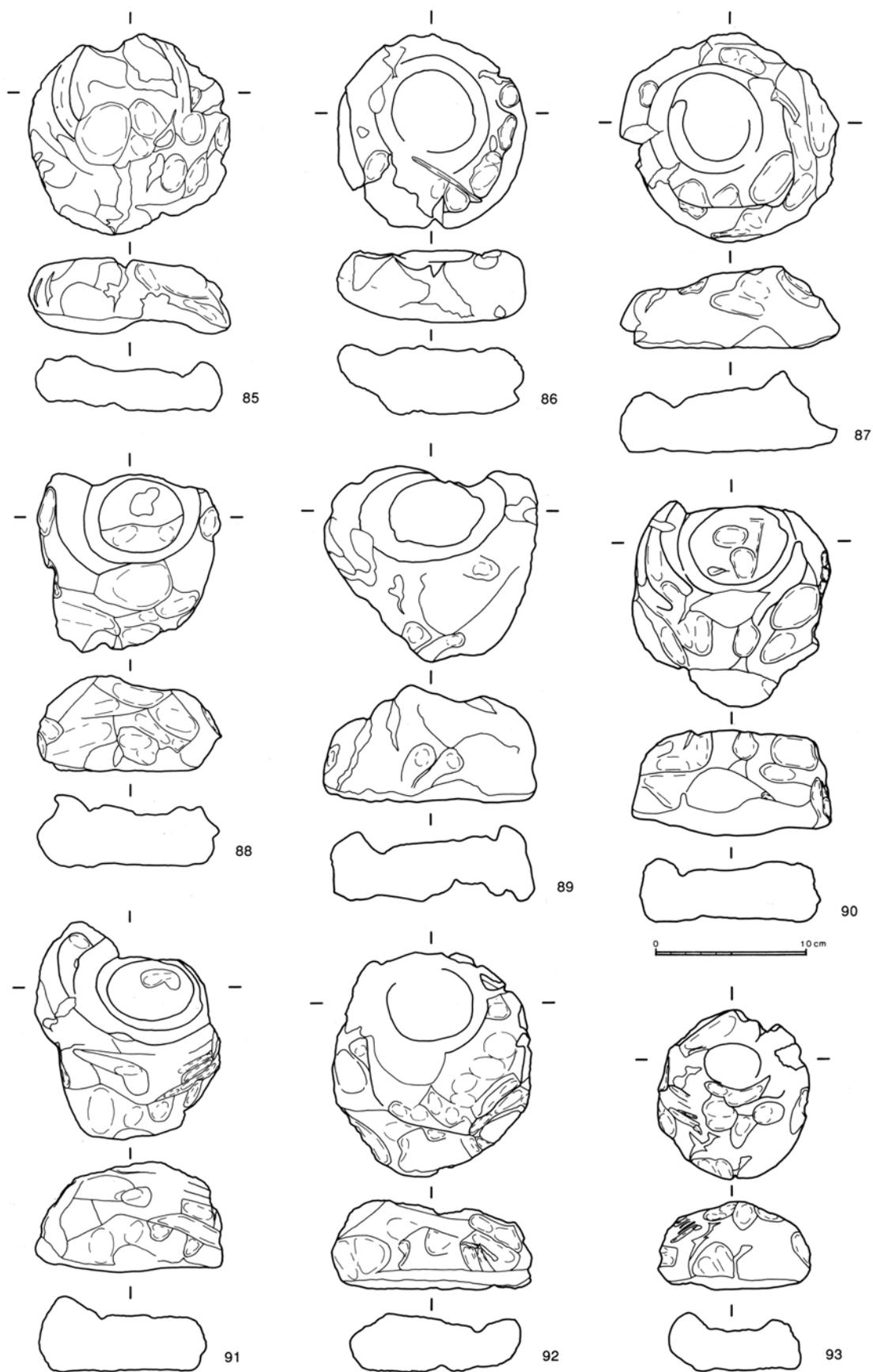


图 14 細口下 1 号窯出土遺物 9

土器 (図16-94~103)

土器には須恵器がある。これらは、調査区全体に散在し、分布上の特色はみつけないことはできない。

以下、本書IV章の器種名称を使用して報告する。94、95は杯B。底部片で、高台はやや高い。調整はシャープ。96は蓋A。天井部の小片で、やや大振りな宝珠鈕が付く。上面はフラットである。97は鉢C。底部の小片である。切り離し手法C。98は盤B。脚部上方の小片。99は盤C。口縁部片で、屈曲部はやや高い。端部で稜を持って屈曲する。100はフラスコ形瓶。やはり口縁部片である。100~103は甕。101は甕Aの口縁部片。ややゆがむ。102、103は胴部片。青海波ナデ消し技法による。いずれも黄土塗布が確認できるが、前者は内外面、後者は外面のみとなる。後者は横瓶かもしれない。

石器 (図15-104)

石鏃が一点出土している。出土位置はSY01の右壁補修部である。石材はチャート。脚部の一部が欠損するが、ほぼ完形となる。全長1.7cm、重量は0.5gをはかる。

3 小結

(1) 遺構について

本窯は、新国道の側道を建設する段階で、その排土中から多くの灰釉系陶器が出土したことを発見の契機とする。このため、調査直前では道路の予定用地のみ島状に成形された形で窯体のある丘陵が残存していた。従って、旧来の地形は判別できない。しかし、SY01の残存状況と、SX01が窯の床面であったと仮定すれば、新国道建設予定地より若干東に傾斜した状態で、かつて丘陵が伸びていたことが推測できる。

次に、今回報告するSY01は、従来出土遺物が知られるのみで、その実体が不明確であった細口下1号窯の窯体と考えられる。焼成室があまり外側に張り出さない形状は、壺、甕類を焼成する窯体としてはむしろ一般的と考えられよう。

ところでSY01は、床下施設の有無に特徴をみることができる。今日、灰釉系陶器窯の床下施設は、各地でしばしば報告されている(池本 1998)。いずれも防湿効果に関連し

細口下1号窯

床下施設

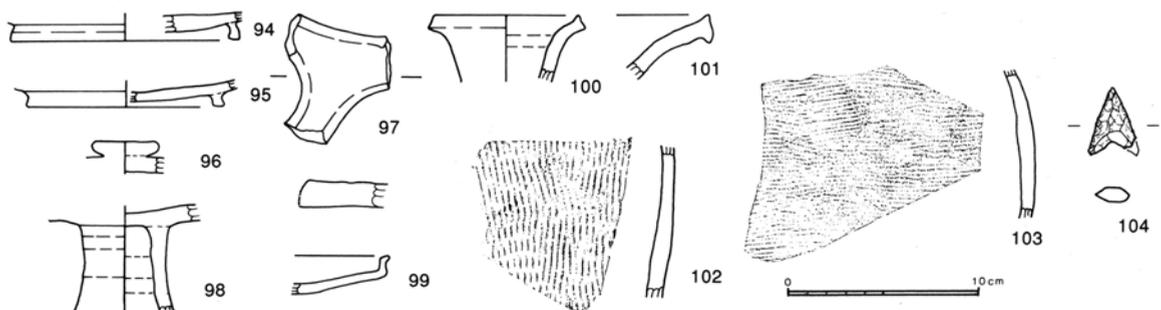


図15 細口下1号窯出土遺物10

た作業と説明されることが多い。なお、作業内容は、SY01 で確認できた二者に代表できる。すなわち、一つは焼成室床面を掘り下げた後、異なった土砂を充填することで土質改良を加えるもの、もう一つは溝を設定するものである。前者には、SY01 のように焼成不良品などを敷き詰める工程の他に、掘削後にそのまま土砂を充填し、炭化物もしくは木材などを貼床直下に敷き詰める事例もある。後者にも溝の基底部に焼成不良品などを敷き詰める事例と、そのまま土砂を充填する事例があるが、埋め戻しの工法は類似している。ここでは両者をまとめて、湧水の状況に応じた可変的な窯体調整技術として評価しておく。

S X 0 1

次にSX01に注目したい。調査区周辺では、周辺の土地改良工事の段階でいくつかの窯の存在が確認され、この段階で採集された資料の報告も成されている。このうちで最もまとまったものは(三渡他 1985)であろう。これによればこのエリアにはA～Eまでの5基の窯が存在したとされている。ところでSX01が窯体床面であるとするのなら、三渡氏のいうB号窯がこれに該当するのかもしれない。

(2) 遺物について

ここでは、まず灰釉系陶器碗の出土位置に注目する。前述した分類の碗A、Bは主にSY01から得られた資料となる。SY01資料は、埋土、補修部の裏込め、床下施設構造物材転用と区分できるが、図示しなかった資料も含めると、碗A、Bは全ての場所から出土している。なお、図示した資料には釉着資料を剥して個別別に図化したものも含まれている。釉着関係は表2にまとめる通りであるが、現状では碗AとBが釉着する例は確認されていない。また、碗CはSX01周辺の攪乱坑の埋土を中心に出土しており、SX01に関係した資料である可能性が強い。なお、瓦類はここからは出土していない。

釉着の関係

以上の状況から、SY01は碗A、Bと小皿A、壺類、鉢、瓦などを生産したものと考えられ、初期の灰釉系陶器窯に散見する特殊器種生産窯として理解できる。なお、SY01の一次窯～三次窯の生産内容差は資料不足から明らかにはできなかった。しかし、碗と小皿については一次窯～三次窯までの全ての段階に生産されたことが考えられる。一方、壺、鉢は全ての時期にこれが生産された保証はなく、三次窯でのみ確実に生産されていることが判明しているに留まる。瓦は、三次窯では确实だが、さらに丸瓦が床下施設の排水溝蓋として転用されていることから、二次窯以前にも生産されたことが考えられる。次にSX01は、これが窯体であるのなら、碗Cと小皿Bを生産したものと考えられる。

次にこれを斎藤孝正氏による編年(斎藤 1988b)にあてはめると、SY01がⅦ-3期、SX01がⅦ-2期に該当する。実年代は、前者が実年代は12世紀後葉、後者が13世紀中葉とされている。

斎藤編年

なお、出土資料の統計学的処理は、今回の出土資料の大半が床下施設の構造物材として転用されたものである関係上、焼成比率を反映していないと考えられ、実施していない。

次に、図16にまとめたSY01またはSX01の焼成品とは考えられない一群について考えたい。この中には焼成不良品などもいくつか含まれており、調査区の立地条件などもあわせて考えると、生産遺跡に関連する資料と予測できる。上記の(三渡他 1985)によれば、ここで話題とする資料の内容がA号窯とほぼ一致する。なお、A号窯については、部分的

細口下A号窯

ではあるが調査が実施されており、同書に燃焼室および前庭部の測量図と、その出土遺物が掲載されている。なお、この遺跡は周辺の現状地形を観察すると、すでに消失しているものと考えられる。

縄文遺跡

最後に、1点のみ出土している石鏃は、SY01の補修時の裏込めに偶然混入したものである。形状から判断すると、縄文時代に属するものと考えられ、調査区の周辺に縄文時代の遺跡が存在した可能性を示している。

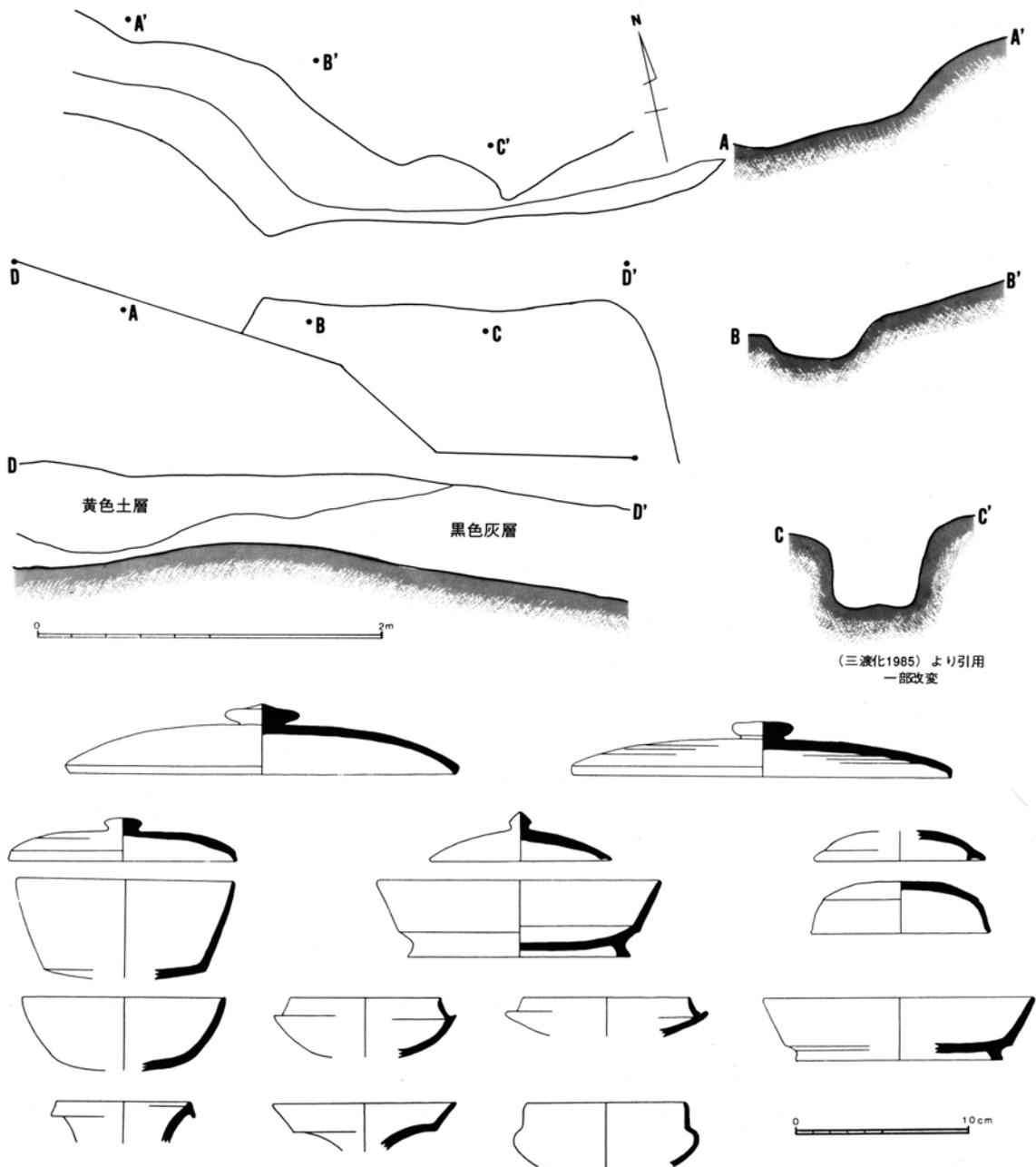


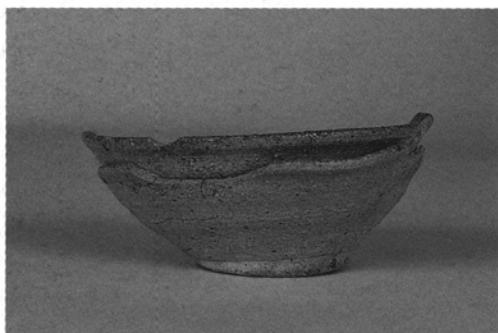
図16 細口下A号窯



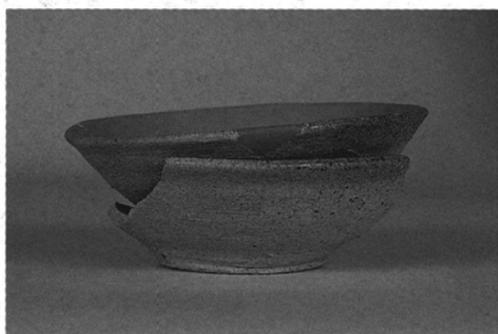
釉着試料A



釉着試料B



釉着試料D



釉着試料H

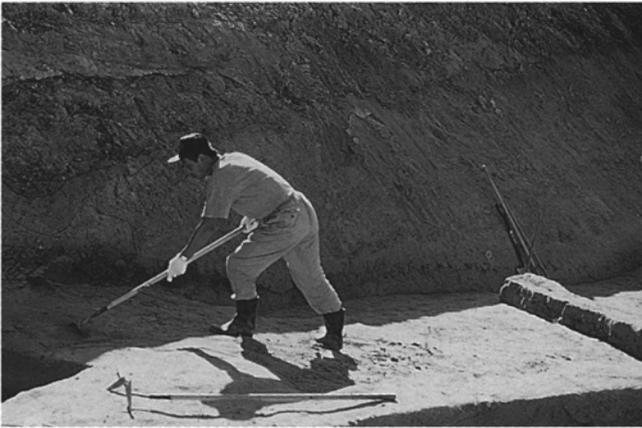


小皿釉着試料

表 2 釉着関係一覧

	上段	中段	下段	備考
釉着試料A	17		12	
	椀B		椀B	
釉着試料B	4		3	
	椀A		椀A	
釉着試料C	62		5	
	小皿		椀A	
釉着試料D	2		1	
	椀A		椀A	
釉着試料E	11		—	
	椀A		—	
釉着試料F	32	39	33	
	椀A	椀A	椀A	
釉着試料G	28		27	
	椀A		椀A	
釉着試料H	29		30	
	椀A		椀A	
釉着試料I	26		24	
	椀A		椀A	

第三章 鴻ノ巢古窯



第Ⅲ章 鴻ノ巣古窯

1 遺跡

(1) 概要

調査の概要 鴻ノ巣古窯は、名古屋市天白区天白町植田地内に所在する。調査区の調査直前の状況は、旧地形の判別が困難であった。調査区の本来の地形は南側にむけて傾斜する緩やかな斜面となる。しかし、調査直前には上面に天白区植田中央土地区画整理事業の排土が大量に搬入され、道路の予定用地だけが島状となっていた。

なお、本窯は1977年、1978年の二次に渡って名古屋考古学会の手で発掘調査が実施され、その報告書も刊行されている（荒木他 1978、同 1979）。



図17 鴻ノ巣古窯調査区位置図

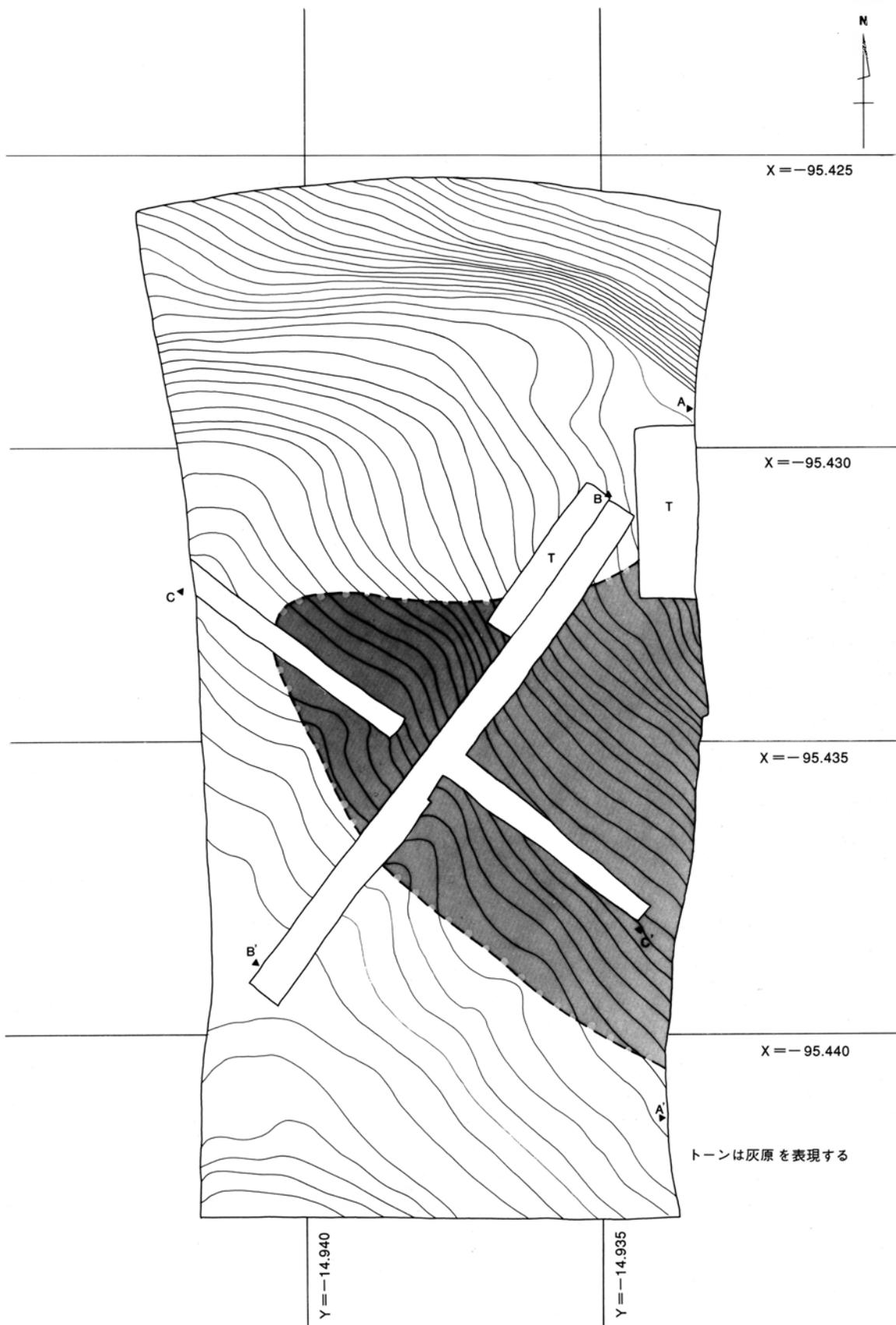


図 18 鴻ノ巣古窯調査区全体図

(2) 遺構

本調査区では、搬入土除去後に旧表土面が確認できたが、窯体に近接すると考えられる部分はすでに削平されていた。灰原は、この旧表土層とその下層に存在するにぶい黄橙層を剥がすと確認できた。検出できた灰原は、調査区の北東部分に分布する(図19)。確認した面積は約50m²程度。調査区の北東部を中心として扇形に広がっている。厚さは20cm程度、色調は黄褐色を中心とする。焼土などの混入はなく、炭化物も乏しいことから、その末端部分と考えられる。出土遺物は多量とはいえないが、須恵器(図20-105~152)、灰釉陶器(図21~27-153~420)、灰白軟陶(図29-421~428)、窯道具(図29-429~457)などがある。

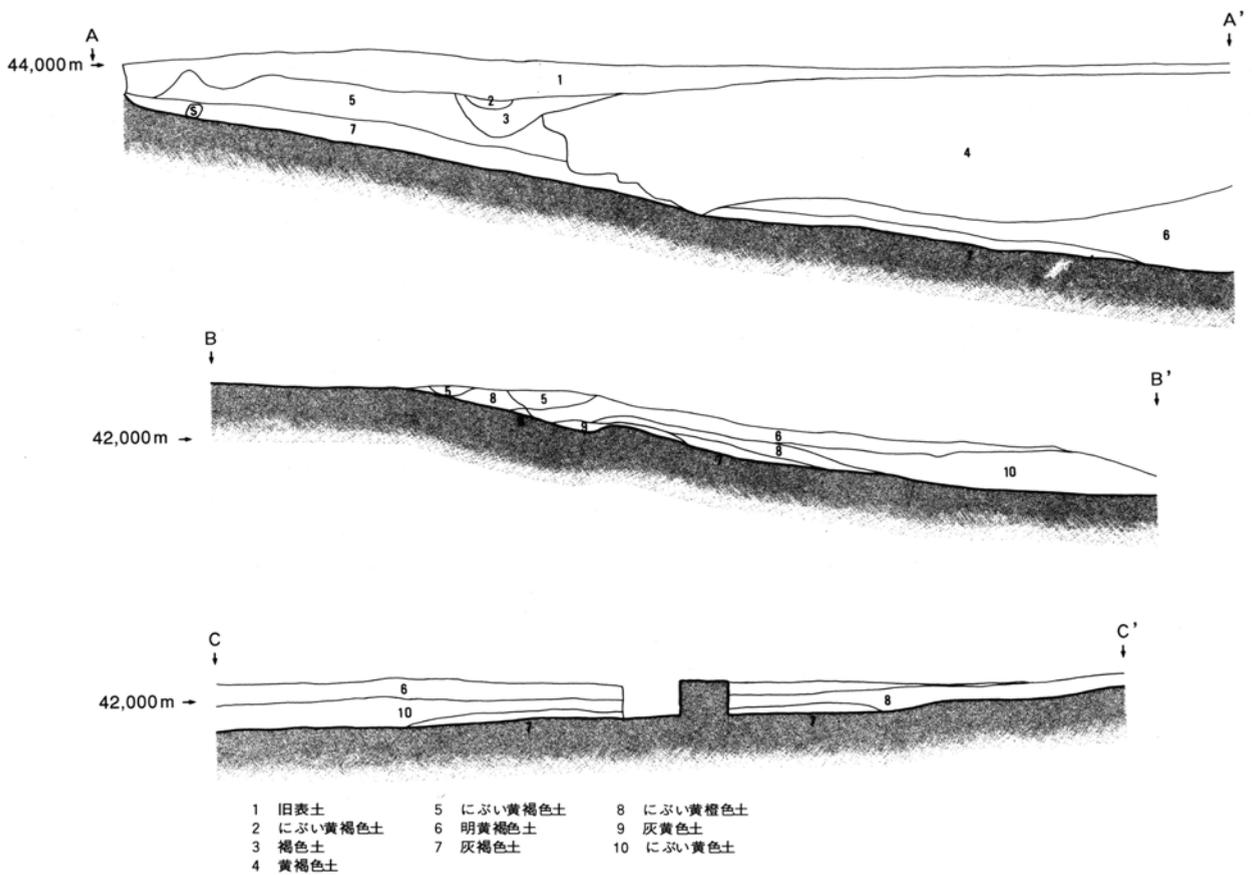


図19 鴻ノ巣古窯灰原断面図

2 遺物

今回の出土遺物は、コンテナ90箱に留まる。

以下、これらについて具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため、土器の種類と器種について事前に若干の整理を行なう。なお、図示した資料は、全て灰層から出土している。

(1) 土器

種類

種類としては本窯の製品である須恵器、灰釉陶器、灰白軟陶と、その焼成に使用した窯道具がある。

種類と器種

器種

器種には、須恵器の器種として、椀A、高盤、盤、蓋、鉢、風字硯、甕。灰釉陶器の器種として、椀、平皿、広縁段皿、狭縁段皿、輪花段皿、耳皿、長頸瓶、小瓶、(手付)瓶、双耳瓶、水瓶、短頸壺、大平鉢、蓋、三足盤。灰白軟陶の器種として、平皿、瓶、蓋などがある。また、窯道具にはサヤ、ツク、トチ、焼台、その他がある。

なお、法量は巻末の付表を参照とする。

① 須恵器 (図20-105~152)

須恵器の器種

椀 (図20-105~134)

本窯の須恵器では最も一般的な器種となる。腰部はやや張り、口縁部で緩やかに外反する形状で平底。体部は回転ナデ調整、底部は回転糸切りを無調整で残す。105はやや大振り。形状から椀に含めたが、鉢とするべきかもしれない。外面は口縁部直下でくびれ、端部は上方で面を持つ。本書第IV章の椀Aに相当する(以下、椀A)。

高盤 (図20-135~138)

大振りな器形。135はやや歪むが、全形が判明する資料。杯部は皿状で、端部で縁帯を形成する。脚部は太く緩やかに外反する。やはり端部で縁帯を形成する。中央部分にはヘラによる沈線文を二条施す。杯部外面下方に、回転ヘラケズリ調整を施すほかは全面回転ナデ調整による。

盤 (図20-139~144)

杯部は直線的に伸び、端部で縁帯を形成する形状を呈する。高台は、細く高い。体部は

第 Ⅲ 章

直線的に伸びるものがほとんどであるが、144のように内彎するものも一部には含まれる。杯部外面下方に、回転ヘラケズリ調整を施すほかは全面回転ナデ調整。

蓋 (図20-145、146)

2点のみ得られた。145は天井部に宝珠鈕を持つ。天井部は、ほぼフラットで口縁部で屈曲する形状。146は口縁部片で、口縁部が短く屈曲する形状。端部で縁帯を形成する。本書第IV章の蓋Aに相当する。

鉢 (図20-147)

1点のみ得られた。147は体部の上方に最大径を持つ。丸味を帯びた形状で、最大径付近に把手を貼付する。口縁部は丸く収める。口縁部外面にヘラによる沈線を一条施す。内外面回転ナデ調整だが、全体にラフとなる。把手は手づくねによる。サヤ蓋として転用されており、外面に窯壁極小片などが付着する。

風字視 (図20-148)

1点のみ得られた。148はヘラケズリで成形し、ラフにナデ調整を加える。裏面の脚は残存しない。

甕 (図20-149～152)

149～152は偏平な体部と、緩やかに外反する口縁部を持つ。150は素地補修が確認できる。端部は縁帯を形成する。平底。体部外面にタタキ調整、内面に当て具痕が確認できるが、後者はラフなヨコナデ調整によって消される。なお、図示してないが、体部に環状の把手を付ける資料も存在する。152は底部片で平底を呈する。

灰釉陶器の器種

② 灰釉陶器 (図21～27-153～420)

椀 (図21、22-153～245)

椀は、灰釉陶器の主力器種となる。形状は、腰部にやや丸味を持ち、口縁部で短く外反する。高台は断面三ヶ月形の、いわゆる三日月高台だが、やや形状はくずれ、内面の屈曲が鈍い。器壁は薄く、全面回転ナデ調整を主体とする。外底部には回転ヘラ削り調整を施し、回転糸切り痕を消す。施釉部位は口縁部付近の内外面、全てハケヌリとなる。法量により大形(口径19.0cm程度)、中形(口径16.5cm程度)、小形(口径14.0cm程度)と区分ができるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。なお、188はみこみに円形の沈線文、243は外底部にヘラ記号「|」を施す。

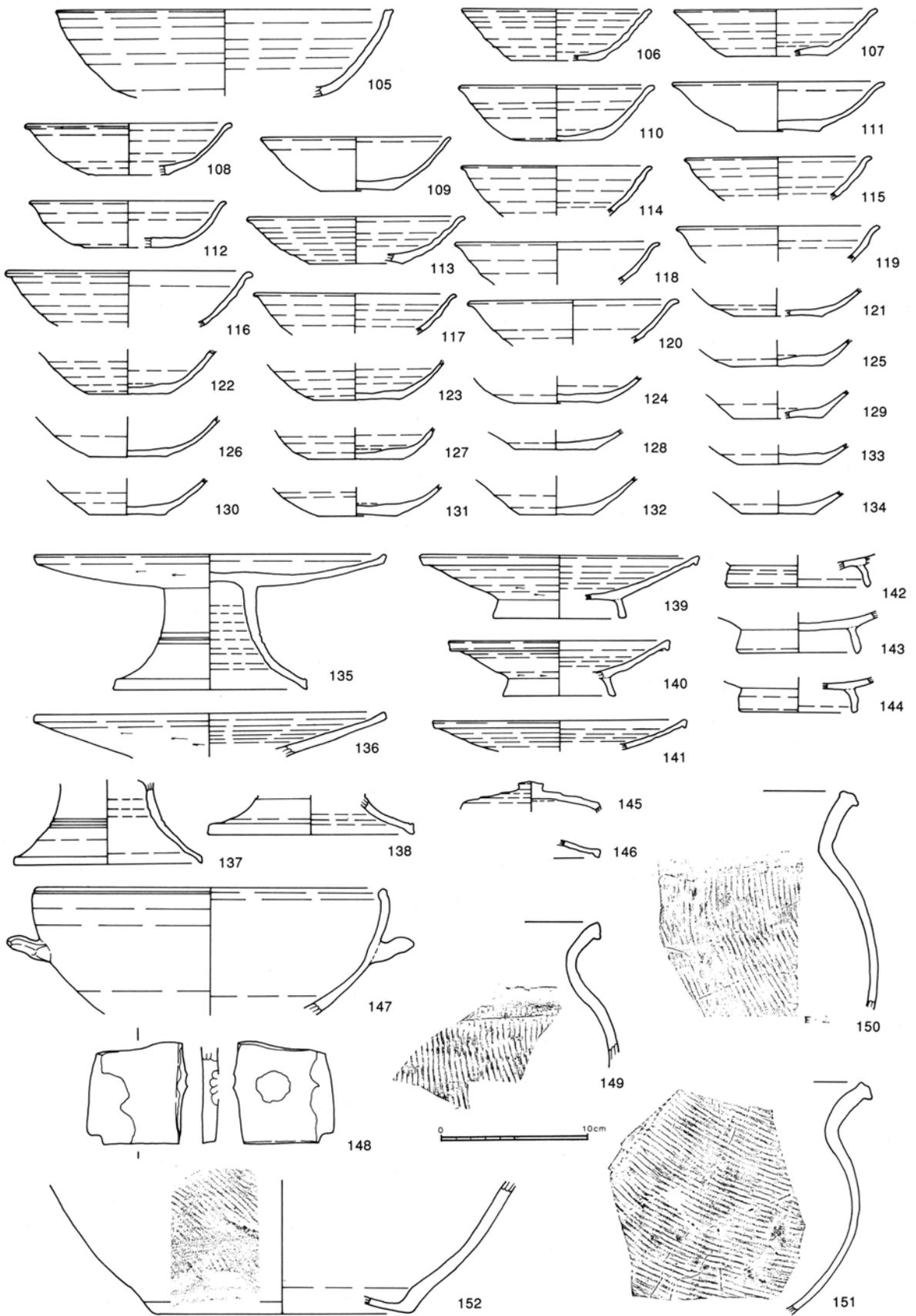


図20 鴻ノ巣古窯出土遺物1

第 三 章

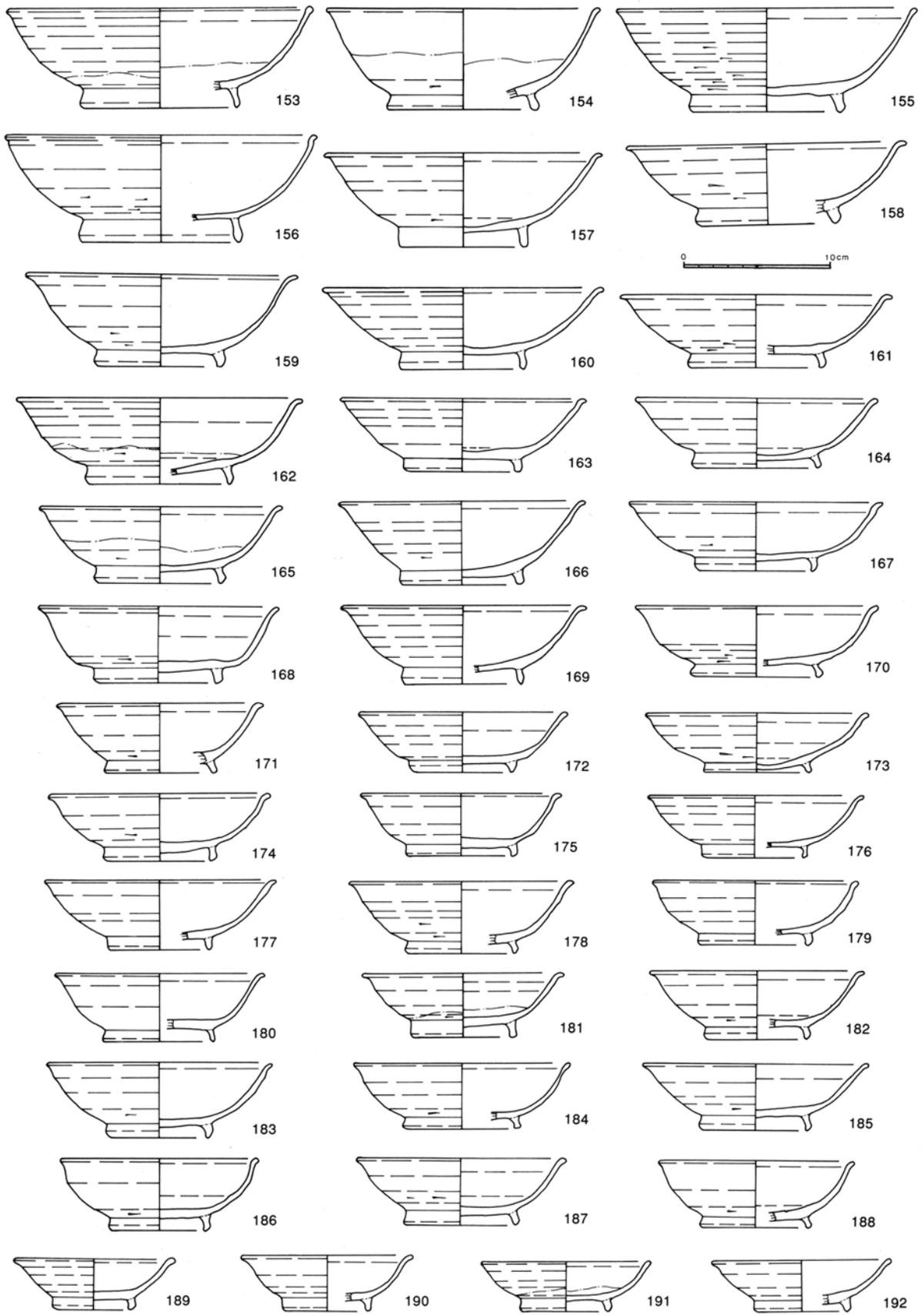


图 21 鴻ノ巣古窯出土遺物 2

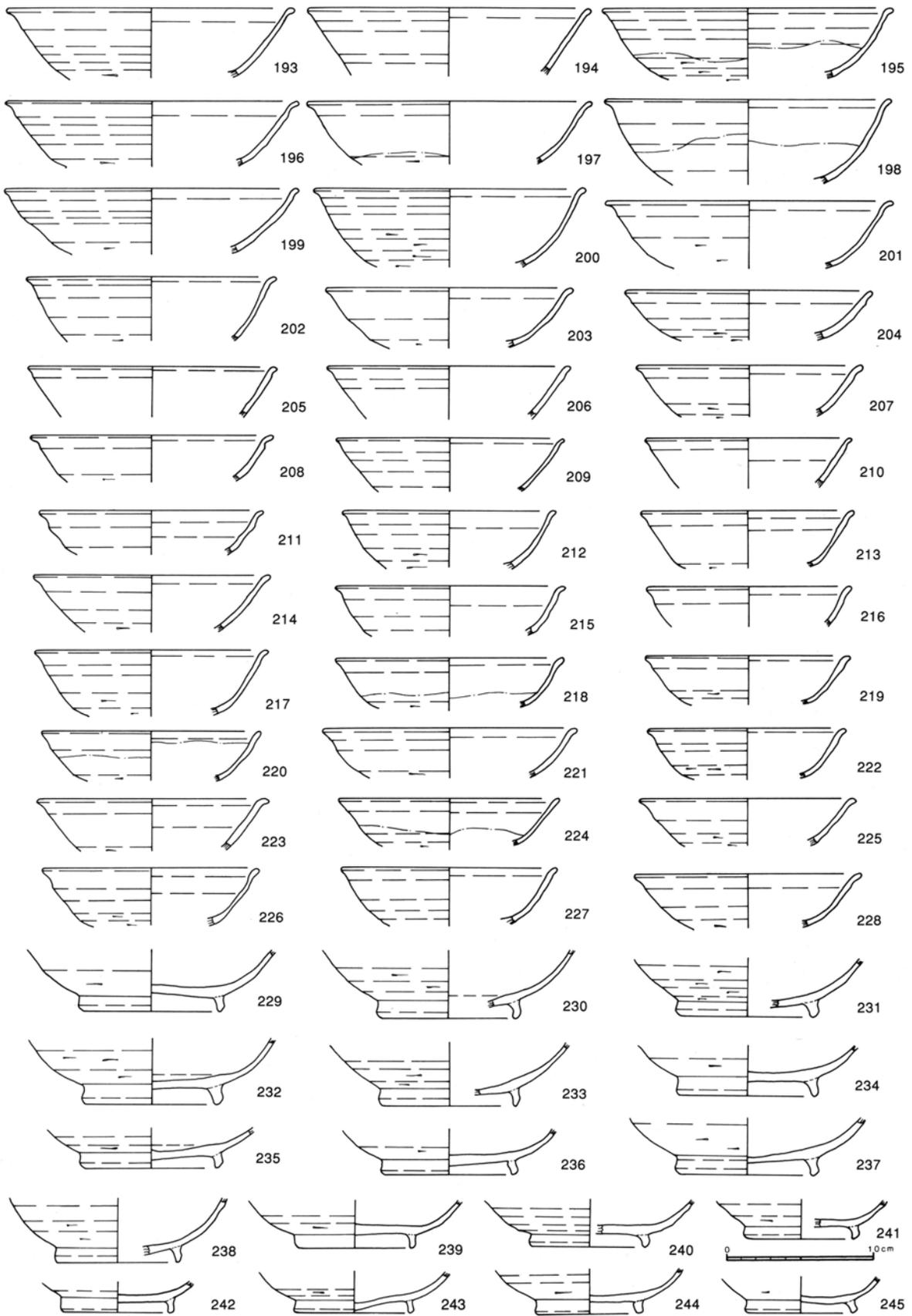


図22 鴻ノ巣古窯出土遺物3

平皿 (図 23 - 246 ~ 287)

平皿も灰釉陶器の主力器種の一つとなる。椀の器高をそのまま低くした形状で、形態、整形、施釉状況などは、椀と基本的に同様となる。椀のように、法量差は明瞭ではないが、246 ~ 253 は、器高がやや高い。施釉部位は、やはり口縁部付近の内外面で、すべてハケヌリとなる。

広縁段皿 (図 23 - 288 ~ 296)

体部に段部を持つ皿。段部はカキトリにより、内面のみに確認できる。形態、整形は、基本的に椀と同様である。数量が乏しいため明らかにしがたいが、法量により大、小の区分ができるのかもしれない。施釉部位は口縁部付近の内外面で、全てハケヌリによる。

狭縁段皿 (図 23 - 297 ~ 314)

体部に段部を持つ大振りな皿。段部は内外面に確認できる。形態、整形は、椀と同様。ただし、段部は整形時の折り曲げによる。施釉部位は口縁部付近の内外面で全てハケヌリによる。

輪花段皿 (図 23 - 315)

315 は口縁部片。広縁段皿の口縁部に輪花を施したもので、1点のみ得られた。輪花は口端からユビオサエによる。内外面に灰釉をハケヌリする。

耳皿 (図 23 - 316)

小片を含め、9点出土している。図示できるものには、316がある。1点のみ図示した。体部の形状は平皿と同様だか、無高台となる。耳部は、折曲げにより成形される。端部にはヒダをつける。なお、外底部には回転糸切りを無調整で残す。外底部を除き回転ナデ調整で回転ヘラケズリ調整は施さない。

長頸瓶類 (図 24 - 317 ~ 351)

長頸瓶も灰釉陶器の主力器種の一つとなる。形態は、頸部がやや短くやや開く。口縁部は外反し、端部で縁帯を形成する。体部は肩部が張り、下胴部がほぼ直線的となる。底径はやや広く、低くがっしりとした高台を貼付する。器壁は薄い。全面回転ナデ調整を主体とするが、下胴部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、口縁部~肩部を中心とする。いずれもハケヌリ。なお、図示していないが、肩部に環状の把手が付くものが2例ある。

小瓶 (図 25 - 352 ~ 368)

体部は肩部のやや張る卵形で、平底。緩やかに外反する頸部と、短く屈曲する口縁部を

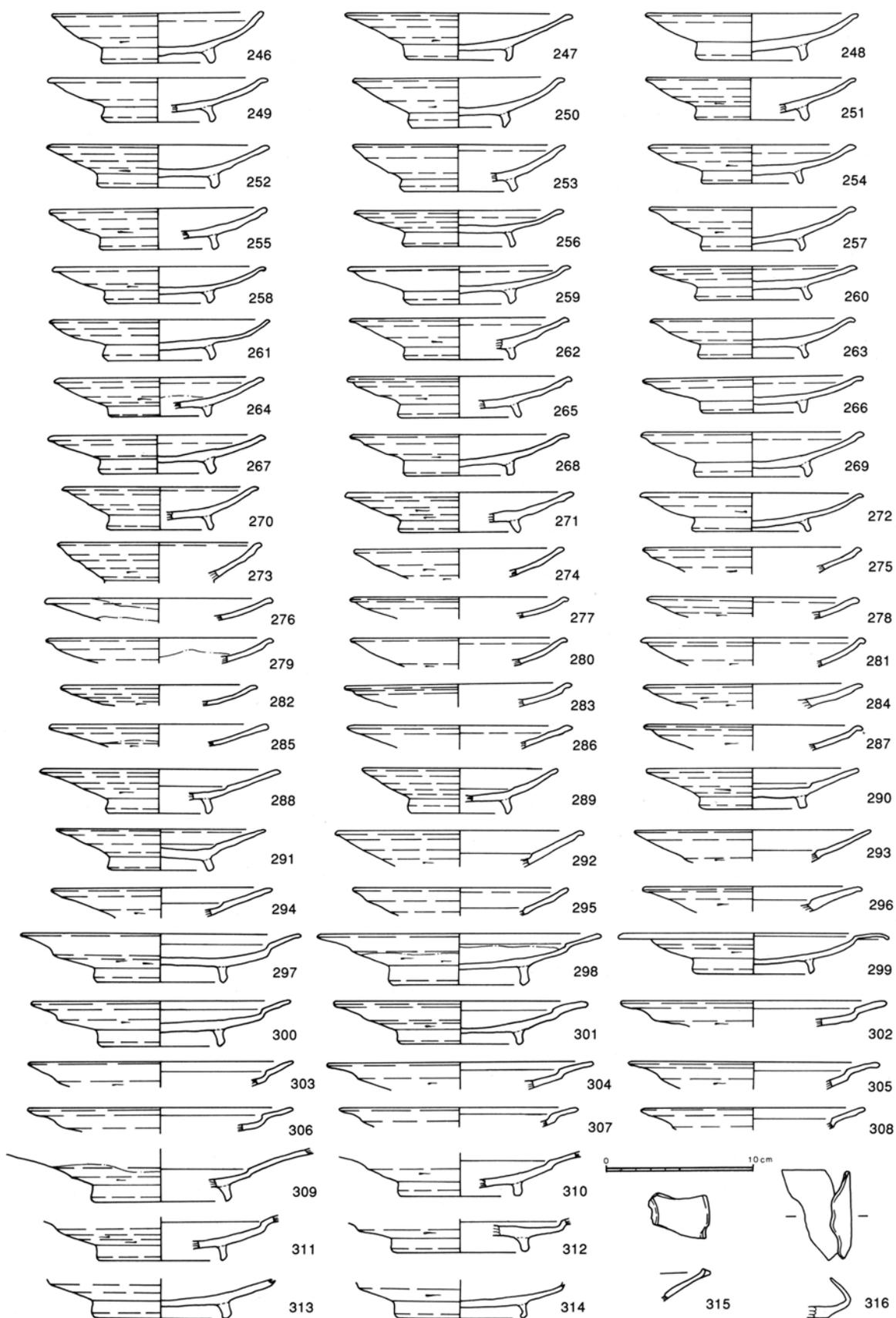


図23 鴻ノ巣古窯出土遺物4

持つ。端部は丸い。全面に回転ナデ調整を施し、外底部には回転糸切りを無調整で残す。把手を貼付した資料は確認できないが、368は把手部の小片である。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、頸部外面、口縁部を中心とする。なお、352は、焼成後に胴部に穿孔された資料。性格は不明。

(手付) 瓶 (図 25、26 - 369 ~ 399)

小瓶を大振りにした形態。把手が付くものと付かないものがある。369は全形が判明する資料。やや長い体部を持つ。頸部から肩部に粘土板を環状に貼付して把手とする。全面回転ナデ調整を施すが、体部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。胴部最下端、底部との境界部分では、沈線文状のくぼみが一周する。外底部には回転ヘラケズリ調整を施す。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、頸部外面や口縁部を中心とする。なお、375・377には確実に把手が付かない。387は、352の小瓶と同様で、焼成後に下胴部に穿孔された資料となる。

双耳瓶 (図 26 - 400 ~ 403)

破片 4 点を得たが、400 ~ 402はおそらく同一個体。401はやや歪む。肩部が張り、下胴部が直線的な形状で平底。耳部はヘラケズリ整形された粘土板で、肩部に貼付後、中央部分を穿孔する。頸部は、直線的で短く、口縁部で縁帯を形成する。肩部以上は、回転ナデ調整を施すが、胴部、外底部は回転ヘラケズリ調整を施す。施釉部位は肩部から口縁部でハケヌリ。

水瓶類 (図 26 - 405、406)

2 点得られた。405は口縁部片。細く長い頸部は、屈曲して端部で縁帯を形成する。全面回転ナデ調整、中央部にヘラによる沈線文を二条施す。頸部外面、口縁部に施釉が確認できる。406は底部片。高台がやや高く、外側に張り出す。底径は狭い。外底部と下胴部は回転ヘラケズリ調整を施す。

短頸壺 (図 26 - 404)

図示していないが、口縁部片が 1 点ある。なお、404は短頸壺の体部片なのかもしれない。肩部の張る形状だが、歪む。全面回転ナデ調整によるが、肩部以下の外面には回転ヘラ削り調整を加える。肩部にハケヌリで施釉。

大平鉢 (図 27 - 407 ~ 411)

大平鉢は碗をそのまま大きくした形状だが、法量がこれとはかなり異なるので別器種とした。4 点図示したが、407と 408は同一個体かもしれない。全形の判明している 407は器壁が薄く、高い高台が付く。外面の回転ヘラ削り調整は口縁部付近にまで及ぶ。施釉は内

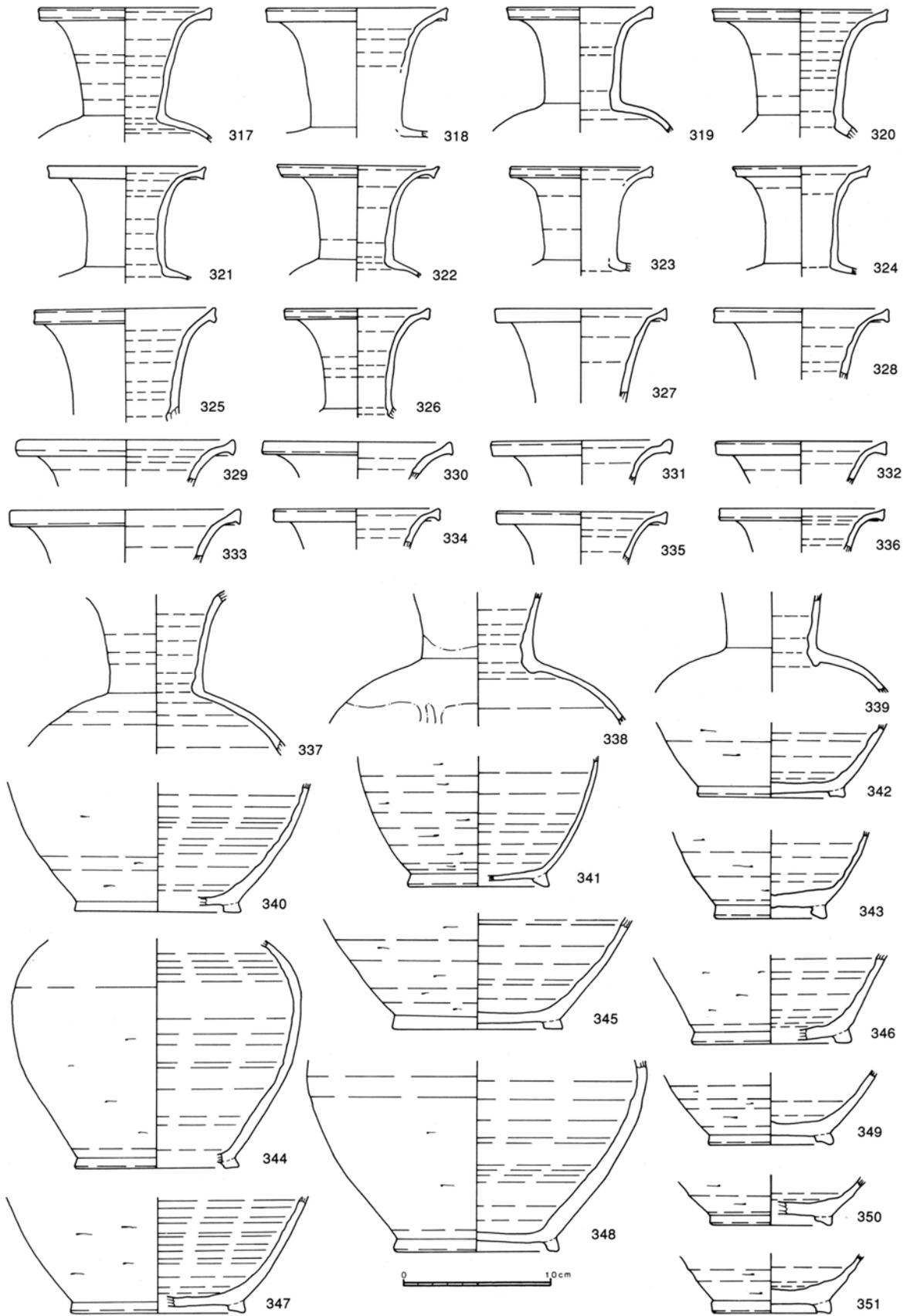


図24 鴻ノ巣古窯出土遺物5

第 三 章

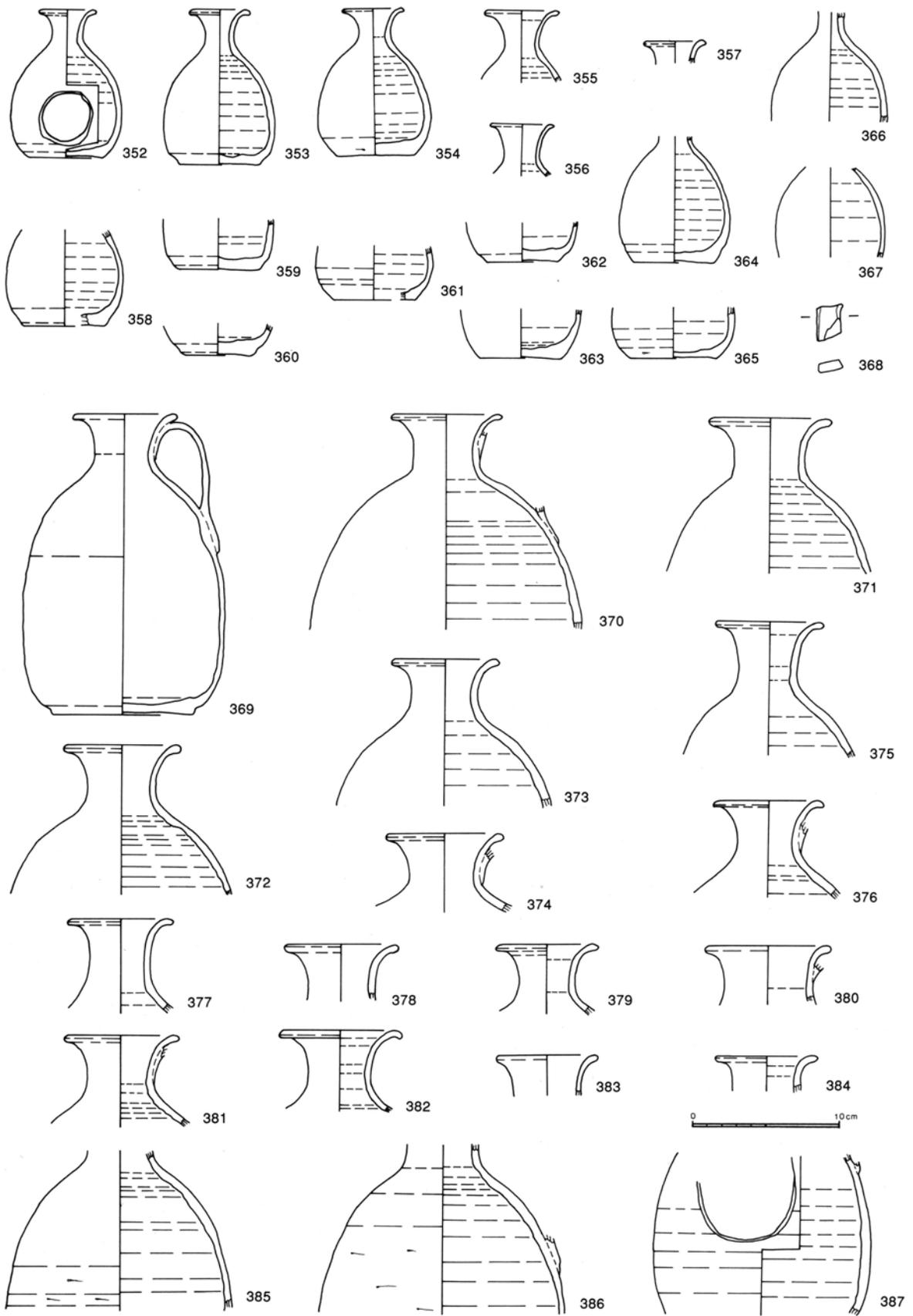


图 25 鴻ノ巣古窯出土遺物 6

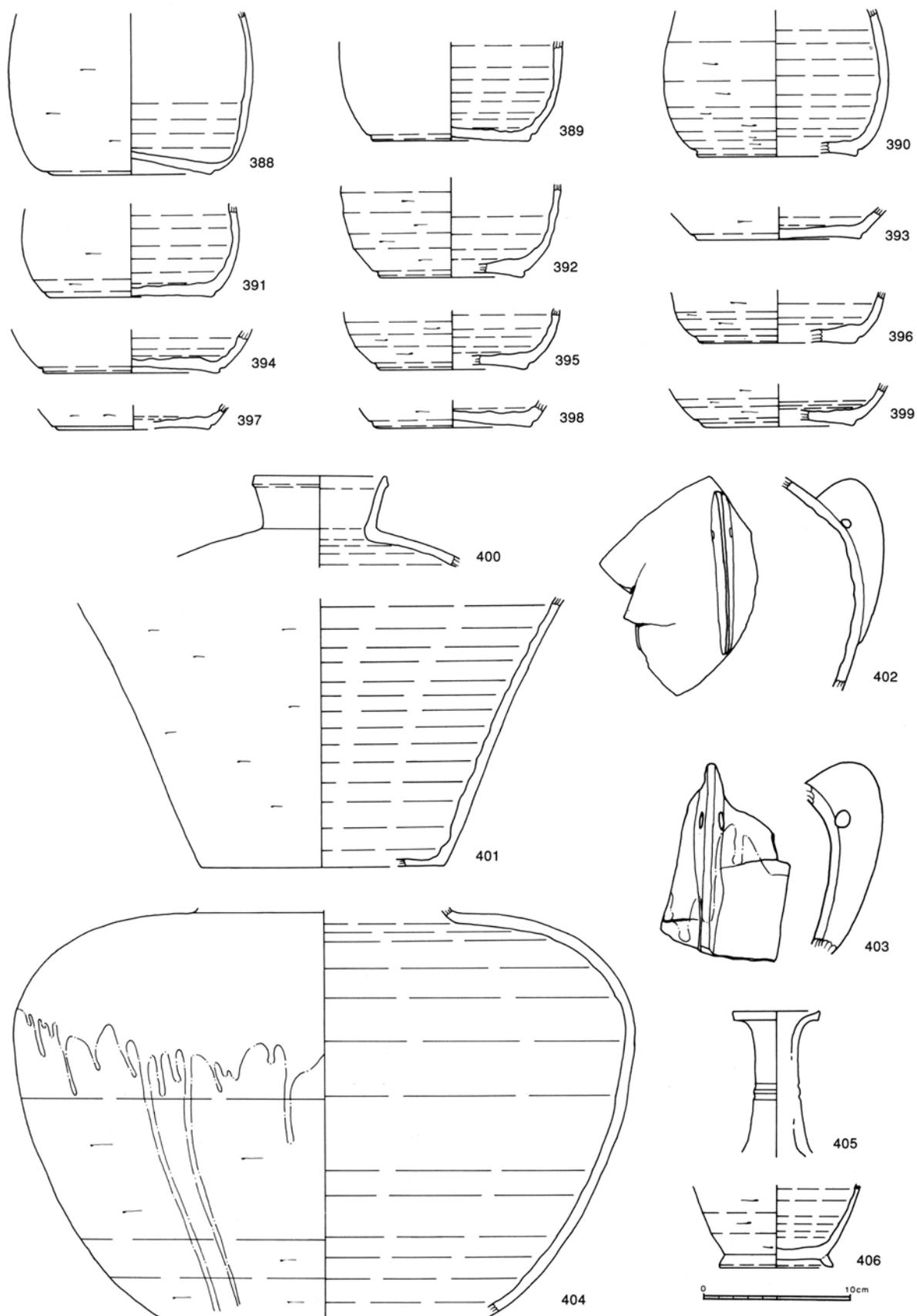


図26 鴻ノ巣古窯出土遺物7

外面の腰部までと内底部。いずれもハケヌリとなる。409～411は407と基本的には同一。ただし、410、411の内底部は露胎。408には素地補修が確認できる。

蓋 (図27-412～417)

412はやや大振りな蓋。天井部を欠損するが、全体に丸味を帯びる。器壁は薄く、器高は高い。外面の口縁部付近には、低く中央のくぼむ突帯を貼付する。全面回転ナデ調整だが、突帯より上方の外面は回転ヘラ削り調整。

413～416は香炉の蓋。平皿を天地逆にしたような体部を持つ。口縁部は屈曲し、端部はフラットとなる。天井部外面中央に回転ヘラケズリ調整を施すほかは、全面回転ナデ調整となる。天井部外面にはヘラによる沈線文を二条施すが、413はさらにその内側にも沈線文が確認できる。

417は短頸壺の蓋か。口縁部片。天井部に丸味を帯び、屈曲して口縁部を形成する。全

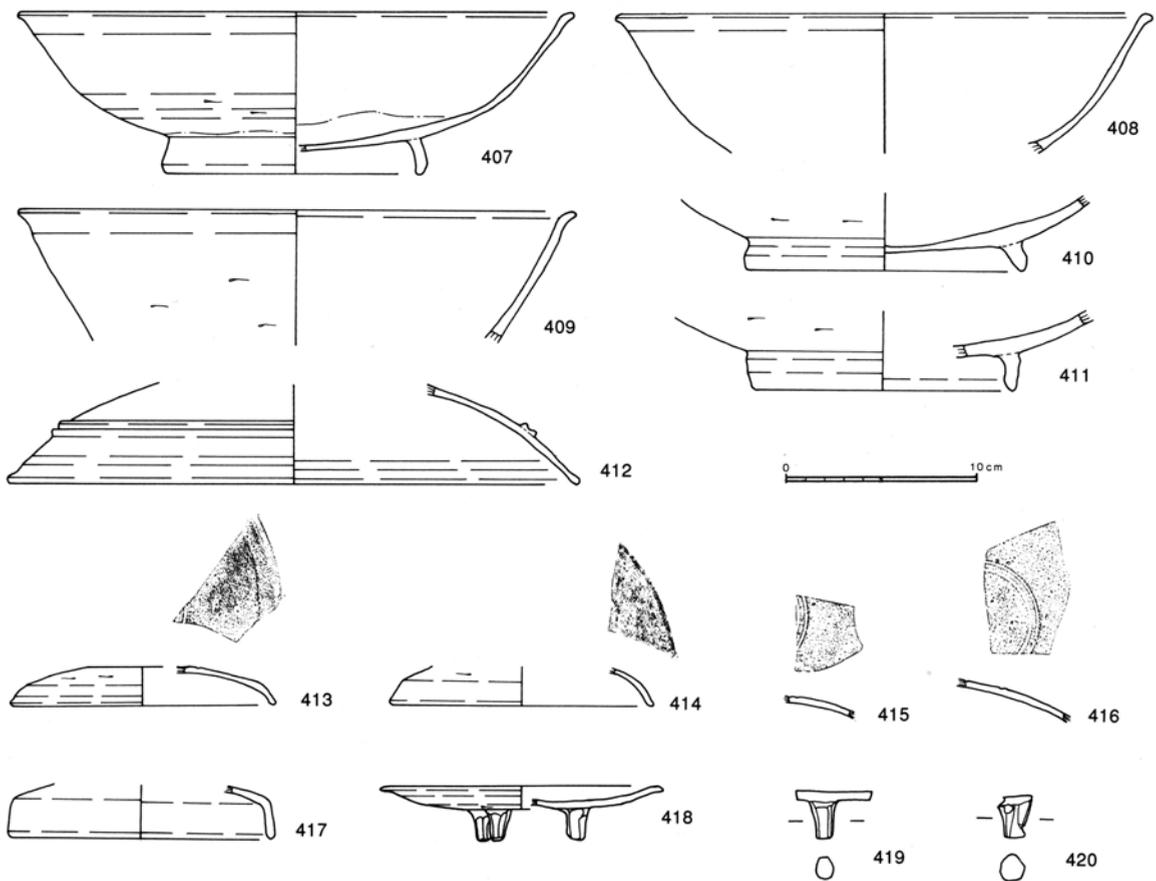


図27 鴻ノ巣古窯出土遺物8

面回転ナデ調整。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、天井部に確認できる。

三足盤 (図27-418～420)

418は平皿の高台を取り去った体部に、三か所の脚部を貼付する形状。体部の形態、整形などは、基本的に椀と同様。脚部は、体部に貼付後、回転ヘラケズリ調整で形状を整える。施釉部位は体部内面のみ。やや歪む。419、420はその脚部片。2点得られた。いずれも側面は縦方向のヘラケズリ調整。後者は、下部にヘラによる切り込みが確認できる。

③ 灰白軟陶 (図29-421～428)

灰白軟陶の器種

灰白軟陶(小島他 1981)は、緑釉陶器の素地と呼称される場合もある。数量は乏しい。無釉で緻密な胎土を使用し、焼成を軟質仕上げされるのが特徴となる。部分的にはヘラミガキ調整も加えられるなど、全体にシャープな印象を受ける。なお、本窯資料では大半に陰刻文が確認できる(図29)。

平皿 (図29-421、422)

形態、整形は、ヘラミガキ調整を除けば灰釉陶器平皿と基本的に同様。ただし調整がより丁寧となる。ヘラミガキ調整は体部内外面。421は高台が残存し、いわゆる角高台となるが、これがややくずれた形状。

瓶 (図29-423～426)

423～426は陰刻文を施す一群。図示した資料は、ヘラミガキ調整後に陰刻文を施す。いずれも特徴的な部位を欠く小片のため、器種を特定できない。部位は、424が肩部片、425、426が胴部片、423が底部片となる。前三者は、全面回転ナデ調整で外面にはヘラミガキ調整をさらに加える。ただし、425、426はこれが不明瞭。陰刻文は423～425が花文。426はモチーフ不明。423は低くがっしりとした高台と、わずかに丸味を帯びる下胴部を持つ。回転ヘラ削りの調整痕跡を回転ナデ調整で丁寧に消し、外面にはヘラミガキ調整をさらに加える。陰刻文は上方に草木文と高台付近に花文を施す。

蓋 (図29-427、428)

427は香炉の蓋。口縁部片で、天井部から丸みを帯びて口縁部に至る形状。全面回転ナデ調整だが、外面にはヘラミガキ調整を加える。ヘラ沈線が、天井部と口縁部の境界に二条、口縁部付近に一条施される。陰刻文は花文で、花卉と芯の花文を描き、スカシを付加する。施文はヘラミガキ調整後による。428は一応蓋として報告する。口縁部は縁帯を形成する。全面回転ナデ調整。灰白軟陶としては粗製で表面にはヌタも確認できる。残存部ではヘラミガキ調整は確認できない。陰刻文はモチーフ不明。草木文か。

(2) 窯道具 (図 29 - 429 ~ 457、図 30 - 458 ~ 466)

窯道具の種類 窯道具には、保護具と支持具、その他がある。

① 保護具

保護具にはサヤがある。

サヤ (図 29 - 429 ~ 439)

サヤは、サヤ鉢 (429 ~ 437) とサヤ蓋 (438、439) に区分する。前者は円筒形で平底、後者は傘型で天井部に面を持つ。全体に調整がラフで、前者は成形段階の粘土紐の単位が比較的容易に観察できるが、436 ~ 439 はヨコナデ調整を施す。前者の底部、後者の天井部は無調整の粗面となる。それぞれ体部との接合部分でラフな回転ヘラケズリ調整をラフに施す。使用胎土は須恵器とほぼ同質のもの (436、437、439) と、意図的に砂粒を混入させたサヤ専用のもの (429 ~ 435、438) がある。なお、429、431、433、434 は、器面の観察

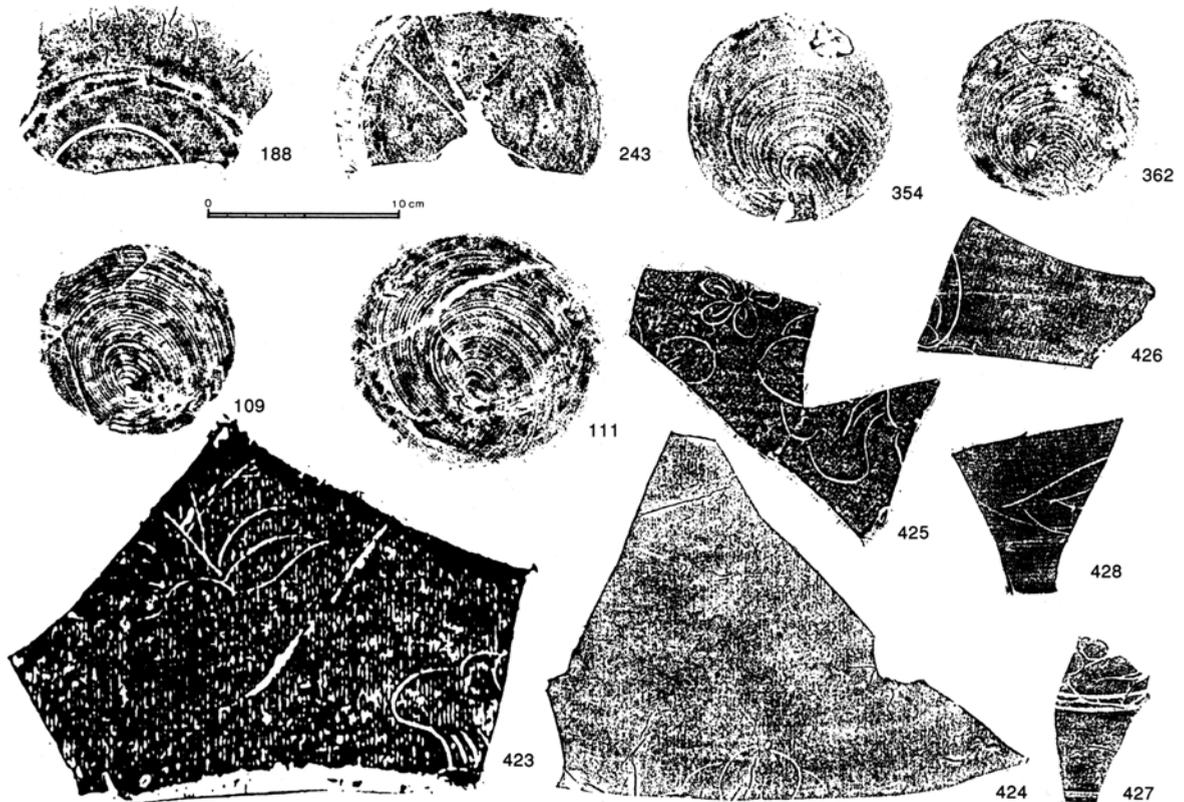


図 28 鴻ノ巣古窯出土遺物 9

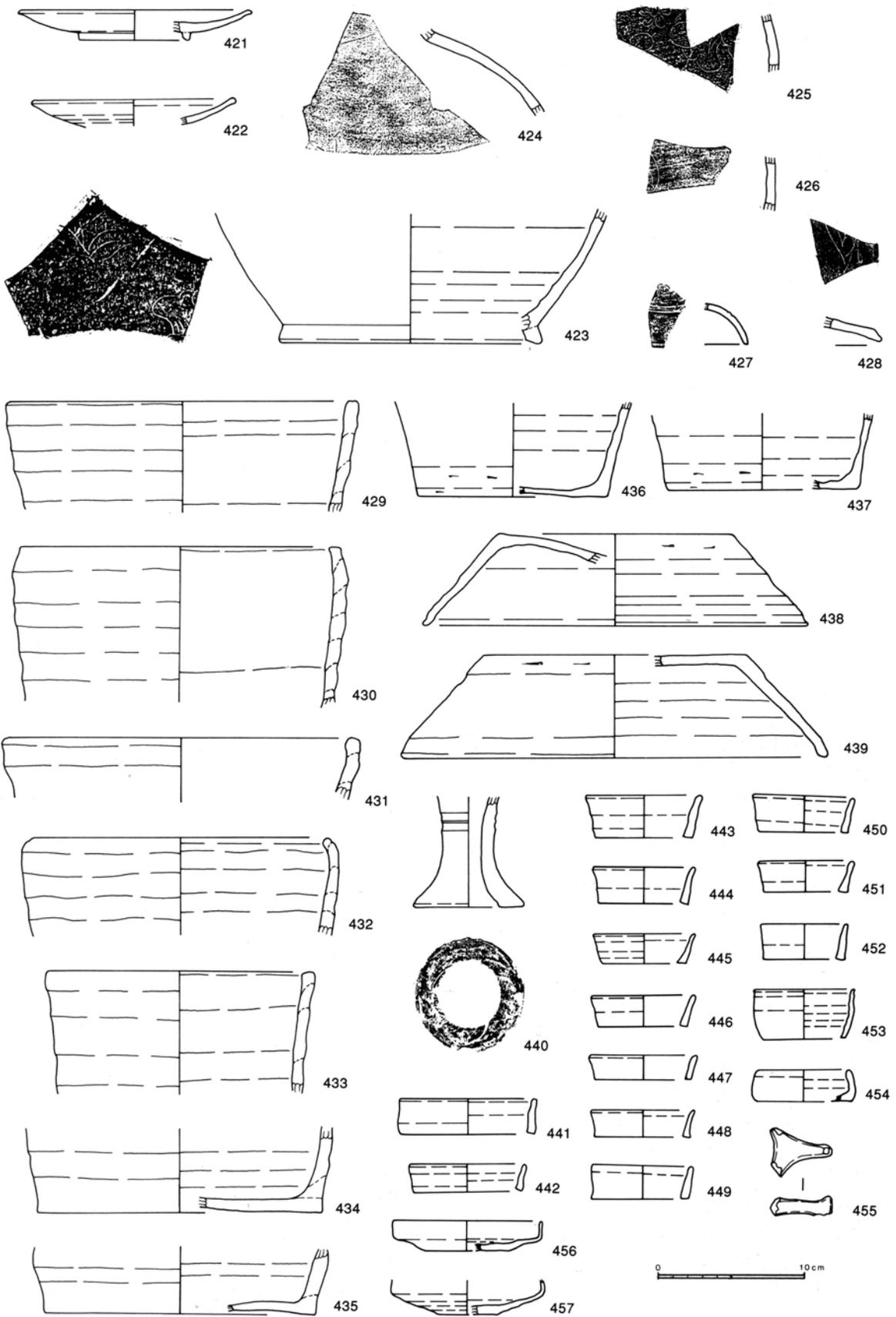


図29 鴻ノ巣古窯出土遺物10

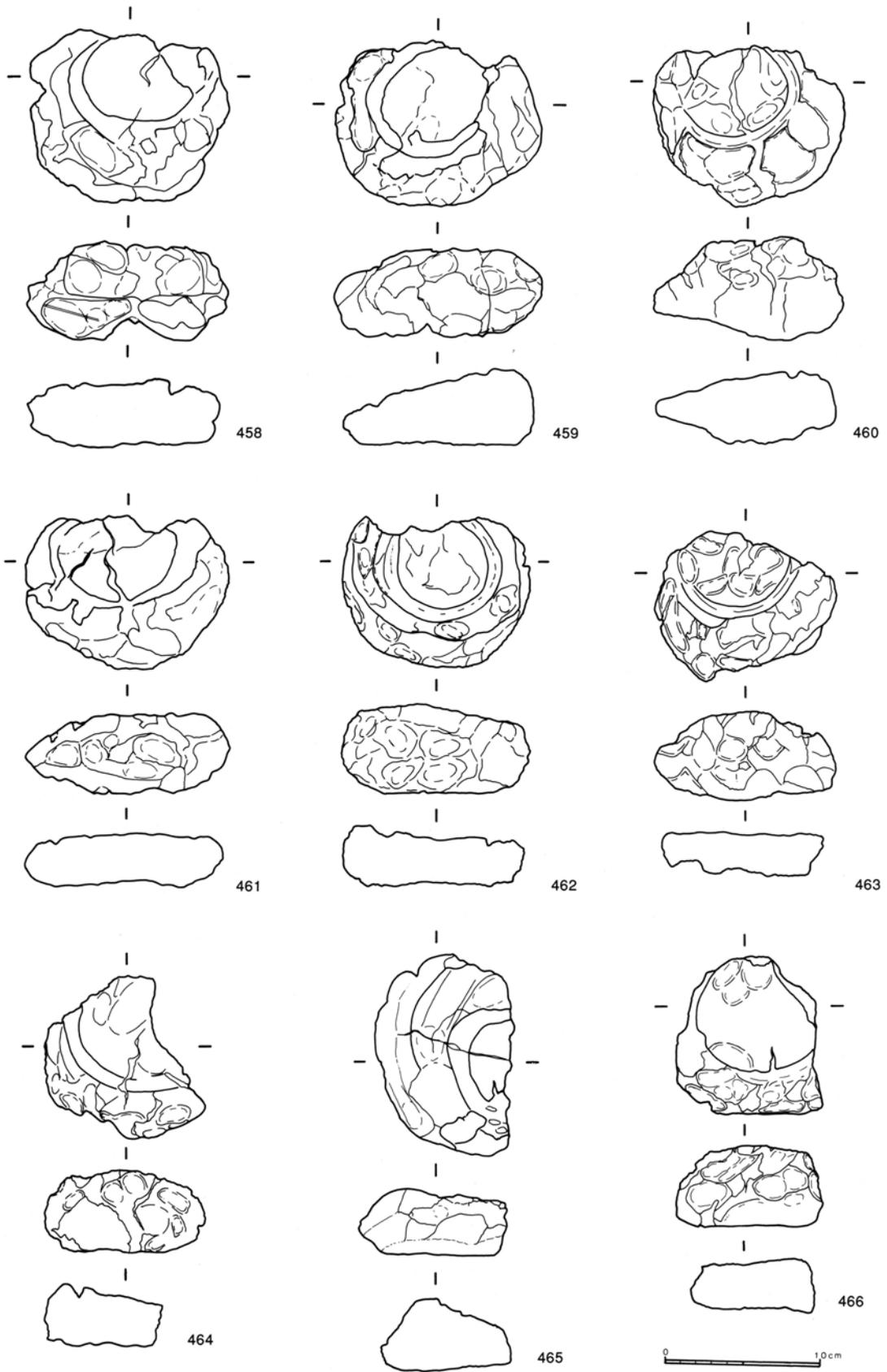


图 30 鴻ノ巣古窯出土遺物 11

から数次に渡る使用が確認できる。

② 支持具

支持具にはツク、トチ、焼台がある。

ツク (図 29 - 440)

支持具のうち、器高の高いもので、1点のみ得られた。440は筒状の体部を持ち、底部で開く。器壁は厚い。体部は回転ナデ調整で、底面には回転糸切りの痕跡をとどめる。体部の中央には沈線を2条施す。使用胎土は須恵器と同様。数次に渡る使用は確認できない。窯道具としては整形が丁寧となる。

トチ (図 29 - 441 ~ 457)

支持具のうち器高の低いものを呼ぶ。トチには筒トチ (441 ~ 453)、三又トチ (455)、盤状トチ (456、457) がある。

まず、筒トチは、須恵器盤の高台を天地逆にした形状。やや径が狭い。底面に糸切りの痕跡をとどめる。使用胎土は須恵器または灰釉陶器と同様。窯道具としては整形が丁寧となる。いずれも数次に渡る使用は確認できない。上部と下部に釉着が認められる資料もみられることから、製品間に挟んで使用したことが予想できる。法量は、口径 7.0 cm、器高 2.0 cm 程度が一般的だが、443は口径がやや大振り、453は器高が高い。

次に、三又トチは1点のみ得られた。457は腕部が1か所残存する。成形は手づくねによる。焼成はあまく、使用胎土は灰白軟陶と同様となる。数次に渡る使用は確認できない。表面には釉が付着し、先端部には製品をはがした痕跡が認められる。

456、457は、盤状トチ。2点得られた。いずれも器高は低く、体部で屈曲する。胎土は須恵器と同様。体部は回転ナデ調整、底部は回転糸切り痕を無調整で残す。具体的な使用法は不明であるが、形態から判断して盤状トチの名称で一応ここに含めた。

焼台 (図 30 - 458 ~ 466)

焼台には、いわゆる馬爪形焼台 (図 30 - 458 ~ 466) と礫焼台 (図版 16) がある。

焼台の数量

馬爪形焼台は、総重量 166768.0 g あった。これを完形品の平均重量 453 g で割ると、368.1 個体となる。大半が上面に腕の高台圧痕が確認できることから、多くは腕の焼成用と考えられるが、(手付) 瓶を焼成した例も確認できる (図版 16 - 467)。いずれも砂粒を多量に含んだ胎土を使用し、その名称の語源となる馬爪形にラフに整えたものとなる。側面には指圧痕、上面には腕の高台圧痕を残す。部分的に離れ材の可能性を持つ茎などの植物圧痕が確認できる資料も含まれる。

次に礫焼台は、直径 10 数 cm 大の転石を焼台として使用したものを呼ぶ。石材は大半が

チャートとなる。総重量は 85548.8 g あった。これを完形品の平均重量 71 g で割ると 214.5 個体となる。これらは多くが被熱を確認でき、部分的には製品の極小品や自然釉が付着する資料も含まれる。なお、これらの使用例として（図版 16-469）がある。この資料は剥離した窯体の床面で、礫焼台 2 点に灰釉陶器手付瓶の底部が釉着していることが観察できる。

③ その他の窯道具

その他の窯道具には焼筭などがある。

焼筭（図版 16）

（図版 16-470）は、直径 10 cm、高さ 5 cm 程度のスサ入り粘土塊を二段に積んで焼筭としている。表面には自然釉が厚くかかる。窯体床面に釉着した状態で剥離した床面ごと出土した。

分焰柱（図版 16-471）

窯体の構造物であるが、ここで扱う。全形は不明。横断面は長径 15.0 cm、短径 12.0 cm をはかる楕円形を呈する。表面には自然釉や窯壁極小片が付着する。中央には縦位に直径 4 cm 程度の空洞が認められ、地山掘り残しによる構造ではない。

窯壁片（図版 16-472）

窯体の構造物であるが、ここで扱う。スサ入りの窯壁片。表面に布目が確認できる。壁面補修時に貼付されたものが剥落したもののか。

（3） そのほかの遺物（図 31）

今回得られた資料のうち、鴻ノ巣古窯と直接関わりが存在しない資料をここでまとめる（図 31）。数量は乏しく、いずれもローリングが著しい。器種は高杯、甕等が確認できる。時期は古墳時代前期を中心とする。出土位置は、調査区全域におよび、特に傾向はうかがうことはできない。層位は灰層中または基盤層に若干めり込むような形となる。

473～477は高杯。473は杯部片。稜を持って立ち上がる形状。474～477は脚部。474、475、477は、脚部上方の小片となる。476のみ、丸味を帯びる脚部の形状が判明する。円形のスカシ文が三か所に確認できる。478は甕の底部片か。平底。

3 小結

(1) 遺構について

前述のように、今回の調査では灰原の末端部分を検出したに留まった。現状では、灰原の上面に厚さ5～7mにも及ぶ搬入土が覆っているが、これは1970年代頃に実施された天白区植田中央土地区画整理事業の残土となる。これらの搬入作業は、大規模な整地を伴ったもので、調査区周辺では全面に渡り、旧地形が標高44～42m程度に削平されていた。窯体はこの段階で消滅したものと考えられる。

以前の調査

なお、名古屋考古学会の手により発行されている報告書（荒木他 1978、同 1979）によれば、本地点には2つの窯体が存在していたとされている。ところで、今回検出できた灰原は、その堆積状況から1基分の灰原と考えられる。ここではその位置関係から、名古屋考古学会の報告書の2号窯に対応する灰原と考えておきたい。一方、1号窯は、報告書に記載された内容や、コンターに平行して存在するという特異な立地から考えて、特殊な

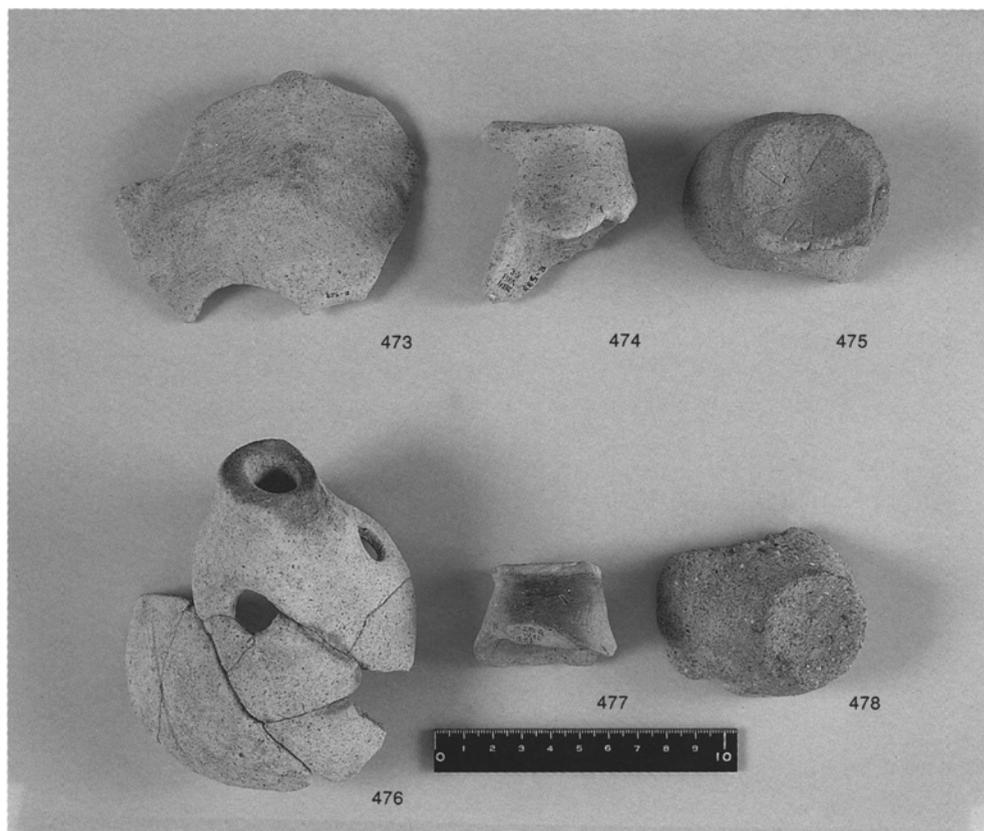


図31 鴻ノ巣古窯その他の遺物

第 Ⅲ 章

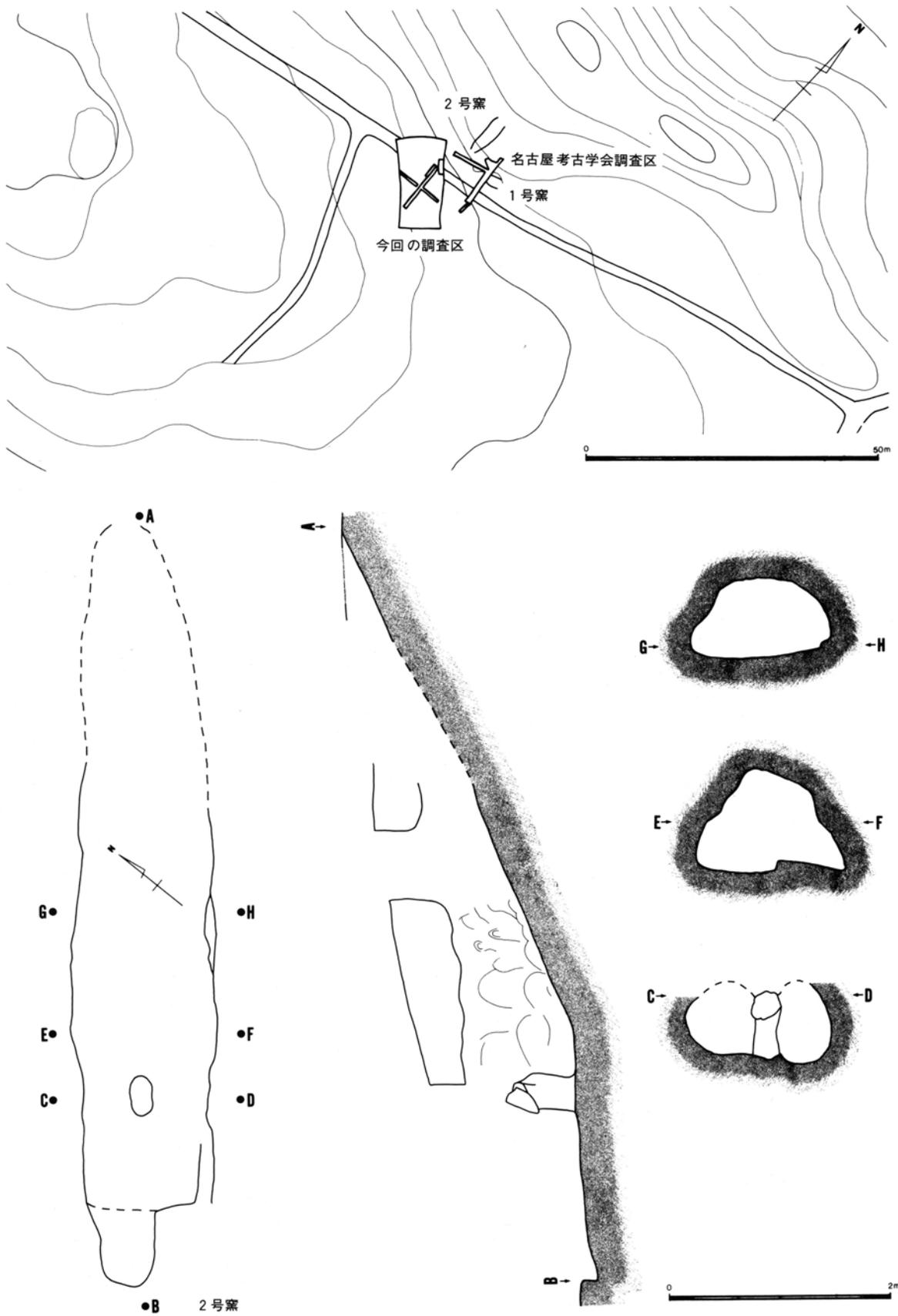


図 32 名古屋考古学会の調査成果と調査成果と今回の調査区

窯体を想定することができるのであろうか。しかし、この遺構はほとんど流失した状況下での検出であるため、その具体的な構造は明らかにはされていない。

(2) 遺物について

今回得られた資料は、いずれも黒笹90号窯式の後半に含められる内容を持っている。出 帰 属 時 期

表3 鴻ノ巣古窯器種構成表

種 類	器 種	破片数集計法		重量計測法		口縁部計測法		底部計測法	
		破片数	比率	重量	比率	口縁部個体数	比率	底部個体数	比率
須恵器	椀	193	3.57%	3219.9	3.23%	11.41666667	5.05%	36.5	8.62%
	高盤	32	0.59%	1043.8	1.05%	2.5	1.11%	1	0.24%
	盤	42	0.78%	688.6	0.69%	4.25	1.88%	4.08333333	0.96%
	蓋	8	0.15%	104.4	0.10%	1	0.44%	1	0.24%
	椀盤蓋類不明	55	1.02%	163.2	0.16%	1	0.44%	1	0.24%
	鉢	25	0.46%	1498.1	1.50%	1	0.44%	1.41666667	0.33%
	風字硯	1	0.02%	65	0.07%	1	0.44%	1	0.24%
	甕	35	0.65%	3110.6	3.12%	1	0.44%	1	0.24%
	須恵器合計	391	7.22%	9893.6	9.92%	23.16666667	10.25%	47	11.09%
灰釉陶器	椀	1017	18.79%	24592.3	24.65%	82.25	36.38%	139.41667	32.91%
	平皿	428	7.91%	8742.1	8.76%	36.916667	16.33%	71	16.76%
	広縁段皿	54	1.00%	1367.8	1.37%	5.083333333	2.25%	7	1.65%
	狭縁段皿	98	1.81%	2424.2	2.43%	7.083333333	3.13%	11.25	2.66%
	輪花段皿	1	0.02%	34	0.03%	1	0.44%	1	0.24%
	耳皿	9	0.17%	51.1	0.05%	1	0.44%	1	0.24%
	椀皿類不明	1817	33.57%	13169.3	13.20%	31	13.71%	101.25	23.90%
	長頸瓶	154	2.85%	9410.4	9.43%	14.66666667	6.49%	14.666667	3.46%
	小瓶	73	1.35%	1121	1.12%	2.75	1.22%	5.5	1.30%
	手付瓶	141	2.60%	8298.7	8.32%	10	4.42%	13.583333	3.21%
	双耳瓶	5	0.09%	1119	1.12%	1	0.44%	1	0.24%
	水瓶	1	0.02%	139	0.14%	1	0.44%	1	0.24%
	短頸壺	4	0.07%	59.2	0.06%	1	0.44%	1	0.24%
	瓶類不明	1185	21.89%	18461.8	18.51%	1	0.44%	1	0.24%
	大平鉢	19	0.35%	455.5	0.46%	1.166666667	0.52%	1	0.24%
	蓋	4	0.07%	52	0.05%	1	0.44%	1	0.24%
	三足盤	3	0.06%	52	0.05%	1	0.44%	1	0.24%
	灰釉陶器合計	5013	92.61%	89549.4	89.78%	198.916667	87.98%	372.66667	87.96%
	灰白軟陶	平皿	1	0.02%	11	0.01%	1	0.44%	1
瓶		4	0.07%	277	0.28%	1	0.44%	1	0.24%
蓋		2	0.04%	14	0.01%	1	0.44%	1	0.24%
香炉		2	0.04%	2	0.00%	1	0.44%	1	0.24%
灰白軟陶合計		9	0.17%	304	0.30%	4	1.77%	4	0.94%
合計		5413	100.00%	99747	100.00%	226.08333	100.00%	423.66667	100.00%
窯道具	サヤ	100	74.63%	6158.1	91.48%	2.333333333	21.21%	1.75	18.75%
	ツク	1	0.75%	179	2.66%	0.083333333	0.76%	1	10.71%
	筒(輪)トチ	31	23.13%	379.6	5.64%	6.583333333	59.85%	4.5833333	49.11%
	三叉トチ	1	0.75%	11	0.16%	1	9.09%	1	10.71%
	盤状トチ	1	0.75%	3.7	0.05%	1	9.09%	1	10.71%
	窯道具合計	134	100.00%	6731.4	100.00%	11	100.00%	9.3333333	100.00%

第 Ⅲ 章

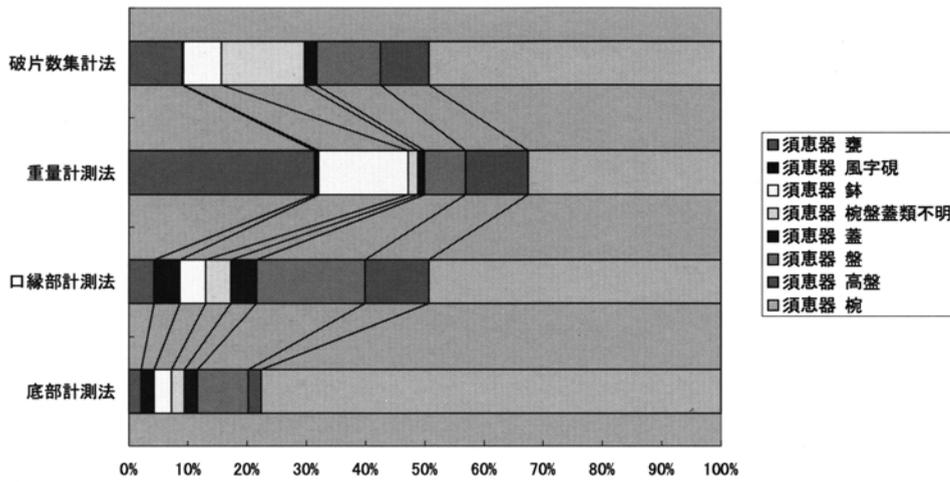


図 33 計測法による比較（須恵器）

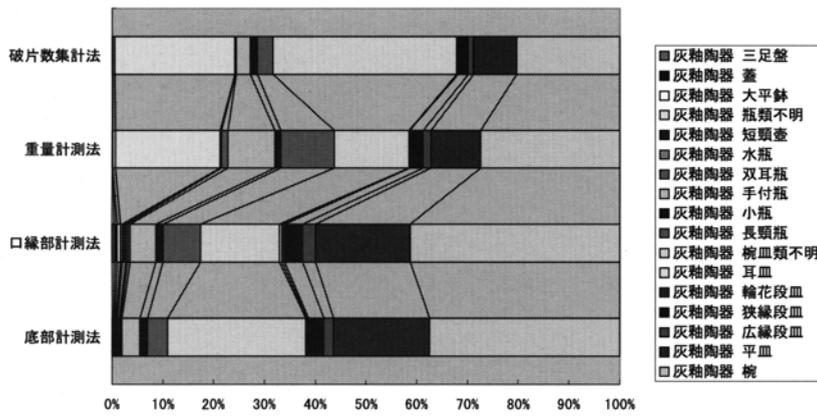


図 34 計測法による比較（灰釉陶器）

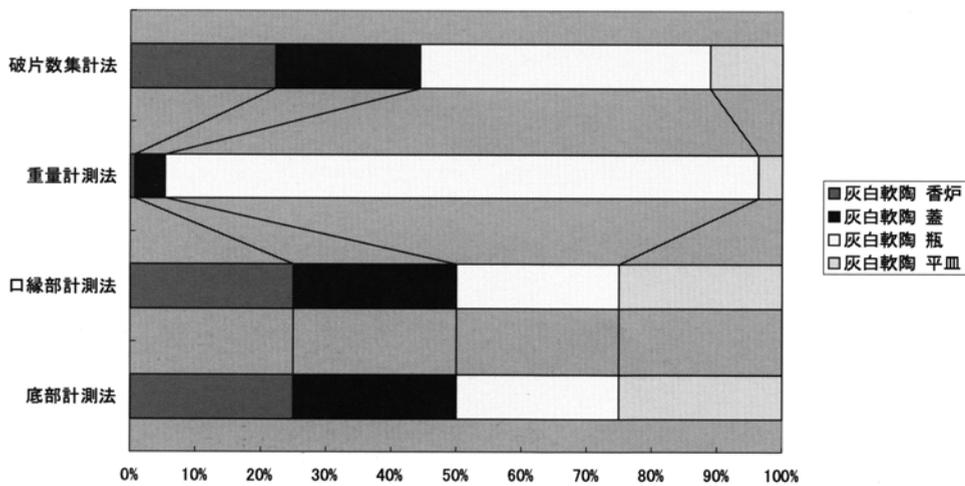


図 35 計測法による比較（灰白軟陶）

表4 口縁部計測法による比較

遺跡名		山越1号窯		黒笹89号窯跡		鴻ノ巣古窯	
種類	器種	口縁部個体数	比率	口縁部個体数	比率	口縁部個体数	比率
須恵器	椀A	81.33	9.63%	129.25	14.30%	11.42	5.05%
	杯AB	6.33	0.75%				
	高台付椀	1.00	0.12%				
	高盤					2.50	1.11%
	盤	2.83	0.34%			4.25	1.88%
	蓋	8.58	1.02%			1.00	0.44%
	椀盤蓋類不明					1.00	0.44%
	横瓶	1.00	0.12%				
	短頸壺			1.00	0.11%		
	鉢			1.00	0.11%	1.00	0.44%
	すり鉢			1.00	0.11%		
	風字硯					1.00	0.44%
	甕			1.00	0.11%	1.00	0.44%
	甕	1.00	0.12%	1.00	0.11%		
	陶鎮			1.00	0.11%		
	洗	1.00	0.12%				
	須恵器合計		103.08	12.20%	135.25	14.97%	23.17
灰釉陶器	椀	352.50	41.72%	259.91	28.76%	82.25	36.38%
	綾椀			1.00	0.11%		
	無台椀	1.0	0.12%				
	平皿	166.58	19.72%	314.50	34.80%	36.92	16.33%
	貼付輪花皿			1.00	0.11%		
	段皿			20.83	2.30%		
	広縁段皿	18.83	2.23%			5.08	2.25%
	狭縁段皿	39.50	4.68%			7.08	3.13%
	輪花段皿			1.00	0.11%	1.00	0.44%
	綾皿			1.00	0.11%		
	耳皿	4.50	0.53%	1.75	0.19%	1.00	0.44%
	椀皿類不明	128.25	15.18%			31.00	13.71%
	長頸瓶	4.00	0.47%	3.16	0.35%	14.67	6.49%
	小瓶	11.42	1.35%	1.83	0.20%	2.75	1.22%
	手付瓶	9.17	1.09%	2.50	0.28%	10.00	4.42%
	双耳瓶					1.00	0.44%
	水瓶					1.00	0.44%
	浄瓶			1.00	0.11%		
	双耳壺			1.00	0.11%		
	短頸壺	1.00	0.12%	1.00	0.11%	1.00	0.44%
	壺			1.00	0.11%		
	瓶類不明					1.00	0.44%
	大平鉢	1.17	0.14%			1.17	0.52%
	蓋	1.83	0.22%			1.00	0.44%
	三足盤					1.00	0.44%
	唾壺			1.00	0.11%		
	灰釉陶器合計		737.92	87.34%	613.48	67.88%	198.92
灰白軟陶	椀	1.00	0.12%	46.66	5.16%		
	花文椀			1.33	0.15%		
	輪花椀			1.00	0.11%		
	花文輪花椀			1.00	0.11%		
	貼付輪花椀			1.00	0.11%		
	貼付細長輪花椀			1.00	0.11%		
	花文深椀			1.00	0.11%		
	輪花深椀			1.00	0.11%		
	綾椀			22.16	2.45%		
	花文綾椀			3.25	0.36%		
	花文皿			2.50	0.28%		
	輪花皿			1.00	0.11%		
	綾皿			12.91	1.43%		
	花文綾皿			1.41	0.16%		
	段皿			17.58	1.95%		
	花文段皿			1.25	0.14%		
	輪花段皿			1.00	0.11%		
	平皿	1.00	0.12%	27.00	2.99%	1.00	0.44%
	耳皿			1.00	0.11%		
	瓶					1.00	0.44%
	手付瓶			1.66	0.18%		
	花文瓶			1.00	0.11%		
	手付小瓶			1.00	0.11%		
	蓋					1.00	0.44%
	花文香炉蓋			1.00	0.11%		
	香炉			2.50	0.28%	1.00	0.44%
	托			1.00	0.11%		
唾壺			1.83	0.20%			
灰白軟陶合計		2.00	0.24%	155.04	17.15%	4.00	1.77%
合計		844.83	100.00%	903.77	100.00%	226.08	100.00%

第 三 章

計測手順 土資料は灰原資料であることから、操業段階の焼成比率を反映しているものと考えられる。しかし、出土量の関係から、全ての個体を識別することが困難であるため、ここでは全点を集計した。

具体的方法は、今回の出土遺物の総量が生産遺跡資料としては少量であるため、4つの異なる作業を相互に比較する方法をとった⁽¹⁾。破片数の集計（破片数集計法）、重量の計測（重量計測法）、口縁部の計測（口縁部計測法）、底部の計測（底部計測法）である。なお、口縁部計測法および底部計測法については成果の直接比較が可能ないように、本センター刊行の黒笹89号窯報告書（小澤他 1994）で実施された方法を基本的に踏襲している。この方法は破片接合後に口縁部及び底部を計測するものである。口縁部及び底部を12等分して残存部を数えるもので、端数は四捨五入するが、1/12以下はすべて1/12に切り上げている。個体数はこれを12で割って求めている。なお、集計後、12/12に満たない器種や口縁部が残存しない器種はすべて1.0としてカウントしている。

計測結果

表3は、得られた結果をまとめたもので、図33～35で種類別にこれをグラフ化した。比較すると重量計測法が他三者からやや突出した傾向を示す。このことは、重量計測法が、各器種に法量差が大きい資料にはあまり適切でないことを暗示しているのかもしれない。そうであるならば、破片数集計法も数字上ではあまり明瞭ではないが、同様の傾向を持つだろう。一方、口縁部ないし底部を計測する方法は相互が比較的近い形状のグラフとなっている。これは両者の計測法が本窯資料に有効である根拠となるだろう。今回の資料は、口縁部の方が底部のそれより器種判別に有利であることから、前者の計測法に、より適合性を認めることができる。

鴻ノ巣の器種構成

次に最も有効と考えられた口縁部計測法の成果を中心に、資料の器種構成比をながめる。種類別の生産内容は、灰釉陶器がほぼ全体の90%を占めている。須恵器は残りの10%。灰白軟陶は破片数7点と微量である。

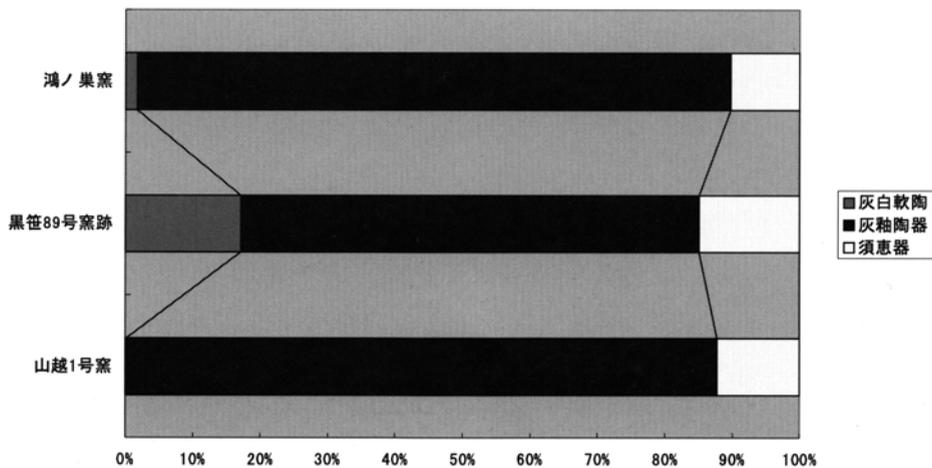


図36 3遺跡の口縁部計測法による比較

それぞれの内訳は、まず、須恵器については椀Aが50%程度、続く盤が20%、これに高盤も加えると30%となる。ここでは供膳具の優位を指摘できるが、後述する灰釉陶器のように特定器種の極端な突出が認められない。一方、灰釉陶器は、椀、皿類が80%を越える。椀と平皿の比率は、2：1より前者がやや優位となる。ここでは、供膳具生産の優位、中でも椀の生産量の突出に注目できるだろう。一方、主力器種の一つにもみえる瓶類は、10%にも満たない数値となる。器種別では、長頸瓶と（手付）瓶が、ほぼ1：1の比率で存在している。小瓶は、30%前後とこれらより数値が低い。灰白軟陶は、瓶類が多いのか。ただし、資料数が乏しいため、断言できるものではない(2)。

以上、鴻ノ巣古窯資料の構成比を分析した。その結果、灰釉陶器の椀に偏重した生産内容を確認することができた。

次にこれを、ほぼ同一時期に属する、愛知郡三好町黒笹 89号窯資料と比較する。黒笹 89号窯は、愛知用水掘削とそれに伴う農地開発によって発掘調査が実施されている。報告書は1957年とその翌年に刊行されている(愛知県教委 1957、1958)が、ここで比較対象としたのはデータは1994年に財団法人愛知県埋蔵文化財センターから刊行された報告書(小沢他 1994)による。内容をながめると、種類別にはやはり須恵器と灰釉陶器と灰白軟陶がある。構成比率は須恵器から15%、68%、17%となる。次に種類毎の器種構成比をみる。まず、須恵器はほとんどが椀Aで構成されている。構成比は須恵器中の99%にも迫り、残り1%強に、すり鉢、甕、甌、鉢などが存在する。次の灰釉陶器は全体の68%で

K 8 9 の器種構成

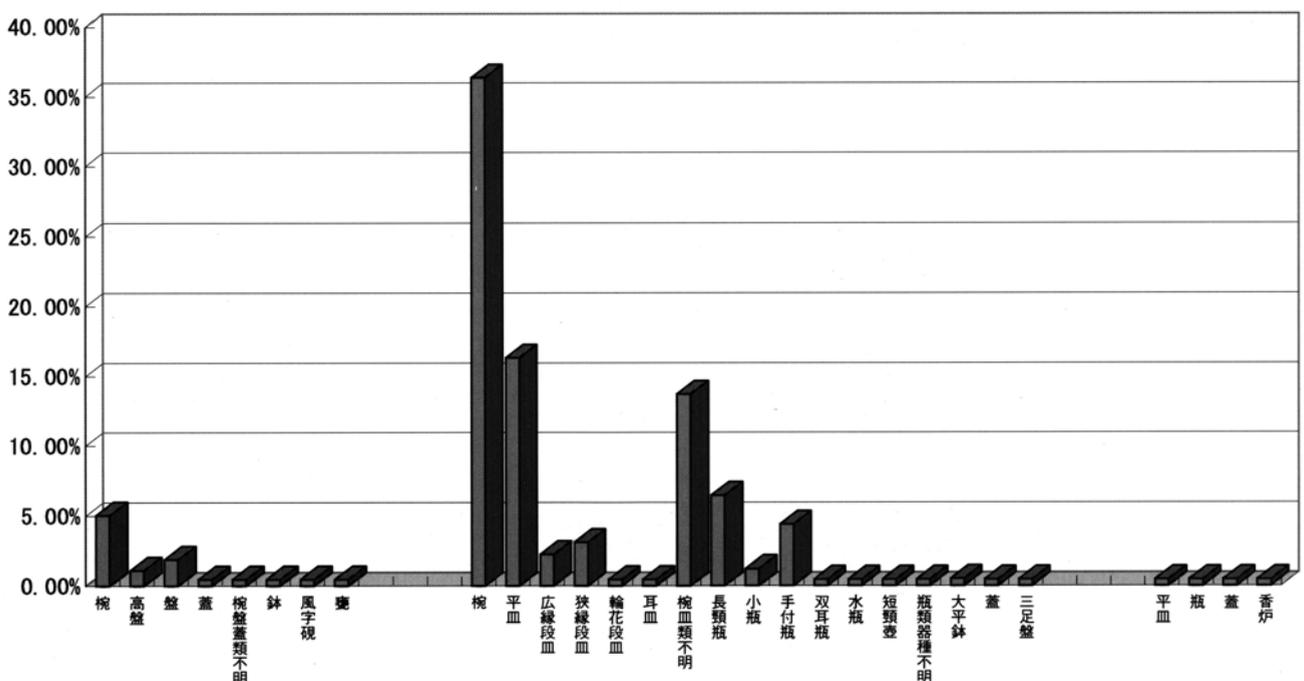


図 37 鴻ノ巣古窯口縁部計測法による器種比較

第 Ⅲ 章

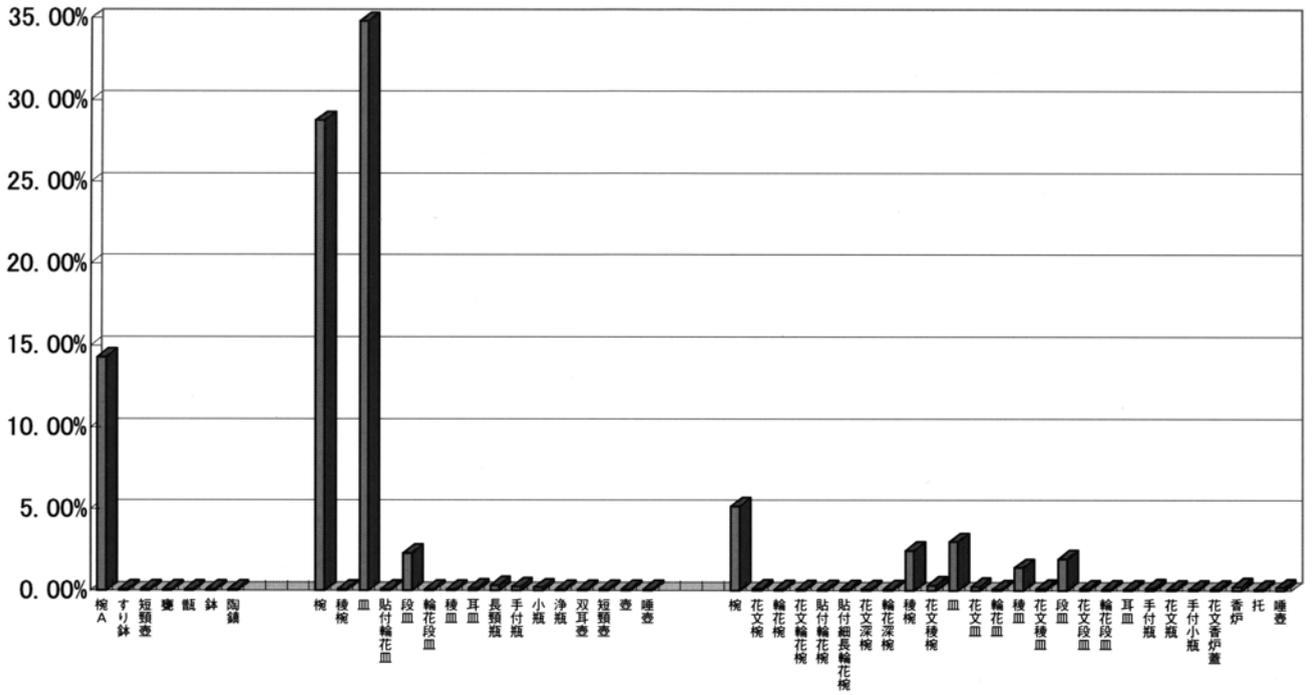


図 38 黒笹 89号窯口縁部計測法による器種比較

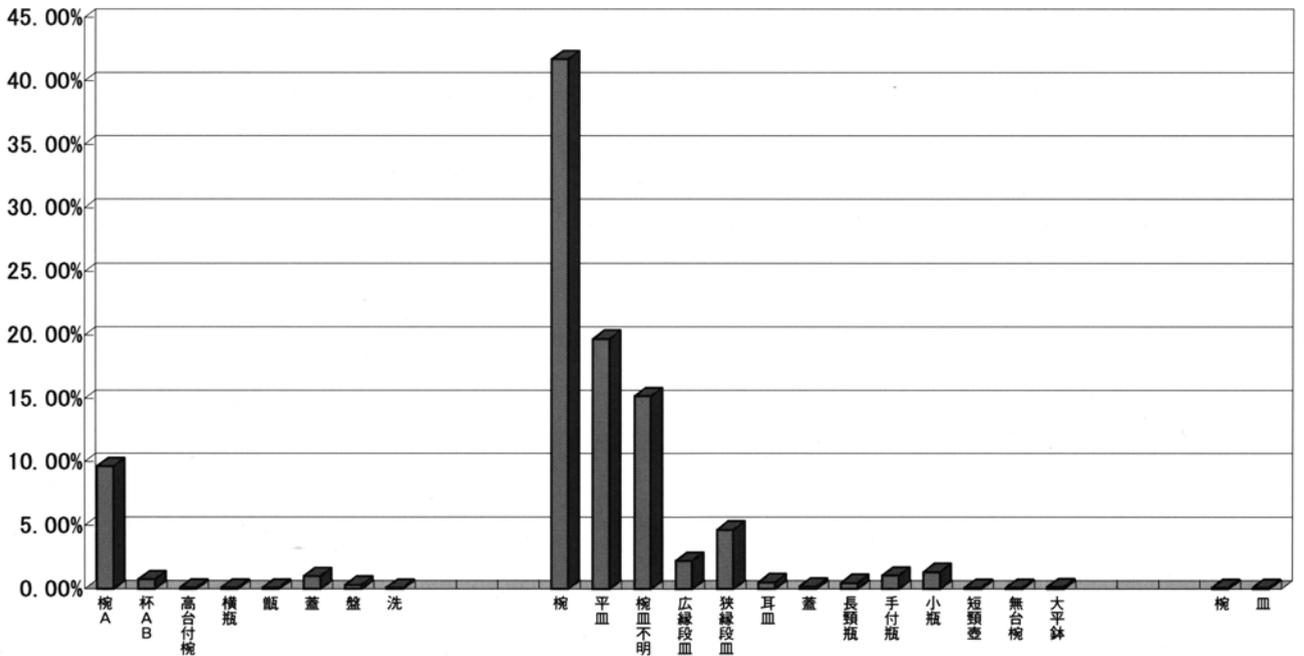


図 39 山越 1号窯口縁部計測法による器種比較

ある。器種は椀が42%、平皿が51%、瓶類は1%をはるかに下回る。灰白軟陶は全体の17%となる。器種は椀類が51%、皿類が43%、瓶類は1%をはるかに下回る。特に稜椀が灰白軟陶の17%を占める。なお、灰白軟陶中の陰刻文出現率は7%である。

黒笹98号窯の内容を鴻ノ巣古窯と比較すると、まず種類別で灰白軟陶の比率が高いのが特徴となる。器種数も黒笹98号窯の方が多く、これは特に灰白軟陶に著しい。しかし、両者の須恵器と灰釉陶器の比率はほぼ同一で、これらの差異が基本的には灰白軟陶の生産量に起因したものであったことを考えさせる。

次に、これを器種別に比較する。まず、須恵器では両者に器種構成は大差はない。しかし、構成比では黒笹89号窯に椀Aの突出が指摘できる。灰釉陶器では器種構成に差が認められ、黒笹89号窯には稜椀、稜皿や貼付輪花皿が加わる。また、特殊なものとして、外面に蓮弁文を施す椀の体部片が報告されている。一方、構成比では共通傾向として椀、皿類が総生産量の過半数を占めることである。具体的数値は、鴻ノ巣古窯が73%、黒笹89号窯が68%である。しかし、椀、平皿の比率に差異が認められ、鴻ノ巣古窯が2:1、黒笹89号窯はほぼ1:1となっている。灰白軟陶では両者に著しい差が存在する。ここではまず生産量に注目できる。具体的には鴻ノ巣古窯が僅か数点にすぎなかったのに対し、黒笹89号窯では17%と一定比率をもって存在している。器種構成では、やはり黒笹89号窯に稜椀、稜皿や貼付輪花椀、貼付輪花皿、托などが加わる。また、数字上には表現されていないが、黒笹89号窯にはいわゆる蛇の目高台を持つ椀、皿類が含まれている。また、陰刻文では質、量ともに黒笹89号窯が優位となる。鴻ノ巣古窯に個性的なパターンがいくつか含まれるのに対して、黒笹89号窯は数パターンに類型化でき、前段階からの系譜を引く伝統性の強いものとなっている。

以上、鴻ノ巣古窯と黒笹89号窯の内容を比較した。まずこれらの共通傾向として、灰釉陶器の椀に偏重した生産内容と、須恵器生産が全体の10数%を占めるといった共通性が指摘できた。

一方、両者の差は灰白軟陶生産に明瞭に現れる。鴻ノ巣古窯の灰白軟陶生産が、例外的存在であるのに対して、黒笹89号窯では須恵器の生産量すら越え、器種も豊富なものとなっている。つまり、黒笹89号窯資料は、灰釉陶器と須恵器の生産で少器種大量生産の傾向を示しながら、灰白軟陶の生産では、その対局にある多器種少量生産方向性を保持したという二面性を考えることができる。須恵器や灰釉陶器の器種が、鴻ノ巣古窯資料と比較して黒笹89号窯資料の方が多く、同様の理由によるのだろう。

ここで両者の差を明確にするため、もう一例ほぼ同時期の比較資料を提示する。愛知郡長久手町山越1号窯の資料である。この資料は愛知郡長久手町役場に保管されるもので、今回同町の御好意により口縁部計測を許可された。山越1号窯は、土地区画整理事業によって発掘調査が実施されている。報告書は1976年に刊行されている(山川他 1976)が、『長久手町史』資料編五に再整理のデータも報告されている。ここでの種類には須恵器と灰釉陶器と灰白軟陶がある。資料の内容を鴻ノ巣古窯のそれと比較すると、水瓶が欠落し、

山越の器種構成

輪花の手法が認められないなど、若干の差が確認できるのみで、よく類似している。構成比率は、須恵器が12%で、灰釉陶器が88%となる。灰白軟陶は微量で0.04%である。次に種類毎の器種構成比をみると、須恵器はほとんどが碗Aで構成されている。構成比は80%程度。非常に単純な構成となる。次の灰釉陶器は、碗が47%、平皿が22%、瓶類は4%となる。碗と平皿の比率は2：1である。灰白軟陶は碗と平皿が存在するのみで、陰刻文は確認できない。山越1号窯資料のこうした内容は、鴻ノ巣古窯の内容とよく類似している。

以上、10世紀前半の猿投窯について、三か所の窯資料を比較した。その結果、生産内容の基本路線が、灰釉陶器碗に集約された少器種大量生産の方向性を持っていたことを考えることができた。これは、この段階における灰釉陶器窯の基本的性格と考えることができるだろう。また、須恵器と灰釉陶器の生産比も、前者が10数%程度の数値で一致している。この方向性は、鴻ノ巣古窯、山越1号窯の生産内容にオリジナルな姿として指摘できるだろう。少器種に集約された大量生産は、これ以後の基本路線として定着する方向性である。

灰白軟陶

一方、黒笹98号窯の事例は、こうした性格に、灰白軟陶の量産というオプションを付加したものと理解することができる。この場合の灰白軟陶の生産は、多器種少量生産の方向性をたどる。つまり、黒笹14号窯以来の伝統的な性格である。なお、同様の構成比を持つ資料は乏しく、ここでは特殊な位置を占める。灰白軟陶の緑釉陶器との関わりを考えると、興味深い問題とも考えられる。しかし、現状では、同様の方法による計測データが乏しく、資料的に不安定になっていることを否めない。計測データの増加が課題である。

注

- 1 こうした計測法を比較検討する方法はすでに丹波周山窯(宇野他 1982)などによって実践されている。
- 2 名古屋市天白区に所在する荒木集成館には、本窯の第一次、第二次調査の遺物が収蔵されている。今回、荒木実氏の御好意により実見する事ができた。これらの資料には今回の調査でみられなかった種類、器種として灰釉陶器の浄瓶、平瓶、須恵器では体部が屈曲する有台杯(本書第IV章の杯B)、双耳杯などが少量含まれているが今回計測値には含めていない。

第Ⅳ章 高針原1号窯



第IV章 高針原1号窯

1 遺跡

(1) 概要

調査の概要

高針原1号窯は、名古屋市名東区高針原二丁目地内に所在する。地形的には、北側にむけて傾斜する緩やかな斜面で、調査直前には道路の予定用地のみこれが残存していた。

今回の調査区では、窯体1基と、これに伴う前庭部、灰原、土坑、溝などを検出した。

以下、各遺構について概要を記述する。

(2) 遺構

今回の調査では、窯体1基(SY01)のほか、これにともなう灰出しピット、前庭部、排水溝、灰原などを検出している。

① SY01

構造は舟底ピットを有する窖窯である。焼成室が上部が削平され、全長7.6mが残存する。主軸の方向はほぼN-18°-Wで、北向きに開口する。出土遺物には、須恵器(図51~55-479~592)がある。

以下、窯体の各部を報告する。

本窯は、燃焼室と焼成室の境界が不明瞭であるが、平面図でいうDラインは、平面形がやや絞られるほか、床面傾斜でも変換点となっている。このことを理由に一応ここを境界とする。境界点より上が焼成室である。

焼成室は、全長5.9mを検出した。上部は削平されている。平面形は、胴部があまり張らない形状で、ほぼ直線的となる。床面は傾斜角29度をはかる。剥離が進み、残存状況は良好とはいえない。このため、床面直上の出土遺物は、いずれも原位置を保つものではない。壁面は、舟底ピット上端から計測して、0.7m地点で、最大残存高1.6mをはかる。ほぼ全面に、補修が確認できる。左壁はこれが特に顕著で、最低15面の補修が確認できる。ここではこれを古いものから順にA面からO面と呼称する。補修作業は、灰色のスサ入り粘土を貼付したものである。基本的には前段階の壁面に新たな壁面をそのまま貼付する作業となる。こうした結果、SY01では、構築当初の窯体が幅2.8mであったのに対して、最終面では、これが1.9mとなる。しかし、このうちのG面とK面とは大規模な改修が確認できる。特に前者は、SY01のオリジナルな床面を、10cm以上掘り込み、新たな床面を設定している。一方、後者では床面の掘り込みはさほど顕著ではないが、やはり新たな床面の設定が考えられる。

壁面の数

燃焼室は、幅2.8mをはかる。ほぼ長方形である。床面は、ほとんどが舟底ピットで占められているため確認できなかった。



図 40 高針原 1 号窯調査区位置図 (1 : 2500)

第 IV 章

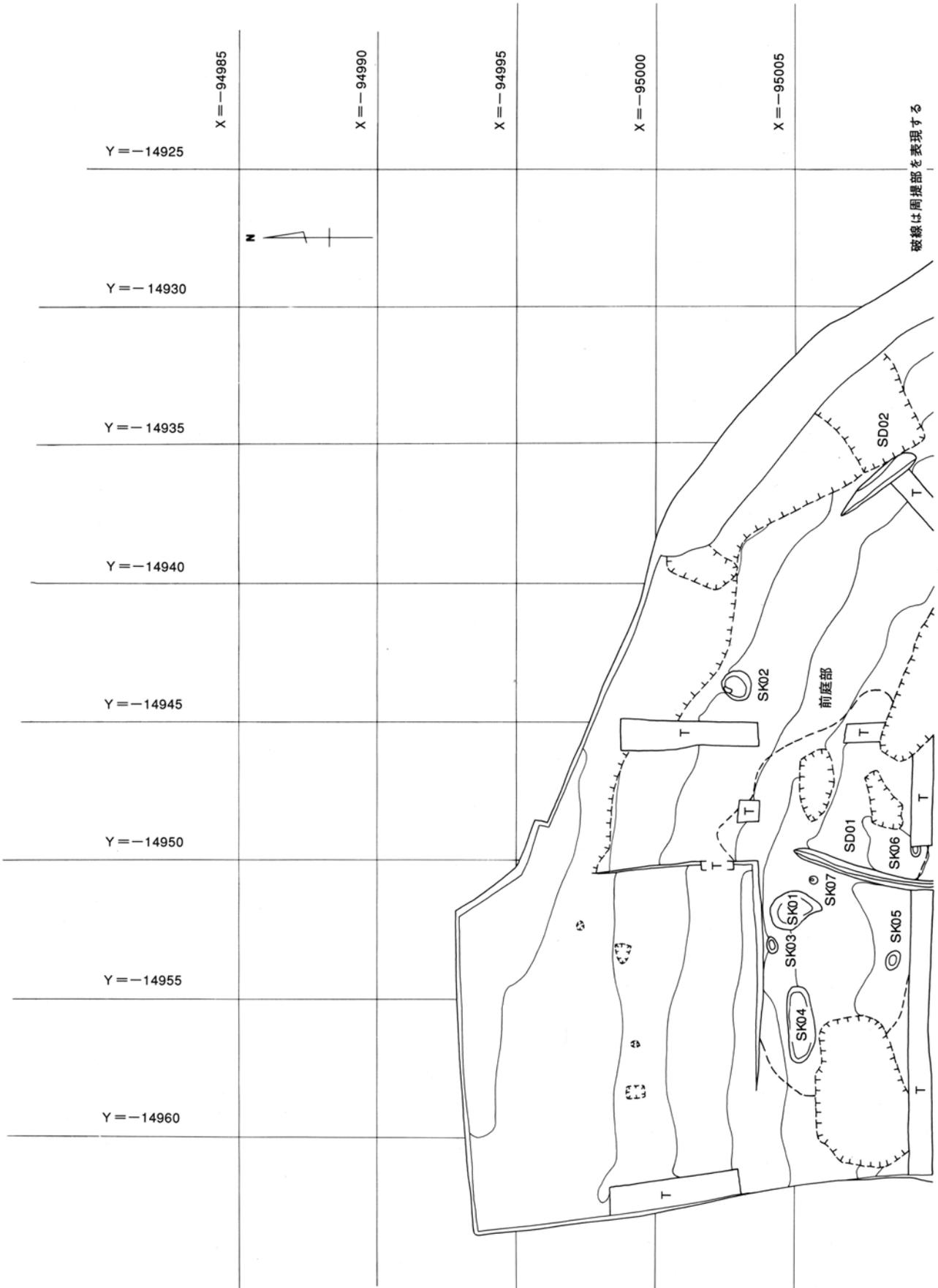


図 41 高針原 1 号案調査区全体図 1 (1 : 200)

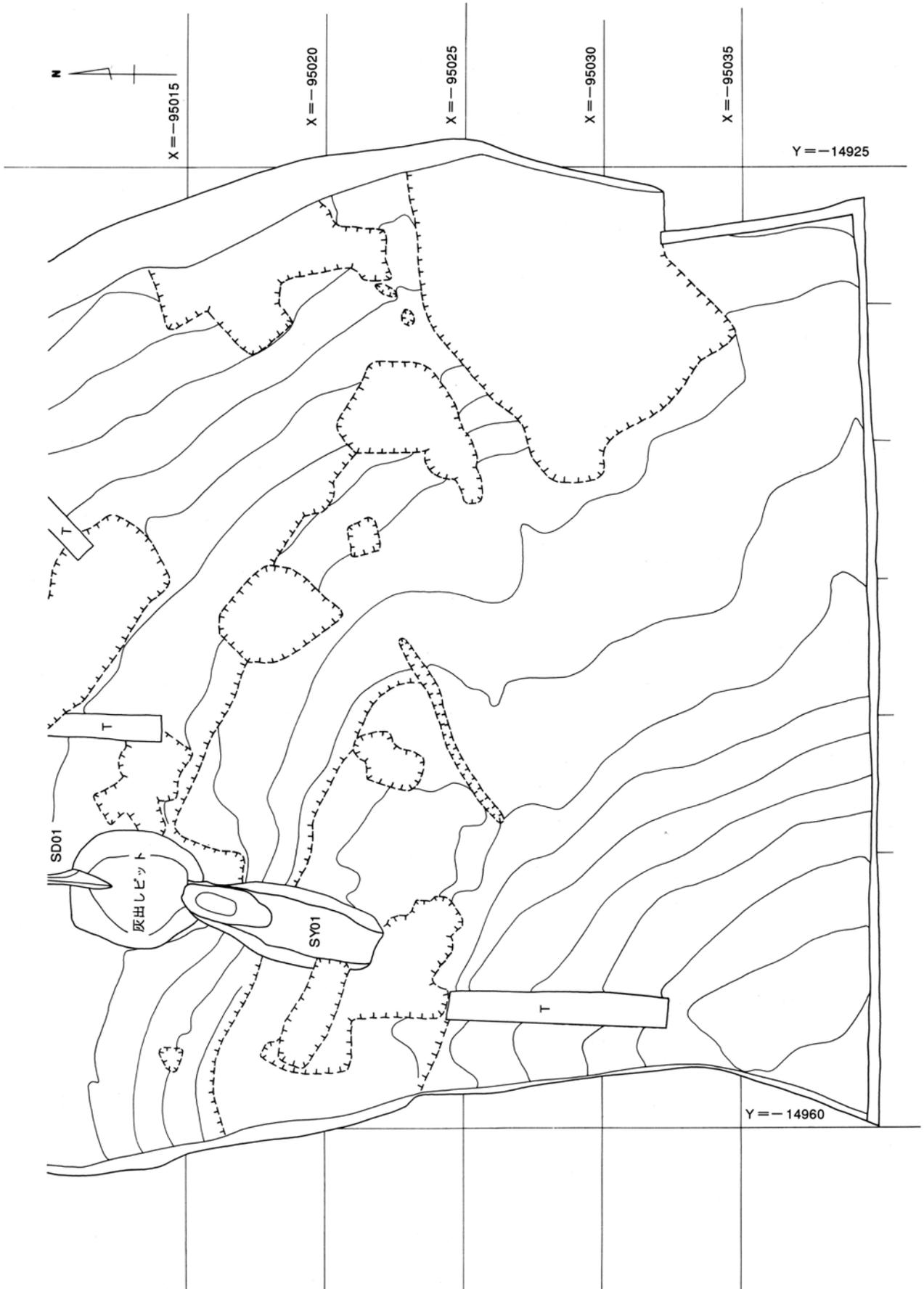


図 42 高針原 1 号窯調査区全体図 2 (1 : 200)

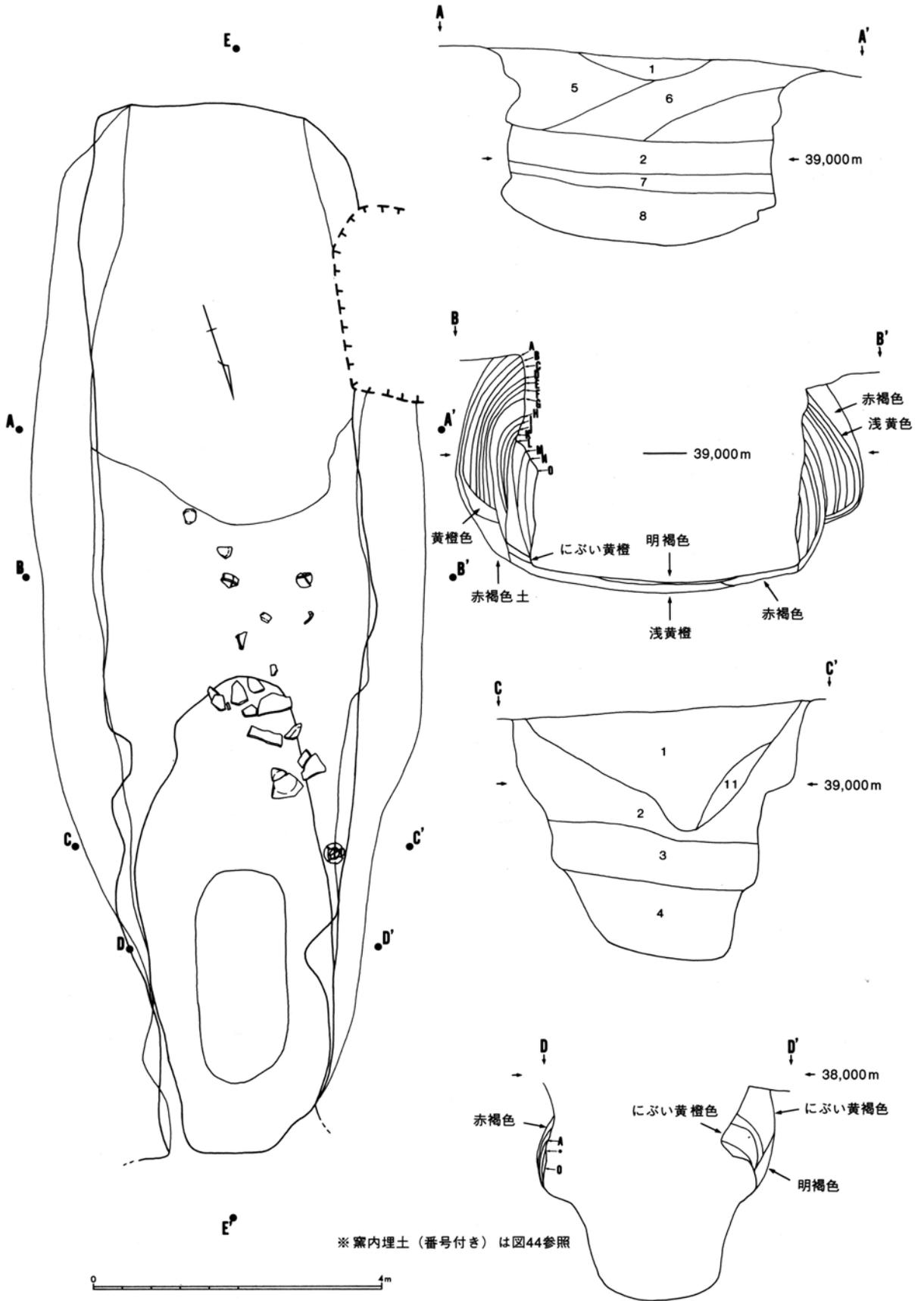


図43 高針原1号窠SY01 (1:100)

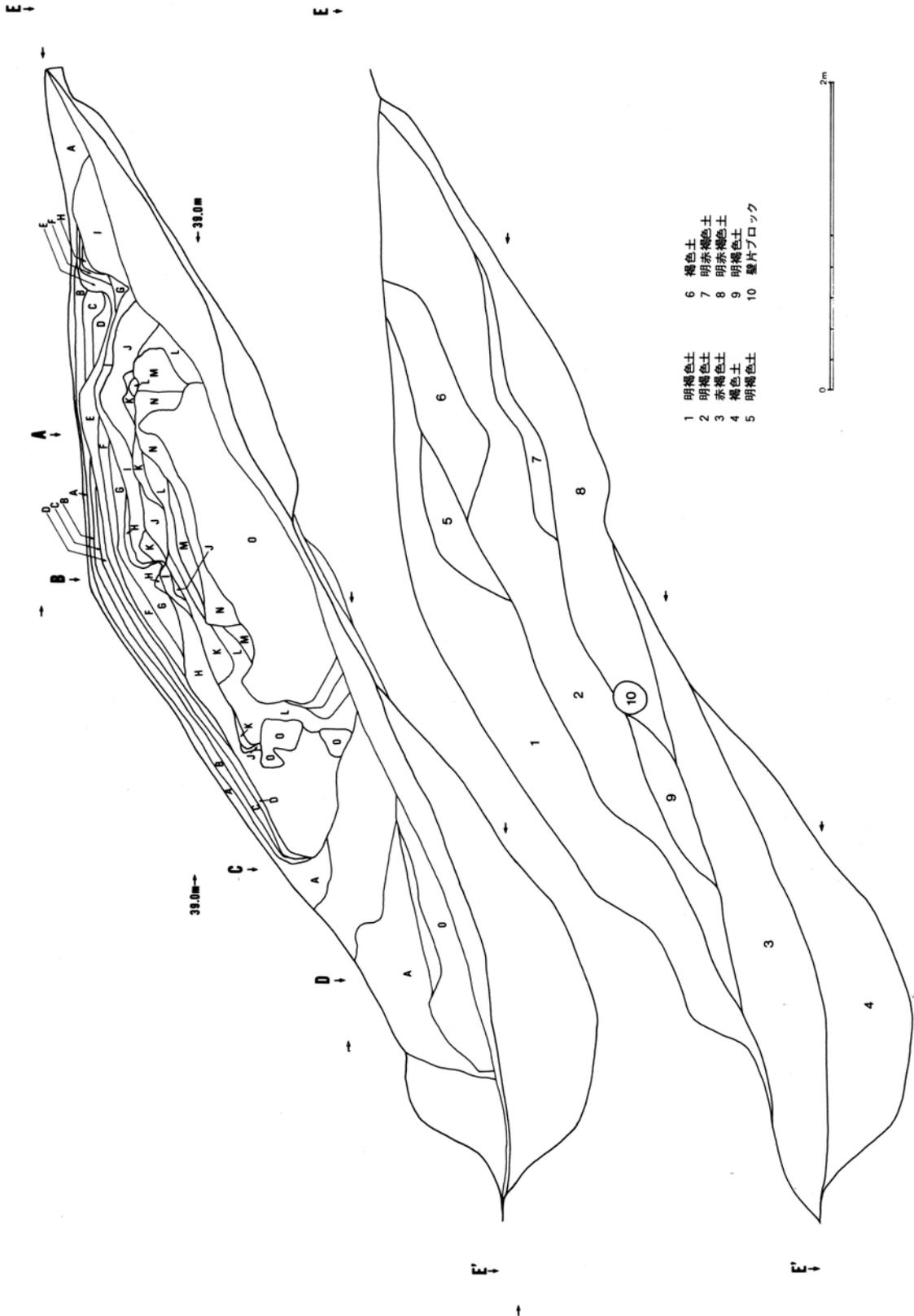


図44 高針原1号窯SY01左壁(1:40)

舟底ピットは、平面形が楕円形を呈する。規模は、長径 3.3 m、短径 1.4 m をはかる。壁面はほとんど被熱しない。埋土は窯内のそれとは異なるが、出土遺物には焼成室埋土の資料と接合するものもある。

焚口は、舟底ピットの下端部が該当する。幅は 0.8 m。

灰出しピットと前庭部は、焚口の前面に広がる。前者は、焚口前面の地山面を掘削して形成されたもので、平面が円形を呈する。底面積は 33.3 m² で、底部は岩盤を削平したものとなる。埋土は図 45 に示す。出土遺物には、須恵器（図 56 - 593 ~ 631）がある。後者は、灰出しピットの北側を取り囲むように設定されている。地山土を整地して、平坦面を得たもので、面積は、60.6 m² をはかる。中央には後述する SD01 が掘削されている。上面は灰原が覆う。

② SD01

SD01 は灰出しピット下方を起点とし、北方向に掘削された溝。幅 0.3 m、検出面からの深さ 0.3 m をはかる。全長 7.0 m を検出した。検出面は SY01 構築に関わる排土の上面からとなる。主軸の方位は N - 120° - E。埋土は、後述する灰層Ⅲ群で占められる。出土遺物には、須恵器（図 57 - 632 ~ 659）がある。

排水溝

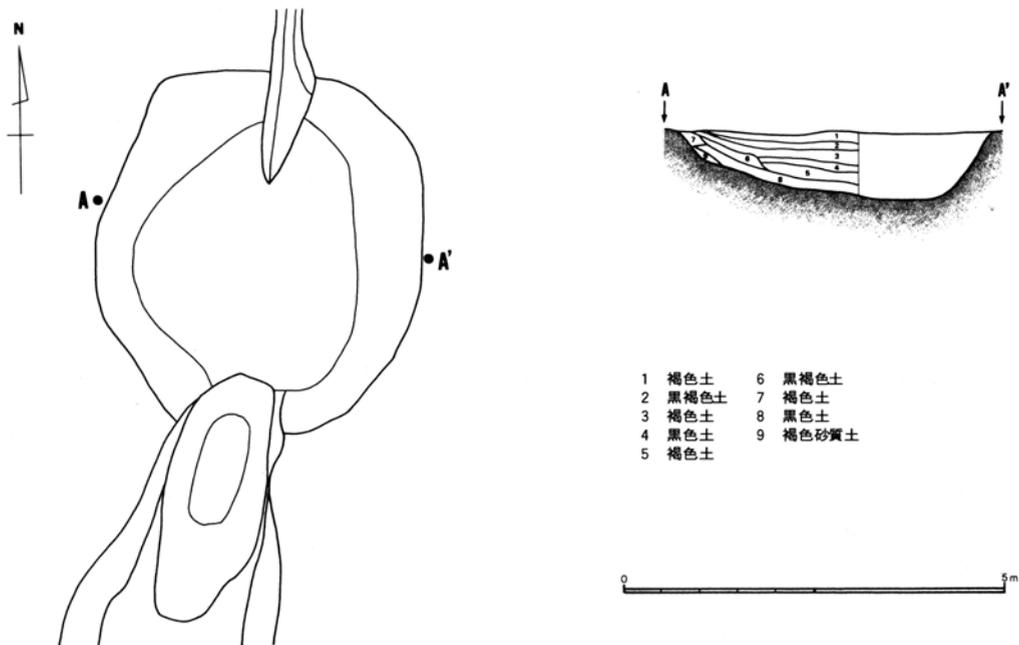


図 45 高針原 1 号窯 SY01 灰出しピット (1 : 100)

③ SD02

SD02は灰層Ⅱ群の上面を検出面とする溝。前庭部の北側を取り巻くように存在する。幅 0.7 m、深さ 0.3 mをはかる。全長 6.8 mを検出したが、一部は耕作などにより削り取られる。埋土は後述する間層と同一となる。帰属時期は特定できないが、灰層Ⅰ群や整地層に覆われていることから、SY01の操業期間中には含まれる。出土遺物には、須恵器(図 57 - 660 ~ 671)がある。

④ 土坑群

前庭部整地層の上面と、その外縁部に接するエリアで、土坑が確認されている。いずれも用途は不明で、大きさや形状には類似性がない。これらが、相互に有機的な関連性を持つか否かは不明だが、ここでは分布域が近接するという理由のみで、一括して土坑群として報告する。

検出できた土坑は、7基である。SK01、02、04が比較的大型で、SK03、05～07が小型となる。分布位置は、SD01の周辺部を中心とする。いずれも上面を灰層が覆う。

SK01は、SD01の末端部の西側約 2.0 mに存在する。平面形がやや不整形な土坑で、上面は灰層Ⅱ群下層が覆う。

SK02は、前底部整地層の末端部からやや北東にずれる。平面形が円形を呈する。

SK04は土坑群の西端となる。長軸が等高線と類似する。平面形楕円形の土坑となる。

SK03、05～07は、柱穴大の規模の土坑だが、いずれも柱痕は確認できない。

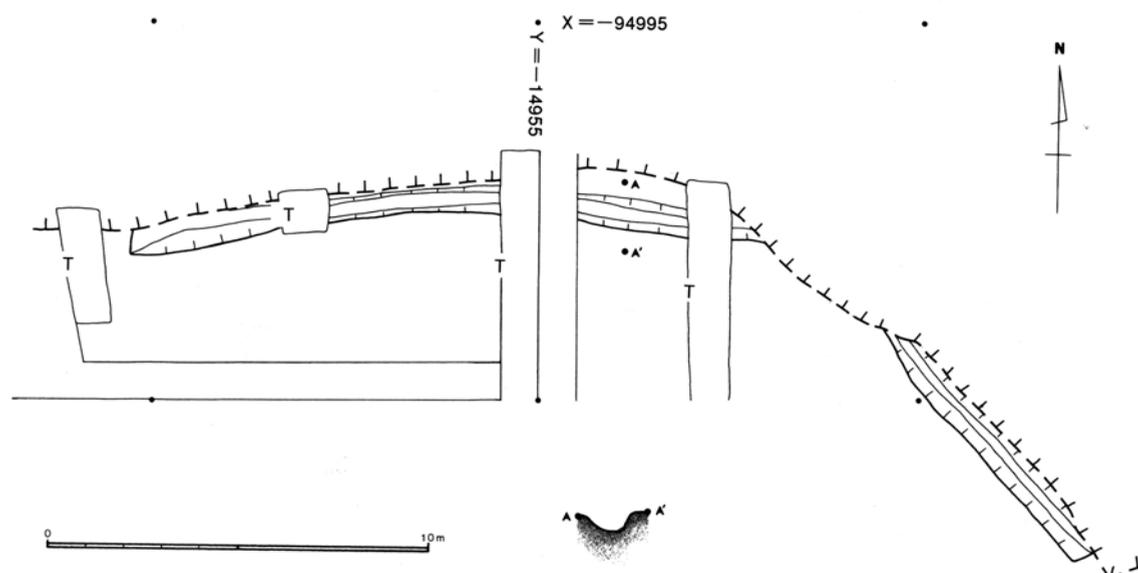


図46 高針原 1 号窯SD02 (1 : 200)

第 IV 章

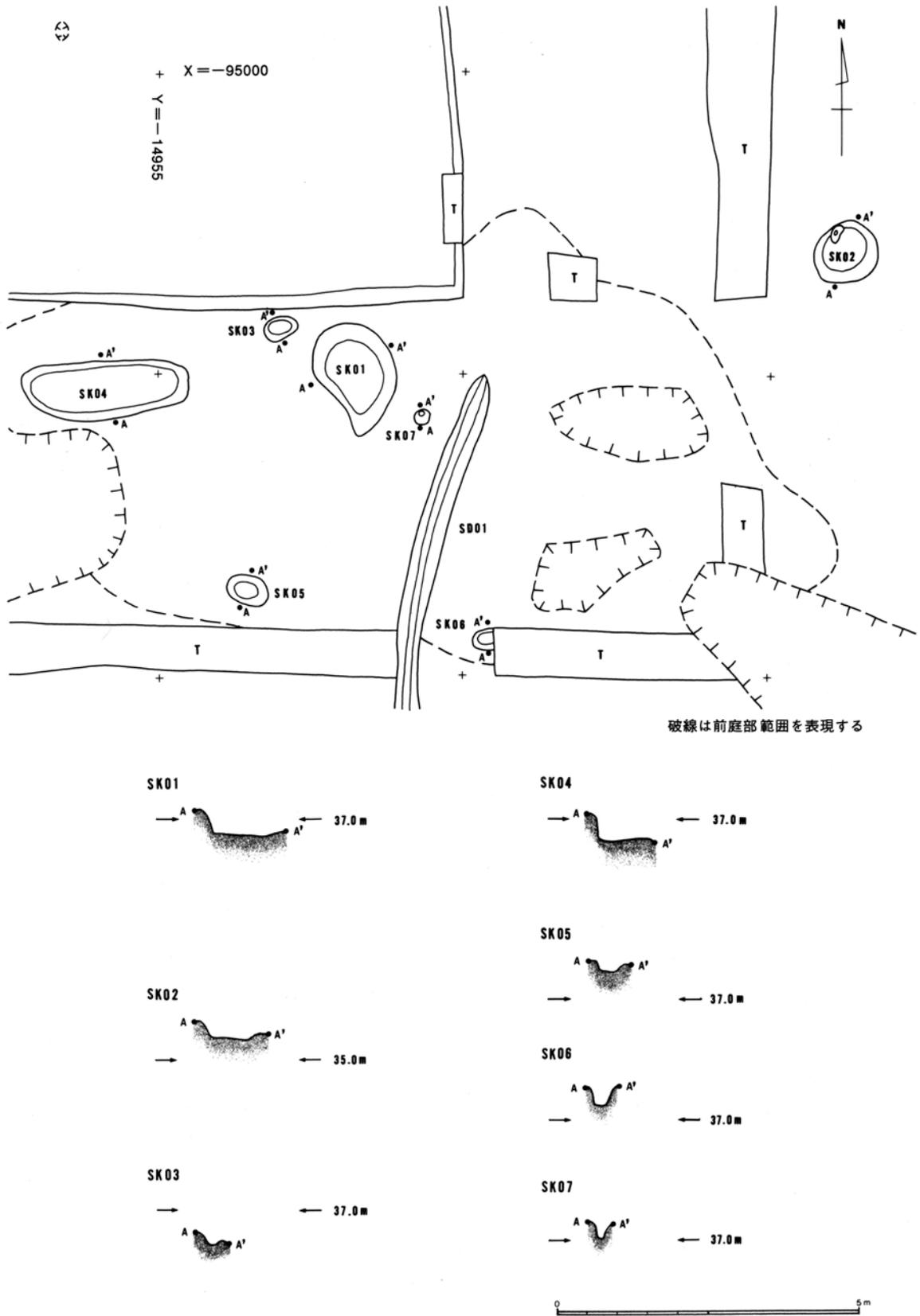


図 47 高針原 1 号窯土坑群 (1 : 100)

出土遺物は基本的に乏しいが、SK01には須恵器（図 57 - 672・673）がある。

⑤ 灰原

灰原は面積約 350 m²、最大残存高 2.0 m に及ぶ。4 つの灰層群と間層によって構成される。これらは、上記した窯体に伴うものと考えられる。灰原は、上面がほぼ全域にわたって 30～40 cm 程度攪乱されているほか、廃材などを埋めた攪乱坑がめだつ他、北側は耕作などによりカットされており、残存状況は良好とはいえない。

以下、これをまとめごとにより特徴を記述する。

灰層Ⅰ群

灰原の層序

厚みは数 20 cm 前後だが、灰原のほぼ全域に分布する。色調は明褐色。後述する間層の上面に堆積する。出土遺物には、須恵器など（図 58 - 674～727）がある。

灰層Ⅱ群

灰原のほぼ全域に分布する。前庭部の上面を覆う。今回検出した灰層のうち最大規模で、厚みは最大部分で 2 m を越える。上面には SD02 が掘削される。堆積状況により上層、中層、下層と区分できる。出土遺物には、須恵器など（図 59 - 78 - 728～1407）がある。

灰層Ⅲ群

灰原東部にのみ分布する灰層。色調は黒色。灰層Ⅱ群の上に堆積し、これを整地した再堆積層とも考えられる。出土遺物には、須恵器など（図 79 - 1408～1442）がある。

灰層Ⅳ群

灰原西部にのみ分布する灰層。色調は褐色。灰層Ⅱ群の上に堆積し、これを整地した再堆積層とも考えられる。出土遺物には、須恵器など（図 80 - 1443～1466）がある。

間層

灰層Ⅰ群とⅡ～Ⅴ群の間に堆積するもので、色調は淡黄色を呈する。灰原の東部が薄く西部が厚い。いわゆる地山再堆積層。SD02 の上面を覆う。出土遺物には（図 80 - 1467～1474）がある。

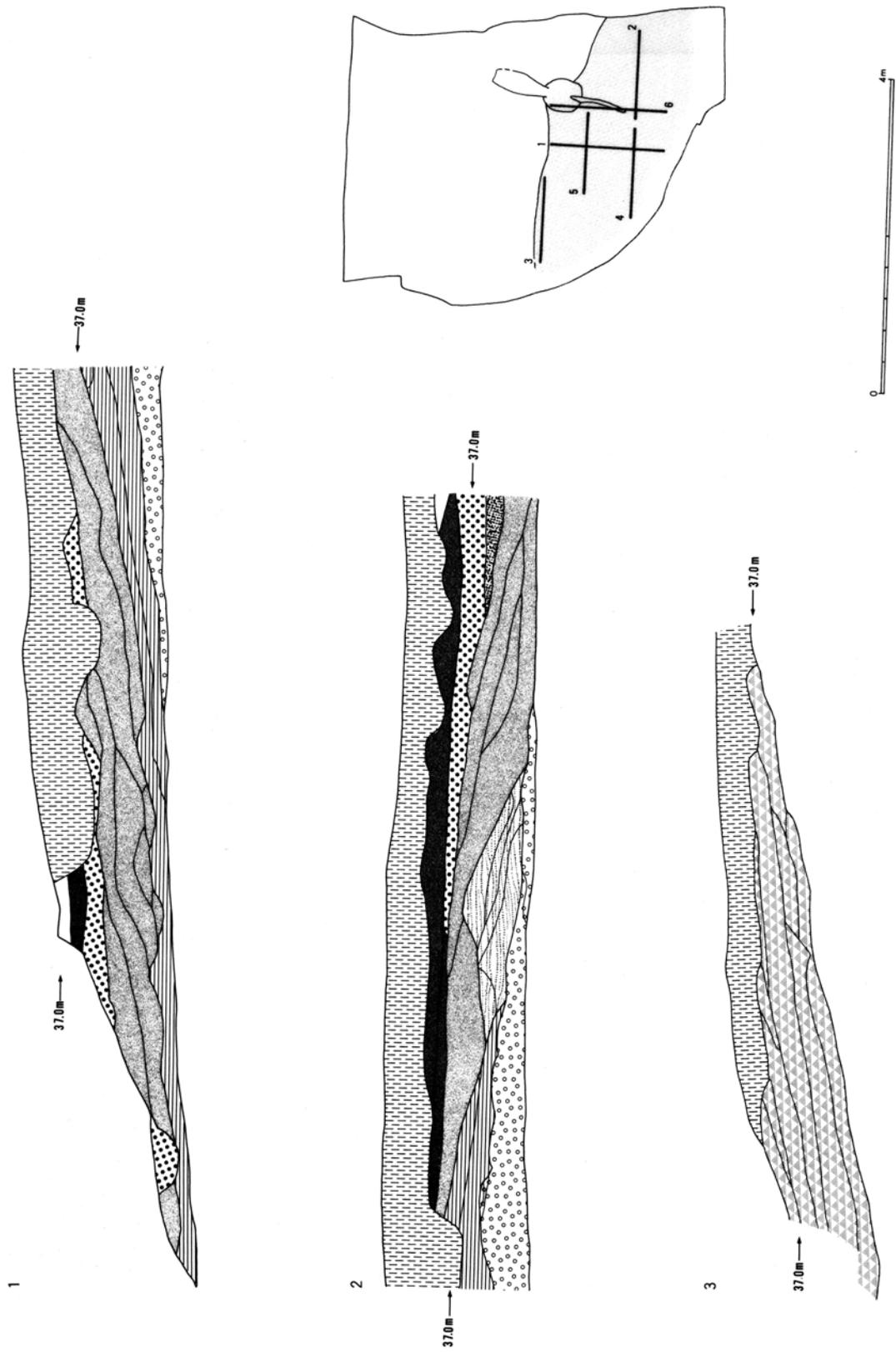


图 48 高針原 1 号窯灰原断面图 1 (1 : 80)

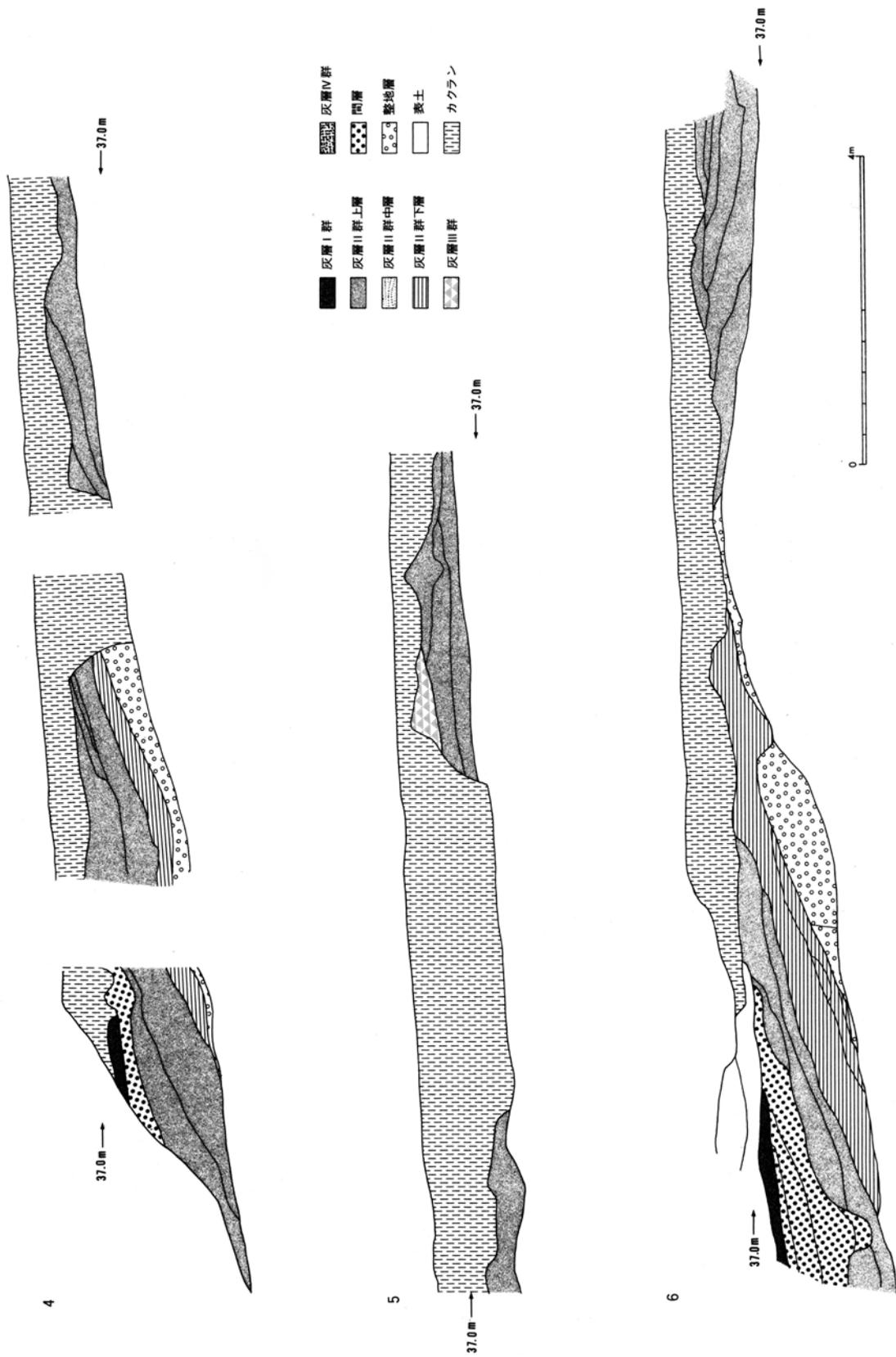


図 49 高針原 1 号窯灰原断面図 2 (1 : 80)

2 遺物

今回の出土遺物には、SY01の焼成品と考えられる土器類や、窯道具などがある。総量は、コンテナ 1000箱を数える。

以下、これらについて具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため、土器の種類と器種について事前に若干の整理を行う。

種類と器種

種類

種類としては須恵器、土師器などの土器と、その生産に使用した窯道具がある。

器種

出土遺物には、須恵器の器種として、杯類が6種、椀類が2種、高杯類が4種、盤類が3種、蓋類が5種、鉢類が5種、瓶類が10種、甕類が3種あり、土師器の器種として甕などがある。また、窯道具には棒トチ、焼台がある。

(1) 土器

① 須恵器の分類

以下、土器を出土位置別に報告する。なお、須恵器については煩雑になるため、事前に器種分類などを試みる。法量は巻末の付表を参照とする。

手法と技法・加飾法

ここでは記述の煩雑さを避けるため、本窯資料に認められる手法、技法、加飾法をまとめる。

手法

手法の分類

製作の手法にはさまざまな種類が認められる。整形手法と切り離し手法に特徴をみることが出来る。

整形手法

成形された器形を整える手法で、本窯では5つが代表的となる。回転ナデ調整、ナデ調整、ケズリ調整、タタキ整形、カキメ調整である。まず、回転ナデ調整は、回転を伴う通常のナデ調整。器面を平滑化する効果がある。ほとんどの器種に普遍的に認められる代表的な調整手法である。一部に工具の使用が認められるのかもしれない。次にナデ調整は、回転を伴わないナデを呼ぶ。やはり器面を平滑化する効果がある。前者ほど一般的ではな

いが、普遍的に認められる。やはり、一部に工具の使用が認められるのかもしれない。ケズリ調整は、端部が若干鋭利な形状の工具を使用する。ここでは使用する工具を「ヘラ」と呼称する。器面の乾燥が、ある程度進んだ段階で施される手法で、壁面を削り取る効果がある。なお、ケズリ調整は、回転を伴うか否かによって回転ケズリ整形、手持ちケズリ整形と区分する。前者は、ほとんどの器種に普遍的に認められる。また、タタキ整形は、タタキ具と当て具による通常のタタキ整形。器形の加工や器壁の均一化、成形時の接合部の強化などの効果がある。甕、横瓶など特定器種に特徴的。最後のカキメ調整は、板状の工具の小口などを使用した回転を伴う調整。器面を掻き取り平滑化する手法。平行する条線が特徴的。ケズリ調整と類似するが、器面の平滑化や微調整に重点をおくもので、これとは異なる。フラスコ形瓶、甕に使用される。

切り離し手法

整形終了後に、製品をロクロないし回転台から切り放す手法。本窯資料では3つが認められる。これを切り放し手法A～Cと呼称する。まず、切り離し手法Aはいわゆるヘラ切りを呼ぶ。ヘラを使用して、製品を回転させながらこれを切り離すもの。本窯では、小振りな器種に普遍的に認められる。次の切り離し手法Bは、いわゆる回転糸切りを呼ぶ。本窯では碗類と杯Bの一部に限定される。最後の切り離し手法Cは自然乾燥に伴い切り離しが完了するもの。本窯では大振りな器種に普遍的に認められる。外底部にはロクロないし回転台の天盤、あるいは現代の陶工が使用する亀板に類似するような整形台の圧痕を未調整で残す。切り離し面の多くは、離れ材として使用した砂粒の圧痕を残すが、まれにこれが木葉痕である場合もある。

技法

特定の調整を、一定の約束で組み合わせた一連の手順を呼ぶ。本窯では以下の特徴的な技法が確認できる。

技法の分類

端部調整技法

端部調整に関わる技法は3つに分けられる。これを端部調整技法A～Cと呼称する。まず、端部調整技法Aは、本窯では最も一般的なもので、回転ナデ整形により口縁部を引出し、丸く整える技法である。例えば、なめし皮のような柔軟性をもつ器具を、補助的に使用しているのかもしれない。端部の形状が単純なものを1類、短く外反するものを2類とする。次の端部調整技法B類は、やはり回転ナデ調整の組合せによる技法である。端部を、外側から押えてフラットにした類。そのまま肥厚せずに端部を形成する類を1類、上方（または下方）に若干引き出す類を2類、縁帯となる類を3類とする。最後の端部調整技法C類は、端部付近の一面に稜を付ける技法である。口縁端は端部調整技法B類となる。

端部の技法

底部調整技法

底部調整に関わる技法は4つに分けられる。これを底部調整技法A～D類と呼称する。まず底部調整技法A類は、小形品に特徴的。切り離し手法A類による底部を回転ケズリ調整で整えたものと呼ぶ。次に底部調整技法B類は、切り離し手法B類に伴うもので、底部の周縁部分に調整を加えるものと呼ぶ。手持ちケズリ調整を加えるものを1類、回転ケズリ調整を加えるものを2類とする。底部調整技法C類は、甕Aに特徴的となる。切り離し手法C類で製作された底部を、半乾燥の段階で、タタキ整形によって丸底あるいは疑尖底に加工する技法(西 1986)。最終段階には、螺旋状にカキメ整形をラフに加えるものと呼ぶ。底部整形技法D類は、やはり切り離し手法C類に伴うもので、底部の周縁部分や体部下方にケズリ調整を加えるものと呼ぶ(西 1986)。

頸部三段接合技法

台付長頸瓶のような、体部と頸部の径の差が大きい器形や、平瓶やフラスコ形瓶のように同一方向の回転体でない器形は、体部からの連続整形が困難となる。このため通常では体部と頸部を別作りにして、これらを接合する方法がとられる。この作業は、整形時に内面調整を施すため、残った整形穴の処理と、頸部に接合孔を設定する作業に区分できる。なお、前者の器形は整形穴と接合穴が同一位置にある。ただし整形穴の方が大きく、粘土板により整形孔を閉塞し、小乾燥を経て接合穴が設定されている。一方、後者の器形では、整形孔を閉塞し、接合穴を別地点に設定する。これらの手順には粘土板の使用が特徴的で、三つの部位で頸部と体部を接合して器形を完成させている。これを頸部三段接合技法と呼ぶ。

穿孔部強調技法

ハソウにのみ認められる技法。器面の小乾燥の後、穿孔部の下方に粘土帯を貼付して強調するもの。強調部はナデ調整で整えられる。後述の組合せ文A類による文様帯と重なり、その一部を消す。

青海波ナデ消し技法

タタキ整形の外面をそのままに、内面の当て具の痕跡をナデ整形で消すもの。本窯では、タタキ整形のほとんどがこの技法となっている。

修飾

本窯では黄土塗布と施文がある。

黄土塗布

黄土ハケ塗り

鉄分を多く含む、いわゆる「黄土」をハケにより塗布する作業。焼成が良好であれば、

漆黒色の仕上がりとなる。塗布部分が内面にも及ぶため、これに装飾効果を認めるのは論議もあろうが、一応ここに含めて考える。甕、平瓶、盤などの特定器種に確認できる。

文様

文様には沈線文、スカシ文、クシカキ文と、組み合わせ文がある。

文様の分類

沈線文

先端が尖る棒状器具を原体とする直線文。単独で施される場合も多いが、頸部、脚部など柱状となる部位には二本一組みの沈線文で加飾することが多い。これは特に二重沈線文と呼称する。

スカシ文

一段と二段があり、後者は二重沈線文と組み合わせられる。高杯の脚部に特徴的。

クシカキ文

伝統的文様で直線文、波状文、刻目文、オシビキ文、環状刻目文がある。

組み合わせ文

種類を異にする文様を一定の法則で組み合わせるものを呼ぶ。本窯では3つのパターン
の組合せ文が認められる。組合せ文A～C類とする。組み合わせ文A類は沈線文を横方向
に間隔を開けて施し、ここに文様を充填する。充填文は原体をクシによる。台付長頸瓶、
ハソウに特徴的である。次の組合せ文B類は、組合せ文A類を積み上げるものを呼ぶ。沈
線文または二重沈線文を一定間隔で施し、それぞれにクシを原体とした文様を充填するも
の。充填文が各文様体に一段のみのものをB1類、二段確認できるものをB2類とする。
最後の組み合わせ文C類は二段のスカシ文と二重沈線文の組み合わせである。

器種分類

本窯の須恵器を形状をもとに、上記の調整と技法、文様などを考慮しながら器種分類を
試みる。

蓋類

口縁部が下方にあり、天井部を持つ形状。大半が杯とセットを成す。天井部には底部調
整技法C類が観察できる。

蓋類は、口縁部の形状に注目し、8類に分類する。

第 IV 章

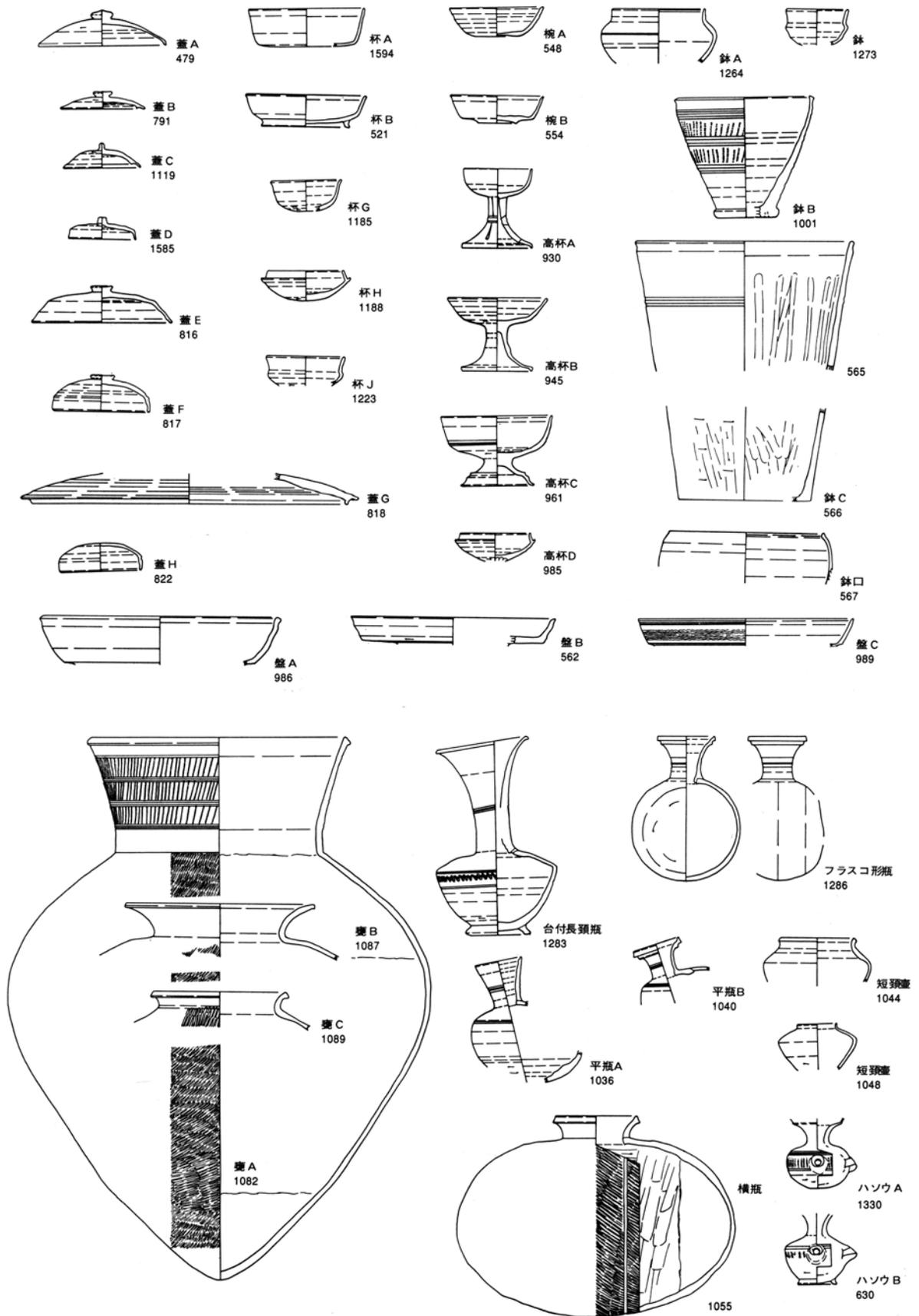


図 50 高針原 1 号窯器種分類図

蓋の分類

蓋A

基本的には杯Bの蓋。大、中、小に区分できる。天井部には宝珠鈕を持ち、ここから丸みを帯びて口縁部に至る。口縁部は、端部調整技法B2類により、短く屈曲して縁帯を形成する。法量により大、中、小に区分できる。

蓋B

基本的には杯Gの蓋。全体に小振りな器種で、蓋Aの小形とほぼ同一法量である。全体に蓋Aと類似するが、口縁部内面に突帯が巡り、かえり部を形成することが特色となる。端部は端部調整手法A1類による。口縁部とかえり部の接地状況に着眼すると、前者が接地して後者が接地しないもの、双方接地するもの、前者が接地せず後者が接地するものに区分できる。

蓋C

全体に蓋Bと類似する。数量は乏しい。天井部の鈕が円筒形となる。蓋Bに比較して、器高がやや高いことが特色。天井部で鈍く屈曲する体部と、かえり部から口縁部までがやや長い。

蓋D

数量は乏しい。円筒形の鈕と、口縁部付近で屈曲して端部を形成する体部を持つ。

蓋E

数量は乏しい。器高は高く、天井部で鈍く屈曲する。

蓋F

数量は乏しい。蓋Hの天井部に宝珠鈕が付くもので、小片ではこれと判別が困難となる。有蓋高杯の蓋。

蓋G

数量は乏しい。超大型の蓋をまとめる。法量や一部に黄土塗布も確認できることから盤の蓋である可能性が強い。

蓋H

杯Hの蓋である。杯Hを天地逆にし、かえりを小さくした形状。

杯類

器高が低い偏平な器種を呼称する。外底部は基本的に底部調整技法Cによる。

第 IV 章

- 杯 の 分 類** 杯類は、体部などの形状の特徴から5類に分類する。
- 杯A**
平底の杯をまとめる。基本的には無蓋。
- 杯B**
高台を有する杯をまとめる。基本的には有蓋。蓋Aとセットか。一部に切り離し手法Bが確認できる。
- 杯G**
丸底の杯をまとめる。杯Aとの区別が不鮮明となるが、概ね小振りで体部に丸みを帯びる。基本的には有蓋。蓋BまたはCとセットか。
- 杯H**
いわゆる杯蓋。かえりをもつもので、丸底。有蓋で、古墳時代以来の伝統的器種。杯Hとセットとなる。
- 杯J**
杯Hによく類似するが、受け部が外側に突出しないもの。鉢A、短頸壺と類似し、一部区分がこれと不鮮明となる。無蓋か。
- 椀 の 分 類** **椀類**
体部に丸みを帯びた平底で、外底部に切り離し手法Bの痕跡を無調整で残すものをまとめる。底部はやや突出する。周囲にのみ、手持ちケズリ調整を施す例もある。
椀類は、腰部の形状に注目して、2類に分類する。
- 椀A**
腰部に丸みの強いものをまとめる。
- 椀B**
腰部に稜を持つものをまとめる。
- 高杯の分類** **高杯類**
高い脚部に、杯部が付く器形を呼称する。杯部の外面下方には、底部調整技法Cが観察できる。
高杯類は、主に杯部の形状に注目して、4類に分類する。

高杯A

杯部が杯H蓋を天地逆としたもの。杯部は細部までこれと類似し、小片ではこれと判別が困難となる。脚部は、杯部との接合部付近では柱状となる。この部分に穿孔によるスカシを付ける場合もある。一部は組み合わせ文C類となる。スカシは通常上下二段。これを対角線上に二か所設定するが、これが三か所となるものもある。なお、本窯では、上段のスカシが内面まで到達せず、外面に切り込みとして存在するものが多い。裾部は端部調整技法B2類による。

高杯B

杯部は前述の杯AあるいはG。杯部は細部までこれと類似し、小片では判別が困難となる。脚部は上方が柱状に発達せず、ここにスカシは確認できない。法量により大、小に区分できる。裾部は、端部調整技法B2類による。

高杯C

杯部が深く、丸みを帯びる類をまとめる。脚部は杯部に比較すると低く、裾部で屈曲する。法量により大、小に区分できるが、前者は一部にスカシが確認できる。端部は、端部調整技法C類による。

高杯D

数量は乏しい。有蓋高杯で、杯部が杯Hと同様。脚部は残存例がないが、高杯Aの脚部と判断したものに、これが混在している可能性も考えられる。

盤類**盤の分類**

皿状を呈する。偏平で一般的には大口径となる。基本的には黄土を塗布し、底部調整技法B類による底部を持つ。

盤類は、底部の形状に注目して、3類に区分する。

盤A

無台で平底の盤をまとめる。

盤B

脚を持つ盤をまとめる。法量により大、小に区分できる。

盤C

高台を持つ盤をまとめる。杯Bの口径を拡大した形状。有蓋か。

第 IV 章

鉢の分類

鉢類

体部は、底部からほぼそのまま口縁部に至る単純な器形を呼ぶ。口径が広く深手となる。鉢類は、体部や口縁部の形状に着眼して、4類に区分する。

鉢A

短頸壺に類似した直立する短い口縁部を持つ。ただし口径が広い。法量により大、小に区分できる。杯Jや短頸壺と類似し、一部区分がこれと不鮮明となる。

すり鉢・陶臼

鉢B

極端に厚く特徴的な底部を持つ。体部は直線的。口縁部は端部調整技法B1による。すり鉢とか陶臼と呼称される器種。

鉢C

いわゆる甌で、体部がバケツ状を呈する。底部に穿孔が施される。

磁鉢

鉢D

磁鉢ないし鉄鉢形土器と呼称されているもの。体部は丸みを帯び、口縁部付近で内彎する。口縁部は端部調整技法B1あるいはB2類。体部に沈線文を施す資料も含まれる。法量により大、小に区分できる。

壺・瓶の分類

壺・瓶類

いわゆる袋物のうち、頸部の細いものを呼称する。形態の特徴から6類に分類する。

台付長頸瓶

肩部で大きく屈曲する体部と、頸部から、直線的に開く長い口縁部を持つ。体部と頸部は、頸部三段接合技法による。肩部は稜を持って屈曲し、その直下に組み合わせ文Aを刻むことが多い。底部にはがっしりとした高台がつく。

フラスコ形瓶

偏平な球形の側面に細く短い口縁部がつく器形を呼称する。回転体ではない。体部と頸部は、頸部三段接合技法による。なお、肩部に粘土紐による把手が付く例や、底部に高台を付ける例もある。

フラスコ形瓶は口縁部の形状から2種に区分する。フラスコ形瓶Aは、口縁部に端部調整技法Cによる低い突帯が付く類である。また、フラスコ形瓶Bは、口縁部に、端部調整技法B1により縁帯を形成するものを呼ぶ。

平瓶

やはり回転体ではない。口縁部が中心からやや外れた位置に斜めに付くのが特徴的。切り離し手法Aが観察できるが、多くは回転ケズリ調整によりこれを整える。天井部には断面方形の粘土板による把手が付く例も認められる。

平瓶は口縁部の形状から2類に区分する。平瓶Aは口縁部が頸部から直線的に開く類。本窯出土の平瓶のほとんどがこれに含まれる。平瓶Bは、口縁部が端部調整技法B3類により縁帯を形成するもの。頸部は短い。数量は乏しい。なお、体部の形状に着眼すると、丸底の扁平球形と、平底の円柱形状に区分できる。両者は、底部の形状にも差異が認められ、前者は底部調整技法C類、後者は底部調整技法B類による。しかし、全形を伺える資料が乏しいため、器種細分の視点とはしていない。

短頸壺

短く直立する口縁部を持つものをまとめる。法量により大、小に区分できる。なお、前者には肩に耳部を四か所貼付するものもある。杯J、鉢Aと類似し、一部区分がこれと不明瞭となる。

横瓶

体部の側面に短い口縁部がつく器形を呼称する。体部は俵形で、器壁は厚い。体部と頸部は、頸部三段接合技法による。体部は、全面青海波ナデ消し技法。黄土塗布も確認できる。

横瓶は口縁部の形状から2類に区分する。横瓶Aは、口縁部に端部調整技法C類による低い突帯が付く類。横瓶Bは、口縁部に、端部調整技法B3類により縁帯を形成するものを呼ぶ。

ハソウ

体部中央の8mm前後の穿孔が特徴的な器種。円形または楕円形の体部と、細い頸部から大きく開く口縁部を持つ。頸部は、体部との接合部分が細い。口縁部付近で屈曲して、受け口状をなす。体部は、球形または卵形で、肩部がやや張る。最大径付近には組合せ文B1類を施す。穿孔は、文様帯中央部に位置する。全て穿孔部強調技法による。底部は底部調整技法C類。

ハソウは高台の有無で2種に区分する。ハソウAは、無高台のもの、ハソウBは有高台のものである。

甕類

いわゆる袋物のうち、頸部の太いものを呼称する。大形品。頸部外面下方を中心に黄土塗布が一般的となる。

甕の分類

第 IV 章

甕類は、口縁部の形状から、さらに3類に区分する。なお、全形を伺える資料が乏しいため、器種細分の視点とはしていないが、底部の形状に着眼すれば、丸底と平底に区分できる。前者が底部調整技法A類、後者は底部調整技法B1類。

甕A

大振りの器形。形態は、卵形の体部に大振りな口縁部が付く。口縁部は緩やかに外反し、端部は端部調整技法B3類となる。体部は丸味を帯び、青海波ナデ消し技法。器壁は厚く10mm前後をはかる。頸部は、内外面ナデ調整。頸部下部外面には組み合わせ文B類が認められる例もある。

甕B

全形が判明する資料を得ていない。数量は乏しく、体部の形状は不明。甕Aと類似するの。口縁部は短く外反し、端部は丸く縁帯を形成しない。端部調整技法A類による。

甕C

小振りの甕。やはり全形が判明する資料を得ていない。数量は乏しく、体部の形状は不明。甕Bと類似するの。口縁部は短く、端部は端部調整技法B1類またはC類による。一部は鉢Aと類似し、区分がこれと不明瞭となる。

その他の器種

そのほかの器種

上記以外の形状を、そのほかの器類としてまとめる。

以下のものについて、器種が判明している。

円面硯

全形が判明する資料を得ていない。杯Bを、天地逆にしたような形状。上面は中央が突出し、いわゆる海部と陸部に区分される。側面には、スカシを設定している。

陶管

やはり全形が判明する資料を得ていない。円筒形の大振りの器種。外面に黄土塗布が確認できる。

陶錘

紡錘形を呈する陶錘。

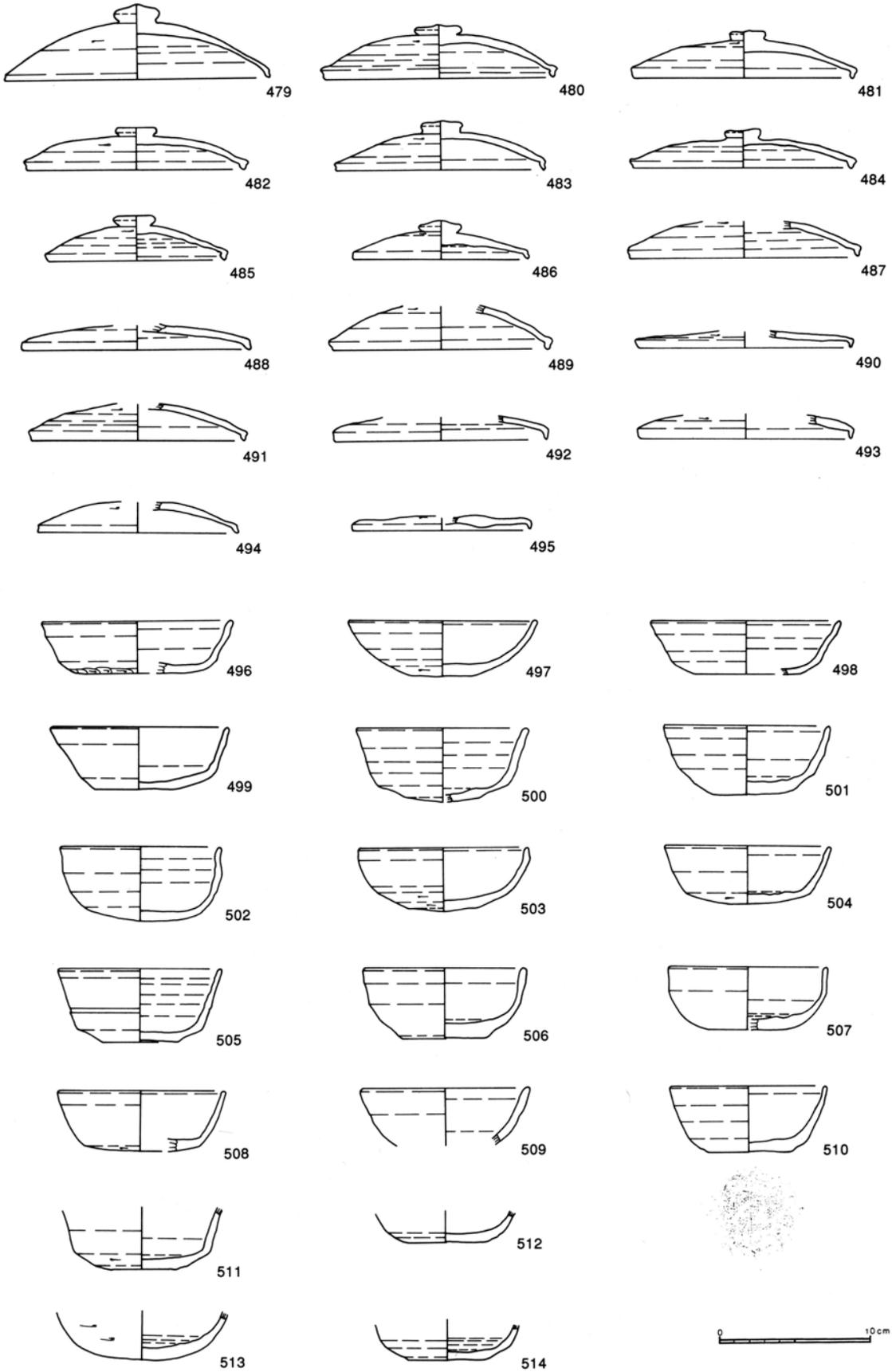


图 51 高針原 1 号窯出土遺物 1

② 須恵器

SY01資料 SY01 (図51～55—479～592)

図示した器種には蓋A、杯A・B、椀A・B、高杯B、盤A～C、鉢C・D、横瓶B、甕Aなどがある。なお、壁面改修時の貼り土中からは、杯Hも出土している。

479～495は蓋A。479～484、487、488、489、491、494は焼成不良となる。487～495は鈕を欠く。鈕は、低くつぶれた宝珠形を基本とするが、479はややこれが高い。後述する細分によれば、493が1類、488、490～492、494、495が2類、479～487、489は3類となる。

496～543は杯。498、500～502、505、506、509、511、514は焼成不良となる。502はひずむ。

496～514は杯A。511～514は口縁部を欠く。腰部に張りを有する小型品が多い。外底部は、底部調整技法C類を原則とするが、496、498は底部調整が、手持ちケズリ調整となっている。また、499～502、505、510、511は、切り離し手法C類のまま、調整が観察できない。なお、505は体部に二重沈線文を施す。

515～543は杯B。539～541は底部を、542、543は口縁部を欠く。法量により大型（口径17.0cm程度）、中型（口径15.5cm程度）、小型（口径13.5cm程度）と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形で、外側にやや張り出す。次に底部の状況に着眼すると、529、538、542、543は外面の回転ケズリ整形が若干ラフとなり、中央に直径数mm程度の範囲のみ、切り離し手法B類の痕跡が確認できる。基本的には底部調整技法B2類によるのか。なお、524、528、541は口縁部直下の外面に沈線文を施す。

544～556は椀。544、548、550～552、555は焼成不良となる。549、553はひずむ。

544～549は椀A。腰部に張りを有する形状。法量はほぼ類似する。549は口縁部に素地補修が確認できる。

550～556は椀B。555、556は口縁部を欠く。法量は、ほぼ類似するが、556のみ大振りとなる。腰部の屈曲は、550、551が明瞭、555は鈍い。

557、558は高杯B。557は焼成不良となる。558はひずむ。557は腰部に丸みを帯びた杯部と、やや太い脚部を持つ。558は脚部を欠く。杯部は、やはり腰部に丸みを持つ。

559～564は盤。563は焼成不良となる。564はひずむ。

559、560は盤A。いずれも器壁は厚い。口縁部は560が端部調整技法A1類、559が端部調整技法B1類による。

561～563は盤B。563は口縁部を欠く。561は全形が判明する。脚部は外側に直線的に伸びる。杯部に比較して器壁が薄い。端部は端部調整技法B3類による。

564は盤C。体部はひずむ。みこみに粘土板による十文字の仕切り部を持つ。仕切り部はラフなナデ調整で仕上げる。黄土塗布が顕著。

565～568は鉢。565、566は焼成不良となる。

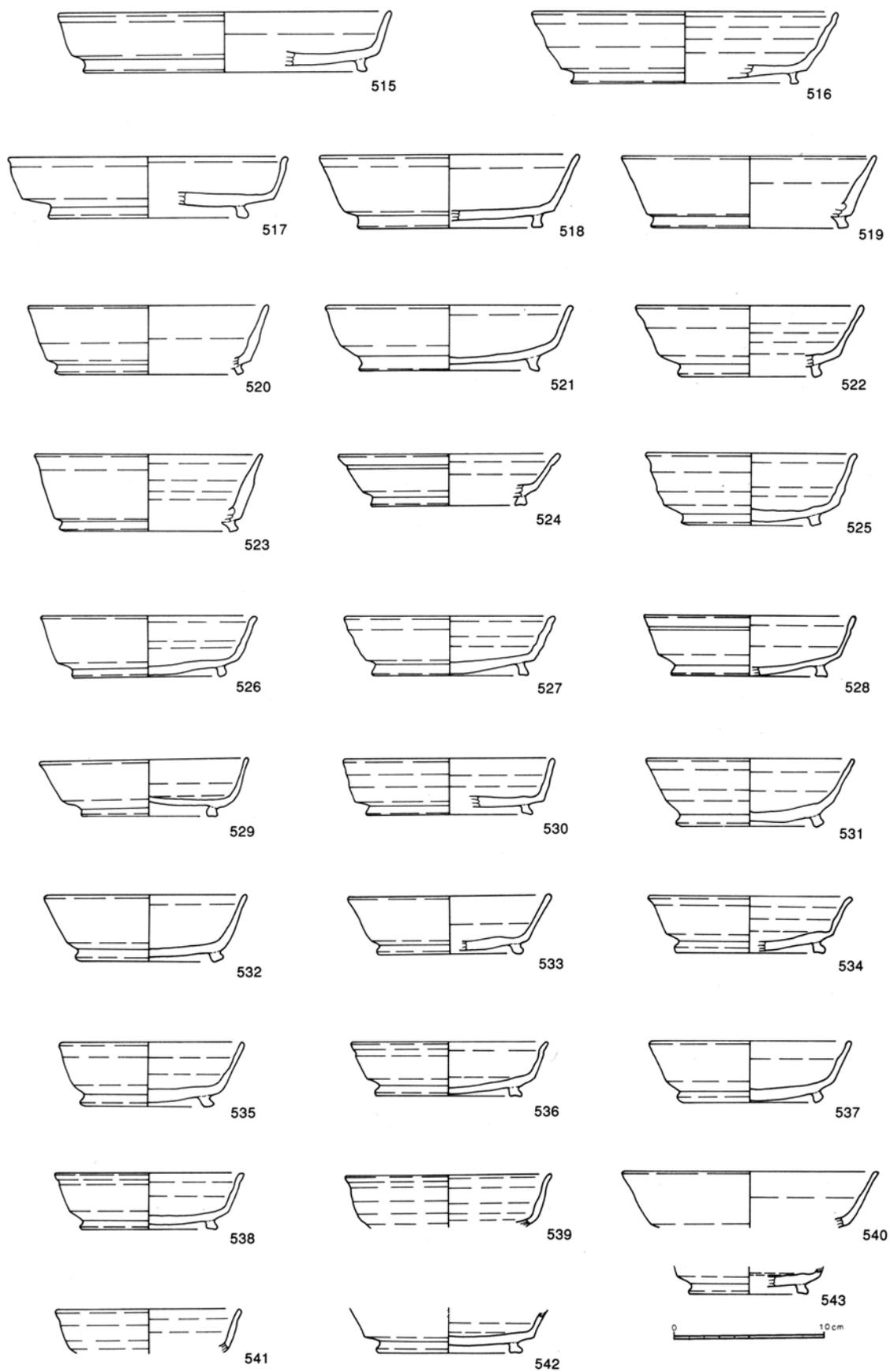


图 52 高針原 1 号窯出土遺物 2

565、566は鉢C。体部は直線的となる。565は外面に二重沈線文を施す。

567、568は鉢D。いずれも口縁部片。体部は丸みを帯びる。568は体部最大径付近に沈線文を施す。外面に黄土塗布の可能性を持つ。

569～576は壺・瓶。574～576はひずむ。

569は平瓶。肩部がやや張る形状。体部は丸みを帯びる。平底で底部調整技法C類による。

570～572、575、576は短頸壺。570～572、575は体部下方を欠く。570～572は小振り。肩部のやや張る形状。口縁部は、570、571が端部調整技法B 1類、572が端部調整技法A 1類。

575、576は同一個体。大振りで短く直立する口縁部を持つ。体部は青海波ナデ消し技法による。後者はややひずむ。平底で、底部調整技法B類による。571は体部最大径付近に沈線文を施す。572は肩に、細くて短い線刻を、弧状に並べる。

573、574は横瓶。前者は全形が判明する。いずれも横瓶B。頸部は短い。口縁部は端部調整技法B 2類による。体部は、長径方向で観察すると、最大径付近がやや尖り気味。短径方向ではこれが球形となる。頸部から沈線文を巡らす。574は口縁部片。頸部は太い。口縁部は端部調整技法B 3類による。

577～585は甕。583は焼成不良となる。

577～582は甕A。いずれも、頸部には組み合わせ文B 1類が確認できる。充填文は、577が刻目文、578、579はオシビキ文、580～582が波状文となる。583～585は底部。全て平底となる。底部調整技法B 1類を原則とする。585は、外底部に木葉による圧痕が観察できる。

586、587は舟底ピット資料。いずれも蓋A。586はひずむ。587は鈕を欠く。

588～592は、壁面の貼り土から出土した資料。588、589は杯A。590は杯H。591は蓋H。後述する細分によれば、3類となる。592は平瓶か。平底となる。

灰出しピット
資 料

灰出しピット (図56－593～631)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A・B・H、杯A・B、高杯B、鉢A・B・D、平瓶B、ハソウB、甕Cなどがある。

593～599は蓋。596はひずむ。

593～595は蓋A。593、594は器高が高い。鈕は低くつぶれた宝珠形となる。後述する細分によれば、594、595が1類、593が3類となる。

596は蓋B。鈕はボタン状。口縁部とかえり部の位置関係は、ほぼ同位置。

597～599は蓋H。いずれも口縁部の小片で、天井部を欠く。後述する細分によれば、597、598が2類、599が3類となる。

600～622は杯。600、605は焼成不良となる。618はひずむ。

600～603は杯A。

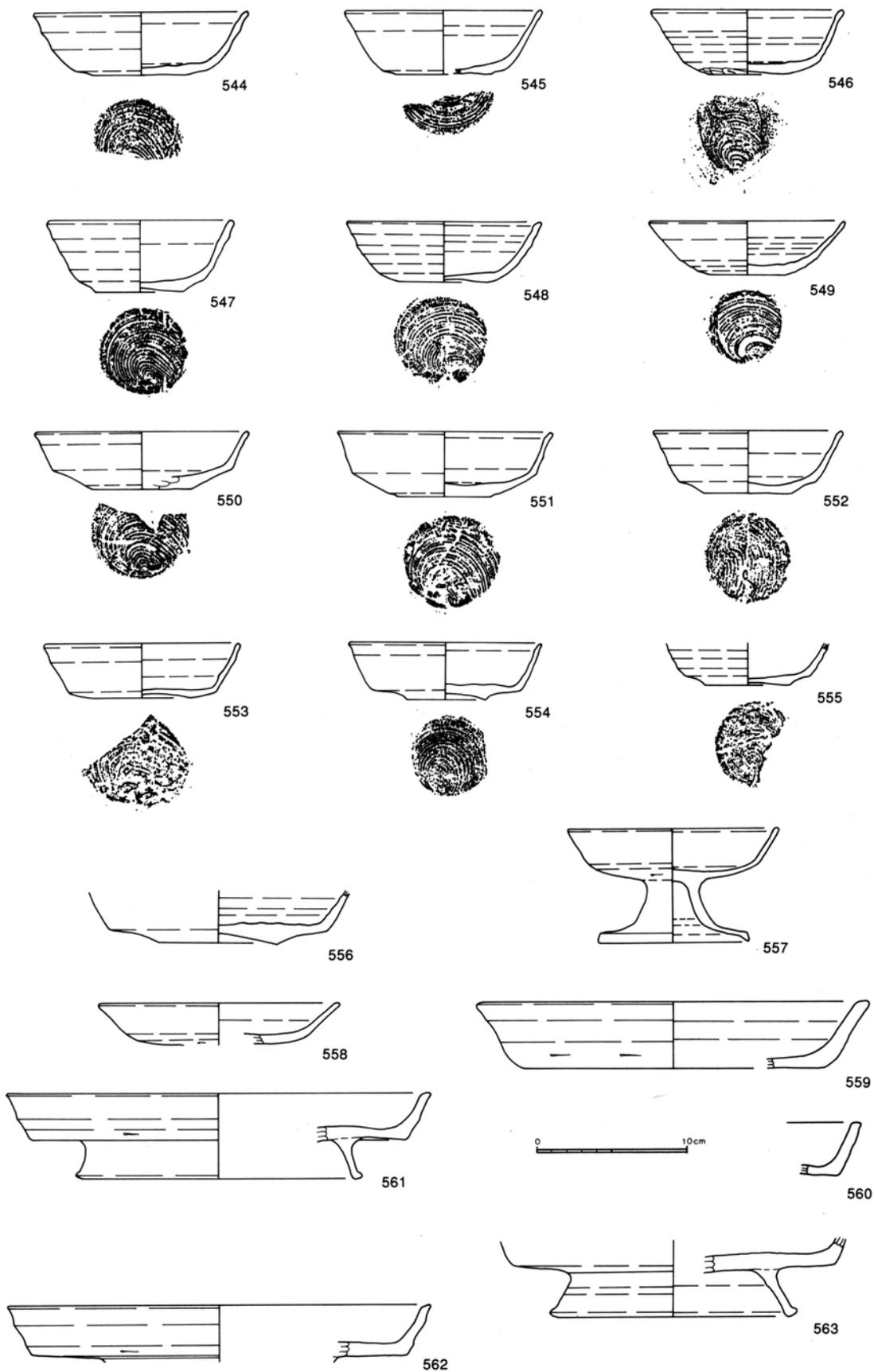


图 53 高針原 1 号窯出土遺物 3

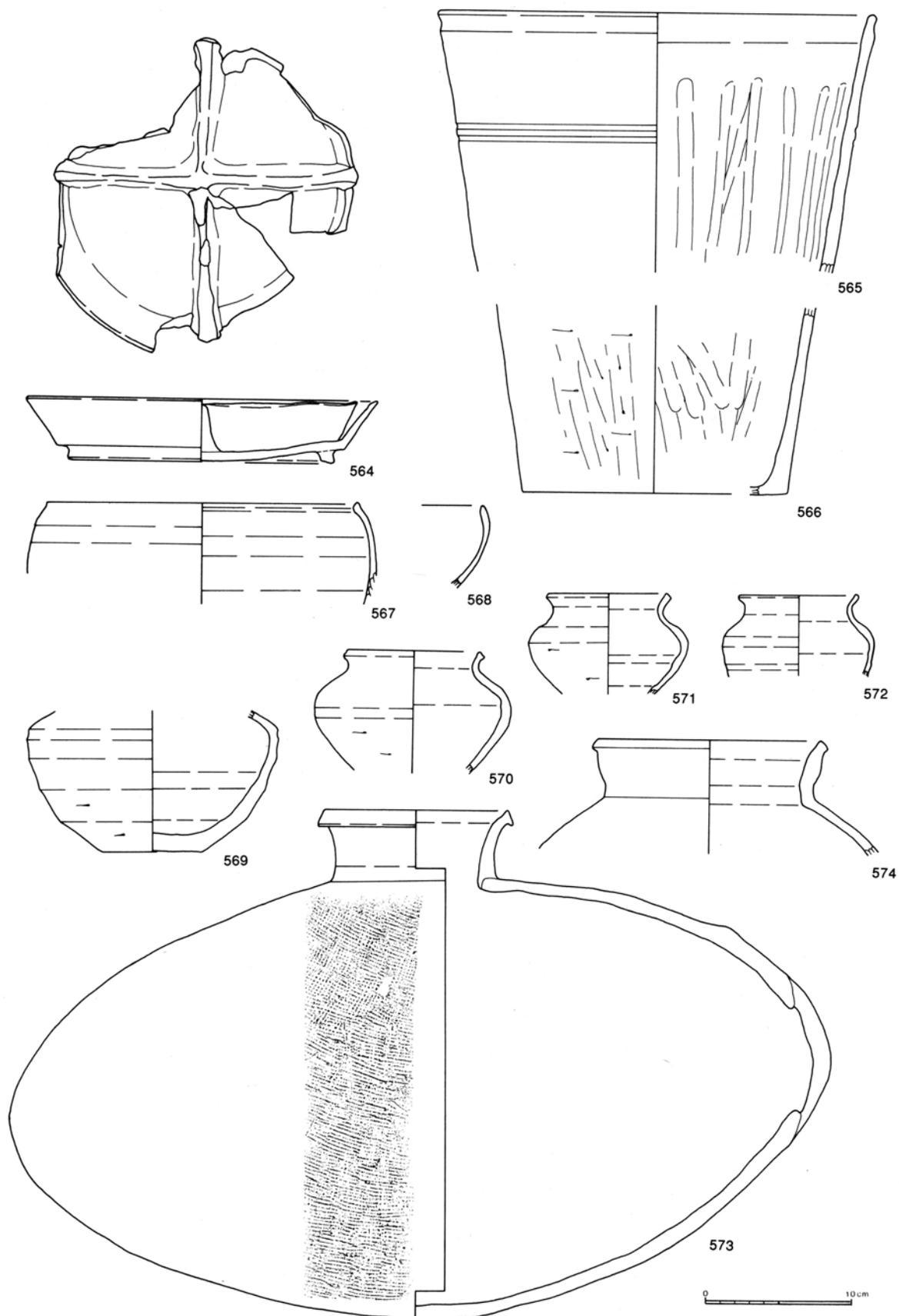


图 54 高針原 1 号窯出土遺物 4

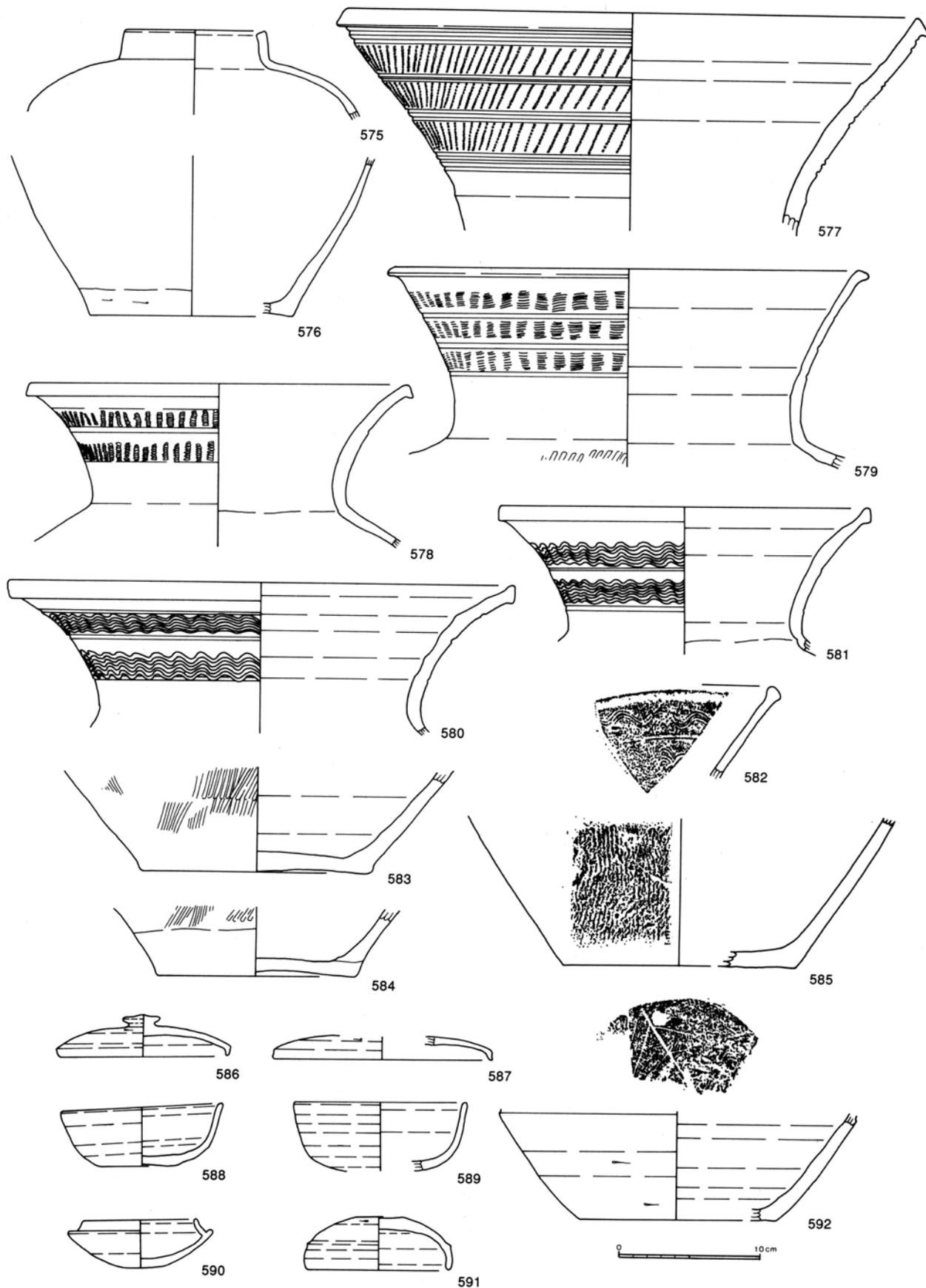


图 55 高針原 1 号窯出土遺物 5

第 IV 章

604～622は杯B。615～622は口縁部を欠く。622は小型。高台は断面台形。法量により大型、中型、小型に区分できる。腰部の形状は、607、609、614、619が稜を持って屈曲するが、604、605、608、610～613、616、620、622はこれが明瞭ではない。606、615、617、618、621は丸みを帯びる。

623は高杯B。口縁部を欠く。杯部はやや大振りか。脚部は接合部分が細い。

624～627は鉢。

624は鉢A。口縁部の小片。体部下方を欠く。肩部がやや張る形状。口縁部は直立。端部調整技法B 1類による。後述する細分によれば、4類となる。

625、626は鉢B。いずれも底部を欠く。625は、器高がやや高く、器壁が薄い。626は、器高がやや低く、器壁が薄い形状。

627は鉢D。口縁部片。外面に沈線文を施す。

628～630は壺・瓶。

628、629は平瓶B。628は口縁部片。頸部に沈線文を施す。629は把手片。粘土板を手持ちケズリ調整で整える。上面は黄土塗布が確認できる。

630はハソウB。口縁部を欠く。体部は、肩がやや張るが、全体としてはやや丸みを帯びる。体部の組み合わせ文Aは下方の沈線文が欠落する。

631は甕C。口縁部片。端部調整技法B 1類による。

SD01 資料 SD01 (図57-632～659)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A、杯A・B、高杯B、鉢A、フラスコ形瓶、平瓶A、横瓶B、ハソウBがある。

632～637は、蓋A。635はひずむ。636、637は鈕を欠く。632はやや大振り。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、632はボタン状。後述する細分によれば、633、634、636が1類、632・635が2類、637が3類となる。

638～644は杯。640は焼成不良となる。

638～642は杯A。いずれも小振り。641は口縁部直下に沈線文、腰部にオシビキ文を施す。

643、644は杯B。後者は腰部の屈曲がやや鈍い。

645～648は高杯B。645～647は焼成不良となる。645は器高がやや高く、646は低い。647、648は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

649、650は鉢A。いずれも体部下方を欠く。前者は小振り。口縁部は直立する。端部調整技法A 1類。後者は大振り。口縁部がやや外反する。端部調整技法A 1類。体部は青海波ナデ消し技法による。

651～657は壺・瓶。

651はフラスコ形瓶。口縁部片。外面に自然釉が厚くかかり、詳細は不明だが、頸部外

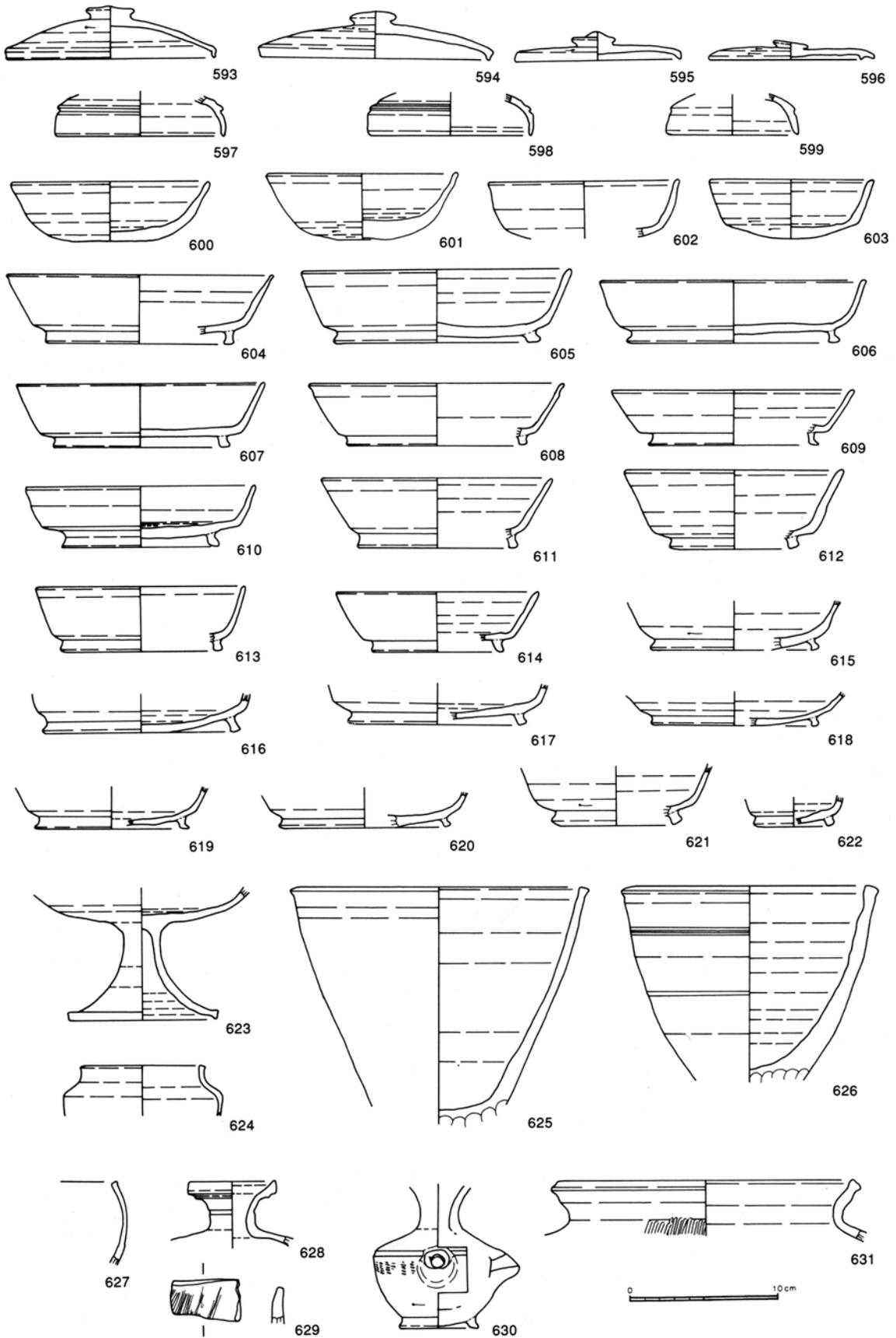


图 56 高針原 1 号窯出土遺物 6

第 IV 章

面に沈線文を施すかもしれない。

652～655は平瓶。652は口縁部を欠く。大振りな器形で平底。肩部が稜を持つ形状。体部上面に、刻書が確認できる。『瓦』と判読できるのか。653～655は口縁部片。いずれも平瓶Aとなる。

656、657は短頸壺。656は体部下方を、657は口縁部を欠く。なお、657の体部最大径付近には、二重沈線文が確認できる。

658は横瓶B。頸部は厚く、鈍く外反する。

659はハソウB。口縁部を欠く。体部は、肩がやや張るが、全体としてはやや丸みを帯びる。体部の組み合わせ文A類は下段の沈線文が省略される。

SD02 資料

SD02 (図57-660～671)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A、杯A・B・J、高杯B、フラスコ形瓶B、ハソウがある。

660、661は蓋A。いずれも鈕を欠く。後述する細分によれば、1類となる。

662～665は杯。

662、663は杯A。662は口縁部を、663は底部を欠く。663はひずむ。

664は杯B。ややひずむ。腰部は稜をもって屈曲する。

665は杯J。底部を欠く。口縁部がやや長く、外反する。

666～669は高杯B。666は焼成不良となる。器高が低く、やや扁平気味となる。667～669は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

670はフラスコ形瓶B類。頸部がやや太い。頸部に二重沈線文を施す。

671はハソウ。口縁部片。屈曲部分の稜が、やや鈍い。後述する細分によれば、2類となる。

SK01 資料

SK01 (図57-672、673)

資料は乏しい。図示した器種には杯H、鉢Aがある。

672は杯H。底部を欠く。後述する細分によれば、1類となる。

673は鉢A。やはり底部を欠く。体部はやや扁平。器壁は薄く、口縁部はやや長い。体部の最大径付近に二重沈線文、口縁部内面に沈線文を施す。後述する細分によれば、1類となる。

灰層I群資料

灰層I群 (図58-674～727)

資料は乏しい。図示した器種には、蓋A～C、H、杯A・B・G・H・J、高杯A・B、フラスコ形瓶B、平瓶、短頸壺、横瓶B、ハソウ、甕A・Bがある。

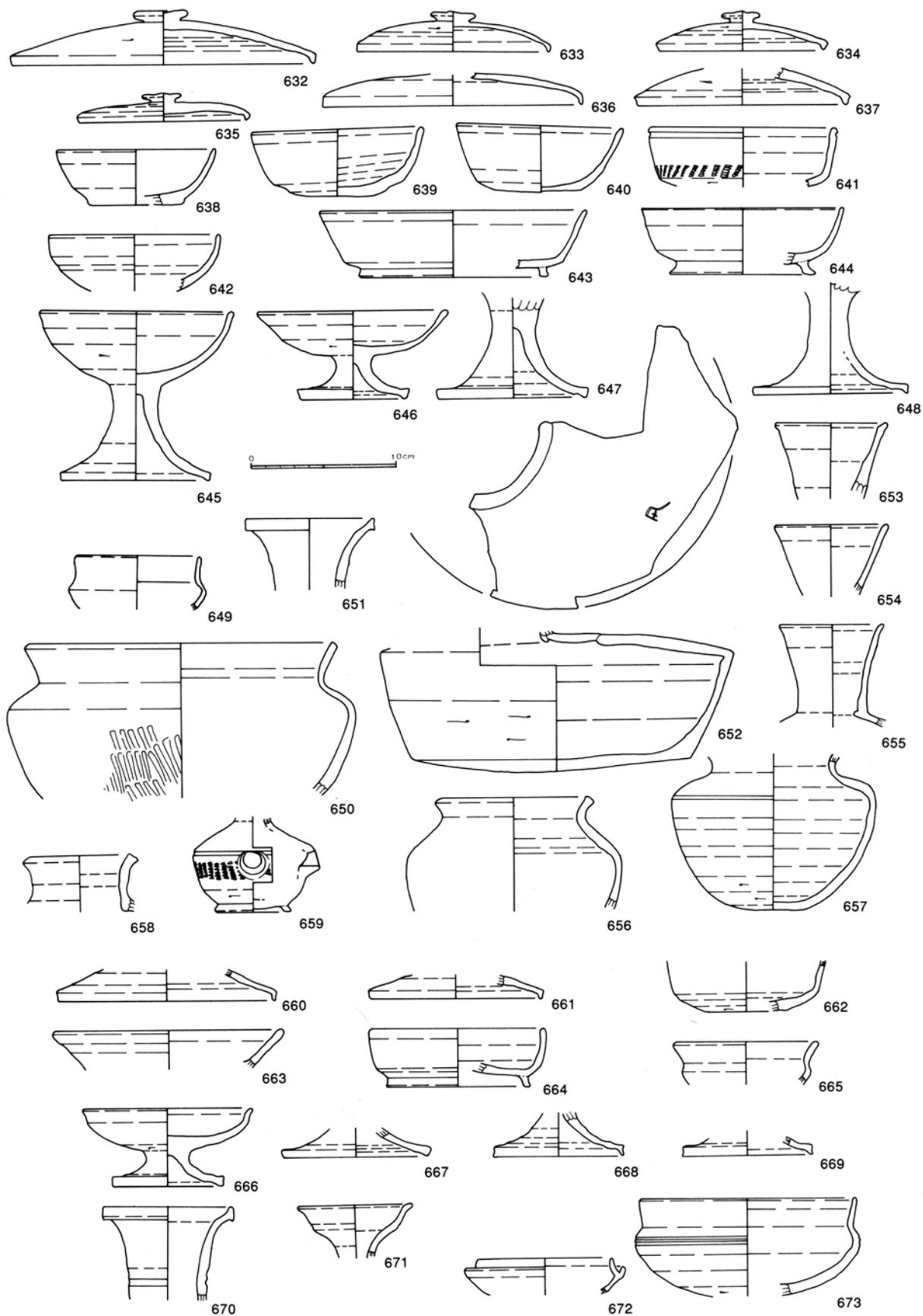


图 57 高針原 1 号窯出土遺物 7

第 IV 章

674～694は、蓋。682は焼成不良となる。680はひずむ。

674～687は蓋A。683～687は鈕を欠く。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、674、675、680、682はボタン状、679は最大径が上部にある逆円錐台形となる。後述する細分によれば、675、676、678、679～682、684・686・687が1類、674、677、685が2類、683が3類となる。

688～689は蓋B。鈕はボタン状。口縁部とかえり部の位置関係は、いずれもほぼ同位置となる。

690は鈕を欠く。蓋BないしCか。やや大振り。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部がやや突出する。

691、692は蓋C。天井部片で、鈕は小さく丸みを帯びる。

693、694は蓋H。口縁部小片で、天井部を欠く。後述する細分によれば、3類となる。

695～712は杯。699は焼成不良となる。708はひずむ。

695は杯A。底部を欠く。

696～704は杯B。701～704は口縁部を欠く。703、704はやや小振り。法量により中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形。外側に張り出す。702は高台より底部が下に突出する。704は高台の内面に、直径1mm程度の貫通しない穿孔が1か所確認できる。

705～708は杯G。708は底部がやや突出する。

709～711は杯H。いずれも底部を欠く。710、711は扁平。後述する細分によれば、709が2類、710、711が3類となる。

712は杯J。やはり底部を欠く。器壁はやや厚く、屈曲も鈍い。

713～716は高杯。いずれも杯部を欠く。713、714が高杯A、715、716が高杯Bか。713は、脚部下方にスカシ文が3か所、裾部に沈線文が施される。

717～723は壺・瓶。719は焼成不良となる。

717はフラスコ形瓶B。口縁部片。頸部がやや長い。頸部に沈線文を施す。

718は平瓶。体部の上面の破片で、手持ちケズリ調整による断面長方形の把手が付く。

719、720は短頸壺。719は平底。体部はやや丸みを帯びる。口縁部は短く直立し、端部は玉縁状を呈する。720は口縁部片。口縁部は端部調整技法B 1類による。

721、722は横瓶B。いずれも口縁部片。721は器壁が厚い。頸部は太い。鈍く外反する形状。

723はハソウ。口縁部片。後述する細分によれば、3類となる。

724～727は甕。

724、725は甕A。いずれも、頸部には組み合わせ文B 1類が確認できる。充填文は、724が刻目文、725が波状文となる。

726は甕B。口縁部片。口縁部は長い。強く外反する。

727は甕C。やはり口縁部片。口縁部は強く外反する。端部調整技法B 1類による。

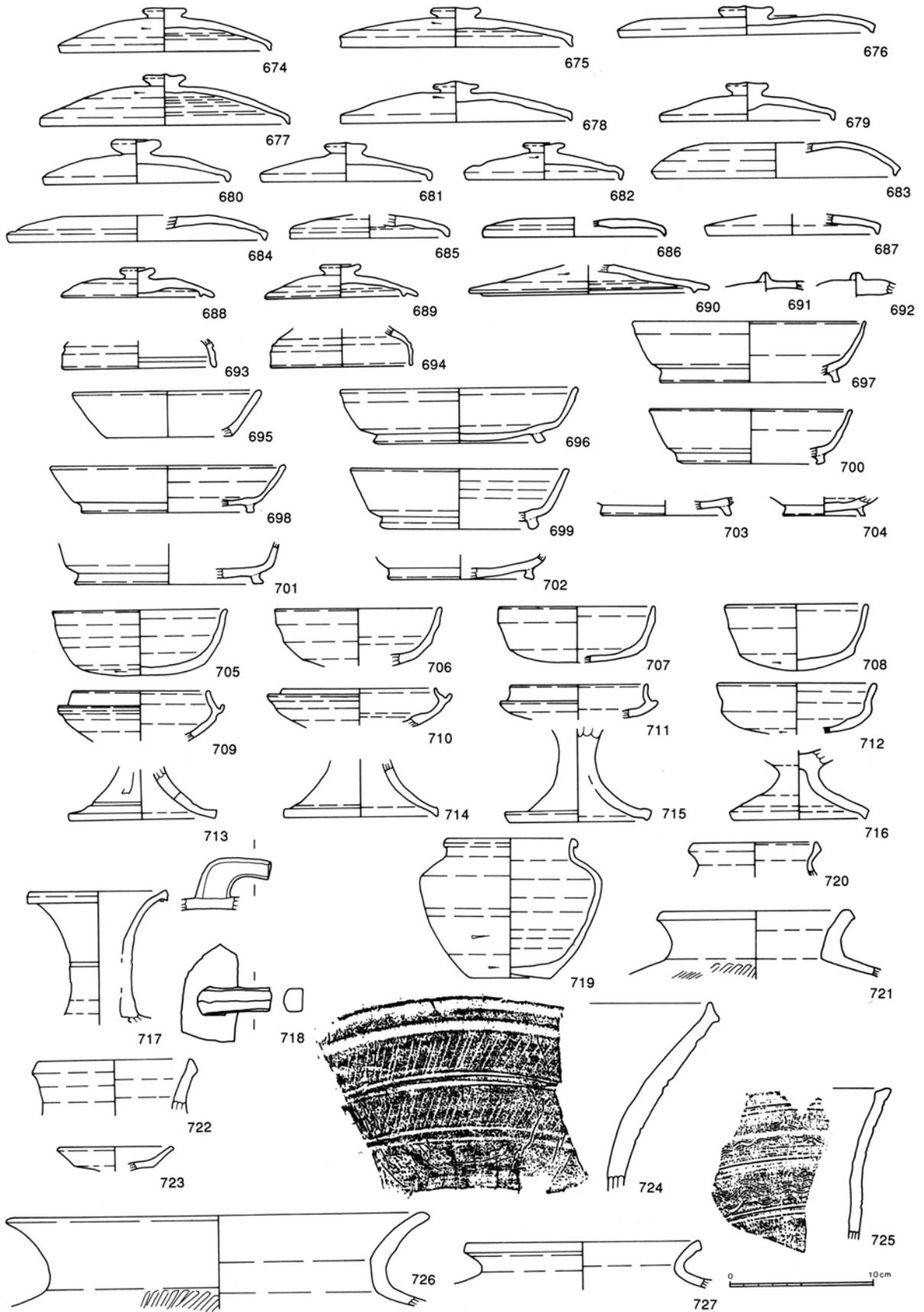


图 58 高針原 1 号窯出土遺物 8

第 IV 章

灰層 II 群 灰層 II 群 (図 59～69－728～1096)

図示した器種には蓋 A～C、H、杯 A・B・G・H・J、高杯 A～D、盤 A～C、鉢 A～D、台付長頸瓶、フラスコ形瓶 A・B、平瓶 A・B、短頸壺、横瓶 A・B、ハソウ A・B、甕 A～C、陶錘などがある。

728～846は、蓋。734、757、788、802は焼成不良となる。731、743、744、774、801、808はひずむ。

728～787は蓋 A。769～787は鈕を欠く。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、744、746、765はやや高く、745、766、767はボタン状となる。後述する細分によれば、729、730、732～734、737、738、742、744、745、747～754、756、757、760～770、772、773、776、778、783～787が1類、728、731、735、736、739～741、743、755、758、759、771、774、775、777、779～782が2類、746が3類となる。

788～800は蓋 B。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、791、795、797、799はボタン状に、798は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。口縁部とかえり部の位置関係は、788、789、798はかえり部が高位置、792～795はほぼ同位置、790、791、796、799はかえり部がやや突出する。797はかえり部が痕跡的となる。

801～804は蓋 C。口縁部とかえり部の位置関係は、802はかえり部が高位置、803はかえり部がやや突出する。802はかえり部が痕跡的となる。

805～814は鈕を欠く。蓋 B または C か。814は天井部外面に環状刻目文を施す。口縁部とかえり部の位置関係は、806、807、811、813、814はかえり部が高位置、809、810はほぼ同位置、805、808、812はかえり部がやや突出する。

815は蓋 D。鈕を欠く。天井部から稜を持って屈曲して口縁部を形成する。

816は蓋 E。器壁は薄く、器高は高い。鈕は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。天井部外面には降灰が厚く覆い、詳細は不明確。

817は蓋 F。蓋 H 2 類の天井部外面に鈕を付けた形状。鈕はボタン状。

818は蓋 G。蓋 B または C を大型にしたもの。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部が突出する。

819～846は蓋 H。844～846は小型。821、822、824は、口縁部内面に沈線文を施す。後述する細分によれば、819、820、826、827が1類、822、824、825、828、832、843が2類、821、829～831、833～839、841、842、844～846が3類となる。

847～927は杯。853、860、871、878、923、927は焼成不良となる。895、925はひずむ。

847～866は杯 A。法量や形状はばらつく。865は体部中央に二重沈線文、866は口縁部直下に沈線文、腰部にオシビキ文を施す。いずれも底部調整技法 B 2 類または C 類だが、850は切り離し手法 C 類を未調整で残す。なお、856は蓋 A の口縁部片が釉着している。

867～884は杯 B。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。883、884は、やや深手となる。高台は断面台形。外側にや

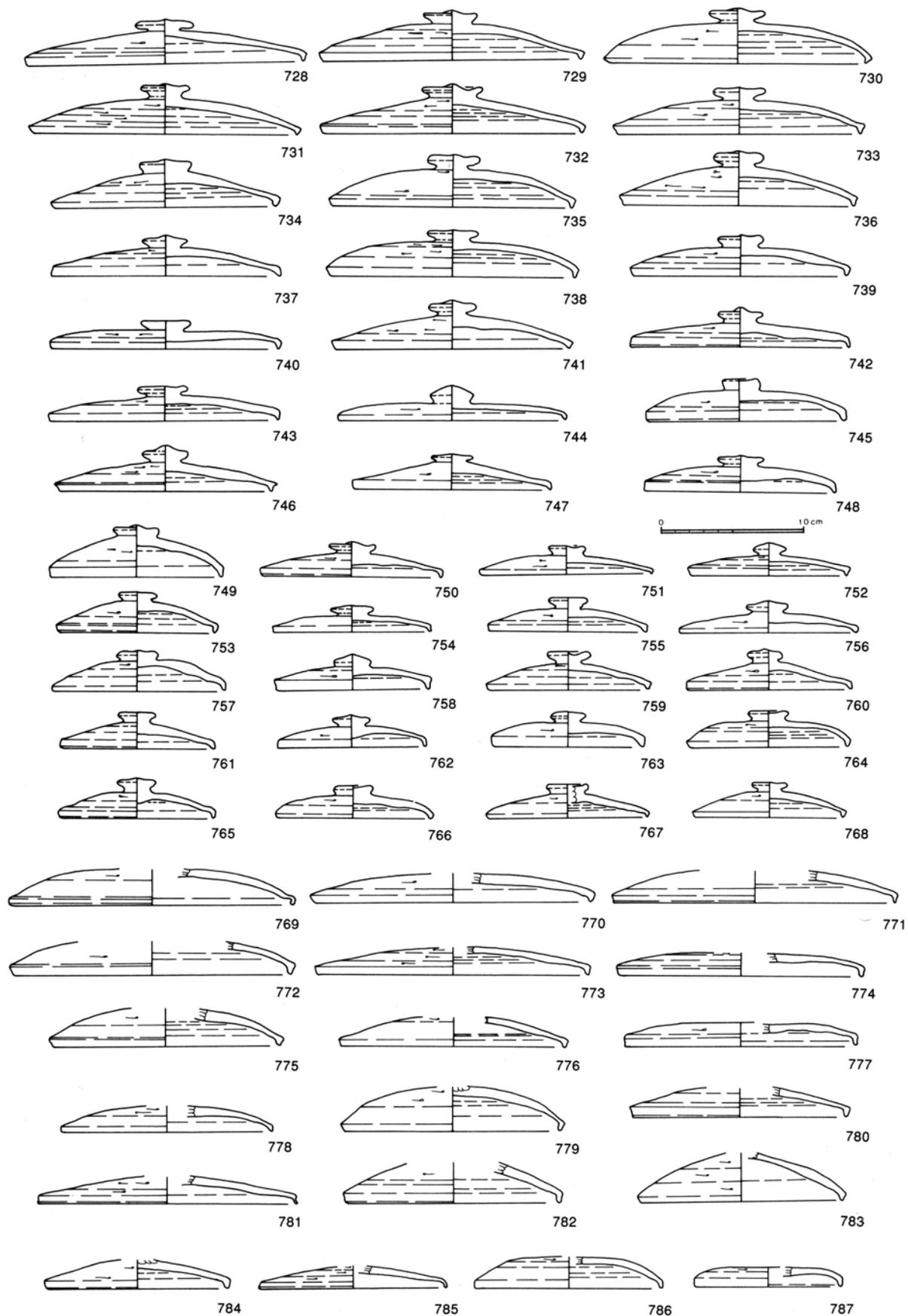


图 59 高針原 1 号窯出土遺物 9

第 IV 章

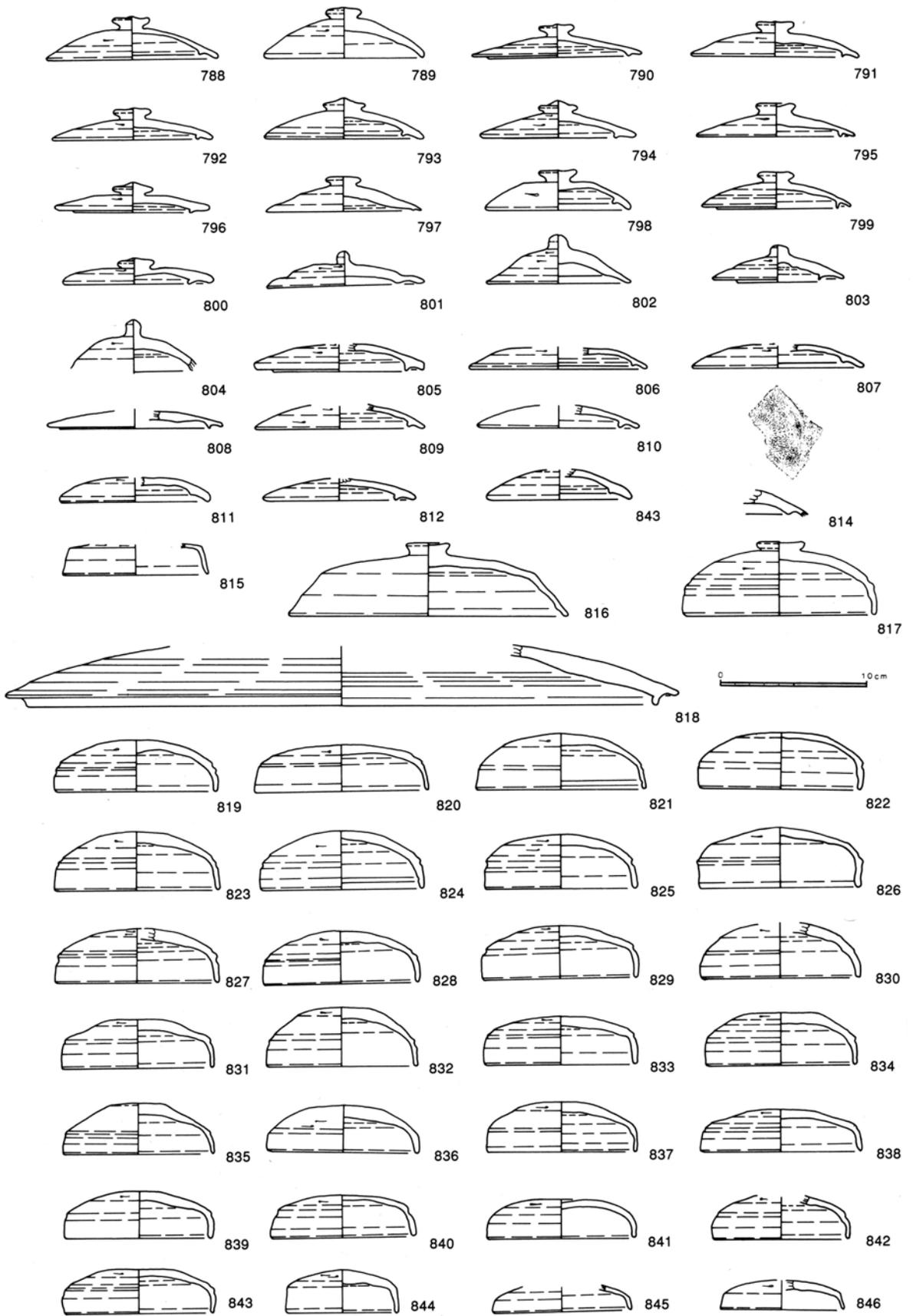


图 60 高針原 1 号窟出土遺物 10

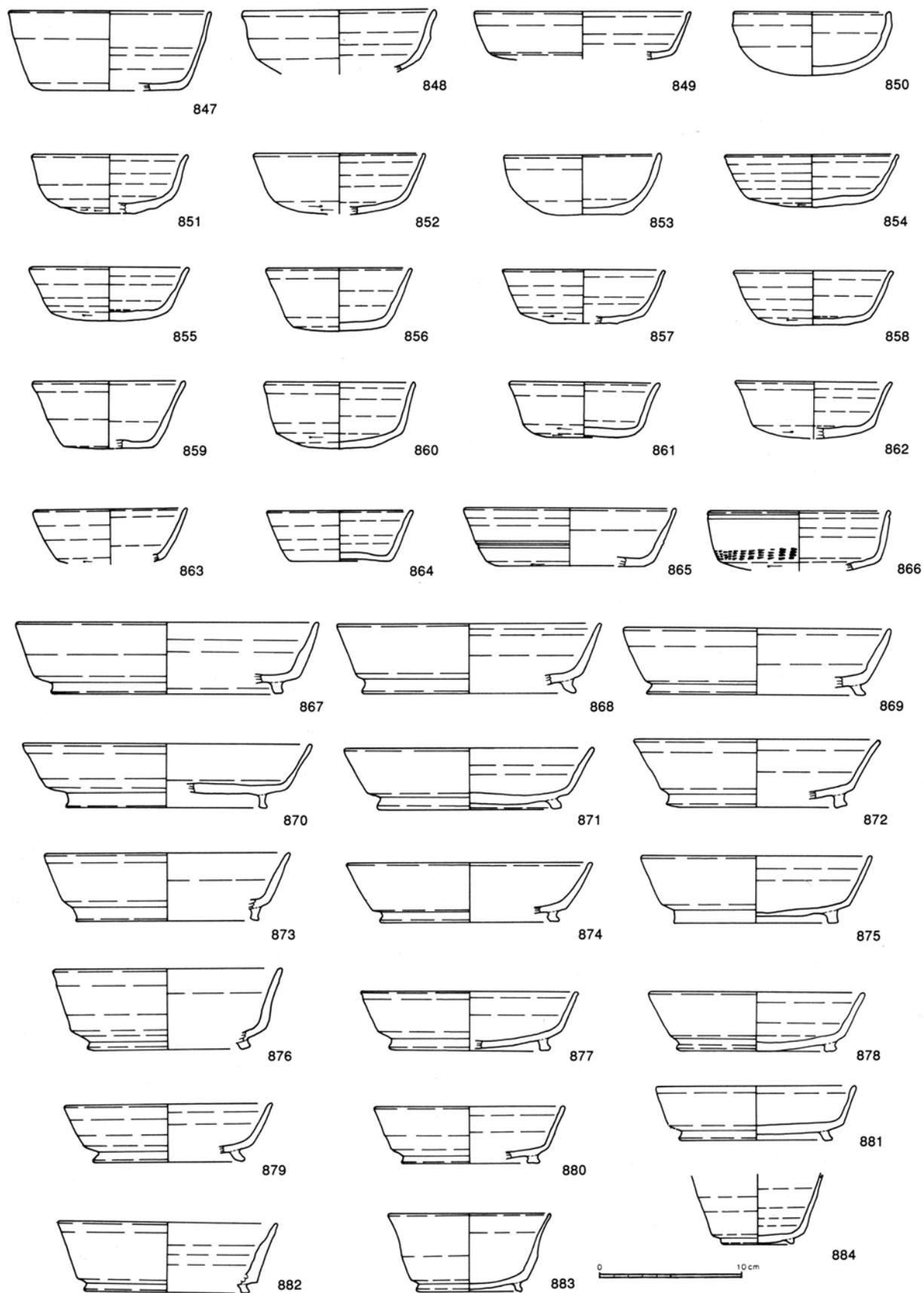


图61 高針原1号窯出土遺物11

や張り出す。腰部は、867～872、874、875、877、881～884が稜を持って屈曲するが、873、876、878～880はこれが不鮮明となる。

885～892は杯G。法量や形状はばらつく。890、892は体部中央に沈線文を施す。892はこれが二重沈線文となり、口縁部内面にも沈線文を施す。

893～926は杯H。後述する細分によれば、915、920が1類、894～902、904～910、912、913、916、918、919、922、926が2類、903、911、914、917、921、923～925が3類となる。

927は杯J。口縁部は外反する。

928～985は高杯。951は焼成不良となる。962、967はひずむ。

928～943は高杯A。脚部が比較的長く、杯部が小振りである資料が多いが、932、935は比較的短脚で、杯部がやや深い。スカシ文は928～931に確認できる。二か所を基本とするが、930は三か所となる。929を除き二段だが、いずれも上段が切り込み状となる。なお、928、930、931は組み合わせ文C類となる。

940～943は脚部片。一応、高杯Aに分類した。脚部にはいずれもスカシ文が確認できる。上段のスカシは940が貫通し、941、942は切り込み状となる。

944～948は高杯B。948は口縁部を欠く。944、945、948は器高が高く、946、947はこれが低い。

949～960は脚部片。一応、高杯Bに分類した。955、958は、二重沈線文を施す。

961～983は高杯C。965～973は脚部を、974～983は杯部を欠く。杯部には962、963、967、972を除き二重沈線文を施す。972はこれが突帯となる。974～976に脚部にはスカシ文が確認できる。いずれも組み合わせ文C類となる。

985は高杯D。基本的には杯H 1類との差異を確認することができない。底部外面に脚部の剥離した痕跡が認められる。

986～989は盤。989はひずむ。

986、987は盤A。口縁部はいずれも端部調整技法B 1類による。986は黄土塗布が確認できる。

988は盤B。脚部を欠く。

989は盤C。口縁部直下に二重沈線文、腰部に沈線文を施し、中央を波状文で充填する。腰部の屈曲は強い。

990～1014は鉢。1002、1010は焼成不良となる。1009はひずむ。

990～1000は鉢A。990～992が大型、993～1000が小型となる。997はやや器高が低い。いずれも体部はやや張る。口縁部の形状は、990、992、993、995、997が直立、991、998が内傾、994、996、999が外反する。991、992、994は、体部の最大径付近に沈線文を施し、1000はこれが二重沈線文となる。後述する細分によれば、990が1類、991が3類、992が2類となる。

1001～1008は鉢B。1002～1004は底部を欠き、1005～1008は底部片となる。1004はやや小振りか。1001は体部外面に組み合わせ文Bを施す。充填文は刻目文となる。1002～1004

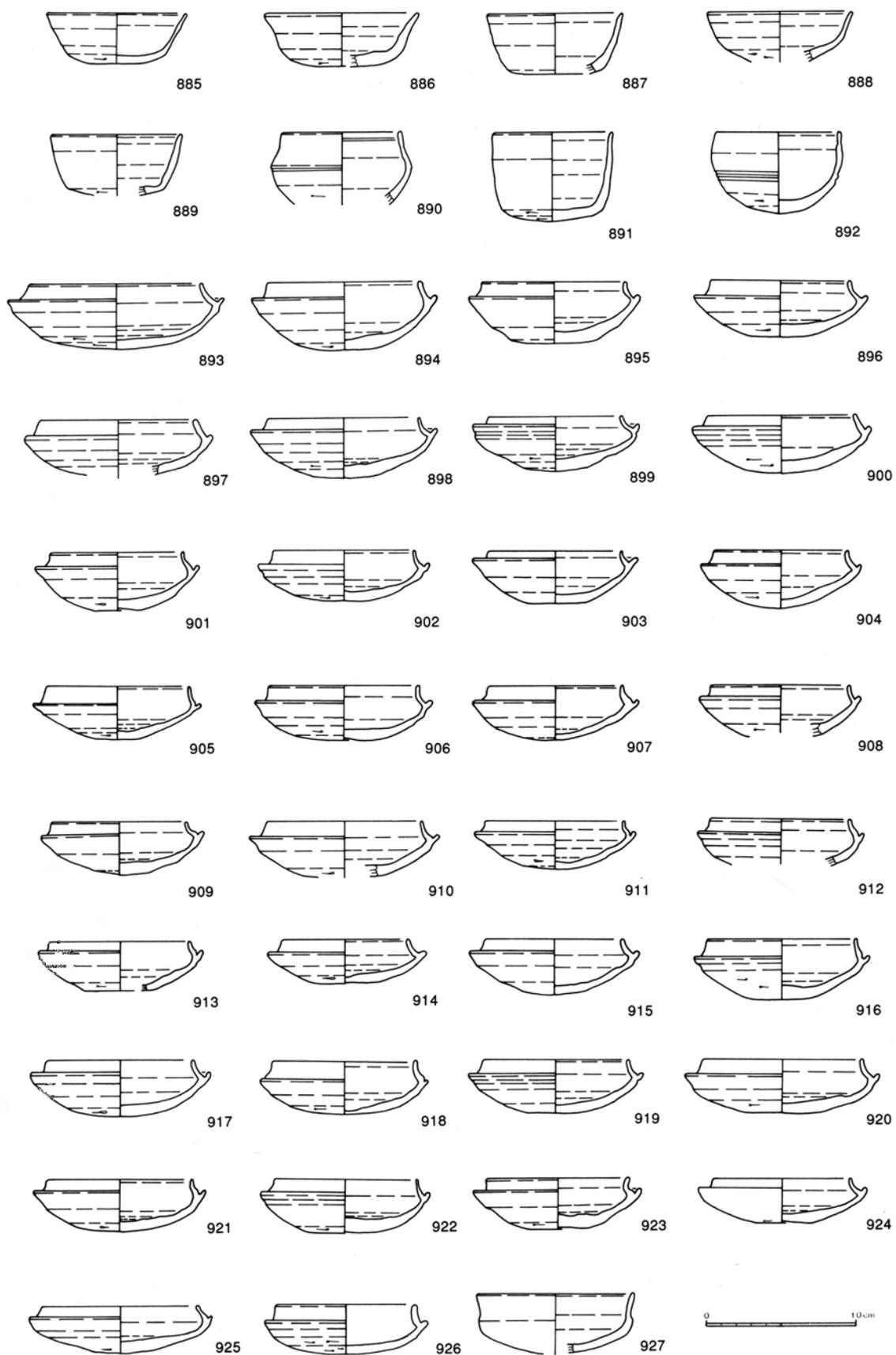


图 62 高針原 1 号窯出土遺物 12

第 IV 章

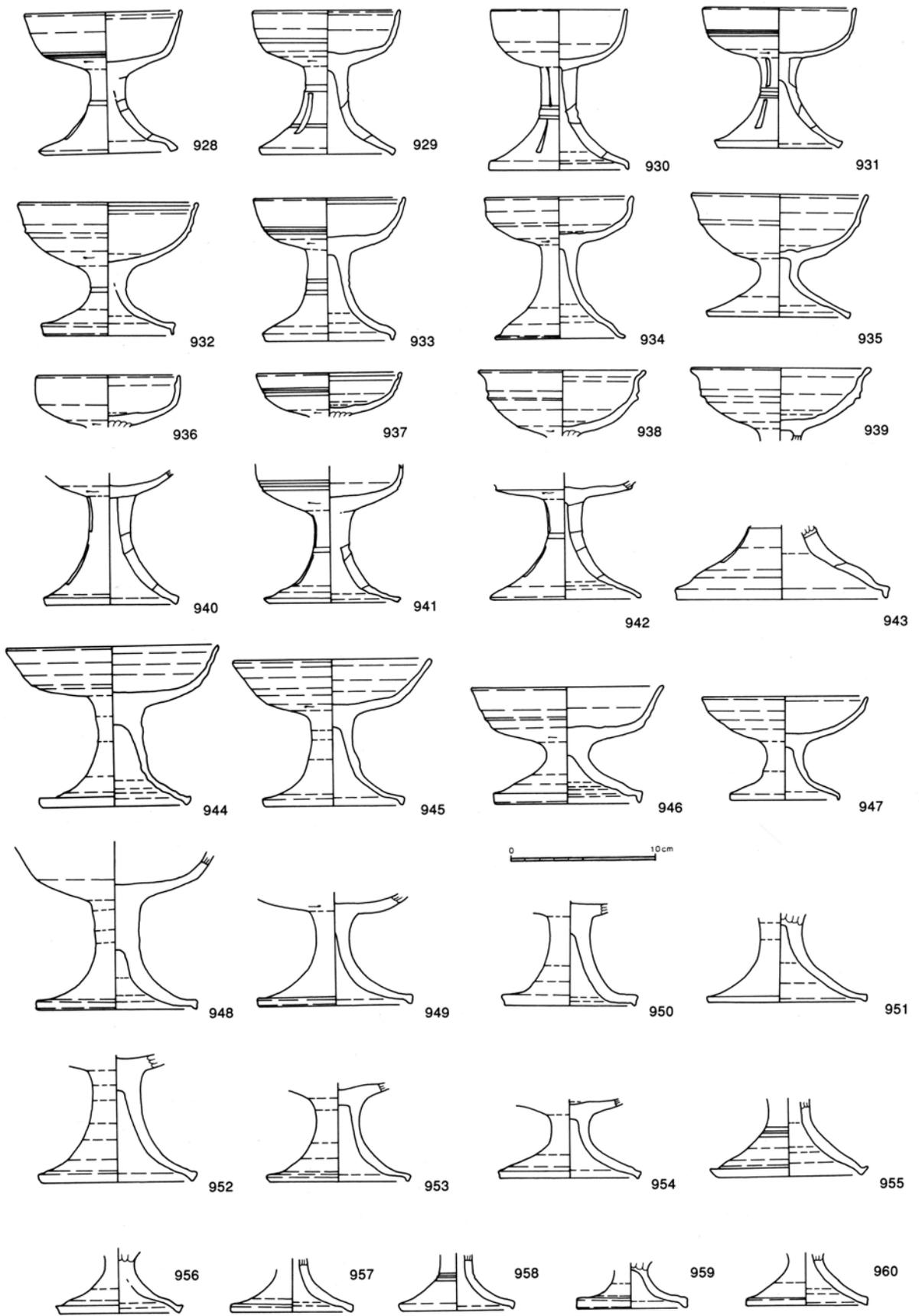


图 63 高針原 1 号窯出土遺物 13

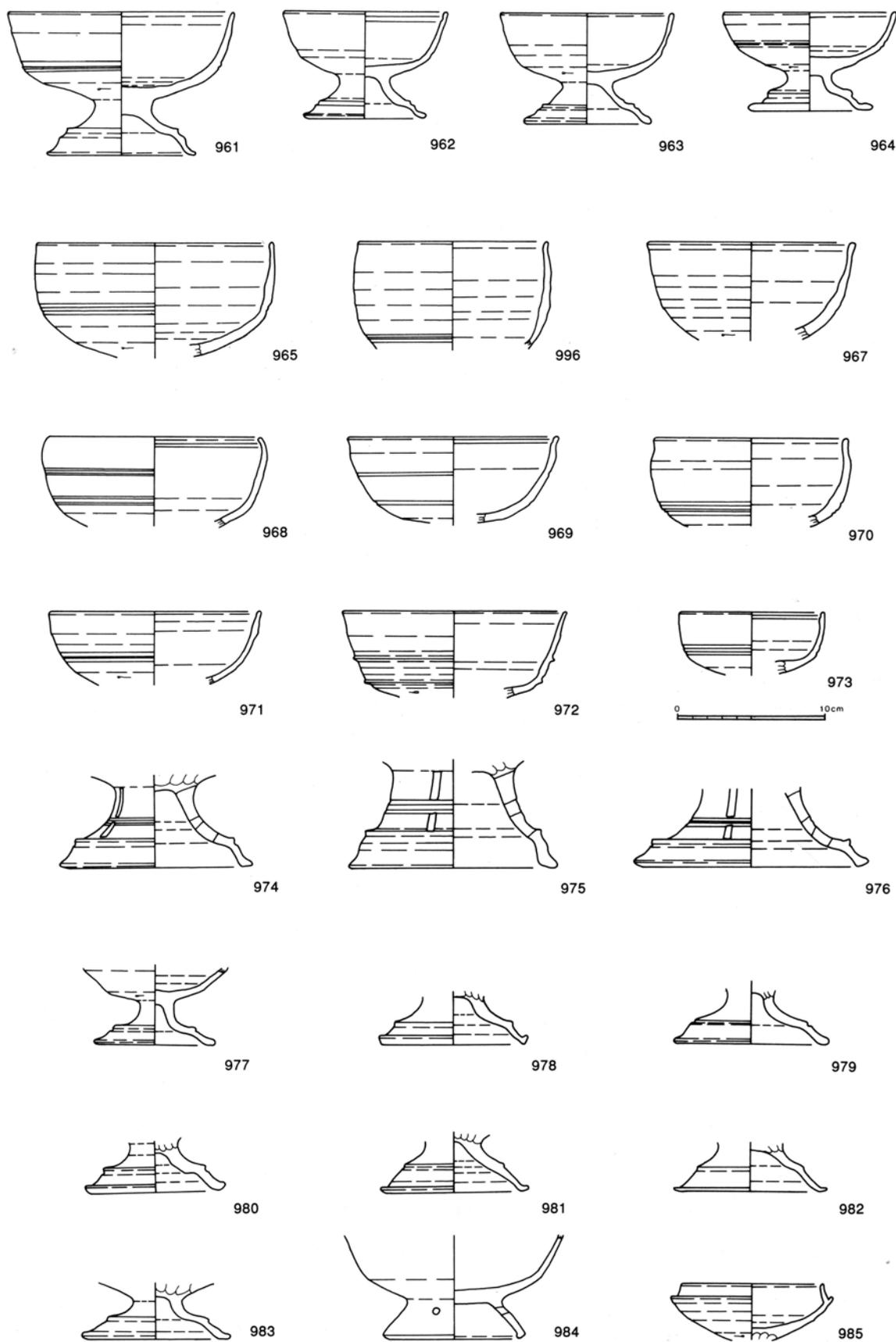


图64 高針原1号窯出土遺物14

は、体部外面に沈線文と二重沈線文を一定間隔で積む。

1009、1010は鉢C。1009は口縁部片。体部外面に二重沈線文を二段施す。1010は底部片。

1011～1014は鉢D。いずれも口縁部片。1013は外面に沈線文を施す。

1015～1081は壺・瓶。1048、1067はひずむ。

1015～1020は台付長頸瓶。1015、1016は口縁部片。1015は頸部が長く、中央には二重沈線文を施す。1017は体部片。肩部の張りはやや鈍く、稜が確認できない。外面は黄土塗布か。1018～1020は、台部。いずれも外側に張り出す。側面には、方形のスカシ文が確認できる。1018、1019は三か所。1020は小片のためこれが不明。

1021～1035はフラスコ形瓶。1021～1034は頸部片、1035は体部片。1021～1026、1029はフラスコ形瓶Aで、1027、1028、1030～1034はフラスコ形瓶B。1027～1029は頸部がやや短い。1024、1031を除き、頸部中央に二重沈線文を施す。1035は体部中央に環状刻目文を円形の沈線文で囲む。

1036～1041は平瓶。1036～1039が平瓶A、1040は平瓶B。1036、1037、1040は体部が一部残存するもので、肩は丸みを帯びる。1037、1039、1040は体部と頸部に、1038は頸部に二重沈線文を施す。1041は体部片。平底で、肩部に稜を持つ。

1042～1048は短頸壺。1042～1046は大型、1047、1048は小型。体部は丸みを帯びるが、1047、1048は最大径部分で張る。1042は青海波ナデ消し技法を施す。

1052～1057は横瓶。1052～1054が横瓶A、1055～1057が横瓶B。1055は全形が判明する。頸部は短い。口縁部は外反し、端部調整技法B 2類。体部は、青海波ナデ消し技法。長径方向で観察すると楕円形、短径方向では球形となる。頸部から沈線文を巡らす。

1059～1079はハソウ。1059～1069は口縁部片。1059は素地補修、1067は頸部に沈線文が確認できる。後述する細分によれば、1059～1062、1064、1067が1類、1063、1066、1069が2類、1065、1068が3類となる。1070～1078は体部片。1070～1077は丸底でハソウA。体部はやや肩が張る球形。1070は、体部に施される組み合わせ文Aの下段沈線文がやや弱い。1075はこれがややつぶれる。1078、1079は有高台でハソウB。1078は肩の張る形状。体部下方は丸みを帯びる。1079は底部片。

1082～1090は甕。

1082～1086は甕A。1082は全形の判明する資料。体部上方は丸みを帯び、下方ではほぼ直線的に底部に至る。底部は疑尖底となる。底部調整技法Cによる。頸部は外面に組み合わせ文B 1類を施す。充填文は刻目文となる。1083から1086は口縁部片。いずれも外面に組み合わせ文を施し、1083がB 2類、1084～1086がB 1類。充填文は1083、1085が刻目文、1084がオシビキ文、1086が波状文となる。

1087、1088は甕B。いずれも口縁部片。頸部は長い。

1089、1090は甕C。やはり口縁部片。1090は端部調整技法C類。

1091、1092は陶錘。紡錘形を呈する。いずれもナデ調整によるが、小口部は手持ちケズリ調整。孔部の直径は、いずれも5.0mm、重量は1091が39.2g、1092が34.9gをはかる。

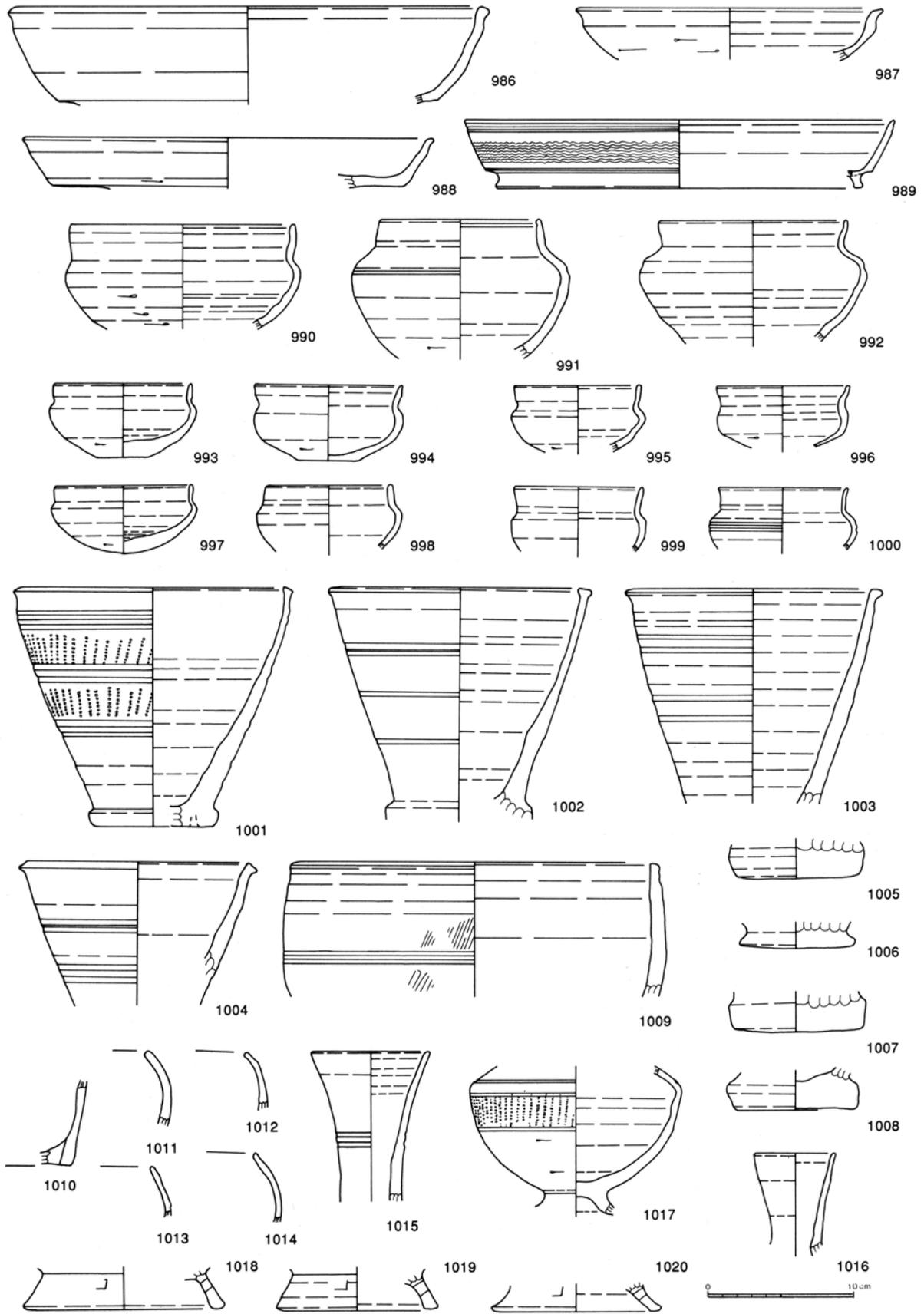


图 65 高針原 1 号窯出土遺物 15

第 IV 章

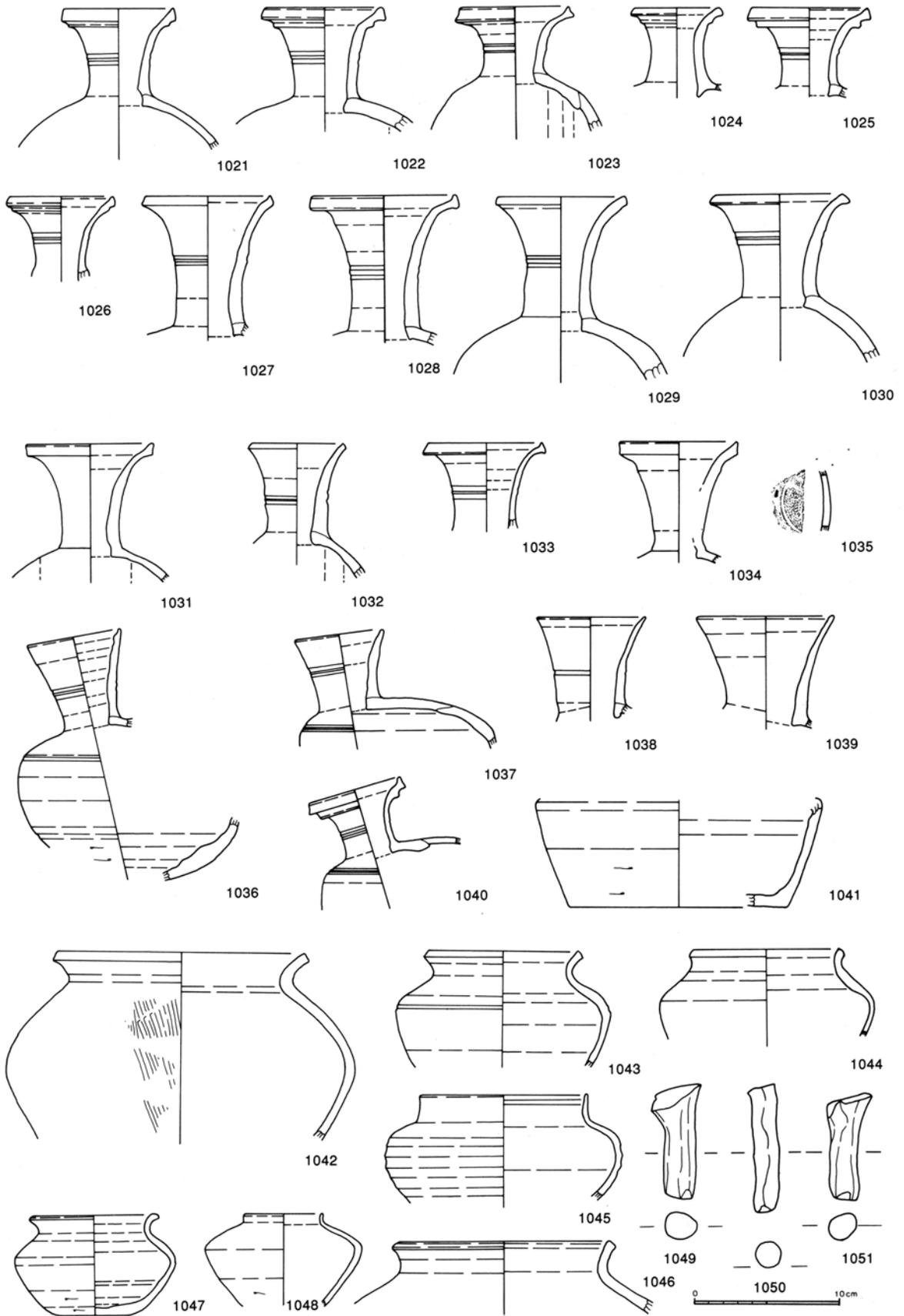


图66 高針原1号窯出土遺物16

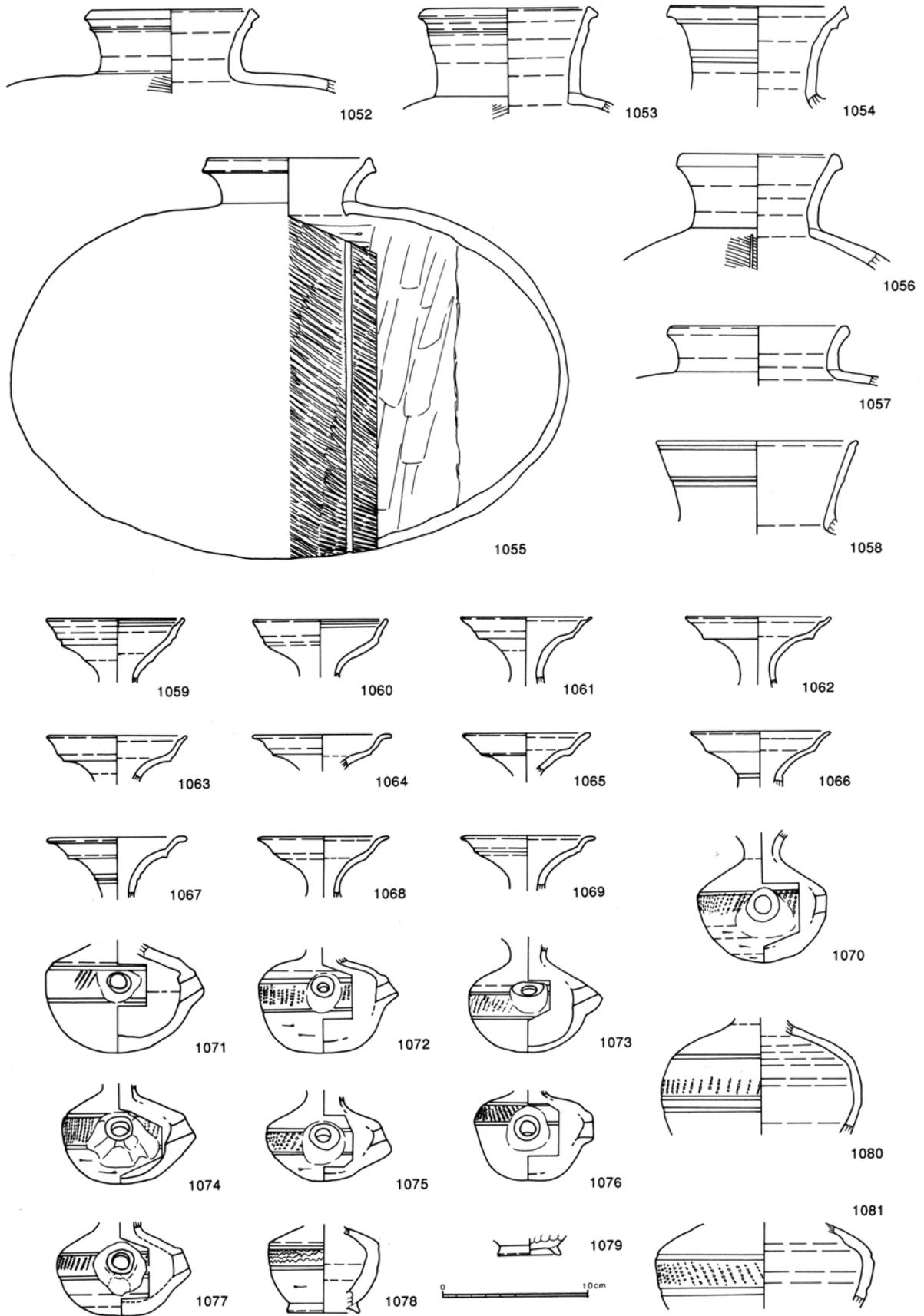


图 67 高針原 1 号窯出土遺物 17

第 IV 章

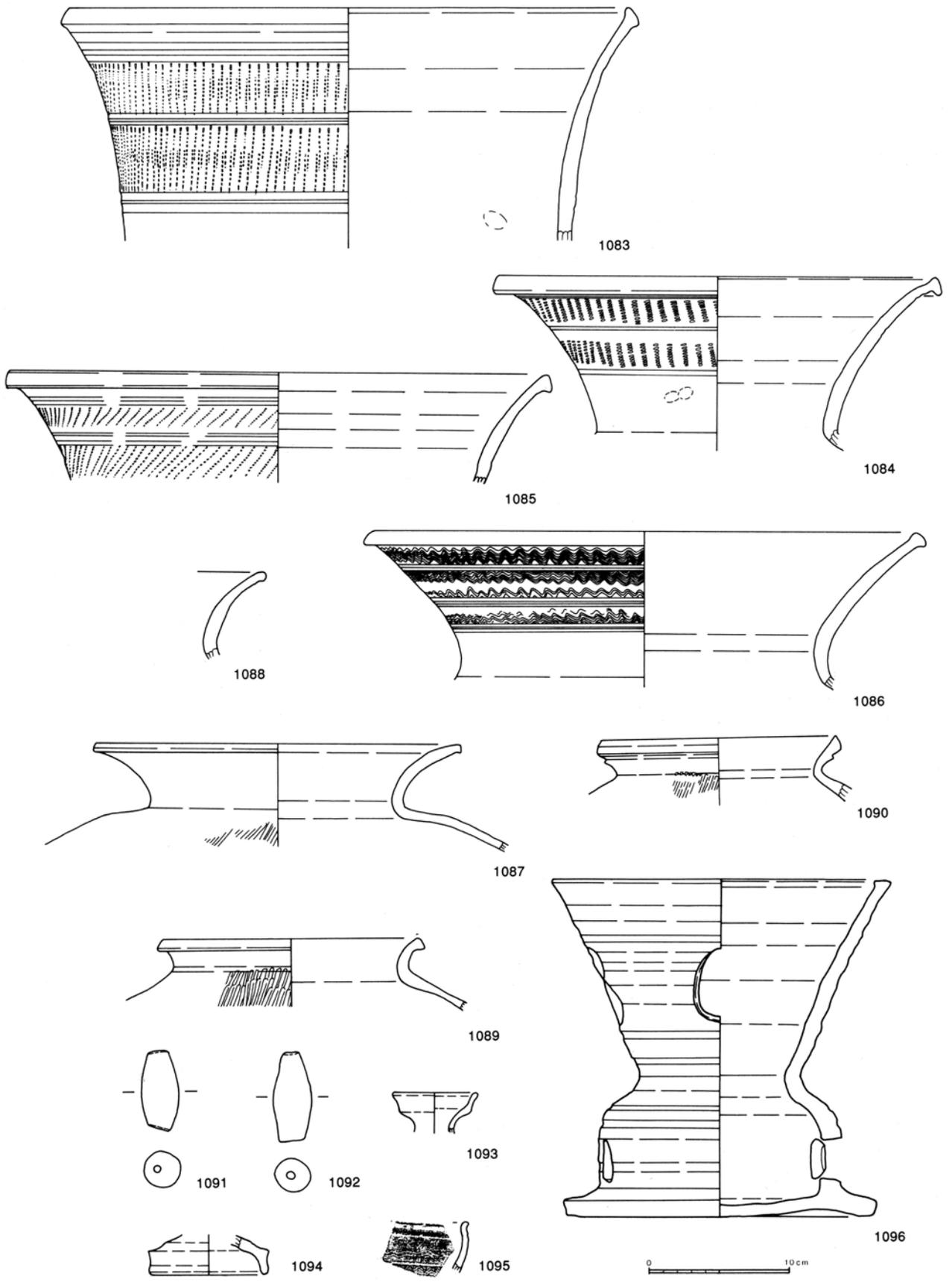


图 68 高針原 1 号窯出土遺物 18

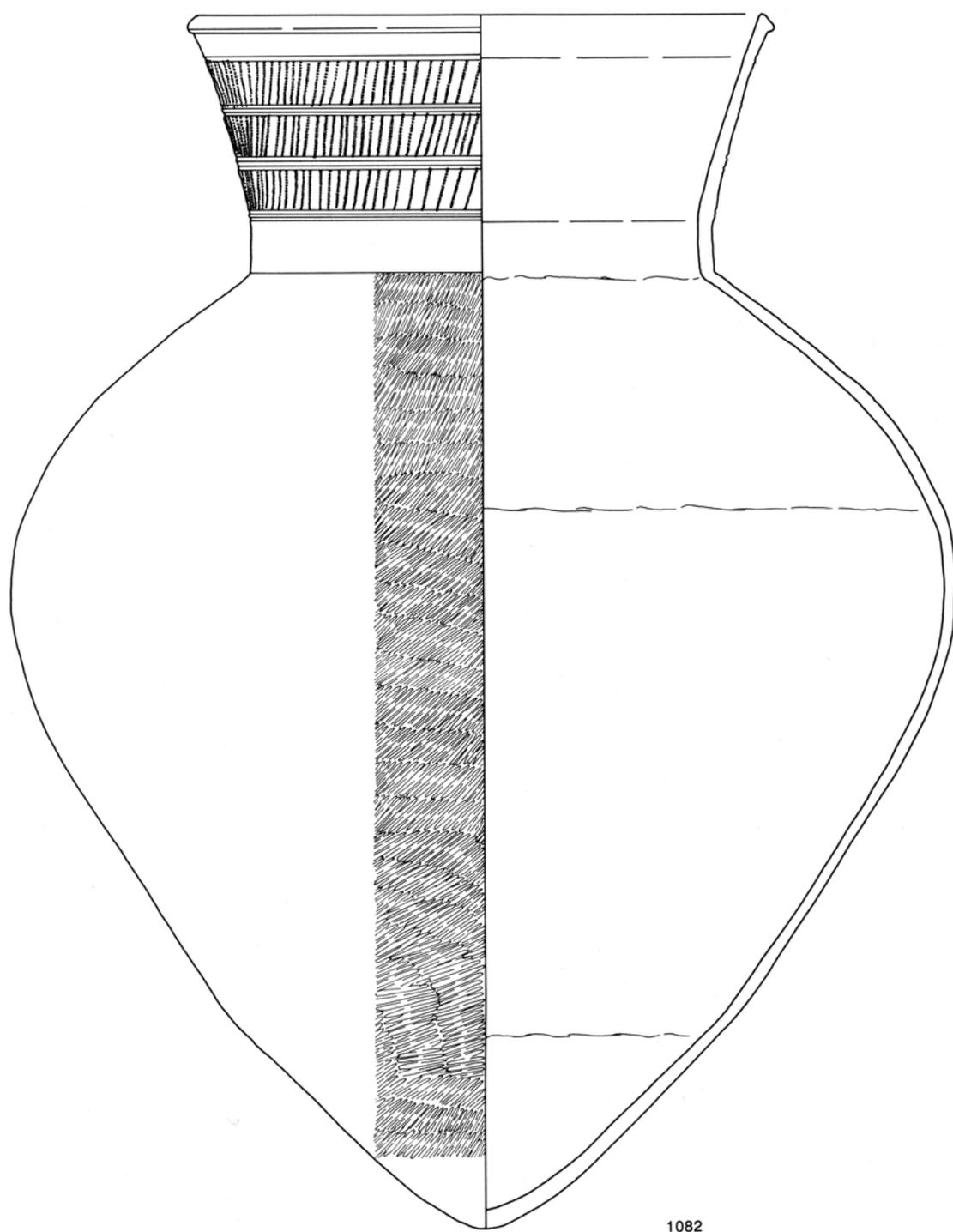


図 69 高針原 1 号窯出土遺物 19

0 20cm

1093 は器種不明。口縁部としてこれを図化した。

1094 も器種不明。器壁が厚く、端部付近で稜を持って屈曲するため、脚部としてこれを図化した。

1095 は碗状の器形か。口縁部片で、形状は鉢Dと類似するが体部上方は張らず、小口径となる。外面に沈線文、波状文を施す。

1096 は器種不明。岡崎市小針遺跡に類例がある(齊藤 1999)。器台の可能性も考えられるが、平針遺跡例では底部が被熱しており、これを鉢状の器形として扱っているためこれに従った。形状も特異で、大きく張り出した底部に、低く扁平な体部と直線的に伸びる頸部を持つ。底部は切り離し手法C類。体部と頸部にスカシ文が特徴的である。体部は直径3.0cm程度の円形を4か所、頸部には不整形のスカシ文が施されるが、形状は不明となる。

灰層II群上層(図70～76—1097～1343)

灰層II群資料のうち、土層観察用のセクションベルト部分のみこれをさらに三つに分割して遺物を取り上げた。ここではこのうちの上層の資料を報告する。

図示した器種には蓋A～D・G・H、杯A・B・G・H・J、高杯A～C、盤A～C、鉢A～D、台付長頸瓶、フラスコ形瓶A・B、平瓶A、短頸壺、横瓶A・B、ハソウ、甕A～C、陶錘などがある。

1097～1162は蓋。1097、1099、1101、1102、1146、1147、1150は焼成不良となる。1100、1122はひずむ。

1097～1111は蓋A。1107～1111は鈕を欠く。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、1105はボタン状に、1097は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。後述する細分によれば、1098、1099、1102、1104～1107、1109～1111が1類、1097、1100、1101、1103、1108が2類となる。

1112～1116は蓋B。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、1115はボタン状、1112は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。口縁部とかえり部の位置関係は、1114はかえり部が高位置、1112、1113はほぼ同位置となる。なお、1115はかえり部が痕跡的となる。

1117は蓋C。鈕は長い。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部が高位置となる。

1118、1119は鈕を欠く。蓋BまたはC。口縁部とかえり部の位置関係は、ほぼ同位置となる。

1120、1121は蓋D。いずれも鈕を欠く。

1122、1123は蓋G。1122は蓋Aを大型にした形状。口縁部の屈曲は短い。黄土塗布が確認できる。1123は蓋BまたはCを大型にした形状。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部がやや突出する。

1124～1159は蓋H。1124は大振り。1127、1131、1136、1140、1142、1148は、口縁部内面に沈線文を施す。後述する細分によれば、1124、1126、1130、1131、1134、1136、1140～

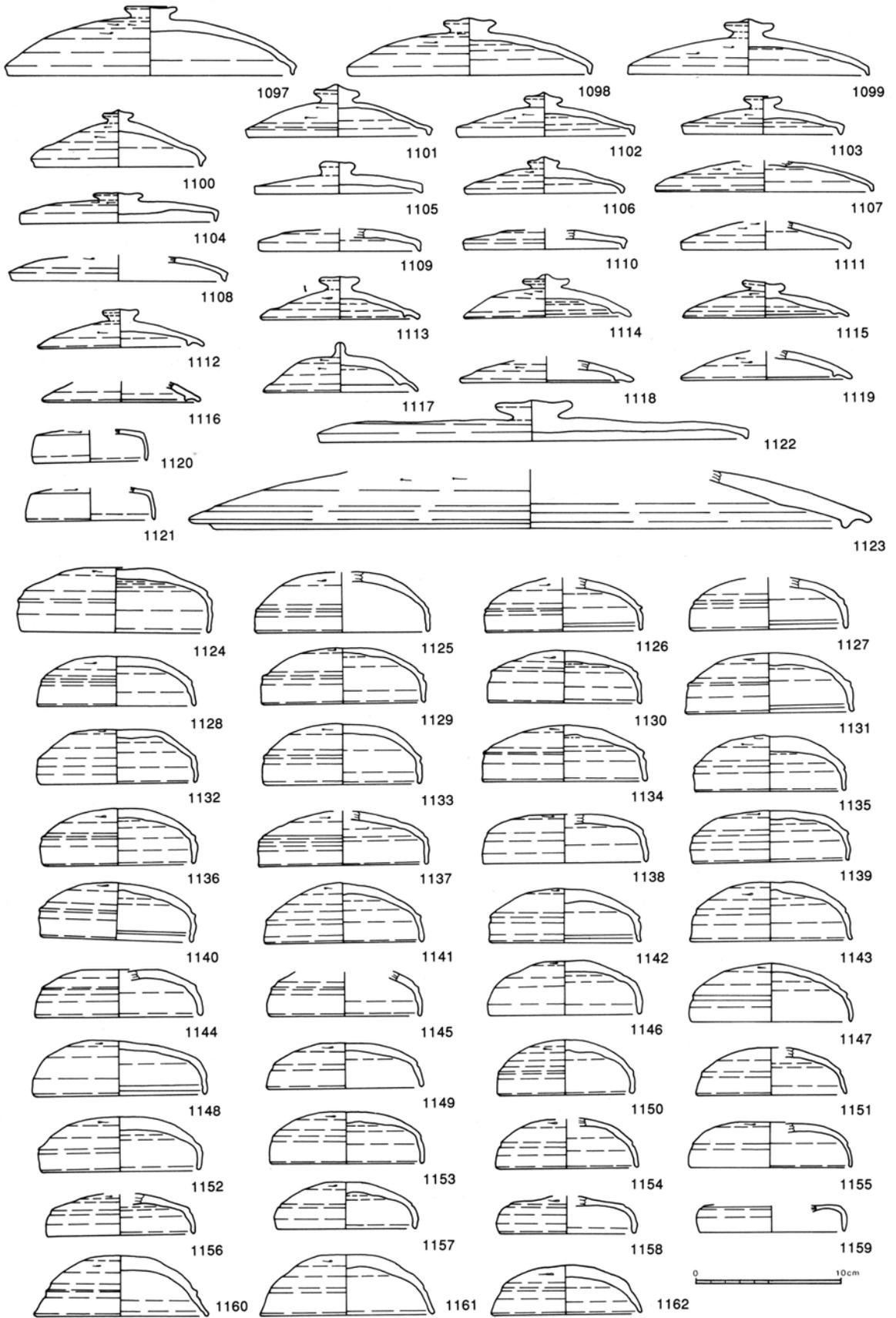


图 70 高針原 1 号窯出土遺物 20

1142が1類、1125、1127～1129、1133、1137、1145、1147、1150、1152が2類、1132、1135、1139、1144、1146、1148、1151、1153、1155～1159が3類となる。

1160～1162は蓋Hの口縁部が直立しない形状。一応蓋Hに含めるが、別器種として扱うべきかもしれない。数量は乏しい。口縁部の形態以外に、蓋Hとの差異は確認できない。天井部が残存する資料は、図示した3例にとどまるが、高杯Aの杯部とした破片資料に同一形状のそれが混在している可能性を残す。後述する蓋Hの細分をあてはめれば、1160が1類、1161、1162が3類となる。

1163～1223は杯。1183、1187、1188、1200は焼成不良となる。1178、1217はひずむ。

1163～1174は杯A。法量や形状はばらつく。1163は器高が高く、1164は大口径となる。

1175～1183は杯B。腰部は、1175が稜を持って屈曲するが、1176～1182はこれが不鮮明、1183は丸味を帯びる。図示したものは全て大型と中型。高台は断面台形。外側にやや張り出す。

1184～1187は杯G。1187は口縁直下と体部に沈線文を施す。

1188～1219は杯H。後述する細分によれば、1189、1190、1192、1196～1198、1200、1207が1類、1191、1193、1195、1199、1201～1203、1205、1206、1209、1213、1214、1217、1219が2類、1204、1208、1210、1212、1218が3類となる。

1220～1223は杯J。1222、1223はくびれ部から口縁部までが長い。

1224～1259は高杯。1241、1247、1255は焼成不良となる。

1224～1234は高杯A。1232～1234は脚部を欠く。1224～1226、1232、1233には脚部にスカシ文が確認できる。いずれも二段で二か所、上段は痕跡的となる。1224、1226、1232が組み合わせ文C類となる。

1235～1239は脚部片。一応、高杯Aに分類した。1235は器高が高い。1235～1237には脚部にスカシ文が確認できる。いずれも二段で二か所だが、1235のみ三か所で、組み合わせ文C類となる。

1240～1243は高杯B。1242、1243は脚部を欠く。杯部は浅いが、1240はやや深手となる。

1244～1247は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

1248～1259は高杯C。1250～1252は脚部を、1253～1259は杯部を欠く。杯部には、1248、1249は沈線文を、1249～1251には突帯が付く。文様は、1253の脚部に組み合わせ文C、1254にはスカシ文を施す。

1260～1263は盤。1263はひどくひずむ。

1260、1261は盤A。大振りの盤。底部を欠く。腰部にタタキ整形。1261は体部の浅い形状。器壁は厚い。口縁部は短く直立する。

1262は盤B。脚部片。脚部は、器壁が薄い。

1263は盤C。口縁部直下と腰部に二重沈線文、体部に波状文を施す。

1264～1282は鉢。1279～1281は焼成不良となる。

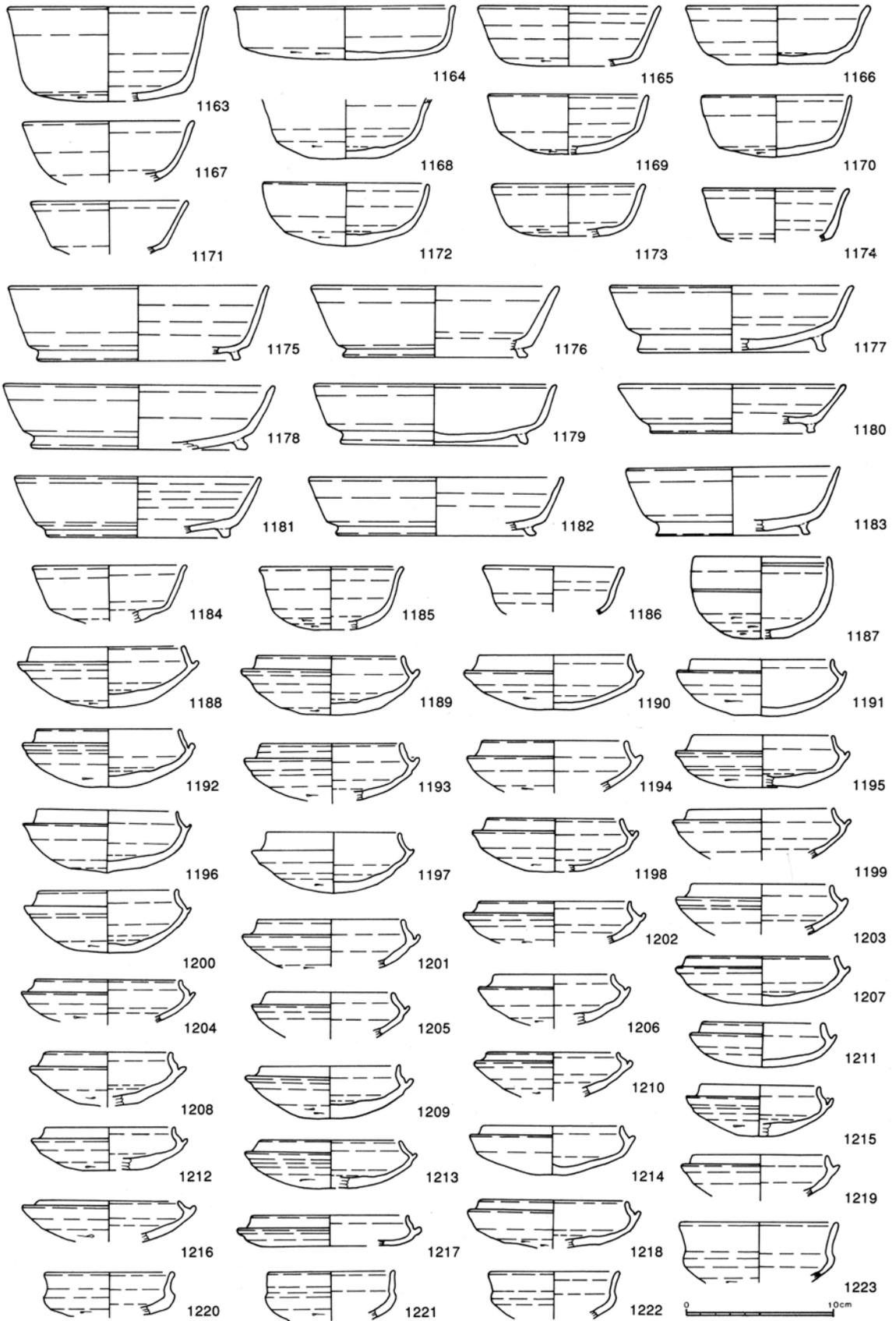


図 71 高針原 1 号窯出土遺物 21

第 IV 章

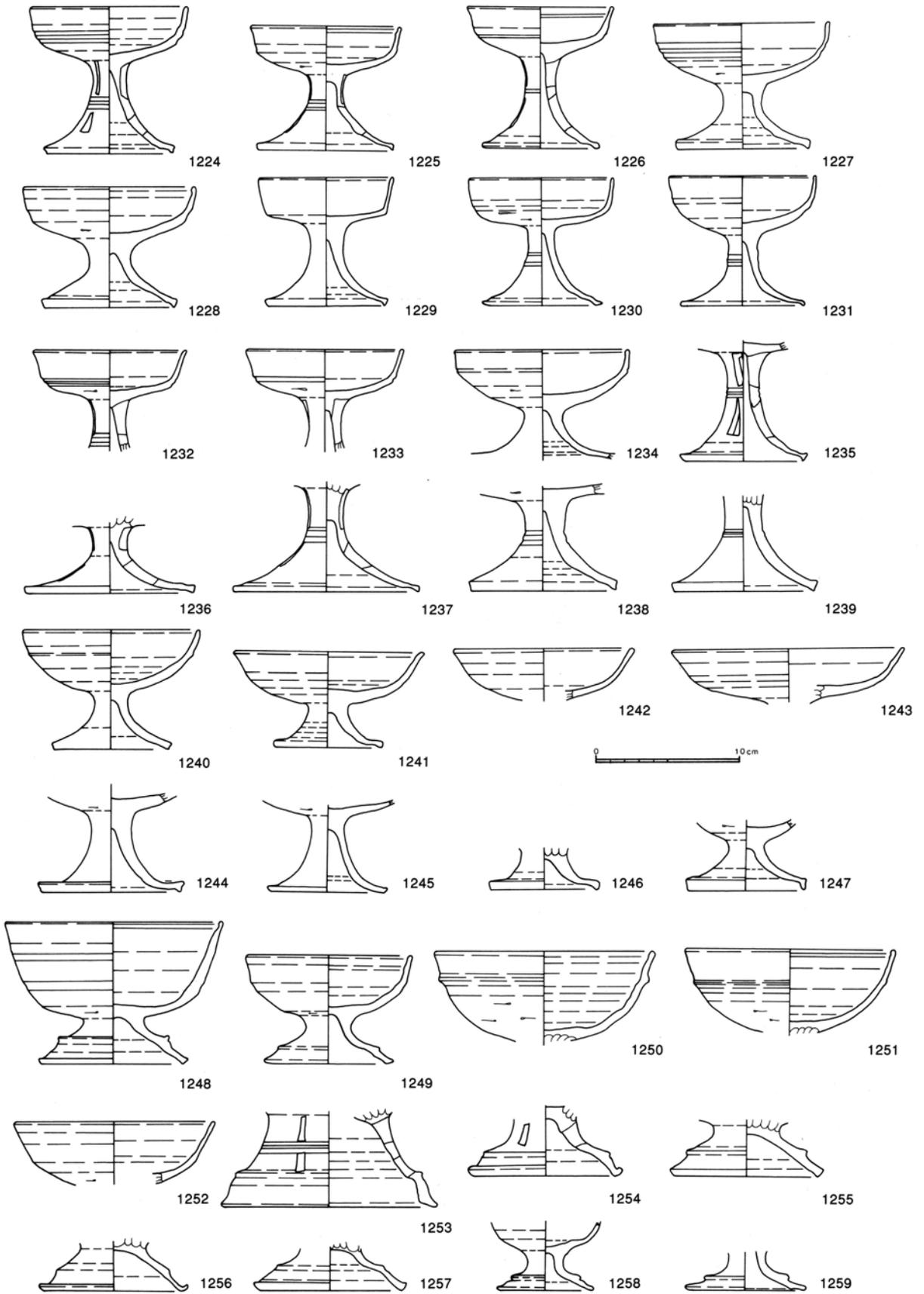


图 72 高針原 1 号窯出土遺物 22

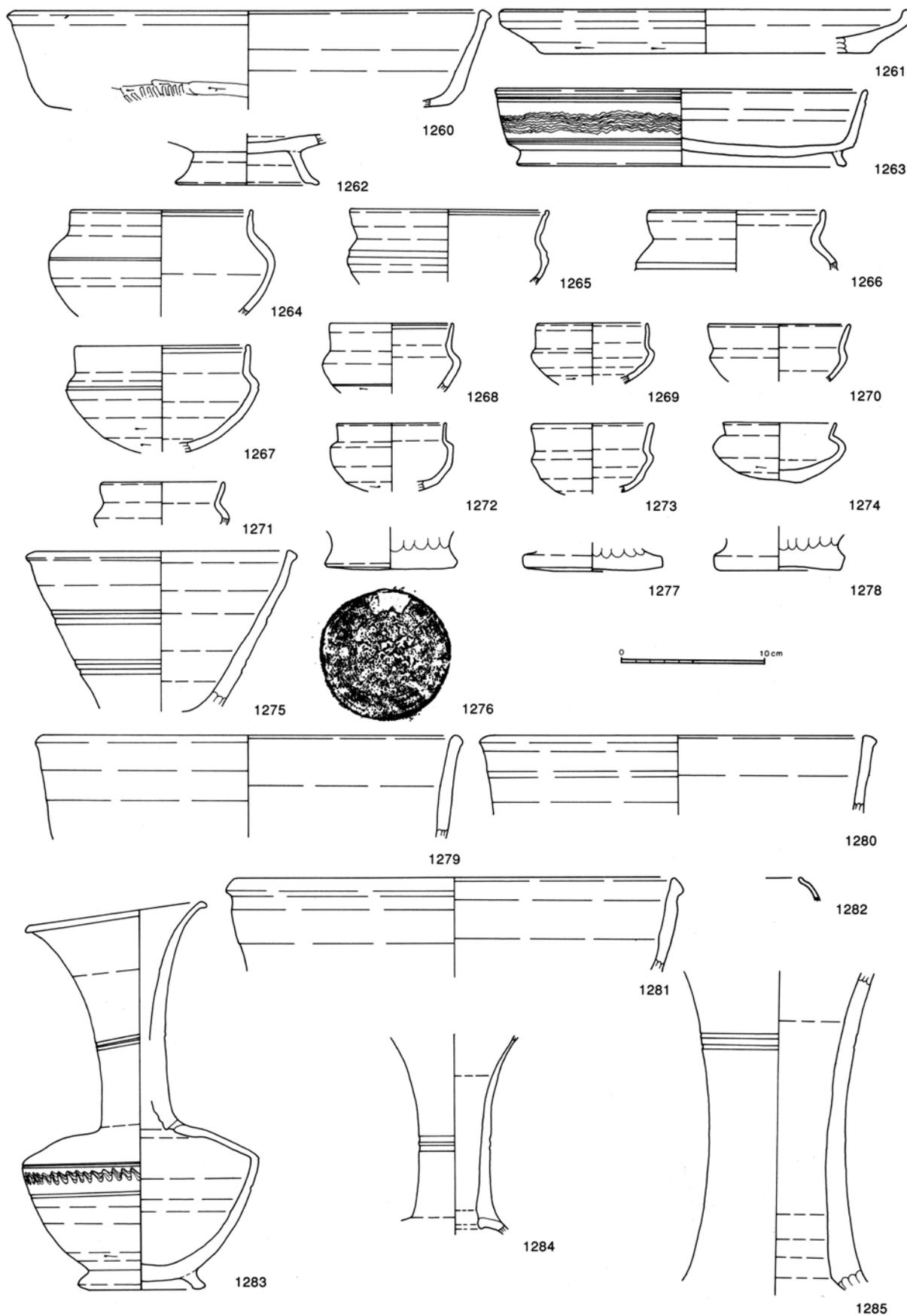


图 73 高針原 1 号窯出土遺物 23

第 IV 章

1264～1274は鉢A。1264～1267が大型、1268～1274が小型となる。1274はやや器高が低い。いずれも体部は張るが1274はこれが強い。1264、1265、1266、1268は沈線文、1265、1267は二重沈線文を体部に施す。1264～1267の口縁部内面には沈線文を施す。後述する細分によれば、1264、1266が3類、1265が1類、1267が2類となる。

1275～1278は鉢B。1275は底部を欠く。体部には二重沈線文を積む。1276～1278は底部片。1276は外底部に竹管による刺突が雑然と確認できる。刺突は貫通しない。

1279～1281は鉢C。いずれも口縁部片。

1282は鉢D。小型。やはり口縁部片。

1283～1332は壺・瓶。1303は焼成不良となる。

1283～1285は台付長頸瓶。1283は全形の判明する資料。高台を持つ形状で、体部には強い稜を持つ。頸部は長く大きく開く。頸部中央に二重沈線文、体部に組み合わせ文Aを施す。1284、1285は頸部片。1285は大型。頸部には二重沈線文を施す。

1286～1297はフラスコ形瓶。1286～1292はフラスコ形瓶A、1293～1296はフラスコ形瓶B。1286は全形が判明する資料。1287～1290、1294、1296は頸部外面に二重沈線文を施す。1295は、これが沈線文となる。1297は底部片。高台が付く。

1298～1302は平瓶。いずれも平瓶A。1302は、頸部がやや長い。1301、1302には頸部外面に二重沈線文を施す。

1303～1313は短頸壺。いずれも体部下方を欠く。1303～1309、1313が大型。1307、1308は体部外面に二重沈線文、1304、1305は沈線文を施す。なお、1303は外面に黄土塗布が確認できる。1310～1312は小型。口縁部が短く、体部が強く張る形状。1312に体部に沈線文を施す。

1315～1323は横瓶。1315～1322は横瓶A、1323は横瓶B。1317はほぼ全形が判明する資料。頸部は短い。口縁部は外反し、端部調整技法C類。体部は、青海波ナデ消し技法。形状は、長径方向で観察すると、やや下方に垂下した楕円形、短径方向では球形となる。頸部から沈線文を巡らす。

1324～1332はハソウ。1324、1325は全形の判明する資料。1326～1329は口縁部片。1327には頸部に沈線文が確認できる。後述する細分によれば、1325～1327、1329が1類、1324・1328が2類となる。1330～1332は体部片となる。1324～1331は丸底でハソウA。体部は肩が張る球形だが、1331はややつぶれる。1332は有高台でハソウB。体部は肩に稜を持つ。穿孔部が強調により注口状に発達する。

1333～1342は甕。

1333～1338は甕A。頸部には組み合わせ文Bが確認できる。1334、1335、1337、1338はB 1類で、充填文は1334が波状文、1335、1337、1338は刻目文、1333と1336がB 2類でオシビキ文と刻目文を充填する。

1339、1340は甕B。いずれも口縁部片。1339は、不明瞭だが刻書が確認できる。五文字あるが、最初の三文字のみ「黒見田」と判読できる。

「黒見田」

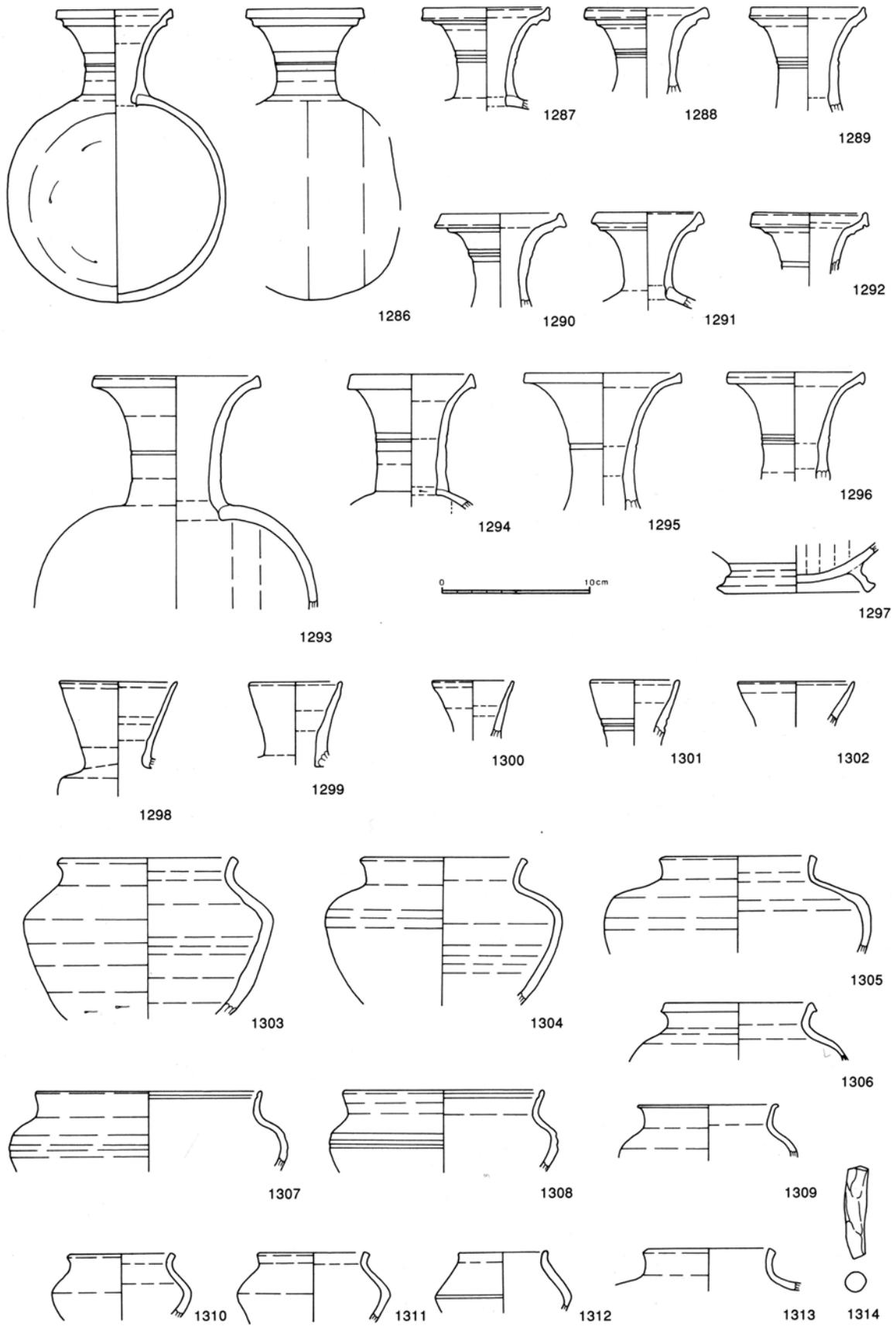


图 74 高針原 1 号窯出土遺物 24

第 IV 章

1341、1342 は甕C。口縁部片。口縁部は端部調整技法B 3類。

1343は陶錘。紡錘形を呈する。ナデ調整によるが、一部に右回りの手持ちケズリ調整を加える。小口部は手持ちケズリ調整。孔部の直径は、6.0mm、重量35.7gをはかる。

灰層II群中層 資料

灰層II群中層(図77-1344~1375)

灰層II群資料のうち、土層観察用のセクションベルト部分のみこれをさらに三つに分割して遺物を取り上げた。ここではこのうちの中層の資料を報告する。

図示した器種には蓋H、杯H、高杯C、鉢A、横瓶A・B、ハソウ、甕Aがある。

1344~1348は蓋H。後述する細分によれば、1344、1346が1類、1345、1347、1348が2類となる。

1349~1355は杯H。後述する細分によれば、1349、1351が1類、1350、1352~1355が2類となる。

1356・1357は高杯C。1356は脚部を、1357は杯部を欠く。1356の外面には稜、1357はスカシ文を施す。

1358~1360は鉢A。1358が大型、1359、1360が小型となる。いずれも体部は張るが1359、1360はこれが強い。いずれも体部最大径付近に沈線文を施す。1358には口縁部内面にもこれが確認できる。後述する細分によれば、1358は2類となる。

1361~1374は壺・瓶。1370はひずむ。

1361は、フラスコ形瓶Aの口縁部片。頸部に二重沈線文を施す。

1362~1364は平瓶A。1362は体部が一部残存。肩はやや張る。1362、1364は頸部に沈線文を施し、1362はこれが二重沈線文となる。

1365~1368は横瓶。いずれも口縁部片。1365、1366、1368は横瓶A。1367は横瓶B。頸部の形状は1366が直線的、1365、1367はゆるやかに外反する。

1369~1371はハソウ。1369、1370は口縁部片。後述する細分によれば、いずれも1類。1371は体部片となる。丸底でハソウA。体部は球形。

1373は壺の体部片。短頸壺か。体部はややつぶれる球形。最大径の若干上方に沈線文を巡らす。肩部には耳部を貼付した痕跡を残す。耳部は四か所か。

1375は甕A。焼成不良となる。口縁部片で、頸部には組み合わせ文B 2類が確認でき、刻目文を充填する。

灰層II群下層 資料

灰層II群下層(図78-1376~1407)

灰層II群資料のうち、土層観察用のセクションベルト部分のみこれをさらに三つに分割して遺物を取り上げた。ここではこのうちの下層の資料を報告する。

資料は乏しい。図示した器種には、蓋H、杯G・H・J、高杯A・C、鉢A、フラスコ形瓶A、横瓶A、ハソウAがある。

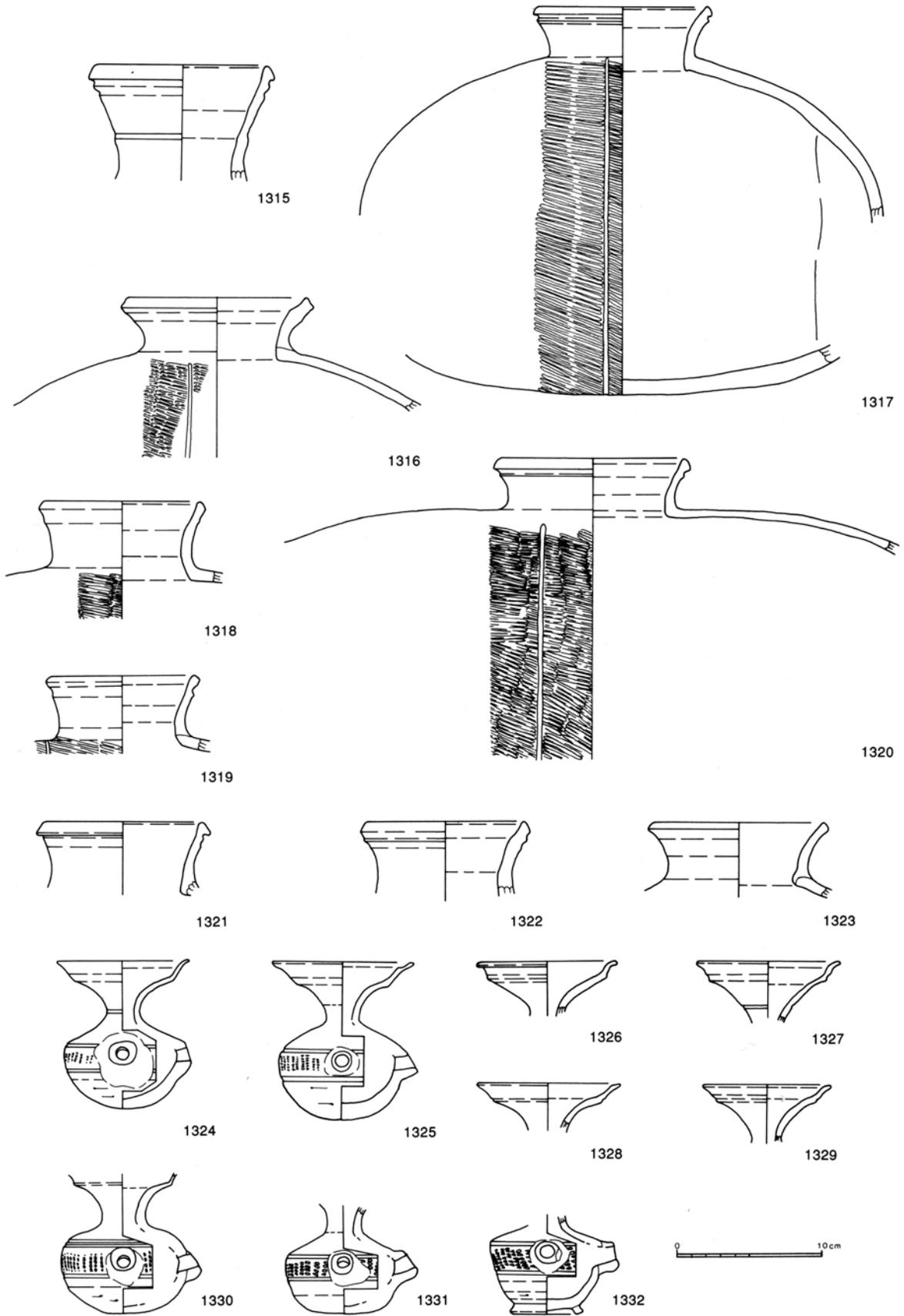


図 75 高針原 1 号窯出土遺物 25

第 IV 章

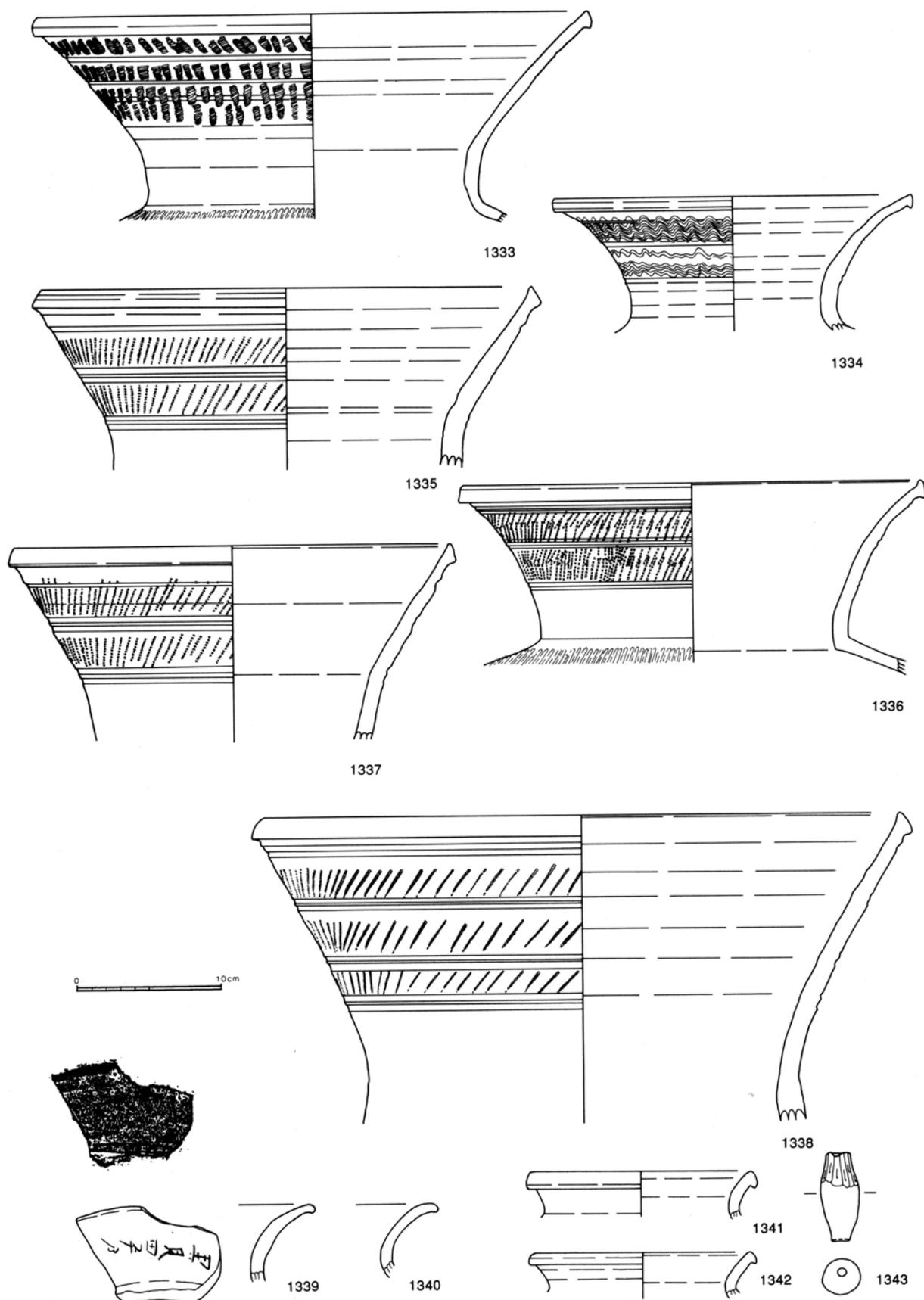


图 76 高針原 1 号窯出土遺物 26

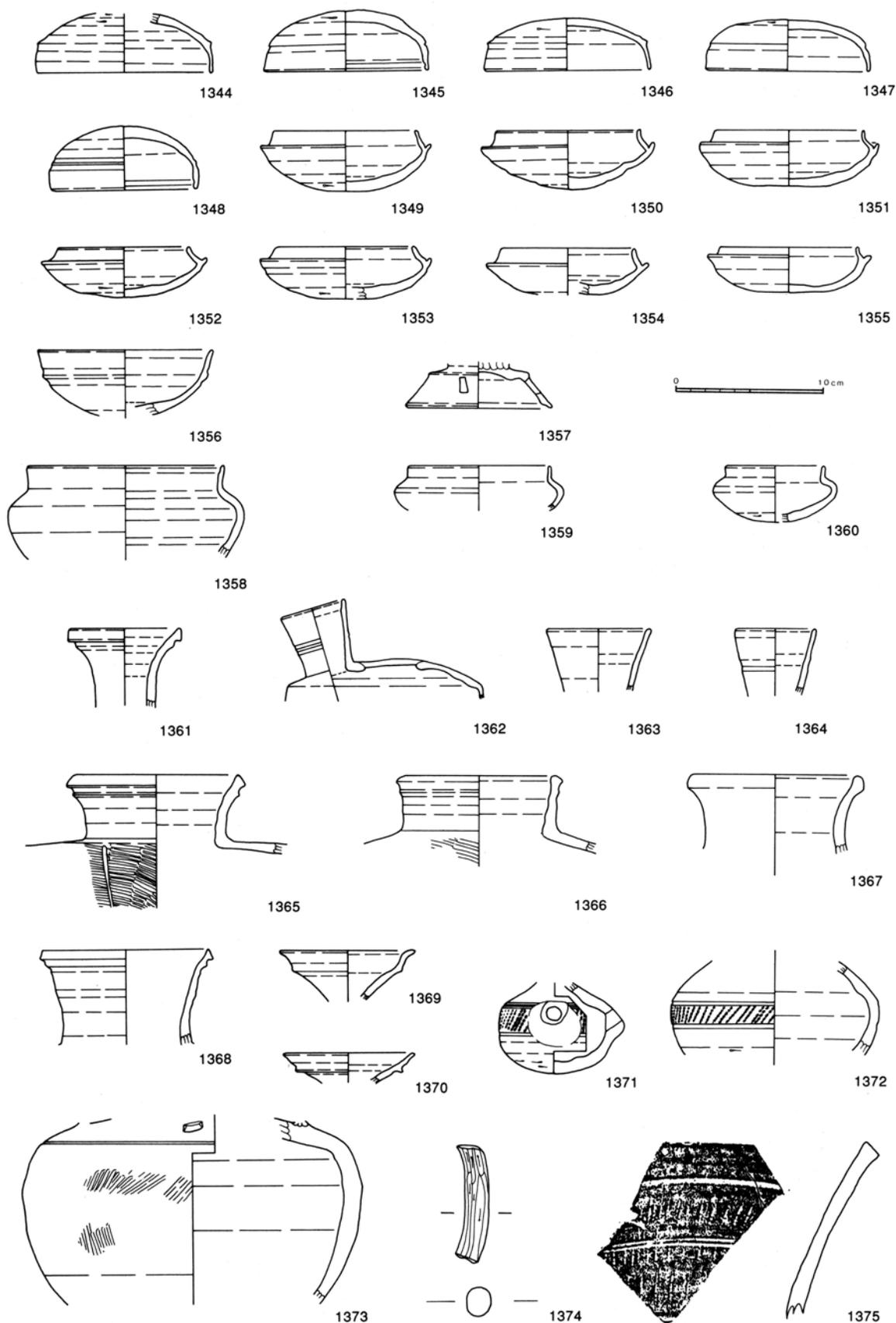


图 77 高針原 1 号窯出土遺物 27

第 IV 章

1376～1379は、蓋H。1376は焼成不良となる。後述する細分によればいずれも1類。
1380は杯G。丸みを帯びた体部を持つ。深手で、体部外面に二重沈線文を施す。
1381～1386は杯H。後述する細分によれば1381、1386が1類、1382～1385が2類となる。
1387は杯J。口縁部が直立する形状。
1388～1393は高杯。
1388～1390は高杯A。1388、1389は脚部を欠き、1390は杯部を欠く。1388は大振り。1390には組み合わせ文C類が確認できる。スカシは二か所となる。
1391～1393は高杯C。1391は脚部を欠き、1392、1393は杯部を欠く。1391の腰部には二重沈線文、1392には組み合わせ文C類が確認できる。
1394は鉢A。小型となる。体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。体部には肩に二重沈線文、下胴部に沈線文を施す。
1395～1406は壺・瓶。
1395～1398はフラスコ形瓶A。いずれも口縁部片で、頸部に二重沈線文を施す。
1399～1401は横瓶A。やはり口縁部片。1400は頸部がやや長い。
1402～1405はハソウ。1402、1403は口縁部片。後述する細分によれば、いずれも2類となる。1404、1405は体部片となる。丸底でハソウA。体部は球形。
1406は、瓶の口縁部片。端部で短く外反する。提瓶か。

灰層Ⅲ群資料

灰層Ⅲ群（図79－1408～1442）

資料は乏しい。図示した器種には蓋A、杯A・B・H・J、高杯B、鉢A、フラスコ形瓶B、平瓶A、横瓶、ハソウ、甕A・Bなどがある。

1408～1414は蓋。
1408～1413は蓋A。いずれも鈕を欠く。後述する細分によれば、1408～1411が1類、1412、1413が2類となる。
1414も鈕を欠く。蓋BないしCか。口縁部とかえり部の位置関係は、はほぼ同位置となる。
1415～1427は杯。1426はひずむ。
1415～1417は杯A。1415、1416は底部を欠く。1417は端部調整技法Aにより特徴的に仕上げられる。体部外面には沈線文を二段施す。
1418～1422は杯B。1422は口縁部を欠く。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。腰部は、1418、1421が稜を持つ。1419、1422はこれが明瞭ではない。1420は丸みを帯びる。高台は断面台形。外側に張り出す。
1423は、杯AないしB。口縁部片。口縁部直下に沈線文、体部に波状文を施す。

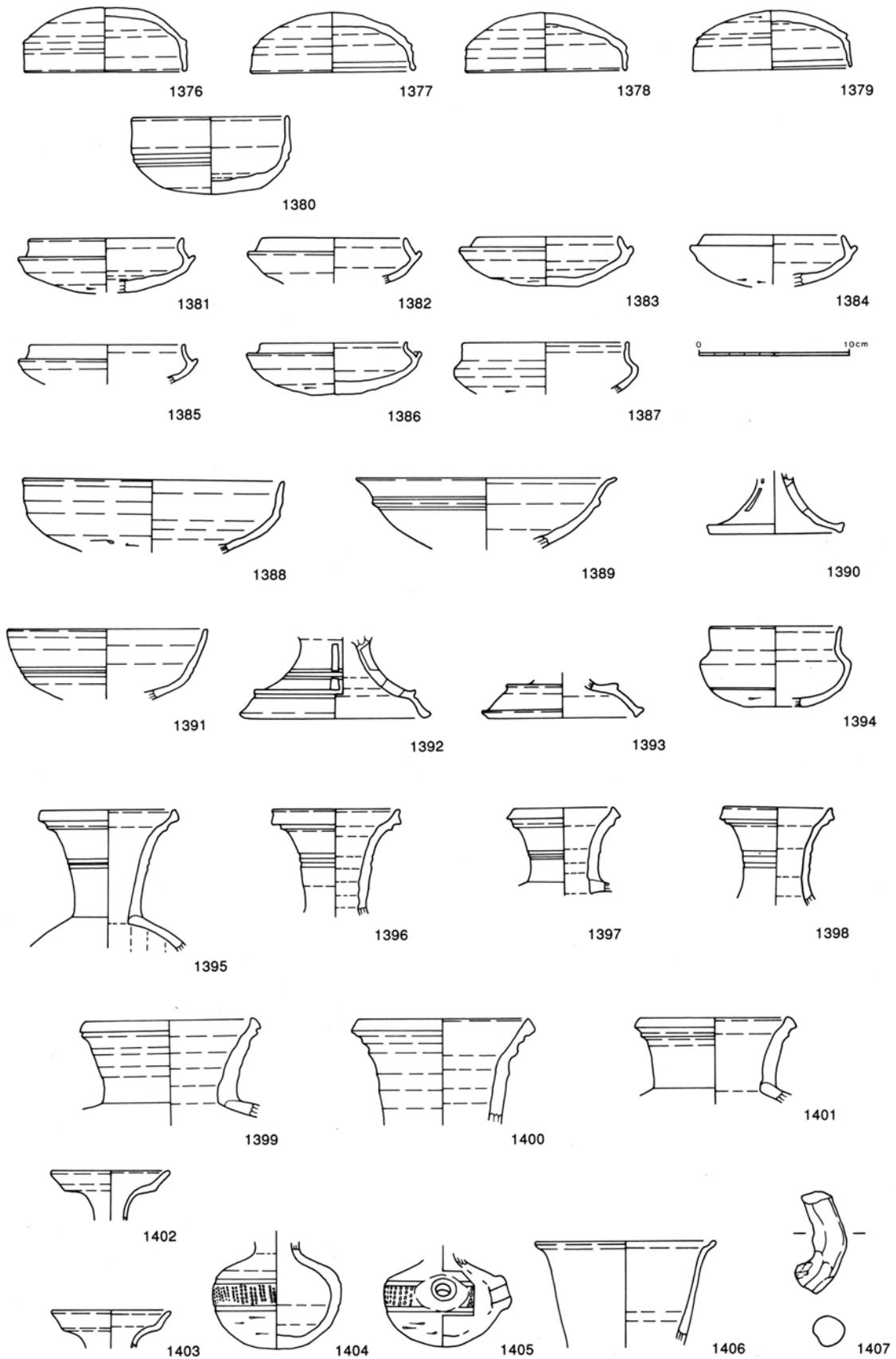


图 78 高針原 1 号窯出土遺物 28

第 IV 章

1424～1427は杯H。いずれも小振り。後述する細分では、1424が2類、1425～1427が3類となる。

1428は高杯B。脚部を欠く。杯部は浅い。

1429～1431は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

1432は鉢A。焼成不良となる。体部下方を欠く。肩は張り、口縁部は直立する。体部に沈線文を施す。

1433～1438は壺・瓶。

1433、1434はフラスコ形瓶B。いずれも口縁部片。

1435は平瓶A。やはり口縁部片。

1436、1437は横瓶A。1436は頸部に二重沈線文を施す。

1438はハソウ。口縁部片。後述する細分によれば1類。

1439～1442は甕。1442は焼成不良となる。

1439～1441は甕A。いずれも口縁部片、頸部外面に組み合わせ文B 1類を施す。充填文は1439が刻目文、1440、1441は波状文。

1442は甕B。口縁部片。

灰層IV群資料

灰層IV群（図80－1443～1466）

資料は乏しい。図示した器種には蓋A、杯B、鉢B、台付長頸瓶A・B、フラスコ形瓶A、短頸壺、横瓶A・B、甕Bなどがある。

1443、1444は蓋A。いずれも鈕を欠く。後述する細分では、1類に属する。

1445～1453は杯B。1445、1447、1453は焼成不良となる。すべて口縁部を欠く。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。腰部の形状は、1446が稜を持ち、1443、1448、1452はこれが明瞭ではない。高台は断面台形。屈曲気味に、張り出す。

1454～1456は高杯脚部片。一応、高杯Bに含める。

1457は鉢B。口縁部を欠く。底部周辺はタタキ整形。外底部には刻書「黒」が確認できる。

1458～1464は壺・瓶。

1458は台付長頸瓶。頸部片。二重沈線文を二段施す。

1459はフラスコ形瓶A。口縁部片である。

1460は短頸壺。口縁部はわずかに内傾する。

1461～1463は横瓶。いずれも口縁部片で、1461、1462が横瓶A。1463が横瓶Bとなる。

1465は甕B。口縁部の小片。

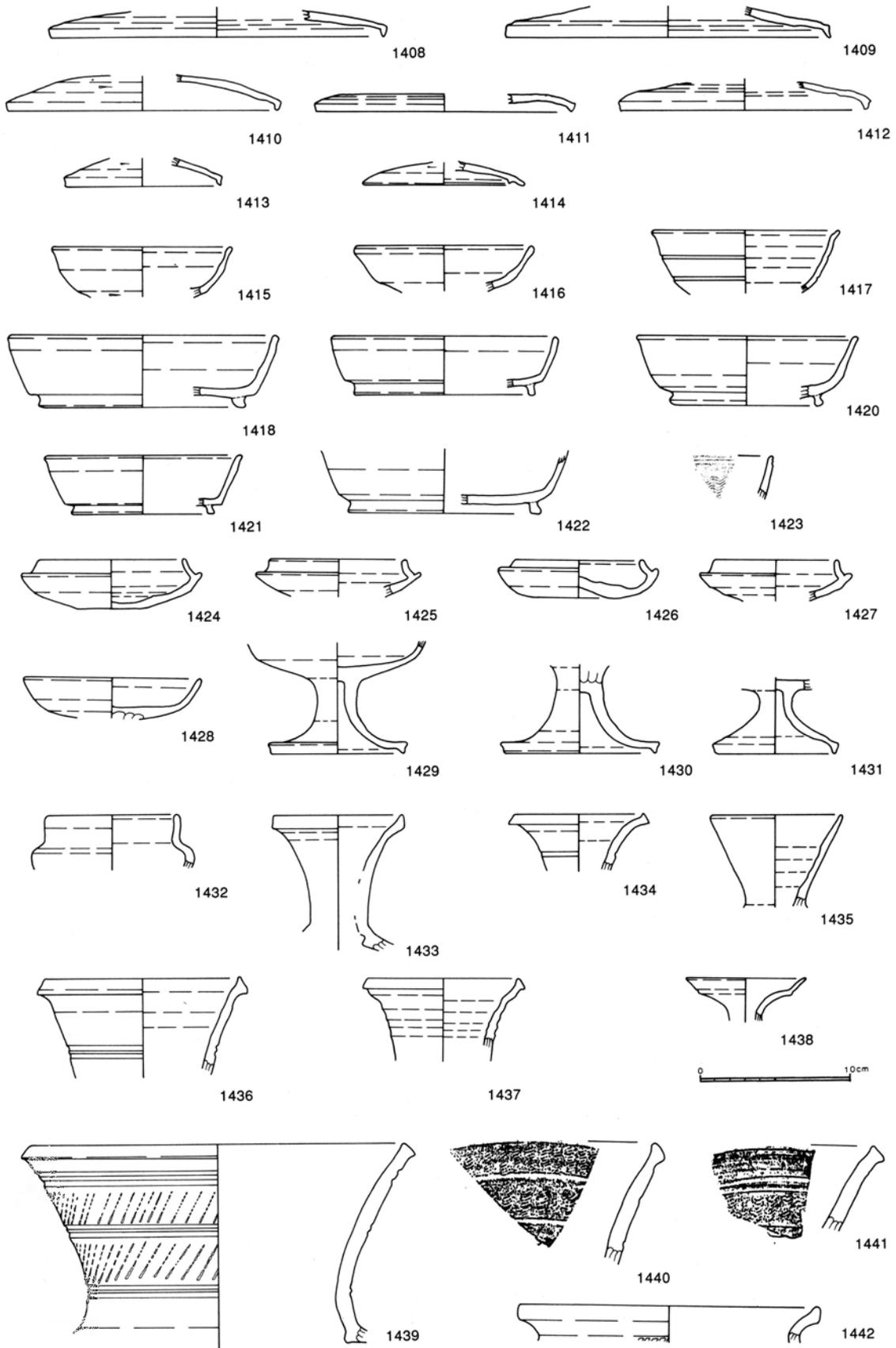


図 79 高針原 1 号窯出土遺物 29

第 IV 章

間層資料

間層 (図 80 - 1467 ~ 1474)

資料は乏しい。図示した器種には蓋 A・H、杯 H、フラスコ形瓶 A・B、甕 C がある。

1467、1468 は蓋。

1467 は蓋 A。鈕を欠く。後述する細分によれば、1 類となる。

1468 は蓋 H。小振り。後述する細分によれば、3 類となる。

1469 は杯 H。扁平な形状。後述する細分によれば、3 類となる。

1470 は高杯の脚部片。高杯 B か。

1471 ~ 1473 はフラスコ形瓶。いずれも口縁部片。1471 がフラスコ形瓶 A、1472、1473 がフラスコ形瓶 B。

1474 は甕 C。口縁部片。

表土層資料

表土層 (図 81、82 - 1475 ~ 1559)

図示した器種には蓋 A・H、杯 A・B・G・H・J、高杯 A~C、盤 A~C、鉢 A・C・D、フラスコ形瓶 A・B、短頸壺、横瓶 A・B、ハソウ、甕 A・C、陶管などがある。

1475 ~ 1496 は蓋。1475 は焼成不良となる。

1475 ~ 1482 は蓋 A。1480 ~ 1482 は鈕を欠く。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とする。

1483、1484 は蓋 B。鈕は 1483 が低くつぶれた宝珠形、1484 がボタン状となる。口縁部とかえり部の位置関係は、1484 はかえり部が高位置、1483 はほぼ同位置となる。

1485 ~ 1488 は鈕を欠く。蓋 B ないし C か。口縁部とかえり部の位置関係は、1486、1487 はかえり部が高位置、1485 はかえり部がやや突出する。1488 はかえり部が痕跡的となる。

1489 ~ 1496 は蓋 H。

1497 ~ 1517 は杯。

1497 ~ 1499 は杯 A。いずれも底部を欠く。法量や形状はばらつく。1497 は口縁部直化に沈線文、腰部付近にオシビキ文を施す。

1500 ~ 1510 は杯 B。法量により中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形。内側で接地し、外側に張り出す。

1511 ~ 1513 は杯 G。いずれも小振り。

1514 ~ 1516 は杯 H。1514、1515 は底部を欠く。

1517 は杯 J。器高がやや高い。

1518 ~ 1530 は高杯。1522 ~ 1524 は焼成不良となる。

1518 ~ 1526 は高杯 B。1518 は脚部を欠く。1519 ~ 1526 は高杯脚部片。一応、高杯 B に含める。

1527 ~ 1530 は高杯 C。1527、1528 は脚部を欠き、1529、1530 は杯部を欠く。1527、1528 は杯部に突帯が付く。なお、1529 は組み合わせ文 C 類が確認できる。

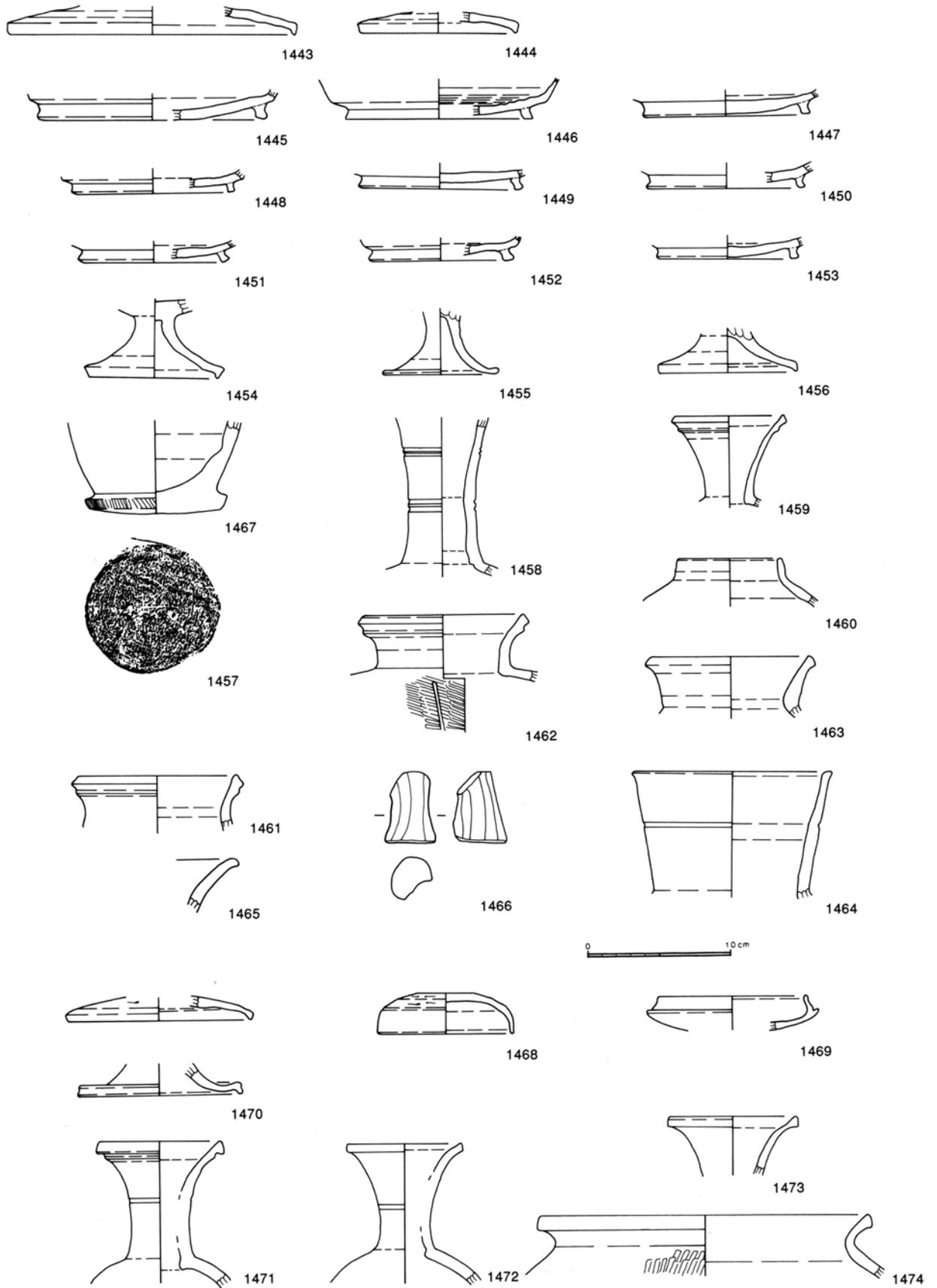


图 80 高針原 1 号窯出土遺物 30

1531～1534は盤。1533は焼成不良となる。

1531、1532は盤A。1531は器壁が薄く浅い。丸底となる。1532は、器壁が厚く平底の盤。口縁部で屈曲する。

1533は盤B。脚部片。器高はやや高い。

1534は盤C。口縁部直下と腰部に沈線文、体部に波状文を施す。

1535～1538は鉢。

1535、1536は鉢A。頸部は鈍く屈曲し、口縁部で外反する。

1537は鉢C。底部片。

1538は鉢D。口縁部付近で丸みを帯びて屈曲する。

1539～1551は壺・瓶。

1539～1542はフラスコ形瓶。いずれも口縁部片。1539、1540はフラスコ形瓶A、1541、1542はフラスコ形瓶B。1542は頸部に二重沈線文を施す。

1543～1546は短頸壺。いずれも下胴部を欠く。口縁部の形状は、1543がやや長く直立し、1544～1546は短く外反する。

1547～1550は横瓶。いずれも口縁部片。1547が横瓶A。1548～1550は横瓶B。1548は頸部が太く短い。

1551はハソウ。口縁部片。頸部に二重沈線文を施す。

1553～1555は甕。1555はひずむ。

1553は甕A。口縁部片。頸部外面に組み合わせ文B 1類を施す。充填文は波状文。

1554は甕C。口縁部片。口縁部は端部調整技法B 3類。

1555は甕の底部片。平底。底部調整技法B類による。

1556は器種不明。厚い鏝部に、薄く直立する口縁部を持つ形状として図化した。

1557は形状から硯である可能性を持つ。小型の盤状の器形で、整形はラフである。上面は、周辺部がほぼ3mm程度窪み、中央部分はやや突出する。外底部には、直径2mmの穿孔が確認できるが、上面まで貫通していない。

1558は陶管。残存する前面がナデ調整。外面には黄土塗布が確認できる。

攪乱層資料

攪乱層（図83～85－1560～1698）

図示した器種には蓋A～D・H、杯A・B・H・J、高杯B・C、鉢A～D、フラスコ形瓶A・B、平瓶A、短頸壺、横瓶B、ハソウA・B、甕A・C、円面硯、陶管などがある。

1560～1593は蓋。

1560～1574は蓋A。1572～1574は鈕を欠く。鈕は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、1571はボタン状となる。

1575～1579は蓋B。口縁部とかえり部の位置関係は、1575、1578はかえり部が高位置、

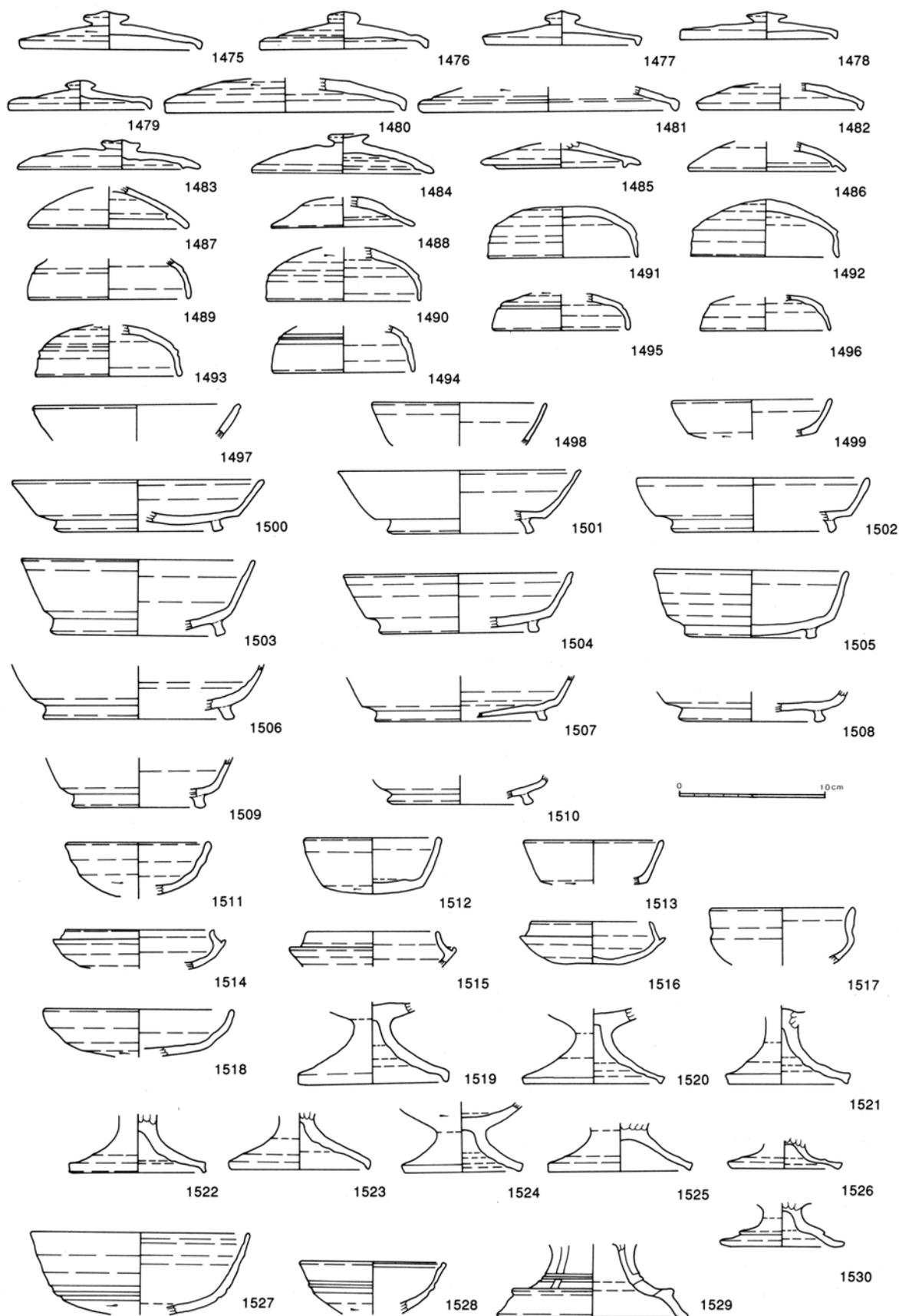


图81 高針原 1 号窯出土遺物 31

第 IV 章

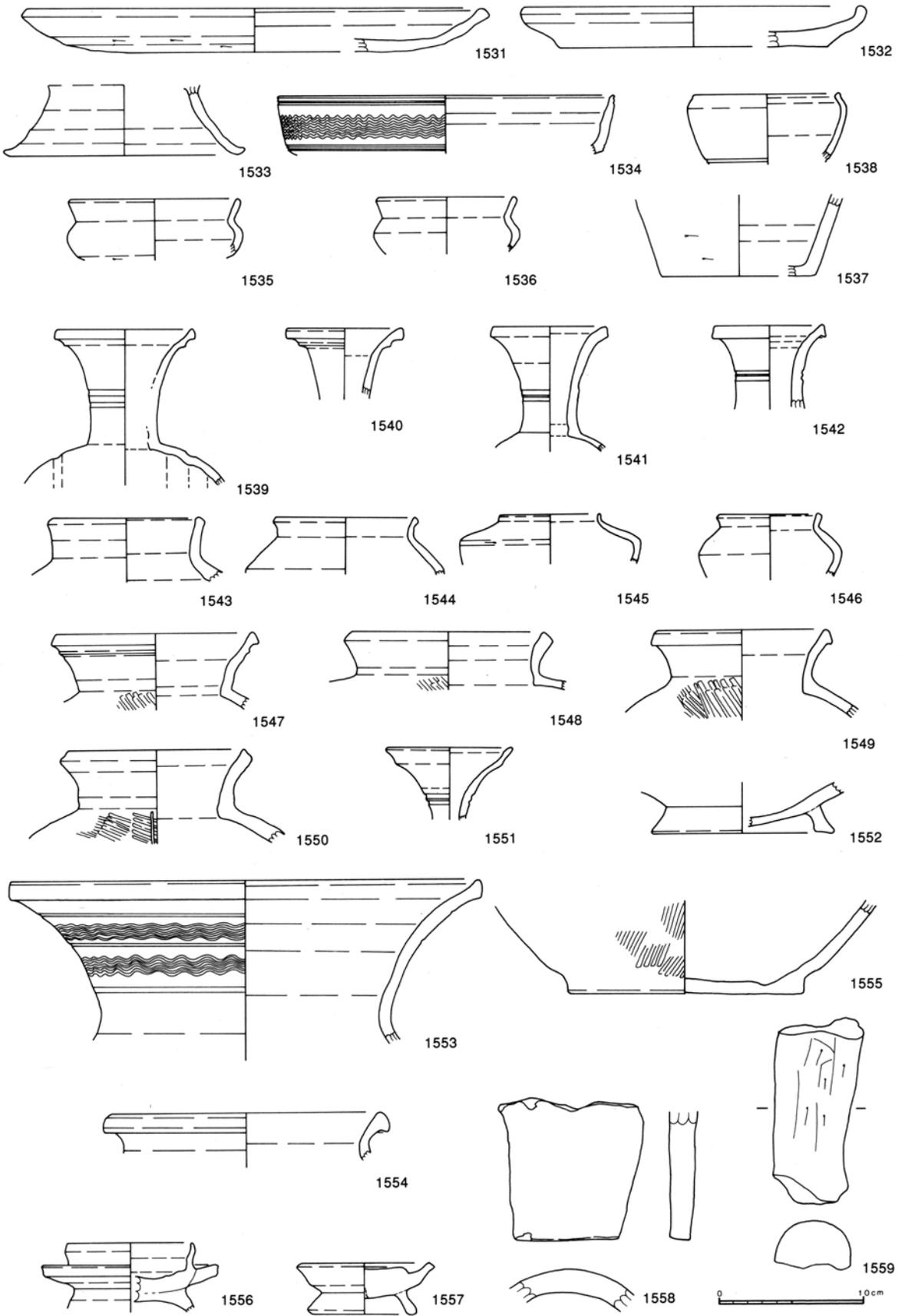


图82 高針原1号窯出土遺物32

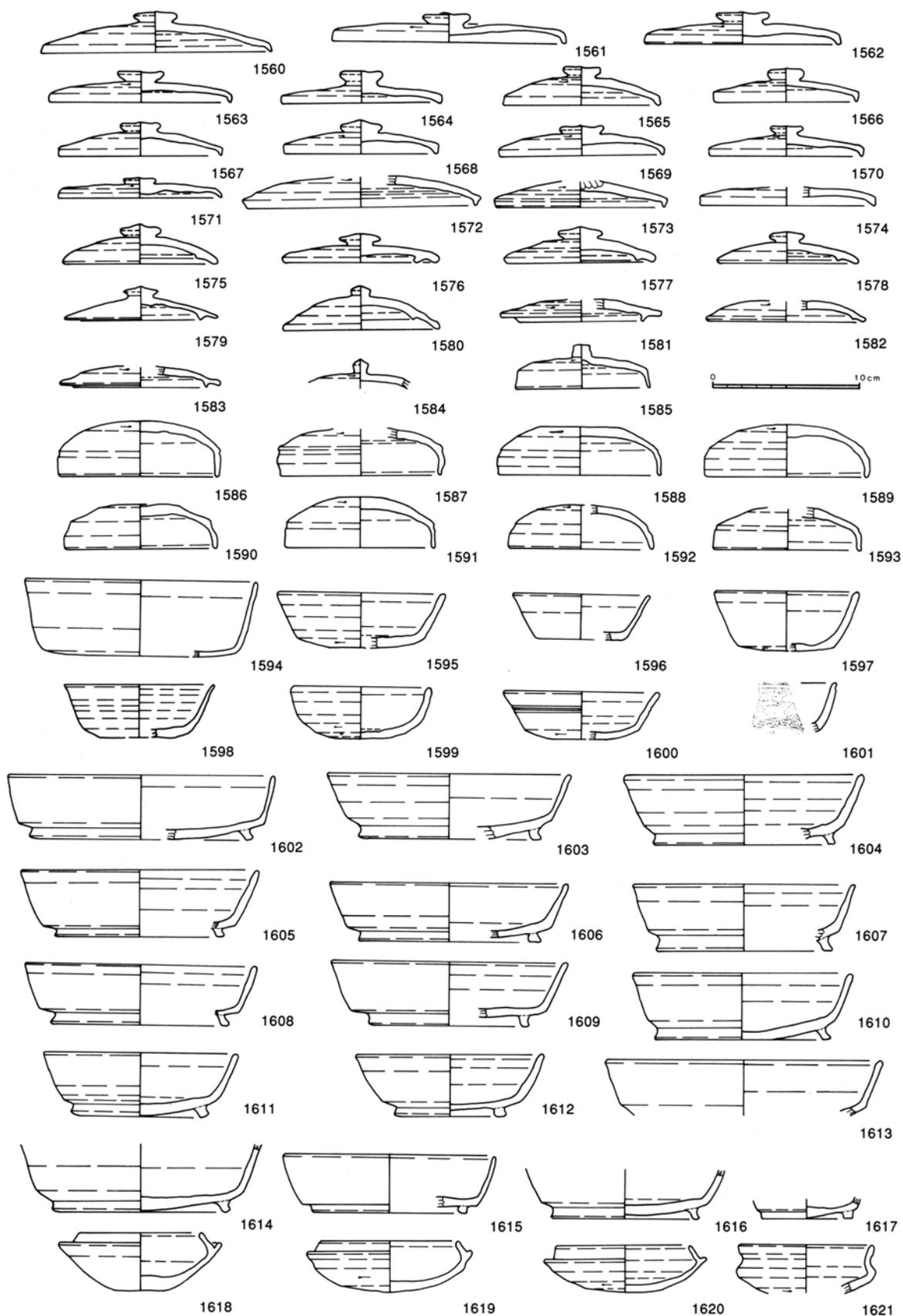


図 83 高針原 1 号窯出土遺物 33

第 IV 章

1576、1577 はほぼ同位置、1579 はかえり部がやや突出する。

1580 は蓋C。鈕はつぶれ、かえり部が痕跡的となる

1581～1583 は鈕を欠く。蓋BないしCか。口縁部とかえり部の位置関係は、1582 はかえり部が高位置、1581、1583 はかえり部がやや突出する。

1585 は蓋D。小振りとなる。

1586～1593 は蓋H。

1594～1621 は杯。1611、1616、1618 は焼成不良となる。

1594～1601 は杯A。法量や形状はばらつく。1600 は体部中央に二重沈線文、1601 は口縁部直下に沈線文、腰部にオシビキ文を施す。

1602～1617 は杯B。1614～1617 は口縁部を欠く。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形。丸みを帯び、外側に屈曲気味にやや張り出すものが多い。

1618～1620 は杯H。

1621 は杯J。底部を欠く。口縁部は外反する。

1622～1633 は高杯。1633 は焼成不良となる。

1622～1624 は高杯B。1623、1624 は脚部を欠く。1625～1628 は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

1629～1633 は高杯C。1629、1630 は脚部を欠く。1629 は杯部に稜を持つ。1630 は深い杯部を持つ。1631～1633 は脚部片。

1634～1646 は鉢。

1634～1640 は鉢A。1634～1636 が大型、1637～1640 が小型となる。いずれも体部は張るが1640 はこれが弱い。1634～1636 は体部最大径付近に二重沈線文を施す。

1641～1643 は鉢B。いずれも底部片。1643 は底部がやや薄い。

1644 は鉢C。口縁部片。

1645、1646 は鉢D。やはり口縁部片。

1647～1689 は壺・瓶。

1647～1665 はフラスコ形瓶。1647～1660 は口縁部片。1647～1656 はフラスコ形瓶A、1657～1660 はフラスコ形瓶B。1662 は底部片。高台を持つ。1663～1665 は体部片。環状刻目文を円形の沈線文で囲む。

1667～1671 は平瓶A。口縁部片。1672、1673 は平瓶の把手片。全面手持ちケズリ調整による。断面形は円形。

1674～1676 は短頸壺。いずれも体部下方を欠く。口縁部は外反する。

1679、1680 は横瓶B。いずれも口縁部片。

1681～1689 はハソウ。1681～1684 は口縁部片、1685～1689 は体部片となる。1685、1686 は丸底でハソウA。体部はやや肩が張る球形。1687～1689 は有高台でハソウB。1687 の体部は隅丸長方形。穿孔部が強調により注口状に発達する。

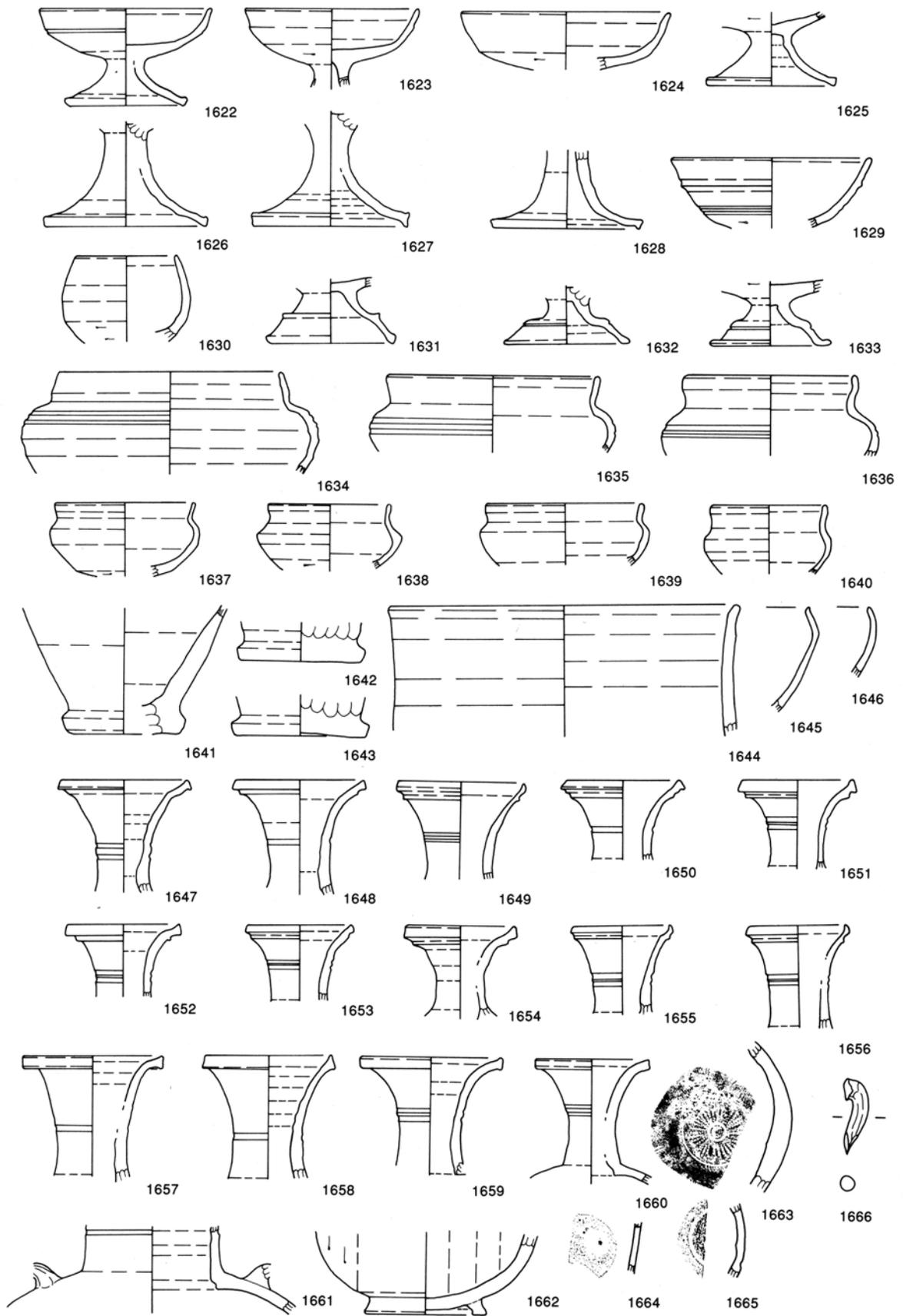


图 84 高針原 1 号窯出土遺物 34

第 IV 章

1691～1693は甕。

1691、1692は甕A。口縁部片。いずれも頸部外面に組み合わせ文を施す。1691は、組み合わせ文B 1類。充填文は刻目文。1692は、組み合わせ文B 2類。充填文は刻目文。

1694は円面硯。上面の破片。残存する側面には、ヘラによる線刻が確認できる。

1695は陶管。残存する前面がナデ調整。外面には黄土塗布が確認できる。

刻書土器

1696～1698は刻書が確認できる資料を集めた。1696は甕Aの頸部片。口縁部に沿って『瓦』と焼成後に刻まれる。1697は鉢または壺の底部片。外底部にやはり『瓦』と刻書される。1698は杯の底部片。外底部に『廿七』と刻書される。

(2) 窯道具

確認できた窯道具には、支持具とその他の窯道具となる。

① 支持具

支持具には棒トチと焼台がある。

棒トチ (図 86 - 1699 ~ 1705)

整形時に削り取られた製品のバリを、そのまま支持具に転用したもの。一般的には細長く棒状を呈するが、一定の規格は認められない。7点図示する。

焼台

今回の調査で得られた焼台には、直径10cm大の礫を使用しているもの(以下礫焼台と仮称する)、甕など大型品の破片を転用したもの(以下転用焼台と仮称する)などがある。なお、実際の使用は、これらを単独で用いるよりも、二種類以上を組み合わせられることが多い。

礫焼台(図版 45・46 - 1706 ~ 1712)は、拳大の転石を焼台として使用したもの。図版 46は、その使用例となる。いずれも表面に被熱や自然釉、製品の釉着などが確認できる。石材はほぼチャートで、出土位置に傾向をうかがうことはできない。完形品が517点、破片が7799点得られた。重量は完形品が124604.3 g、破片が952101.3 gである。破片の出土数を、破片の総出土点数と、完形品の平均重量241 gから求めると、3951点となる。これに完形品数を加えると4468点となる。

焼台の数量

転用焼台(図 87 - 1713 ~ 1718)は、焼成不良品の破片を焼台として使用したものを呼ぶ。転用痕跡の存在のみを根拠として識別するため、実数の把握が困難となる。焼成時には、これを礫焼台、剥離壁片などと組み合わせ、焼成時の焼台としている。転用される器種、部位は、甕の体部片がほとんどを占める。また、転用に際しては、破片の大きさや

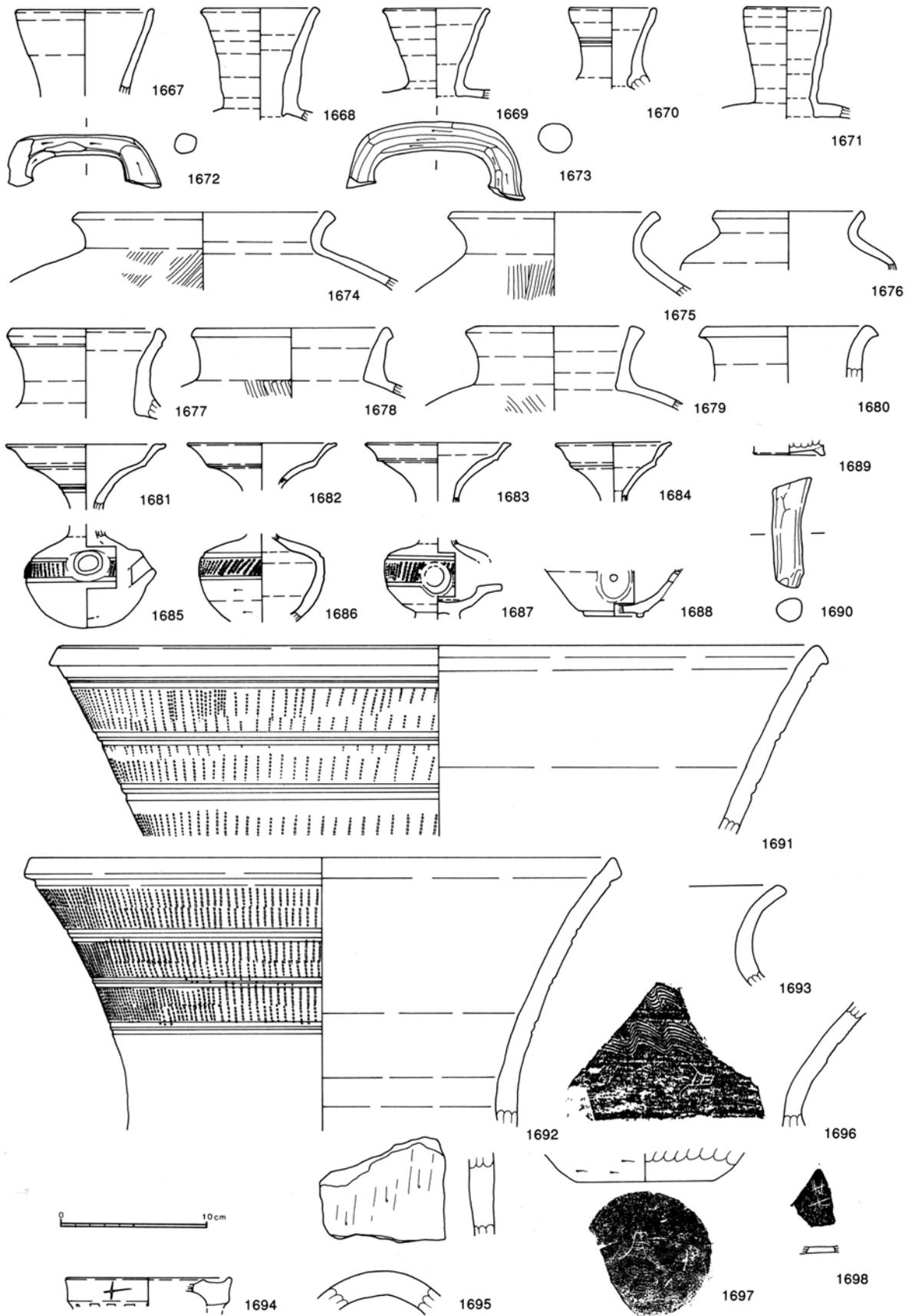


图 85 高針原 1 号窯出土遺物 35

形状などを加工したもの一部には含まれる。加工法は、周囲の全てまたは一部に研磨が確認できるもの(1713～1717)や、周囲の全てまたは一部を打ち欠いたもの(1718)などがある。なお、前者については焼台以外の用途もあわせて考える必要もあるが、確実に焼台として使用した痕跡をとどめるものも含まれることから、一応ここに含めている。

② その他の窯道具

当て具 1719、1720は、半球形の体部に扁平な鈕が付く形状。鈕には穿孔が確認できる。1721はこれらの破片か。全体的に華奢な感が否めないが、ここでは一応当て具の可能性を考え、窯道具として分類する。底部調整技法A類に関連するのか。

分焰棒(図版46-1722・1723)

窯体の構造物であるがここで扱う。管状のスサ入り粘土が被熱したもので、直径10.0cm程度をはかる。5点出土している。直径約4.0cmの穴部が中央にみられる。表面は自然釉や窯壁極小片が付着するのが特色となる。

(3) 土師器(図88-1724～1731)

土師器長胴甕 灰原Ⅱ群を中心とし、若干の土師器の破片が出土した。器種はすべて甕である。完形品はなく、1～3が比較的大きく接合した他は、底部および胴部の破片が若干出土している。

1724は長胴甕である。口径19.7cm、器高は残存部分が29.1cm、胴部最大径22cm。口縁は頸部より緩やかに立上り、端部はつまみ上げられ面をなす。口縁部外面は横ナデ、内面は頸部まで横ハケが施される。胴部は張りが弱く、頸部から約11cmのところまで最大径をもつ。胴部外面は3段以上の縦ハケを施す。内面は横方向の板ナデが痕跡をとどめるほか、縦方向のナデもわずかに認められる。下部は調整が粗く、輪積み及び指押えの痕が残る。器厚は0.4～1.0cmで全体に厚めである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。外面頸部以下が熱を受けて赤味を帯びるが、煤の付着はない。

1725は甕の口縁部である。口径21.6cm。口縁は頸部より緩やかに立上り、途中で屈曲して大きく外に開く。端部は上方につまみ上げられ、丸くまとまる。口縁部は内外面とも横ナデを施すが、内面括れ部には横ハケの痕がわずかに残る。胴部は外面に細かい縦ハケ、内面に横方向の板ナデを施す。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。

1726は長胴甕である。器高は22.8cmを残す。底径は6.8cm。胴部外面は4段以上の縦ハケを施し、内面は横方向の板ナデ痕を残す。底部は平底で、体部は底部より内湾気味に立ち上がり外へ開く。外面最下部を横方向のケズリで整えており、底面端部が若干盛り上がった状態になる。器厚は0.3～0.7cmで非常に薄い。胎土は粗く、砂粒を多く含む。熱を受けて一部黒～灰茶色に変色する。

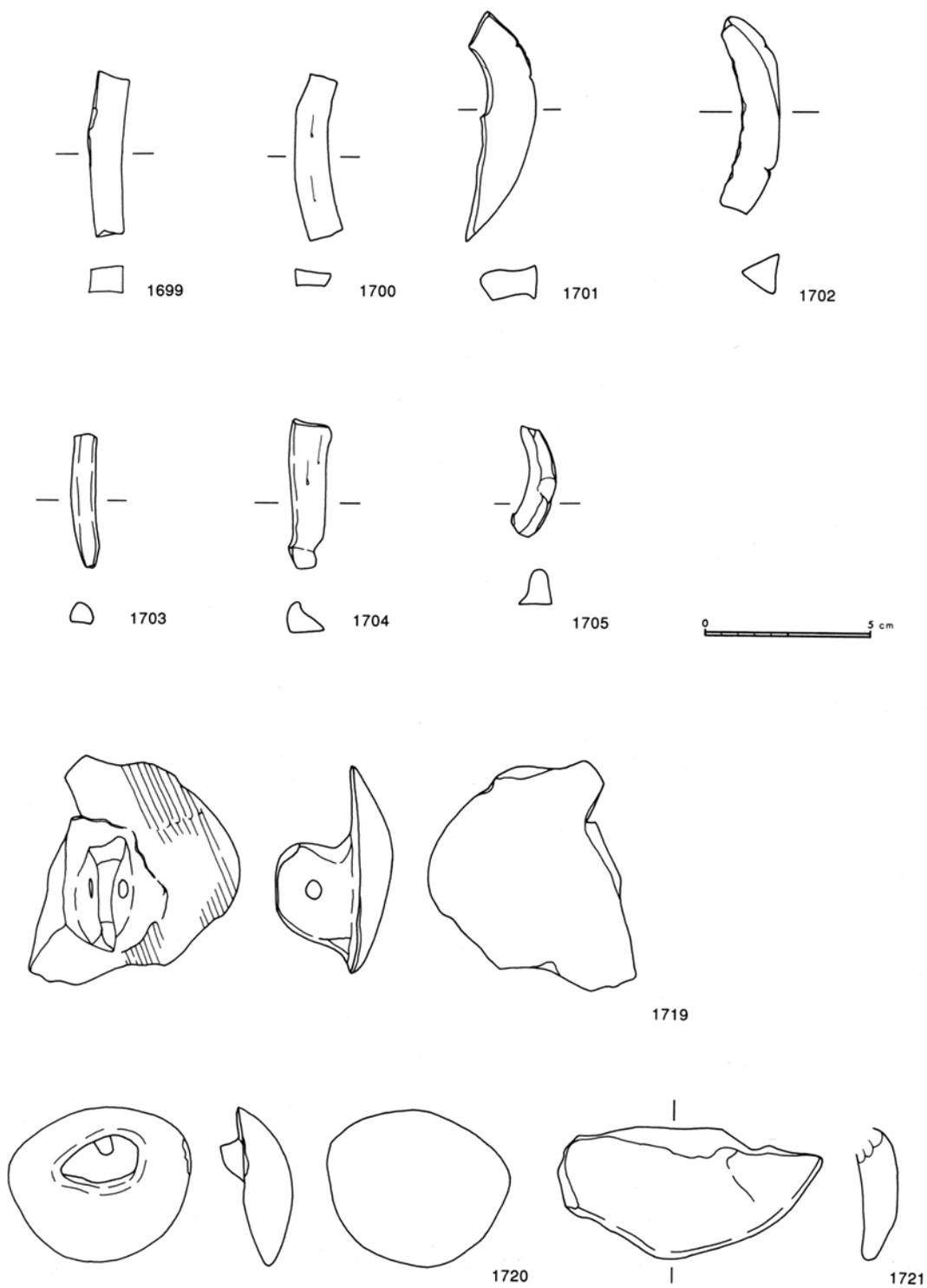


图 86 高針原 1 号窯出土遺物 36

第 IV 章

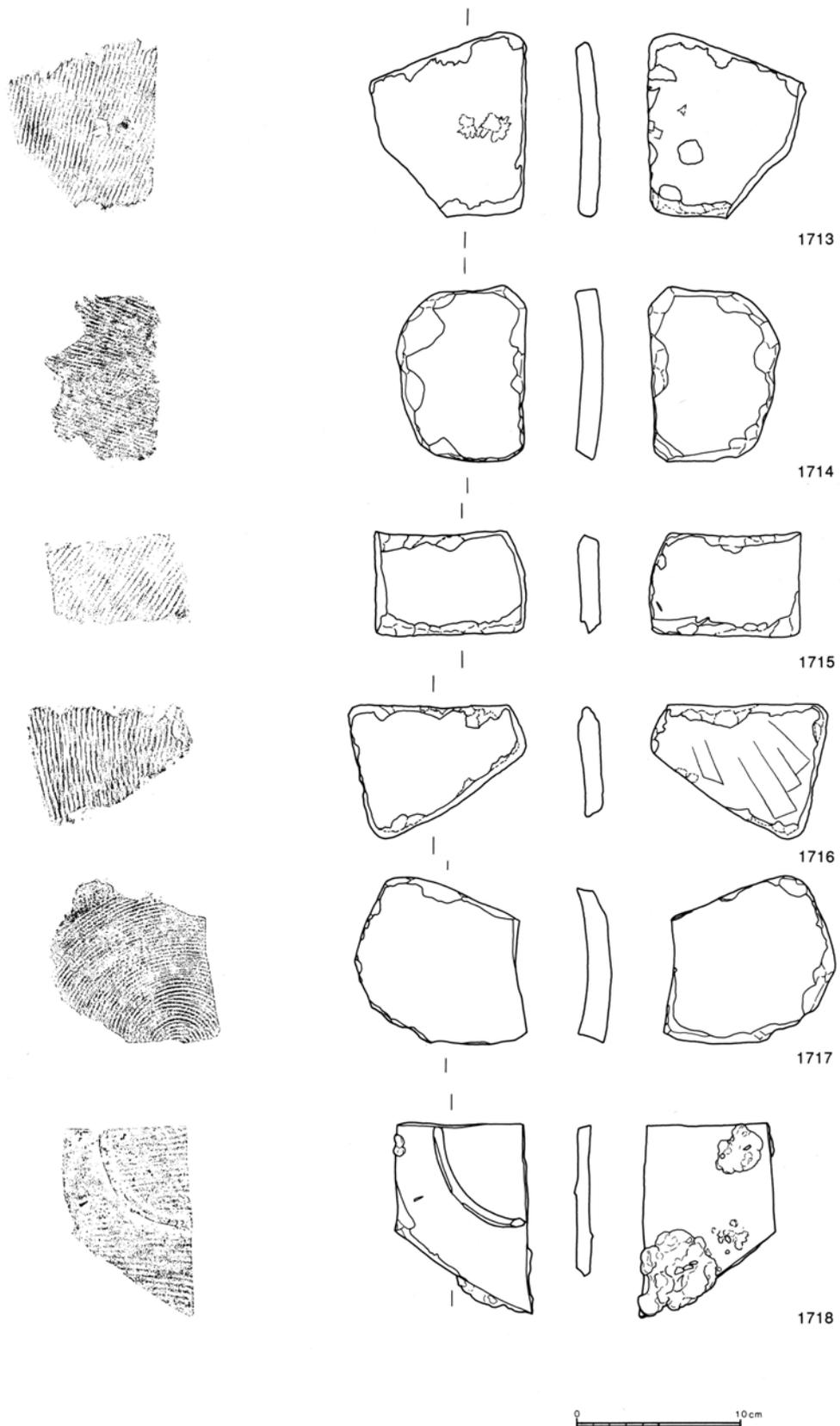


図 87 高針原 1 号窯出土遺物 37

1727～1731は甕の底部で、すべて平底である。底径は6.4～8.0cm。体部外面は立上り部分に横ナデが施され、若干括れた状態になる。1731は外面立上りに工具による明瞭な横ナデを施す。底部外面は1727、1728が中央に向って若干浮き上がるが、1731は1726と同様完全な平坦面をなす。木葉等の痕跡は残りが悪く確認できない。また、底部内面はすべて平坦面を持たず、湾曲してそのまま体部へ続く。胎土は粗く、砂粒を多く含み、1728～1731には雲母の含有が目立つ。

(4) そのほかの遺物 (図 89 - 1732、1733)

本調査区では、高針原 1 号窯より年代が下がり、これと直接の関連が考えられない遺物も出土している。1732、1733は灰釉陶器の椀。いずれも表土層などから出土し、SY01 周辺に点在するが、出土位置からの特色はみつけることはできない。器壁は薄く、内底部にはわずかに使用痕が確認できる。いずれも黒笹 90 号窯式に属する。

3 小結

(1) 遺構について

今回検出できた窯体は、全長 8 m 程度が残存するに過ぎない。ほぼ同時期の窯体が全長

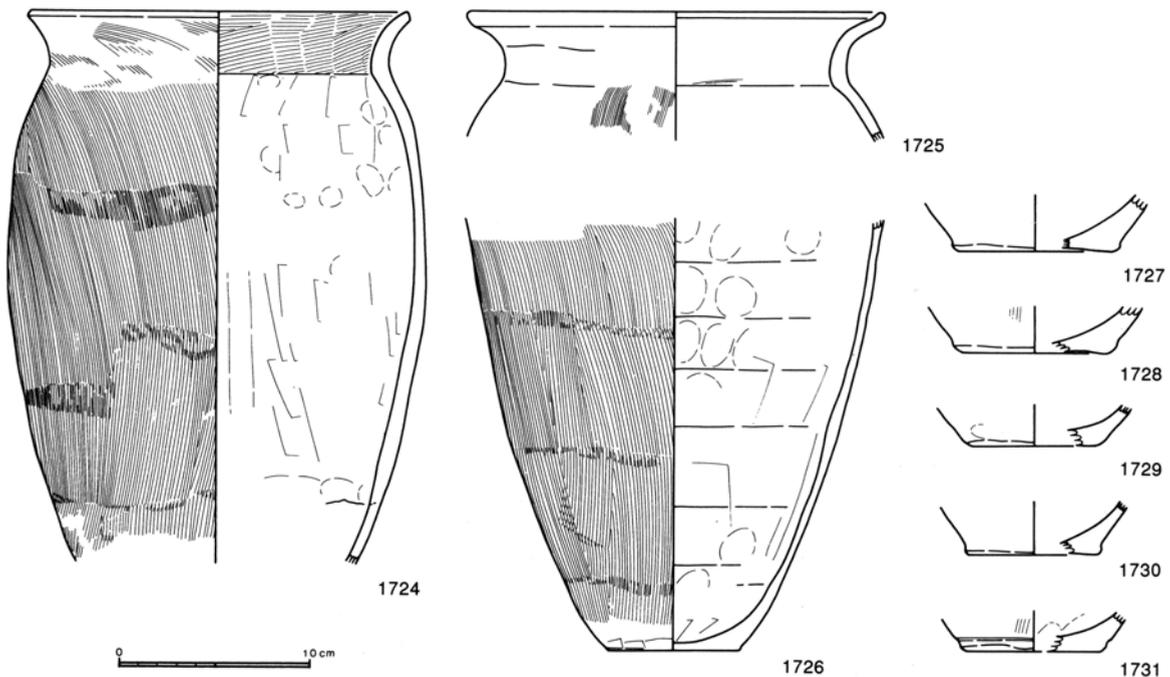


図 88 高針原 1 号窯出土遺物 38

12～13mであることから比較すると、50%が残存するに過ぎないこととなる。一方、窯体前面の構造は比較的よく残存し、灰出しピットと、そこから伸びる排水溝が特徴的であった。

本窯は、別記のように操業が比較的長期間に及んでいることが考えられる。このため、各所で機能を維持させるための、改修ないし整地作業が確認できた。このうち最も著しいのが、窯体の改修である。窯体の改修は、スサ入り粘土を壁面にそのまま貼付する形で成されるため、これを重ねる度に焼成室の容積が減少し、一回の操業での生産量が減少する結果を生む。本窯ではこの問題を克服するために、G面で大規模な改修を施している。この改修は、窯体の床面を掘削し、焼成室の空間を確保したものであった。このため、この作業には大量の廃土を伴ったと予想される。そして、この時点の廃土が、灰層Ⅰ群と灰層Ⅱ群との間層であった可能性が考えられる。一方、この作業以前にも、灰原の整地は確認できる。SD02の掘削である。こうした灰原の整地は度々実施されたものと考えられる。灰層Ⅲ群や灰層Ⅳ群は、こうした整地による二次的な灰層であったのかもしれない。

(2) 遺物について

① 出土遺物の計測

今回得られた資料は、飛鳥時代に含められる内容を持っている。資料数は安定しており、

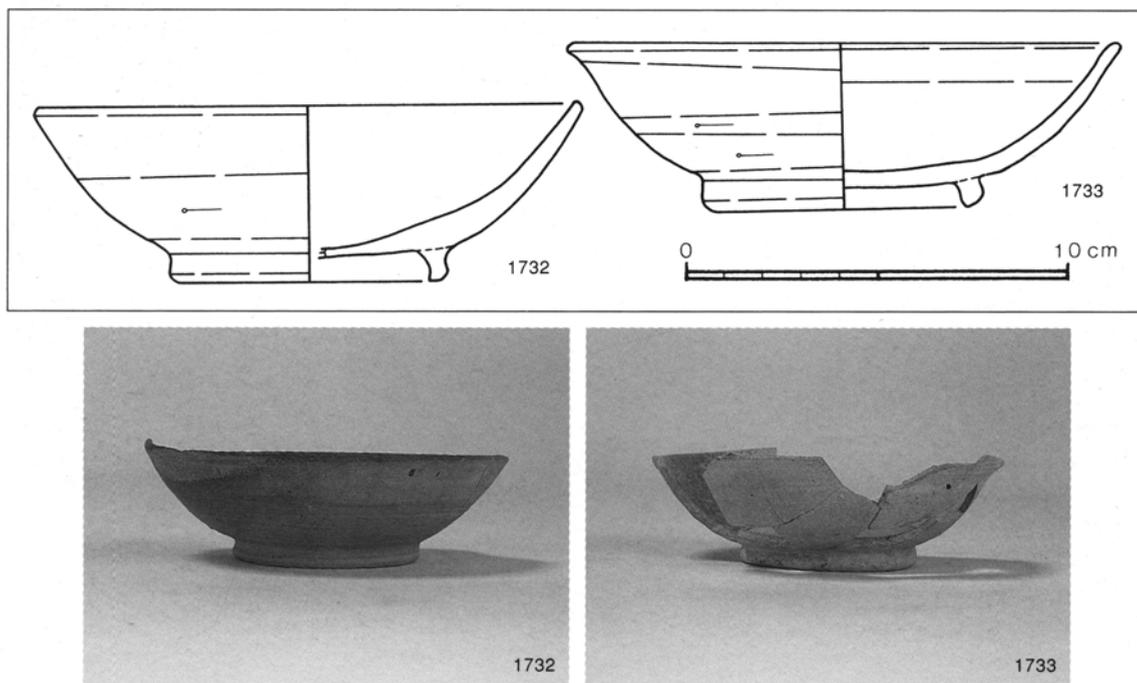


図 89 高針原 1 号窯出土遺物 39

作業段階の焼成比率を反映しているものと考えられる。しかし、出土量の関係から、全ての遺物を個体識別することは困難である。こうしたことから、出土遺物を計測するにあたり、Ⅲ章で使用した口縁部計測による集計作業を実施した。

表5は、集計結果を器種別にまとめたもので、図91でこれをグラフ化している。

まず、全体的な傾向として、生産量が20%を越える器種が存在しないことに注目したい。主力器種として考えられる杯類も、極端な突出は見せない。器種数も多く、生産の方向性が、多器種少量生産であったことが考えられる。

次に器種別に特色を眺める。

まず、蓋類は、蓋Aが突出することに注意したい。数値は17%を越える。しかし、これとセットとなるはずの杯Bが、6%に留まっている。一方、杯Hとセットとなる蓋Hは、これと類似した数値を示している。このことから考えると、蓋Aは杯Bにのみに限定された器種ではないことが明らかである。また、蓋Bも同様に、これとセットとなるとされる杯Gの、ほぼ倍数程度も存在している。ここでは杯Gの認定が不明確であることも考慮しなせねばならないが、蓋Aと杯B、杯Gと蓋Bというセット関係が、あまり厳格なものではなかったことが考えられる。

杯類は、杯Hが10%を越え、主力器種としての位置を占めている。杯AとBの比率は6%程度で、ほぼ拮抗する。杯Gは2%程度である。

椀類は乏しい。1%にも満たない。



図90 高針原 1 号窯SY01左壁改修状況

鉢類は、鉢Aが2%を越える。しかし、全体的には生産量の少ない一群である。

盤類も全体的に生産量が少ない。やはり、生産量の少ない一群。

壺・瓶では、全体的に焼成量が多い傾向を示す。中でもフラスコ形瓶は10%を越える。主力器種と呼称しても良いであろう。また、平瓶も4%を越える数値を示し、生産量の比較的多い器種となっている。

高杯類は、A～Cがほぼ2%に近い数値でまとまっている。高杯Aが若干優勢で、高杯Bが劣勢である。高杯Dは、伝統的な器種ではあるが、高針原1号窯ですでに例外的な存在となっている。甕はA～Cで、4%を切る。甕Aの比率がやや高く、甕AとCを比較すると1:2程度となる。

次に、量的に安定している灰層Ⅱ群、灰層Ⅰ群、SY01の資料についてのみ、個々にその構成比を眺めたい。

まず、灰層Ⅱ群の資料は、総遺物量の35.8%を占める。器種も多い。これのみで100%として、資料の構成比をみると、杯H、蓋Hのセットが10%前後で、優位を占める。これにその他の杯類が、杯Aが5.3%、杯Bが3.2%、杯Gが2.6%と、それぞれ一定量を占めてこれに加わる。また、壺・瓶類も比較的安定する。特にフラスコ形瓶が優位で、フラスコ形瓶Aが5.15%、フラスコ形瓶Bが3.7%となる。これに続く、平瓶が5.6%、ハソウは、4.2%を占めている。

次の灰層Ⅰ群の資料は、総遺物量の3.6%を占める。灰層Ⅱ群と比較すると資料的には安定していない。これのみで100%として、資料の構成比をみると、蓋類を除けば、杯類が優位を占める。杯類の主体は、杯Bと杯Gとなる。両者でほぼ20%を占める。一方、灰層Ⅱ群では圧倒的に優位であった杯Hが、全体の2.4%を占めるにすぎず、極端に減少している。壺・瓶類では、短頸壺が9%、横瓶Bが4.2%、フラスコ形瓶Bが、6.7%と比較的安定した数量を占めている。

最後のSY01の資料は、総遺物量の8.8%を占める。これのみで100%として、資料の構成比をみると、杯Bが28.8%となっていることに注目したい。なお、杯Hは1.7%を数えるが、補修部の貼り土から出土した資料がほとんどで、基本的には存在してはいない。

以上、比較的安定している資料について、資料の構成を比較した。これをまとめると、まず、灰層Ⅱ群資料は、新たに登場して奈良時代にまで継続する器種と、古墳時代以来の伝統的な器種が共存する内容を持つ。このため器種数は多い。一方、SY01では、器種がほぼ前者に集約された内容を持っている。また、灰層Ⅰ群は、両者の中間的な構成と考えられる。なお、三者を比較すると、高針原1号窯資料内での、古墳時代的な要素が消滅していく課程を表現できるものと考えられる。

② 遺物からみた操業期間

次に、出土遺物から窯体の操業期間を考える。

表5 高針原1号窯器種構成表1

出土位置	種類	器種	口縁部個体数	比率	位置別比率		
SD01	須恵器	蓋A	5.083333333	1.34%	43.88%		
		杯A	2.833333333	0.75%	24.46%		
		杯B	0.5	0.13%	4.32%		
		高杯B	0.416666667	0.11%	3.60%		
		鉢A	0.25	0.07%	2.16%		
		フラスコ形瓶不明	0.25	0.07%	2.16%		
		平瓶A	1.416666667	0.37%	12.23%		
		平瓶不明	0	0.00%	0.00%		
		短頸壺	0.583333333	0.15%	5.04%		
		横瓶B	0.25	0.07%	2.16%		
		ハンウB	0	0.00%	0.00%		
		計	11.58333333	3.05%	100.00%		
		SD02	須恵器	蓋A	0.416666667	0.11%	17.86%
杯A	0.166666667			0.04%	7.14%		
杯B	0.25			0.07%	10.71%		
杯J	0.166666667			0.04%	7.14%		
高杯B	0.5			0.13%	21.43%		
フラスコ形瓶B	0.333333333			0.09%	14.29%		
短頸壺	0.116666667			0.04%	7.14%		
ハンウ不明	0.333333333			0.09%	14.29%		
計	2.333333333			0.61%	100.00%		
SK01	須恵器			杯H	0.25	0.07%	60.00%
				鉢A	0.166666667	0.04%	40.00%
		計	0.416666667	0.11%	100.00%		
SY01	須恵器	蓋A	8.583333333	2.26%	25.56%		
		蓋H	0.583333333	0.15%	1.74%		
		杯A	5.75	1.51%	17.12%		
		杯B	9.666666667	2.54%	28.78%		
		杯H	0.583333333	0.15%	1.74%		
		杯不明	0.333333333	0.09%	0.99%		
		椀A	1.333333333	0.35%	3.97%		
		椀B	0.916666667	0.24%	2.73%		
		高杯B	0.416666667	0.11%	1.24%		
		盤A	0.25	0.07%	0.74%		
		盤B	0.416666667	0.11%	1.24%		
		盤C	0.166666667	0.04%	0.50%		
		鉢C	0.333333333	0.09%	0.99%		
		鉢D	0.333333333	0.09%	0.99%		
		平瓶不明	0	0.00%	0.00%		
		短頸壺	1.25	0.33%	3.72%		
		横瓶不明	1.5	0.39%	4.47%		
		壺A	1.166666667	0.31%	3.47%		
		器種不明	0	0.00%	0.00%		
		計	33.58333333	8.84%	100.00%		
		灰出しピット	須恵器	蓋A	3.416666667	0.90%	33.88%
				蓋B	0.583333333	0.15%	5.79%
				蓋H	0.333333333	0.09%	3.31%
				杯A	1.166666667	0.31%	11.57%
				杯B	2.416666667	0.64%	23.97%
				杯G	0.75	0.20%	7.44%
				椀A	0	0.00%	0.00%
高杯B	0			0.00%	0.00%		
鉢A	0.166666667			0.04%	1.65%		
鉢B	0.75			0.20%	7.44%		
鉢D	0			0.00%	0.00%		
フラスコ形瓶不明	0			0.00%	0.00%		
平瓶B	0.166666667			0.04%	1.65%		
ハンウB	0			0.00%	0.00%		
壺B	0			0.00%	0.00%		
壺C	0.333333333			0.09%	3.31%		
計	10.08333333			2.65%	100.00%		
灰層I群	須恵器			蓋A	4.666666667	1.23%	33.94%
				蓋B	1.083333333	0.29%	7.88%
				蓋C	0	0.00%	0.00%
				蓋H	0.25	0.07%	1.82%
				蓋不明	0.25	0.07%	1.82%
				杯A	0.166666667	0.04%	1.21%
		杯B	1.333333333	0.35%	9.70%		
		杯G	1.416666667	0.37%	10.30%		
		杯H	0.333333333	0.09%	2.42%		
		杯J	0.333333333	0.09%	2.42%		
		高杯B	0	0.00%	0.00%		
		高杯不明	0	0.00%	0.00%		
		鉢C	0	0.00%	0.00%		
		フラスコ形瓶B	0.916666667	0.24%	6.67%		
		平瓶不明	0	0.00%	0.00%		
短頸壺	1.25	0.33%	9.09%				
灰層II群	須恵器	横瓶B	0.583333333	0.15%	4.24%		
		ハンウ不明	0.5	0.13%	3.64%		
		壺A	0.25	0.07%	1.82%		
		壺B	0.25	0.07%	1.82%		
		壺C	0.166666667	0.04%	1.21%		
		計	13.75	3.62%	100.00%		
		灰層II群上層	須恵器	蓋A	25.83333333	6.80%	19.00%
				蓋B	7.583333333	2.00%	5.58%
				蓋C	1.583333333	0.42%	1.16%
				蓋D	0.25	0.07%	0.18%
				蓋E	0.083333333	0.02%	0.06%
				蓋F	0.333333333	0.09%	0.25%
				蓋G	0.166666667	0.04%	0.12%
				蓋H	9.916666667	2.61%	7.29%
				蓋不明	3.333333333	0.88%	2.45%
杯A	7.25			1.91%	5.33%		
杯B	4.416666667			1.16%	3.25%		
杯G	3.5			0.92%	2.57%		
杯H	17.33333333			4.56%	12.75%		
杯J	0.166666667			0.04%	0.12%		
杯不明	0			0.00%	0.00%		
高杯A	3.75			0.99%	2.76%		
高杯B	1			0.26%	0.74%		
高杯C	3.333333333			0.88%	2.45%		
高杯D	0.5			0.13%	0.37%		
高杯不明	0			0.00%	0.00%		
盤A	0.416666667			0.11%	0.31%		
盤B	0.333333333			0.09%	0.25%		
盤C	0.25			0.07%	0.18%		
鉢A	2.666666667			0.70%	1.96%		
鉢B	0.75			0.20%	0.55%		
鉢C	0.666666667			0.18%	0.49%		
鉢D	0			0.00%	0.00%		
台付長頸瓶	1			0.26%	0.74%		
フラスコ形瓶A	7			1.84%	5.15%		
フラスコ形瓶B	5			1.32%	3.68%		
フラスコ形瓶不明	0			0.00%	0.00%		
平瓶A	6.75			7.78%	4.96%		
平瓶B	0.833333333			0.22%	0.61%		
平瓶不明	0.166666667	0.04%	0.12%				
短頸壺	3.416666667	0.90%	2.51%				
横瓶A	3	0.79%	2.21%				
横瓶B	1.833333333	0.48%	1.35%				
横瓶不明	1.166666667	0.31%	0.86%				
ハンウA	0	0.00%	0.00%				
ハンウB	0	0.00%	0.00%				
ハンウ不明	5.75	1.51%	4.23%				
壺A	1.25	0.33%	0.92%				
壺B	0.25	0.07%	0.18%				
壺C	2.416666667	0.64%	1.78%				
陶鉢	0	0.00%	0.00%				
器種不明	0.75	0.20%	0.55%				
計	136	35.81%	100.00%				
灰層II群上層	須恵器	蓋A	8.083333333	2.13%	9.34%		
		蓋B	3.916666667	1.03%	4.53%		
		蓋C	0.083333333	0.02%	0.10%		
		蓋D	0.25	0.07%	0.29%		
		蓋G	0.833333333	0.22%	0.96%		
		蓋H	15.916666667	4.19%	18.40%		
		蓋不明	0.333333333	0.09%	0.39%		
		杯A	5.166666667	1.36%	5.97%		
		杯B	1.5	0.39%	1.73%		
		杯G	1.166666667	0.31%	1.35%		
		杯H	12.58333333	3.31%	14.55%		
		杯J	0.916666667	0.24%	1.06%		
		高杯A	3.916666667	1.03%	4.53%		
		高杯B	1.25	0.33%	1.45%		
		高杯C	2	0.53%	2.31%		
		盤A	0.5	0.13%	0.58%		
		盤B	0	0.00%	0.00%		
		盤C	0.5	0.13%	0.58%		
		鉢A	2.25	0.59%	2.60%		
		鉢B	0.25	0.07%	0.29%		
		鉢C	0.166666667	0.04%	0.19%		
鉢D	0.083333333	0.02%	0.10%				
台付長頸瓶	0.416666667	0.11%	0.48%				
フラスコ形瓶A	6.166666667	1.62%	7.13%				

第 IV 章

表 6 高針原 1 号窯器種構成表 2

出土位置	種類	器種	口縁部個体数	比率	位置別比率		
灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶B	2.66666667	0.70%	3.08%		
		フラスコ形瓶不明	0	0.00%	0.00%		
		平瓶A	3.33333333	0.88%	3.85%		
		短頸壺	2.91666667	0.77%	3.37%		
		横瓶A	4	1.05%	4.62%		
		横瓶B	0.25	0.07%	0.29%		
		ハソウA	1.83333333	0.48%	2.12%		
		ハソウB	0	0.00%	0.00%		
		壺・瓶不明	0	0.00%	0.00%		
		甕A	2.25	0.59%	2.60%		
		甕B	0.66666667	0.18%	0.77%		
		甕C	0.33333333	0.09%	0.39%		
		陶鉢	0	0.00%	0.00%		
		器種不明	0	0.00%	0.00%		
		計	86.5	22.77%	100.00%		
		灰層Ⅱ群中層	須恵器	蓋H	1.08333333	0.29%	12.87%
				杯H	3.08333333	0.81%	36.63%
				高杯C	0.16666667	0.04%	1.98%
				鉢A	0.83333333	0.22%	9.90%
				フラスコ形瓶A	0.41666667	0.11%	4.95%
平瓶A	1.16666667			0.31%	13.86%		
短頸壺	0			0.00%	0.00%		
横瓶A	1			0.26%	11.88%		
横瓶B	0.25			0.07%	2.97%		
ハソウA	0			0.00%	0.00%		
ハソウ不明	0.33333333			0.09%	3.96%		
甕A	0.08333333			0.02%	0.99%		
器種不明	0			0.00%	0.00%		
計	8.41666667			2.22%	100.00%		
灰層Ⅱ群下層	須恵器			蓋H	1.5	0.39%	16.22%
				杯G	0.08333333	0.02%	0.90%
				杯H	2	0.53%	21.62%
		杯J	0.16666667	0.04%	1.80%		
		高杯A	1.25	0.33%	13.51%		
		高杯B	0	0.00%	0.00%		
		高杯C	0.33333333	0.09%	3.60%		
		鉢A	0.25	0.07%	2.70%		
		フラスコ形瓶A	1.91666667	0.50%	20.72%		
		横瓶A	0.91666667	0.24%	9.91%		
		ハソウA	0	0.00%	0.00%		
		ハソウ不明	0.58333333	0.15%	6.31%		
		提瓶	0.25	0.07%	2.70%		
		器種不明	0	0.00%	0.00%		
		計	9.25	2.44%	100.00%		
		灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	1.33333333	0.35%	17.78%
				蓋不明	0.33333333	0.09%	4.44%
杯A	0.5			0.13%	6.67%		
杯B	0.66666667			0.18%	8.89%		
杯H	1.41666667			0.37%	18.89%		
杯不明	0.08333333			0.02%	1.11%		
高杯B	0.08333333			0.02%	1.11%		
鉢A	0.16666667			0.04%	2.22%		
フラスコ形瓶B	1.16666667			0.31%	15.56%		
平瓶A	0.16666667			0.04%	2.22%		
横瓶A	0.33333333			0.09%	4.44%		
ハソウ不明	0.58333333			0.15%	7.78%		
甕A	0.5			0.13%	6.67%		
甕B	0.16666667			0.04%	2.22%		
計	7.5			1.97%	100.00%		
灰層Ⅴ群	須恵器			蓋A	0.33333333	0.09%	16.67%
				高杯B	0	0.00%	0.00%
		鉢B	0	0.00%	0.00%		
		台付長頸瓶	0	0.00%	0.00%		
		フラスコ形瓶A	0.41666667	0.11%	20.83%		
		平瓶不明	0.16666667	0.04%	8.33%		
		短頸壺	0.16666667	0.04%	8.33%		
		横瓶A	0.66666667	0.18%	33.33%		
		横瓶B	0.25	0.07%	12.50%		
		甕B	0	0.00%	0.00%		
		器種不明	0	0.00%	0.00%		
		計	2	0.53%	100.00%		
		間層	須恵器	蓋A	0.25	0.07%	9.38%
				蓋H	0.25	0.07%	9.38%
杯H	0.16666667			0.04%	6.25%		
高杯不明	0			0.00%	0.00%		
フラスコ形瓶A	1			0.26%	37.50%		
フラスコ形瓶B	0.83333333	0.22%	31.25%				
表土	須恵器	甕C	0.16666667	0.04%	6.25%		
		計	2.66666667	0.70%	100.00%		
		蓋A	2.33333333	0.61%	13.86%		
		蓋B	0.41666667	0.11%	2.48%		
		蓋H	1.66666667	0.44%	9.90%		
		蓋不明	0.83333333	0.22%	4.95%		
		杯A	0.66666667	0.18%	3.96%		
		杯B	0.91666667	0.24%	5.45%		
		杯G	0.83333333	0.22%	4.95%		
		杯H	0.58333333	0.15%	3.47%		
		杯J	0.33333333	0.09%	1.98%		
		高杯B	0.25	0.07%	1.49%		
		高杯C	0.33333333	0.09%	1.98%		
		盤A	0.16666667	0.04%	0.99%		
		盤B	0	0.00%	0.00%		
		盤C	0.16666667	0.04%	0.99%		
		鉢A	0.25	0.07%	1.49%		
		鉢C	0	0.00%	0.00%		
		鉢D	0.16666667	0.04%	0.99%		
		フラスコ形瓶A	0.83333333	0.22%	4.95%		
フラスコ形瓶B	1.41666667	0.37%	8.42%				
平瓶A	0.41666667	0.11%	2.48%				
短頸壺	1	0.26%	5.94%				
横瓶A	0.16666667	0.04%	0.99%				
横瓶B	0.91666667	0.24%	5.45%				
ハソウ不明	0.58333333	0.15%	3.47%				
甕A	0.25	0.07%	1.49%				
甕C	0.25	0.07%	1.49%				
甕不明	0	0.00%	0.00%				
円面硯	0.83333333	0.22%	4.95%				
陶鉢	0	0.00%	0.00%				
器種不明	0.25	0.07%	1.49%				
計	16.83333333	4.43%	100.00%				
攪乱	須恵器	蓋A	5.08333333	1.34%	13.23%		
		蓋B	1.66666667	0.44%	4.34%		
		蓋C	0.16666667	0.04%	0.43%		
		蓋D	0.16666667	0.04%	0.43%		
		蓋H	3	0.79%	7.81%		
		蓋不明	0.66666667	0.18%	1.74%		
		杯A	2.08333333	0.55%	5.42%		
		杯B	2	0.53%	5.21%		
		杯H	2.16666667	0.57%	5.64%		
		杯J	1	0.26%	2.60%		
		杯不明	0	0.00%	0.00%		
		高杯B	0.91666667	0.24%	2.39%		
		高杯C	0.33333333	0.09%	0.87%		
		椀B	0	0.00%	0.00%		
		盤C	0	0.00%	0.00%		
		鉢A	2.08333333	0.55%	5.42%		
		鉢B	0	0.00%	0.00%		
		鉢C	0.16666667	0.04%	0.43%		
		鉢D	0.16666667	0.04%	0.43%		
		フラスコ形瓶A	5.75	1.51%	14.97%		
フラスコ形瓶B	2.08333333	0.55%	5.42%				
フラスコ形瓶不明	0	0.00%	0.00%				
平瓶A	4.08333333	1.08%	10.63%				
平瓶不明	0	0.00%	0.00%				
短頸壺	0.66666667	0.18%	1.74%				
横瓶A	0.66666667	0.18%	1.74%				
横瓶B	0.91666667	0.24%	2.39%				
横瓶不明	0.66666667	0.18%	1.74%				
ハソウA	0	0.00%	0.00%				
ハソウB	0	0.00%	0.00%				
ハソウ分類不明	1.08333333	0.29%	2.82%				
甕A	0.58333333	0.15%	1.52%				
甕不明	0.08333333	0.02%	0.22%				
円面硯	0.16666667	0.04%	0.43%				
陶管	0	0.00%	0.00%				
器種不明	0	0.00%	0.00%				
計	38.416667	10.11%	100.00%				
出土位置不明	須恵器	椀不明	0	0.00%	0.00%		
		甕A	0.5	0.13%	100.00%		
		計	0.5	0.13%	100.00%		
合計			379.83333	100.00%			

前述のように、今回検出できた窯体は壁面が15面にも及んでいる。このため、窯体には長期間の操作が予想できる。しかし、一方では壁面の数だけを根拠として、作業期間の問題を考えることはできないという指摘（尾野 1997）もあり、ここではさらに別方向からの検証も加えねばならない。

今回注目したいのは、窯詰め時の支持具として窯内で使用される窯道具の数量である。前述のように、本窯で確認している窯道具の支持具には、礫焼台、転用焼台、棒トチなどがある。このうち、本窯での主力となっているのは前二者である。なお、棒トチについては、出土数は乏しい。高針原1号窯では、図示したものがほぼ全てで、例外的な使用にすぎず、今回の分析の対象とはしない。

本窯では、礫焼台を、総数約4500点得ている。この数値は、完形で出土した礫焼台の総計に、破片で出土したその総重量を、完形品の平均重量で割って求めた数値を加えたものである。一方、転用焼台は実数を把握できていない。しかし、甕の体部片を観察すると、かなりの高確率で転用焼台として使用した痕跡が観察できる。なお、本窯では、甕体部の破片は26548点出土している。また、転用焼台は甕の体部片に限定できるものではない。これは、礫焼台とともにかなり膨大な数値と考えられる。

こうした状況は、感覚的ではあるが、本窯に多数の操作があったことを考える有力な事実となっている。しかし、一回の窯詰めには、どの程度の焼台が必要であったのかを示す確実なデータは、現状では報告されていない。

ところで、岐阜県各務原市に所在する天狗谷7号窯例（渡辺 1988）は、こうした問題を解決するヒントとなる情報が提示されている。図92に報告書から窯体図を転載した。天狗谷7号窯は、須恵器窯で、焼成中に天井部が崩落して放棄された窯体と報告されている。この崩壊は、焼成の最終段階で生じたものと予想されており、流通可能な製品は、窯体から取り出されている。しかし、部分的ではあるが、床面上には焼成時の原位置を留める杯類が残存していた。窯詰め状態であるので、基底部には焼台が使用されている。測量図によれば、これは20cm弱の間隔で、4列を確認できる。焼台列は、礫焼台と転用焼台で構成されるが、測量図からは使用状況に法則性はうかがうことができない。また、重ね焼き柱の全てに焼台が使用されているわけでもない。こうした状況から、天狗谷7号窯での焼台の使用法を考えると、傾斜する床面に水平を得ることの他に、製品を並べることにより生じた余剰空間を埋める役割も持っていたことが考えられる。従ってこれらの焼台は、規格

焼台数試算

化された使用法が存在しなかったことが考えられる。

以下に、天狗谷7号窯の状況をもとに、高針原1号窯の焼成一回あたりの使用焼台数を試算する。算出には、個体数識別が容易な、礫焼台のみを使用する。なお、天狗谷7号窯の床面上の焼台では、礫焼台と転用焼台との用途差は確認できなかった。このことを理由として、全焼台中に礫焼台が占める割合を、天狗谷7号窯と高針原1号窯が同一であったと仮定する。次に、少し乱暴な数値だが、天狗谷7号窯の窯詰め状態の残存部分を2㎡と数える。図中には約40点の礫焼台が存在しているから、1㎡につき20点の使用となる。1

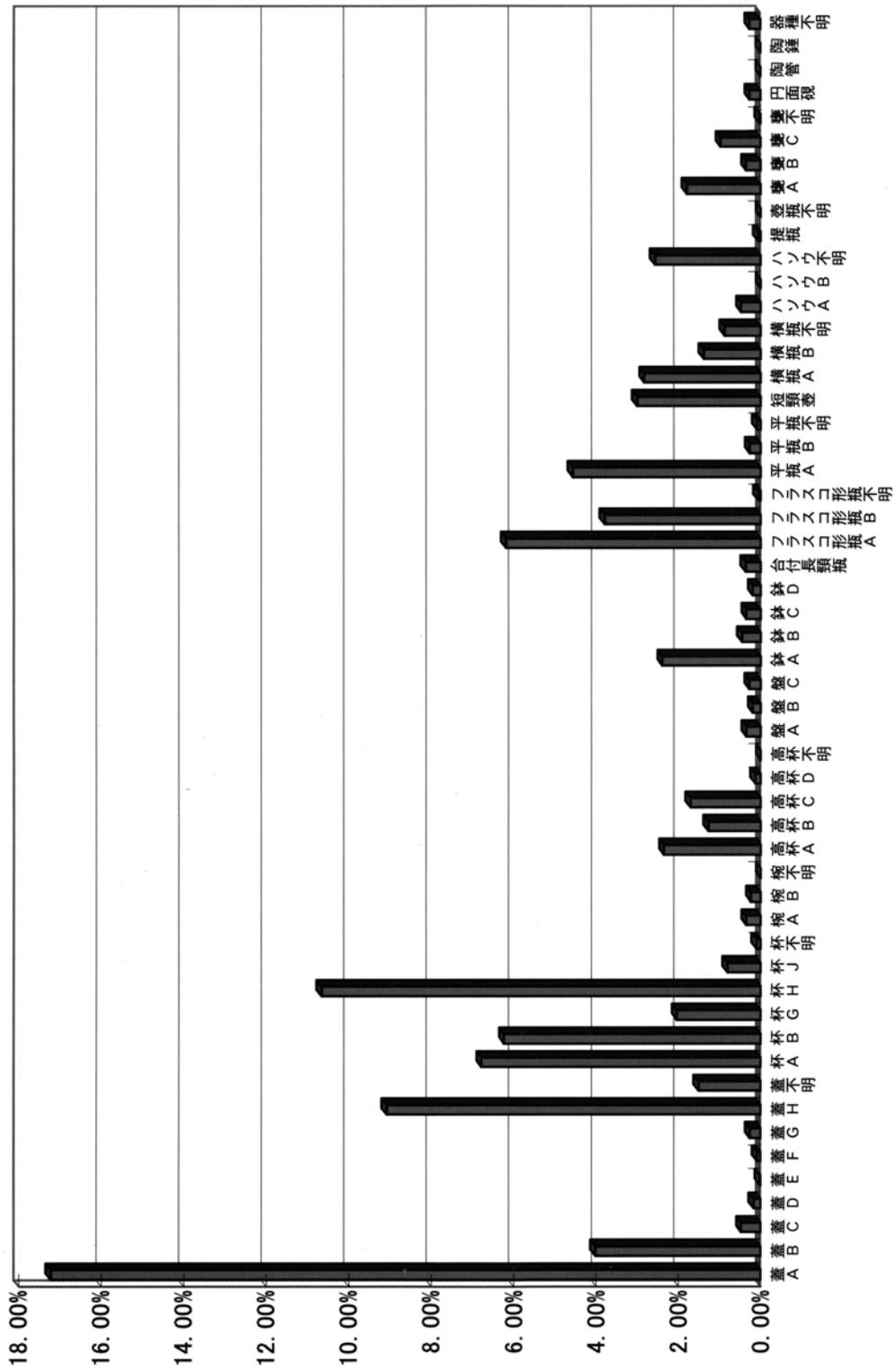


図 91 高針原 1 号窯器種構成

回焼成分の礫焼台数は、ここでは器種による礫焼台の使用頻度の差がないものと仮定して、単純に床面積から算出した。

なお、窯体の床面積であるが、高針原1号窯は窯体の上部が消滅しているため計測ができない。このため、ほぼ同時期で、高針原1号窯と規模や構造が類似している、小牧市高蔵寺3号窯（愛知県教委 1983）の床面積を測量図から計測し、この数値を援用することにする。算出できた床面積は、18.59 m²。このうち舟底ピット上面が6.93 m²、舟底ピット上面を除く焼成室が11.66 m²となる。製品が、焼成時にどの部分まで設置されるかが不明確だが、ここでは、仮に舟底ピット上面を除く焼成室の全面に、製品を窯詰めしたものとして計算する。その結果、高針原1号窯では、最低19回分の窯詰めが可能な礫焼台の出土が確認できた。

操業回数

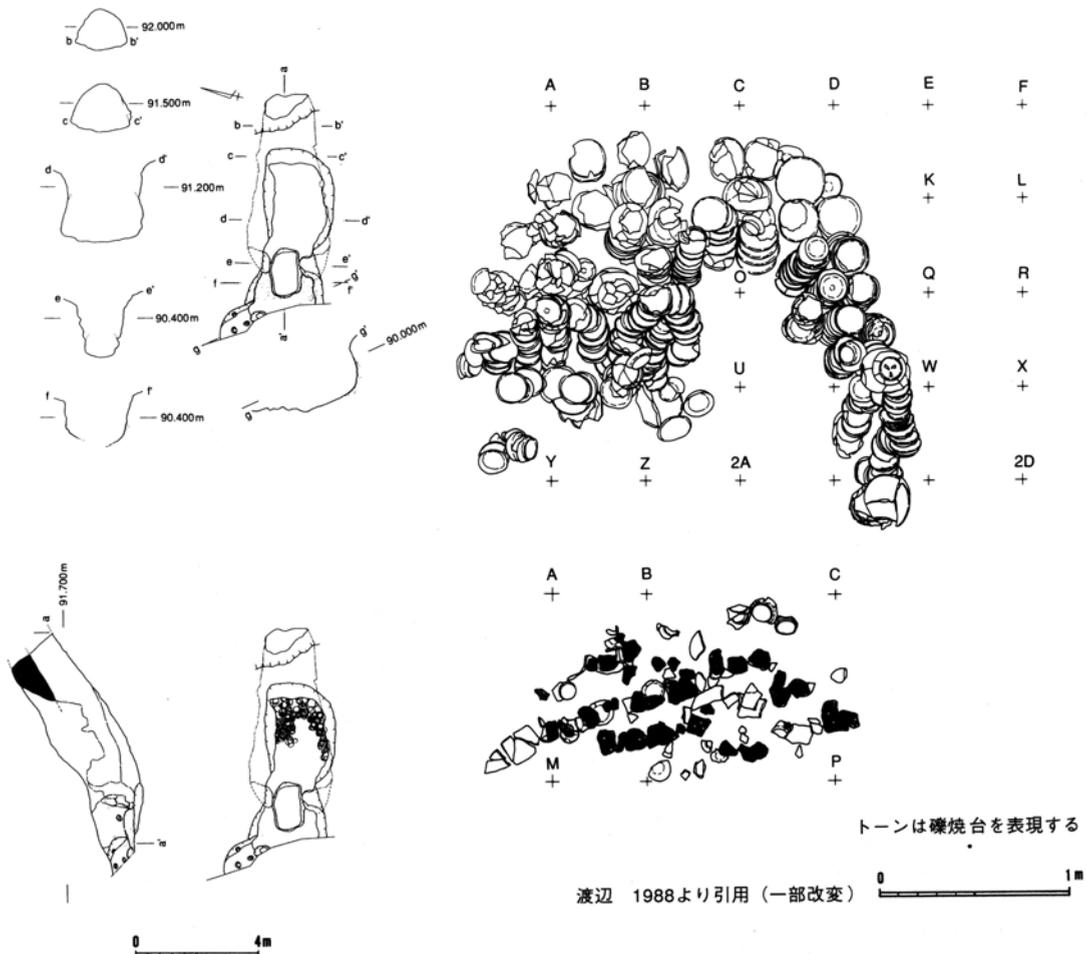


図92 各務原市天狗谷7号窯

しかし、この数値は若干の補正が必要である。まず、高針原 1 号窯では、灰原が一部削平を受けて完存していない。このため、調査では作業時に使用された礫焼台の全てを得ているわけではない。次に、高針原 1 号窯と高蔵寺 3 号窯の焼き口幅を比較した場合、後者の方がやや広い。窯体の全長と、焼き口の幅とがどのように関連するのかが不明確だが、高蔵寺 3 号窯の窯体を、高針原 1 号窯よりやや大きく考える必要もあろう。また、試算した値は、礫焼台を全て使い捨てとして算出している。しかし、これは実際には繰り返し使用しているため、本来ならば数値に使用回数を乗じたものでなくてはならない。

以上の点を考えると、窯体の作業回数は、少なくとも 19 回の数倍を考えなければならぬだろう。こうした点は、第 VI 章で触れるように、高針原 1 号窯の作業期間が広く考えられることとよく整合している。

③ 刻書土器

【黒見田】 最後に、刻書土器について考える。ここでは、『黒見田』と刻書された甕 B と『黒』と刻書された鉢 B に注目する。前者の資料が灰層 II 群の上層から、後者が灰層 IV 群から出土しており、両者には時間的な前後関係が認められる。資料は、各 1 点ずつ存在するのみであるが、ここでは、後者が前者の省略形である可能性も考えることができる。

次に字体であるが、前者は細く浅い線で刻まれている。『黒見田』とまでは判読できるが、それに続く二文字は不明となる。一方、後者は太くはっきりとした刻書であるが、文字の下方にくずしが著しい。このため、やはり判読は難解となる。なお、両者は『黒』の右上が、やや鋭角気味となることが類似している。

ところで、『黒見田』は今回が初見ではない。現状では、名古屋市内各地から 3 例の報告がある。生産遺跡が 1 例、集落遺跡資料が 2 例である。いずれも、今回の資料とほぼ同時期に該当するものである。

生産遺跡の例は、天白区天白町に所在する NN 1 0 5 号窯（戸笠 1 号窯）例である。高針原 1 号窯と近接し、第 I 章に報告した周辺遺跡にも含まれている。器種は鉢 B。刻書は外底部で、外側から中央に向かい『黒見田』の三文字が刻まれている。

集落遺跡資料は、まず守山区小幡遺跡資料（山田他 1998）がある。器種は甕 B。刻書は頸部に認められ、口縁部に沿って『黒見田』の三文字と、続いて判読できない二文字がある。この資料は、E-2 区という調査区の、SK5075 と命名された土坑から、同時代の資料とともに出土している。

次に、中区正木町遺跡資料（竹内 1986）がある。器種は台付長頸瓶。刻書は外底部で、直径からややはずれた位置に『黒見田』の三文字が刻まれている。この資料は、P 12 地点と命名された調査区からの出土である。この調査区は、ほぼ中央部に自然の落ち込みが確

認でき、これを貝層が埋めていたと報告されている。『黒見田』を刻書する台付長頸瓶は、同時代の資料とともに、ここから出土している。なお、この遺跡では、『瓦』の刻書例も存在する(竹内 1988)。器種は杯A。刻書は外底部に認められる。この資料は、第2次調査に包含層中からの出土している。

「瓦」

また、『黒見田』と同一概念と考えられている『黒見太』と刻書される資料が、奈良県石神遺跡に知られている。この資料は、猿投窯産と判断されているもので、盤の底部片である。刻書は外底部で、ここでは文字が太くはっきりとした文字で刻まれる。『黒見田』が全て判読の困難な刻書であるのとは対極的である。

「黒見太」

『黒見田』または『黒見太』の意味する概念は不明である。現状では、地名もしくは人名が想定されている。しかも、これら出土地点が、前者が名古屋台地の拠点的な集落、あるいは、それに準ずるような地点であり、後者はこの時期の国家中枢部に近接した遺跡とされている。また、『瓦』も、やはり意味不明となる。しかし、出土遺跡が『黒見田』を持つ正木町遺跡であることを過大評価すると、これらと同様の性格を持つ可能性も考えられる。

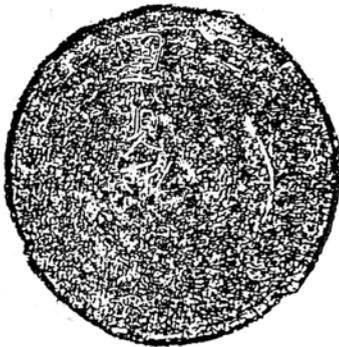
つまり、これらの解明が7世紀末前後の窯業生産体制や、製品の律令的な収奪システムの成立過程を解明することに、有益な情報となることが予想できる。今後の資料増加を待ちたい。



【黒見田□□】
高針原 1 号窯



【黒】
高針原 1 号窯



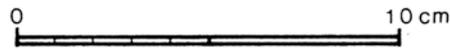
【黒見田】
NN105号窯



【黒見田】
正木町遺跡



【黒見田□□】
小幡遺跡



【黒見太】石神遺跡



【百】
正木町遺跡

柴垣 1997
山田他1998より引用（一部改変）
竹内 1988

図 93 刻書土器集成

第 V 章 科学分析



第V章 科学分析

1 考古地磁気測定

前述のように、今回の調査では細口下1号窯と高針原1号窯で窯体を検出している。ここでは、これらの窯体を対象として実施した熱残留磁化測定の結果を報告する。

この測定は、株式会社パレオ・ラボにより実施され、報告書として本センターに納入されている。執筆は同社の藤根久氏の手による。ここではその結果のみを要約して報告する。

分析の手順は、本センター調査報告書64集、第75集（藤根 1995、同1998）と同様であるので参照とする。なお、試料数は、細口下1号窯が16点、高針原1号窯が13点である。

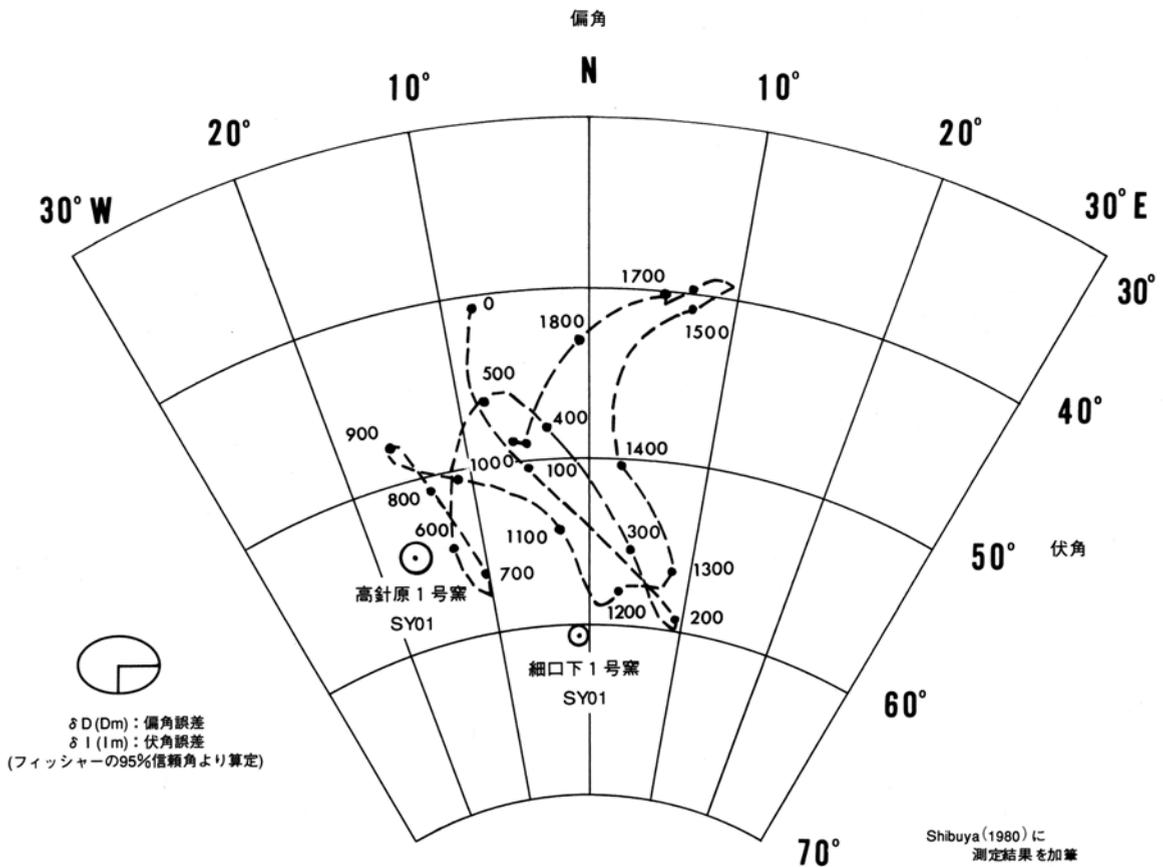


図 94 地磁気永年変化曲線と測定結果

る。測定結果は表6に示し、これを永年変化曲線にあてはめた結果が、図94である。

以下、年代を推定する。まず高針原1号窯のSY01では、窯跡の磁化が地磁気永年変化曲線の600年～800年間に近い位置にある。測定した磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動した場合、600 + 20 - 10年と750 ± 15年が推定される。これを出土遺物から考えると、後者が妥当な年代と考える。次の細口下1号窯のSY01では、磁化方向は伏角がやや深いもの、1100～1200年間の永年変化曲線の近くに位置する。測定した磁化方向の中心をこの間の最も近い曲線上に移動した場合、1175 ± 11年と推定される。

測定結果

表7 考古地磁気試料一覧

(偏角補正前)

遺構	試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	強度 (x10E-2)	備考	統計処理項目	統計値
高針原1号窯 SY01	1.00	-11.60	56.40	1.52		試料数 (n)	13.00
	2.00	-10.60	55.20	1.27			
	3.00	-10.90	55.00	1.92		平均偏角、Dm (°E)	-9.80
	4.00	-8.60	54.40	1.19			
	5.00	-11.60	57.10	0.91		平均伏角、1m (°)	54.56
	6.00	-8.10	54.00	2.89			
	7.00	-8.00	55.90	17.30		誤差角 (δD) (°)	1.57
	8.00	-8.70	54.40	2.42			
	9.00	-7.60	53.30	2.26		誤差角 (δI) (°)	0.91
	10.00	-7.60	54.10	2.00			
	11.00	-14.30	52.60	2.95		信頼度計数 (k)	2067.83
	12.00	-9.80	54.00	2.00			
	13.00	-10.10	52.70	13.20		平均磁化強度 (x10E-2emu)	3.99
	14.00						
遺構	試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	強度 (x10E-3)	備考	統計処理項目	統計値
細口下1号窯 SY01 (150Oe消滅)	1.00	2.90	59.40	5.83		試料数 (n)	16.00
	2.00	2.00	60.90	7.14			
	3.00	4.10	60.90	5.57		平均偏角、Dm (°E)	5.72
	4.00	8.80	61.60	6.69			
	5.00				破損	平均伏角、1m (°)	60.61
	6.00	4.70	61.90	7.58			
	7.00	8.00	60.30	6.54		誤差角 (δD) (°)	1.24
	8.00	8.20	60.00	4.60			
	9.00	4.50	61.30	6.94		誤差角 (δI) (°)	0.61
	10.00	4.40	60.40	7.24			
	11.00	7.00	61.20	7.90		信頼度計数 (k)	3602.63
	12.00	8.30	60.20	4.04			
	13.00	3.60	60.40	5.64	段階交流消滅	平均磁化強度 (x10E-3emu)	6.13
	14.00	6.50	60.40	6.72			
	15.00	6.30	61.70	6.58			
	16.00	6.50	58.40	5.97			
	17.00	5.70	60.60	3.06			
	18.00						

2 土器胎土分析

ここでは、胎土分析の結果を報告する。これは株式会社第四紀地質研究所により実施されたもので、同社の井上巖氏の手による報告書が本センターに納入されている。ここでは、これを要約して報告する。

(1) X線回折試験

ここでは、土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物を同定。具体的にはX線回折試験によった。試料は、洗浄、乾燥後にメノウ乳鉢を使用して粉碎したものを実験に供した。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°
計数時間: 0.5 秒。

実験条件

分析の結果、X線回折試験では、特にQt-Ptの相関に注目する。図95で、結果をグラフ化した。ここではI~IVのグループ分けが可能である。まず、Iグループは、石英Qtの強度が強い領域である。高針原1号窯の杯類と瓶類が集中する。次のIIグループは、Qtの強度が1000~2000で、Ptの強度が高い領域である。ここでは、鴻ノ巣古窯の灰釉陶器と須恵器が集中する。また、IIIグループはQtの強度が1000~2500で、Ptの強度が低い領域である。ここには高針原1号窯の椀A、瓶類が集中する。最後のIVグループは、Qt強度が高い領域である。ここでは、高針原1号窯の椀A、甕A、瓶類が、やや分散しながらグループを形成し、細口下1号窯試料と共存する。

以上のように、Qt-Ptの相関を眺めると、鴻ノ巣古窯の試料は灰釉陶器と須恵器が一つのグループを形成するが、高針原1号窯試料ではこれが二つのグループとして分散している。また、細口下1号窯試料は高針原1号窯試料の片方のグループと共存するようある。こうした状況は、大まかには遺跡差を認識できる状況にあった。また、高針原1号窯試料で確認できたグループ差は、器種差である可能性を考えさせる。

焼成ランク

なお、この分析では、さらに電子顕微鏡によるガラス量の観察を加え、焼き物全体での焼成ランク同定も実施している。報告書ではこれを焼成ランクI~Vとして区分しているが、今回の試料は全点が高温とされる位置に該当していた。ここでは、表7に基礎データとして提示するに留め、窖窯製品が焼き物全体で占める位置を提示しておく。

(2) 元素分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析

表 8 胎土性状表

試料 No	種類・器種	出土位置	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物											Pyrite	Au	ガラス					
					Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy				Kaol				
鴻ノ巣-1	灰軸椀	灰層	A		14	20						1378	99	283	158							131			
鴻ノ巣-2	灰軸椀	灰層	A		14	20						1424	90	367	163								139		
鴻ノ巣-3	灰軸椀	灰層	A		14	20						1285	90	308	166								148		
鴻ノ巣-4	灰軸椀	灰層	A		14	20						1086	97	266	162								151		
鴻ノ巣-5	灰軸椀	灰層	A		14	20						1265	89	231	180								125		
鴻ノ巣-6	灰軸椀	灰層	A		114	20						1695	92	263	143								121		
鴻ノ巣-7	灰軸椀	灰層	A		14	20						1602	85	343	173								156		
鴻ノ巣-8	灰軸椀	灰層	A		14	20						1384	92	378	147								128		
鴻ノ巣-9	灰軸椀	灰層	A		14	20						1109	87	253	174								148		
鴻ノ巣-10	灰軸椀	灰層	A		14	20						1874	85	434	175								131		
鴻ノ巣-11	灰軸平皿	灰層	A		14	20						3035	72	229	126								115		
鴻ノ巣-12	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1655	77	321	170								138		
鴻ノ巣-13	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1579	95	239	150								128		
鴻ノ巣-14	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1044	95	302	168								148		
鴻ノ巣-15	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1923	84	159	146								122		
鴻ノ巣-16	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1377	88	271	162								130		
鴻ノ巣-17	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1575	91	176	160								146		
鴻ノ巣-18	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1741	81	248	158								147		
鴻ノ巣-19	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1362	90	333	184								161		
鴻ノ巣-20	灰軸平皿	灰層	A		14	20						1814	89	143	166								149		
鴻ノ巣-21	須恵器壺	灰層	A		14	20						1556	69	280	196								137		
鴻ノ巣-22	須恵器壺	灰層	A		14	20						1397	88	366	176								148		
鴻ノ巣-23	須恵器壺	灰層	A		14	20						1475	89	305	161								151		
鴻ノ巣-24	須恵器壺	灰層	A		14	20						1506	78	316	175								156		
鴻ノ巣-25	須恵器壺	灰層	A		14	20						1771	64	311	151								125		
鴻ノ巣-26	須恵器坏	灰層	A		14	20						2731	60	121	111								101		
鴻ノ巣-27	須恵器坏	灰層	A		14	20						3188	56	123	153								133		
鴻ノ巣-28	須恵器坏	灰層	A		14	20						2202	66	256	152								146		
鴻ノ巣-29	須恵器坏	灰層	A		14	20						2028	70	167	196								169		
鴻ノ巣-30	須恵器坏	灰層	A		14	20						2019	72	368	140								122		
鴻ノ巣-31	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1240	79	207	185								156		
鴻ノ巣-32	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						754	90	246	194								158		
鴻ノ巣-33	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						956	95	276	182								153		
鴻ノ巣-34	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1240	86	399	207								156		
鴻ノ巣-35	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1251	78	284	166								156		
鴻ノ巣-36	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1161	85	251	157								140		
鴻ノ巣-37	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1946	98	158	154								146		
鴻ノ巣-38	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1201	95	220	166								149		
鴻ノ巣-39	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1009	86	183	208								169		
鴻ノ巣-40	灰軸長頸瓶	灰層	A		14	20						1764	84	257	179								147		
鴻ノ巣-41	灰軸小瓶	灰層	A		14	20						1091	96	242	169								144		
鴻ノ巣-42	灰軸小瓶	灰層	A		14	20						786	92	209	177								145		
鴻ノ巣-43	灰軸小瓶	灰層	A		14	20						1071	93	288	172								156		
鴻ノ巣-44	灰軸小瓶	灰層	A		14	20						1114	88	227	180								166		
鴻ノ巣-45	灰軸小瓶	灰層	A		14	20						1467	88	232	173								143		
高針原-1	須恵器杯H	表土	A		14	20						2068	63	503	137		65						116		
高針原-2	須恵器杯H	表土	A		14	20						627	90	625	185								159		
高針原-3	須恵器杯H	表土	A		14	20						1492	84	540	136								123		
高針原-4	須恵器杯B	表土	A		14	20						1819	70	404	143								131		
高針原-5	須恵器杯B	表土	A		14	20						1108	79	633	142								107		
高針原-6	須恵器杯B	表土	A		14	20						1202	81	544	150								133		
高針原-7	須恵器杯G	表土	A		14	20						973	64	363	179								140		
高針原-8	須恵器杯G	表土	A		14	20						1057	70	462	195								184		
高針原-9	須恵器杯G	表土	A		14	20						1109	110	487	102								99		
高針原-10	須恵器高杯	表土	A		14	20						2331	633	246	144								114		
高針原-11	須恵器高杯	表土	A		14	20						4075	39	65	54								50		
高針原-12	須恵器横瓶	表土	A		14	20						736	85	258	113								101		
高針原-13	須恵器横瓶	表土	A		14	20						1212	64	480	174								161		
高針原-14	須恵器提瓶	表土	A		14	20						2219	51	346	129								122		
高針原-15	須恵器提瓶	表土	A		14	20						1681	69	436	161								132		
高針原-16	須恵器ハソウ	表土	A		14	20						3682	79	86	65								103		
高針原-17	須恵器ハソウ	表土	A		14	20						1487	64	542	146								138		
高針原-18	須恵器スリ鉢	表土	A		14	20						2901	54	222	102		77						94		
高針原-19	須恵器壺	表土	A		14	20						2229	85	128	131								121		
高針原-20	須恵器壺	表土	A		14	20						3682	43	79	72		127						66		
高針原-21	須恵器杯H	攪乱	A		14	20						556	98	505	161								159		
高針原-22	須恵器杯H	攪乱	A		14	20						1948	56	476	140								122		
高針原-23	須恵器杯H	攪乱	A		14	20						1739	65	300	163								138		
高針原-24	須恵器杯B	攪乱	A		14	20						2154	65	317	127								98		
高針原-25	須恵器杯B	攪乱	A		14	20						1324	68	357	113								105		
高針原-26	須恵器杯B	攪乱	A		14	20						910	70	264	135								118		
高針原-27	須恵器杯G	攪乱	A		14	20						1483	81	395	133								118		
高針原-28	須恵器杯G	攪乱	A		14	20						1061	75	352	133								96		
高針原-29	須恵器杯G	攪乱	A		14	20						2624	45	192	98		74						85		
高針原-30	須恵器平瓶	攪乱	A		14	20						1600	74	609	129								147		
高針原-31	須恵器平瓶	攪乱	A		14	20						682	82	506	129								105		
高針原-32	須恵器壺	攪乱	A		14	20						3793	44	69	91								74		
高針原-33	須恵器壺	攪乱	A		14	20						3658	43	77	44								60		
高針原-34	須恵器杯B	攪乱	A		14	20						2030	55	141	104								101		
高針原-35	須恵器杯B	SY01	A																						

装置をセットし、実験条件は加速電圧：15KV、分析法：スプリント法、分析倍率：200倍、分析有効時間：100秒、分析指定元素10元素で行った。試料はダイヤモンドカッターで小片に切断し、洗浄、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入して分析した。

分析の手順

結果

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法（10元素全体で100%になる）で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて、土器類を元素の面から分類した。このうち特色の出やすい元素を組み合わせ、図96～98の各図を作成した。

まず、 $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ の相関を考える。ここでは図96に示すように、I～IVのグループ分けが可能である。まず、Iグループは、 SiO_2 の値が低い領域に分散して高針原1号窯の椀A、瓶類、高杯類が展開する。次のIIグループは、 SiO_2 の値が67%～73%、 Al_2O_3 の値が低い領域である。ここでは鴻ノ巣古窯の須恵器椀Aと甕Aが集中する。IIIグループでは SiO_2 の値はIIグループと同様で、 Al_2O_3 の値が高い領域である。ここでは鴻ノ巣古窯の灰釉陶器長頸瓶と高針原1号窯の杯類が集中する。最後のIVグループは、 SiO_2 の値が、73%以上の領域で、鴻ノ巣古窯の灰釉陶器椀と高針原1号窯の杯類が集中する。

$\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ の相関を検討した結果をまとめる。図96を眺めると、ここでは鴻ノ巣古窯試料が3つに区分できる。須恵器と灰釉陶器長頸瓶、灰釉陶器椀、平皿である。高針原1号窯では杯類が集中するグループと椀A、瓶類、高杯類に区分できる。なお、細口下1号窯は、ここでも高針原1号窯試料からは分離できない。

$\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{Na}_2\text{O}$ の相関から得られた情報をまとめる。ここでは図97に示すように、やはりI～IVのグループ分けが可能である。まず、Iグループは、 Fe_2O_3 の値が低く、 Na_2O の値が高い領域である。細口下1号窯の試料で構成される。次のIIグループは、 Fe_2O_3 の値と、 Na_2O の値がともに低い領域にある。鴻ノ巣古窯の灰釉陶器が集中するグループで、ここでは細口下1号窯の試料も混在する。IIIグループでは、 Fe_2O_3 の値が2～5%の領域。ここでは高針原1号窯試料が集中する。最後のIVグループは、 Fe_2O_3 の値が4～6%の領域。ここでは、鴻ノ巣古窯の須恵器が集中する。

$\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{Na}_2\text{O}$ の相関から得られた情報をまとめる。ここでは鴻ノ巣古窯の須恵器と灰釉陶器を分離できた。また、細口下1号窯が高針原1号窯から分離できる傾向も示している。

最後に $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ の相関を考える。ここでは図98に示すように、やはりI～IVのグループ分けが可能である。

Iグループは、 CaO の値が高い領域で、鴻ノ巣古窯の試料が集中する。次のIIグループは、 K_2O が2～3%の領域。ここには高針原1号窯の試料が集中する。IIIグループは、Iグループに比較して CaO の値がやや低い領域。鴻ノ巣古窯の試料が集中する。最後のIVグ

PI (I)

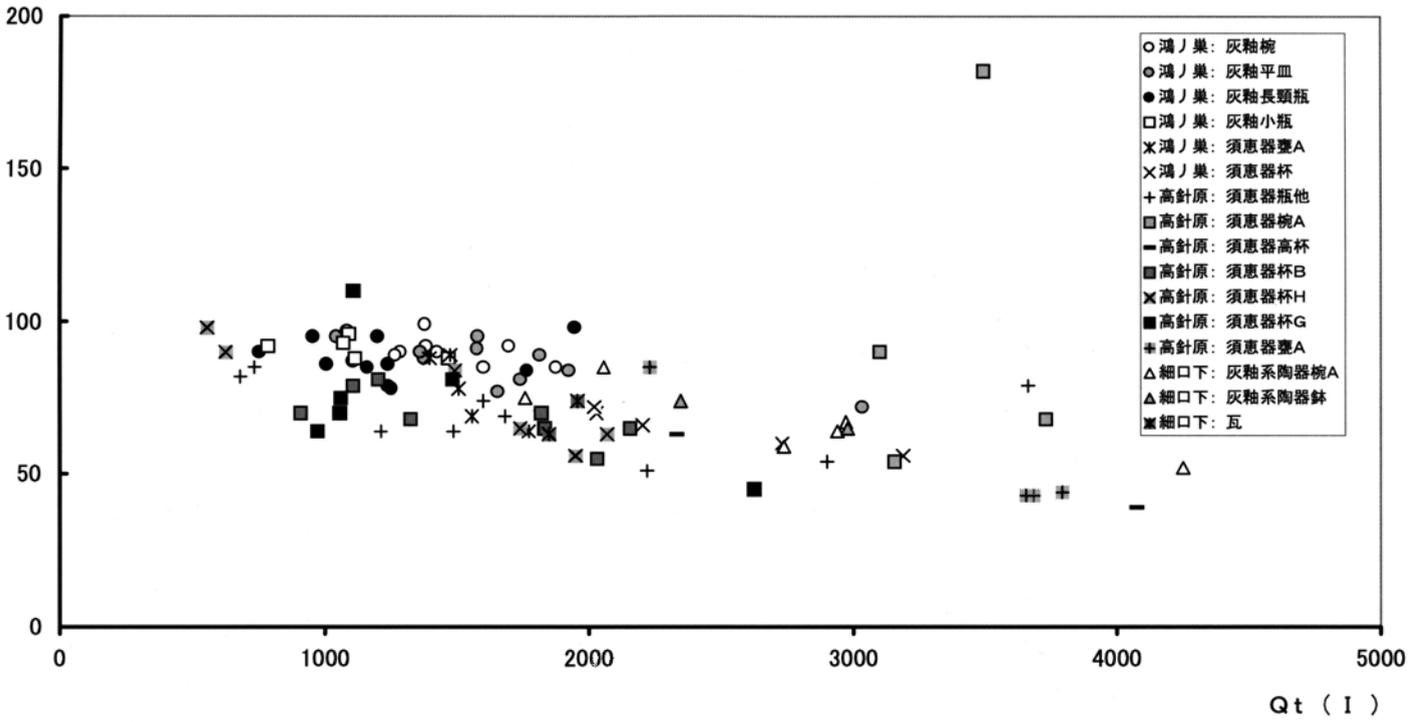


図 95 Qt - PI 図

Al₂O₃
(Wt %)

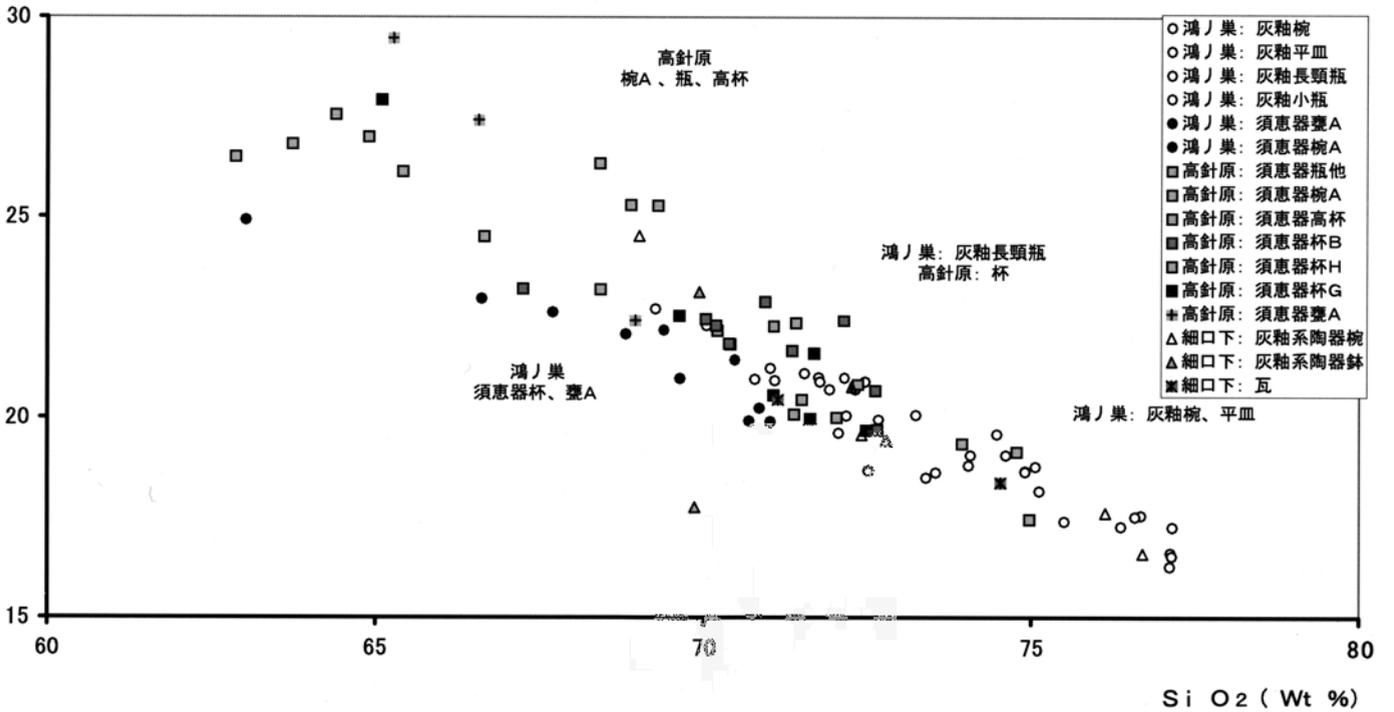


図 96 SiO₂ - Al₂O₃ 図

ループは、 K_2O が3%～4%前後で、 CaO の値が微量ないし検出できない領域で、細口下1号窯の試料が集中する。

$K_2O - CaO$ の相関から得られた情報をまとめる。ここでは細口下1号窯の試料を高針原1号窯のからはば分離できる。

(3) まとめ

以上のように、胎土分析はなるべく多角的に進めた。その結果、注目できたのは、各遺跡で使用胎土が若干異なることである。特に明瞭なのは、高針原1号窯の須恵器と鴻ノ巣古窯の須恵器、灰釉陶器であった。そして、この違いは一部には確実に器種の差にまで及んでいる。具体的には、鴻ノ巣古窯灰釉陶器の椀、皿類と瓶類の違い、高針原1号窯須恵器の杯類と椀、瓶、高杯の違いなどがあげられる。こうしたことは、灰釉陶器、須恵器が胎土を予想以上に管理している可能性を指摘できる。当該期の土器生産体制を考える上で重要な資料となるだろう。しかし、今回は試料数に若干の問題があり、詳細は今後の分析データの蓄積に期待したい。

器種差が使用
胎土差

以下に、遺跡別の特色をまとめる。

高針原1号窯

$Qt - Pl$ の相関、 $SiO_2 - Al_2O_3$ の相関などでは、杯類と椀A、瓶類、高杯類はこれとは異なったものとなる。杯類には差異はうかがうことはできない。なお、これらの須恵器は、鴻ノ巣古窯のそれとは比較的容易に分離でき、距離的には非常に近接するにも関わらず、使用胎土に特色を考えることができる

鴻ノ巣古窯

$SiO_2 - Al_2O_3$ の相関 $K_2O - CaO$ の相関では、須恵器と灰釉陶器は分離できた。また、灰釉陶器では器種差による胎土差も一部に指摘できる。特に $SiO_2 - Al_2O_3$ 相関では、椀・皿類と瓶類の使用胎土差が現れる。同様の状況はやや不明瞭ながらも、 $Qt - pl$ の相関でも指摘できる。

細口下1号窯

$K_2O - CaO$ の相関、 $K_2O - CaO$ の相関では他者と分離が可能だが、一部は高針原1号窯や鴻ノ巣古窯試料とに混在する。

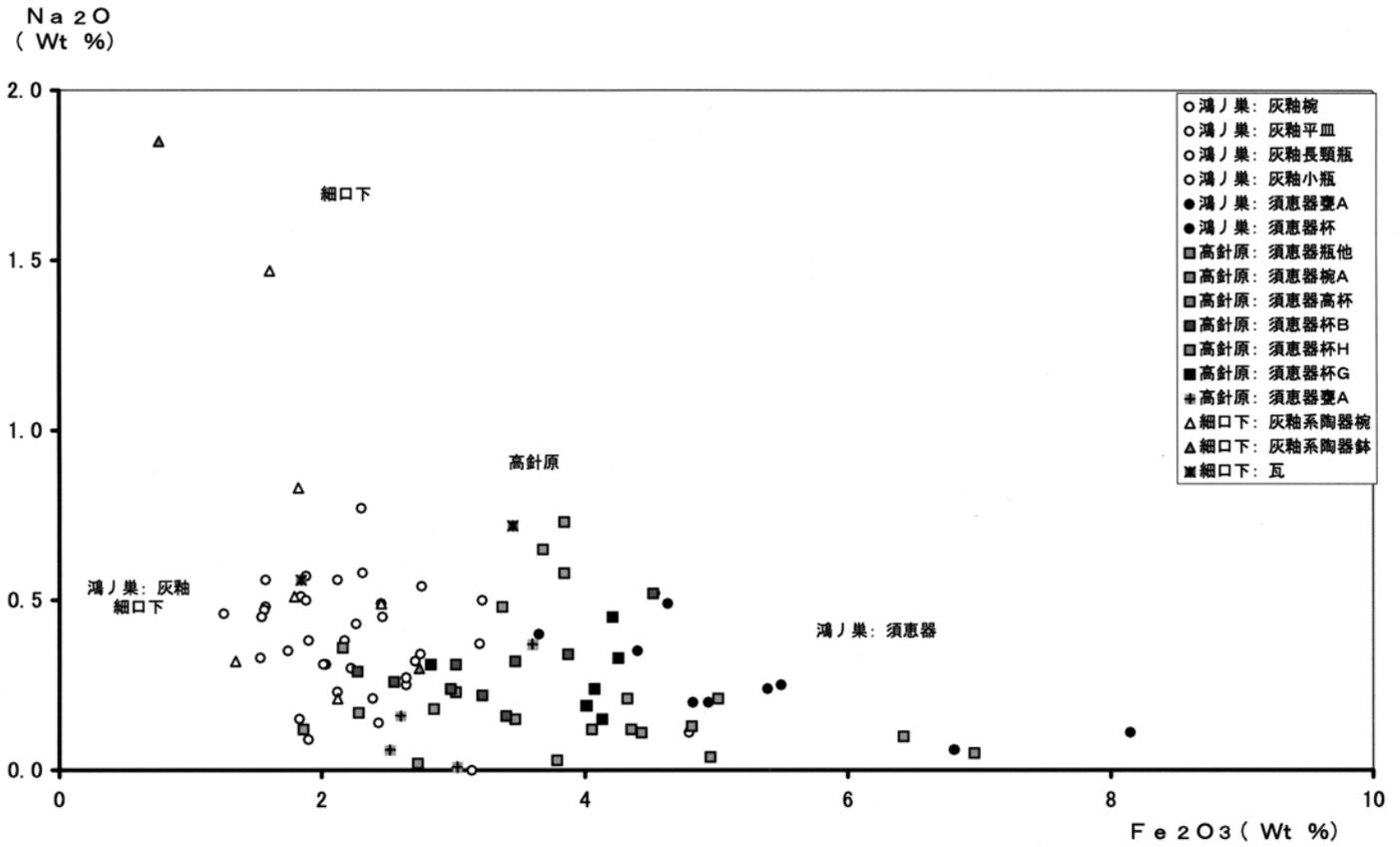


図97 Fe₂O₃ - Na₂O

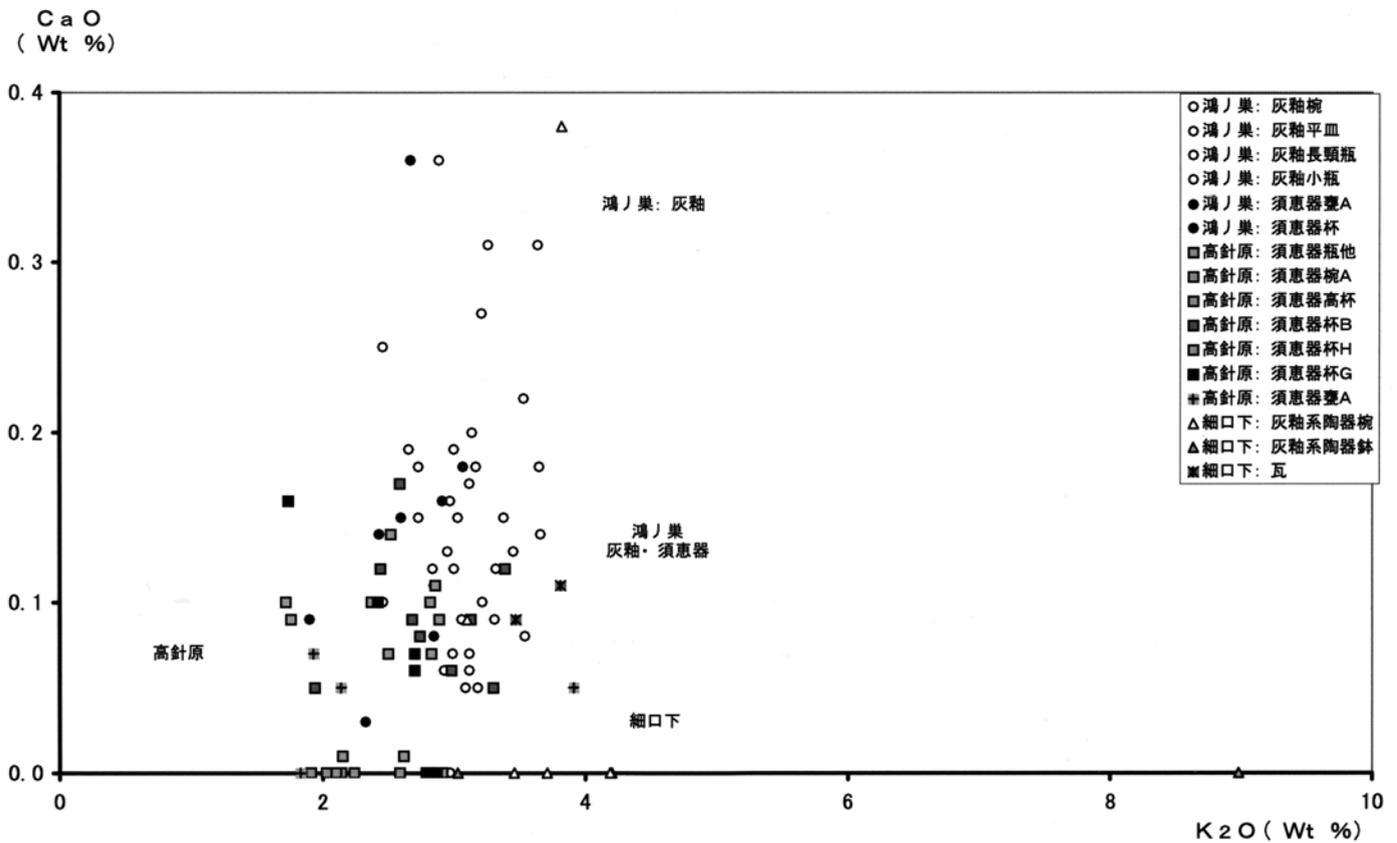


図98 K₂O - CaO

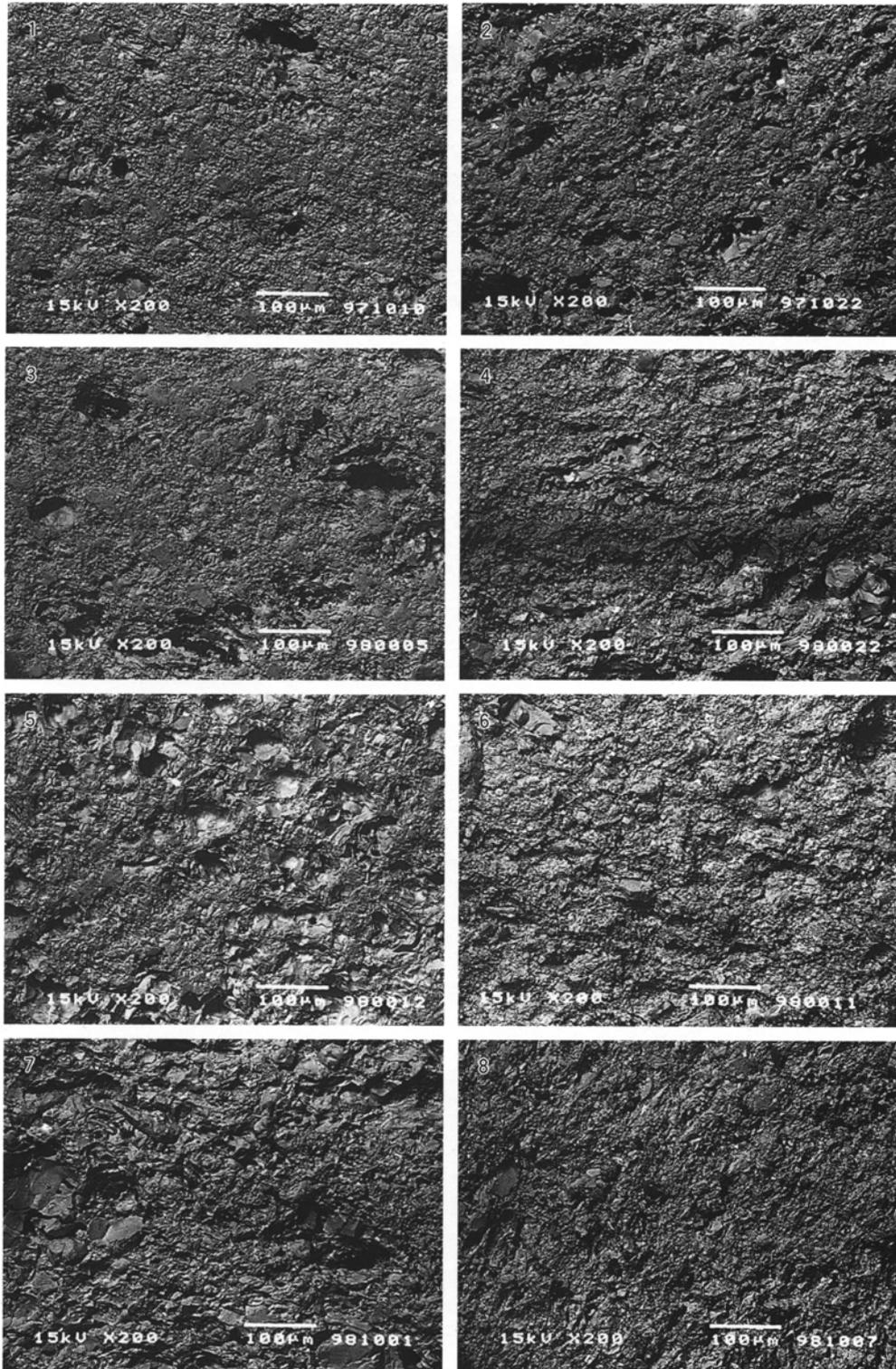


図 99 土器胎土顕微鏡写真

1. 鴻ノ巣-9 2. 鴻ノ巣-21 3. 高針原-5 4. 高針原-21
5. 高針原-12 6. 高針原-11 7. 細口下-1 8. 細口下-8

表9 科学分析表1

試料番号	種類・器種	出土位置	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total
鴻ノ巣-1	灰釉椀	灰層	0.09	0.00	18.74	75.06	3.18	0.05	0.99	0.00	1.90	0.00	100.01
鴻ノ巣-2	灰釉椀	灰層	0.35	0.05	17.51	76.68	2.46	0.25	0.94	0.00	1.74	0.02	100.00
鴻ノ巣-3	灰釉椀	灰層	0.48	0.00	19.03	74.07	3.65	0.18	0.79	0.03	1.57	0.19	99.99
鴻ノ巣-4	灰釉椀	灰層	0.56	0.00	17.37	75.51	3.53	0.22	1.05	0.21	1.57	0.00	100.02
鴻ノ巣-5	灰釉椀	灰層	0.38	0.07	20.03	72.18	3.26	0.31	1.18	0.00	2.17	0.41	99.99
鴻ノ巣-6	灰釉椀	灰層	0.47	0.00	17.23	77.16	2.66	0.19	0.61	0.12	1.56	0.00	100.00
鴻ノ巣-7	灰釉椀	灰層	0.50	0.00	22.69	69.26	2.89	0.36	1.09	0.00	3.22	0.00	100.01
鴻ノ巣-8	灰釉椀	灰層	0.57	0.00	18.77	74.04	3.12	0.17	1.09	0.00	1.88	0.36	100.00
鴻ノ巣-9	灰釉椀	灰層	0.30	0.00	20.04	73.24	2.95	0.13	0.88	0.05	2.22	0.17	99.98
鴻ノ巣-10	灰釉椀	灰層	0.25	0.00	20.98	72.14	2.73	0.15	0.84	0.00	2.64	0.26	99.99
鴻ノ巣-11	灰釉平皿	灰層	0.15	0.01	16.59	77.13	3.09	0.05	0.80	0.00	1.83	0.35	100.00
鴻ノ巣-12	灰釉平皿	灰層	0.14	0.00	20.88	72.46	3.03	0.15	0.91	0.00	2.43	0.00	100.00
鴻ノ巣-13	灰釉平皿	灰層	0.46	0.00	16.51	77.15	3.22	0.10	0.84	0.00	1.25	0.47	100.00
鴻ノ巣-14	灰釉平皿	灰層	0.51	0.00	16.25	77.12	2.99	0.07	0.80	0.05	1.84	0.38	100.01
鴻ノ巣-15	灰釉平皿	灰層	0.23	0.00	18.62	74.91	3.31	0.09	0.73	0.00	2.12	0.00	100.01
鴻ノ巣-16	灰釉平皿	灰層	0.45	0.00	19.033	74.61	3.32	0.12	0.83	0.00	1.54	0.09	99.99
鴻ノ巣-17	灰釉平皿	灰層	0.56	0.00	21.00	71.75	3.21	0.27	0.87	0.00	2.12	0.22	100.00
鴻ノ巣-18	灰釉平皿	灰層	0.33	0.00	19.55	74.48	3.06	0.09	0.96	0.00	1.53	0.00	100.00
鴻ノ巣-19	灰釉平皿	灰層	0.21	0.00	17.49	76.59	2.46	0.10	0.74	0.00	2.39	0.00	99.98
鴻ノ巣-20	灰釉平皿	灰層	0.58	0.00	21.09	71.54	3.38	0.15	0.93	0.00	2.31	0.01	99.99
鴻ノ巣-21	須恵器甕	灰層	0.35	0.05	22.16	69.39	2.43	0.14	1.08	0.00	4.40	0.00	100.00
鴻ノ巣-22	須恵器甕	灰層	0.52	0.07	20.21	70.85	2.60	0.15	1.07	0.00	4.533	0.00	100.00
鴻ノ巣-23	須恵器甕	灰層	0.49	0.26	22.07	68.81	2.38	0.10	1.26	0.00	4.63	0.00	100.00
鴻ノ巣-24	須恵器甕	灰層	0.40	0.04	21.42	70.47	3.07	0.18	0.69	0.08	3.65	0.00	100.00
鴻ノ巣-25	須恵器甕	灰層	0.20	0.00	19.90	70.69	2.91	0.16	0.90	0.00	4.94	0.29	99.99
鴻ノ巣-26	須恵器坏	灰層	0.25	0.18	22.62	67.70	2.85	0.11	0.80	0.00	5.49	0.00	100.00
鴻ノ巣-27	須恵器坏	灰層	0.11	0.00	24.91	63.03	1.90	0.09	1.23	0.17	8.15	0.40	99.99
鴻ノ巣-28	須恵器坏	灰層	0.06	0.02	22.95	66.62	2.33	0.03	0.87	0.15	6.81	0.17	100.01
鴻ノ巣-29	須恵器坏	灰層	0.24	0.00	20.96	69.64	2.85	0.08	0.84	0.00	5.39	0.00	100.00
鴻ノ巣-30	須恵器坏	灰層	0.20	0.00	19.88	71.02	2.67	0.36	1.04	0.00	4.82	0.00	99.99
鴻ノ巣-31	灰釉長頸瓶	灰層	0.34	0.00	20.88	71.77	3.00	0.19	1.07	0.00	2.75	0.00	100.00
鴻ノ巣-32	灰釉長頸瓶	灰層	0.45	0.15	19.94	72.67	2.97	0.16	1.21	0.00	2.46	0.00	100.01
鴻ノ巣-33	灰釉長頸瓶	灰層	0.00	0.09	20.68	71.92	3.12	0.06	0.90	0.00	3.14	0.09	100.00
鴻ノ巣-34	灰釉長頸瓶	灰層	0.27	0.23	20.91	71.08	3.64	0.31	0.79	0.00	2.64	0.13	100.00
鴻ノ巣-35	灰釉長頸瓶	灰層	0.11	0.04	18.65	72.51	2.84	0.12	0.85	0.07	4.79	0.01	99.99
鴻ノ巣-36	灰釉長頸瓶	灰層	0.38	0.01	18.61	74.91	3.12	0.07	0.93	0.00	1.90	0.07	100.00
鴻ノ巣-37	灰釉長頸瓶	灰層	0.43	0.07	22.28	70.04	3.17	0.18	0.82	0.38	2.26	0.37	100.00
鴻ノ巣-38	灰釉長頸瓶	灰層	0.311	0.00	18.47	73.39	3.66	0.14	1.27	0.48	2.03	0.24	99.99
鴻ノ巣-39	灰釉長頸瓶	灰層	0.77	0.00	21.21	71.01	3.54	0.08	0.97	0.11	2.30	0.00	99.99
鴻ノ巣-40	灰釉長頸瓶	灰層	0.31	0.00	17.25	76.37	2.73	0.18	0.70	0.25	2.01	0.21	100.01
鴻ノ巣-41	灰釉小瓶	灰層	0.50	0.05	18.13	75.12	2.93	0.06	0.98	0.20	1.88	0.15	100.00
鴻ノ巣-42	灰釉小瓶	灰層	0.54	0.00	20.94	70.78	3.45	0.13	1.15	0.00	2.76	0.26	100.01
鴻ノ巣-43	灰釉小瓶	灰層	0.49	0.06	18.59	73.54	2.97	0.00	1.30	0.03	2.45	0.55	99.98
鴻ノ巣-44	灰釉小瓶	灰層	0.32	0.08	20.68	72.31	3.00	0.12	0.78	0.01	2.71	0.00	100.01
鴻ノ巣-45	灰釉小瓶	灰層	0.37	0.12	19.59	72.06	3.14	0.20	1.18	0.00	3.20	0.15	100.01
高針原-1	須恵器杯H	表土	0.18	0.00	22.36	71.40	2.10	0.00	1.12	0.00	2.85	0.00	100.01
高針原-2	須恵器杯H	表土	0.12	0.00	25.30	68.88	2.82	0.10	0.91	0.00	1.86	0.00	99.99
高針原-3	須恵器杯H	表土	0.36	0.00	19.12	74.77	2.37	0.10	1.01	0.05	2.16	0.07	100.01

第 V 章

表 10 科学分析表 2

試料番号	種類・器種	出土位置	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total
高針原-4	須惠器杯B	表土	0.24	0.00	20.67	72.61	2.74	0.08	0.69	0.00	2.98	0.00	100.01
高針原-5	須惠器杯B	表土	0.26	0.00	22.88	70.93	2.44	0.12	0.65	0.00	2.55	0.18	100.01
高針原-6	須惠器杯B	表土	0.29	0.00	22.41	72.13	1.94	0.05	0.79	0.00	2.27	0.12	100.00
高針原-7	須惠器杯G	表土	0.31	0.00	21.61	71.67	2.70	0.06	0.81	0.00	2.83	0.00	99.99
高針原-8	須惠器杯G	表土	0.19	0.00	22.53	59.62	2.81	0.00	0.81	0.00	4.01	0.03	100.00
高針原-9	須惠器杯G	表土	0.45	0.00	19.97	71.62	2.42	0.10	1.08	0.00	4.21	0.15	100.00
高針原-10	須惠器高坏	表土	0.15	0.00	22.17	70.20	2.91	0.00	1.00	0.00	3.47	0.09	99.99
高針原-11	須惠器高坏	表土	0.05	0.00	26.51	62.87	2.24	0.00	0.85	0.00	6.96	0.52	100.00
高針原-12	須惠器横瓶	表土	0.58	0.00	20.08	71.37	2.83	0.00	0.72	0.00	3.84	0.51	100.00
高針原-13	須惠器横瓶	表土	0.04	0.00	21.82	70.40	1.72	0.00	0.97	0.00	4.95	0.00	100.00
高針原-14	須惠器提瓶	表土	0.12	0.00	20.82	72.34	2.03	0.00	0.65	0.00	4.05	0.00	100.01
高針原-15	須惠器提瓶	表土	0.03	0.00	19.34	73.93	2.15	0.00	0.46	0.00	3.79	0.30	100.01
高針原-16	須惠器 Hanson	表土	0.10	0.00	26.82	63.73	1.91	0.00	1.00	0.00	6.42	0.03	100.01
高針原-17	須惠器 Hanson	表土	0.23	0.00	22.28	71.06	2.50	0.07	0.81	0.00	3.02	0.02	99.99
高針原-18	須惠器スリ鉢	表土	0.02	0.00	26.35	68.41	1.76	0.09	0.63	0.00	2.73	0.00	99.99
高針原-19	須惠器甕	表土	0.37	0.00	22.42	68.95	3.91	0.05	0.45	0.00	3.60	0.26	100.01
高針原-20	須惠器甕	表土	0.06	0.00	30.20	64.14	1.93	0.07	0.89	0.00	2.52	0.18	99.99
高針原-21	須惠器杯H	攪乱	0.73	0.00	20.44	71.49	2.52	0.14	0.60	0.00	3.84	0.25	100.01
高針原-22	須惠器杯H	攪乱	0.13	0.00	23.19	68.42	2.03	0.00	0.80	0.00	4.81	0.62	100.00
高針原-23	須惠器杯H	攪乱	0.65	0.00	19.99	72.02	2.89	0.09	0.68	0.00	3.68	0.00	100.00
高針原-24	須惠器杯B	攪乱	0.32	0.00	21.84	70.38	2.98	0.06	0.74	0.00	3.47	0.20	99.99
高針原-25	須惠器杯B	攪乱	0.31	0.00	21.67	71.34	2.59	0.17	0.89	0.00	3.02	0.00	99.99
高針原-26	須惠器杯B	攪乱	0.34	0.00	19.69	72.64	2.68	0.09	0.70	0.00	3.87	0.00	100.01
高針原-27	須惠器杯G	攪乱	0.24	0.00	19.67	72.47	2.70	0.07	0.79	0.00	4.07	0.00	100.01
高針原-28	須惠器杯G	攪乱	0.33	0.00	20.55	71.05	2.87	0.00	0.96	0.00	4.25	0.00	100.00
高針原-29	須惠器杯G	攪乱	0.15	0.00	27.94	65.09	1.74	0.16	0.79	0.00	4.13	0.00	100.00
高針原-30	須惠器平瓶	攪乱	0.17	0.00	25.28	69.29	2.05	0.00	0.82	0.00	2.28	0.11	100.01
高針原-31	須惠器平瓶	攪乱	0.48	0.00	17.44	74.97	2.86	0.11	0.72	0.00	3.37	0.06	100.00
高針原-32	須惠器甕	攪乱	0.16	0.00	29.47	65.26	1.83	0.00	0.67	0.00	2.60	0.01	100.00
高針原-33	須惠器甕	攪乱	0.01	0.00	27.43	66.56	2.14	0.05	0.66	0.00	3.03	0.12	100.00
高針原-34	須惠器杯B	攪乱	0.52	0.00	23.21	67.24	3.39	0.12	0.93	0.00	4.52	0.06	99.99
高針原-35	須惠器杯B	SY01	0.22	0.00	22.45	70.02	3.30	0.05	0.75	0.00	3.22	0.00	100.01
高針原-36	須惠器杯B	SY01	0.16	0.00	22.29	70.18	3.13	0.09	0.76	0.00	3.40	0.00	100.01
高針原-37	須惠器椀	SY01	0.21	0.00	27.57	64.39	2.14	0.00	1.16	0.00	4.32	0.21	100.00
高針原-38	須惠器椀	SY01	0.21	0.00	24.51	66.65	2.59	0.00	0.61	0.00	5.01	0.43	100.01
高針原-39	須惠器椀	SY01	0.12	0.00	27.01	64.89	2.62	0.01	1.00	0.00	4.35	0.00	100.00
高針原-40	須惠器椀	SY01	0.11	0.00	26.13	65.41	2.79	0.00	1.05	0.00	4.43	0.09	100.01
細口下-1	灰釉系陶器椀	表土	0.49	0.00	19.41	72.77	4.20	0.00	0.69	0.00	2.45	0.00	100.01
細口下-2	灰釉系陶器椀	表土	0.32	0.00	17.60	76.13	4.19	0.00	0.43	0.00	1.34	0.00	100.01
細口下-3	灰釉系陶器椀	表土	1.47	0.00	19.55	72.40	3.82	0.38	0.67	0.11	1.60	0.00	100.00
細口下-4	灰釉系陶器椀	表土	0.83	0.00	16.59	76.70	3.10	0.09	0.69	0.00	1.82	0.19	100.01
細口下-5	灰釉系陶器椀	表土	0.51	0.00	20.76	72.25	3.71	0.00	0.48	0.25	1.79	0.25	100.00
細口下-6	灰釉系陶器椀	表土	0.21	0.00	24.53	69.01	3.46	0.00	0.66	0.00	2.12	0.00	99.99
細口下-7	灰釉系陶器椀	表土	0.30	0.00	23.13	69.92	3.03	0.00	0.87	0.00	2.74	0.00	99.99
細口下-8	灰釉系陶器椀	表土	1.85	0.00	17.75	69.85	8.98	0.00	0.44	0.10	0.76	0.27	100.00
細口下-9	瓦	表土	0.72	0.00	20.44	71.12	3.47	0.09	0.72	0.00	3.45	0.00	100.01
細口下-10	瓦	表土	0.56	0.00	18.36	74.52	3.81	0.11	0.69	0.11	1.84	0.00	100.00

3 出土炭化材の樹種同定

ここでは、各遺跡から得た炭化材の樹種同定結果を報告する。試料は、高針原1号窯が22点、鴻ノ巣古窯が13点、細口下1号窯が16点。いずれも操業時の燃料材と考えている。

この分析は、(株)パレオ・ラボにより実施されたものである。結果は、遺跡別に報告書として本センターに納入されている。執筆は同社の植田弥生氏の手による。ここではその内容を要約、加筆して報告する。

(1) 炭化材樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面(木口)を手で割り、実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的であり、実体顕微鏡下の観察で同定可能である。また、それ以外の分類群については3方向の破断面(横断面・接線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で観察し、同定を決定する。なお、コナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や、逆に年輪幅の広い試料などは、実体顕微鏡下では誤同定の恐れがある。このような試料については、走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定の手順

(2) 結果

高針原1号窯

試料は22点である。検出された樹種は、クヌギ節とコナラ節がある。前者が19点、後者が3点で、前者が圧倒的に多い。両者はコナラ属コナラ亜属の落葉性グループに属し、温帯の丘陵地や低山地に一般的である。燃料の選択が指摘できるのかもしれない。

試料の形状は、丸木や樹皮が付いたものはない。年輪が最も多く連続して数えられた部分の年輪数とその放射方向の長さ(r)を記録した結果は、15～82年輪までであり、39年輪以下が11点、40～82年輪数が10点、計測不能が1点であった。試料は、確認できる放射方向は2.0～6.0cmの範囲で、本来はこれ以上の年輪数を持つ。この年輪数の多さは、年輪幅が非常に狭いぬか目部分が多かったためでもある。ぬか目は、発育不全や老年になった場合にしばしば現れることが知られている。コナラ節やクヌギ節の材ではぬか目が形成されやすいのか、遺跡出土の炭化材ではこのような状態を散見できる。しかし、今回の試料はぬか目が連続しており、こうした試料は現状では珍しい。

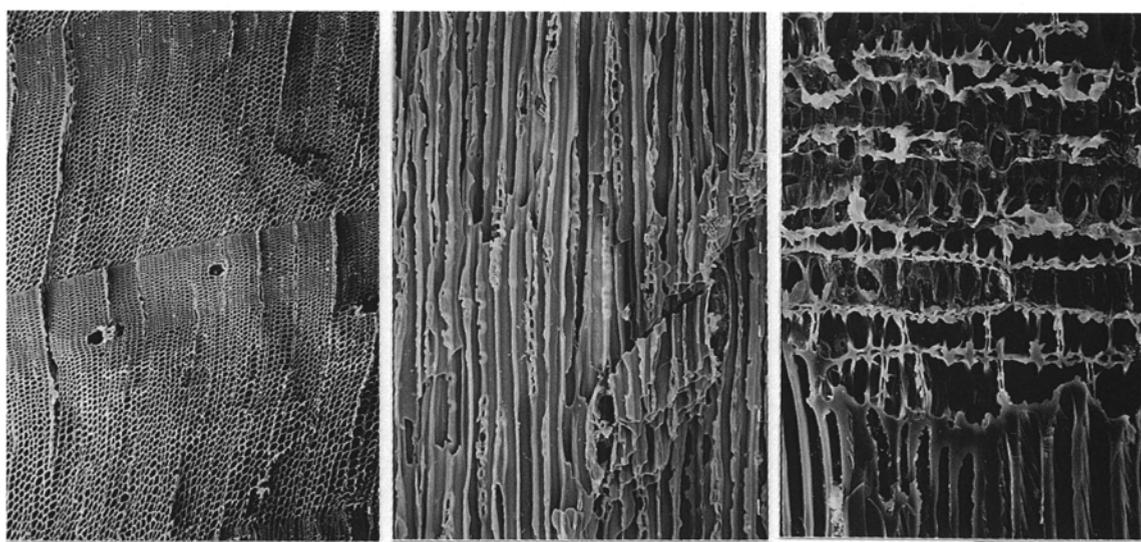
鴻ノ巣古窯

試料は13点である。小片も含まれ、安定性を欠く。3試料は同定できなかった。同定結

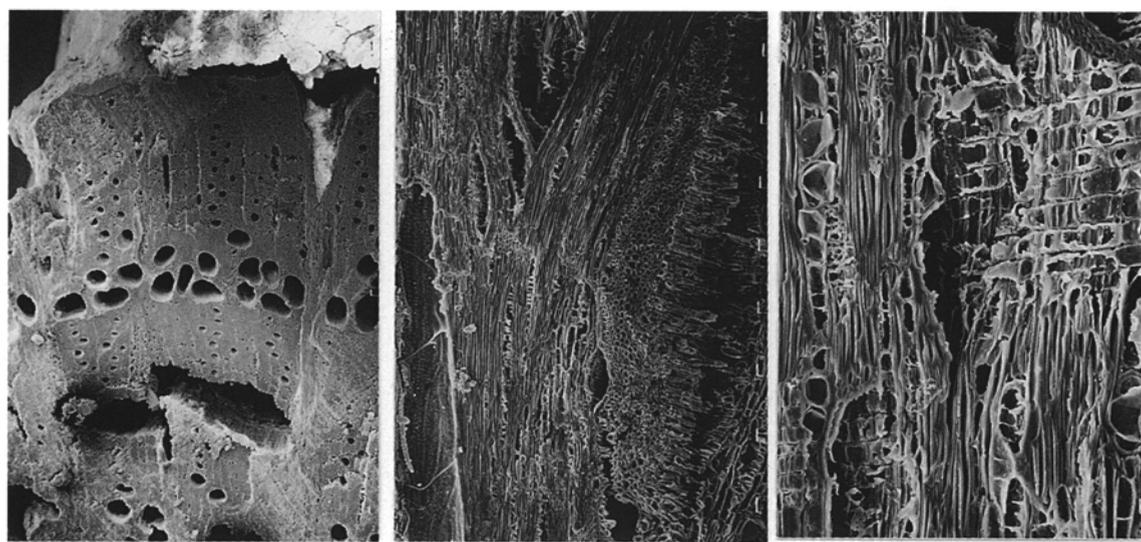
果は、すべてクヌギ節であった。丸木はなく、年輪を計測できた試料は6点と乏しい。しかし、放射方向の径が2.8cmで48年輪や、1.2cmで23年輪ある破片が出土していることから、樹齢の多い木も確実に使用されている。また、試料は全般に年輪幅が狭いぬか目の部分が多いのが目立った。

細口下1号窯

試料は16点である。樹種は、クヌギ節とマツ属複維管束亜属の2分類群で、クヌギ節が13点、マツ属複維管束亜属が3点であった。マツ属複維管束亜属の炭化材は、直径6.5cmの丸木で29年輪が数えられた試料1点、あとの2点は放射径が1.3と2.0cmの破片でそれぞれ



1 a. マツ属複維管束亜属 (横断面) bar : 0.5mm 1 b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm 1 c. 同 (放射断面) bar : 0.05mm



2 a. クヌギ節 (横断面) bar : 0.5mm 2 b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm 2 c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

図100 高針原1号窯炭化材

れ10年輪と17年輪が数えられた。クヌギ節の炭化材の形状は、直径が2.0～6.0cmの比較的細い丸木が7点。あとの5点もこれとほぼ同径と考えられる。クヌギ節では3～10年輪。マツ属複雑維管束亜属の10～29年輪より全般に年輪数が少ない。なお、試料には樹皮付きが2点あったが、年輪の最終形成部は状況が悪く確認できなかった。

(3) 同定された樹種の材組織記載

以下に、樹種の材組織を同定した視点及び根拠をまとめる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q. subgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科
 年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部は厚壁・円形で小型の管孔が単独で配列する環孔材。接線状・網状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列と集合状があり、道管との壁孔は柵状である。コナラ節と類似するが晩材部の小型管孔が、クヌギ節は孔口が丸くて厚壁であるが、コナラ節は多角形で薄壁であることから識別できる。

薪の種類

クヌギ節は落葉高木でクヌギとアベマキが属し、いずれの種も暖帯の山林や二次林に普通に生育する。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus. subgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科
 年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。管孔は単独である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと集合状・複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガンワがある。薪炭材としてよく利用される樹種である。

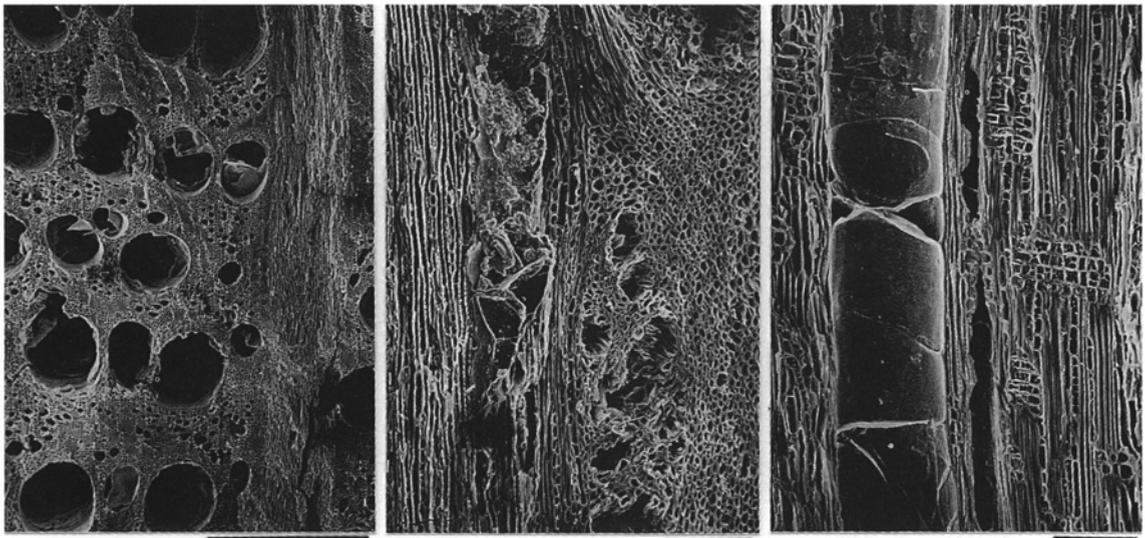


1 a. クヌギ節 (横断面) bar : 0.5mm 1 b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm 1 c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

図101 鴻ノ巣古窯炭化材

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

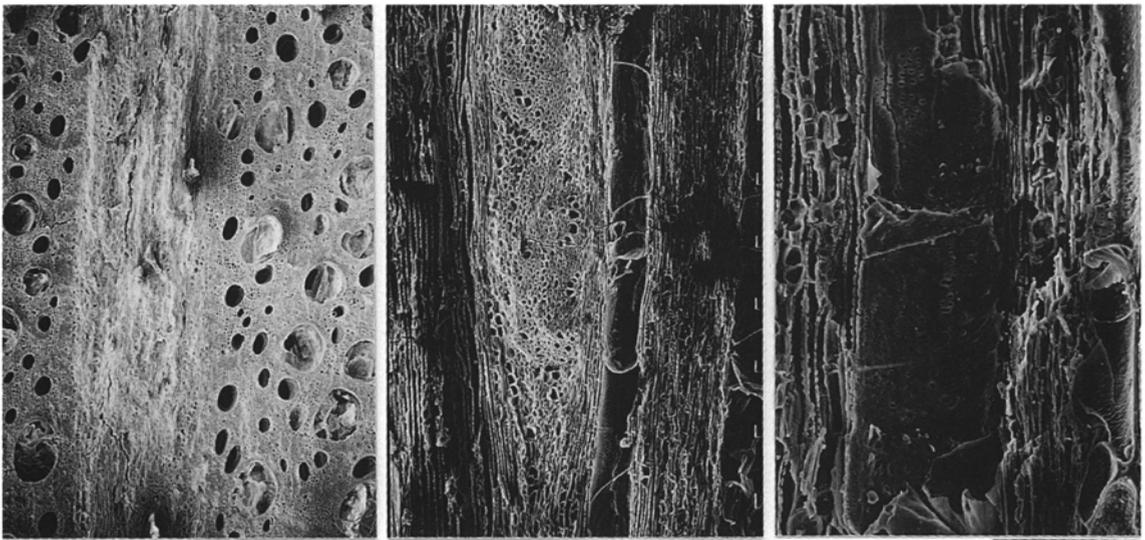
垂直と水平の樹脂道があり、晩材部の量は比較的多い針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端に有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁は肥厚している。このような観察結果からマツ属複維管束亜属と同定した。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが属する。アカマツは放射仮道管内壁の肥厚が鋭利な鋸歯状をなし、クロマツはそれが比較的ゆるやかである点で2種は識別される。しかし炭化材では識別は困難である。



1 a. コナラ節 (横断面) bar : 0.5mm

1 b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm

1 c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



2 a. クヌギ節 (横断面) bar : 0.5mm

2 b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm

2 c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

図 102 細口下 1 号窯炭化材

表 11 炭化材樹種同定結果

遺跡名	出土位置	樹種	r:放射径	年輪数	備考	
細口下1号窯	窯内	マツ属複維管束亜属	r:2.0cm	7年輪	樹皮付き 樹皮付き	
細口下1号窯	窯内	マツ属複維管束亜属	r:1.3cm	0年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	r:1.0cm	6年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	微小破片			
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	r:2.5cm	3年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	r:1.2cm	3年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	r:2.0cm	10年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:2.0cm	5年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:2.3cm	7年輪		
細口下1号窯	窯内	マツ属複維管束亜属	φ:6.5cm	29年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	r:1.2cm	6年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:6.0cm	10年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:2.0cm	5年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:4.0cm	7年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:3.0cm	5年輪		
細口下1号窯	窯内	クヌギ節	φ:3.0cm	8年輪		
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	小破片	23年輪		
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	小破片			
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	小破片			
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:1.2cm			
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:5.0cm			
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:3.5cm		22年輪	
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:2.8cm		48年輪	
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:3.5cm			
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:3.0cm			
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:2.0cm		10年輪	
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:0.7cm		11年輪	
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:0.7cm		5年輪	
鴻ノ巣古窯	灰層	クヌギ節	r:1.0cm			
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.0cm	80年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.0cm	42年輪		
高針原1号窯	灰層	コナラ節	r:3.5cm	23年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:2.0cm	33年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:2.3cm	35年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:2.3cm	21年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.5cm	32年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	薄破片			
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.0cm	15年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:4.0cm	26年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:2.5cm	17年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:5.0cm	47年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.0cm	24年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.0cm	45年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.5cm	59年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.5cm	23年輪		
高針原1号窯	灰層	コナラ節	r:3.0cm	40年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:4.0cm	56年輪		
高針原1号窯	灰層	コナラ節	r:4.0cm	43年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:2.5cm	19年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:3.5cm	82年輪		
高針原1号窯	灰層	クヌギ節	r:6.0cm	69年輪		

(4) まとめ

窯業と環境破壊

以上、距離が近接し、時間が異なる試料の樹種同定を実施した。試料数が乏しいが、一応の方向性を整理するため、ここで時期別の特色をまとめる。対象空間は、名古屋市天白区東部から名東区南部のおおむね 30K m²の丘陵地帯である。

なお、こうした問題は、本来ならば須恵器と灰釉陶器、灰釉系陶器の生産技術差にも着眼すべきであろう。舟底ピットを持つ高針原 1 号窯と、分焰柱を持つ鴻ノ巣古窯、細口下 1 号窯とでは、窯体構造に差異がある。このため、これが、使用燃料にまで影響している可能性も考えられる。しかし、資料不足の現状ではこの点にまでは論究できない。

飛鳥時代（高針原 1 号窯試料）

検出された樹種は、クヌギ節とコナラ節である。前者が後者より圧倒的に多く、ここでの主要な燃料樹種であったと推定される。年輪数では、40 年輪数以上を持つ試料が、前者のほとんどと、後者にも認められた。ここでは、クヌギ節やコナラ節が豊富な自然林、またはそれに近い落葉広葉樹林から燃料を得ていた可能性が考えられる。

平安時代中期（鴻ノ巣古窯試料）

分析試料は、すべてクヌギ節であった。形状は放射方向の径が 5.0 cm 以下の破片がほとんどで、丸木状のものは見られなかった。年輪数は、6 試料について連続定量確認した。この中には、放射径が 2.8 cm で 48 年輪や、1.2 cm で 23 年輪を数える試料も存在する。この段階でも、樹齢の多いクヌギ節が枯渇せずに生育していたとも受けとめられる。

平安時代末～鎌倉時代前期（細口下 1 号窯試料）

分析試料は、クヌギ節とマツ属複維管束亜属である。前者優位、後者は少量であった。また、本窯試料のみマツ属複維管束亜属が検出されている。これは、度々言われるように、窯業活動に伴いアカマツなどのマツ属による二次林化が進んだためとも考えられる。なお、クヌギ節とマツ属複維管束亜属では、形状と数えられた年輪数に差異が見られた。前者は細い丸木で年輪数は少ない傾向、後者は前者より年輪数が多い傾向にある。

表 12 炭化材種同定結果

遺跡名	時期	樹種	形状、計測年輪数、横断面大きさ
高針原1号窯	飛鳥時代	クヌギ節19	すべて破片、15～82年輪、2.0～6.0cm
		コナラ節 3	すべて破片、23～43年輪、3.0～4.0cm
鴻ノ巣古窯	平安時代	クヌギ節13	すべて破片、5～48年輪、0.7～3.5cm
細口下1号窯	平安時代	クヌギ節13	丸木と破片、3～10年輪、1.2～6.0cm
	鎌倉時代	マツ属複維管束亜属3	丸木と破片、15～29年輪、1.3～6.5cm

第 VI 章 ま と め



埋め戻し風景

細口下1号窯 鴻ノ巣古窯
鴻ノ巣古窯 高針原1号窯

第VI章 まとめ

猿投窯は、5世紀～13世紀まで存在する窯業遺跡として著名である。その範囲は、約20km四方にも及ぶ。これを現在の行政区画で表現すると、東西が豊田市西部から名古屋市東南部、南北が刈谷市北部から瀬戸市南部となる。

今日、猿投窯はいくつかの地区に区分して理解されている。そして、今回報告する窯業遺跡3か所は、このうちの鳴海地区と岩崎地区に属する遺跡である。

今回調査した遺跡は、帰属時期が細口下1号窯が平安時代末～鎌倉時代初頭、鴻ノ巣古窯が平安時代中期、高針原1号窯が飛鳥時代と、それぞれ異なっている。そして、調査で得られた成果は前章までに報告してきた通りである。

以下、簡単にまとめる。

細口下1号窯

床下施設

第II章で報告した。特殊器種を含む灰釉系陶器焼成窯となる。窯体は分焰柱を持つ窖窯で、焼成室のみを確認できた。ここでは、三面の床が確認でき、操業期間中に改修作業を受けたことがうかがえる。この作業は、一次窯の床面を掘削した後に、別の土砂を充填し、新たな床面を設定したものとなる。ここで特徴的なのは、一次窯床面を掘削した上部に、焼成不良の製品や焼台などを敷き詰めた工程の存在である。

次に、出土遺物は多量とは言えないが、平安時代末～鎌倉時代初頭に属する。この中で、肩部に飛雲文を施す四耳壺や、瓦類の出土は注目できる。

鴻ノ巣古窯

灰白軟陶

第III章で報告した。いわゆる須恵器と灰釉陶器の併焼窯である。今回の発掘調査では窯体は検出できず、灰層の末端部分を検出したに留まる。出土遺物は多量とは言えないが、平安時代中期に属する。器種は比較的豊富で、陰刻文を施す灰白軟陶の存在は注目できる。

高針原1号窯

飛鳥時代の
須恵器

第IV章で報告した。須恵器窯である。窯体の構造は、舟底ピットを付設する窖窯となる。窯体前面の構造が特徴的となる。ここでは比較的広範囲を発掘調査の対象地としたが、付属施設は確認することができなかった。調査区全体に攪乱がひどいことも原因しているのかもしれない。出土遺物は飛鳥時代を中心とする須恵器で、従来不明確であったこの段階の資料を補足するものとして注目できる。

第 VII 章 付 載



第VII章 付載

1 細口下1号窯採集遺物

(1) 掲載資料の性格

前述のように、細口下1号窯は国道302号線の側道建設工事中に発見された経緯を持つ。この工事は、SY01の燃焼室と前庭部、灰原の一部を破壊した。その結果、現場には多くの遺物が散乱していたという。しかし、一部の資料は名古屋市見晴台考古資料館と荒木集成館の手で採集されて散逸を免れている。

以下に掲載する資料は、名古屋市見晴台考古資料館と荒木集成館が所蔵する資料の実測図である。今回、本センターが報告書を刊行するにあたり、両施設より実測図の掲載を御許可いただいた。後者資料は、図103、104-1764、1765、1767～1770、1792。前者はそれ以外となる。なお、器種名などは第II章の表現に一致する。

(2) 資料所見

1734～1754は椀。1734～1738が椀A。1735～1738は口縁部を欠く。第II章で述べた特色と一致する。1739～1749は椀B。1745～1748は底部を、1749は口縁部を欠く。やはり第II章で述べた特色と一致する。1750～1753は、口縁端部に回転ナデ調整を加え、端部がフラットとなる一群。このうち全形が残存する1750は、椀Bの特徴を観察できる。この類は、見晴台考古資料館資料に若干確認できるのみで、本センターの調査では得ていない。ここではこの一群を椀B2、1739～1749や、第II章で述べた椀Bを椀B1として理解する。1754は椀C。高台を欠く。直線的な体部を有する。

1755は小椀の底部。やや低い高台を持つ。見晴台考古資料館資料に1点のみ確認できる。

1756～1763は小皿。第II章で述べた小皿の特色と一致する。1756～1758は小皿A、1759～1763が小皿C。

1764～1780は壺で、いわゆる三筋文系陶器。1764～1769は肩部に耳部を持つ壺をまとめた。耳部が四か所付く四耳壺と考えられるが、1767～1769は、小片のため不明。なお、1767は耳部を一か所のみ残す体部片だが。四耳壺として図示した。体部の形状は、肩部でやや張りを持つ1764、1765と、全体に丸みを持つ1766、1767に大別できる。口縁部は短い。端部で短く折り返し、玉縁状を呈する。底部は有台。耳部は二本の粘土紐による粘土板によるもので、両端を肩部に押さえつけて貼付する。文様はすべて体部に確認でき、二本一組の沈線文と、刻画文がある。施文順位は全て前者が先、後者が後となる。二本一組の沈線文は、1765が最大径付近に一か所、1766、1767には三か所が確認できる。1768、1769は肩部片だが、耳部直下と最大径付近に認められるが、1769には頸部との境界にも一本の

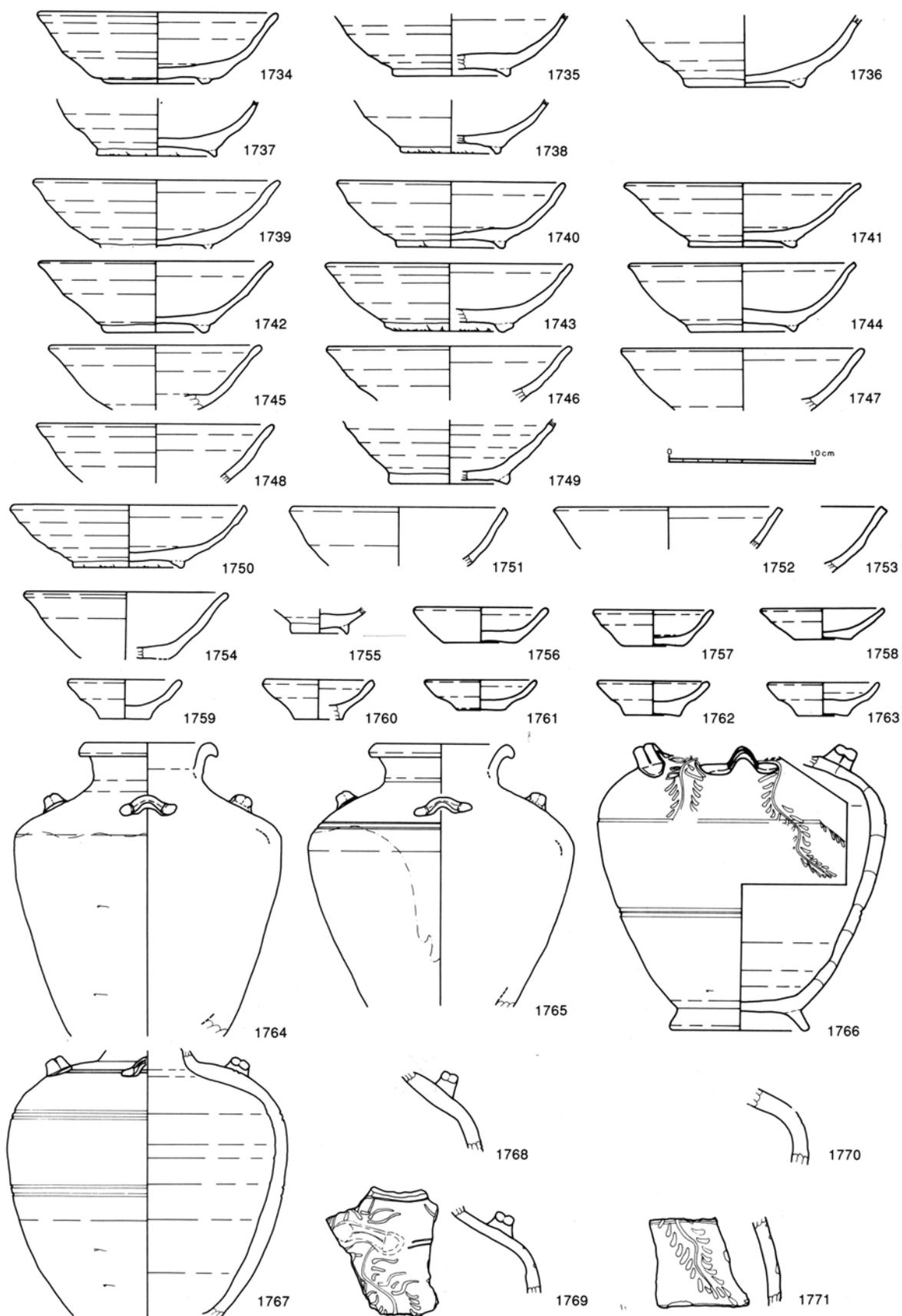


图 103 細口下 1 号窯採集遺物 1

藤花文四耳壺

み沈線文を施す。後者の刻画文は、1766、1769に「藤花」をモチーフとしたものが確認できる。これらは、同一個体の可能性を持つ資料で、線刻は端部のやや丸い工具により太く深く刻まれる。このうち残存状況の良い1766は、肩部の1/3程度が残存する資料である。外面には灰緑色の自然釉が厚く掛かり詳細は不明だが、耳部の脇から蛇行して垂下する花序が三本確認できる。各花序は周囲に花卉が表現されるが、体部の最大径付近を境界として表現が異なる。1770、1771は器種不明の壺。いずれも体部片。外面に刻画文を施すことからここで報告する。モチーフは、前者が飛雲で、(図7-65)と同一個体の可能性を持つ。一方、後者は藤花だが、1766は1767と別個体となる。ただし、線刻のタッチは類似する。1772～1774は壺。いずれも底部を欠く。体部は丸みを帯びるが、1772の肩部にはやや張りが認められる。口縁部は短い。端部で短く折り返し、玉縁状を呈するが、1772は大きく折り返される。体部と頸部の境界、体部の最大径付近に二本一組の沈線文を施す。なお、1774には、体部の最大径付近にヘラによる線刻が確認できる。線刻は太く浅い。図示した面は「十」に類似するがさらに横に長い。なお、1774には裏面にも非常にラフな波線が確認できる。いずれの線刻も、沈線文より後に施される。

1777～1780は体部上方に凸帯が付く壺。全面回転ナデ調整。1777～1779はおそらく同一個体。1777が頸部付近、1778がその下方で、1779は凸帯より下部となる。肩部に丸みを持つ形状で、凸帯の上部に二本一組の沈線文を施す。凸帯は粘土紐の貼付による。

1781は、直線的な体部を有し、口縁部付近で段をもって内傾する。段部直下には二本一組の沈線文を施す。全面回転ナデ調整。経筒外容器か。

1782～1789は鉢。このうち1782～1787は椀を大型化した形状。第II章で述べた鉢の特色と一致する。体部の形状が判明している1782～1784は椀Aに類似する。1787は、やや底径が広い。1788は1782～1787に比較して口径の狭い形状の鉢となる。体部からそのまま口縁部に至り、端部で面を持つ。無台で平底となる。腰部以上は回転ナデ調整。腰部以下の外面にラフな回転ヘラケズリ調整を施す。口縁端部の調整は丁寧。1789は、丸みを持つ体部を有する。口縁部は短く屈曲し、端部にラフな面を持つ。体部外面下方に回転ヘラケズリ調整を施す他は、全面回転ナデ調整。見晴台考古資料館資料に1点のみ確認できる。

1790は羽釜。鏝部の極小片。全面回転ナデ調整。やはり見晴台考古資料館資料に1点のみ確認できる。

1791、1792は丸瓦の瓦当部。詳細は本章の2で記述する。

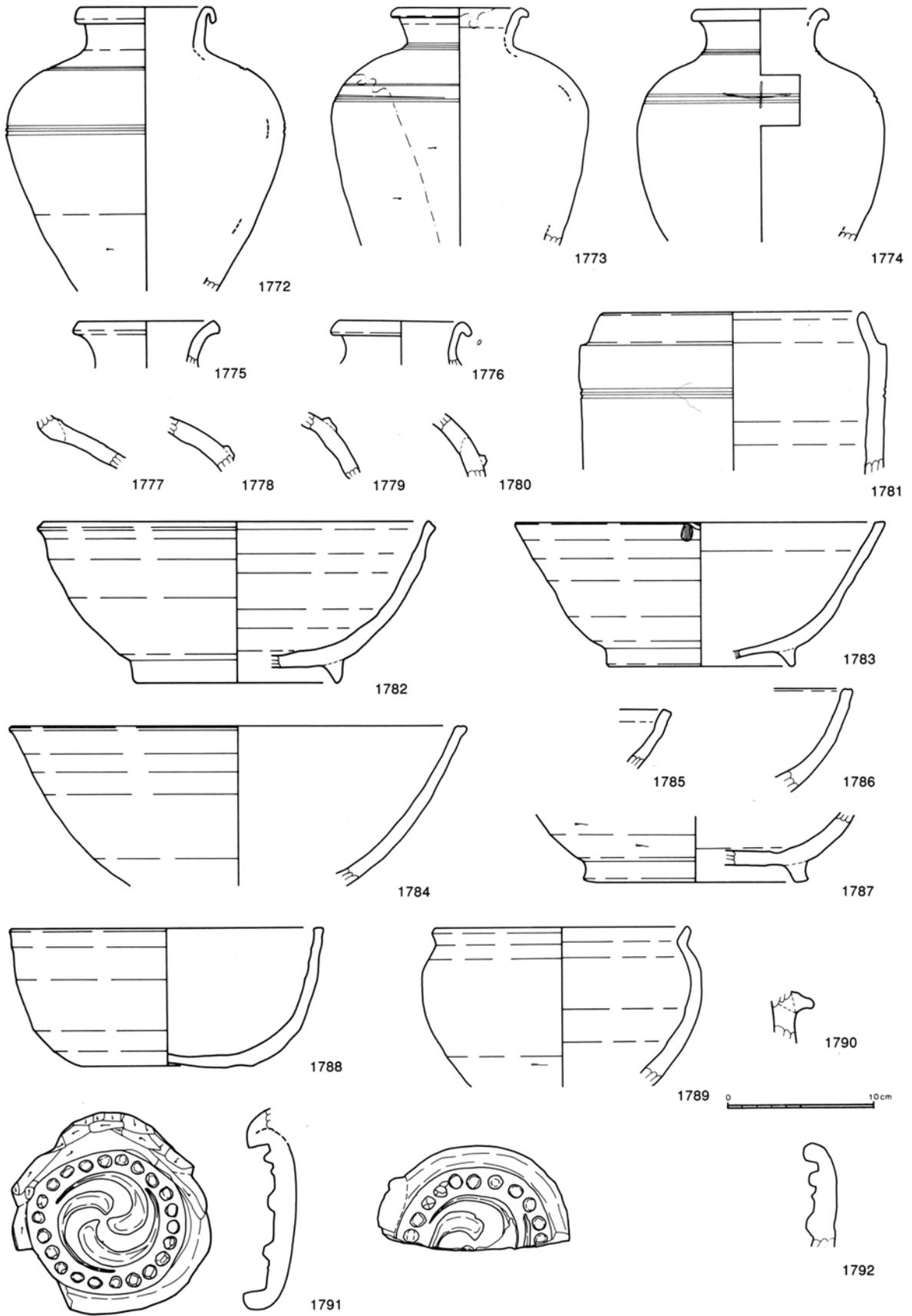


图104 細口下1号窯採集遺物2

2 細口下1号窯出土瓦についての一考察

(1) はじめに

平安時代における尾張地方は、猿投窯を中心として中世窯業へ転換している時期であり、東山地区においては山茶碗類と瓦を併焼する瓦陶兼業窯が出現している。本窯もその一つであり、本窯において出土した瓦は軒丸瓦1点、丸瓦11点、平瓦4点の計16点と非常に少ない数ではあるが、中には興味深い資料も存在する。

以下、特徴ある点をあげて説明をしていくことにする。

(2) 軒丸瓦 (図8-70)

1点のみ出土している軒丸瓦70は、瓦当部と玉縁部が欠損しているため、残念ながらその全容を知ることはできない。しかし、瓦当部については見晴台考古資料館、荒木集成館に以前調査が行われた際に出土した瓦当部が保管されている。

見晴台考古資料館の瓦当部は、左三ツ巴文で珠文22個を配するもので、かなり粗雑な作りである(図104-1791)。一方、荒木集成館の瓦当部は半分のみで、左三ツ巴文で珠文は22個と推測されるが、歪みが激しいため断定はできない(図104-1792)。おそらく、70もこれらと同様の瓦当部を持っていただろう。

製作方法については、丸瓦本体部分と瓦当部は別々に作成され、後から接合している(図105)。丸瓦本体は凹面に糸切り痕と布目が残ることから桶巻作りで、二分割されたと考えられる。分割後、側面は削られ凹面側に面取りがなされる。瓦当部は瓦範に粘土を押し

付けて型を取り、丸瓦本体の凹面に側に粘土を足して接合する。本窯出土の軒丸瓦には、瓦当部のはがれた跡が残っていて、その様子を伺うことができる(図版8-70)。瓦当部は丸瓦の内側にはまる様な状態で接合されていたようである。丸瓦本体の前方の端面が凸面側に面取りがなされているのは、本体と瓦当の接合部を表向きに緩やかにつなげるためか。また同じく前方の端面の凹面側も面取りがなされているのは、瓦当の上側のカーブに合わせて面取りをすることで、接合をしやすくしたと考えられる。

荒木集成館所蔵の瓦当部は全面に釉を施してあるが、本窯の瓦も全体に釉がかかっている。しかし、割れ口にもみられるように釉が2度にわたっ

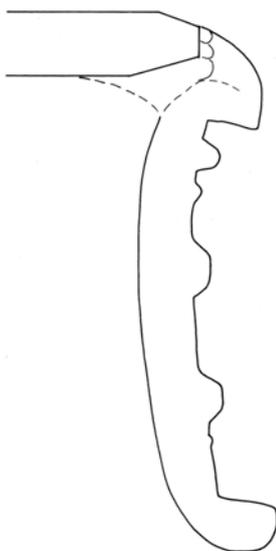


図105 瓦当接合部予想図

表 12 葺口下1号葺瓦呼選表

図番号	種類	出土位置	全長	幅		高さ	厚さ	玉縁部			凹面布目数
				前側	後側			長さ	幅	高さ	
70	有段式軒丸瓦	SY01	29.6cm	11.6cm	14.2cm	5.8cm	2.35cm	—	—	—	17×16

図番号	側面形状	分割断面	端面形状	焼成	色調	備考		
						前側	後側	備考
70	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	横方向に削り	軟質、焼成二回	10YR8/1灰白	—	—	瓦当部欠損、桶巻作り

図番号	種類	出土位置	全長	幅		高さ	厚さ	玉縁部			凹部調整	凹面布目数	
				前側	後側			長さ	幅	高さ			厚さ
71	玉縁付丸瓦	SY01	32.3cm	13.5cm	13.2cm	6.4cm	1.55cm	4.15cm	11.5cm	5.6cm	1.4cm	横・縦まで 糸切り痕	20×15
72	玉縁付丸瓦	SY01	26.8cm	14.1cm	9.5cm	2.9cm	2.56cm	—	—	—	—	縦まで 糸切り痕	17×16
73	玉縁付丸瓦	SY01	4.4cm	—	—	—	—	5.25cm	(7.6cm)	4.55cm	1.0cm	接合部有り	24×20
74	丸瓦	SY01	8.6cm	(8.6cm)	—	—	1.8cm	—	—	—	—	糸切り痕	21×15
75	玉縁付丸瓦	SY01	10.0cm	(9.3cm)	2.6cm	—	1.2cm	—	—	—	—	横まで、指圧痕	22×17
76	玉縁付丸瓦	SY01	12.5cm	(7.8cm)	3.2cm	—	1.5cm	—	—	—	—	横・縦まで 糸切り痕、縦まで	20×15
77	丸瓦	SY01	17.5cm	(14.4cm)	—	5.4cm	1.7cm	—	—	—	—	横・縦まで 糸切り痕	20×15
78	丸瓦	SY01	10.4cm	9.7cm	—	6.3cm	1.55cm	—	—	—	—	横・縦まで 糸切り痕	20×15
79	丸瓦	葦土	7.1cm	(5.8cm)	—	—	1.3cm	—	—	—	—	横・縦まで 接合部有り	20×16
80	丸瓦	SY01	9.4cm	(7.7cm)	—	—	1.5cm	—	—	—	—	縦まで 桶跡?	20×16
	玉縁付丸瓦	SY01	6.1cm	—	6.3cm	—	1.4cm	—	—	—	—	横まで、指圧痕	不明瞭

図番号	側面形状	分割断面	端面形状	焼成	色調	備考		
						前側	後側	備考
71	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	凹部側面取り、横方向に削り	生焼け	10YR8/3浅黄橙	—	—	桶巻作り
72	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	前側面取り	軟質、焼成二回	10YR8/2灰白	—	—	桶巻作り
73	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	—	生焼け	7.5YR8/6浅黄橙	—	—	桶巻作り
74	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	—	硬質	10YR7/1灰白	—	—	桶巻作り
75	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	—	生焼け	7.5YR8/4浅黄橙	—	—	桶巻作り
76	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	—	生焼け	7.5YR8/6浅黄橙	—	—	桶巻作り
77	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	凹部側面取り	生焼け	10YR8/2灰白	—	—	桶巻作り
78	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	横方向に削り	生焼け	10YR7/3にふい、黄橙	—	—	桶巻作り
79	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	—	軟質、焼成二回	10YR8/2灰白	—	—	桶巻作り
80	縦方向に削り、凹部側面取り	直径方向に垂直	—	生焼け	7.5YR7/6橙	—	—	桶巻作り

図番号	種類	出土位置	全長	幅		高さ	厚さ	凹部調整	凸面布目数	側面形状	分割断面
				前側	後側						
81	平瓦	SY01	28.2cm	20.6cm	17.3cm	5.8cm	1.8cm	横まで、糸切り痕	15×20	縦方向削り、凹部側面取り	床方向に垂直
82	平瓦	葦土	14.1cm	(9.7cm)	—	—	2.1cm	(布目有り)	15×16	縦方向削り、凹部側面取り	床方向に垂直
83	平瓦	SY01	4.6cm	(11.1cm)	—	—	1.8cm	(布目有り)	15×18	縦方向削り	直径方向に垂直
84	平瓦	SY01	8.4cm	(11.0cm)	—	—	1.8cm	(布目有り)	15×16	縦方向削り	直径方向に垂直

図番号	側面形状	焼成	色調	備考		
				前側	後側	備考
81	凹部側面取り、横方向に削り	生焼け	5YR7/8橙	—	—	桶巻作り?
82	凹部側面取り	硬質	5YR4/6赤褐	—	—	桶巻作り?
83	凹部側面取り	生焼け	5YR6/8橙	—	—	桶巻作り?
84	横方向に削り	生焼け	5YR6/6橙	—	—	桶巻作り?

(1) 軒丸瓦

(1) 丸瓦

(2) 平瓦

てかかっていることから、おそらく、一度焼かれたが不良品として廃棄され、床下施設の一部に転用され、改めて釉がかかったと考えられる。

尾張地方の平安末期の瓦陶兼業窯で三ツ巴文軒丸瓦が出土している窯は、東山101号窯(H-G-101)、八事萱野古窯(H-G-80～82)などの東山地区、社山窯、権現山古窯址、吉田1号窯などの知多地区などにみられる(表13)。各々瓦当文様についてみると、本窯のものと同範のものは無い。時期は異なるが知多地区の社山窯、東山地区の八事裏山1号窯より出土の瓦当が近いようにおもう。

他窯において軒丸瓦もともに出土している場合は、宝相華唐草文軒丸瓦などの唐草文の瓦当文様をもつ軒丸瓦であるので、おそらく(三ツ)巴文軒丸瓦と唐草文軒丸瓦はセット関係にあると推測される(柴垣 1988)ため、もし本窯で軒丸瓦が焼かれていたとしたら、そのような瓦当文様をもつ軒丸瓦であっただろう。

また、70の瓦当部が見晴台考古資料館所蔵瓦か、荒木集成館所蔵瓦であると仮定して、同範のものが存在するか調べたところ、完全に同範であるものは見つからなかったが、左三ツ巴文で珠文22個という条件のみ一致するというものは、鎌倉の永福寺跡より出土のYA II 02類(鎌倉市教委 1985)がある。しかし、巴文が全体にやや太く、珠文も大きい。やはり、近似意匠(上原 1978)といえるが異なるものであることは一目瞭然である。また珠文数が明確ではないが鶴岡八幡宮境内出土のHA II 07類(鎌倉市教委 1995)も近い。

ところで、鎌倉の永福寺跡より出土した瓦に、八事裏山1号A～D窯(H-G-83～86)において多く出土している蓮華文軒丸瓦と宝相華唐草文軒平瓦(名考会 1984・1986)がほぼ同一の意匠として採用されている(永福寺 1982)。そして、永福寺跡出土瓦をおよそ三時期に分けたとき、I蓮華文系、II巴文系、III寺名系に分けられる。Iは前述のもので、IIは前述のYA II 02類も含まれている。八事裏山1号C・D窯は本窯より早い時期の窯であり、A・B窯は本窯と同時期であるので、本窯は八事裏山窯と同様に、鎌倉幕府の勢力と結びついていて、寺院の造瓦に関わっていた可能性も考えられる。

(3) 凸面布目平瓦(図版12・13-81～84)

本窯で出土している平瓦計4点81～84は、全て凸面に布目が残るという特徴を持つ。通常、平瓦は桶(外)巻作りか、または一枚作り(凸台使用)で作られ、布目は凹面に残る。そして、凸面は叩き跡や横方向のナデなどがみられる。しかし、布目が凸面に残る平瓦は川原寺(奈文研 1960)の他、全国に数としては少ないが出土している(表14)。本窯付近では時期は本窯よりも前だが八事萱野古窯で出土しており(杉崎 1965)、他ではみられない。ただし残念なことに、八事萱野古窯では学術調査が行われていないため、詳細は不明である。

製作方法

凸面布目平瓦については、これまでその製作方法の説明について、諸説が出されてきた。そして現在は2つの説について、さらに議論がなされている(中井 1986)。その製作方法

表 13 軒丸瓦比較表

遺跡名	分類	瓦当文様	瓦当サイズ (cm)	瓦当サイズ (cm)	珠文数	撤出先	時期	参考文献
吉田第1号窯(大府市)	第1類	右三巴文	14.8~15	8	24	安楽寿院(京都)	1137~1156年前後	大府町教委 1969
	第II類No.1	左三巴文	15.8	8.0~8.5	推定26	(II類No.1、社山の巴文が酷似していることから推定)		
	第II類No.2	左三巴文	14.5前後	8.0~8.5	推定24			
榎杖3号窯(千種区)		右三巴文	13.8	7.5	20		鎌倉時代	大府町教委 1969
		右三巴文	16	1.5?	30		平安末期	大府町教委 1969
東山61号窯(昭和区)		左三巴文			0~28		12世紀中葉	杉崎章他 1965
		右三巴文			0~28			大府町教委 1969
堀狭間1号窯(足助町)		左三巴文	12.0~14.0	8	18(9対)	足助八幡宮(足助町) 二井寺(旭町)	鎌倉時代後半	柴垣 1982
東山101号古窯		右三巴文	13.5		19		平安時代最末院政期	名古屋教委 1973
権現山古窯址(東海市)		蓮花文	13				13世紀	杉崎章他 1965
社山瓦窯址(東海市)	第1類	大形蓮花文	15			安楽寿院(京都)(社山軒平瓦第1類出土より推定)	鎌倉初頭または平安末期	杉崎章他 1965
	第2類	大型蓮花文	15?					
	第3類	小型蓮花文	13			熱田神宮神宮寺(同第2・3・5類出土より推定)	(1189~1192年)	
	第4類	右三巴文	15		24	雨尾山観福寺(同第5類出土より推定)		
	第5類	左三巴文	15より小		24または26			
八事真山1-B窯	A	蓮花文	14.5		19	(A) 鶴岡八幡宮(鎌倉)	4期(1175~1199年)	名古屋考古学会 1981
	A	蓮花文	14.5		19	熱田神宮		名古屋考古学会 1983
	D	左三巴文	11		無し	(B・C・D) 鳥羽離宮東殿(京都)	1期(1100~1124年)	名古屋考古学会 1984
	B	右三巴文	16.2		33		2期(1125~1150年)または4期	名古屋考古学会 1985
	A	蓮花文	推定15.5				4期	名古屋考古学会 1986
	C	右三巴文	10.8		無し		2期または4期	名古屋考古学会 1987
	C	小型右三巴文	11		無し		1期	名古屋考古学会 1992
	D	小型左三巴文	11		無し			
	B?	大形三巴	?		?			
		左三巴文				熱田神宮神宮寺(社山軒平瓦第2・5類出土より推定) 雨尾山観福寺(同第5類出土より推定)	社山と同時期	杉崎章他 1965
細口下1号窯	1	左三巴文	約12.6	約7.0	推定22または23		12世紀後半	(荒木集成館所蔵)
	2	左三巴文	約12.5~13.0	6.9	22		12世紀後半	(見晴台考古資料館所蔵)

第 VII 章

表14 凸面布目平瓦計測表1

遺跡名 (県名)	番号	凸面				凹面				側面				
		枠板痕	布目痕	布留め痕	削り	横へら削り痕	横なで	縦削り	削り工具 停止痕	側面形態	分割線	側面角 (凸面と側面の なす角)		
関和久上町遺跡 (福島県)	1													
	2		紐状の物の圧痕(縞じ合わせた跡)有り	縦1列に並んだ釘頭状の痕跡										
弥勒寺跡 (岐阜県)		①凹凸をなしで残る、②ほとんど生じていない、などランダムに生ずる	①布目の上から削りを受けているものが多い、②布4種使用、③1つの横骨で1枚の布が横に使用	ほとんどの枠板に、ほぼ縦位の長さ数の布留め痕が数cmの間隔で認められ、最高8段(列)まで確認	(1) 全く削らない、(2) 全面を削る①広端から狭端(5例)②狭端から広端(3例)③その他布目痕、削り痕の上に板状の圧痕が認められる(5例) →板に直径8mm程度のこく浅い円形の凹みがある			①板状の長い道具で横ナデ(主に)②ハケ状の物で横ナデ、ナデ方向は狭端を上にして凹面に向かって、左から右へ砂粒が動く	1点のみ有り	板状具の停止した痕跡有り(3例)	面取りが、①凸面のみ有り(30点)、②凸面有り凹面不明(12点)、③両側有り(3点)、④両側無し(13点)、不明(15点)と凸面の面取りが圧倒的に多い	凹面の側面に側面にほぼ平行にこく狭い(1mm前後)割線が認められる(7例)	一般に側面角は①端外巻き作り→90°前後、②凸型台使用1枚作り→120°前後。ここでは80°未満の鋭角をなすものが圧倒的に多い	
弥勒寺跡 (岐阜県)		凹形の上布で糸で止めた簾状のものを置いて作成した1枚造り	布目有り			全てへらで削られている(縦か横か記述・実測図無いため不明)								
鐘屋庵寺 (岐阜県)		横骨跡有り、簾状の板をとじたと考えられる紐状の痕跡	布目有り											
辻垣内瓦窯跡群 (三重県)		枠板の数は15~16枚を数え、枠板の平面形は、広端幅が狭く、広端でほとんど変らないことから、長方形に近いが、枠板の長辺と瓦の側縁とは平行にならない→狭端と広端の幅の差は大きく、狭・広端の幅を共に求められる資料が無いがその差は5~6cmに及ぶものと推定される	有り	○枠板に布を留めたときみられる痕跡が凸面の随所に見られる ○布留め痕を中心に布の振れ方が変わるものもみられる ○一枚の枠板の左右どちらかの端に寄って、一定間隔に並列する布留め痕は凸面に小突起窪みとなって現れ、後者の場合は布目が窪みまで喰い込んでいる	無し			長い板状工具で横方向にナデ消すものがあるが、丁寧にナデ消すものはむしろ少ないよう、多くの場合錆目や釘の痕跡を見出すことができる→非常に合意を確認することができない			分割の際しての目安としたのではないかと推測される、爪先圧痕のような凹痕を描く痕跡が認められるものがある	側面に分割線がみられる		
左京六条三坊十三坪 (奈良県)		①ともに完存、または②縦位のへら削りで意図的に消去(枠板が高く現れた部分のみ削られたもの、全面削られたもの)で、後者が大半をしめる		各枠板に穿たれた二孔一組の小孔に径1mmほどの細い撚り紐を通して行われている						粘土円筒の全高を上回る寸法の長い板状の工具で回転させながら行われた(桶型の回転方向は、狭端を上にした状態で時計(右)まわり、工具の進行方向は反時計(左)まわり)		①二面取りの断面V字型に整えられている、②両側縁の面取りがやや速く断面形状が三角をなす(1点)	凹面の側縁に幅1mm深さ3.5mmの割線が明確に残存	
川原寺 (奈良県)		凹形の上布を糸で止めた簾状のものを置いて作成した1枚造り	布目有り			全てへらで美しく削られている(縦か横か記述・実測図無いため不明)								
狭野庵寺 (奈良県)		横骨は15枚から16枚	有り	横骨と布を固定したときみられる痕跡が5.5cm前後の間隔で8列観察できる										
錦織細井庵寺跡 (大阪府)		連結紐が外面にでている	有り		布目圧痕、横骨痕をへらケズリによって段を削り取るもの、取らないものの2種			板状の工具で瓦の長さ分一杯に横方向へ撫でる方法をもつ			丁寧にへらケズリを施し、面取りを凸面まで行っている	凸の縁側部に近いところに撚り紐痕跡が見られ、粘土円筒分割のための指標と考えられる		
山城庵寺 (大阪府)														
細口下1号室 (愛知県)	図番号81 (96-E-18)	無し	有り(2×2cm中15×20)	無し	無し	無し	有り	広端部を上にして、左から右へ縦削り	無し		広端部から狭端部方向に縦削り、凹面側面取り	無し	115°、117.5°	
	図番号82 (96-E-97)	無し	有り(2×2cm中15×16)	無し	無し	無し	有り	有り	無し		広端部から狭端部方向に縦削り、凹面側面取り	無し	103°	
	図番号83 (96-E-96)	無し	有り(2×2cm中15×18)	無し	無し	無し	無し	有り	無し		広端部から狭端部方向に縦削り	無し	92.5°	
	図番号84 (96-E-98)	無し	有り(2×2cm中13×16)	無し	無し	無し	無し	有り	無し		広端部から狭端部方向に縦削り	無し	86.5°	

表15 凸面布目平瓦計測表2

遺跡名 (県名)	端面		胎土と焼成		その他			備考	時期	参考文献
	端面形態	隅角度 (側面と端面 により形成さ れる角度)	胎土	焼成	粘土板 合わせ目	瓦の厚さ	作成方法			
間和久上町遺跡 (福島県)					凸面に有り		桶巻作り	微隆起線(糸切り痕跡が反転した状態)有り	9世紀前半～10世紀 8世紀～9世紀	辻 秀人 1983
弥勒寺跡(岐阜県)		(1) 広端隅角→85°～88°まで1度ごとに各3点ずつ (2) 狭端隅角は①92°→2点②93°→1点③94°→2点④95°→4点⑤96°→1点⑥98°→2点の計12点	ごく少量の砂粒を含む、均質的な粘土が使用されている(5段階評価の3が1点、残りは全て4)	焼の甘いものが優勢を占める→5段階評価で、5(灰色系統)が19点、4(灰色系統、褐色系統)が19点、3(褐色系統の色で様々)が26点、2が57点、1が12点	凸・凹面で、合わせ目を観察できるものは無し、端面でその可能性のあるものが若干	広端側が厚く狭端側が薄いことが認められる(12点)。逆は無し。→桶型は載頭円錐型におかれたと考えられる	展開桶巻作り	◎側線角69°、広端隅角85°、母線と側面のずれ8°→この瓦の左側にとれる瓦の側線角は、111°(180°-69°)の鋭角になるはず⇒しかし、このような瓦は出土していない→分割線は2本か? ◎軒丸瓦は川原寺の祖型に近いもの	7世紀後半～9世紀前半	関市教委 1986
弥勒寺跡(岐阜県)							一枚造り	川原寺式系軒丸瓦出土、平瓦の手法も同様	平安時代?	八賀 晋 1972
鏡屋廃寺(岐阜県)								川原寺式軒丸瓦出土	7世紀後半	八賀 晋 1979
辻場内瓦窯跡群(三重県)					合わせ目と思われる痕跡有り		桶巻作り?	◎凹面に焼成後のものと思われる格子とバツ印を組み合わせた線刻が認められる ◎広端側がやや隅切りされている ◎川原寺系軒丸瓦 ◎凹面の縦目痕は通常認められない特徴→桶型が展開された状態が生じた→縦目痕は均一かつ等間隔に残るのは工具を用いた際の圧痕	奈良時代前期	繕野町教委 1988
左京六条三坊十三坪(奈良県)	狭広両面ともヘラ削り		長石類・粗砂を多量に混じえる	①堅緻で暗灰色、②やや軟質で灰白色ないしは赤褐色を呈するもの、の2種(機分か後者が多い)	合わせ目線は桶型の母線に平行せずに斜行して走り、合わせ目線の形態は桶型を狭端からみた状態でS字型		桶巻作り		11世紀～12世紀中頃	中井 公 1985
川原寺(奈良県)							一枚造り		7世紀後半	奈文研 1960
狭野廃寺(奈良県)			多くは青灰色ないし暗褐色の須恵質のものだが、行基堂丸瓦と同様な灰褐色を呈しているものがある				?	◎凹面には「田」字状の窯印とみとめられる線刻が3点認められる ◎川原寺式の軒丸瓦が出土	奈良時代	和歌山県教委 1977
錦織細井廃寺跡(大阪府)			良精、灰白色を呈す須恵質のものも多く、堅緻な瓦		粘土の巻き付ける方向は上から見て左巻き		桶巻作り	巴文軒丸瓦(珠文19個)、唐草文軒丸瓦出土(平安時代)	白鳳時代(7世紀後半～8世紀初頃)	大阪府教委 1985
山城廃寺(大阪府)			色調は淡灰褐色、胎土は緻密	良好			桶巻作り	軒丸瓦Ⅰ類一横弁6葉蓮華文とやや退化形式軒平瓦Ⅰ類一川原寺出土の重弧文軒丸瓦と類似した特徴を有する	?	大阪府教委 1982
細口下1号窯(愛知県)	狭端部凹面側面取り、左回りに削り(回転台は右回り)	広端部側95°、狭端部側93°		橙色で生焼け	無し	狭端部側より広端部側が厚みがある(広端部1.8～2.4cm、狭端部1.7～1.9cm)	桶巻作り?		12世紀後半	
	凹面側面取り				無し		桶巻作り?	叩き跡有り		
				橙色で生焼け	無し		桶巻作り?			
	左回りに削り(回転台は右回り)	95°(広狭のどちらかは不明)		橙色で生焼け	無し		桶巻作り?			

とは、凹型の台を使用した一枚作り、通常は桶の外側に粘土板を巻いて作る桶（外）巻作りの逆で、桶の内側に粘土板を巻いて作る桶（内）巻作りの2つの方法である。さらに、桶（内）巻作りには2つの見解が示されており、桶に粘土を入れて合わせる他に、桶自体が展開する造りになっていて、展開した上に粘土板をサイズを合わせた状態で乗せ、桶と粘土板を共に粘土を内側にして巻いて合わせるというものである。

叩き跡

本窯出土の平瓦は関係は1枚のみで3点は破片であるため、情報が乏しい。全て凸面に布目が残るものの、凹面に叩き跡らしきものがみえるものもあるが、側面は削られているため、どのような分割が行われたか不明であり、端面も両方とも削られていて、どの製作方法をとったのかを知る決め手にかける。あえて言えば、側面と凸面のなす角度が 86.5° ～ 117.5° であるので、一枚作りの場合は 120° 前後に、桶（内）巻作りの場合は 90° 前後に（関市教委 1986）なることから、もし一枚作りなら角度が一定であろうし、桶（内）巻作りなら 90° 未満のものがあれば 90° 以上のものも作られる可能性はあるので、本窯の場合は桶（内）巻き作りによるものであろうか。4点の瓦には接合部と断言できるものがみあたらないので、断言はできない。

また、叩き跡と思われる痕跡が1点83にみられる（図版13-83）。ハンコ状のものではなく、2本の割りばしのような棒を固定した状態で連続して叩いたようにみえる（図106）。これではあまり叩き締めの意味は持たないように思える。

（4）瓦陶兼業窯

本窯は初期山茶碗類と瓦を併焼する、いわゆる瓦陶兼業窯である。尾張においては瓦専業窯が白鳳期から平安初期にかけてみられ、平安中期から後期については瓦窯跡等の発見は無く生産形態は不明であり、平安末期に入って瓦陶兼業窯が出現する（柴垣 1982）。

本窯と同じく東山地区には何基もの瓦陶兼業窯が存在するが、軒丸瓦が出土してほぼ同

時期にあたるのが、八事裏山1号A・B窯（H-G-83～84）、八事萱野古窯（H-G-80～82）、東山101号窯（H-G-101）などがあげられる。八事萱野古窯の他は、特殊品である片口鉢・四耳壺・経筒外容器・香炉なども焼成されている。このように特殊な宗教に関係するものなどと瓦は併焼されている。実際に、東山地区・知多地区の瓦陶兼業窯で生産された瓦は鳥羽東殿・法金剛院・鶴岡二十五坊など、京都や鎌倉において確認されている。また、同期間中の尾張産瓦が熱田神宮寺、美浜町の大御堂寺などの地方寺院からも出土している。窯の操業期間から、尾張産瓦は京都から鎌倉供給を目的とし



図106 凸面布目平瓦叩き跡

た院政勢力と結びつく生産と同時に地方寺院を対象とした生産をおこなっており、在地領主の関与を示している（柴垣 1982）。

他国においても類似例がみられる。兵庫県には時期的に近い神出古窯跡址群・魚住古窯跡群が存在する。神出古窯跡址群は11世紀後半～13世紀前半にかけての神出保の時代の東播系須恵器窯で、11世紀末～12世紀に院政の造寺造宮事業の一角を担うことから播磨系瓦生産が盛んになり、同時に片口鉢・椀なども生産するなど、院政勢力下の中央・地方の官衛・寺社を中心とした特定勢力向けの生産が行われた。これは播磨国司の「保」支配に寄るものとみなされている（兵庫県教委 1987）。また、神出古窯跡址群が終焉を迎える頃、魚住古窯跡群の操業が開始され、同様に須恵器と共に瓦が併焼されていた。播磨における開窯は院政政権の造寺造院事業に伴い、初段階から瓦陶兼業窯であったことが特徴とされる（兵庫県教委 1983）。

(2)の項でも述べたが、本窯の操業時期はちょうど鎌倉幕府成立前にあたり、この頃鎌倉の寺院と関わるとすると、どのような形であるのか。現在の天白区中平が当時どの荘園・国衙領に含まれていたかは定かではないが、郡としてはおそらく愛智郡であったようである（上村 1998）。鳴海荘は14世紀以降に成立するため、12世紀は国衙領御器所保の一部であったか、または尾張一宮真清田社の散在型荘園の一部であったとすると（上村 1990）、御器所保は平氏領、また真清田荘は天皇家領であることから、直接鎌倉との関係はないが、2つに共通する平頼盛という人物が存在が浮かび上がる。

『公卿補任』によると、承安元年から4年に尾張権守に任命されている。『尊卑分脈』によると平清盛の弟にあたる源頼朝ともつながりを持ち、平家一門が都落ちをする際に京にとどまり、平氏滅亡の後にでさえ公家政権内で公卿として一生をすごす。彼は平家のなかでも異質の存在である（安田 1967）。

尾張国は平氏滅亡に至るまでの間、平氏一門の知行国となっており、また真清田荘の領家職は池大納言領（頼盛）であった。鎌倉幕府成立後は一転して源氏の勢力下におかれるわけだが、本窯操業予想時期の1170年代は尾張国を勢力下においていて、この時期に鎌倉と結びつきがあるのは平頼盛か院政力であると考えられる。

また愛智郡は尾張三宮熱田社の所在地でもあることから、皇室領である熱田社領であった場合を想定すると、熱田大宮司家は源頼朝の母方の実家ということで、頼朝に直接結びつく。元暦元（1184）年以降は源頼朝による尾張統治が始まるため（青山 1998）、当然結びつきは強くなる。結局はどの支配を受けていたとしても、鎌倉とは関わりを持ったように思う。

史料からは尾張と鎌倉を結びつける証拠となるものは見つからないが、特定の勢力による窯業に対する関与があったことは想像される。今回の資料からは明確な回答をだせる事項がとても少なく、情報の寄せ集めという内容になってしまい、新たな見解を示すことはできなかった。これからの調査による成果を期待したい。

3 高針原 1 号窯製品の変遷

(1) はじめに

飛鳥時代の須恵器は、主力製品が古墳に関わる葬祭供献用のそれから、供膳具へと変容することが指摘されている。当地域におけるこの時代の土器様相は、従来不明確とされてきた。しかし、古代の土器研究会のシンポジウムなどでこの時期の土器群が検討されはじめている。

有効空間 こうした状況を受け、以下で器種の変遷を検討したい。なお、ここでは有効空間を本窯資料に限定している。

(2) 器種細分

まず、基礎的作業として、以下の 5 器種について細分を試みる。

蓋 A

口縁部の形状に着眼して、3 つに細分する。口縁部が直立するものを 1 類。わずかに外側に屈曲するものを 2 類。弱く屈曲して、屈曲部外面の中央が、浅くくぼむものを 3 類とする。

蓋 A は、形状差を端部調整の意識低下と理解して、1 類→2 類→3 類と変遷の方向性を考える。

杯 H

受け部の形状に着眼して、3 つに細分する。受け部の直下がくびれ、受け部がはっきりと識別できるものを 1 類。受け口部の直下が、低い段となるもの、もしくは沈線文でこれを表現するものを 2 類。底部からそのまま受け口部に到達し、受け口部との境界が不鮮明なものを 3 類とする。

杯 H は、形状差を受け口部の意識低下と理解して、1 類→2 類→3 類と変遷の方向性を考える。

蓋 H

肩部の形状に着眼して、3 つに細分する。肩部の稜が明瞭で、稜の両脇が凹線文状にくぼむものを 1 類。肩部に稜が存在するが、1 類のように突出しないもの。同様に稜の両脇が凹線文状にくぼむものを 2 類。肩部の稜が低い段となるもの、もしくは両脇が凹線文状にくぼまない、または肩部に稜を持たず、沈線文でこれを表現するものを 3 類とする。

蓋 H は、稜の形状差を退化と理解して、1 類→2 類→3 類と変遷の方向性を考える。

ハソウ

口縁部の形状に着眼して、3つに細分する。口縁部がはっきりとした二重口縁となり、屈曲部が稜となって強調されるものを1類。これが若干突出気味で、やや弱い稜となるものを2類。口縁部はゆるく屈曲するものを3類とする。

ハソウは、稜の形状差を退化と理解して、1類→2類→3類と変遷の方向性を考える。

鉢A

大型品を中心として、口縁部と肩部の形状に着眼して、4つに細分する。肩部が丸く、口縁部が長く直立するものを1類。肩部が丸味を帯び、口縁部がやや長く直立するものを2類。口縁部がやや短く、頸部の屈曲がやや不鮮明なものを3類。口縁部が短く、肩部が張るものを4類とする。

鉢Aは、口縁部が短く変化すると頸部も屈曲も不鮮明になるという傾向を考え、1類→2類→3類→4類と変遷の方向性を考える。

(3) 資料の操作

以上、特定器種について型式を想定した。

次に、これらに時間的な横の関係をつくるため、出土位置別にこれを整理したい。ここで提示できるのは、灰層資料、灰出しピット、SY01埋土である。このうち灰層資料については、前述のように間層を挟み、I層群とII層群に区分でき、後者については、さらに上、中、下の各層に区分することができる。

出土位置別

これをまとめると、本窯の資料群を時間的な変遷は、II群下層→II群中層→II群上層→I群→灰出しピット、SD01→SY01となる。

以下、具体的にこれを眺める。

灰層II群下層・SK01

内容が類似しているのをまとめる。資料は乏しい。器種には蓋H、杯G・H・J、高杯A・C、鉢A、フラスコ形瓶A、横瓶A、ハソウAがある。

蓋H、杯H、鉢Aは1類、ハソウは2類を代表とする。

灰層II群中層

やはり資料は乏しい。器種には蓋H、杯H、高杯C、鉢A、横瓶、A・B、ハソウ、甕Aがある。内容は、灰層II群下層に類似する。

蓋H、杯H、ハソウは1類、鉢Aは2類を代表とする。

灰層II群上層

器種数が増大する。器種には蓋A～D・G・H、杯A・B・G・H・J、高杯A～C、盤A～C、鉢A～D、台付長頸瓶、フラスコ形瓶A・B、平瓶A、短頸壺、横瓶A・B、ハソウ、甕A～C、陶鍾がある。

蓋Aは1類、蓋H、杯H、ハソウは2類、鉢Aは3類を代表とする。

灰層I群

資料は乏しい。器種には蓋A～C、H、杯A・B・G・H・J、高杯A・B、フラスコ形瓶B、平瓶、短頸壺、横瓶B、ハソウ、甕A～Bがある。内容は上層に類似する。

蓋Aは1類、蓋Hは3類を代表とする。

灰出しピット、SD01

内容が類似しているのでまとめる。器種には蓋A・B・H、杯A・B、高杯B、鉢A・B・D、平瓶B、ハソウB、甕C、フラスコ形瓶、横瓶B、甕Cがある。

蓋Aは2類、鉢Aは4類を代表とする。

SY01

本窯では床面のほとんどが流失している。このため、焼成時の位置をとどめる資料は確認できていない。しかし、焼成室下方の埋土下部を中心として、最終焼成時の残留品と考えられる焼成不良品がまとまって出土している。器種には蓋A、杯A・B、椀A・B、高杯B、盤A～C、鉢C・D、横瓶B、甕Aがある。

蓋Aは3類を代表とする。

(4) 時期区分

製品の変遷

前節では、土器の型式学的変化と出土位置の関係を検討した。検討した器種がやや乏しいが、一応の両者の整合性を考えることができた。ここではこうした基礎的作業を前提に、各グループにおける器種の出現を主眼に整理し、本窯の資料を4期に区分したい。

I期

灰層II群下層・中層、SK01資料を基準とする。資料は乏しい。

主力器種には、杯H、蓋Hの組み合わせに、高杯B、Cと言った装飾性の強い器種が存在する。各器種に古墳時代的な色彩が残存する段階で、1点のみであるが杯Gが存在する。

次に、装飾法に着眼する。文様は、壺・瓶と高杯は頸部に最も多い。沈線文やそのバリエーションとも言える二重沈線文や組み合わせ文A～Cなど、比較的豊富である。また、

杯H・蓋H		鉢 A		ハソウA	
灰層II群下層 SK01	1類 1379				
	1類 1369				
灰層II群中層	1類 1346		2類 1358		1類 1369
	1類 1351				1類 1371
灰層II群上層	2類 1128				2類 1328
	2類 1213				2類 1332
灰層I群	3類 694				3類 723
	3類 711				
灰出しピット SD01	2類 632			4類 624	
	611				
SY01	3類 484				
	532				



図107 高針原1号窯主要な器形の変遷

各器種に観察される稜は、まだシャープさを残存させている。フラスコ形瓶や横瓶は、端部調整技法CによるA類がほとんどだが、口縁部外面直下の稜は、端部が尖る。こうした状況は、ハソウ1類の二重口縁となる屈曲部外面や、高杯Cの裾部外面の様子にも共通する。蓋H1類の天井部外縁をめぐる稜もこれと同様となる。

II期

灰層II群上層資料を基準とする。資料数は安定する。『黒見田』の刻書を持つ甕Cはこの段階に属する。

II期は、器種の増大が指摘できる。I期に存在した器種は、不明瞭なものを除き、そのまま残存する。一方では、本窯で確認できるほとんどの器種が登場している。器種構成上の特色は、この段階から杯A・Bが主力器種の一つとして登場し、杯Hと共存する。また、フラスコ形瓶には、高台を持つ平底的な形状も登場し、伝統的な丸底の類と共存する。ハソウBの登場も同様の方向性と考えられる。高杯Cは、脚部が無文化した類や脚部の扁平化がすすみ、裾部が段として表現される類も確認できる。なお、金属器模倣タイプなどと呼称される杯や盤もわずかに含まれている。

次に装飾法に着眼する。文様はI期とほぼ同様だが、沈線文や二重沈線文の一部に不鮮明な資料も含まれるようになる。なお、各器種に観察される稜はやや鈍くなる。

III期

灰層I群資料を基準とする。資料はやや乏しい。

器種の動向は、まず、高杯A、C、ハソウAの存在が不明確となるなど、II期に登場した器種と交代が進む。杯H、蓋Hは、もはや主力器種ではなく、わずかに小型化した3類として残存する。資料が乏しいが、短頸壺、鉢A、平瓶などは底部調整技法AないしBにより平底化している可能性が強い。

次に装飾法に着眼すると、全体的に装飾は退化している。端部調整技法C類があまり使用されなくなり、II期まで各器種に一般的であった稜が、消滅ないし不鮮明となる。

IV期

灰出しピット、SD01資料を基準とする。『瓦』の刻書が確認できる時期か。

主力器種は、II期に登場した一群にほぼ交代する。杯H、蓋Hはこの段階では消滅している可能性が強い。各器種の平底化が、一層進み、平瓶も円柱形状の体部を持つタイプが登場する。

装飾はさらに乏しくなる。装飾性の強い器種であるハソウも、体部に施される組み合わせ文Aが退化傾向を示し、下段の沈線文が省略または雑となる。

V期

SY01 資料を基準とする。

切り離し手法B類と、この手法の使用を特色とする椀が出現する。また、この手法は、杯Bにも導入され、前段階までの底部調整技法A類から変化している。しかし、杯Aは底部調整技法A類ないしD類が一般的で、切り離し手法B類が杯類に共通の手法として定着するわけではない。甕は、底部調整技法D類による平底の類が確実に登場する。これは、杯、椀などが、丸底から平底へ変化する傾向に対応する動きとして注目できる。この段階で各器種の平底志向の完成期として理解しておく。ハソウは、SY01資料にはないが、表土資料に体部の組み合わせ文Aが省略された類があり、この段階に属する可能性を考えておく。

(5) まとめ

以上、高針原1号窯の製品の変遷を考えた。

ここではまず、高針原1号窯の製品の変遷を、現在提示されている猿投窯の編年にあてはめる。まず、斉藤孝正氏の編年(斉藤他 1995)では、I期がH-50号窯式、II期がI-17号窯式、III期とIV期がI-41号窯式、V期がC-2号窯式に該当する。実年代は7世紀後半～8世紀前半の実年代が考えられている。また、尾野善裕氏の編年(尾野 1997)によれば、I・II期がIV期古段階、III～V期がIV期中段階に属する。また、実年代は7世紀後半としている。

次に、高針原1号窯資料の特徴を考える。

まず、器種の特徴では、杯Gの動向が不明確となることや、個性的な杯Jの存在である。なお、近年論議されている杯Hと杯Bの共存は、高針原1号窯資料に関しては、これを認めることができる。

手法、技法の特徴は、まず、回転ケズリ調整が多用されている。特に、杯Hの底部は、その終末形状と考えられる3類でも底部調整技法A類によっている。これは蓋H3類の天井部も同様の傾向を示す。一方、カキメ調整は全器種を通じて例外的な手法となる。また、タタキ整形は、ほとんどの場合青海波ナデ消し技法となる。ハソウは、確認できるもの全てが、穿孔部強調技法による。また、甕、盤など特定器種に黄土塗布が施されていることも特色となろう。

文様では、甕Aの頸部に組み合わせ文Bがよく発達することが注目できる。充填文も波状文のみではなく、刻目文やオシビキ文とバラエティーに富んだものとなっている。

帰 属 時 期

資 料 の 特 色

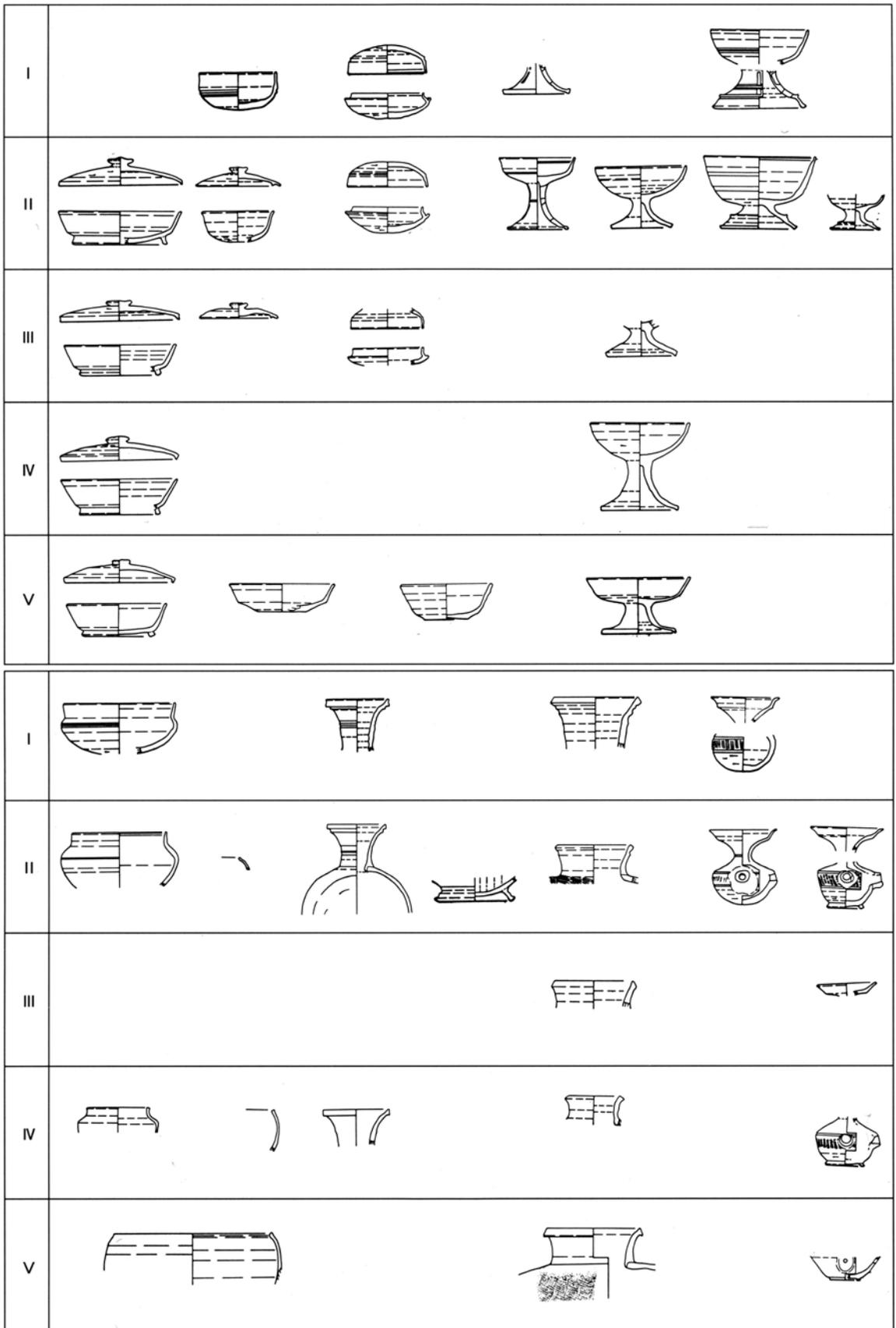


图 108 高針原 1 号窯製品変遷図

4 土器容量の計測視点

(1) 計測方法

容量の計測は、『黒笹G2号窯跡』や『NA332号窯』(奥村 1944、松田他 1998)などにおいて行なわれているが、細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯において出土した様々な器種の容量を計測するため、下記の計測方法により容量計算を行なった。

但し、計測を行なうのは実測図で反転して完形となるもののみとした。

A. 遺物実測図の断面図の中心線を方眼紙に沿って高さ1~5mmずつ分割(H_n)し、その点から中心線に垂直に遺物の内側の線と交わる半径をとる(R_n)。口縁部・底部は誤差の少ないように細かく分割する(図版109-1)。

計 算 式

B. 中心線を分割することでできた台形の $H_n \cdot R_n$ を測る(図版109-1)。

C. 実測図の中心線をy軸、y軸に垂直な R_{n+1} をx軸として、 $R_n \cdot R_{n+1}$ と遺物の内側とが交わる2点を通る直線を $y = -ax + b$ とする。

D. y軸と $y = -ax + b$ により囲まれた部分($0 \leq y \leq h_n$)をy軸を中心として回転させた体積を V_n とする(V_n は R_{n+1} を半径とした円錐体を高さ H_n で半径 R_n で切ったもの)。

$$V_n = \pi \int_0^{h_n} x^2 dy \rightarrow \text{①}$$

E. $y = -ax + b$ より、

$$x = \frac{-y+b}{a} \rightarrow \text{②}$$

a・bを求めるため、高さ H_1 、台形の上辺 R_1 、下辺 R_2 とする。それぞれの交点を点O(0, 0)、点A(0, h_1)、点B(r_1 , h_1)、点C(r_2 , 0)として、点B・Cを②に代入する(図版109-1)と、

$$a = \frac{-h_1}{r_1 - r_2}, b = \frac{-r_1 h_1}{r_1 - r_2}$$

F. ②を①に代入すると、

$$V_1 = \pi \int_0^{h_1} \left(\frac{-y+b}{a} \right)^2 dy$$

これにa、bを代入すると、

$$V = \pi \int_0^{h_1} \left[\frac{-y + \frac{-r_2 h_1}{r_1 - r_2}}{\frac{-h_1}{r_1 - r_2}} \right]^2 dy$$

整理して、

$$V_1 = \frac{\pi h_1}{3} (r_1^2 + r_1 r_2 + r_2^2) \rightarrow \text{式A}$$

G. 式Aより求めた体積 $V_1 \cdots V_n$ の和は、

$$V_1 = \sum_{i=1}^n \frac{\pi h_1}{3} (r_1^2 + r_i r_{i+1} + r_{i+1}^2) \rightarrow \text{式B}$$

この式は器種を限定することなく、断面実測図があれば全ての器種に対応できる。

しかし、実際には口縁部付近や底部付近は、この式では誤差が非常に大きくなるものもある。そこで、以下の式を考案した。

H. 半径 R_3 の点を点 D ($r_3, 0$) とし、2点 A・D を通る直線を $y = -cx + d$ とする (図 109-2)。

$y = -cx + d, x = 0, y = 0$ で囲まれた三角形を y 軸を回してできた回転体を求めるため、点 A・D を $y = -cx + d$ に代入すると、

$$(c, d) = \left(\frac{h_1}{r_3}, h_1 \right)$$

I. y 軸を中心に三角形 ADO を回してできる体積は、

$$V_1 = \pi \int_0^{h_1} \left(\frac{-y+d}{c} \right)^2 dy$$

整理して、

$$V_1 = \frac{\pi h_1 r_3^2}{3} \rightarrow \text{式C}$$

J. 台形 ABCO の体積から三角形 ADO 体積を引いた体積は、式 A から式 C 引いたものなので、

$$\begin{aligned} V_1 &= \frac{\pi h_1}{3} (r_1^2 + r_1 r_2 + r_2^2) - \frac{\pi h_1 r_3^2}{3} \\ &= \frac{\pi h_1}{3} (r_1^2 + r_1 r_2 + r_2^2 - r_3^2) \rightarrow \text{式D} \end{aligned}$$

計算式の使い分け

この2式を底部が変形している遺物の計測をするときに追加して使用し、底部が中心に向かって下がる形状の場合は式Cを、底部が中心に向かって盛り上がる形状の場合は式Dを追加する (図 109-3)。

また、口縁部が歪んでいる遺物に関しては、実測図上は中心から左右の面積を2分した面積を考えるので、左右の高さが違えば面積も違ってくるが、全て同じ条件のもとで計算すべきであるので、実測図に忠実に数値を求める。そこで、口縁部の断面側が下がっている場合は式Cを、上がっている場合は式Dを追加する。

よって、遺物の微妙なラインの変化に式A~Dを使い分けることで、多少ではあるが誤差を少なくすることができる考えた。

(2) 計算値の誤差

高針原1号窯の遺物で完形品7点を実際に砂を使って計測を試みた (表17) (1)。ここから、砂による平均計測値と計算値の誤差は5%以内に抑えることができたことがわかる。また、7点中2点 (1196、1349) は完全な完形品だったので、水による計測も行なったところ、計算値にほぼ近い数値を得ることができた。

実測図より計算する計測法は、実測図上で完形であれば計測は可能である。しかし、実

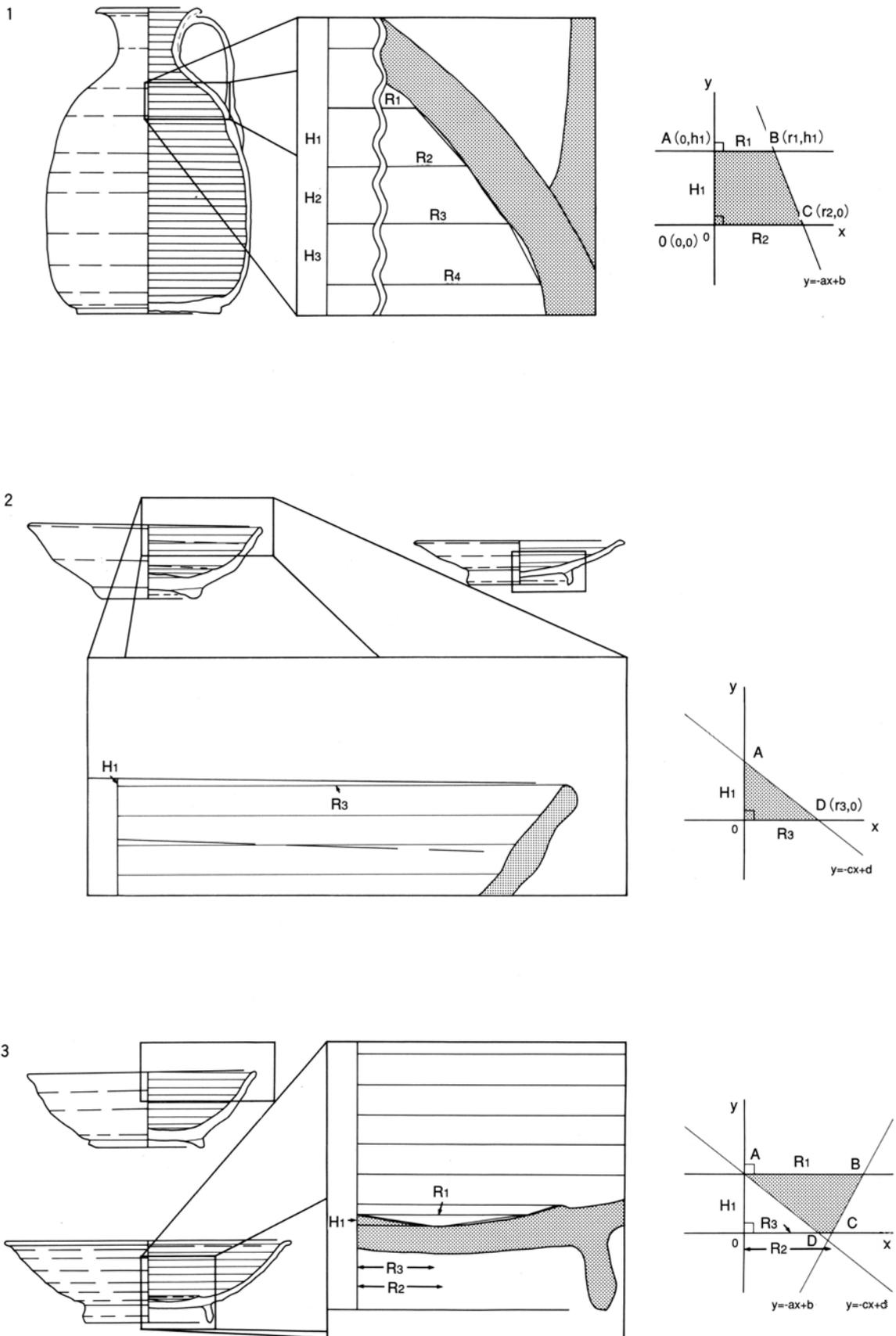


図 109 容量計算の視点

測図を描く時点で遺物の形によっては誤差が生じた可能性があり、その実測図から数値を求め計算を行うので、さらに誤差は大きくなる。

砂による計測法は完形品があれば計測は可能だが点数に限られる。また、砂による計測法は測るときの砂を入れる角度や速さによって生じる各粒子間の差などにより、計測値にかなりの幅がでてくる⁽²⁾。さらに、砂自体の形が均一ではないので粒が重なり合ったときに隙間ができるため、ここでも誤差が出ると予想される。よって、どちらも完全な数値ではないが、計算による計測法の方が誤差の出る状況に遭遇する回数が少ないように思われる。

完全な完形品であれば、当然水による計測法がより正確だが、計測できる点数がごく限られる。また歪みが大きければ計測は不可能となる。

よって、今回のように多くの器種の遺物の大量な容積を知るためには、今回とった計算による計測法が有効であると考えられる。

注

- (1) 計測は粗粒砂を使用。
- (2) 計測方法を統一して行い、各遺物につき3回づつ行った。しかし、同じ人に同じ方法で後日もう一度計測を行ってもらったところ、また異なる数値を得た。

表 17 容量計算表

遺物番号	種類	器種	計算タイプ	計算値 (ml)
532	須恵器	杯B	D1	310.59
535	須恵器	杯B	D1	287.86
853	須恵器	杯A	A	224.24
891	須恵器	杯A	A	187.24
1192	須恵器	杯H	C2	200.81
1196	須恵器	杯H	C2	200.29
1349	須恵器	杯H	D1C2	209.84

遺物番号	砂計測1 (ml)	砂計測2 (ml)	砂計測3 (ml)	平均値 (ml)	計算値／平均値	誤差
532	355	365	355	358.33	86.68%	13.32%
535	280	275	285	280.00	102.81%	2.81%
853	215	225	225	221.67	101.16%	1.16%
891	180	190	195	188.33	99.42%	0.58%
1192	200	210	200	203.33	98.76%	1.24%
1196	205	205	205	205.00	97.70%	2.30%
1349	205	200	215	206.67	101.54%	1.54%

遺物番号	水計測値 (ml)	計算値／水計測値	誤差
532	—	—	—
535	—	—	—
853	—	—	—
891	—	—	—
1192	—	—	—
1196	205	97.70%	2.30%
1349	210	99.92%	0.08%

* 532 は実測図において中心線が完全にずれているため誤差が大きいと考えられる。

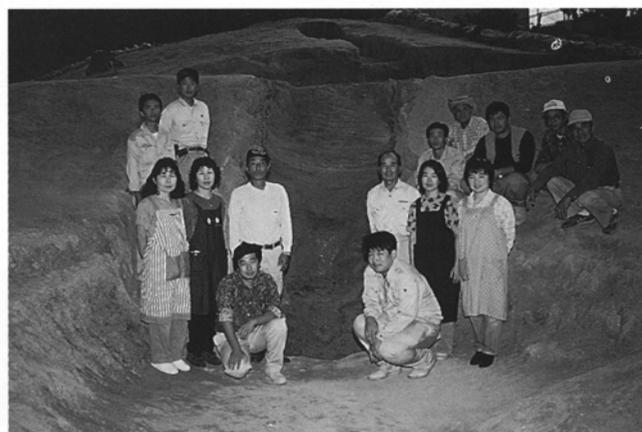
* 計算タイプは $\left\{ \begin{array}{l} \text{式Aのみを使用をA} \\ \text{式Cを追加使用をC} \end{array} \right\}$ 、また、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{口縁部に使用の場合1} \\ \text{底部に使用の場合2} \\ \text{中間部に使用の場合3} \end{array} \right\}$

参考・引用文献

- 愛知県教委 1980 『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(Ⅰ)
 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告』(Ⅲ)
- 青山幹哉 1998 『公武両政権下の尾張』『新編 名古屋史』第二巻
- 荒木 実 1995 『名古屋市天白区内の遺跡報告』『古代人』56 名古屋考古学会
- 荒木 実他 1978 『名古屋市天白区鴻ノ巣窯調査報告』『古代人』33 名古屋考古学会
 1979 『名古屋市天白区鴻ノ巣窯第二次調査報告』『古代人』35 名古屋考古学会
- 池本正明 1997a 『高針原1号窯跡』『年報』平成8年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 1997b 『細口下1号窯跡』『年報』平成8年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 1997c 『鴻ノ巣古窯跡』『年報』平成8年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 1998a 『灰釉系陶器窯の床下施設について』『年報』平成9年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 1998b 『高針原1号窯跡』『埋蔵文化財情報』13 愛知県教育委員会 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 1998c 『細口下1号窯跡』『埋蔵文化財情報』13 愛知県教育委員会 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 1998d 『鴻ノ巣古窯跡』『埋蔵文化財情報』13 愛知県教育委員会 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 上原真人 1978 『古代末期における瓦生産体制の変革』『古代研究』13・14 (財)元興寺文化研究所
- 上村喜久子 1990 『尾張国』『尾張国衙領』『講座日本荘園史5 東北・関東・東海地方の荘園』吉川弘文館
 1998 『郡の改廃と変質』『新編 名古屋史』第二巻
- 嬉野町教委 1988 『辻垣内瓦窯跡群』
- 大阪府教委 1985 『錦織細井廃寺跡発掘調査概要』
- 大阪府教委 1982 『山城廃寺(一須賀廃寺)出土古瓦』『節・香・仙』第36号
- 妙見山麓遺跡調査会 1989 『神出1986-神出古窯址群に関連する遺跡群の調査-』
- 大府町教委 1969 『吉田窯第1号窯発掘調査報告』
- 奥村勝信 1994 『容積からみた山茶椀』『黒笹G2号窯』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 小澤一弘他 1994 『黒笹40・89号古窯跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 尾野善裕 1992 『八事裏山1号窯址群の基礎的再検討』『古代人』53 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
 1984 『天白川東岸(NN地区)に於ける古窯跡出土遺物』『古代人』44 名古屋市教育委員会
 1997 『東海』『古代の土器研究』第5回シンポジウム資料 古代の土器研究会
- 小島一夫他 1981 『NN-278号古窯跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 小森俊寛 1997 『東海』『古代の土器研究』第5回シンポジウム資料 古代の土器研究会
- 鎌倉市教委 1997 『国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書 一平成8年度一(第2分冊)』
- 鎌倉市教委他 1995a 『国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書(昭和60年度)』『集成鎌倉の発掘』第7巻 新人物往來社
- 鎌倉市教委他 1995b 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書 鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査』『集成鎌倉の発掘』第5巻 新人物往來社
- 京都文化観光局 1992 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』(財)京都埋蔵文化財研究所
- 京都文化観光局 1985 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』(財)京都埋蔵文化財研究所
- 斎藤孝正 1983 『猿投窯成立期の様相』『名古屋大学文学部研究論集』86
 1988a 『猿投窯第Ⅲ期杯類の型式編年』『名古屋大学総合研究資料館報告』4
 1988b 『中世猿投窯の研究』『名古屋大学文学部研究論集』C1
 1989 『古墳時代の猿投窯』『断夫山古墳とその時代』東海埋蔵文化財研究会
 1990 『尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相』『名古屋大学文学部論集』107
- 斎藤孝正他 1984 『株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会
 1995 『須恵器集成図録』第三巻 東日本編 I 雄山閣出版
- 斉藤嘉彦他 1999 『小針遺跡』岡崎市教育委員会
- 佐原 真 1972 『平瓦桶巻き作り』『考古学雑誌』58-2
- 柴垣勇夫 1982 『尾張における平安末期の瓦生産』『愛知県陶磁器資料館研究紀要』1 愛知県陶磁器資料館
 1988 『尾張における中世初期の瓦当文様について』『愛知県陶磁器資料館研究紀要』7 愛知県陶磁器資料館
- 城ヶ谷和広 1984 『七、八世紀の須恵器生産の展開に関する一考察』『考古学雑誌』70-2
 1993 『尾張猿投窯と尾北窯』『年報』平成4年度 愛知県埋蔵文化財センター
 1996 『律令制の形成と須恵器生産』『日本考古学』第3号 日本考古学協会
 1998 『猿投窯における須恵器生産の展開』『横崎彰一先生古希記念論文集』横崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- 杉崎章他 1965 『権現山古窯址』愛知県知多郡須賀町立横須賀中学校
- 関市教委 1986 『国指定史跡 弥勒寺跡』

- 竹内宇哲 1986 『正木町遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
 1988 『正木町遺跡第2次発掘調査概報』名古屋市教育委員会
- 辻 秀人他 1983 『関和久上町遺跡Ⅰ』福島県教育委員会
- 中井 公 1985 『平城京に運ばれた凸面布目瓦』『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会
 1986 『いわゆる凸面布目平瓦について』『歴史考古学を考える1—古代瓦の瓦生産と流通—』歴史考古学研究会
- 中野晴久 1983 『知多古窯址群における山茶碗の研究』『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅰ
 1990 『三筋壺・その造形と意味をめぐって』『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅳ
 1994 『生産地における編年について』『中世常滑焼をとおって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所
 1995 a 『生産地における編年について』『常滑焼と中世社会』小学館
 1995 b 『常滑焼編年作業と今後の課題』『考古学ジャーナル』396
- 名古屋考古学会 1981 『八事裏山1号窯発掘調査報告書』『古代人』38 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
 1981 『名古屋市内窯址出土の中世瓦—名考会古瓦展によせて—』『古代人』38 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
 1983 『八事裏山1号窯第2次発掘調査報告書』『古代人』41 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
 1984 『八事裏山1号窯第3次発掘調査報告書』『古代人』43 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
 1986 『八事裏山1号窯第4・5次発掘調査報告書』『古代人』47 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
 1987 『八事裏山1号窯第6次発掘調査報告書』『古代人』48 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
- 名古屋市教委 1973 『H-101号窯跡発掘調査報告書調査報告書』
- 奈良文化財研究所 1960 『川原寺発掘調査報告書』
- 榑崎彰一 1979 『中世の社会と陶器生産』『世界陶磁全集』3
 1983 『猿投窯の編年について』『愛知県古窯跡分布調査報告』Ⅲ 愛知県教育委員会
 1988 『中世陶器にみる刻画文の系譜とその展開』『日本陶磁絵巻』愛知県陶磁資料館、五島美術館
- 西口寿生 1993 『石神遺跡出土の笥書き土器』『奈良国立文化財研究所年報』1993 奈良国立文化財研究所
- 八賀 晋 1988 『須恵器製作の一視点』『榑崎彰一先生古希記念論文集』榑崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- 八賀 晋他 1979 『古代寺院跡』『岐阜市史』史料編 考古・文化財 大衆書房
 1972 『歴史時代初期の美濃と飛騨』『岐阜県史』通史編 原始 大衆書房
- 兵庫県教委 1983 『魚住古窯跡群(本文編)』
- 三渡俊一郎 1985 『八事裏山1号窯址群出土軒丸瓦と同范の瓦出土地について』『古代人』45 名古屋考古学会裏山1号窯調査団
- 三渡俊一郎他 1985 『名古屋市天白区平針細口下A、B号窯跡の出土品』『古代人』45 名古屋考古学会
- 平出紀男 1989 『NN-259号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 藤沢良祐 1982 『瀬戸古窯跡群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館
 1994 『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要』3 三重県埋蔵文化財センター
 1995 『山茶碗の生産体制』『常滑焼と中世社会』小学館
- 藤根 久 1995 『刀池古窯跡群の熱残留磁化測定』『刀池古窯跡群』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 1998 『窯跡焼土の熱残留磁化測定』『NA335号窯』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 安田元久 1967 『平家の群像』塙新書9 塙書房
- 山田紘一他 1998 『小幡遺跡(第1・2次)』名古屋市教育委員会
- 山田邦和 1988 『飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望』『古代文化』第40巻6号古代学協会
- 松田 訓他 1998 『出土遺物の観察・計測法』『NA335号窯』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 和歌山県教委 1977 『佐野廃寺発掘調査概報』
- 渡辺博人 1988 『美濃須恵窯の須恵器生産』『古代文化』第40巻6号 古代学協会
 1998 『須恵天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター

付 表



現状写真 (1991.1)
細口下1号窯 鴻ノ巣古窯
高針原1号窯 調査参加者

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
細口下	1	96-E-0034	SY01	灰釉陶器	椀A	14.0	6.3	5.7	364.84	灰白	細口下
細口下	2	96-E-0035	SY01	灰釉陶器	椀A	14.8	6.2	5.1	395.92	灰白	
細口下	3	96-E-0030	SY01	灰釉陶器	椀A	15.6	7.0	4.9	380.81	灰白	
細口下	4	96-E-0031	SY01	灰釉陶器	椀A	15.2	6.8	5.1	401.17	灰白	
細口下	5	96-E-0032	SY01	灰釉陶器	椀A	15.4	6.8	5.8	434.81	灰白	
細口下	6	96-E-0044	SY01	灰釉陶器	椀A	15.6	6.6	5.0	435.88	灰白	
細口下	7	96-E-0010	SY01	灰釉陶器	椀A	15.2	6.8	5.1	395.75	灰白	
細口下	8	96-E-0013	SY01	灰釉陶器	椀A	14.6	6.6	5.2	417.86	灰白	
細口下	9	96-E-0026	SY01	灰釉陶器	椀A	15.0	6.8	6.1	464.22	灰白	
細口下	10	96-E-0041	SY01	灰釉陶器	椀A	15.8	7.0	4.9	404.64	灰白	
細口下	11	96-E-0132	SY01	灰釉陶器	椀A	—	7.8	—	—	灰黄	
細口下	12	96-E-0029	SY01	灰釉陶器	椀B	15.0	7.0	5.0	391.64	灰白	
細口下	13	96-E-0036	SY01	灰釉陶器	椀B	16.2	8.4	5.1	473.14	灰黄	
細口下	14	96-E-0038	SY01	灰釉陶器	椀B	16.4	6.8	5.1	441.08	浅黄	
細口下	15	96-E-0040	SY01	灰釉陶器	椀B	16.4	8.0	5.1	487.06	灰黄	
細口下	16	96-E-0037	SY01	灰釉陶器	椀B	16.2	8.4	4.7	421.36	灰白	
細口下	17	96-E-0028	SY01	灰釉陶器	椀B	16.2	7.2	4.9	454.93	灰黄	
細口下	18	96-E-0014	SY01	灰釉陶器	椀B	15.0	7.2	5.1	398.13	灰白	
細口下	19	96-E-0039	SY01	灰釉陶器	椀B	15.0	7.5	5.1	417.75	浅黄	
細口下	20	96-E-0012	SY01	灰釉陶器	椀B	15.2	7.8	5.2	458.63	浅黄	
細口下	21	96-E-0059	SY01	灰釉陶器	椀B	15.6	7.0	4.2	361.48	灰白	
細口下	22	96-E-0061	SY01	灰釉陶器	椀B	15.6	6.8	5.0	433.73	灰黄	
細口下	23	96-E-0043	SY01	灰釉陶器	椀B	15.6	7.0	4.1	381.47	淡黄	
細口下	24	96-E-0124	SY01	灰釉陶器	椀A	15.4	6.2	5.1	437.06	灰白	
細口下	25	96-E-0122	SY01	灰釉陶器	椀A	14.8	6.8	5.2	443.56	灰黄	
細口下	26	96-E-0123	SY01	灰釉陶器	椀A	15.1	7.2	5.3	371.48	灰白	
細口下	27	96-E-0081	SY01	灰釉陶器	椀A	15.3	6.1	5.4	437.71	灰白	
細口下	28	96-E-0082	SY01	灰釉陶器	椀A	15.3	6.8	5.4	425.90	灰白	
細口下	29	96-E-0080	SY01	灰釉陶器	椀A	15.0	6.6	5.6	426.10	灰白	
細口下	30	96-E-0083	SY01	灰釉陶器	椀A	15.5	6.3	5.1	371.99	灰黄	
細口下	31	96-E-0084	SY01	灰釉陶器	椀A	15.5	7.0	4.9	433.28	灰白	
細口下	32	96-E-0067	SY01	灰釉陶器	椀A	16.9	7.2	4.9	464.48	灰白	
細口下	33	96-E-0064	SY01	灰釉陶器	椀A	15.4	6.2	5.0	340.66	灰白	
細口下	34	96-E-0065	SY01	灰釉陶器	椀A	15.3	6.6	5.2	403.22	灰白	
細口下	35	96-E-0072	SY01	灰釉陶器	椀A	16.0	6.8	5.4	466.78	灰白	
細口下	36	96-E-0074	SY01	灰釉陶器	椀A	15.2	7.0	5.5	385.31	灰	
細口下	37	96-E-0077	SY01	灰釉陶器	椀A	16.2	6.6	4.9	440.46	灰白	
細口下	38	96-E-0078	SY01	灰釉陶器	椀A	14.8	7.0	5.0	377.75	灰白	
細口下	39	96-E-0066	SY01	灰釉陶器	椀B	15.6	8.0	5.1	459.64	灰黄	
細口下	40	96-E-0021	SY01	灰釉陶器	椀B	15.2	8.3	5.0	482.10	灰黄	
細口下	41	96-E-0022	SY01	灰釉陶器	椀B	14.8	6.9	5.1	—	灰黄	
細口下	42	96-E-0071	SY01	灰釉陶器	椀B	15.8	8.2	4.6	388.52	灰黄	
細口下	43	96-E-0070	SY01	灰釉陶器	椀B	16.6	8.5	4.6	—	灰黄	
細口下	44	96-E-0079	SY01	灰釉陶器	椀B	15.6	7.6	5.1	425.12	灰黄	
細口下	45	96-E-0023	SY01	灰釉陶器	椀B	16.2	7.9	4.8	407.03	灰白	
細口下	46	96-E-0020	SY01	灰釉陶器	椀B	14.9	7.2	5.3	—	灰白	
細口下	47	96-E-0001	SY01補修	灰釉陶器	椀B	16.0	7.1	4.9	416.65	灰白	
細口下	48	96-E-0002	SY01補修	灰釉陶器	椀B	15.2	7.2	4.7	368.06	灰白	
細口下	49	96-E-0003	SY01補修	灰釉陶器	椀B	17.0	8.0	5.5	601.28	灰白	
細口下	50	96-E-0005	SY01補修	灰釉陶器	椀B	15.8	7.5	5.3	465.89	灰白	
細口下	51	96-E-0004	SY01補修	灰釉陶器	椀B	16.2	7.8	4.9	—	灰白	
細口下	52	96-E-0121	SY01	灰釉陶器	椀中形	10.6	—	—	—	灰黄	
細口下	53	96-E-0126	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	—	—	—	—	灰白	
細口下	54	96-E-0127	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	—	—	—	—	灰白	
細口下	55	96-E-0128	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	14.8	—	—	—	灰白	
細口下	56	96-E-0129	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	—	—	—	—	灰白	
細口下	57	96-E-0130	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	14.2	—	—	—	浅黄橙	
細口下	58	96-E-0048	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	—	6.2	—	—	灰白	
細口下	59	96-E-0131	SX01周辺	灰釉陶器	椀C	—	7.0	—	—	浅黄橙	
細口下	60	96-E-0015	SY01	灰釉陶器	小皿	9.9	5.2	2.7	92.97	灰白	
細口下	61	96-E-0009	SY01	灰釉陶器	小皿	9.6	4.2	2.2	66.81	浅黄橙	
細口下	62	96-E-0033	SY01	灰釉陶器	小皿	9.2	4.2	2.1	65.53	浅黄橙	
細口下	63	96-E-0008	SY01	灰釉陶器	小皿	7.4	2.9	2.5	—	灰白	
細口下	64	96-E-0120	表探	灰釉陶器	小皿	7.0	2.0	2.0	—	にぶい黄橙	
細口下	65	96-E-0024	SY01	灰釉陶器	四耳壺	—	—	—	—	浅黄橙	
細口下	66	96-E-0047	表探	灰釉陶器	三筋壺	—	—	—	—	灰白	
細口下	67	96-E-0006	SY01補修	灰釉陶器	鉢	25.4	12.4	11.2	—	橙	
細口下	68	96-E-0007	SY01補修	灰釉陶器	鉢	14.2	5.9	10.9	2343.71	にぶい橙	
細口下	69	96-E-0019	SY01	灰釉陶器	鉢	35.0	19.8	11.7	—	淡赤橙	
細口下	70	96-E-0085	SY01溝	灰釉陶器	軒丸瓦	(幅) 14.4(長さ) 29.6	5.8	—	—	灰白	
細口下	71	96-E-0017	SY01	灰釉陶器	丸瓦	(幅) 14.1(長さ) 32.3	6.4	—	—	にぶい黄	
細口下	72	96-E-0086	SY01	灰釉陶器	丸瓦	(幅) 11.5(長さ) 26.8	5.9	—	—	灰白	
細口下	73	96-E-0090	SY01	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 4.4	—	—	—	にぶい黄橙	
細口下	74	96-E-0094	SY01	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 8.6	—	—	—	灰オリーブ	
細口下	75	96-E-0089	SY01	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 10	—	—	—	灰黄	
細口下	76	96-E-0092	SY01	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 12.5	—	—	—	灰白	
細口下	77	96-E-0095	SY01	灰釉陶器	丸瓦	(幅) 11.2(長さ) 17.5	5.4	—	—	灰白	
細口下	78	96-E-0087	SY01	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 10.4	6.3	—	—	浅黄	
細口下	79	96-E-0091	表探	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 7.1	—	—	—	黄褐	
細口下	80	96-E-0093	SY01	灰釉陶器	丸瓦	— (長さ) 9.4	—	—	—	—	
細口下	81	96-E-0018	SY01	灰釉陶器	平瓦	(幅) 19.5(長さ) 28.2	6.9	—	—	灰	
細口下	82	96-E-0097	表探	灰釉陶器	平瓦	— (長さ) 14.1	—	—	—	灰	
細口下	83	96-E-0096	SY01	灰釉陶器	平瓦	— (長さ) 4.6	—	—	—	灰	
細口下	84	96-E-0098	SY01	灰釉陶器	平瓦	— (長さ) 8.4	—	—	—	灰白	
細口下	85	96-E-0108	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰	
細口下	86	96-E-0105	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰白	
細口下	87	96-E-0106	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰	
細口下	88	96-E-0109	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰白	
細口下	89	96-E-0113	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰	
細口下	90	96-E-0099	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰	
細口下	91	96-E-0107	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰	
細口下	92	96-E-0104	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	灰白	
細口下	93	96-E-0115	SY01	竈道具	焼台	—	—	—	—	オリーブ灰	
細口下	94	96-E-0052	SY01	須恵器	杯	—	11.9	—	—	灰白	
細口下	95	96-E-0053	SY01	須恵器	杯	—	10.3	—	—	灰	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
細口下	96	96-E-0054	SY01	須恵器	蓋	—	—	—	—	灰	細口下
細口下	97	96-E-0055	SY01	須恵器	高盤	—	—	—	—	オリーブ灰	
細口下	98	96-E-0050		表採	須恵器	—	—	—	—	灰	
細口下	99	96-E-0056	SY01	須恵器	盤	—	—	—	—	灰	
細口下	100	96-E-0049		表採	灰釉陶器	長頸瓶	7.6	—	—	灰	
細口下	101	96-E-0051		表採	須恵器	甕	—	—	—	暗オリーブ灰	
細口下	102	96-E-0058	SY01	須恵器	甕	—	—	—	—	オリーブ灰	
細口下	103	96-E-0057	SY01	須恵器	甕	—	—	—	—	灰白	
細口下	104	96-E-0001	SY01補修	石器	石鏃	—	—	—	—	オリーブ灰	
鴻ノ巣	105	96-E-0456	灰層	須恵器	椀	22.9	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	106	96-E-0446	灰層	須恵器	椀	12.8	5.8	3.5	—	灰	
鴻ノ巣	107	96-E-0449	灰層	須恵器	椀	13.7	6.8	3.2	—	灰	
鴻ノ巣	108	96-E-0274	灰層	須恵器	椀	13.8	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	109	96-E-0013	灰層	須恵器	椀	12.9	4.9	3.6	229.2	灰白	
鴻ノ巣	110	96-E-0011	灰層	須恵器	椀	13.3	6.1	3.8	257.4	灰	
鴻ノ巣	111	96-E-0014	灰層	須恵器	椀	14.5	5.8	3.3	252.6	灰	
鴻ノ巣	112	96-E-0012	灰層	須恵器	椀	13.1	5.8	3.2	—	灰白	
鴻ノ巣	113	96-E-0448	灰層	須恵器	椀	14.6	6.4	3.2	—	灰白	
鴻ノ巣	114	96-E-0450	灰層	須恵器	椀	12.7	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	115	96-E-0454	灰層	須恵器	椀	12.5	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	116	96-E-0457	灰層	須恵器	椀	16.5	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	117	96-E-0452	灰層	須恵器	椀	13.7	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	118	96-E-0451	灰層	須恵器	椀	13.5	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	119	96-E-0453	灰層	須恵器	椀	13.6	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	120	96-E-0455	灰層	須恵器	椀	14.0	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	121	96-E-0287	灰層	須恵器	椀	—	6.2	—	—	灰白	
鴻ノ巣	122	96-E-0015	灰層	須恵器	椀	—	5.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	123	96-E-0463	灰層	須恵器	椀	—	6.0	—	—	灰	
鴻ノ巣	124	96-E-0461	灰層	須恵器	椀	—	5.8	—	—	灰	
鴻ノ巣	125	96-E-0285	灰層	須恵器	椀	—	6.2	—	—	灰	
鴻ノ巣	126	96-E-0283	灰層	須恵器	椀	—	5.3	—	—	黄灰	
鴻ノ巣	127	96-E-0276	灰層	須恵器	椀	—	6.6	—	—	灰	
鴻ノ巣	128	96-E-0289	灰層	須恵器	椀	—	5.4	—	—	灰	
鴻ノ巣	129	96-E-0290	灰層	須恵器	椀	—	6.0	—	—	灰白	
鴻ノ巣	130	96-E-0464	灰層	須恵器	椀	—	5.2	—	—	灰白	
鴻ノ巣	131	96-E-0016	灰層	須恵器	椀	—	5.4	—	—	灰白	
鴻ノ巣	132	96-E-0018	灰層	須恵器	椀	—	5.0	—	—	灰	
鴻ノ巣	133	96-E-0460	灰層	須恵器	椀	—	5.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	134	96-E-0466	灰層	須恵器	椀	—	5.0	—	—	灰白	
鴻ノ巣	135	96-E-0039	灰層	須恵器	高盤	23.9	13.2	378.4	378.4	灰白	
鴻ノ巣	136	96-E-0439	灰層	須恵器	高盤	23.9	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	137	96-E-0026	灰層	須恵器	高盤	—	12.8	—	—	灰白	
鴻ノ巣	138	96-E-0440	灰層	須恵器	高盤	—	13.9	—	—	灰白	
鴻ノ巣	139	96-E-0441	灰層	須恵器	盤	18.9	8.9	4.3	—	灰白	
鴻ノ巣	140	96-E-0022	灰層	須恵器	盤	14.9	7.5	3.8	—	灰白	
鴻ノ巣	141	96-E-0442	灰層	須恵器	盤	17.2	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	142	96-E-0025	灰層	須恵器	盤	—	9.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	143	96-E-0444	灰層	須恵器	盤	—	8.1	—	—	灰	
鴻ノ巣	144	96-E-0024	灰層	須恵器	盤	—	7.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	145	96-E-0269	灰層	須恵器	蓋	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	146	96-E-0469	灰層	須恵器	蓋	—	20.0	—	—	灰白	
鴻ノ巣	147	96-E-0009	灰層	須恵器	鉢	23.6	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	148	96-E-0514	灰層	須恵器	風字硯	—	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	149	96-E-0004	灰層	須恵器	甕	44.1	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	150	96-E-0002	灰層	須恵器	甕	31.2	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	151	96-E-0470	灰層	須恵器	甕	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	152	96-E-0001	灰層	須恵器	甕	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	153	96-E-0129	灰層	灰釉陶器	椀	20.5	10.5	6.9	—	灰白	
鴻ノ巣	154	96-E-0307	灰層	灰釉陶器	椀	18.4	10.1	6.9	—	灰白	
鴻ノ巣	155	96-E-0178	灰層	灰釉陶器	椀	—	5.5	—	—	灰白	
鴻ノ巣	156	96-E-0127	灰層	灰釉陶器	椀	21.0	10.7	7.4	—	灰白	
鴻ノ巣	157	96-E-0305	灰層	灰釉陶器	椀	18.5	8.6	6.5	774.0	灰白	
鴻ノ巣	158	96-E-0304	灰層	灰釉陶器	椀	18.5	9.1	5.5	—	灰白	
鴻ノ巣	159	96-E-0301	灰層	灰釉陶器	椀	18.2	8.5	6.3	731.0	灰白	
鴻ノ巣	160	96-E-0121	灰層	灰釉陶器	椀	18.9	8.4	5.6	657.3	灰白	
鴻ノ巣	161	96-E-0313	灰層	灰釉陶器	椀	18.0	9.1	5.0	—	灰白	
鴻ノ巣	162	96-E-0134	灰層	灰釉陶器	椀	19.2	9.6	5.9	—	灰白	
鴻ノ巣	163	96-E-0125	灰層	灰釉陶器	椀	16.5	7.7	5.0	464.6	灰白	
鴻ノ巣	164	96-E-0123	灰層	灰釉陶器	椀	16.3	8.4	4.8	458.0	灰白	
鴻ノ巣	165	96-E-0303	灰層	灰釉陶器	椀	16.1	8.3	5.2	486.6	灰	
鴻ノ巣	166	96-E-0302	灰層	灰釉陶器	椀	16.5	8.1	5.7	546.0	灰白	
鴻ノ巣	167	96-E-0128	灰層	灰釉陶器	椀	17.1	7.8	4.7	515.6	灰白	
鴻ノ巣	168	96-E-0138	灰層	灰釉陶器	椀	16.2	8.0	5.3	515.1	灰白	
鴻ノ巣	169	96-E-0323	灰層	灰釉陶器	椀	16.3	7.9	5.4	—	灰白	
鴻ノ巣	170	96-E-0309	灰層	灰釉陶器	椀	16.3	8.4	4.9	—	灰白	
鴻ノ巣	171	96-E-0316	灰層	灰釉陶器	椀	13.4	7.5	4.8	—	灰白	
鴻ノ巣	172	96-E-0124	灰層	灰釉陶器	椀	13.9	6.7	4.1	292.5	灰白	
鴻ノ巣	173	96-E-0135	灰層	灰釉陶器	椀	15.0	7.3	4.0	318.7	灰白	
鴻ノ巣	174	96-E-0139	灰層	灰釉陶器	椀	14.7	7.0	4.6	361.4	灰白	
鴻ノ巣	175	96-E-0131	灰層	灰釉陶器	椀	13.5	7.1	4.3	288.9	灰白	
鴻ノ巣	176	96-E-0132	灰層	灰釉陶器	椀	14.6	6.7	4.3	—	灰白	
鴻ノ巣	178	96-E-0321	灰層	灰釉陶器	椀	15.4	7.0	4.8	—	灰白	
鴻ノ巣	178	96-E-0319	灰層	灰釉陶器	椀	14.9	7.2	4.9	—	灰白	
鴻ノ巣	179	96-E-0161	灰層	灰釉陶器	椀	13.7	7.4	4.4	—	灰白	
鴻ノ巣	180	96-E-0322	灰層	灰釉陶器	椀	13.9	7.5	4.7	—	灰白	
鴻ノ巣	181	96-E-0306	灰層	灰釉陶器	椀	13.3	6.7	4.3	257.0	灰白	
鴻ノ巣	182	96-E-0122	灰層	灰釉陶器	椀	14.4	6.7	4.7	—	灰白	
鴻ノ巣	183	96-E-0137	灰層	灰釉陶器	椀	15.2	6.6	5.2	426.6	灰白	
鴻ノ巣	184	96-E-0315	灰層	灰釉陶器	椀	14.6	7.4	4.5	—	灰	
鴻ノ巣	185	96-E-0314	灰層	灰釉陶器	椀	15.1	7.4	4.6	340.6	灰白	
鴻ノ巣	186	96-E-0311	灰層	灰釉陶器	椀	13.4	6.4	4.9	327.2	灰白	
鴻ノ巣	187	96-E-0141	灰層	灰釉陶器	椀	14.0	7.5	4.6	316.9	灰白	
鴻ノ巣	188	96-E-0160	灰層	灰釉陶器	椀	13.2	7.2	4.5	—	灰白	
鴻ノ巣	189	96-E-0522	灰層	灰釉陶器	椀	10.7	4.9	3.5	117.2	灰白	
鴻ノ巣	190	96-E-0318	灰層	灰釉陶器	椀	11.5	5.6	3.9	—	灰白	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
鴻ノ巣	191	96-E-0136	灰層	灰釉陶器	椀	11.4	5.9	3.4	細口下	148.4	灰白
鴻ノ巣	192	96-E-0317	灰層	灰釉陶器	椀	12.2	6.3	3.6		—	灰白
鴻ノ巣	193	96-E-0335	灰層	灰釉陶器	椀	19.4	—	—		—	灰
鴻ノ巣	194	96-E-0334	灰層	灰釉陶器	椀	19.0	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	195	96-E-0359	灰層	灰釉陶器	椀	19.6	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	196	96-E-0361	灰層	灰釉陶器	椀	19.7	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	197	96-E-0346	灰層	灰釉陶器	椀	19.1	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	198	96-E-0341	灰層	灰釉陶器	椀	19.1	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	199	96-E-0339	灰層	灰釉陶器	椀	19.7	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	200	96-E-0342	灰層	灰釉陶器	椀	18.0	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	201	96-E-0163	灰層	灰釉陶器	椀	19.4	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	202	96-E-0165	灰層	灰釉陶器	椀	16.6	—	—		—	灰
鴻ノ巣	203	96-E-0340	灰層	灰釉陶器	椀	16.6	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	204	96-E-0347	灰層	灰釉陶器	椀	16.6	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	205	96-E-0326	灰層	灰釉陶器	椀	16.8	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	206	96-E-0343	灰層	灰釉陶器	椀	16.1	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	207	96-E-0329	灰層	灰釉陶器	椀	15.3	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	208	96-E-0523	灰層	灰釉陶器	椀	16.3	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	209	96-E-0331	灰層	灰釉陶器	椀	15.3	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	210	96-E-0330	灰層	灰釉陶器	椀	13.9	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	211	96-E-0350	灰層	灰釉陶器	椀	15.1	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	212	96-E-0344	灰層	灰釉陶器	椀	14.1	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	213	96-E-0325	灰層	灰釉陶器	椀	14.4	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	214	96-E-0336	灰層	灰釉陶器	椀	16.0	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	215	96-E-0351	灰層	灰釉陶器	椀	15.4	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	216	96-E-0360	灰層	灰釉陶器	椀	13.8	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	217	96-E-0333	灰層	灰釉陶器	椀	15.6	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	218	96-E-0328	灰層	灰釉陶器	椀	15.4	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	219	96-E-0164	灰層	灰釉陶器	椀	13.6	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	220	96-E-0345	灰層	灰釉陶器	椀	14.7	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	221	96-E-0337	灰層	灰釉陶器	椀	16.9	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	222	96-E-0166	灰層	灰釉陶器	椀	13.2	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	223	96-E-0362	灰層	灰釉陶器	椀	15.4	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	224	96-E-0168	灰層	灰釉陶器	椀	14.9	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	225	96-E-0354	灰層	灰釉陶器	椀	14.5	—	—		—	灰
鴻ノ巣	226	96-E-0353	灰層	灰釉陶器	椀	14.5	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	227	96-E-0348	灰層	灰釉陶器	椀	14.5	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	228	96-E-0327	灰層	灰釉陶器	椀	15.3	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	229	96-E-0369	灰層	灰釉陶器	椀	—	9.3	—		—	灰白
鴻ノ巣	230	96-E-0140	灰層	灰釉陶器	椀	13.0	7.0	5.5		—	灰白
鴻ノ巣	231	96-E-0365	灰層	灰釉陶器	椀	—	9.0	—		—	灰
鴻ノ巣	232	96-E-0159	灰層	灰釉陶器	椀	—	9.1	—		—	灰白
鴻ノ巣	233	96-E-0191	灰層	灰釉陶器	椀	—	9.2	—		—	灰白
鴻ノ巣	234	96-E-0155	灰層	灰釉陶器	椀	—	8.6	—		—	灰白
鴻ノ巣	235	96-E-0151	灰層	灰釉陶器	椀	—	8.9	—		—	灰白
鴻ノ巣	236	96-E-0145	灰層	灰釉陶器	椀	—	8.7	—		—	灰白
鴻ノ巣	237	96-E-0156	灰層	灰釉陶器	椀	—	9.0	—		—	灰白
鴻ノ巣	238	96-E-0376	灰層	灰釉陶器	椀	—	8.2	—		—	灰白
鴻ノ巣	239	96-E-0373	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.6	—		—	灰白
鴻ノ巣	240	96-E-0526	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.6	—		—	灰白
鴻ノ巣	241	96-E-0372	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.1	—		—	灰白
鴻ノ巣	242	96-E-0194	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.3	—		—	灰白
鴻ノ巣	243	96-E-0147	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.7	—		—	灰
鴻ノ巣	244	96-E-0149	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.0	—		—	灰白
鴻ノ巣	245	96-E-0184	灰層	灰釉陶器	椀	—	7.2	—		—	灰白
鴻ノ巣	246	96-E-0387	灰層	灰釉陶器	平皿	14.2	7.4	3.4		211.5	灰白
鴻ノ巣	247	96-E-0377	灰層	灰釉陶器	平皿	15.0	6.7	3.2		182.5	灰白
鴻ノ巣	248	96-E-0386	灰層	灰釉陶器	平皿	14.3	6.9	3.2		164.5	灰オリーブ
鴻ノ巣	249	96-E-0383	灰層	灰釉陶器	平皿	14.4	7.1	3.0		—	灰白
鴻ノ巣	250	96-E-0380	灰層	灰釉陶器	平皿	14.0	6.3	3.4		165.9	灰白
鴻ノ巣	251	96-E-0212	灰層	灰釉陶器	平皿	14.2	7.3	2.8		—	灰
鴻ノ巣	252	96-E-0381	灰層	灰釉陶器	平皿	14.7	7.7	2.9		147.8	灰白
鴻ノ巣	253	96-E-0382	灰層	灰釉陶器	平皿	14.3	7.4	3.2		—	灰白
鴻ノ巣	254	96-E-0378	灰層	灰釉陶器	平皿	13.7	6.7	2.6		124.0	灰
鴻ノ巣	255	96-E-0211	灰層	灰釉陶器	平皿	14.5	7.5	2.8		—	灰白
鴻ノ巣	256	96-E-0217	灰層	灰釉陶器	平皿	14.0	7.4	2.5		104.8	灰白
鴻ノ巣	257	96-E-0388	灰層	灰釉陶器	平皿	13.6	6.6	3.0		145.5	灰白
鴻ノ巣	258	96-E-0207	灰層	灰釉陶器	平皿	14.2	6.8	2.5		132.6	灰
鴻ノ巣	259	96-E-0384	灰層	灰釉陶器	平皿	14.7	7.0	2.6		130.4	灰白
鴻ノ巣	260	96-E-0214	灰層	灰釉陶器	平皿	13.5	7.5	2.3		84.9	灰白
鴻ノ巣	261	96-E-0208	灰層	灰釉陶器	平皿	14.7	7.0	2.7		157.6	灰白
鴻ノ巣	262	96-E-0215	灰層	灰釉陶器	平皿	14.6	7.3	2.8		—	灰白
鴻ノ巣	263	96-E-0385	灰層	灰釉陶器	平皿	13.4	7.1	2.7		117.2	灰白
鴻ノ巣	264	96-E-0219	灰層	灰釉陶器	平皿	13.6	6.5	2.6		—	灰白
鴻ノ巣	265	96-E-0389	灰層	灰釉陶器	平皿	14.8	8.0	2.8		—	灰白
鴻ノ巣	266	96-E-0390	灰層	灰釉陶器	平皿	14.4	6.8	2.4		119.1	灰
鴻ノ巣	267	96-E-0213	灰層	灰釉陶器	平皿	14.3	7.4	2.6		—	灰白
鴻ノ巣	268	96-E-0379	灰層	灰釉陶器	平皿	14.4	7.1	2.8		—	灰白
鴻ノ巣	269	96-E-0428	灰層	灰釉陶器	平皿	14.6	7.7	3.1		187.3	灰
鴻ノ巣	270	96-E-0216	灰層	灰釉陶器	平皿	12.9	7.1	2.9		—	灰白
鴻ノ巣	271	96-E-0210	灰層	灰釉陶器	平皿	15.1	8.0	2.7		—	灰白
鴻ノ巣	272	96-E-0209	灰層	灰釉陶器	平皿	14.8	7.8	2.6		159.8	灰白
鴻ノ巣	273	96-E-0398	灰層	灰釉陶器	平皿	13.6	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	274	96-E-0221	灰層	灰釉陶器	平皿	14.0	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	275	96-E-0396	灰層	灰釉陶器	平皿	14.5	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	276	96-E-0224	灰層	灰釉陶器	平皿	15.1	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	277	96-E-0399	灰層	灰釉陶器	平皿	14.3	—	—		—	灰
鴻ノ巣	278	96-E-0404	灰層	灰釉陶器	平皿	14.0	—	—		—	灰
鴻ノ巣	279	96-E-0395	灰層	灰釉陶器	平皿	15.0	—	—		—	灰
鴻ノ巣	280	96-E-0397	灰層	灰釉陶器	平皿	14.4	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	281	96-E-0392	灰層	灰釉陶器	平皿	14.7	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	282	96-E-0223	灰層	灰釉陶器	平皿	13.0	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	283	96-E-0393	灰層	灰釉陶器	平皿	14.9	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	284	96-E-0401	灰層	灰釉陶器	平皿	14.5	—	—		—	灰白
鴻ノ巣	285	96-E-0225	灰層	灰釉陶器	平皿	14.6	—	—		—	灰白

遺物計測一覽

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
瀧ノ巣	286	96-E-0391	灰層	灰釉陶器	平皿	14.7	—	—	—	灰白	細口下
瀧ノ巣	287	96-E-0402	灰層	灰釉陶器	平皿	14.3	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	288	96-E-0408	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	16.0	6.8	3.0	—	灰白	
瀧ノ巣	289	96-E-0407	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	13.2	6.5	3.0	—	灰白	
瀧ノ巣	290	96-E-0242	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	14.2	6.7	2.7	118.8	灰白	
瀧ノ巣	291	96-E-0406	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	14.0	6.6	2.8	112.3	灰白	
瀧ノ巣	292	96-E-0414	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	16.6	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	293	96-E-0413	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	15.9	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	294	96-E-0412	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	14.7	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	295	96-E-0411	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	14.5	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	296	96-E-0243	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	14.6	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	297	96-E-0247	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	18.9	8.6	3.3	278.7	灰白	
瀧ノ巣	298	96-E-0249	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	18.9	8.8	3.5	273.1	灰白	
瀧ノ巣	299	96-E-0246	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	17.7	7.9	2.7	159.2	灰白	
瀧ノ巣	300	96-E-0248	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	17.4	8.0	3.1	217.6	灰白	
瀧ノ巣	301	96-E-0419	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	16.9	8.1	2.9	186.5	灰白	
瀧ノ巣	302	96-E-0421	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	18.0	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	303	96-E-0422	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	18.0	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	304	96-E-0420	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	18.0	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	305	96-E-0423	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	16.7	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	306	96-E-0426	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	17.8	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	307	96-E-0424	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	16.1	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	308	96-E-0425	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	14.8	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	309	96-E-0418	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	—	9.0	—	—	灰	
瀧ノ巣	310	96-E-0416	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	—	8.0	—	—	灰白	
瀧ノ巣	311	96-E-0417	灰層	灰釉陶器	広縁段皿	—	8.5	—	—	灰	
瀧ノ巣	312	96-E-0254	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	—	8.9	—	—	灰	
瀧ノ巣	313	96-E-0250	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	—	8.9	—	—	灰	
瀧ノ巣	314	96-E-0251	灰層	灰釉陶器	狭縁段皿	—	8.5	—	—	灰白	
瀧ノ巣	315	96-E-0270	灰層	灰釉陶器	輪花段皿	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	316	96-E-0235	灰層	灰釉陶器	耳皿	—	4.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	317	96-E-0043	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.6	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	318	96-E-0044	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	12.2	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	319	96-E-0472	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	9.7	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	320	96-E-0041	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.9	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	321	96-E-0047	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	10.7	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	322	96-E-0042	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.0	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	323	96-E-0040	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	9.6	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	324	96-E-0046	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	9.4	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	325	96-E-0048	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	12.2	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	326	96-E-0045	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	9.8	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	327	96-E-0478	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.5	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	328	96-E-0480	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.7	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	329	96-E-0050	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	14.5	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	330	96-E-0474	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	12.7	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	331	96-E-0473	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	12.1	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	332	96-E-0476	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.4	—	—	—	灰	
瀧ノ巣	333	96-E-0051	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	15.5	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	334	96-E-0054	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.2	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	335	96-E-0053	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.5	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	336	96-E-0057	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	11.3	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	337	96-E-0076	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	338	96-E-0483	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	339	96-E-0484	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	340	96-E-0062	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	11.2	—	—	灰白	
瀧ノ巣	341	96-E-0075	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	9.5	—	—	灰白	
瀧ノ巣	342	96-E-0071	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	10.0	—	—	灰白	
瀧ノ巣	343	96-E-0067	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	7.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	344	96-E-0063	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	11.2	—	—	灰白	
瀧ノ巣	345	96-E-0061	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	11.4	—	—	灰白	
瀧ノ巣	346	96-E-0064	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	10.8	—	—	灰白	
瀧ノ巣	347	96-E-0069	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	11.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	348	96-E-0059	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	11.0	—	—	灰白	
瀧ノ巣	349	96-E-0066	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	8.4	—	—	灰白	
瀧ノ巣	350	96-E-0065	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	8.1	—	—	灰白	
瀧ノ巣	351	96-E-0070	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	8.0	—	—	灰白	
瀧ノ巣	352	96-E-0107	灰層	灰釉陶器	小瓶	3.6	5.0	—	182.8	灰白	
瀧ノ巣	353	96-E-0108	灰層	灰釉陶器	小瓶	3.6	5.4	—	182.9	灰白	
瀧ノ巣	354	96-E-0498	灰層	灰釉陶器	小瓶	4.0	5.2	10.1	173.7	灰白	
瀧ノ巣	355	96-E-0499	灰層	灰釉陶器	小瓶	4.8	—	10.6	—	灰白	
瀧ノ巣	356	96-E-0109	灰層	灰釉陶器	小瓶	4.1	—	10.0	—	灰白	
瀧ノ巣	357	96-E-0111	灰層	灰釉陶器	小瓶	4.0	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	358	96-E-0114	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	5.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	359	96-E-0112	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	5.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	360	96-E-0117	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	4.7	—	—	灰白	
瀧ノ巣	361	96-E-0116	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	5.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	362	96-E-0113	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	4.8	—	—	灰白	
瀧ノ巣	363	96-E-0115	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	5.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	364	96-E-0110	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	5.6	—	—	灰白	
瀧ノ巣	365	96-E-0500	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	5.9	—	—	灰白	
瀧ノ巣	366	96-E-0119	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	367	96-E-0118	灰層	灰釉陶器	小瓶	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	368	96-E-0120	灰層	灰釉陶器	手付小瓶	—	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	369	96-E-0077	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.5	9.6	20.5	1689.2	灰白	
瀧ノ巣	370	96-E-0486	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.1	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	371	96-E-0487	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.6	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	372	96-E-0084	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.3	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	373	96-E-0078	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.9	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	374	96-E-0081	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.3	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	375	96-E-0079	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.0	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	376	96-E-0087	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.6	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	377	96-E-0085	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.5	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	378	96-E-0080	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.2	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	379	96-E-0495	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.4	—	—	—	灰白	
瀧ノ巣	380	96-E-0494	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	8.0	—	—	—	灰白	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
鴻ノ巣	381	96-E-0086	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.1	—	—	—	灰白	細口下
鴻ノ巣	382	96-E-0083	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	7.5	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	383	96-E-0082	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.4	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	384	96-E-0493	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	6.7	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	385	96-E-0089	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	386	96-E-0088	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	387	96-E-0507	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	388	96-E-0101	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	10.8	—	—	灰白	
鴻ノ巣	389	96-E-0103	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	10.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	390	96-E-0497	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	11.0	—	—	灰白	
鴻ノ巣	391	96-E-0092	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	11.2	—	—	灰白	
鴻ノ巣	392	96-E-0093	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	9.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	393	96-E-0091	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	11.1	—	—	灰白	
鴻ノ巣	394	96-E-0095	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	11.7	—	—	灰白	
鴻ノ巣	395	96-E-0496	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	9.9	—	—	灰白	
鴻ノ巣	396	96-E-0096	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	10.5	—	—	灰白	
鴻ノ巣	397	96-E-0100	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	10.4	—	—	灰白	
鴻ノ巣	398	96-E-0094	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	10.5	—	—	灰白	
鴻ノ巣	399	96-E-0098	灰層	灰釉陶器	(手付) 瓶	—	10.1	—	—	灰	
鴻ノ巣	400	96-E-0104	灰層	灰釉陶器	双耳瓶	8.9	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	401	96-E-0105	灰層	灰釉陶器	双耳瓶	—	16.6	—	—	灰	
鴻ノ巣	402	96-E-0106	灰層	灰釉陶器	双耳瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	403	96-E-0509	灰層	灰釉陶器	双耳瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	404	96-E-0504	灰層	灰釉陶器	瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	405	96-E-0506	灰層	灰釉陶器	瓶	5.9	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	406	96-E-0074	灰層	灰釉陶器	長頸瓶	—	7.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	407	96-E-0197	灰層	灰釉陶器	大平鉢	28.5	13.3	8.6	—	灰	
鴻ノ巣	408	96-E-0199	灰層	灰釉陶器	大平鉢	27.9	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	409	96-E-0200	灰層	灰釉陶器	大平鉢	28.8	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	410	96-E-0205	灰層	灰釉陶器	大平鉢	—	14.4	—	—	灰白	
鴻ノ巣	411	96-E-0204	灰層	灰釉陶器	大平鉢	—	13.6	—	—	灰白	
鴻ノ巣	412	96-E-0265	灰層	灰釉陶器	蓋	—	29.7	—	—	灰白	
鴻ノ巣	413	96-E-0510	灰層	灰釉陶器	蓋	13.7	5.8	2.0	—	灰白	
鴻ノ巣	414	96-E-0511	灰層	灰釉陶器	蓋	13.6	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	415	96-E-0513	灰層	灰釉陶器	蓋	—	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	416	96-E-0512	灰層	灰釉陶器	蓋	—	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	417	96-E-0267	灰層	灰釉陶器	蓋	—	13.6	—	—	灰	
鴻ノ巣	418	96-E-0238	灰層	灰釉陶器	三足盤	14.5	—	2.9	—	灰白	
鴻ノ巣	419	96-E-0239	灰層	灰釉陶器	三足盤	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	420	96-E-0240	灰層	灰釉陶器	三足盤	—	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	421	96-E-0206	灰層	灰釉陶器	平皿	15.5	7.4	2.0	—	灰	
鴻ノ巣	422	96-E-0521	灰層	灰白軟陶	平皿	13.5	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	423	96-E-0035	灰層	灰白軟陶	瓶	—	17.9	—	—	灰	
鴻ノ巣	424	96-E-0516	灰層	灰白軟陶	瓶	—	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	425	96-E-0034	灰層	灰白軟陶	瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	426	96-E-0517	灰層	灰白軟陶	瓶	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	427	96-E-0038	灰層	灰白軟陶	香炉蓋	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	428	96-E-0037	灰層	灰白軟陶	蓋	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	429	96-E-0262	灰層	窯道具	サヤ鉢	23.7	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	430	96-E-0436	灰層	窯道具	サヤ鉢	21.7	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	431	96-E-0261	灰層	窯道具	サヤ鉢	23.1	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	432	96-E-0010	灰層	窯道具	サヤ鉢	19.9	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	433	96-E-0437	灰層	窯道具	サヤ鉢	18.1	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	434	96-E-0259	灰層	窯道具	サヤ鉢	—	19.3	—	—	灰白	
鴻ノ巣	435	96-E-0260	灰層	窯道具	サヤ鉢	—	18.4	—	—	灰白	
鴻ノ巣	436	96-E-0006	灰層	窯道具	サヤ鉢	—	12.9	—	—	灰白	
鴻ノ巣	437	96-E-0007	灰層	窯道具	サヤ鉢	—	—	—	—	灰白	
鴻ノ巣	438	96-E-0008	灰層	窯道具	サヤ鉢	25.8	15.8	6.2	—	灰白	
鴻ノ巣	439	96-E-0263	灰層	窯道具	サヤ鉢	28.8	18.0	7.0	—	灰白	
鴻ノ巣	440	96-E-0029	灰層	窯道具	ソク	—	7.5	—	—	灰白	
鴻ノ巣	441	96-E-0431	灰層	窯道具	筒トチ	9.3	9.2	2.4	—	灰	
鴻ノ巣	442	96-E-0032	灰層	窯道具	筒トチ	7.8	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	443	96-E-0429	灰層	窯道具	筒トチ	7.8	6.6	2.9	—	灰	
鴻ノ巣	444	96-E-0430	灰層	窯道具	筒トチ	6.8	6.0	2.5	—	灰白	
鴻ノ巣	445	96-E-0519	灰層	窯道具	筒トチ	6.8	5.8	2.0	—	灰白	
鴻ノ巣	446	96-E-0432	灰層	窯道具	筒トチ	7.0	6.1	2.1	—	灰白	
鴻ノ巣	447	96-E-0433	灰層	窯道具	筒トチ	7.3	6.6	1.7	—	灰	
鴻ノ巣	448	96-E-0033	灰層	窯道具	筒トチ	6.9	—	—	—	灰	
鴻ノ巣	449	96-E-0027	灰層	窯道具	筒トチ	6.8	6.7	2.3	—	灰	
鴻ノ巣	450	96-E-0028	灰層	窯道具	筒トチ	6.8	6.2	2.5	—	灰白	
鴻ノ巣	451	96-E-0435	灰層	窯道具	筒トチ	6.4	5.8	2.1	—	灰	
鴻ノ巣	452	96-E-0434	灰層	窯道具	筒トチ	5.8	5.6	2.4	—	—	
鴻ノ巣	453	96-E-0030	灰層	窯道具	筒トチ	6.8	—	—	—	—	
鴻ノ巣	454	96-E-0031	灰層	窯道具	筒トチ	6.2	6.4	2.2	—	—	
鴻ノ巣	455	96-E-0518	灰層	窯道具	三又トチ	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	456	96-E-0020	灰層	窯道具	盤状トチ	10.2	5.8	2.0	—	—	
鴻ノ巣	457	96-E-0021	灰層	窯道具	盤状トチ	—	4.2	—	—	—	
鴻ノ巣	458	96-E-0297	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	459	96-E-0292	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	460	96-E-0294	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	461	96-E-0295	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	462	96-E-0293	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	463	96-E-0300	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	—	
鴻ノ巣	464	96-E-0296	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	浅黄橙	
鴻ノ巣	465	96-E-0299	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	にぶい橙	
鴻ノ巣	466	96-E-0298	灰層	窯道具	馬爪焼台	—	—	—	—	褐灰	
高針原	467	96-E-0536	灰層	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	灰黄褐	
高針原	468	96-E-0537	灰層	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	褐灰	
高針原	469	96-E-0538	灰層	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	灰褐	
高針原	470	96-E-0539	灰層	窯道具	燒箱	—	—	—	—	褐灰	
高針原	471	96-E-0540	灰層	窯道具	分焰柱	—	—	—	—	灰白	
高針原	472	96-E-0541	灰層	窯壁片	—	—	—	—	—	灰褐	
高針原	473	96-E-0529	灰層	土師器	—	—	—	—	—	灰白	
高針原	474	96-E-0533	灰層	土師器	—	—	—	—	—	橙	
高針原	475	96-E-0531	灰層	土師器	—	—	—	—	—	灰白	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	476	96-E-0528	灰層	土師器	—	—	—	—	—	にぶい橙	細口下
高針原	477	96-E-0530	灰層	土師器	—	—	—	—	—	灰	
高針原	478	96-E-0532	灰層	土師器	—	—	—	—	—	灰	
高針原	479	96-E-0578	SY01	須恵器	蓋A	17.4	—	4.9	—	にぶい黄橙	
高針原	480	96-E-0075	SY01	須恵器	蓋A	15.0	—	3.5	—	灰白	
高針原	481	96-E-0078	SY01	須恵器	蓋A	14.4	—	3.1	—	灰赤	
高針原	482	96-E-0073	SY01	須恵器	蓋A	14.4	—	2.8	—	灰	
高針原	483	96-E-0077	SY01	須恵器	蓋A	13.7	—	2.3	—	灰赤	
高針原	484	96-E-0074	SY01	須恵器	蓋A	14.4	—	2.5	—	灰	
高針原	485	96-E-0072	SY01	須恵器	蓋A	11.6	—	3.0	—	にぶい橙	
高針原	486	96-E-0076	SY01	須恵器	蓋A	11.4	—	2.6	—	褐灰	
高針原	487	96-E-0591	SY01	須恵器	蓋A	15.0	—	—	—	褐灰	
高針原	488	96-E-0589	SY01	須恵器	蓋A	15.0	—	—	—	灰	
高針原	489	96-E-0080	SY01	須恵器	蓋A	14.2	—	—	—	灰	
高針原	490	96-E-0590	SY01	須恵器	蓋A	14.0	—	—	—	黄灰	
高針原	491	96-E-0079	SY01	須恵器	蓋A	14.0	—	—	—	灰赤	
高針原	492	96-E-0592	SY01	須恵器	蓋A	14.0	—	—	—	灰	
高針原	493	96-E-0588	SY01	須恵器	蓋A	14.0	—	—	—	灰	
高針原	494	96-E-0594	SY01	須恵器	蓋A	13.2	—	—	—	にぶい橙	
高針原	495	96-E-0593	SY01	須恵器	蓋A	11.6	—	—	—	灰	
高針原	496	96-E-0052	SY01	須恵器	杯A	12.4	7.0	3.5	—	灰白	
高針原	497	96-E-0583	SY01	須恵器	杯A	12.3	—	3.7	—	灰	
高針原	498	96-E-0053	SY01	須恵器	杯A	12.4	7.1	3.5	—	灰	
高針原	499	96-E-0051	SY01	須恵器	杯A	11.4	5.6	4.1	—	灰黄	
高針原	500	96-E-0049	SY01	須恵器	杯A	11.2	0.8	4.9	—	にぶい赤褐	
高針原	501	96-E-0046	SY01	須恵器	杯A	10.8	—	—	—	黄灰	
高針原	502	96-E-0044	SY01	須恵器	杯A	10.5	—	—	—	褐灰	
高針原	503	96-E-0572	SY01	須恵器	杯A	11.0	—	4.3	—	灰	
高針原	504	96-E-0047	SY01	須恵器	杯A	10.6	2.6	3.9	—	灰	
高針原	505	96-E-0041	SY01	須恵器	杯A	10.6	5.0	4.8	250.3	灰	
高針原	506	96-E-0043	SY01	須恵器	杯A	10.4	5.4	4.6	229.5	灰	
高針原	507	96-E-0050	SY01	須恵器	杯A	10.3	5.4	4.1	—	青灰	
高針原	508	96-E-0584	SY01	須恵器	杯A	11.0	—	4.0	—	灰	
高針原	509	96-E-0586	SY01	須恵器	杯	10.9	—	—	—	暗灰黄	
高針原	510	96-E-0048	SY01	須恵器	杯A	10.0	5.0	4.3	199.9	灰黄褐	
高針原	511	96-E-0582	SY01	須恵器	杯A	—	—	—	—	褐灰	
高針原	512	96-E-0574	SY01	須恵器	杯A	—	—	—	—	褐灰	
高針原	513	96-E-0571	SY01	須恵器	杯A	—	—	—	—	浅黄橙	
高針原	514	96-E-1480	SY01	須恵器	杯A	—	4.8	—	—	灰	
高針原	515	96-E-0065	SY01	須恵器	杯B	22.0	18.8	4.0	—	灰	
高針原	516	96-E-0060	SY01	須恵器	杯B	20.2	14.8	4.8	—	灰	
高針原	517	96-E-0066	SY01	須恵器	杯B	18.4	13.0	4.1	—	オリーブ灰	
高針原	518	96-E-0573	SY01	須恵器	杯B	17.1	12.2	4.9	—	黄灰	
高針原	519	96-E-0579	SY01	須恵器	杯B	16.8	13.0	4.8	—	浅黄橙	
高針原	520	96-E-0068	SY01	須恵器	杯B	15.8	11.8	4.6	—	緑灰	
高針原	521	96-E-0069	SY01	須恵器	杯B	16.2	12.0	4.3	496.7	にぶい橙	
高針原	522	96-E-0067	SY01	須恵器	杯B	15.0	9.0	4.7	—	灰	
高針原	523	96-E-0580	SY01	須恵器	杯B	15.0	11.0	5.1	—	橙	
高針原	524	96-E-0035	SY01	須恵器	杯B	14.4	10.3	3.4	—	灰白	
高針原	525	96-E-0064	SY01	須恵器	杯B	14.0	8.2	4.8	412.6	灰黄	
高針原	526	96-E-0059	SY01	須恵器	杯B	14.2	9.8	4.0~4.2	370.9	にぶい橙	
高針原	527	96-E-0063	SY01	須恵器	杯B	13.8	10.4	4.0	312.2	浅黄橙	
高針原	528	96-E-0036	SY01	須恵器	杯B	13.8	10.3	4.0	—	浅黄橙	
高針原	529	96-E-0056	SY01	須恵器	杯B	13.7	9.0	3.9	897.7	浅黄橙	
高針原	530	96-E-0061	SY01	須恵器	杯B	13.8	11.0	3.7	—	にぶい橙	
高針原	531	96-E-0055	SY01	須恵器	杯B	13.6	9.0	4.5	348.9	褐灰	
高針原	532	96-E-0575	SY01	須恵器	杯B	13.3	8.6	4.5	310.6	浅黄橙	
高針原	533	96-E-0057	SY01	須恵器	杯B	13.4	9.6	4.9	—	にぶい赤橙	
高針原	534	96-E-0031	SY01	須恵器	杯B	13.4	9.8	3.8	—	灰	
高針原	535	96-E-0054	SY01	須恵器	杯B	12.2	8.4	4.3	287.9	浅黄橙	
高針原	536	96-E-0032	SY01	須恵器	杯B	13.0	9.6	3.6	271.5	にぶい橙	
高針原	537	96-E-0058	SY01	須恵器	杯B	13.3	8.8	4.1	309.4	浅黄橙	
高針原	538	96-E-0033	SY01	須恵器	杯B	12.2	9.0	3.8	254.4	灰	
高針原	539	96-E-1479	SY01	須恵器	杯B	13.4	—	—	—	灰	
高針原	540	96-E-0581	SY01	須恵器	杯B	16.8	—	—	—	浅黄橙	
高針原	541	96-E-0587	SY01	須恵器	杯B	12.2	—	—	—	灰	
高針原	542	96-E-0038	SY01	須恵器	杯B	—	9.6	—	—	灰	
高針原	543	96-E-0037	SY01	須恵器	杯B	—	7.8	—	—	黄灰	
高針原	544	96-E-0028	SY01	須恵器	杯A	14.0	6.2	4.1	352.4	浅黄	
高針原	545	96-E-0029	SY01	須恵器	杯A	12.8	6.4	4.2	—	灰黄褐	
高針原	546	96-E-0040	SY01	須恵器	杯A	12.6	5.2	4.2	—	オリーブ灰	
高針原	547	96-E-0025	SY01	須恵器	杯A	12.0	5.8	4.7	292.5	オリーブ灰	
高針原	548	96-E-0026	SY01	須恵器	杯A	12.7	5.8	4.0	—	灰黄褐	
高針原	549	96-E-0042	SY01	須恵器	杯A	12.8	4.8	3.6	—	灰	
高針原	550	96-E-0023	SY01	須恵器	杯B	14.0	6.4	3.8	—	黄灰	
高針原	551	96-E-0022	SY01	須恵器	杯B	14.0	6.2	4.3	384.9	灰褐	
高針原	552	96-E-0024	SY01	須恵器	杯B	12.4	5.8	4.2	—	灰	
高針原	553	96-E-0039	SY01	須恵器	杯B	12.8	6.4	3.6	294.5	灰	
高針原	554	96-E-0045	SY01	須恵器	杯B	12.6	5.2	3.8	—	灰白	
高針原	555	96-E-0027	SY01	須恵器	杯B	—	5.6	—	—	灰	
高針原	556	96-E-0071	SY01	須恵器	杯B	—	7.7	—	—	褐灰	
高針原	557	96-E-0597	SY01	須恵器	高杯B	13.8	10.0	7.5	304.5	褐灰	
高針原	558	96-E-0598	SY01	須恵器	高杯B	16.0	—	—	—	灰	
高針原	559	96-E-0085	SY01	須恵器	盤A	25.0	—	—	—	灰	
高針原	560	96-E-082A	SY01	須恵器	盤A	—	—	—	—	灰白	
高針原	561	96-E-0083	SY01	須恵器	盤B	27.8	18.0	5.7	—	灰	
高針原	562	96-E-0084	SY01	須恵器	盤B	27.8	—	—	—	黒	
高針原	563	96-E-082B	SY01	須恵器	盤B	—	15.4	—	—	灰赤	
高針原	564	96-E-0577	SY01	須恵器	盤C	23.8	17.8	4.3	—	青灰	
高針原	565	96-E-0089	SY01	須恵器	鉢C	29.6	—	—	—	灰白	
高針原	566	96-E-0088	SY01	須恵器	鉢C	—	18.0	—	—	褐灰	
高針原	567	96-E-0596	SY01	須恵器	鉢D	21.6	—	—	—	暗赤褐	
高針原	568	96-E-0595	SY01	須恵器	鉢D	—	—	—	—	淡橙	
高針原	569	96-E-0093	SY01	須恵器	平瓶	—	6.8	—	—	灰	
高針原	570	96-E-0090	SY01	須恵器	短頸壺	9.0	—	—	—	灰	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	571	96-E-0092	SY01	須恵器	短頸壺	8.0	—	—	—	緑灰	細口下
高針原	572	96-E-0091	SY01	須恵器	短頸壺	8.0	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	573	96-E-0617	SY01	須恵器	横瓶	12.6	—	34.9	41963.1	緑灰	
高針原	574	96-E-0105	SY01	須恵器	横瓶	15.2	—	—	—	緑灰	
高針原	575	96-E-0106	SY01	須恵器	短頸壺	10.0	—	—	—	灰	
高針原	576	96-E-0107	SY01	須恵器	短頸壺	—	14.4	—	—	灰	
高針原	577	96-E-0100	SY01	須恵器	壺A	—	—	—	—	灰白	
高針原	578	96-E-0097	SY01	須恵器	壺A	26.7	—	—	—	灰	
高針原	579	96-E-0096	SY01	須恵器	壺A	33.4	—	—	—	灰白	
高針原	580	96-E-0099	SY01	須恵器	壺A	35.8	—	—	—	灰	
高針原	581	96-E-0098	SY01	須恵器	壺A	26.0	—	—	—	灰	
高針原	582	96-E-0103	SY01	須恵器	壺A	—	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	583	96-E-0576	SY01	須恵器	壺A	—	16.0	—	—	灰オリーブ	
高針原	584	96-E-0087	SY01	須恵器	壺A	—	14.0	—	—	黄灰	
高針原	585	96-E-0599	SY01	須恵器	壺A	—	16.4	10.7	—	灰	
高針原	586	96-E-0615	SY01舟底	須恵器	蓋A	12.0	—	3.0	—	灰	
高針原	587	96-E-0616	SY01舟底	須恵器	蓋A	15.4	—	—	—	灰白	
高針原	588	96-E-0613	SY01舟底	須恵器	杯A	11.3	5.3	4.5	—	灰黄	
高針原	589	96-E-0614	SY01舟底	須恵器	杯A	12.1	—	—	—	灰	
高針原	590	96-E-0568	SY01補修	須恵器	杯H	8.0	3.0	3.4	119.2	浅黄橙	
高針原	591	96-E-0569	SY01補修	須恵器	蓋H	10.0	3.2	3.7	—	灰	
高針原	592	96-E-0570	SY01補修	須恵器	平瓶	—	14.0	7.6	—	灰黄	
高針原	593	96-E-1350	灰出しビット	須恵器	蓋A	14.2	—	3.6	—	黄灰	
高針原	594	96-E-1323	灰出しビット	須恵器	蓋A	15.4	—	3.2	—	灰黄	
高針原	595	96-E-1322	灰出しビット	須恵器	蓋A	11.2	—	1.9	—	灰赤	
高針原	596	96-E-1326	灰出しビット	須恵器	蓋B	11.0	—	1.2	—	灰オリーブ	
高針原	597	96-E-1411	灰出しビット	須恵器	蓋H	11.4	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	598	96-E-1412	灰出しビット	須恵器	蓋H	10.8	—	—	—	オリーブ黄	
高針原	599	96-E-1413	灰出しビット	須恵器	蓋H	8.8	—	—	—	明黄褐	
高針原	600	96-E-1348	灰出しビット	須恵器	杯A	13.4	5.4	4.0	293.3	灰黄	
高針原	601	96-E-0020	灰出しビット	須恵器	杯A	12.6	3.2	4.6	264.9	灰黄	
高針原	602	96-E-1349	灰出しビット	須恵器	杯A	12.8	—	—	—	灰白	
高針原	603	96-E-1340	灰出しビット	須恵器	杯A	10.8	1.6	4.0	204.7	灰	
高針原	604	96-E-1346	灰出しビット	須恵器	杯B	17.8	12.6	4.6	—	灰白	
高針原	605	96-E-1337	灰出しビット	須恵器	杯B	18.0	13.4	4.9	736.4	灰黄褐	
高針原	606	96-E-1344	灰出しビット	須恵器	杯B	18.0	14.0	4.2	611.4	緑灰	
高針原	607	96-E-1335	灰出しビット	須恵器	杯B	16.6	12.0	4.3	523.1	灰白	
高針原	608	96-E-1404	灰出しビット	須恵器	杯B	17.2	12.2	4.2	—	暗灰黄	
高針原	609	96-E-1345	灰出しビット	須恵器	杯B	16.4	11.0	3.8	—	灰	
高針原	610	96-E-1336	灰出しビット	須恵器	杯B	15.4	10.6	4.1	392.9	黄灰	
高針原	611	96-E-1347	灰出しビット	須恵器	杯B	15.4	10.6	4.8	—	灰白	
高針原	612	96-E-1353	灰出しビット	須恵器	杯B	14.6	7.4	5.3	—	灰黄	
高針原	613	96-E-1338	灰出しビット	須恵器	杯B	14.0	9.8	4.3	—	浅黄	
高針原	614	96-E-1403	灰出しビット	須恵器	杯B	13.6	9.0	4.1	—	灰白	
高針原	615	96-E-1410	灰出しビット	須恵器	杯B	—	10.6	—	—	灰オリーブ	
高針原	616	96-E-1481	灰出しビット	須恵器	杯B	—	12.8	—	—	灰白	
高針原	617	96-E-1405	灰出しビット	須恵器	杯B	—	11.2	—	—	にぶい橙	
高針原	618	96-E-1407	灰出しビット	須恵器	杯B	—	11.0	—	—	灰	
高針原	619	96-E-1408	灰出しビット	須恵器	杯B	—	10.4	—	—	灰	
高針原	620	96-E-1406	灰出しビット	須恵器	杯B	—	11.2	—	—	灰	
高針原	621	96-E-1409	灰出しビット	須恵器	杯B	—	7.7	—	—	灰白	
高針原	622	96-E-1352	灰出しビット	須恵器	杯B	—	4.6	—	—	灰	
高針原	623	96-E-1327	灰出しビット	須恵器	高杯B	—	10.0	—	—	灰	
高針原	624	96-E-1342	灰出しビット	須恵器	鉢A	8.0	—	—	—	灰	
高針原	625	96-E-1330	灰出しビット	須恵器	鉢B	20.2	—	—	2323.7	にぶい橙	
高針原	626	96-E-1329	灰出しビット	須恵器	鉢B	15.7	—	—	—	灰	
高針原	627	96-E-1414	灰出しビット	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰	
高針原	628	96-E-1334	灰出しビット	須恵器	平瓶B	5.8	—	—	—	灰	
高針原	629	96-E-1343	灰出しビット	須恵器	平瓶B	—	—	—	—	灰黄	
高針原	630	96-E-1333	灰出しビット	須恵器	HansonウB	—	5.2	—	—	浅黄橙	
高針原	631	96-E-1332	灰出しビット	須恵器	壺C	19.8	—	—	—	灰黄	
高針原	632	96-E-0225	SD01	須恵器	蓋A	20.8	—	3.5	—	にぶい橙	
高針原	633	96-E-0228	SD01	須恵器	蓋A	13.3	—	2.8	—	灰オリーブ	
高針原	634	96-E-0226	SD01	須恵器	蓋A	11.3	—	2.8	—	灰白	
高針原	635	96-E-0227	SD01	須恵器	蓋A	11.5	—	2.0	—	灰	
高針原	636	96-E-0229	SD01	須恵器	蓋A	17.8	—	—	—	灰白	
高針原	637	96-E-0234	SD01	須恵器	蓋A	14.4	—	—	—	灰白	
高針原	638	96-E-0551	SD01	須恵器	杯A	10.6	6.0	3.8	—	灰	
高針原	639	96-E-0218	SD01	須恵器	杯A	11.6	—	4.4~4.9	279.5	灰白	
高針原	640	96-E-0217	SD01	須恵器	杯A	11.6	—	4.3~4.8	—	灰	
高針原	641	96-E-0224	SD01	須恵器	杯A	12.8	—	—	—	灰	
高針原	642	96-E-0219	SD01	須恵器	杯A	11.7	—	—	—	灰	
高針原	643	96-E-0216	SD01	須恵器	杯B	18.4	13.0	4.7	—	灰	
高針原	644	96-E-0549	SD01	須恵器	杯B	13.8	10.2	4.6	—	灰オリーブ	
高針原	645	96-E-0235	SD01	須恵器	高杯B	13.2	10.2	11.7	365.8	灰	
高針原	646	96-E-0243	SD01	須恵器	高杯B	13.0	7.0	6.1	204.4	灰白	
高針原	647	96-E-0242	SD01	須恵器	高杯B	—	10.0	—	—	浅黄橙	
高針原	648	96-E-0238	SD01	須恵器	高杯B	—	10.8	—	—	灰	
高針原	649	96-E-0223	SD01	須恵器	鉢A	8.6	—	—	—	灰	
高針原	650	96-E-0253	SD01	須恵器	鉢A	21.0	—	—	—	灰	
高針原	651	96-E-0244	SD01	須恵器	フラスコ形瓶	9.0	—	—	—	浅黄橙	
高針原	652	96-E-0246	SD01	須恵器	平瓶	—	18.4	—	—	灰	
高針原	653	96-E-0247	SD01	須恵器	平瓶A	7.6	—	—	—	灰	
高針原	654	96-E-0556	SD01	須恵器	平瓶A	7.6	—	—	—	灰	
高針原	655	96-E-0248	SD01	須恵器	平瓶A	6.9	—	—	—	灰	
高針原	656	96-E-0250	SD01	須恵器	短頸壺	10.0	—	—	—	緑灰	
高針原	657	96-E-0252	SD01	須恵器	短頸壺	—	3.0	—	—	褐灰	
高針原	658	96-E-0245	SD01	須恵器	横瓶B	6.8	—	—	—	にぶい橙	
高針原	659	96-E-0249	SD01	須恵器	HansonウB	—	5.2	—	—	灰	
高針原	660	96-E-0263	SD02	須恵器	蓋A	14.9	—	—	—	灰黄	
高針原	661	96-E-0264	SD02	須恵器	蓋A	11.8	—	—	—	灰	
高針原	662	96-E-0254	SD02	須恵器	杯A	—	—	—	—	灰黄	
高針原	663	96-E-0256	SD02	須恵器	杯A	15.7	—	—	—	灰黄	
高針原	664	96-E-0269	SD02	須恵器	杯B	12.0	10.0	4.0	—	灰黄	
高針原	665	96-E-0255	SD02	須恵器	杯J	9.8	—	—	—	灰黄	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	666	96-E-0257	SD02	須恵器	高杯B	11.6	7.6	5.4	—	灰黄	細口下
高針原	667	96-E-0259	SD02	須恵器	高杯B	—	10.0	—	—	にぶい橙	
高針原	668	96-E-0258	SD02	須恵器	高杯B	—	9.0	—	—	灰黄	
高針原	669	96-E-0261	SD02	須恵器	高杯B	—	9.0	—	—	灰オリーブ	
高針原	670	96-E-0265	SD02	須恵器	フラスコ形瓶B	8.9	—	—	—	灰	
高針原	671	96-E-0267	SD02	須恵器	ハンノウ	7.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	672	96-E-0511	SK01	須恵器	杯H	9.2	—	—	—	灰	
高針原	673	96-E-0512	SK01	須恵器	鉢A	14.8	—	—	—	にぶい黄	
高針原	674	96-E-0538	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	14.5	—	3.0	—	オリーブ灰	
高針原	675	96-E-0534	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	15.9	—	2.7	—	灰	
高針原	676	96-E-0486	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	17.4	—	2.0	—	灰	
高針原	677	96-E-0537	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	17.0	—	3.5	—	緑灰	
高針原	678	96-E-0484	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	15.8	—	2.8	—	灰	
高針原	679	96-E-0532	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	12.0	—	2.7	—	灰白	
高針原	680	96-E-0531	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	12.8	—	3.0	—	灰白	
高針原	681	96-E-0533	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	11.6	—	2.6	—	灰	
高針原	682	96-E-0485	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	10.6	—	2.5	—	にぶい黄	
高針原	683	96-E-0539	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	16.5	—	—	—	灰黄	
高針原	684	96-E-0491	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	17.6	—	—	—	灰黄	
高針原	685	96-E-0489	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	11.2	—	—	—	浅黄	
高針原	686	96-E-0488	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	12.4	—	—	—	灰黄	
高針原	687	96-E-0490	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋A	11.8	—	—	—	灰黄	
高針原	688	96-E-0492	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋B	10.4	—	2.0	—	灰白	
高針原	689	96-E-0493	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋B	10.4	—	2.2	—	灰黄褐	
高針原	690	96-E-0540	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋	16.5	—	—	—	橙	
高針原	691	96-E-0495	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋C	—	—	—	—	にぶい褐	
高針原	692	96-E-0496	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋C	—	—	—	—	灰黄	
高針原	693	96-E-1388	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋H	10.6	—	—	—	灰黄	
高針原	694	96-E-1387	灰層Ⅰ群	須恵器	蓋H	9.6	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	695	96-E-0482	灰層Ⅰ群	須恵器	杯A	12.7	—	—	—	灰	
高針原	696	96-E-0528	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	16.2	11.0	3.8	463.7	灰	
高針原	697	96-E-0479	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	16.0	12.4	4.2	—	浅黄	
高針原	698	96-E-0481	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	16.0	11.9	3.2	—	灰	
高針原	699	96-E-1389	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	14.8	10.0	4.1	—	灰黄	
高針原	700	96-E-0480	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	13.8	9.2	3.8	—	灰黄	
高針原	701	96-E-1391	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	—	12.8	—	—	灰	
高針原	702	96-E-1392	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	—	9.8	—	—	灰	
高針原	703	96-E-1393	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	—	8.9	—	—	灰白	
高針原	704	96-E-0483	灰層Ⅰ群	須恵器	杯B	—	—	—	—	浅黄橙	
高針原	705	96-E-0524	灰層Ⅰ群	須恵器	杯G	11.7	—	4.5	291.6	灰	
高針原	706	96-E-0525	灰層Ⅰ群	須恵器	杯G	11.4	—	—	—	黄灰	
高針原	707	96-E-0526	灰層Ⅰ群	須恵器	杯G	10.5	—	3.9	—	灰白	
高針原	708	96-E-0477	灰層Ⅰ群	須恵器	杯G	9.6	—	4.6	—	灰	
高針原	709	96-E-1384	灰層Ⅰ群	須恵器	杯H	9.4	—	—	—	灰	
高針原	710	96-E-1385	灰層Ⅰ群	須恵器	杯H	10.4	—	—	—	灰	
高針原	711	96-E-1386	灰層Ⅰ群	須恵器	杯H	9.4	—	—	—	灰	
高針原	712	96-E-0478	灰層Ⅰ群	須恵器	杯J	10.8	—	—	—	灰	
高針原	713	96-E-0502	灰層Ⅰ群	須恵器	高杯	—	10.0	—	—	浅黄	
高針原	714	96-E-0498	灰層Ⅰ群	須恵器	高杯	—	10.4	—	—	灰	
高針原	715	96-E-0497	灰層Ⅰ群	須恵器	高杯	—	9.6	—	—	灰黄褐	
高針原	716	96-E-0542	灰層Ⅰ群	須恵器	高杯	—	9.2	—	—	黄灰	
高針原	717	96-E-0546	灰層Ⅰ群	須恵器	フラスコ形瓶B	9.5	—	—	—	灰黄	
高針原	718	96-E-0504	灰層Ⅰ群	須恵器	平瓶	—	—	—	—	暗灰黄	
高針原	719	96-E-0545	灰層Ⅰ群	須恵器	短形壺	8.6	5.6	9.6	635.6	灰白	
高針原	720	96-E-0507	灰層Ⅰ群	須恵器	短形壺	8.4	—	—	—	暗灰黄	
高針原	721	96-E-0543	灰層Ⅰ群	須恵器	横瓶B	12.6	—	—	—	灰黄	
高針原	722	96-E-0503	灰層Ⅰ群	須恵器	横瓶B	10.4	—	—	—	灰	
高針原	723	96-E-0505	灰層Ⅰ群	須恵器	ハンノウ	7.6	—	—	—	黄灰	
高針原	724	96-E-0509	灰層Ⅰ群	須恵器	壺A	—	—	—	—	灰	
高針原	725	96-E-0510	灰層Ⅰ群	須恵器	壺A	—	—	—	—	灰	
高針原	726	96-E-0547	灰層Ⅰ群	須恵器	壺B	28.0	—	—	—	灰白	
高針原	727	96-E-0508	灰層Ⅰ群	須恵器	壺C	16.0	—	—	—	灰白	
高針原	728	96-E-1070	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	19.4	—	2.3	—	にぶい黄	
高針原	729	96-E-0009	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	18.0	—	—	—	灰	
高針原	730	96-E-1075	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	17.8	—	3.9	—	灰オリーブ	
高針原	731	96-E-1078	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	18.4	—	3.5	—	灰	
高針原	732	96-E-1074	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	18.0	—	3.5	—	灰白	
高針原	733	96-E-1165	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	17.0	—	3.2	—	灰オリーブ	
高針原	734	96-E-1357	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.4	—	3.4	—	浅黄	
高針原	735	96-E-1166	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	16.6	—	3.6	—	灰	
高針原	736	96-E-1073	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	16.2	—	3.8	—	灰白	
高針原	737	96-E-0197	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.8	—	—	—	黄灰	
高針原	738	96-E-1076	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	17.0	—	3.2	—	にぶい黄橙	
高針原	739	96-E-1083	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	14.8	—	2.9	—	灰黄	
高針原	740	96-E-1077	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.8	—	1.9	—	灰白	
高針原	741	96-E-1071	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	16.6	—	3.5	—	灰	
高針原	742	96-E-1087	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.4	—	2.8	—	灰白	
高針原	743	96-E-1072	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	16.0	—	2.5	—	灰	
高針原	744	96-E-1082	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.8	—	2.5	—	灰白	
高針原	745	96-E-1081	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	13.8	—	3.0	—	黄灰	
高針原	746	96-E-1079	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	14.8	—	3.3	—	暗オリーブ	
高針原	747	96-E-1105	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	13.8	—	2.4	—	灰	
高針原	748	96-E-1096	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	13.4	—	2.5	—	灰白	
高針原	749	96-E-0006	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	12.0	—	—	—	灰	
高針原	750	96-E-1080	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	12.4	—	2.4	—	暗オリーブ	
高針原	751	96-E-1084	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.8	—	2.0	—	灰	
高針原	752	96-E-1099	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.0	—	2.3	—	灰黄	
高針原	753	96-E-1089	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.0	—	2.8	—	灰白	
高針原	754	96-E-1091	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.0	—	1.9	—	灰白	
高針原	755	96-E-1100	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.0	—	2.4	—	灰白	
高針原	756	96-E-1086	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	12.4	—	2.2	—	灰黄	
高針原	757	96-E-1085	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	12.0	—	2.8	—	灰	
高針原	758	96-E-1102	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.6	—	2.5	—	灰	
高針原	759	96-E-1101	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.0	—	2.7	—	灰オリーブ	
高針原	760	96-E-1093	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.6	—	2.9	—	浅黄	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	761	96-E-1106	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.6	—	2.6	—	灰黄褐	細口下
高針原	762	96-E-1104	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.4	—	2.2	—	灰	
高針原	763	96-E-1098	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.4	—	2.4	—	灰	
高針原	764	96-E-1097	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.0	—	2.5	—	灰	
高針原	765	96-E-1103	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.8	—	2.8	—	灰	
高針原	766	96-E-1088	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.8	—	2.4	—	灰	
高針原	767	96-E-0196	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	11.1	—	2.3	—	灰	
高針原	768	96-E-1092	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.4	—	2.4	—	灰	
高針原	769	96-E-1110	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	19.6	—	—	—	灰	
高針原	770	96-E-1109	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	19.2	—	—	—	灰白	
高針原	771	96-E-1115	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	19.6	—	—	—	にぶい黄	
高針原	772	96-E-1118	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	19.2	—	—	—	灰黄	
高針原	773	96-E-1121	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	18.9	—	—	—	灰白	
高針原	774	96-E-1111	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	16.8	—	—	—	灰黄	
高針原	775	96-E-1108	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.8	—	—	—	にぶい黄	
高針原	776	96-E-0198	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	777	96-E-1120	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	16.0	—	—	—	灰白	
高針原	778	96-E-1117	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	14.8	—	—	—	灰	
高針原	779	96-E-1113	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	14.8	—	—	—	灰白	
高針原	780	96-E-1116	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.0	—	—	—	灰	
高針原	781	96-E-1107	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	17.8	—	—	—	灰	
高針原	782	96-E-1125	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	15.0	—	—	—	灰白	
高針原	783	96-E-0199	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	14.0	—	—	—	灰	
高針原	784	96-E-1114	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	12.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	785	96-E-1112	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	13.0	—	—	—	灰	
高針原	786	96-E-1124	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	13.0	—	—	—	緑灰	
高針原	787	96-E-1122	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋A	10.2	—	—	—	明黄褐	
高針原	788	96-E-1127	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	11.5	—	3.0	—	浅黄	
高針原	789	96-E-1090	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.8	—	3.5	—	にぶい赤褐	
高針原	790	96-E-1137	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	9.8	—	2.2	—	灰白	
高針原	791	96-E-1128	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	11.4	—	2.5	—	灰	
高針原	792	96-E-1135	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.8	—	2.1	—	灰白	
高針原	793	96-E-1131	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.8	—	2.8	—	灰オリーブ	
高針原	794	96-E-1136	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.2	—	2.6	—	灰白	
高針原	795	96-E-1134	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.8	—	2.2	—	オリーブ灰	
高針原	796	96-E-1133	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.6	—	2.0	—	灰黄	
高針原	797	96-E-1142	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.6	—	2.4	—	灰	
高針原	798	96-E-1139	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	9.8	—	2.8	—	灰	
高針原	799	96-E-1138	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	8.4	—	2.4	—	灰	
高針原	800	96-E-1132	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋B	10.2	—	1.9	—	黄灰	
高針原	801	96-E-1141	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋C	10.8	—	2.3	—	黄灰	
高針原	802	96-E-1143	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋C	10.0	—	3.3	—	灰黄	
高針原	803	96-E-1140	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋C	5.5	—	2.5	—	灰	
高針原	804	96-E-1145	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋C	—	—	—	—	灰	
高針原	805	96-E-1154	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	9.0	—	—	—	灰	
高針原	806	96-E-1156	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	12.0	—	—	—	淡黄	
高針原	807	96-E-1157	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	11.4	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	808	96-E-1151	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	10.2	—	—	—	灰白	
高針原	809	96-E-1158	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	11.4	—	—	—	浅黄	
高針原	810	96-E-1149	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	10.8	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	811	96-E-0200	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	10.0	—	—	—	淡黄	
高針原	812	96-E-1153	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	10.0	—	—	—	黄灰	
高針原	813	96-E-1155	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	9.6	—	—	—	灰	
高針原	814	96-E-1147	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋	—	—	—	—	灰	
高針原	815	96-E-1359	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋D	10.0	9.0	2.1	—	灰	
高針原	816	96-E-1164	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋E	18.8	—	5.0	—	灰褐	
高針原	817	96-E-0005	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋F	12.8	—	—	—	灰	
高針原	818	96-E-1163	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋G	42.9	—	—	—	暗灰黄	
高針原	819	96-E-0955	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.0	—	3.5	—	灰	
高針原	820	96-E-0948	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.8	—	3.1	—	灰オリーブ	
高針原	821	96-E-0957	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.6	—	3.8	—	暗灰黄	
高針原	822	96-E-0956	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.0	—	3.9	—	暗灰黄	
高針原	823	96-E-0949	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.2	—	4.0	—	黄灰	
高針原	824	96-E-0936	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.1	—	4.0	—	にぶい黄	
高針原	825	96-E-1415	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.3	—	3.8	—	灰	
高針原	826	96-E-0007	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.8	—	—	—	灰	
高針原	827	96-E-0944	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	11.0	—	—	—	灰	
高針原	828	96-E-0950	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.6	—	3.6	—	にぶい黄	
高針原	829	96-E-0941	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.4	—	3.6	—	灰白	
高針原	830	96-E-0942	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.6	—	—	—	灰黄	
高針原	831	96-E-0932	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.2	—	3.3	—	灰白	
高針原	832	96-E-0947	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.2	—	4.0	—	黄灰	
高針原	833	96-E-0945	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.4	—	3.2	—	灰	
高針原	834	96-E-0952	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.2	—	3.6	—	灰	
高針原	835	96-E-0939	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.2	—	3.5	—	灰白	
高針原	836	96-E-0943	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.1	—	3.2	—	灰白	
高針原	837	96-E-0937	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.2	—	3.4	—	灰	
高針原	838	96-E-0935	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.9	—	2.8	—	灰白	
高針原	839	96-E-0934	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	9.9	—	3.1	—	灰	
高針原	840	96-E-0938	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	9.8	—	2.9	—	灰	
高針原	841	96-E-0951	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.0	—	2.6	—	黒褐	
高針原	842	96-E-0954	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	9.4	—	—	—	灰	
高針原	843	96-E-0931	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	10.2	—	3.0	—	灰	
高針原	844	96-E-0946	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	7.6	—	3.0	—	灰白	
高針原	845	96-E-1215	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	9.4	—	—	—	淡黄	
高針原	846	96-E-1214	灰層Ⅱ群	須恵器	蓋H	8.4	—	2.0	—	黄褐	
高針原	847	96-E-1191	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	14.0	—	5.5	—	灰オリーブ	
高針原	848	96-E-1204	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	13.4	—	4.3	—	灰褐	
高針原	849	96-E-1183	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	15.0	—	3.3	—	灰	
高針原	850	96-E-0193	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.8	—	—	—	黄灰	
高針原	851	96-E-1208	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.8	—	4.1	—	灰	
高針原	852	96-E-1192	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	11.8	—	4.2	—	灰オリーブ	
高針原	853	96-E-1360	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.8	5.4	4.2	224.2	灰オリーブ	
高針原	854	96-E-1187	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	12.0	—	3.7	—	灰	
高針原	855	96-E-1198	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	11.2	—	3.7	—	灰白	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	856	96-E-1186	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.0	—	4.3	185.6	灰白	細口下
高針原	857	96-E-1197	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	11.4	—	3.7	—	灰オリーブ	
高針原	858	96-E-1188	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	11.0	—	3.8	211.3	灰	
高針原	859	96-E-1194	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.6	—	4.6	—	オリーブ黄	
高針原	860	96-E-1193	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.4	—	4.6	239.5	灰褐	
高針原	861	96-E-1207	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.4	—	3.8	—	灰	
高針原	862	96-E-1210	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.8	—	4.0	—	青灰	
高針原	863	96-E-1209	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	864	96-E-1185	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	10.0	—	4.5	—	にぶい橙	
高針原	865	96-E-1213	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	14.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	866	96-E-1212	灰層Ⅱ群	須恵器	杯A	12.5	—	—	—	灰	
高針原	867	96-E-1169	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	21.0	15.0	5.0	—	灰	
高針原	868	96-E-1170	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	18.4	14.6	4.9	—	褐灰	
高針原	869	96-E-1179	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	18.4	15.0	4.7	—	灰白	
高針原	870	96-E-1174	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	20.0	14.0	4.4	—	灰	
高針原	871	96-E-1180	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	17.4	12.6	4.2	556.3	灰	
高針原	872	96-E-1176	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	17.0	11.0	4.7	—	灰	
高針原	873	96-E-1175	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	17.0	12.8	4.7	—	灰	
高針原	874	96-E-1172	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	17.0	12.4	4.2	—	黒褐	
高針原	875	96-E-1173	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	16.0	11.6	4.7	—	灰	
高針原	876	96-E-0191	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	15.8	10.4	5.6	—	灰	
高針原	877	96-E-1178	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	15.0	10.8	4.1	—	淡黄	
高針原	878	96-E-0019	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	14.8	10.6	4.1	404.1	にぶい橙	
高針原	879	96-E-1168	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	14.6	10.4	4.0	—	灰	
高針原	880	96-E-0192	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	13.2	9.6	4.0	—	灰	
高針原	881	96-E-0189	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	13.8	10.6	3.8	323.3	灰黄	
高針原	882	96-E-0190	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	15.2	11.4	4.9	—	黄灰	
高針原	883	96-E-1182	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	11.4	7.4	5.4	293.3	暗灰黄	
高針原	884	96-E-1181	灰層Ⅱ群	須恵器	杯B	—	5.0	—	—	緑灰	
高針原	885	96-E-1205	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	9.4	—	3.3	—	灰	
高針原	886	96-E-1195	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	10.2	—	3.5	—	黄灰	
高針原	887	96-E-1200	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	9.0	—	4.0	—	灰	
高針原	888	96-E-1206	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	9.6	—	—	—	灰	
高針原	889	96-E-1203	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	8.6	—	4.0	—	灰褐	
高針原	890	96-E-1268	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	7.8	—	—	—	灰	
高針原	891	96-E-1184	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	7.8	—	5.9	187.2	灰	
高針原	892	96-E-0016	灰層Ⅱ群	須恵器	杯G	8.0	—	—	174.5	黄灰	
高針原	893	96-E-0990	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	11.4	—	4.3	—	灰褐	
高針原	894	96-E-0958	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.2	3.0	4.5	—	灰	
高針原	895	96-E-0985	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.8	—	4.0	—	灰	
高針原	896	96-E-0970	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.2	—	3.8	177.8	灰	
高針原	897	96-E-0981	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.2	—	—	—	灰	
高針原	898	96-E-0984	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.0	—	4.0	—	灰	
高針原	899	96-E-0982	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	8.8	—	3.6	—	暗灰黄	
高針原	900	96-E-0980	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.8	—	3.9	—	灰白	
高針原	901	96-E-0978	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	8.8	—	3.8	—	灰	
高針原	902	96-E-0962	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.4	—	3.3	160.8	灰白	
高針原	903	96-E-0979	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	8.8	—	3.4	—	灰	
高針原	904	96-E-0960	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.0	2.0	3.8	—	オリーブ黒	
高針原	905	96-E-0976	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.4	—	3.5	—	灰	
高針原	906	96-E-0977	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.0	—	3.6	—	灰	
高針原	907	96-E-0963	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.0	—	3.6	146.2	緑灰	
高針原	908	96-E-0987	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.2	—	3.4	—	黄灰	
高針原	909	96-E-0975	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.0	—	3.5	—	灰黄	
高針原	910	96-E-0972	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.2	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	911	96-E-0964	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.2	—	3.3	—	灰白	
高針原	912	96-E-0988	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.4	—	—	—	黄灰	
高針原	913	96-E-0973	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.4	—	3.2	—	灰白	
高針原	914	96-E-0969	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	8.4	—	2.9	—	黒褐	
高針原	915	96-E-0008	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.2	—	—	165.4	オリーブ黒	
高針原	916	96-E-0965	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.0	—	4.0	—	灰	
高針原	917	96-E-0971	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.7	—	3.8	—	灰白	
高針原	918	96-E-0961	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.6	—	3.5	172.6	灰白	
高針原	919	96-E-0983	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.6	—	3.6	—	灰	
高針原	920	96-E-0966	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.6	—	3.5	—	灰	
高針原	921	96-E-0959	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.6	2.0	3.4	—	灰白	
高針原	922	96-E-0986	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.6	—	3.5	—	灰	
高針原	923	96-E-0974	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.4	—	3.3	—	灰	
高針原	924	96-E-0967	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.2	—	2.9	132.3	灰白	
高針原	925	96-E-0968	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	10.4	—	3.2	—	灰白	
高針原	926	96-E-0989	灰層Ⅱ群	須恵器	杯H	9.2	—	3.3	—	灰	
高針原	927	96-E-1276	灰層Ⅱ群	須恵器	杯J	10.6	—	—	—	灰	
高針原	928	96-E-0002	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	10.4	8.6	9.7	203.0	灰	
高針原	929	96-E-0003	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	10.0	9.0	9.9	—	灰オリーブ	
高針原	930	96-E-0994	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	9.2	9.6	11.0	159.1	黄灰	
高針原	931	96-E-1002	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	10.4	8.3	9.6	194.7	灰黄	
高針原	932	96-E-1001	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	12.2	8.8	9.1	301.2	灰白	
高針原	933	96-E-0996	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	10.2	8.6	9.8	—	暗灰黄	
高針原	934	96-E-1000	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	10.0	8.8	9.7	—	明黄褐	
高針原	935	96-E-0995	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	12.0	9.7	8.5	288.5	灰白	
高針原	936	96-E-1009	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	9.8	—	—	—	淡黄	
高針原	937	96-E-1005	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	9.8	—	—	—	灰	
高針原	938	96-E-1004	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	11.4	—	—	—	灰黄	
高針原	939	96-E-1010	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	10.2	—	—	—	灰白	
高針原	940	96-E-1011	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	—	9.0	—	—	灰	
高針原	941	96-E-1012	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	—	8.8	—	—	灰白	
高針原	942	96-E-1013	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	—	10.1	—	—	黄灰	
高針原	943	96-E-1022	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯A	—	14.3	—	—	灰	
高針原	944	96-E-0004	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	12.4	10.0	11.0	—	黄灰	
高針原	945	96-E-0999	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	13.4	9.4	10.0	—	灰	
高針原	946	96-E-0998	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	13.1	10.0	8.0	—	灰黄褐	
高針原	947	96-E-0001	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	10.8	8.4	7.1	159.3	灰	
高針原	948	96-E-1020	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	10.8	—	—	明黄褐	
高針原	949	96-E-1033	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	10.4	—	—	灰	
高針原	950	96-E-1031	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	8.8	—	—	灰	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	951	96-E-1021	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	10.8	—	—	灰	細口下
高針原	952	96-E-1018	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	10.4	—	—	灰	
高針原	953	96-E-1026	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	9.4	—	—	褐灰	
高針原	954	96-E-1032	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	9.4	—	—	灰	
高針原	955	96-E-1027	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	10.0	—	—	オリーブ黒	
高針原	956	96-E-1025	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	8.2	—	—	褐灰	
高針原	957	96-E-1035	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	8.2	—	—	黒	
高針原	958	96-E-1038	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	7.6	—	—	黄灰	
高針原	959	96-E-1034	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	7.4	—	—	灰褐	
高針原	960	96-E-1041	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯B	—	8.2	—	—	灰	
高針原	961	96-E-1043	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	15.0	9.8	9.6	—	灰	
高針原	962	96-E-1044	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	10.8	7.2	8.8	410.9	浅黄	
高針原	963	96-E-1045	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	11.4	7.4	8.4	—	緑灰	
高針原	964	96-E-1046	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	11.6	8.0	6.6	215.9	灰白	
高針原	965	96-E-1049	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	15.8	—	—	—	赤褐	
高針原	966	96-E-1050	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	12.6	—	—	—	灰白	
高針原	967	96-E-1054	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	13.8	—	—	—	灰	
高針原	968	96-E-1052	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	14.4	—	—	—	灰	
高針原	969	96-E-1048	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	14.0	—	—	—	暗灰黄	
高針原	970	96-E-1053	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	13.0	—	—	—	浅黄	
高針原	971	96-E-1051	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	14.2	—	—	—	灰	
高針原	972	96-E-1056	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	15.0	—	—	—	灰	
高針原	973	96-E-1055	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	9.8	—	—	—	灰黄	
高針原	974	96-E-1062	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	11.8	—	—	灰白	
高針原	975	96-E-1066	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	14.0	—	—	灰オリーブ	
高針原	976	96-E-1065	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	17.6	—	—	褐灰	
高針原	977	96-E-1058	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	7.8	—	—	灰白	
高針原	978	96-E-1061	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	9.6	—	—	緑灰	
高針原	979	96-E-1068	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	10.2	—	—	暗緑灰	
高針原	980	96-E-1067	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	8.6	—	—	灰	
高針原	981	96-E-1063	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	9.0	—	—	浅黄橙	
高針原	982	96-E-1059	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	9.0	—	—	褐	
高針原	983	96-E-1060	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯C	—	9.6	—	—	黒	
高針原	984	96-E-1047	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯	—	8.8	—	—	灰	
高針原	985	96-E-1069	灰層Ⅱ群	須恵器	高杯D	9.6	—	—	—	灰白	
高針原	986	96-E-1304	灰層Ⅱ群	須恵器	盤A	31.6	—	—	—	にぶい黄	
高針原	987	96-E-1303	灰層Ⅱ群	須恵器	盤A	20.8	—	—	—	灰	
高針原	988	96-E-1302	灰層Ⅱ群	須恵器	盤B	27.8	—	—	—	灰	
高針原	989	96-E-1361	灰層Ⅱ群	須恵器	盤C	29.3	24.8	4.7	—	にぶい黄橙	
高針原	990	96-E-1265	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	15.4	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	991	96-E-1264	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	11.0	—	—	—	灰白	
高針原	992	96-E-1263	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	12.8	—	—	—	灰	
高針原	993	96-E-1273	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	9.4	—	5.0	209.7	灰	
高針原	994	96-E-1275	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	10.2	—	5.2	260.4	淡黄	
高針原	995	96-E-1274	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	8.6	—	—	—	にぶい黄	
高針原	996	96-E-1270	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	9.0	—	—	—	灰	
高針原	997	96-E-1272	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	9.4	—	4.6	—	オリーブ灰	
高針原	998	96-E-1267	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	8.2	—	—	—	灰	
高針原	999	96-E-1266	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	8.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1000	96-E-1271	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢A	8.6	—	—	—	灰	
高針原	1001	96-E-1416	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	18.0	8.0	16.4	—	にぶい黄	
高針原	1002	96-E-1307	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	16.2	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1003	96-E-1305	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	16.6	—	—	—	浅黄	
高針原	1004	96-E-1306	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	15.4	—	—	—	オリーブ黄	
高針原	1005	96-E-1308	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	—	8.4	—	—	黄灰	
高針原	1006	96-E-1311	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	—	7.8	—	—	灰白	
高針原	1007	96-E-1310	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	—	8.4	—	—	灰黄	
高針原	1008	96-E-1309	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢B	—	8.1	—	—	灰	
高針原	1009	96-E-1312	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢C	24.0	—	—	—	にぶい褐	
高針原	1010	96-E-1313	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢C	—	—	—	—	灰白	
高針原	1011	96-E-1216	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰白	
高針原	1012	96-E-1217	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰	
高針原	1013	96-E-1218	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰白	
高針原	1014	96-E-1219	灰層Ⅱ群	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰白	
高針原	1015	96-E-1280	灰層Ⅱ群	須恵器	台付長頸瓶	—	—	—	—	灰	
高針原	1016	96-E-1237	灰層Ⅱ群	須恵器	台付長頸瓶	5.4	—	—	—	灰白	
高針原	1017	96-E-1281	灰層Ⅱ群	須恵器	台付長頸瓶	—	—	—	—	灰白	
高針原	1018	96-E-1427	灰層Ⅱ群	須恵器	台付長頸瓶	—	13.0	—	—	灰	
高針原	1019	96-E-1424	灰層Ⅱ群	須恵器	台付長頸瓶	—	11.2	—	—	にぶい黄	
高針原	1020	96-E-1426	灰層Ⅱ群	須恵器	台付長頸瓶	—	11.2	—	—	灰	
高針原	1021	96-E-1233	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	7.6	—	—	—	黄褐	
高針原	1022	96-E-1227	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	8.0	—	—	—	灰	
高針原	1023	96-E-1231	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	7.6	—	—	—	灰	
高針原	1024	96-E-1225	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	5.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1025	96-E-1230	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	8.0	—	—	—	灰白	
高針原	1026	96-E-1228	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	7.0	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1027	96-E-1232	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	8.5	—	—	—	灰	
高針原	1028	96-E-1226	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	9.8	—	—	—	オリーブ	
高針原	1029	96-E-1224	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶A	8.8	—	—	—	灰	
高針原	1030	96-E-1234	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	8.6	—	—	—	灰白灰白	
高針原	1031	96-E-0207	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	8.8	—	—	—	灰	
高針原	1032	96-E-1235	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	6.2	—	—	—	灰	
高針原	1033	96-E-1229	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	7.8	—	—	—	灰	
高針原	1034	96-E-0208	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶B	8.0	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1035	96-E-1428	灰層Ⅱ群	須恵器	フラスコ形瓶	—	—	—	—	灰白	
高針原	1036	96-E-1245	灰層Ⅱ群	須恵器	平瓶A	6.4	—	—	—	灰白	
高針原	1037	96-E-1244	灰層Ⅱ群	須恵器	平瓶A	5.9	—	—	—	灰白	
高針原	1038	96-E-1241	灰層Ⅱ群	須恵器	平瓶A	7.4	—	—	—	灰白	
高針原	1039	96-E-1238	灰層Ⅱ群	須恵器	平瓶A	9.4	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1040	96-E-1236	灰層Ⅱ群	須恵器	平瓶B	6.5	—	—	—	灰白	
高針原	1041	96-E-1243	灰層Ⅱ群	須恵器	平瓶	—	15.0	—	—	淡黄	
高針原	1042	96-E-1277	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	16.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1043	96-E-1259	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	10.2	—	—	—	灰黄	
高針原	1044	96-E-1256	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	10.0	—	—	—	黄灰	
高針原	1045	96-E-1262	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	11.4	—	—	—	灰白	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1046	96-E-1254	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	14.2	—	—	—	灰白	細口下
高針原	1047	96-E-1260	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	8.2	4.8	6.9	330.6	灰白	
高針原	1048	96-E-0205	灰層Ⅱ群	須恵器	短頸壺	5.2	—	—	—	灰	
高針原	1049	96-E-1367	灰層Ⅱ群	須恵器	—	—	—	—	—	灰白	
高針原	1050	96-E-1431	灰層Ⅱ群	須恵器	—	—	—	—	—	灰	
高針原	1051	96-E-1368	灰層Ⅱ群	須恵器	—	—	—	—	—	灰褐	
高針原	1052	96-E-1319	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶A	10.8	—	—	—	灰褐	
高針原	1053	96-E-1315	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶A	11.2	—	—	—	灰白	
高針原	1054	96-E-1318	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶A	12.0	—	—	—	灰	
高針原	1055	96-E-1320	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶B	11.0	—	—	16901.9	黄灰	
高針原	1056	96-E-1314	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶B	10.4	—	—	—	灰白	
高針原	1057	96-E-1317	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶B	11.8	—	—	—	褐灰	
高針原	1058	96-E-1429	灰層Ⅱ群	須恵器	横瓶	13.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1059	96-E-1287	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1060	96-E-1288	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.0	—	—	—	灰	
高針原	1061	96-E-1289	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	8.8	—	—	—	浅黄	
高針原	1062	96-E-1291	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.8	—	—	—	灰	
高針原	1063	96-E-1290	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.4	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1064	96-E-1484	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.2	—	—	—	灰白	
高針原	1065	96-E-1283	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.4	—	—	—	赤橙	
高針原	1066	96-E-1282	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.6	—	—	—	灰	
高針原	1067	96-E-1209	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	9.2	—	—	—	灰	
高針原	1068	96-E-1285	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	8.8	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1069	96-E-1284	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	8.6	—	—	—	灰	
高針原	1070	96-E-0010	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	黒褐	
高針原	1071	96-E-1299	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1072	96-E-1292	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	緑灰	
高針原	1073	96-E-1294	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰	
高針原	1074	96-E-1293	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰白	
高針原	1075	96-E-1295	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰白	
高針原	1076	96-E-1296	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1077	96-E-1485	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	明黄褐	
高針原	1078	96-E-1297	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウ	—	4.8	—	—	灰オリーブ	
高針原	1079	96-E-1298	灰層Ⅱ群	須恵器	ハンウB	—	4.2	—	—	浅黄橙	
高針原	1080	96-E-1301	灰層Ⅱ群	須恵器	—	—	—	—	—	明黄褐	
高針原	1081	96-E-1300	灰層Ⅱ群	須恵器	—	—	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1082	96-E-1445	灰層Ⅱ群	須恵器	甕A	52.0	—	112.8	254537.5	橙	
高針原	1083	96-E-0210	灰層Ⅱ群	須恵器	甕A	39.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1084	96-E-0211	灰層Ⅱ群	須恵器	甕A	30.8	—	—	—	淡黄	
高針原	1085	96-E-0213	灰層Ⅱ群	須恵器	甕A	38.0	—	—	—	灰白	
高針原	1086	96-E-0212	灰層Ⅱ群	須恵器	甕A	38.2	—	—	—	浅黄	
高針原	1087	96-E-1248	灰層Ⅱ群	須恵器	甕B	25.6	—	—	—	灰	
高針原	1088	96-E-1250	灰層Ⅱ群	須恵器	甕B	—	—	—	—	黄灰	
高針原	1089	96-E-0202	灰層Ⅱ群	須恵器	甕C	18.0	—	—	—	灰白	
高針原	1090	96-E-1252	灰層Ⅱ群	須恵器	甕C	16.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1091	96-E-1378	灰層Ⅱ群	須恵器	陶鉢	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1092	96-E-1377	灰層Ⅱ群	須恵器	陶鉢	—	—	—	—	灰褐	
高針原	1093	96-E-1435	灰層Ⅱ群	須恵器	—	6.0	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1094	96-E-1434	灰層Ⅱ群	須恵器	—	—	8.2	—	—	灰オリーブ	
高針原	1095	96-E-1437	灰層Ⅱ群	須恵器	—	6.2	—	—	—	黄灰	
高針原	1096	96-E-1486	灰層Ⅱ群	須恵器	—	23.6	21.6	23.8	—	オリーブ灰	
高針原	1097	96-E-0812	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	19.4	—	4.6	—	灰白	
高針原	1098	96-E-0814	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	16.4	—	3.9	—	灰白	
高針原	1099	96-E-0815	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	16.4	—	3.8	—	灰オリーブ	
高針原	1100	96-E-0819	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	11.6	—	3.9	—	にぶい黄	
高針原	1101	96-E-1372	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	12.4	—	3.6	—	灰	
高針原	1102	96-E-1374	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	12.0	—	3.0	—	灰白	
高針原	1103	96-E-0817	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	10.8	—	2.8	—	黄灰	
高針原	1104	96-E-0813	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	13.4	—	2.1	—	にぶい黄	
高針原	1105	96-E-0816	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	11.4	—	2.2	—	灰オリーブ	
高針原	1106	96-E-0818	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	10.8	—	2.7	—	灰白	
高針原	1107	96-E-0820	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	14.8	—	—	—	暗灰褐	
高針原	1108	96-E-0826	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	14.6	—	—	—	灰	
高針原	1109	96-E-0824	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	10.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1110	96-E-0823	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	10.8	—	—	—	灰	
高針原	1111	96-E-0828	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	11.4	—	—	—	灰	
高針原	1112	96-E-0831	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋B	11.2	—	2.6	—	橙	
高針原	1113	96-E-0830	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋B	10.6	—	2.9	—	灰	
高針原	1114	96-E-0017	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋B	11.4	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1115	96-E-1373	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋B	11.2	—	2.5	—	にぶい黄	
高針原	1116	96-E-0837	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋B	10.6	—	—	—	灰	
高針原	1117	96-E-0832	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋C	10.4	—	3.4	—	黄灰	
高針原	1118	96-E-0834	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋	11.3	—	—	—	灰白	
高針原	1119	96-E-0836	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋	11.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1120	96-E-1363	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋D	7.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1121	96-E-1364	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋D	8.8	—	—	—	灰	
高針原	1122	96-E-0841	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋G	29.0	—	2.7	—	灰	
高針原	1123	96-E-0840	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋G	—	—	—	—	灰白	
高針原	1124	96-E-0930	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	12.8	—	4.2	—	灰オリーブ灰	
高針原	1125	96-E-0699	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.7	—	4.1	—	灰黄	
高針原	1126	96-E-0694	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.8	—	3.6	—	灰黄	
高針原	1127	96-E-0686	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.6	—	—	—	暗灰褐	
高針原	1128	96-E-0685	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.8	—	3.4	—	灰白	
高針原	1129	96-E-0692	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.0	—	3.8	—	にぶい橙	
高針原	1130	96-E-0929	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.4	—	3.6	—	灰白	
高針原	1131	96-E-0921	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.4	—	4.1	—	灰黄	
高針原	1132	96-E-0681	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.7	—	3.7	—	黄灰	
高針原	1133	96-E-0927	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.6	—	4.1	—	灰	
高針原	1134	96-E-0682	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.2	—	3.8	—	灰	
高針原	1135	96-E-0924	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.4	—	3.8	—	灰	
高針原	1136	96-E-0928	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.2	—	3.9	—	灰	
高針原	1137	96-E-0926	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.4	—	3.7	—	灰黄	
高針原	1138	96-E-0710	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.2	—	3.2	—	灰	
高針原	1139	96-E-1417	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.8	7.3	3.5	—	灰	
高針原	1140	96-E-0688	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.4	—	3.9	—	暗灰黄	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1141	96-E-0923	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.6	—	4.1	—	にぶい黄	細口下
高針原	1142	96-E-0925	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.4	—	3.7	—	灰黄褐	
高針原	1143	96-E-0689	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.8	—	4.0	—	にぶい赤褐	
高針原	1144	96-E-0696	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.3	—	3.2	—	灰	
高針原	1145	96-E-0706	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.4	—	—	—	淡黄	
高針原	1146	96-E-0679	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.2	—	3.7	—	橙	
高針原	1147	96-E-0014	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1148	96-E-0684	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.6	—	3.8	—	灰	
高針原	1149	96-E-0680	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.5	—	3.1	—	黄褐	
高針原	1150	96-E-0690	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	9.0	—	3.7	—	黄橙	
高針原	1151	96-E-0703	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.2	—	3.2	—	灰	
高針原	1152	96-E-0922	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.7	—	3.8	—	灰	
高針原	1153	96-E-0698	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.4	—	3.5	—	にぶい黄	
高針原	1154	96-E-0702	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	9.6	—	3.4	—	灰オリーブ	
高針原	1155	96-E-0697	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.9	—	3.1	—	灰オリーブ	
高針原	1156	96-E-0709	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.2	—	—	—	灰	
高針原	1157	96-E-0687	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	9.6	—	3.2	—	灰オリーブ	
高針原	1158	96-E-0701	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	9.2	—	2.6	—	灰黄	
高針原	1159	96-E-0708	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	9.6	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1160	96-E-0683	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.8	—	4.1	—	浅黄	
高針原	1161	96-E-0691	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	11.8	—	4.2	—	—	
高針原	1162	96-E-0700	灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋H	10.2	—	3.4	—	灰黄	
高針原	1163	96-E-0759	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	13.6	—	6.4	—	灰	
高針原	1164	96-E-0754	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	15.0	—	3.6	432.5	浅黄	
高針原	1165	96-E-0757	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	12.4	—	6.0	—	暗灰黄	
高針原	1166	96-E-0755	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	10.8	—	3.9	280.4	灰黄褐	
高針原	1167	96-E-0762	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	11.6	—	—	—	灰	
高針原	1168	96-E-0761	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	11.4	—	4.3	—	黒褐	
高針原	1169	96-E-0771	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	10.8	—	5.0	—	にぶい黄橙	
高針原	1170	96-E-0760	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	10.2	—	4.2	—	橙	
高針原	1171	96-E-0769	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	10.6	—	—	—	明黄褐	
高針原	1172	96-E-0772	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	11.2	—	4.3	—	灰	
高針原	1173	96-E-0768	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	10.4	—	4.4	—	にぶい黄橙	
高針原	1174	96-E-0767	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯A	9.8	—	—	—	褐灰	
高針原	1175	96-E-0747	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	19.6	13.6	5.0	—	灰白	
高針原	1176	96-E-0749	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	16.8	12.6	4.8	—	褐灰	
高針原	1177	96-E-0746	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	16.6	12.6	4.5	—	にぶい黄	
高針原	1178	96-E-0745	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	18.2	14.4	4.4	—	灰	
高針原	1179	96-E-0743	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	16.4	12.4	4.1	521.8	灰褐	
高針原	1180	96-E-0748	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	15.4	11.0	3.4	—	灰	
高針原	1181	96-E-0750	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	16.8	12.4	4.1	—	灰黄	
高針原	1182	96-E-0751	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	17.0	13.4	3.9	—	浅黄橙	
高針原	1183	96-E-0744	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯B	14.4	10.4	4.5	—	灰	
高針原	1184	96-E-0766	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯G	10.4	—	3.9	—	灰黄	
高針原	1185	96-E-0770	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯G	10.6	—	4.2	—	黄灰	
高針原	1186	96-E-0764	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯G	9.6	—	—	—	暗緑灰	
高針原	1187	96-E-0773	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯G	9.2	—	5.5	—	灰	
高針原	1188	96-E-0711	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.2	—	4.1	208.2	灰褐	
高針原	1189	96-E-0712	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.7	—	4.0	—	暗緑灰	
高針原	1190	96-E-0717	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.4	—	3.7	221.1	灰	
高針原	1191	96-E-0716	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.6	—	3.8	199.2	灰	
高針原	1192	96-E-0713	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.7	—	3.9	200.8	灰	
高針原	1193	96-E-0726	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.4	—	—	—	青灰	
高針原	1194	96-E-0722	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1195	96-E-0719	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.6	—	3.5	—	黄灰	
高針原	1196	96-E-1418	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.5	—	4.2	200.3	オリーブ灰	
高針原	1197	96-E-0015	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.9	—	—	176.7	灰	
高針原	1198	96-E-0991	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.0	—	3.6	—	灰	
高針原	1199	96-E-0736	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.0	—	—	—	黒褐	
高針原	1200	96-E-1419	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.4	—	4.2	—	灰	
高針原	1201	96-E-0725	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.8	—	—	—	灰	
高針原	1202	96-E-0729	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.2	—	—	—	灰黄	
高針原	1203	96-E-0721	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.6	—	—	—	灰	
高針原	1204	96-E-0723	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.8	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1205	96-E-0737	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.8	—	—	—	灰白	
高針原	1206	96-E-0739	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.0	—	—	—	オリーブ黒	
高針原	1207	96-E-0735	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.2	—	—	—	灰	
高針原	1208	96-E-0727	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.5	—	—	—	黄灰	
高針原	1209	96-E-0714	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.4	—	3.6	—	灰	
高針原	1210	96-E-0738	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.9	—	—	—	黄灰	
高針原	1211	96-E-0992	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.2	—	3.0	—	灰黄	
高針原	1212	96-E-0720	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.8	—	2.9	—	オリーブ黒	
高針原	1213	96-E-0718	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.4	—	3.2	—	灰	
高針原	1214	96-E-0715	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.6	—	3.2	—	褐灰	
高針原	1215	96-E-0724	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	8.0	—	3.4	—	褐灰	
高針原	1216	96-E-0993	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.4	—	—	—	褐灰	
高針原	1217	96-E-0742	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.6	—	—	—	暗青灰	
高針原	1218	96-E-0728	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	10.0	—	—	—	灰白	
高針原	1219	96-E-0733	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯H	9.2	—	—	—	青灰	
高針原	1220	96-E-0858	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯J	8.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1221	96-E-0918	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯J	8.4	—	—	—	褐灰	
高針原	1222	96-E-0912	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯J	8.8	—	—	—	灰	
高針原	1223	96-E-0857	灰層Ⅱ群上層	須恵器	杯J	10.5	—	—	—	灰黄	
高針原	1224	96-E-0780	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.8	8.8	10.2	—	灰黄	
高針原	1225	96-E-0782	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.6	9.6	8.6	162.6	灰黄	
高針原	1226	96-E-0784	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.1	7.7	9.8	137.5	暗赤灰	
高針原	1227	96-E-0013	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	12.0	9.0	8.8	282.2	にぶい黄	
高針原	1228	96-E-0776	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	11.8	9.0	8.4	—	灰	
高針原	1229	96-E-0778	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	9.2	8.2	8.9	140.2	にぶい黄	
高針原	1230	96-E-0774	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.0	7.4	8.9	—	にぶい橙	
高針原	1231	96-E-0781	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.2	8.6	9.0	183.8	灰黄	
高針原	1232	96-E-0787	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1233	96-E-0786	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	10.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1234	96-E-0777	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	12.0	—	—	—	褐灰	
高針原	1235	96-E-0803	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	—	8.3	—	—	灰	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1236	96-E-0804	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	—	11.5	—	—	黄灰	細口下
高針原	1237	96-E-0793	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	—	—	7.7	—	灰	
高針原	1238	96-E-0792	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	—	10.0	—	—	灰	
高針原	1239	96-E-0791	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯A	—	9.2	—	—	灰	
高針原	1240	96-E-0775	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	12.2	8.0	8.3	265.8	淡黄	
高針原	1241	96-E-0783	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	13.0	7.4	6.7	—	灰黄	
高針原	1242	96-E-0790	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	12.4	—	—	—	灰	
高針原	1243	96-E-0789	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	16.0	—	—	—	灰	
高針原	1244	96-E-0796	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	—	9.6	—	—	灰	
高針原	1245	96-E-0794	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	—	—	6.5	—	明オリーブ灰	
高針原	1246	96-E-0802	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	—	7.4	—	—	灰白	
高針原	1247	96-E-0799	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯B	—	—	8.2	—	灰	
高針原	1248	96-E-1422	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	14.6	9.8	9.9	675.9	灰	
高針原	1249	96-E-0779	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	11.4	8.2	7.5	—	黄灰	
高針原	1250	96-E-0785	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	15.0	—	—	—	黒褐	
高針原	1251	96-E-0788	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	14.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1252	96-E-0765	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	14.0	—	4.3	—	オリーブ灰	
高針原	1253	96-E-0808	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	14.8	—	—	黒	
高針原	1254	96-E-0801	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	10.2	—	—	灰オリーブ	
高針原	1255	96-E-0810	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	10.2	—	—	オリーブ黒	
高針原	1256	96-E-0809	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	10.0	—	—	灰	
高針原	1257	96-E-0807	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	10.0	—	—	浅黄	
高針原	1258	96-E-0806	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	6.6	—	—	暗灰黄	
高針原	1259	96-E-0805	灰層Ⅱ群上層	須恵器	高杯C	—	8.1	—	—	灰褐	
高針原	1260	96-E-0876	灰層Ⅱ群上層	須恵器	盤A	32.8	28.0	6.9	—	灰白	
高針原	1261	96-E-0753	灰層Ⅱ群上層	須恵器	盤A	28.2	22.8	3.1	—	灰白	
高針原	1262	96-E-1438	灰層Ⅱ群上層	須恵器	盤B	—	10.0	—	—	灰白	
高針原	1263	96-E-0752	灰層Ⅱ群上層	須恵器	盤C	25.8	22.8	5.5	1768.7	黄灰	
高針原	1264	96-E-0855	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	12.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1265	96-E-0856	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	13.7	—	—	—	灰	
高針原	1266	96-E-0911	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	12.2	—	—	—	オリーブ黄	
高針原	1267	96-E-0915	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	12.2	—	—	—	灰褐	
高針原	1268	96-E-0859	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	8.6	—	—	—	灰	
高針原	1269	96-E-0860	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	7.6	—	—	—	灰白	
高針原	1270	96-E-1362	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	9.8	—	—	—	灰	
高針原	1271	96-E-0862	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	8.6	—	—	—	灰白	
高針原	1272	96-E-0914	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	7.6	—	—	—	灰	
高針原	1273	96-E-0913	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	8.4	—	—	—	灰	
高針原	1274	96-E-0861	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢A	7.8	—	—	130.1	暗灰黄	
高針原	1275	96-E-0865	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢B	16.0	—	—	—	オリーブ黒	
高針原	1276	96-E-0867	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢B	—	8.9	—	—	灰白	
高針原	1277	96-E-0866	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢B	—	9.5	—	—	灰白	
高針原	1278	96-E-0868	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢B	—	8.4	—	—	灰オリーブ	
高針原	1279	96-E-0872	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢C	—	—	—	—	灰白	
高針原	1280	96-E-0874	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢C	—	—	—	—	灰	
高針原	1281	96-E-0873	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢C	—	—	—	—	灰	
高針原	1282	96-E-1365	灰層Ⅱ群上層	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰	
高針原	1283	96-E-0871	灰層Ⅱ群上層	須恵器	台付長頸瓶	12.0	7.8	27.1	—	灰オリーブ	
高針原	1284	96-E-0870	灰層Ⅱ群上層	須恵器	台付長頸瓶	—	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1285	96-E-0869	灰層Ⅱ群上層	須恵器	台付長頸瓶	—	—	—	—	灰白	
高針原	1286	96-E-0618	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	7.7	—	20.0	—	灰白	
高針原	1287	96-E-0891	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	8.4	—	—	—	灰	
高針原	1288	96-E-0887	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	8.0	—	—	—	灰白	
高針原	1289	96-E-0890	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	7.8	—	—	—	灰	
高針原	1290	96-E-0892	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	8.0	—	—	—	灰	
高針原	1291	96-E-0889	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	7.0	—	—	—	灰	
高針原	1292	96-E-0886	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶A	7.5	—	—	—	黒褐	
高針原	1293	96-E-0885	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶B	11.2	—	—	—	黄褐	
高針原	1294	96-E-0883	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶B	8.2	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1295	96-E-0882	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶B	10.6	—	—	—	黄灰	
高針原	1296	96-E-0884	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶B	9.2	—	—	—	暗赤褐	
高針原	1297	96-E-0895	灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスコ形瓶	—	9.8	—	—	灰白	
高針原	1298	96-E-0877	灰層Ⅱ群上層	須恵器	平瓶A	7.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1299	96-E-0880	灰層Ⅱ群上層	須恵器	平瓶A	6.3	—	—	—	灰白	
高針原	1300	96-E-0881	灰層Ⅱ群上層	須恵器	平瓶A	5.4	—	—	—	灰	
高針原	1301	96-E-0879	灰層Ⅱ群上層	須恵器	平瓶A	6.0	—	—	—	灰白	
高針原	1302	96-E-1483	灰層Ⅱ群上層	須恵器	平瓶A	8.0	—	—	—	オリーブ黄	
高針原	1303	96-E-0849	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	11.8	—	—	—	灰白	
高針原	1304	96-E-0852	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	10.8	—	—	—	オリーブ黒	
高針原	1305	96-E-0850	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	10.0	—	—	—	にぶい褐	
高針原	1306	96-E-0851	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	10.0	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1307	96-E-0917	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	15.4	—	—	—	にぶい赤褐	
高針原	1308	96-E-0916	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	13.6	—	—	—	灰	
高針原	1309	96-E-0910	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	9.6	—	—	—	灰	
高針原	1310	96-E-0854	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	7.0	—	—	—	オリーブ黒	
高針原	1311	96-E-0908	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	7.6	—	—	—	灰白	
高針原	1312	96-E-0909	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	6.0	—	—	—	灰	
高針原	1313	96-E-0853	灰層Ⅱ群上層	須恵器	短頸壺	8.6	—	—	—	褐灰	
高針原	1314	96-E-1366	灰層Ⅱ群上層	須恵器	—	—	—	—	—	灰	
高針原	1315	96-E-0900	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	11.2	—	—	—	緑灰	
高針原	1316	96-E-0902	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	12.2	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1317	96-E-0899	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	11.6	—	—	—	明褐灰	
高針原	1318	96-E-0901	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	10.1	—	—	—	にぶい赤褐	
高針原	1319	96-E-0903	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	10.2	—	—	—	灰	
高針原	1320	96-E-0898	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	12.5	—	—	—	灰	
高針原	1321	96-E-0905	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	10.6	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1322	96-E-0904	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶A	10.8	—	—	—	灰	
高針原	1323	96-E-0906	灰層Ⅱ群上層	須恵器	横瓶B	11.6	—	—	—	灰	
高針原	1324	96-E-1420	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	9.0	—	10.1	194.9	淡黄	
高針原	1325	96-E-1421	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	9.4	—	10.8	203.4	黄灰	
高針原	1326	96-E-0848	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	9.2	—	—	—	黄灰	
高針原	1327	96-E-0845	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	9.5	—	—	—	黄灰	
高針原	1328	96-E-0846	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	9.8	—	—	—	にぶい橙	
高針原	1329	96-E-0847	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	8.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1330	96-E-0842	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰黄	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1331	96-E-0844	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰黄	細口下
高針原	1332	96-E-0843	灰層Ⅱ群上層	須恵器	ハンウB	—	—	4.2	—	黄灰	
高針原	1333	96-E-1449	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕A	38.2	—	—	—	灰	
高針原	1334	96-E-1448	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕A	24.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1335	96-E-1446	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕A	34.0	—	—	—	にぶい黄	
高針原	1336	96-E-1447	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕A	31.6	—	—	—	青灰	
高針原	1337	96-E-1460	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕A	30.0	—	—	—	黄灰	
高針原	1338	96-E-1461	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕A	44.0	—	—	—	灰	
高針原	1339	96-E-1423	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕B	—	—	—	—	にぶい黄	
高針原	1340	96-E-0897	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕B	—	—	—	—	オリーブ黒	
高針原	1341	96-E-0863	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕C	15.4	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1342	96-E-0864	灰層Ⅱ群上層	須恵器	甕C	15.0	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1343	96-E-1379	灰層Ⅱ群上層	須恵器	陶鐘	—	—	—	—	灰白	
高針原	1344	96-E-0661	灰層Ⅱ群中層	須恵器	蓋H	11.8	—	—	—	灰	
高針原	1345	96-E-0658	灰層Ⅱ群中層	須恵器	蓋H	11.0	—	4.1	—	灰	
高針原	1346	96-E-0660	灰層Ⅱ群中層	須恵器	蓋H	11.2	—	3.5	—	黄灰	
高針原	1347	96-E-0659	灰層Ⅱ群中層	須恵器	蓋H	11.0	—	3.5	—	黄灰	
高針原	1348	96-E-0657	灰層Ⅱ群中層	須恵器	蓋H	9.1	—	4.4	—	暗灰黄	
高針原	1349	96-E-0678	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	9.7	—	4.1	209.8	灰白	
高針原	1350	96-E-0651	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	9.8	—	4.0	—	にぶい黄橙	
高針原	1351	96-E-0654	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	10.1	—	3.8	232.0	灰	
高針原	1352	96-E-0652	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	9.0	—	3.4	152.7	灰	
高針原	1353	96-E-0655	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	9.3	—	3.5	—	浅黄	
高針原	1354	96-E-0653	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	9.0	—	3.2	—	オリーブ黒	
高針原	1355	96-E-0656	灰層Ⅱ群中層	須恵器	杯H	9.3	—	3.0	—	灰白	
高針原	1356	96-E-0677	灰層Ⅱ群中層	須恵器	高杯C	12.0	—	—	—	浅黄橙	
高針原	1357	96-E-0676	灰層Ⅱ群中層	須恵器	高杯C	—	9.8	—	—	橙	
高針原	1358	96-E-0673	灰層Ⅱ群中層	須恵器	鉢A	13.2	—	—	—	灰白	
高針原	1359	96-E-0674	灰層Ⅱ群中層	須恵器	鉢A	9.8	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1360	96-E-0675	灰層Ⅱ群中層	須恵器	鉢A	6.8	—	3.8	—	灰黄褐	
高針原	1361	96-E-0672	灰層Ⅱ群中層	須恵器	プラスチック形瓶A	7.4	—	—	—	灰黄	
高針原	1362	96-E-0669	灰層Ⅱ群中層	須恵器	平瓶A	4.4	—	—	—	灰黄	
高針原	1363	96-E-0671	灰層Ⅱ群中層	須恵器	平瓶A	7.0	—	—	—	黒褐	
高針原	1364	96-E-0670	灰層Ⅱ群中層	須恵器	平瓶A	5.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1365	96-E-0665	灰層Ⅱ群中層	須恵器	横瓶A	11.1	—	—	—	黄灰	
高針原	1366	96-E-0666	灰層Ⅱ群中層	須恵器	横瓶A	10.2	—	—	—	灰	
高針原	1367	96-E-0667	灰層Ⅱ群中層	須恵器	横瓶B	11.2	—	—	—	灰	
高針原	1368	96-E-0668	灰層Ⅱ群中層	須恵器	横瓶A	11.0	—	—	—	黒	
高針原	1369	96-E-1451	灰層Ⅱ群中層	須恵器	ハンウ	9.2	—	—	—	灰	
高針原	1370	96-E-0662	灰層Ⅱ群中層	須恵器	ハンウ	8.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1371	96-E-0663	灰層Ⅱ群中層	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰	
高針原	1372	96-E-0664	灰層Ⅱ群中層	須恵器	—	—	—	—	—	オリーブ黒	
高針原	1373	96-E-1444	灰層Ⅱ群中層	須恵器	短頸壺	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1374	96-E-1371	灰層Ⅱ群中層	須恵器	—	—	—	—	—	黒	
高針原	1375	96-E-1450	灰層Ⅱ群中層	須恵器	甕A	—	—	—	—	灰	
高針原	1376	96-E-0619	灰層Ⅱ群下層	須恵器	蓋H	10.6	—	4.3	—	灰	
高針原	1377	96-E-0620	灰層Ⅱ群下層	須恵器	蓋H	10.8	—	3.9	—	灰黄	
高針原	1378	96-E-0621	灰層Ⅱ群下層	須恵器	蓋H	10.6	—	3.9	—	浅黄	
高針原	1379	96-E-0622	灰層Ⅱ群下層	須恵器	蓋H	10.4	—	3.9	—	灰	
高針原	1380	96-E-0623	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯G	10.4	—	5.1	268.8	灰	
高針原	1381	96-E-0625	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯H	10.2	—	3.5	—	灰	
高針原	1382	96-E-0627	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯H	9.4	—	—	—	灰	
高針原	1383	96-E-0624	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯H	9.5	—	3.3	158.5	オリーブ黒	
高針原	1384	96-E-0626	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯H	9.2	—	3.3	—	オリーブ黒	
高針原	1385	96-E-0628	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯H	10.4	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1386	96-E-0629	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯H	9.6	—	3.4	165.4	にぶい黄褐	
高針原	1387	96-E-0643	灰層Ⅱ群下層	須恵器	杯J	11.0	—	—	—	灰白	
高針原	1388	96-E-1376	灰層Ⅱ群下層	須恵器	高杯A	17.2	—	—	—	灰	
高針原	1389	96-E-1482	灰層Ⅱ群下層	須恵器	高杯A	17.0	—	—	—	灰	
高針原	1390	96-E-0646	灰層Ⅱ群下層	須恵器	高杯A	—	8.7	—	—	灰黄褐	
高針原	1391	96-E-0648	灰層Ⅱ群下層	須恵器	高杯C	13.2	—	—	—	灰黄	
高針原	1392	96-E-0644	灰層Ⅱ群下層	須恵器	高杯C	—	11.9	—	—	にぶい黄	
高針原	1393	96-E-0645	灰層Ⅱ群下層	須恵器	高杯C	—	9.8	—	—	赤橙	
高針原	1394	96-E-0642	灰層Ⅱ群下層	須恵器	鉢A	8.6	—	5.3	—	黄灰	
高針原	1395	96-E-0638	灰層Ⅱ群下層	須恵器	プラスチック形瓶A	8.9	—	—	—	灰	
高針原	1396	96-E-0641	灰層Ⅱ群下層	須恵器	プラスチック形瓶A	8.4	—	—	—	灰黄	
高針原	1397	96-E-0640	灰層Ⅱ群下層	須恵器	プラスチック形瓶A	6.4	—	—	—	灰	
高針原	1398	96-E-0639	灰層Ⅱ群下層	須恵器	プラスチック形瓶A	7.0	—	—	—	灰	
高針原	1399	96-E-0634	灰層Ⅱ群下層	須恵器	横瓶A	11.0	—	—	—	にぶい黄	
高針原	1400	96-E-0635	灰層Ⅱ群下層	須恵器	横瓶A	11.2	—	—	—	灰	
高針原	1401	96-E-0636	灰層Ⅱ群下層	須恵器	横瓶A	10.0	—	—	—	灰白	
高針原	1402	96-E-0632	灰層Ⅱ群下層	須恵器	ハンウ	7.8	—	—	—	灰黄褐	
高針原	1403	96-E-0633	灰層Ⅱ群下層	須恵器	ハンウ	7.8	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1404	96-E-0631	灰層Ⅱ群下層	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	灰	
高針原	1405	96-E-0630	灰層Ⅱ群下層	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	浅黄	
高針原	1406	96-E-0637	灰層Ⅱ群下層	須恵器	提瓶	11.8	—	—	—	灰	
高針原	1407	96-E-0650	灰層Ⅱ群下層	須恵器	—	—	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1408	96-E-0448	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	22.0	—	—	—	灰オリーブ灰	
高針原	1409	96-E-0445	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	21.4	—	—	—	灰黄褐	
高針原	1410	96-E-0561	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	17.9	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1411	96-E-0446	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	17.0	—	—	—	灰	
高針原	1412	96-E-0447	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	16.4	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1413	96-E-0562	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋A	10.3	—	—	—	灰白	
高針原	1414	96-E-0449	灰層Ⅲ群	須恵器	蓋	10.8	—	—	—	灰	
高針原	1415	96-E-0440	灰層Ⅲ群	須恵器	杯A	11.8	—	—	—	灰白	
高針原	1416	96-E-0441	灰層Ⅲ群	須恵器	杯A	11.8	—	—	—	灰	
高針原	1417	96-E-0439	灰層Ⅲ群	須恵器	杯A	12.4	—	—	—	灰	
高針原	1418	96-E-0438	灰層Ⅲ群	須恵器	杯B	17.6	13.4	4.8	—	黄灰	
高針原	1419	96-E-0437	灰層Ⅲ群	須恵器	杯B	14.8	12.0	3.9	—	灰白	
高針原	1420	96-E-0436	灰層Ⅲ群	須恵器	杯B	14.4	9.4	4.6	—	灰オリーブ	
高針原	1421	96-E-0435	灰層Ⅲ群	須恵器	杯B	12.8	9.6	3.9	—	灰	
高針原	1422	96-E-0557	灰層Ⅲ群	須恵器	杯B	—	12.6	—	—	明オリーブ灰	
高針原	1423	96-E-0453	灰層Ⅲ群	須恵器	杯	—	—	—	—	浅黄	
高針原	1424	96-E-0444	灰層Ⅲ群	須恵器	杯H	9.6	—	3.3	179.9	オリーブ灰	
高針原	1425	96-E-0558	灰層Ⅲ群	須恵器	杯H	8.9	—	—	—	浅黄	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1426	96-E-0442	灰層Ⅲ群	須恵器	杯H	8.4	—	2.5	—	灰	細口下
高針原	1427	96-E-0443	灰層Ⅲ群	須恵器	杯H	8.0	—	2.7	—	にぶい橙	
高針原	1428	96-E-0451	灰層Ⅲ群	須恵器	高杯B	11.6	—	—	153.4	灰	
高針原	1429	96-E-0450	灰層Ⅲ群	須恵器	高杯B	—	8.8	—	—	灰	
高針原	1430	96-E-0452	灰層Ⅲ群	須恵器	高杯B	—	5.9	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1431	96-E-0563	灰層Ⅲ群	須恵器	高杯B	—	7.8	—	—	灰黄	
高針原	1432	96-E-0560	灰層Ⅲ群	須恵器	鉢A	8.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1433	96-E-0565	灰層Ⅲ群	須恵器	フラスコ形瓶B	8.5	—	—	—	にぶい橙	
高針原	1434	96-E-0566	灰層Ⅲ群	須恵器	フラスコ形瓶B	8.5	—	—	—	灰	
高針原	1435	96-E-0458	灰層Ⅲ群	須恵器	平瓶A	8.6	—	—	—	緑灰	
高針原	1436	96-E-0457	灰層Ⅲ群	須恵器	横瓶A	13.0	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1437	96-E-0456	灰層Ⅲ群	須恵器	横瓶A	10.0	—	—	—	灰白	
高針原	1438	96-E-0564	灰層Ⅲ群	須恵器	ハソウ	7.8	—	—	—	灰	
高針原	1439	96-E-0567	灰層Ⅲ群	須恵器	壺A	25.0	—	—	—	灰褐	
高針原	1440	96-E-0460	灰層Ⅲ群	須恵器	壺A	—	—	—	—	灰白	
高針原	1441	96-E-0461	灰層Ⅲ群	須恵器	壺A	—	—	—	—	黄灰	
高針原	1442	96-E-0459	灰層Ⅲ群	須恵器	壺B	19.8	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1443	96-E-0465	灰層Ⅴ群	須恵器	蓋A	19.8	—	—	—	灰白	
高針原	1444	96-E-0464	灰層Ⅴ群	須恵器	蓋A	10.8	—	—	—	淡黄	
高針原	1445	96-E-1395	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	15.6	—	—	灰白	
高針原	1446	96-E-0462	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	13.2	—	—	浅黄橙	
高針原	1447	96-E-1398	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	11.4	—	—	灰白	
高針原	1448	96-E-1397	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	10.6	—	—	灰	
高針原	1449	96-E-1401	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	11.0	—	—	灰オリーブ	
高針原	1450	96-E-1399	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	10.8	—	—	灰	
高針原	1451	96-E-1396	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	9.8	—	—	灰白	
高針原	1452	96-E-0463	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	8.8	—	—	灰	
高針原	1453	96-E-1400	灰層Ⅴ群	須恵器	杯B	—	9.8	—	—	灰	
高針原	1454	96-E-0467	灰層Ⅴ群	須恵器	高杯B	—	9.0	—	—	灰	
高針原	1455	96-E-0466	灰層Ⅴ群	須恵器	高杯B	—	7.9	—	—	橙	
高針原	1456	96-E-0468	灰層Ⅴ群	須恵器	高杯B	—	11.6	—	—	灰黄	
高針原	1457	96-E-0612	灰層Ⅴ群	須恵器	鉢B	—	9.2	—	—	灰白	
高針原	1458	96-E-0470	灰層Ⅴ群	須恵器	台付長頸瓶	—	—	—	—	灰	
高針原	1459	96-E-0472	灰層Ⅴ群	須恵器	フラスコ形瓶A	7.6	—	—	—	灰	
高針原	1460	96-E-0475	灰層Ⅴ群	須恵器	短頸壺	7.2	—	—	—	灰黄	
高針原	1461	96-E-0474	灰層Ⅴ群	須恵器	横瓶A	11.0	—	—	—	黄灰	
高針原	1462	96-E-1394	灰層Ⅴ群	須恵器	横瓶A	11.2	—	—	—	灰黄	
高針原	1463	96-E-0473	灰層Ⅴ群	須恵器	横瓶B	11.0	—	—	—	浅黄	
高針原	1464	96-E-0471	灰層Ⅴ群	須恵器	平瓶	13.6	—	—	—	灰白	
高針原	1465	96-E-1402	灰層Ⅴ群	須恵器	壺B	—	—	—	—	浅黄	
高針原	1466	96-E-0476	灰層Ⅴ群	須恵器	—	—	—	—	—	灰	
高針原	1467	96-E-0514	間層	須恵器	蓋A	12.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1468	96-E-1356	間層	須恵器	蓋H	7.5	2.2	2.9	—	灰	
高針原	1469	96-E-0513	間層	須恵器	杯H	10.3	—	—	—	緑灰	
高針原	1470	96-E-0515	間層	須恵器	高杯	—	11.4	—	—	オリーブ灰	
高針原	1471	96-E-0516	間層	須恵器	フラスコ形瓶A	8.4	—	—	—	灰	
高針原	1472	96-E-0517	間層	須恵器	フラスコ形瓶B	8.0	—	—	—	灰	
高針原	1473	96-E-0518	間層	須恵器	フラスコ形瓶B	8.8	—	—	—	にぶい橙	
高針原	1474	96-E-0519	間層	須恵器	壺C	23.0	—	—	—	灰白	
高針原	1475	96-E-0601	表土	須恵器	蓋A	12.2	—	2.6	—	灰	
高針原	1476	96-E-0159	表土	須恵器	蓋A	11.4	—	2.5	—	灰白	
高針原	1477	96-E-0161	表土	須恵器	蓋A	10.5	—	2.3	—	灰	
高針原	1478	96-E-0158	表土	須恵器	蓋A	10.8	—	1.8	—	灰	
高針原	1479	96-E-0160	表土	須恵器	蓋A	9.7	—	2.0	—	黄灰	
高針原	1480	96-E-0164	表土	須恵器	蓋A	16.3	—	—	—	灰	
高針原	1481	96-E-0163	表土	須恵器	蓋A	17.6	—	—	—	灰	
高針原	1482	96-E-0162	表土	須恵器	蓋A	11.0	—	—	—	にぶい橙	
高針原	1483	96-E-0152	表土	須恵器	蓋B	12.4	—	2.0	—	灰白	
高針原	1484	96-E-0153	表土	須恵器	蓋B	12.1	—	2.2	—	灰黄褐	
高針原	1485	96-E-0157	表土	須恵器	蓋	8.6	—	—	—	灰白	
高針原	1486	96-E-0154	表土	須恵器	蓋	10.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1487	96-E-0156	表土	須恵器	蓋	10.8	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1488	96-E-0155	表土	須恵器	蓋	9.6	—	—	—	赤灰	
高針原	1489	96-E-0149	表土	須恵器	蓋H	11.0	—	—	—	灰	
高針原	1490	96-E-0147	表土	須恵器	蓋H	10.4	—	—	—	灰黄	
高針原	1491	96-E-0150	表土	須恵器	蓋H	10.3	—	—	—	灰黄	
高針原	1492	96-E-0145	表土	須恵器	蓋H	10.0	—	3.9	—	黄褐	
高針原	1493	96-E-0146	表土	須恵器	蓋H	9.8	—	3.5	—	黄灰	
高針原	1494	96-E-0151	表土	須恵器	蓋H	9.6	—	—	—	灰	
高針原	1495	96-E-0148	表土	須恵器	蓋H	9.4	—	—	—	灰	
高針原	1496	96-E-0118	表土	須恵器	蓋H	8.8	—	2.4	—	灰オリーブ	
高針原	1497	96-E-0131	表土	須恵器	杯A	14.0	—	—	—	黒褐	
高針原	1498	96-E-0121	表土	須恵器	杯A	11.8	—	—	—	緑灰	
高針原	1499	96-E-0123	表土	須恵器	杯A	10.8	—	—	—	灰	
高針原	1500	96-E-0109	表土	須恵器	杯B	17.0	10.7	3.5	—	オリーブ灰	
高針原	1501	96-E-0110	表土	須恵器	杯B	16.4	9.6	4.3	—	オリーブ灰	
高針原	1502	96-E-0112	表土	須恵器	杯B	15.8	10.8	3.7	—	明オリーブ灰灰白	
高針原	1503	96-E-0111	表土	須恵器	杯B	15.8	11.0	5.2	—	橙	
高針原	1504	96-E-0108	表土	須恵器	杯B	15.5	10.6	4.1	—	灰	
高針原	1505	96-E-0520	表土	須恵器	杯B	13.0	8.0	4.6	454.8	オリーブ灰	
高針原	1506	96-E-0115	表土	須恵器	杯B	—	13.0	—	—	灰	
高針原	1507	96-E-0116	表土	須恵器	杯B	—	11.8	—	—	灰褐	
高針原	1508	96-E-0114	表土	須恵器	杯B	—	9.0	—	—	灰黄	
高針原	1509	96-E-0521	表土	須恵器	杯B	—	8.4	—	—	緑灰	
高針原	1510	96-E-0113	表土	須恵器	杯B	—	9.0	—	—	灰	
高針原	1511	96-E-0119	表土	須恵器	杯G	9.6	—	—	—	灰白	
高針原	1512	96-E-0117	表土	須恵器	杯G	9.2	—	—	—	灰白	
高針原	1513	96-E-0120	表土	須恵器	杯G	9.6	—	—	—	灰	
高針原	1514	96-E-0129	表土	須恵器	杯H	10.0	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1515	96-E-0128	表土	須恵器	杯H	9.9	—	—	—	オリーブ灰	
高針原	1516	96-E-0130	表土	須恵器	杯H	10.0	—	—	—	灰黄褐	
高針原	1517	96-E-0127	表土	須恵器	杯J	9.6	—	—	—	灰	
高針原	1518	96-E-0132	表土	須恵器	高杯B	13.8	—	—	—	灰	
高針原	1519	96-E-0144	表土	須恵器	高杯B	—	10.0	—	—	灰	
高針原	1520	96-E-0138	表土	須恵器	高杯B	—	9.4	—	—	灰	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1521	96-E-0139	表土	須恵器	高杯B	—	9.2	—	—	灰白	細口下
高針原	1522	96-E-0135	表土	須恵器	高杯B	—	9.2	—	—	灰白	
高針原	1523	96-E-0136	表土	須恵器	高杯B	—	9.5	—	—	灰	
高針原	1524	96-E-0137	表土	須恵器	高杯B	—	8.0	—	—	灰白	
高針原	1525	96-E-0142	表土	須恵器	高杯B	—	9.8	—	—	灰白	
高針原	1526	96-E-0141	表土	須恵器	高杯B	—	7.4	—	—	灰	
高針原	1527	96-E-0134	表土	須恵器	高杯C	14.8	—	—	—	灰白	
高針原	1528	96-E-0133	表土	須恵器	高杯C	9.8	—	—	—	灰白	
高針原	1529	96-E-0143	表土	須恵器	高杯C	—	13.2	—	—	灰白	
高針原	1530	96-E-0140	表土	須恵器	高杯C	—	7.0	—	—	灰褐	
高針原	1531	96-E-0165	表土	須恵器	盤A	33.4	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1532	96-E-0166	表土	須恵器	盤A	22.8	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1533	96-E-0170	表土	須恵器	盤B	—	15.8	—	—	灰	
高針原	1534	96-E-0215	表土	須恵器	盤C	22.8	—	—	—	灰	
高針原	1535	96-E-0125	表土	須恵器	鉢A	11.4	—	—	—	灰	
高針原	1536	96-E-0124	表土	須恵器	鉢A	9.4	—	—	—	灰黄	
高針原	1537	96-E-0169	表土	須恵器	鉢C	—	10.6	—	—	浅黄橙	
高針原	1538	96-E-0168	表土	須恵器	鉢D	10.0	—	—	—	灰	
高針原	1539	96-E-0174	表土	須恵器	フラスコ形瓶A	9.2	—	—	—	灰黄	
高針原	1540	96-E-0173	表土	須恵器	フラスコ形瓶A	7.8	—	—	—	灰	
高針原	1541	96-E-0172	表土	須恵器	フラスコ形瓶B	7.6	—	—	—	灰	
高針原	1542	96-E-0171	表土	須恵器	フラスコ形瓶B	7.4	—	—	—	黄灰	
高針原	1543	96-E-0184	表土	須恵器	短頸壺	10.0	—	—	—	灰	
高針原	1544	96-E-0185	表土	須恵器	短頸壺	9.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1545	96-E-0182	表土	須恵器	短頸壺	6.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1546	96-E-0183	表土	須恵器	短頸壺	7.0	—	—	—	灰黄褐	
高針原	1547	96-E-0177	表土	須恵器	横瓶A	13.5	—	—	—	にぶい黄	
高針原	1548	96-E-0178	表土	須恵器	横瓶B	13.2	—	—	—	灰	
高針原	1549	96-E-0176	表土	須恵器	横瓶B	11.8	—	—	—	灰	
高針原	1550	96-E-0175	表土	須恵器	横瓶B	12.0	—	—	—	灰	
高針原	1551	96-E-0180	表土	須恵器	ハンウ	8.5	—	—	—	灰褐	
高針原	1552	96-E-0186	表土	須恵器	—	—	12.4	—	—	灰黄	
高針原	1553	96-E-0523	表土	須恵器	壺A	31.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1554	96-E-0187	表土	須恵器	壺C	18.4	—	—	—	灰白	
高針原	1555	96-E-0522	表土	須恵器	壺	—	16.0	—	—	灰オリーブ	
高針原	1556	96-E-0214	表土	須恵器	—	8.6	—	—	—	灰	
高針原	1557	96-E-0167	表土	須恵器	視	8.8	6.8	3.5	—	灰黄	
高針原	1558	96-E-1381	表土	須恵器	陶鍾	—	—	—	—	灰	
高針原	1559	96-E-0188	表土	須恵器	土師器	—	—	—	—	灰	
高針原	1560	96-E-0309	攪乱	須恵器	蓋A	15.7	—	2.8	—	にぶい黄	
高針原	1561	96-E-0301	攪乱	須恵器	蓋A	16.0	—	2.0	—	黄褐	
高針原	1562	96-E-0302	攪乱	須恵器	蓋A	13.4	—	2.3	—	灰オリーブ	
高針原	1563	96-E-0308	攪乱	須恵器	蓋A	12.4	—	2.1	—	灰黄	
高針原	1564	96-E-0303	攪乱	須恵器	蓋A	11.0	—	2.2	—	灰	
高針原	1565	96-E-0304	攪乱	須恵器	蓋A	10.6	—	2.6	—	オリーブ灰	
高針原	1566	96-E-0307	攪乱	須恵器	蓋A	9.8	—	2.3	—	オリーブ灰	
高針原	1567	96-E-0377	攪乱	須恵器	蓋A	11.6	—	2.3	—	オリーブ灰	
高針原	1568	96-E-0379	攪乱	須恵器	蓋A	10.3	—	1.8	—	灰	
高針原	1569	96-E-0305	攪乱	須恵器	蓋A	11.2	—	2.0	—	灰	
高針原	1570	96-E-0306	攪乱	須恵器	蓋A	10.4	—	2.0	—	にぶい黄	
高針原	1571	96-E-0378	攪乱	須恵器	蓋A	11.2	—	1.4	—	褐灰	
高針原	1572	96-E-0381	攪乱	須恵器	蓋A	15.4	—	—	—	灰	
高針原	1573	96-E-0380	攪乱	須恵器	蓋A	11.4	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1574	96-E-0383	攪乱	須恵器	蓋A	11.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1575	96-E-0313	攪乱	須恵器	蓋B	10.4	—	2.8	—	灰	
高針原	1576	96-E-0312	攪乱	須恵器	蓋B	10.3	—	2.0	—	灰	
高針原	1577	96-E-0385	攪乱	須恵器	蓋B	10.0	—	2.5	—	灰黄褐	
高針原	1578	96-E-0314	攪乱	須恵器	蓋B	9.4	—	2.2	—	暗灰	
高針原	1579	96-E-0386	攪乱	須恵器	蓋B	8.2	—	2.3	—	黄灰	
高針原	1580	96-E-0311	攪乱	須恵器	蓋C	10.8	—	3.0	—	灰オリーブ	
高針原	1581	96-E-0387	攪乱	須恵器	蓋	8.4	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1582	96-E-0390	攪乱	須恵器	蓋	10.7	—	—	—	灰	
高針原	1583	96-E-0388	攪乱	須恵器	蓋	9.2	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1584	96-E-0310	攪乱	須恵器	蓋	—	—	—	—	にぶい褐	
高針原	1585	96-E-0384	攪乱	須恵器	蓋D	9.0	—	3.0	—	灰	
高針原	1586	96-E-0318	攪乱	須恵器	蓋H	10.7	—	3.7	—	暗灰黄	
高針原	1587	96-E-0396	攪乱	須恵器	蓋H	10.8	—	—	—	灰黄	
高針原	1588	96-E-0392	攪乱	須恵器	蓋H	11.0	—	3.3	—	暗灰黄	
高針原	1589	96-E-0317	攪乱	須恵器	蓋H	11.0	—	3.6	—	浅黄橙	
高針原	1590	96-E-0319	攪乱	須恵器	蓋H	10.2	—	3.0	—	灰	
高針原	1591	96-E-0391	攪乱	須恵器	蓋H	10.2	—	3.5	—	灰	
高針原	1592	96-E-0316	攪乱	須恵器	蓋H	9.6	—	3.0	—	明オリーブ灰	
高針原	1593	96-E-0393	攪乱	須恵器	蓋H	9.8	—	2.9	—	灰	
高針原	1594	96-E-0278	攪乱	須恵器	杯A	15.7	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1595	96-E-0365	攪乱	須恵器	杯A	11.2	—	3.7	—	灰	
高針原	1596	96-E-0366	攪乱	須恵器	杯A	9.3	—	—	—	淡橙灰黄	
高針原	1597	96-E-0279	攪乱	須恵器	杯A	9.6	—	—	—	黄灰	
高針原	1598	96-E-0282	攪乱	須恵器	杯A	10.0	—	5.0	—	灰	
高針原	1599	96-E-0315	攪乱	須恵器	杯A	9.2	—	3.5	—	オリーブ灰	
高針原	1600	96-E-0280	攪乱	須恵器	杯A	10.5	—	3.2	—	暗オリーブ灰	
高針原	1601	96-E-1442	攪乱	須恵器	杯A	—	—	—	—	灰	
高針原	1602	96-E-0272	攪乱	須恵器	杯B	18.0	14.3	4.4	—	灰黄褐	
高針原	1603	96-E-0271	攪乱	須恵器	杯B	16.4	11.3	4.5	—	緑灰	
高針原	1604	96-E-0273	攪乱	須恵器	杯B	16.2	12.4	4.8	—	緑灰	
高針原	1605	96-E-0354	攪乱	須恵器	杯B	16.0	11.6	4.6	—	にぶい黄橙	
高針原	1606	96-E-0353	攪乱	須恵器	杯B	16.0	12.4	4.0	—	灰	
高針原	1607	96-E-0357	攪乱	須恵器	杯B	15.0	12.0	4.5	—	灰黄	
高針原	1608	96-E-0355	攪乱	須恵器	杯B	15.6	12.0	4.1	—	暗灰黄	
高針原	1609	96-E-0276	攪乱	須恵器	杯B	15.8	10.8	4.3	—	灰	
高針原	1610	96-E-0356	攪乱	須恵器	杯B	14.8	11.8	4.5	461.6	灰黄	
高針原	1611	96-E-0270	攪乱	須恵器	杯B	13.1	8.5	4.4	325.6	灰	
高針原	1612	96-E-0274	攪乱	須恵器	杯B	12.8	7.0	4.3	285.8	灰	
高針原	1613	96-E-0364	攪乱	須恵器	杯B	18.6	—	—	—	灰	
高針原	1614	96-E-0359	攪乱	須恵器	杯B	—	4.6	—	—	灰	
高針原	1615	96-E-0361	攪乱	須恵器	杯B	—	3.7	—	—	灰白	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1616	96-E-0360	攪乱	須恵器	杯B	—	3.4	—	—	灰黄	細口下
高針原	1617	96-E-0277	攪乱	須恵器	杯B	—	6.2	—	—	灰	
高針原	1618	96-E-0369	攪乱	須恵器	杯H	8.4	3.0	3.9	—	灰白	
高針原	1619	96-E-0290	攪乱	須恵器	杯H	9.4	—	3.5	—	灰白	
高針原	1620	96-E-0289	攪乱	須恵器	杯H	9.0	—	3.2	—	灰黄	
高針原	1621	96-E-0284	攪乱	須恵器	杯J	9.0	—	—	—	灰	
高針原	1622	96-E-0292	攪乱	須恵器	高杯B	11.7	7.8	6.6	—	灰白	
高針原	1623	96-E-0373	攪乱	須恵器	高杯B	11.8	—	—	—	黒	
高針原	1624	96-E-0370	攪乱	須恵器	高杯B	14.2	—	—	—	灰	
高針原	1625	96-E-0375	攪乱	須恵器	高杯B	—	8.6	—	—	灰黄	
高針原	1626	96-E-0296	攪乱	須恵器	高杯B	—	11.0	—	—	灰	
高針原	1627	96-E-0295	攪乱	須恵器	高杯B	—	10.6	—	—	灰白	
高針原	1628	96-E-0298	攪乱	須恵器	高杯B	—	10.0	—	—	灰白	
高針原	1629	96-E-0371	攪乱	須恵器	高杯C	13.6	—	—	—	灰	
高針原	1630	96-E-0367	攪乱	須恵器	高杯C	6.8	—	—	—	灰白	
高針原	1631	96-E-0294	攪乱	須恵器	高杯C	—	8.4	—	—	灰白	
高針原	1632	96-E-0376	攪乱	須恵器	高杯C	—	8.6	—	—	灰	
高針原	1633	96-E-0374	攪乱	須恵器	高杯C	—	8.0	—	—	灰	
高針原	1634	96-E-0347	攪乱	須恵器	鉢A	15.0	—	—	—	灰	
高針原	1635	96-E-0418	攪乱	須恵器	鉢A	14.3	—	—	—	灰	
高針原	1636	96-E-0346	攪乱	須恵器	鉢A	11.6	—	—	—	灰白	
高針原	1637	96-E-0348	攪乱	須恵器	鉢A	9.5	—	—	—	灰黄	
高針原	1638	96-E-0283	攪乱	須恵器	鉢A	8.2	—	—	—	灰白	
高針原	1639	96-E-0420	攪乱	須恵器	鉢A	10.6	—	—	—	浅黄	
高針原	1640	96-E-0368	攪乱	須恵器	鉢A	7.8	—	—	—	灰	
高針原	1641	96-E-0341	攪乱	須恵器	鉢B	—	7.0	—	—	灰	
高針原	1642	96-E-0342	攪乱	須恵器	鉢B	—	8.3	—	—	灰	
高針原	1643	96-E-0343	攪乱	須恵器	鉢B	—	9.0	—	—	灰白	
高針原	1644	96-E-0344	攪乱	須恵器	鉢C	23.8	—	—	—	灰	
高針原	1645	96-E-1382	攪乱	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1646	96-E-1383	攪乱	須恵器	鉢D	—	—	—	—	灰白	
高針原	1647	96-E-0324	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	8.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1648	96-E-0323	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	8.6	—	—	—	灰	
高針原	1649	96-E-0320	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	8.6	—	—	—	灰	
高針原	1650	96-E-0402	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	7.6	—	—	—	灰白	
高針原	1651	96-E-0401	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	7.6	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1652	96-E-0403	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	7.6	—	—	—	灰	
高針原	1653	96-E-0405	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	7.1	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1654	96-E-0322	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	7.4	—	—	—	灰白	
高針原	1655	96-E-0404	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	6.6	—	—	—	淡黄	
高針原	1656	96-E-0400	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶A	6.6	—	—	—	灰黄	
高針原	1657	96-E-0398	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶B	9.4	—	—	—	灰白	
高針原	1658	96-E-0399	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶B	8.5	—	—	—	灰白	
高針原	1659	96-E-0325	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶B	9.6	—	—	—	黄灰	
高針原	1660	96-E-0321	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶B	7.8	—	—	—	黄灰	
高針原	1661	96-E-0406	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1662	96-E-1443	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶	—	10.3	—	—	灰オリーブ	
高針原	1663	96-E-0407	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶	—	—	—	—	灰白	
高針原	1664	96-E-0408	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1665	96-E-0409	攪乱	須恵器	フラスコ形瓶	—	—	—	—	灰	
高針原	1666	96-E-0426	攪乱	須恵器	—	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1667	96-E-0415	攪乱	須恵器	平瓶A	9.0	—	—	—	緑灰	
高針原	1668	96-E-0332	攪乱	須恵器	平瓶A	7.4	—	—	—	灰白	
高針原	1669	96-E-0330	攪乱	須恵器	平瓶A	7.0	—	—	—	灰	
高針原	1670	96-E-0333	攪乱	須恵器	平瓶A	5.8	—	—	—	灰	
高針原	1671	96-E-0331	攪乱	須恵器	平瓶A	5.7	—	—	—	灰白	
高針原	1672	96-E-0425	攪乱	須恵器	平瓶	—	—	—	—	浅黄	
高針原	1673	96-E-0424	攪乱	須恵器	平瓶	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1674	96-E-0350	攪乱	須恵器	短形壺	16.8	—	—	—	灰	
高針原	1675	96-E-0421	攪乱	須恵器	短形壺	14.0	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1676	96-E-0419	攪乱	須恵器	短形壺	10.0	—	—	—	灰白	
高針原	1677	96-E-0328	攪乱	須恵器	横瓶	10.0	—	—	—	灰	
高針原	1678	96-E-0411	攪乱	須恵器	横瓶	13.0	—	—	—	灰	
高針原	1679	96-E-0326	攪乱	須恵器	横瓶B	10.4	—	—	—	灰白	
高針原	1680	96-E-0327	攪乱	須恵器	横瓶B	11.0	—	—	—	灰	
高針原	1681	96-E-0338	攪乱	須恵器	ハンウ	11.0	—	—	—	灰白	
高針原	1682	96-E-0340	攪乱	須恵器	ハンウ	10.2	—	—	—	暗灰黄	
高針原	1683	96-E-0416	攪乱	須恵器	ハンウ	9.6	—	—	—	—	
高針原	1684	96-E-0339	攪乱	須恵器	ハンウ	8.0	—	—	—	—	
高針原	1685	96-E-0335	攪乱	須恵器	ハンウA	—	—	—	—	—	
高針原	1686	96-E-0336	攪乱	須恵器	ハンウB	—	—	—	—	—	
高針原	1687	96-E-0337	攪乱	須恵器	ハンウB	—	—	—	—	—	
高針原	1688	96-E-0417	攪乱	須恵器	ハンウB	—	—	—	—	—	
高針原	1689	96-E-0363	攪乱	須恵器	ハンウA	—	5.0	—	—	—	
高針原	1690	96-E-1370	攪乱	須恵器	—	—	—	—	—	灰	
高針原	1691	96-E-0351	攪乱	須恵器	壺A	52.0	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1692	96-E-0352	攪乱	須恵器	壺A	39.8	—	—	—	灰白	
高針原	1693	96-E-0422	攪乱	須恵器	壺	—	—	—	—	灰オリーブ	
高針原	1694	96-E-0012	攪乱	須恵器	円面規	11.2	—	—	—	淡黄	
高針原	1695	96-E-1380	攪乱	須恵器	陶管	—	—	—	—	灰白	
高針原	1696	96-E-0011	攪乱	須恵器	壺A	—	—	—	—	灰黄	
高針原	1697	96-E-0018	攪乱	須恵器	壺	—	9.3	—	—	灰黄	
高針原	1698	96-E-0021	攪乱	須恵器	杯	—	—	—	—	灰	
高針原	1699	96-E-0431	攪乱	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	灰白	
高針原	1700	96-E-0433	攪乱	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	浅黄	
高針原	1701	96-E-0434	攪乱	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1702	96-E-1433	灰層Ⅱ群	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	赤褐色	
高針原	1703	96-E-1432	灰層Ⅱ群	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	灰黄色	
高針原	1704	96-E-0432	攪乱	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	淡黄	
高針原	1705	96-E-0600	SY01	窯道具	棒トチ	—	—	—	—	浅黄橙	
高針原	1706	96-E-1462	攪乱	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	浅黄	
高針原	1707	96-E-1463	攪乱	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	にぶい黄橙	
高針原	1708	96-E-1464	攪乱	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	橙	
高針原	1709	96-E-1465	攪乱	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	灰白色	
高針原	1710	96-E-1466	攪乱	窯道具	礫焼台	—	—	—	—	灰白色	

遺物計測一覧

遺跡	図番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	容積	色調	備考
高針原	1711	96-E-1476		窯道具	礫焼台	—	—	—	—	細口下	細口下
高針原	1712	96-E-1477		窯道具	礫焼台	—	—	—	—		
高針原	1713	96-E-1452		窯道具	転用焼台	—	—	—	—		
高針原	1714	96-E-1456		窯道具	転用焼台	—	—	—	—		
高針原	1715	96-E-1454		窯道具	転用焼台	—	—	—	—		
高針原	1716	96-E-1453		窯道具	転用焼台	—	—	—	—		
高針原	1717	96-E-1455		窯道具	転用焼台	—	—	—	—		
高針原	1718	96-E-1457		窯道具	転用焼台	—	—	—	—		
高針原	1719	96-E-0427	攪乱	窯道具	当て具	—	—	—	—		
高針原	1720	96-E-0428	攪乱	窯道具	当て具	—	—	—	—		
高針原	1721	96-E-0430	攪乱	窯道具	当て具	—	—	—	—		
高針原	1722	96-E-1471		窯道具	分焰棒	—	—	—	—		
高針原	1723	96-E-1473		窯道具	分焰棒	—	—	—	—		
高針原	1724	96-E-1487	灰層11(Ⅱ)上層	土師器	甕	19.7	—	—	—		
高針原	1725	96-E-1488	灰層(Ⅱ)群	土師器	甕	21.6	—	—	—		
高針原	1726	96-E-1489	灰層(Ⅱ)群	土師器	甕	—	—	—	—		
高針原	1727	96-E-1490	灰層(Ⅱ)群	土師器	甕	—	8.0	—	—		
高針原	1728	96-E-1491	灰層(Ⅱ)群	土師器	甕	—	7.6	—	—		
高針原	1729	96-E-1492	灰層(Ⅱ)群上層	土師器	甕	—	6.4	—	—		
高針原	1730	96-E-1493	攪乱	土師器	甕	—	6.9	—	—		
高針原	1731	96-E-1494	灰層(Ⅱ)群上層	土師器	甕	—	7.0	—	—		
高針原	1732	96-E-1495	表土	灰釉陶器	椀	14.3	7.2	4.7	—		
高針原	1733	96-E-1496	表土	灰釉陶器	椀	13.9	6.6	4.5	—		

遺構計測一覧

細口下1号窯

窯体 (SY)

遺構番号	全長 (m)	最大幅 (m)	備考
SY01	5.4	1.9	

その他の遺構 (SX)

遺構番号	長辺 (m)	短辺 (m)	備考
SX01	0.8	0.6	焼土
	0.3	0.2	焼土

高針原1号窯

窯体 (SY)

遺構番号	全長 (m)	最大幅 (m)	備考
SY01	7.6	2.8	

溝 (SD)

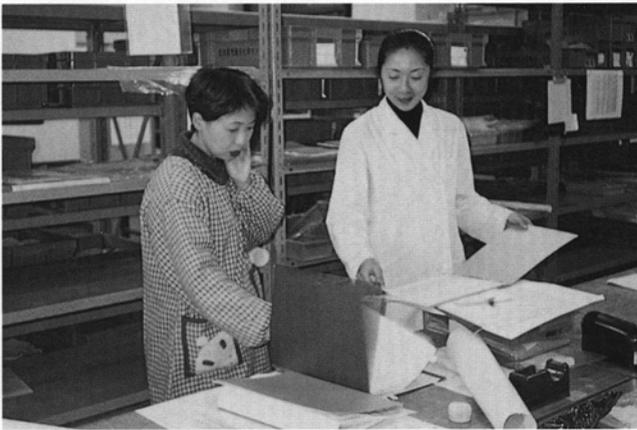
遺構番号	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	備考
SD01	7	0.3	0.3	
SD02	6.8	0.7	0.3	

土坑 (SK)

遺構番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK01	1.6	1.2	0.4	
SK02	1.1	1	0.4	
SK03	0.6	0.3	0.2	
SK04	2.7	1	0.2	
SK05	0.7	0.5	0.1	
SK06	・	0.4	0.2	
SK07	0.3	0.3	0.3	

図

版



図版 1

細口下1号窯 遺構 1



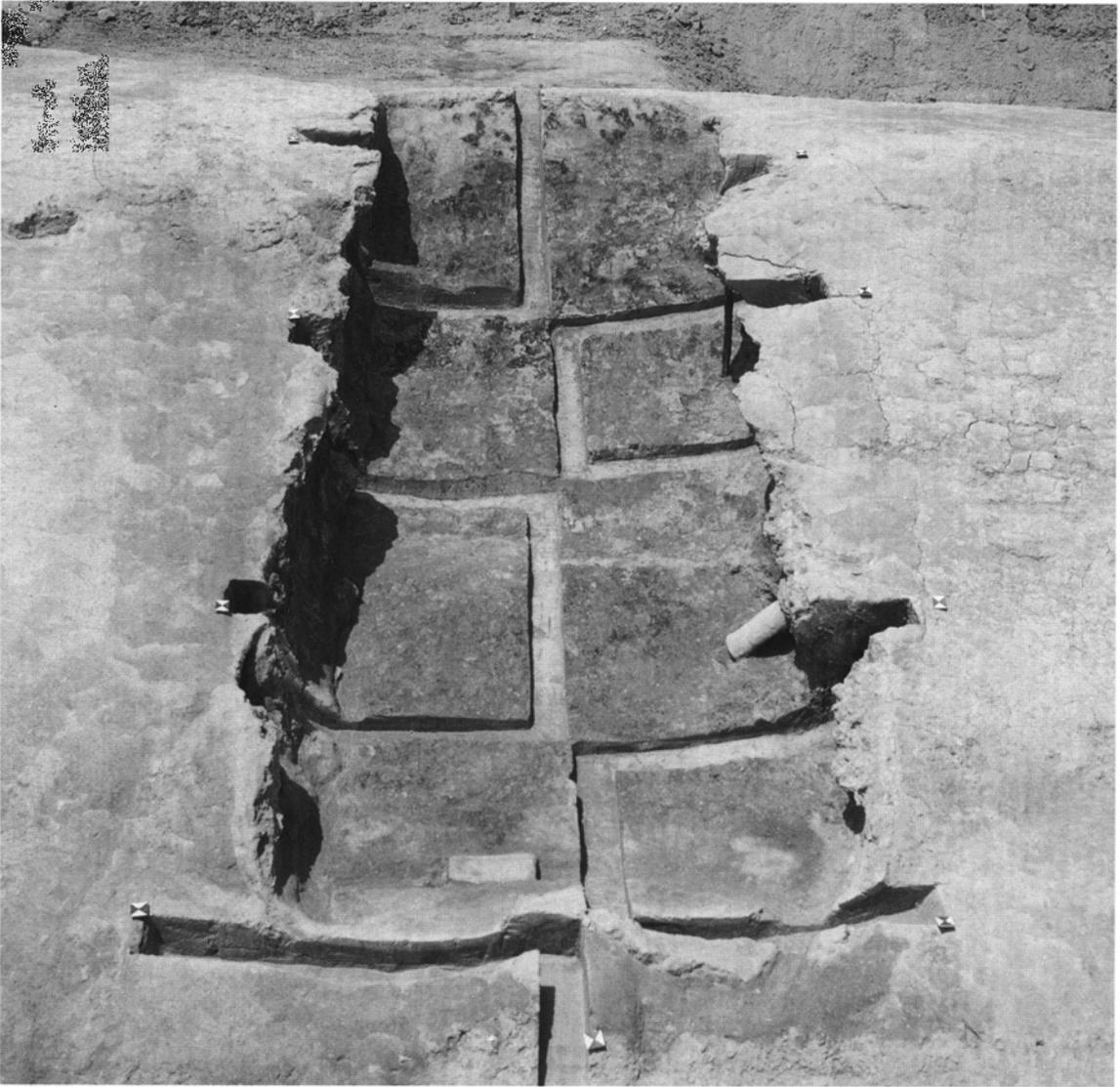
細口下1号窯の調査区航空写真。上が北となる。下方に断ち割り作業を終了したSY01、やや不鮮明だが調査区中央にはSX01が確認できる。調査区東側の道路は国道302号線の側道。この建設が細口下1号窯の発見の契機となっている。



▲SY01の近景。最終段階の床面はほぼ流出し、その床下施設が確認できる。

▼床下施設の拡大。向かって左側に椀を、右側に焼台を敷き詰める傾向がある。





▲SY01の近景。断ち割り作業を終了した階段。

▼分焰柱付近の様子。断面には分焰柱の補修が観察できる。





▲SY01の遺物出土状態。壁面に立てかけられた丸瓦は焼成時の原位置を留める。

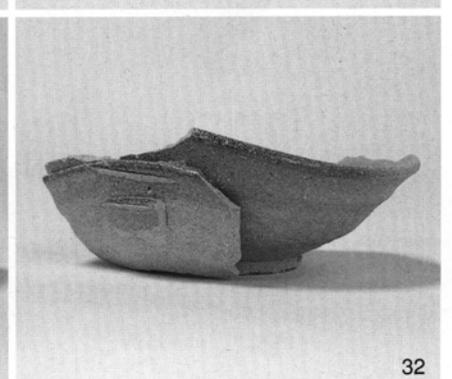
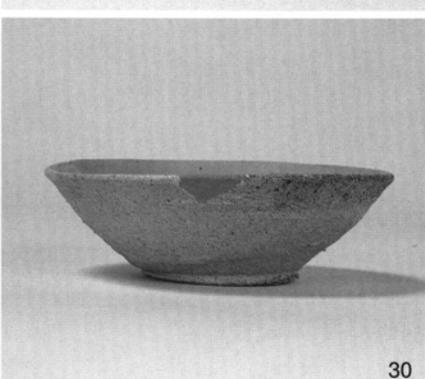
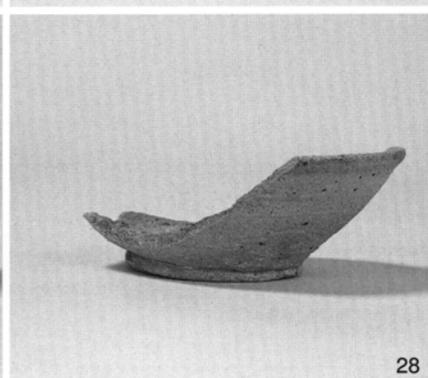
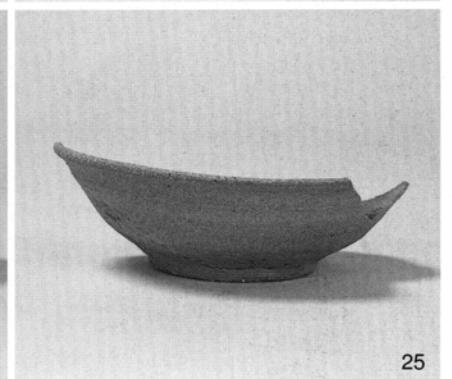
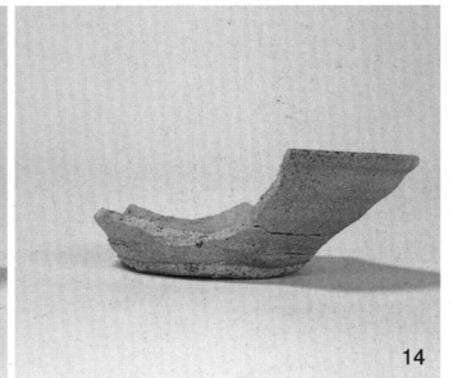
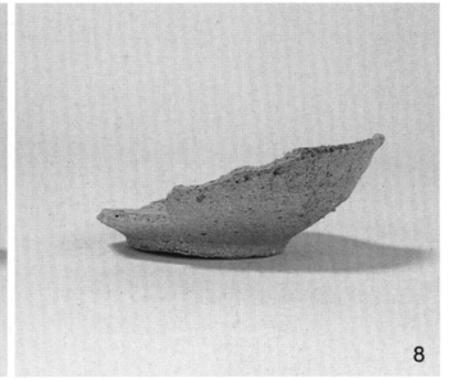
▼四耳壺の出土状況。焼成室埋土の下部から出土した。



図版 5

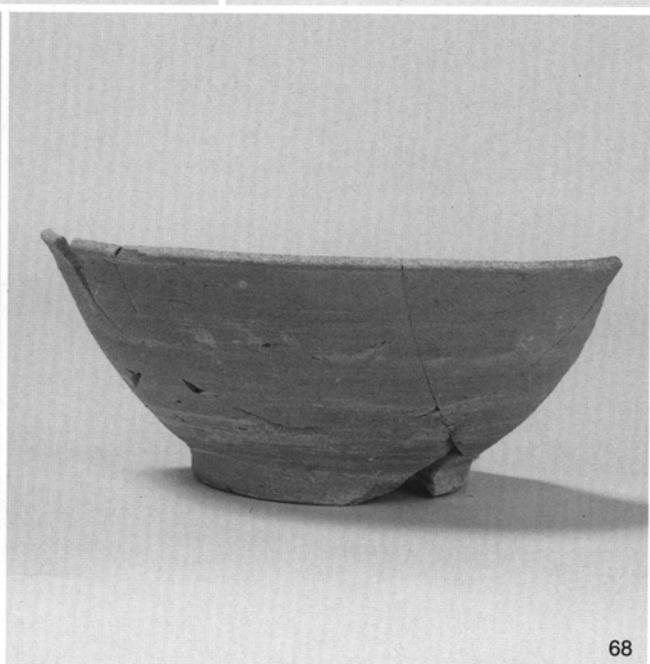
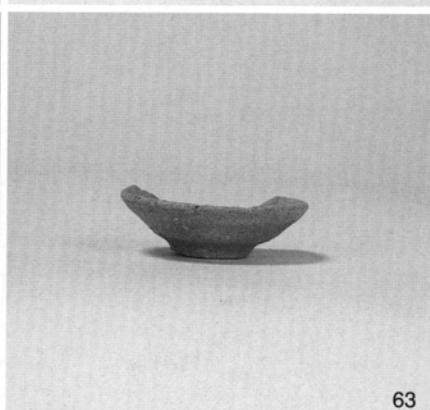
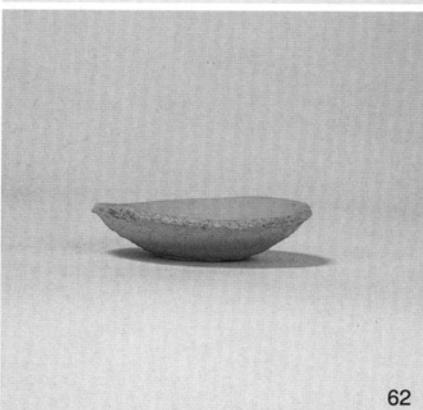
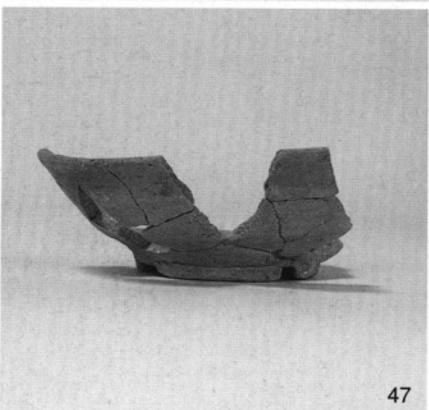
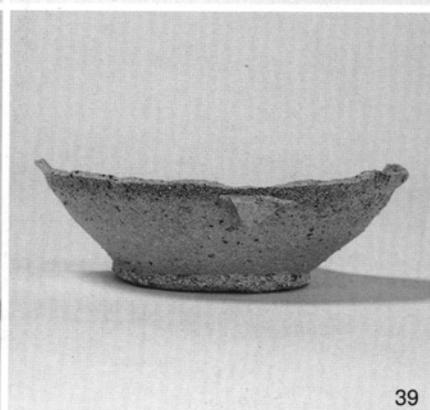
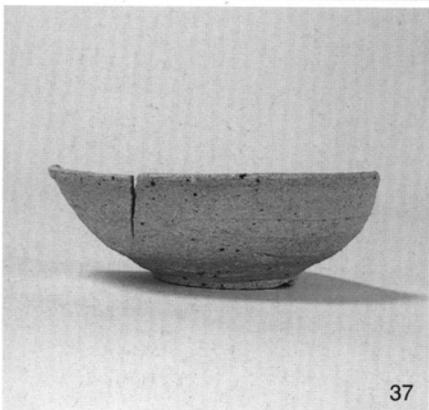
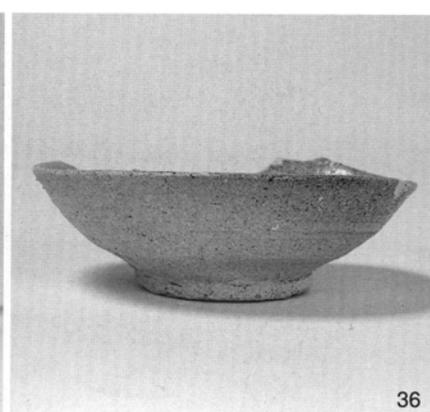
細口下1号窯 遺物1





図版 7

細口下1号窯 遺物 3

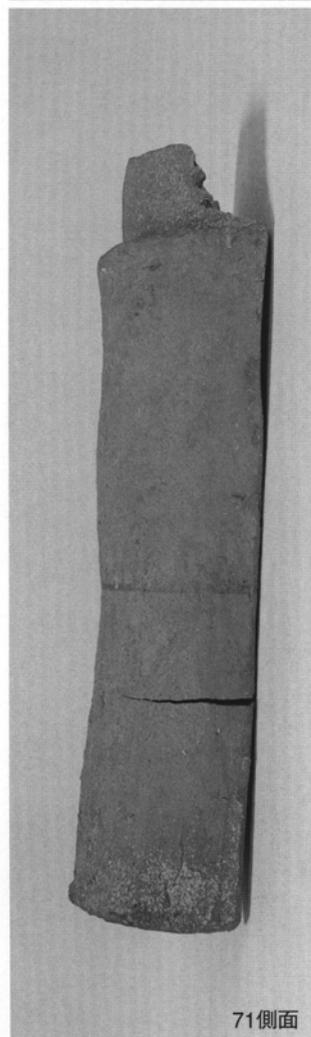




70凸面



70凹面



71側面

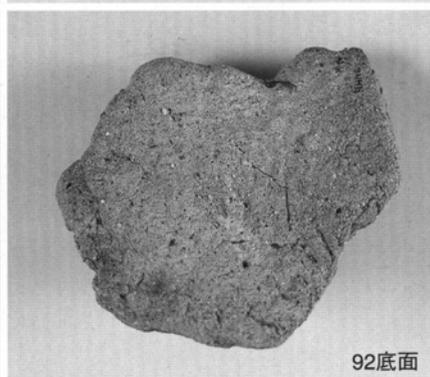
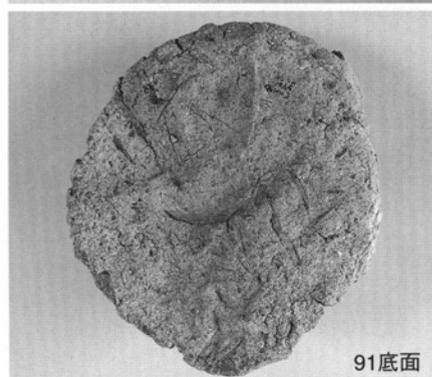
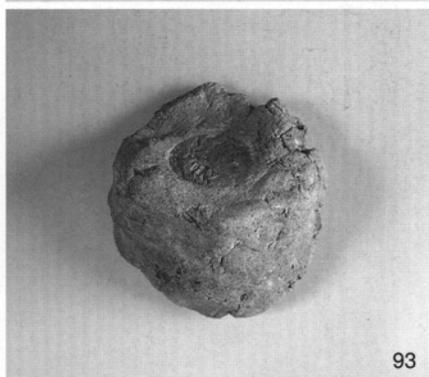
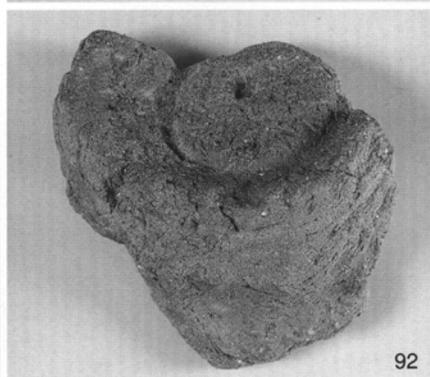
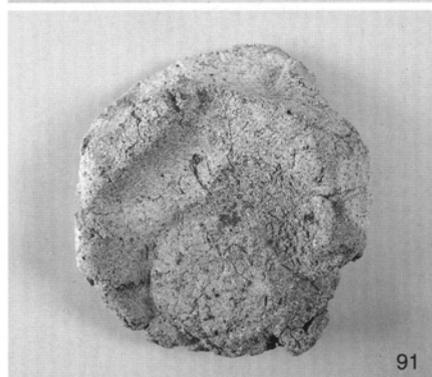
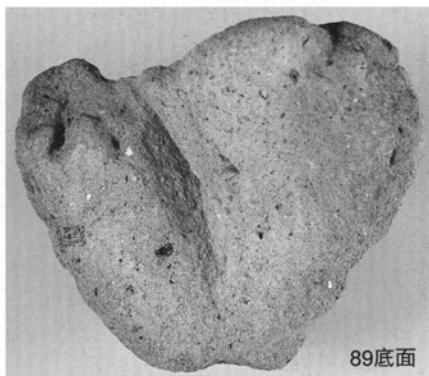
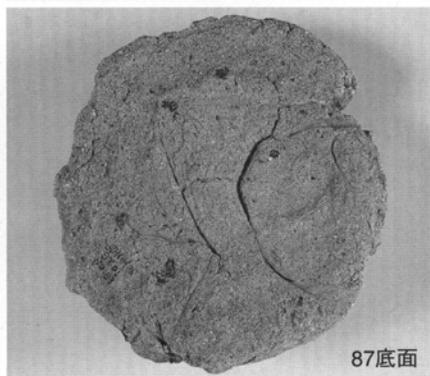
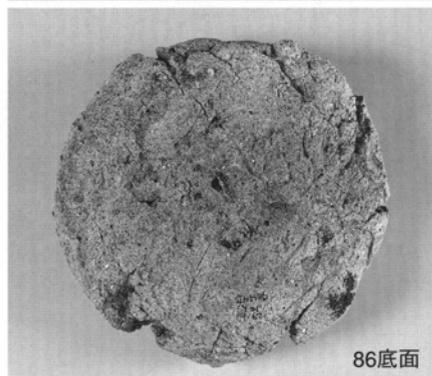
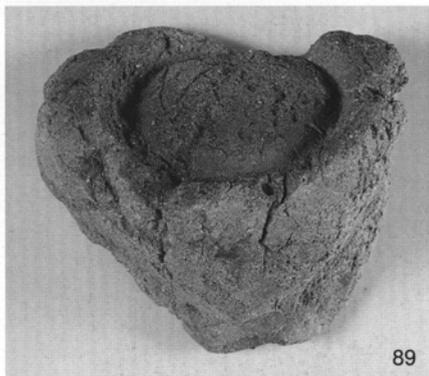
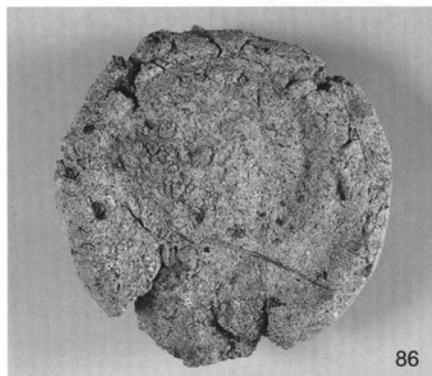
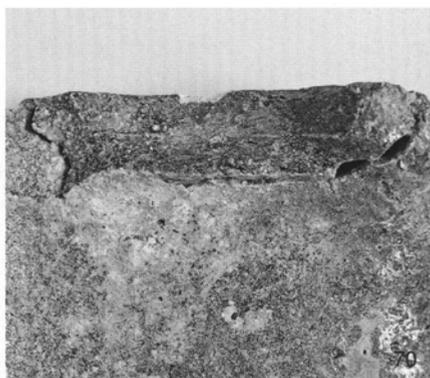
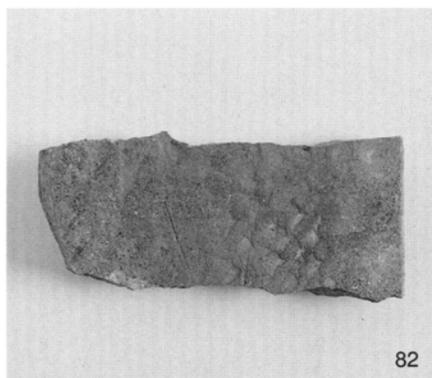


71凸面



71凹面







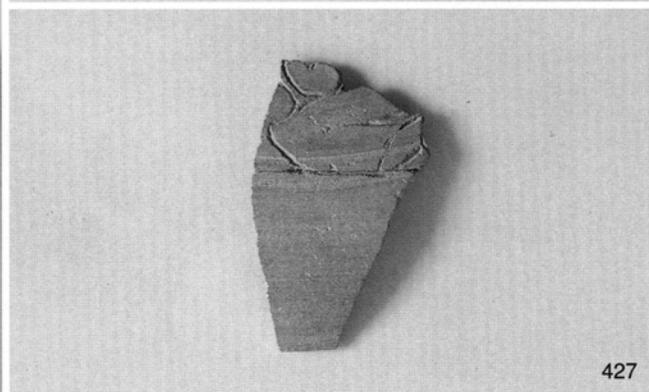
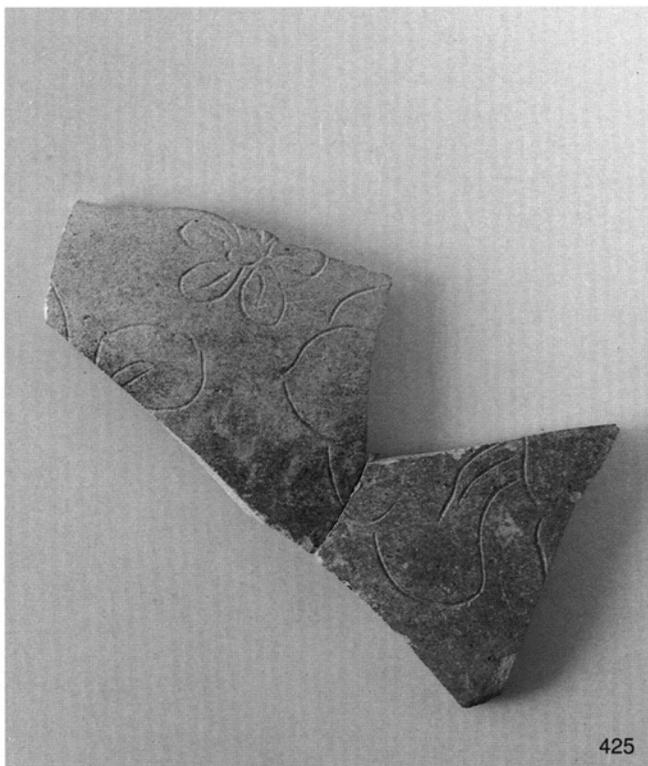
鴻ノ巣古窯の調査区航空写真。上が北となる。灰層は中央のセクションベルト地点で確認できる。調査区東側の道路は、調査時に部分開通していた国道302号線。

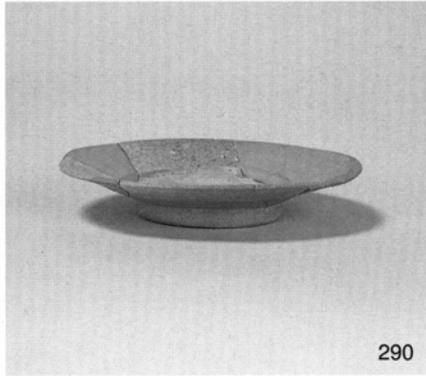
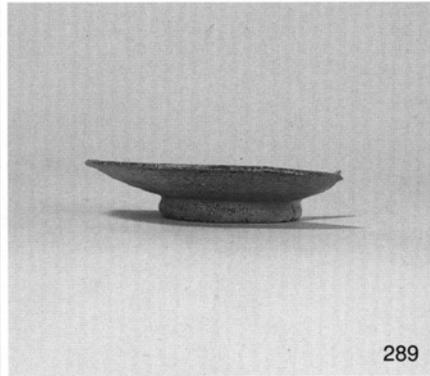
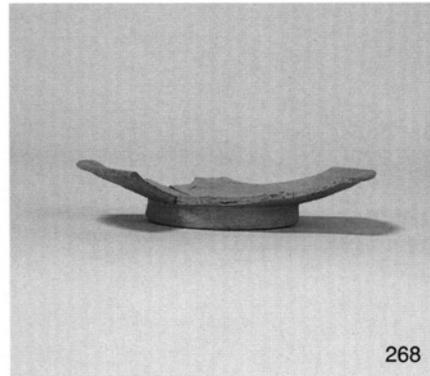
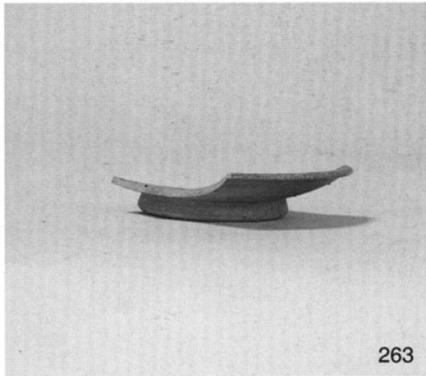
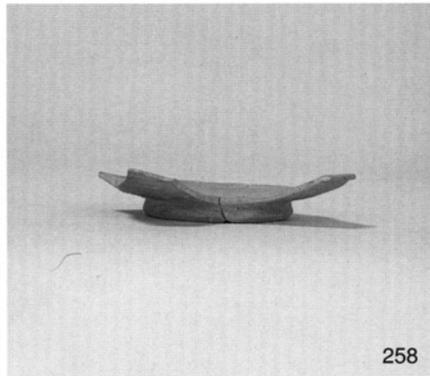
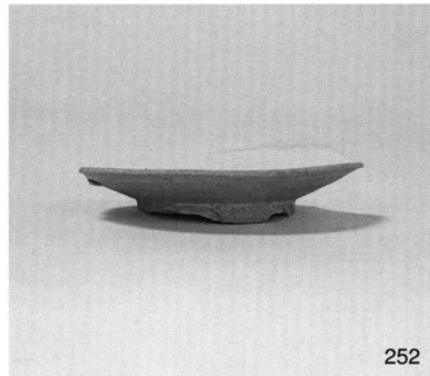
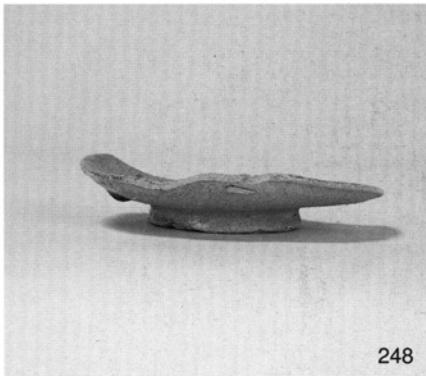
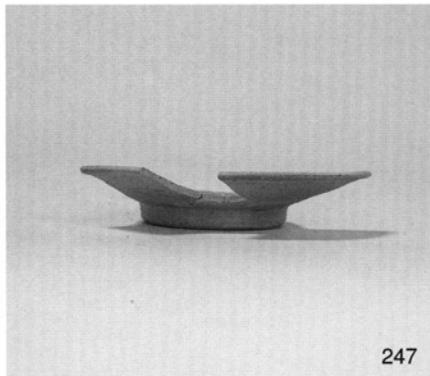
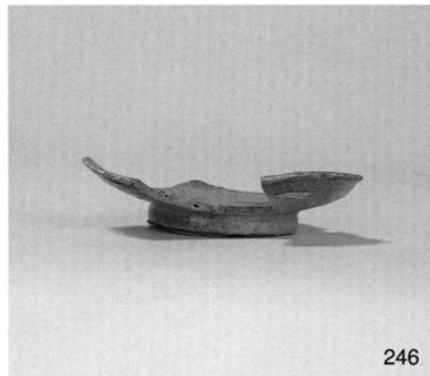
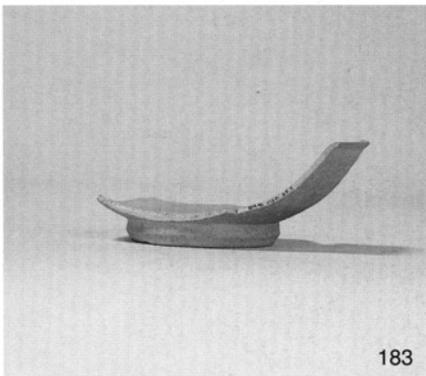
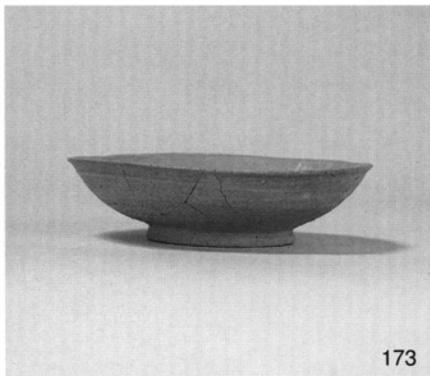
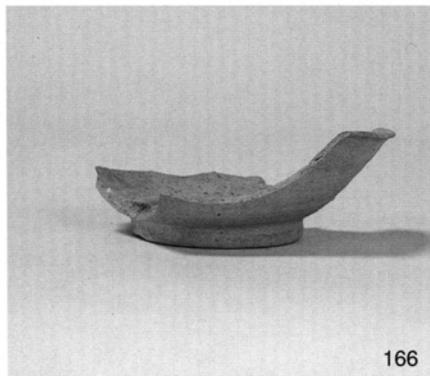
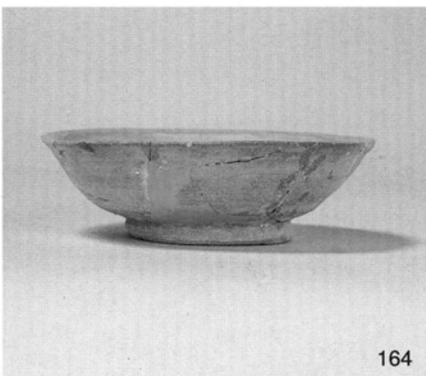
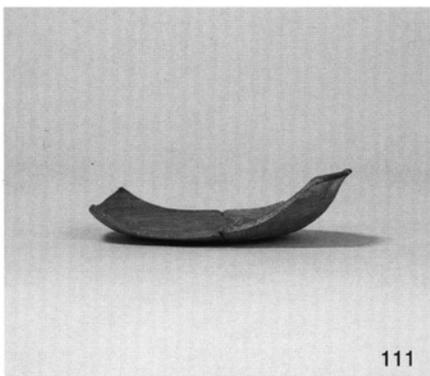
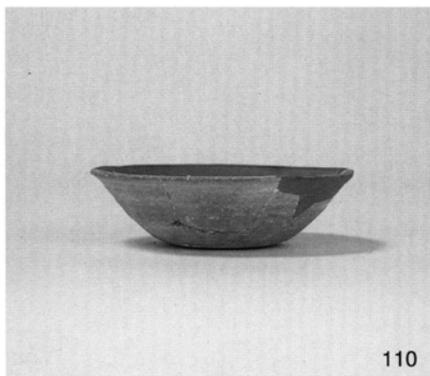


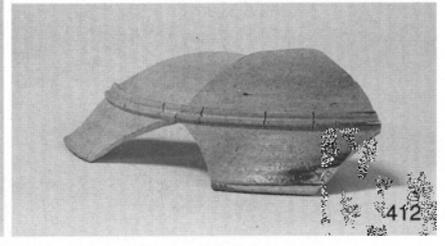
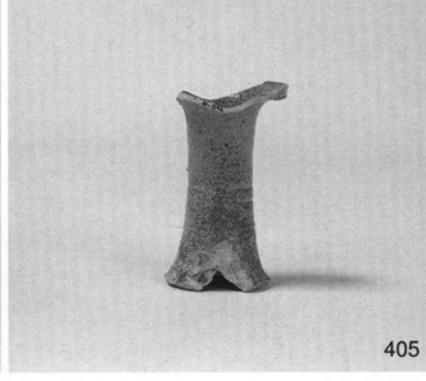
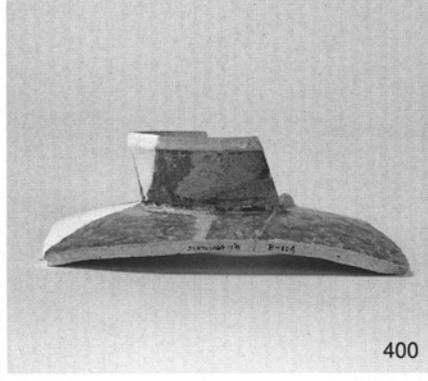
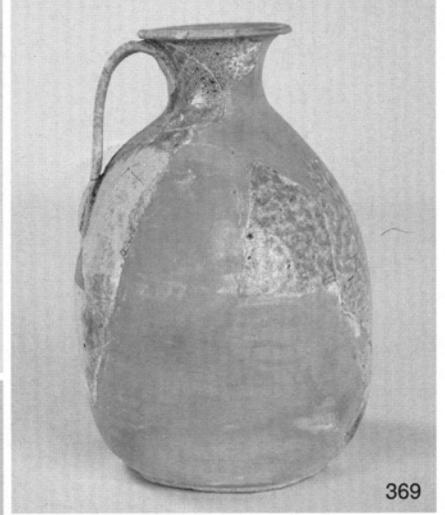
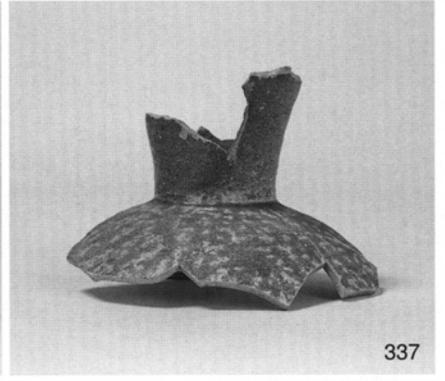
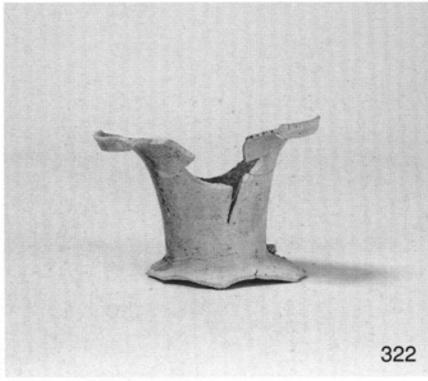
▲調査区を南から撮影した。灰原の分布状況が確認できる。

▼調査区の東壁。大半が搬入土で、灰層は下部にわずかに確認できる。



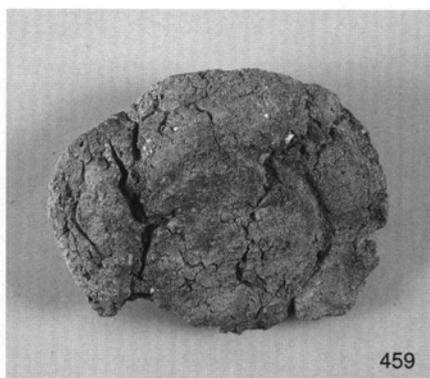




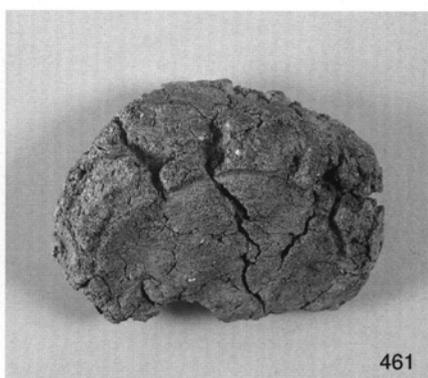




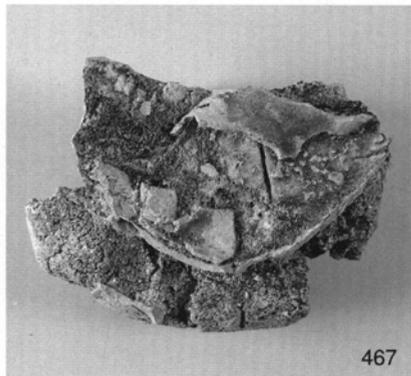
440



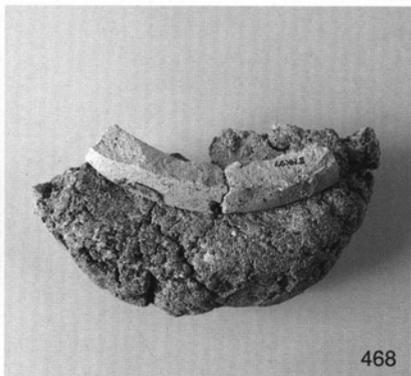
459



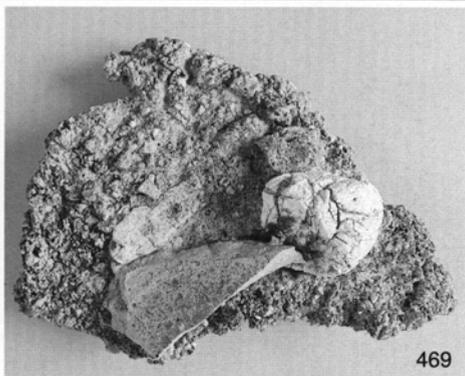
461



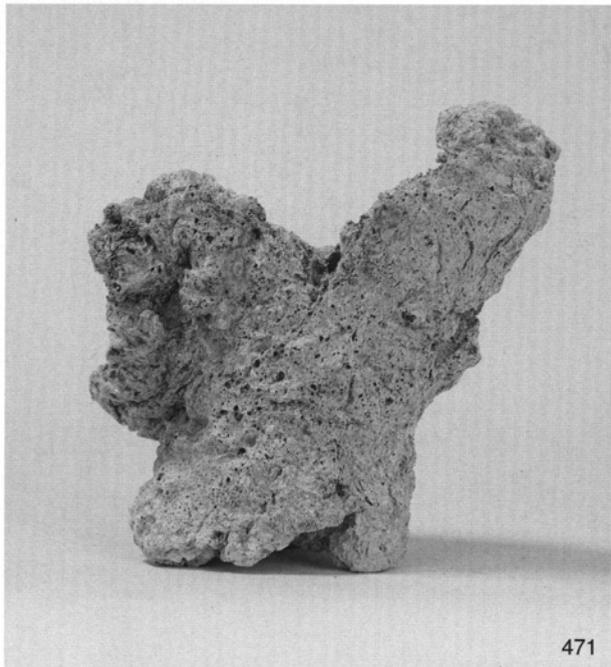
467



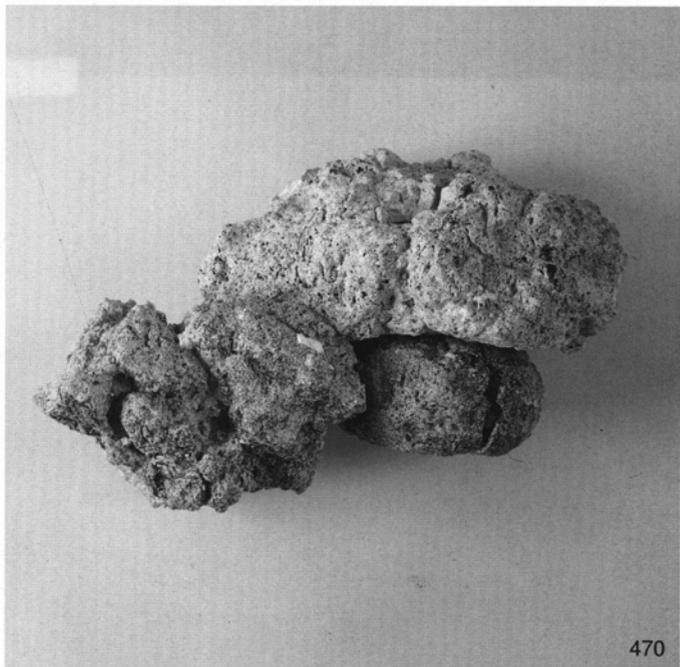
468



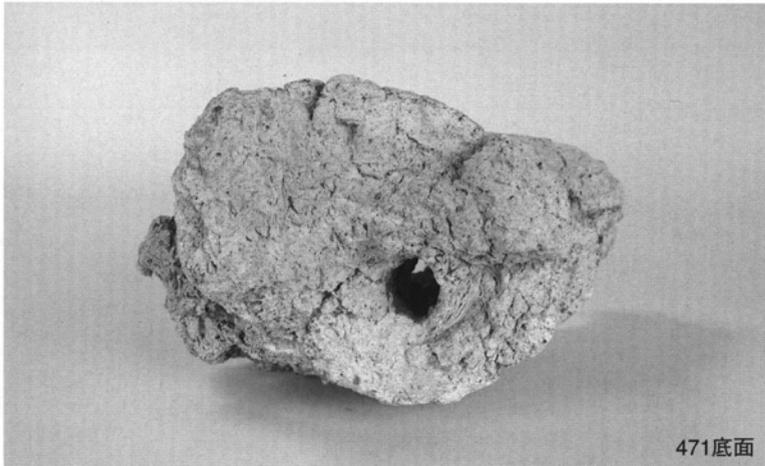
469



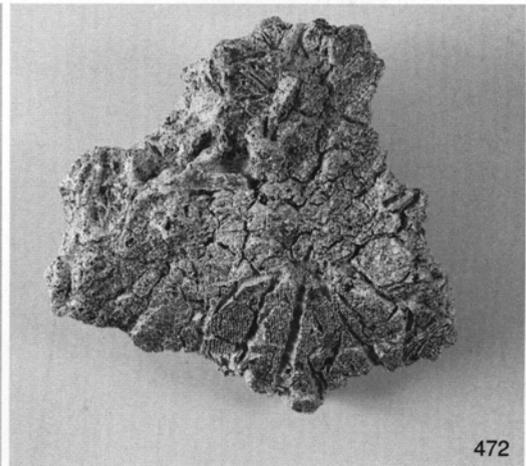
471



470

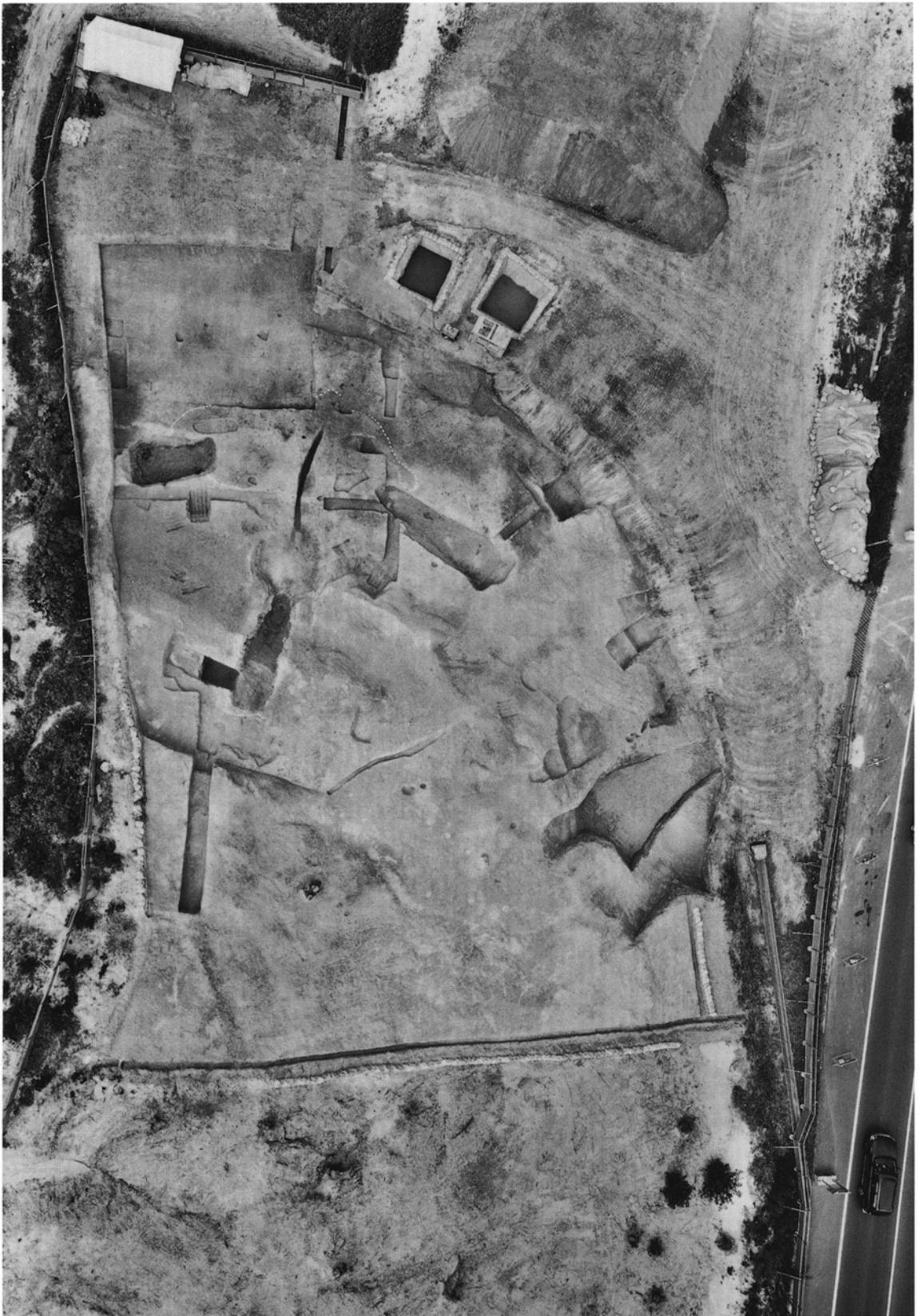


471底面



472

470, 471は $\frac{1}{2}$

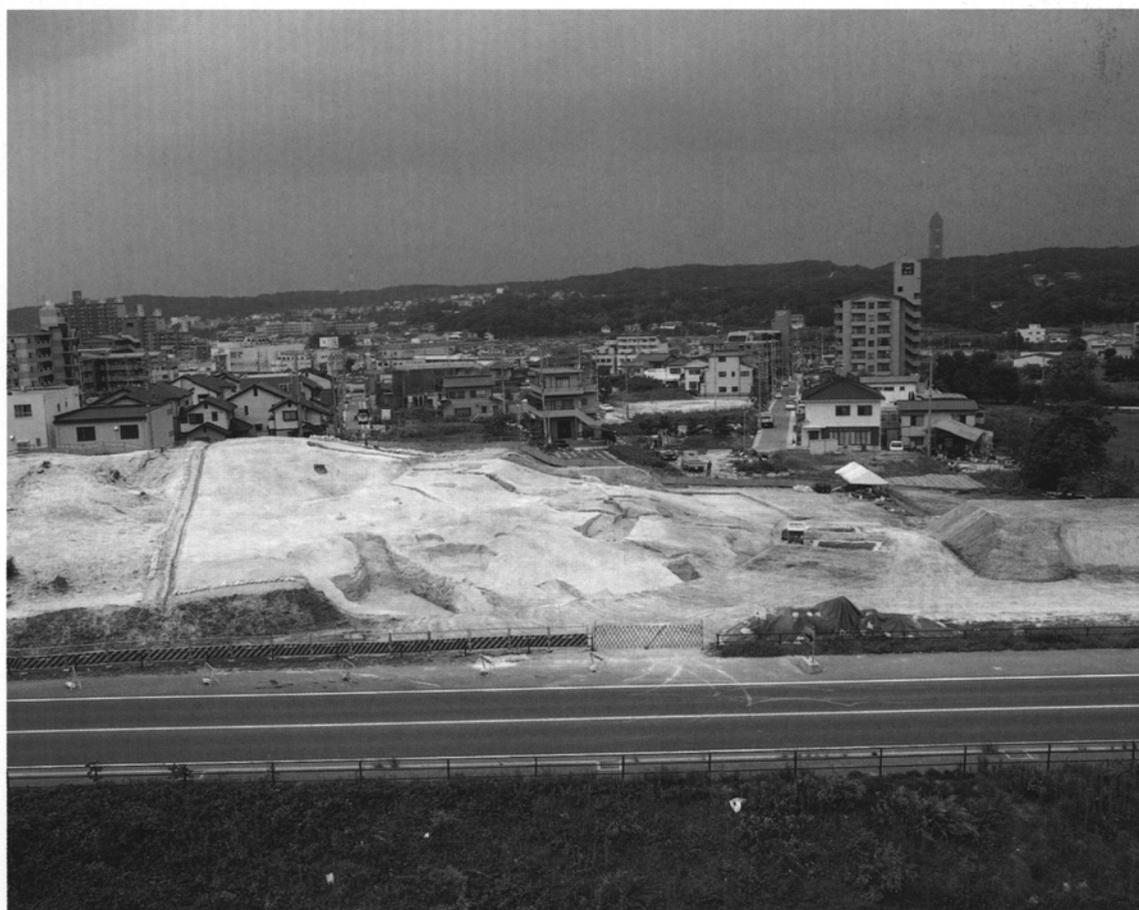


高針原 1 号窯の調査区航空写真。上が北となる。SY01は写真中央のやや左。北に向けて開口する。焚口の前面には、灰出しピットと排水溝が観察できる。前庭部の整地層は、このあたりに広がる。



▲調査区を北から眺めた。調査区南側に残存する森を挟んで鴻ノ巣古窯が位置する。

▼調査区を東から眺めた。原地形が段状に整地されていることが確認できる。





▲SY01の近景。焚口付近に舟底ピットが観察できる。

▼SY01の左壁。縞状に壁面が重なり、補修が繰り返されたことが観察できる。

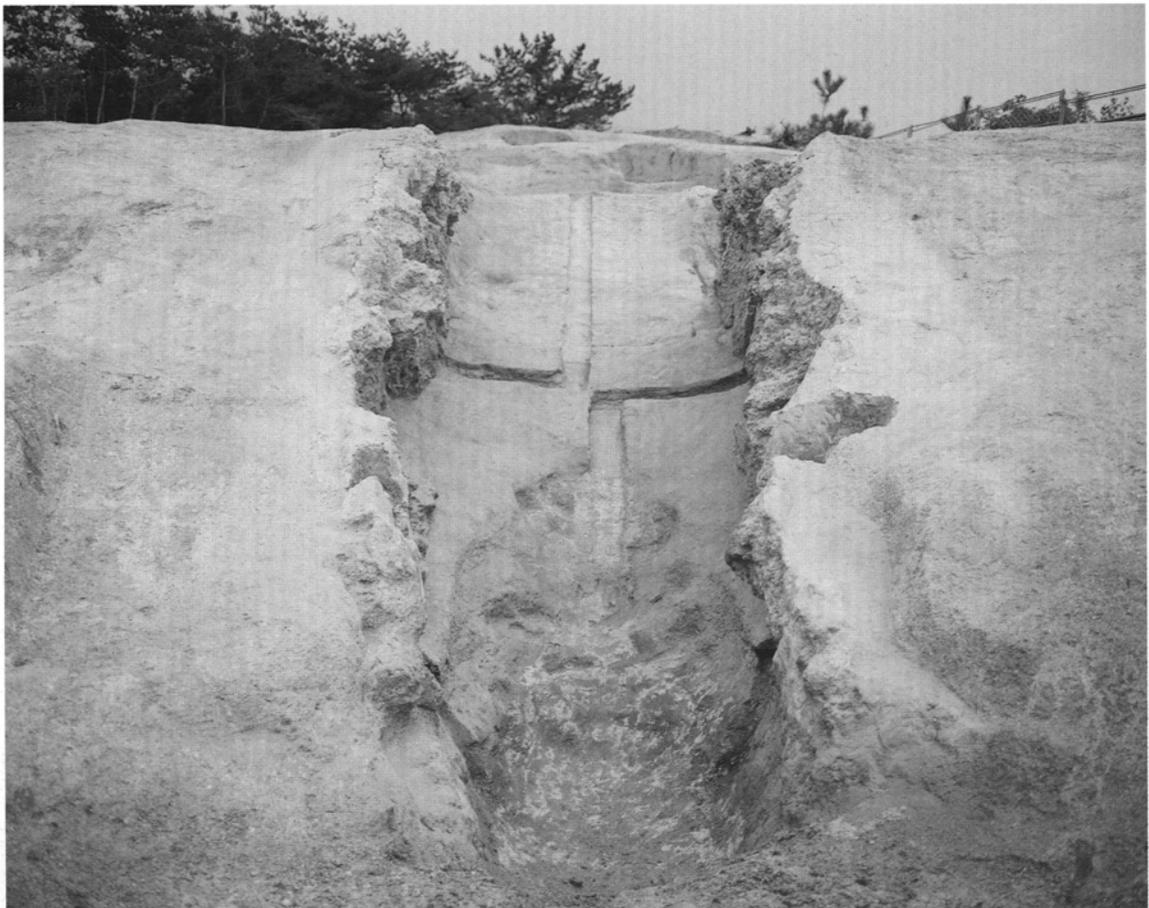




▲SY01の遺物出土状態。舟底ピットの上部。

▼灰出しピットの埋土。





▲SY01の近景。断ち割り作業を終了した段階。

▼SY01右壁を、上部の攪乱坑壁面で撮影した。補修状況が観察できる。





▲灰原の間層を取り除き、灰層群の上面の様子。SD02が確認できる。

▼灰原の断面。規模の大きさが観察できる。

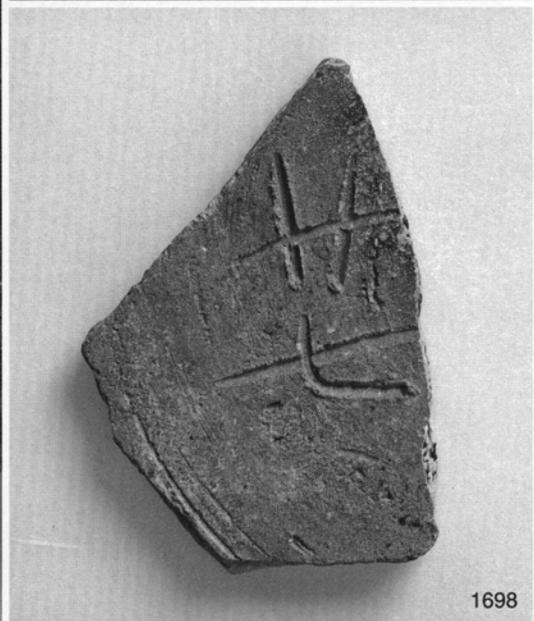




1339



1457



1698



1696



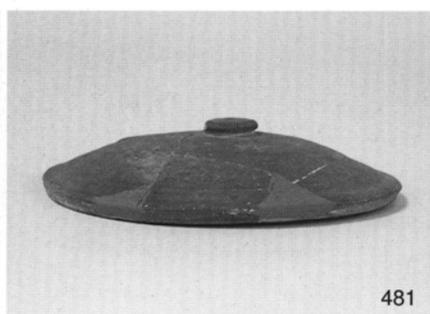
1692



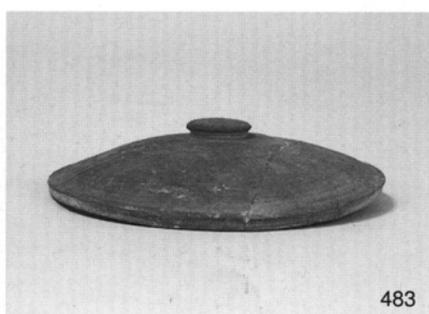
1697



480



481



483



502



505



526



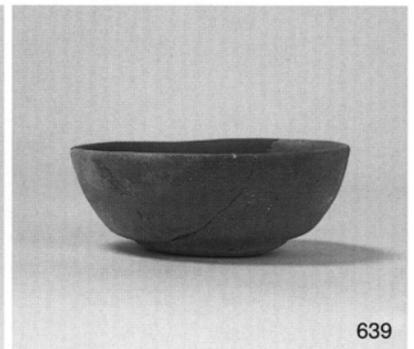
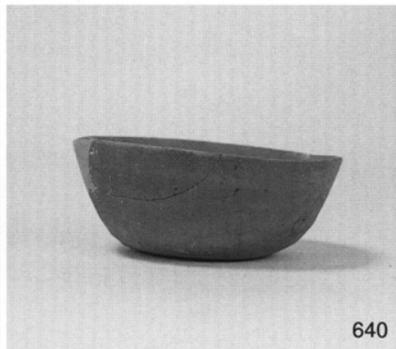
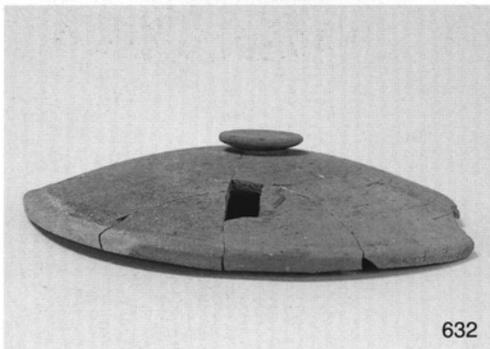
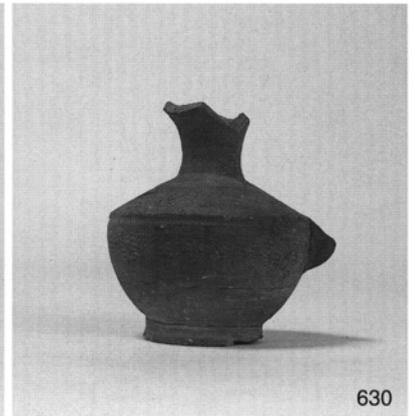
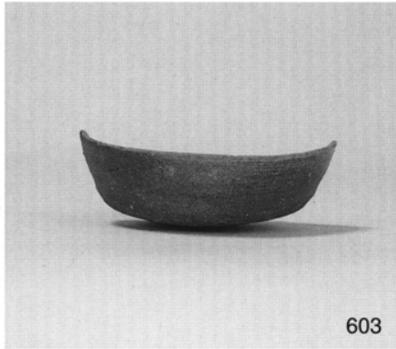
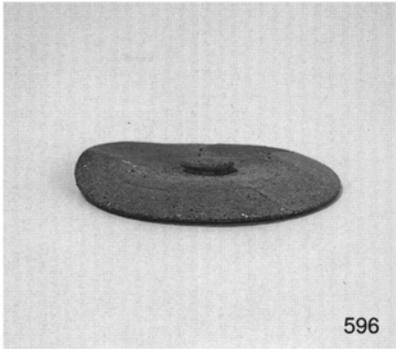
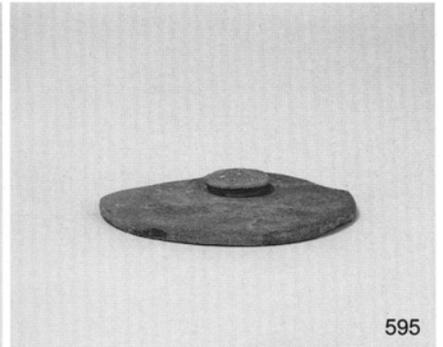
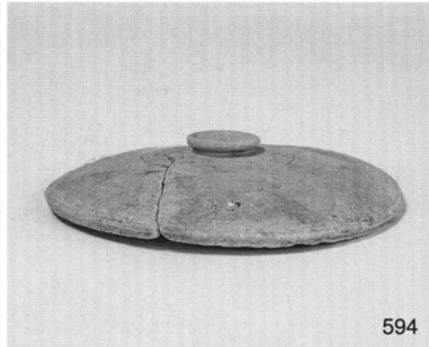
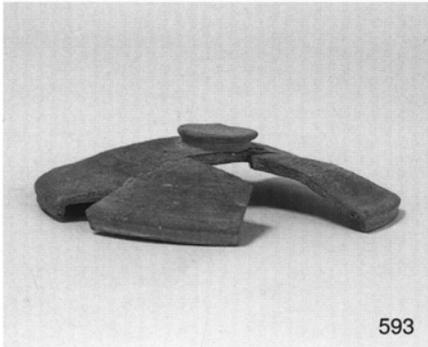
529

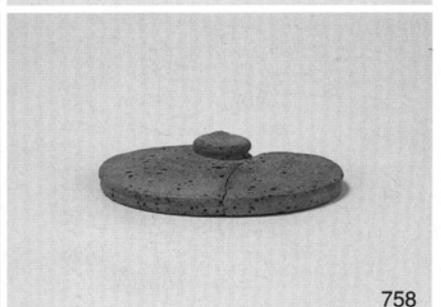
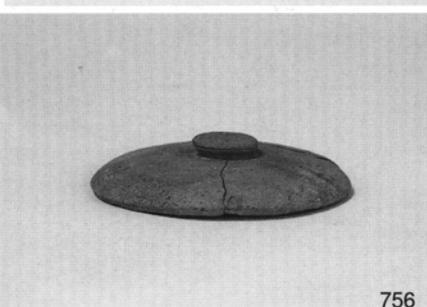
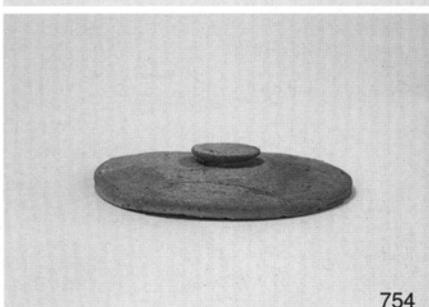
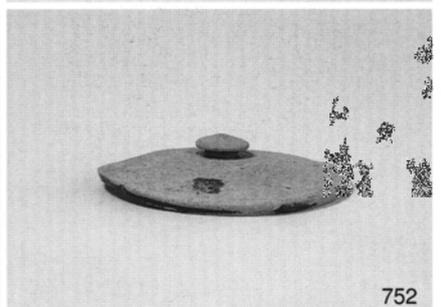
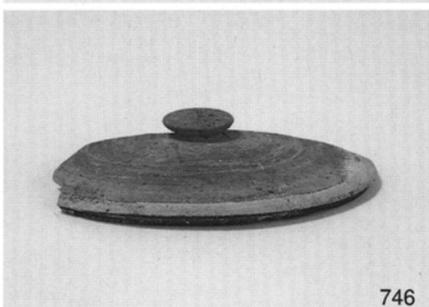
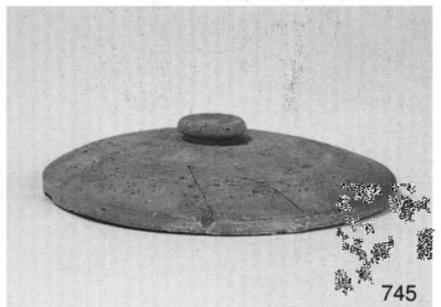
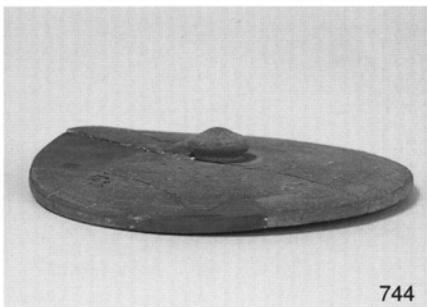
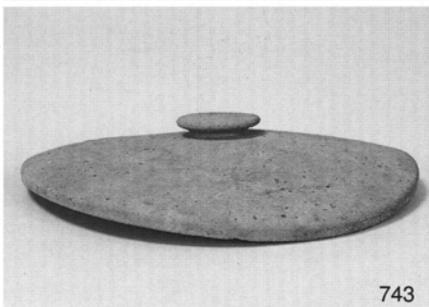
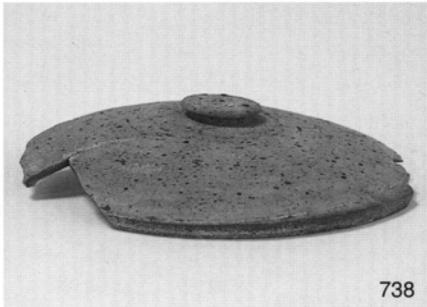
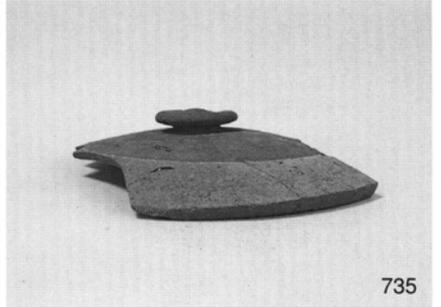
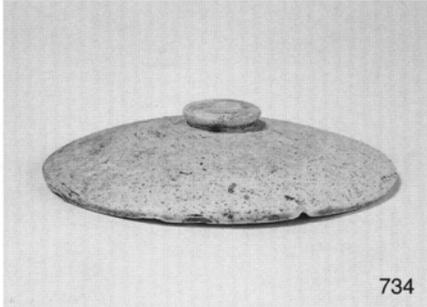
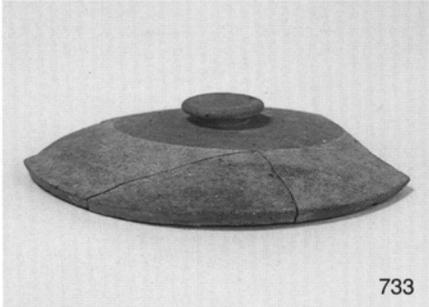
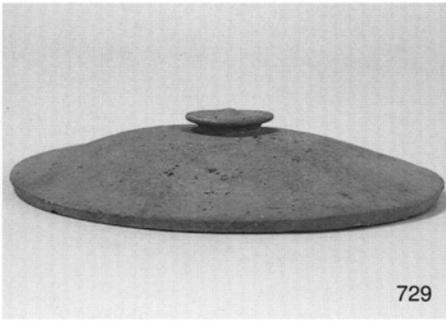


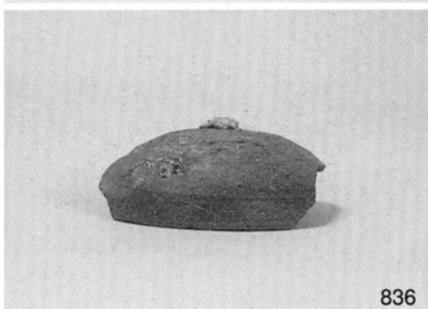
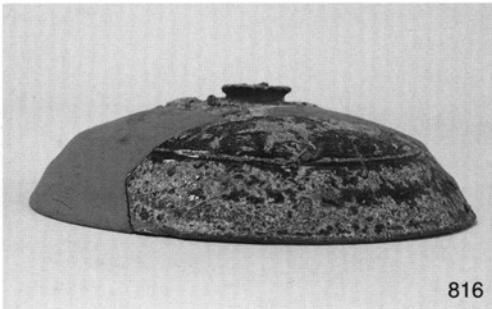
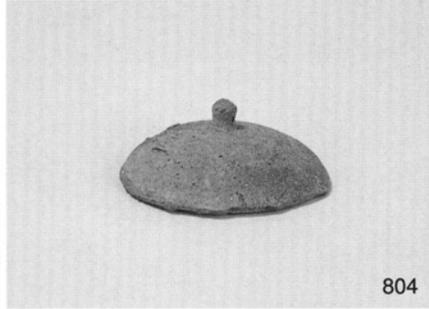
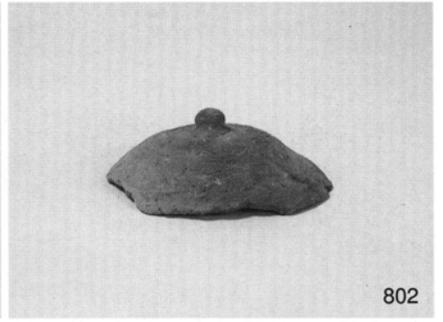
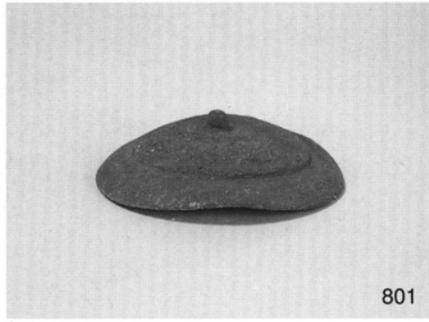
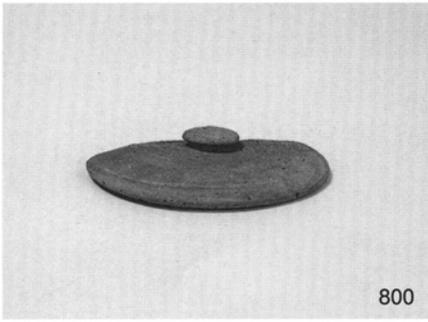
577

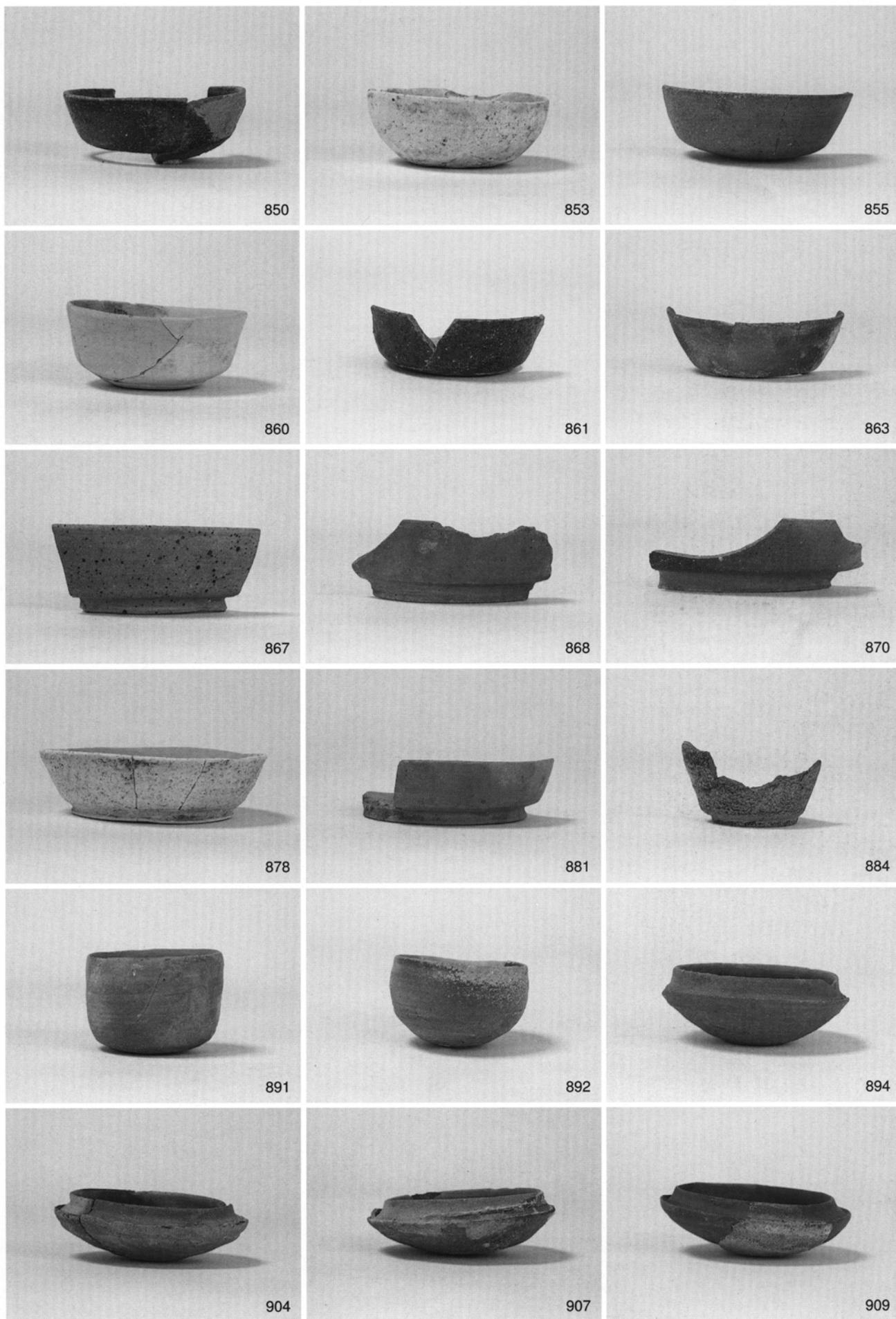


573

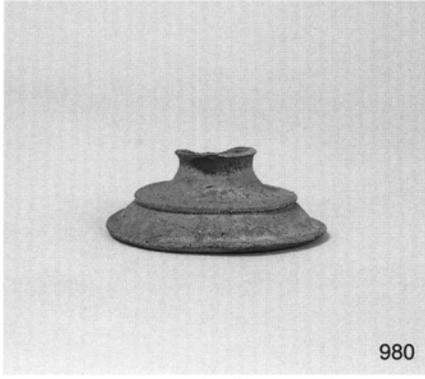
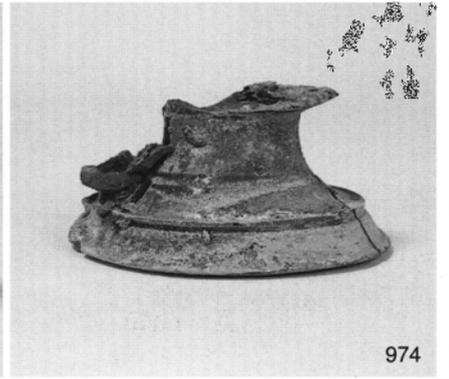
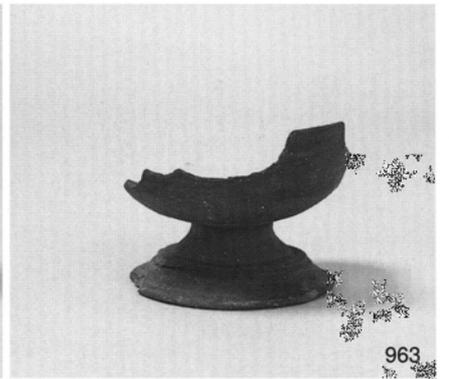
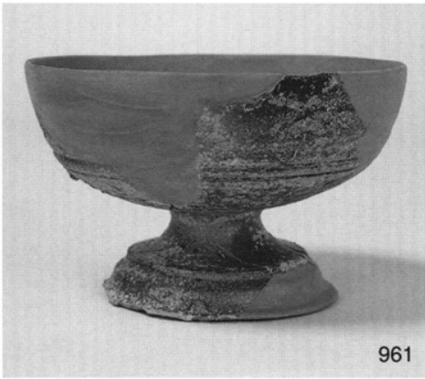


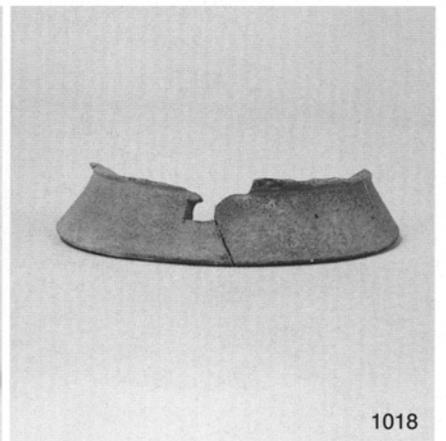
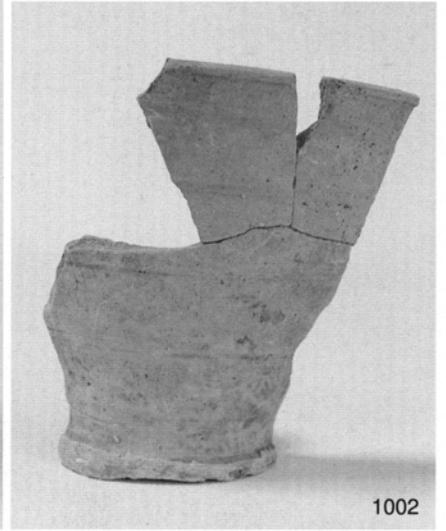
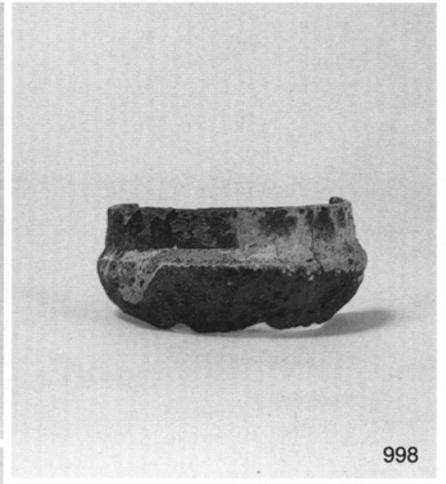
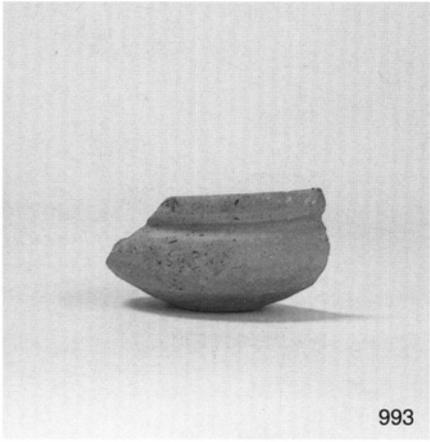


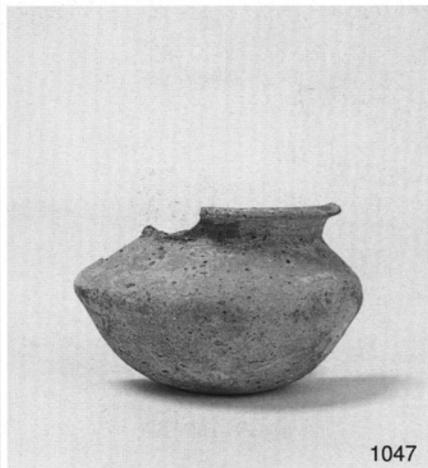
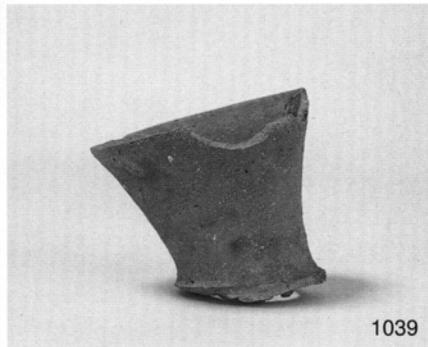


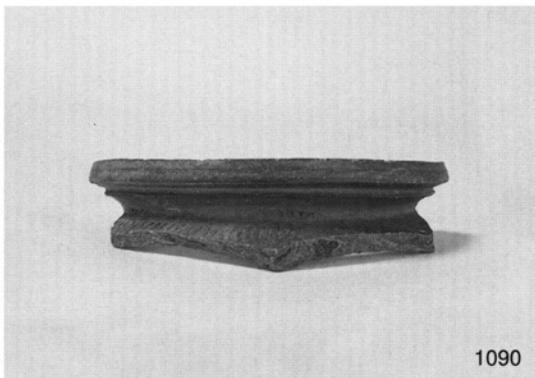
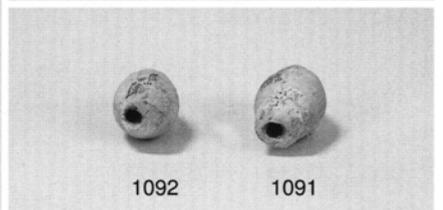
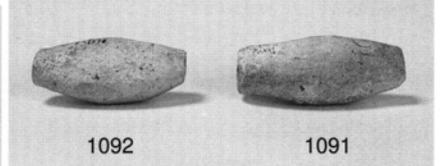
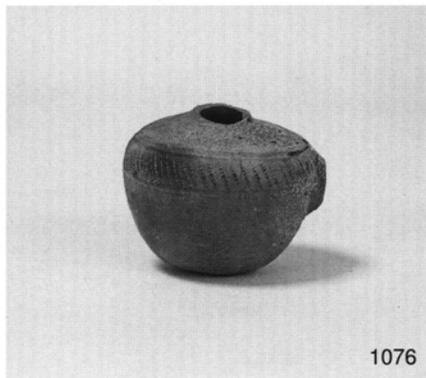
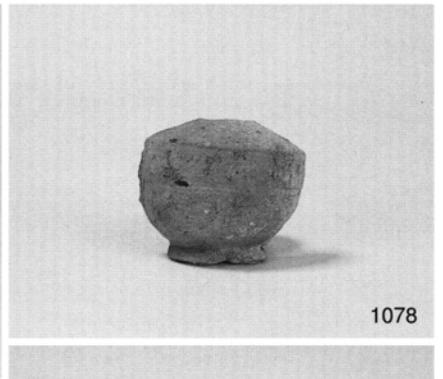
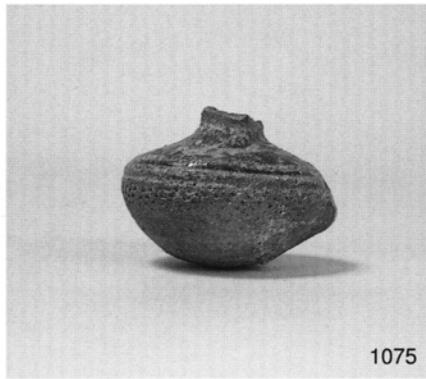
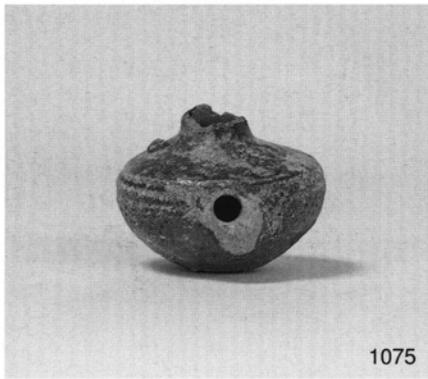
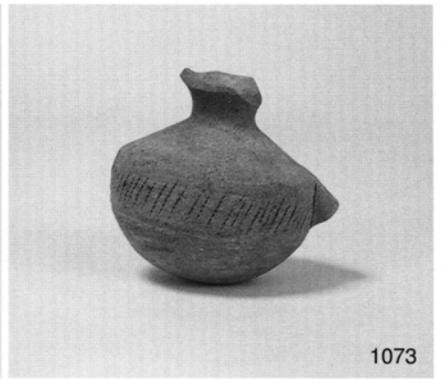


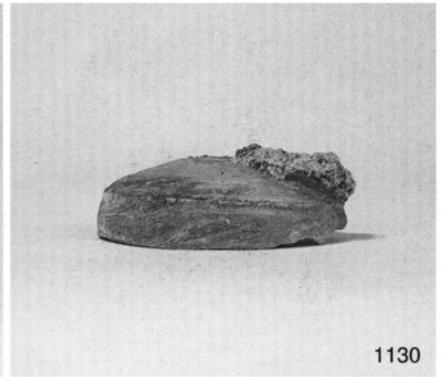
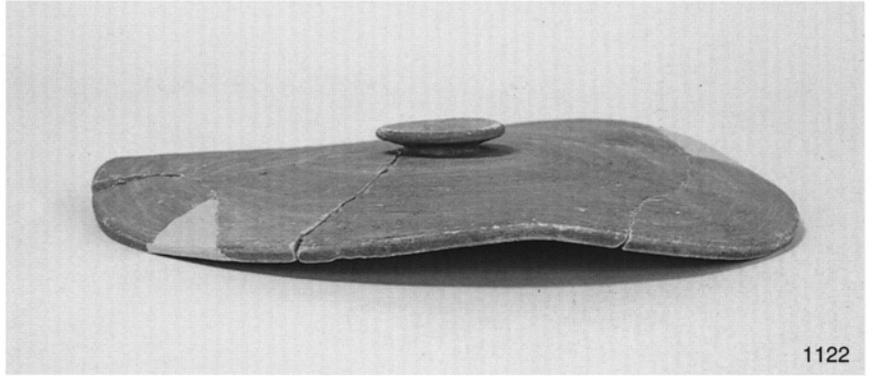
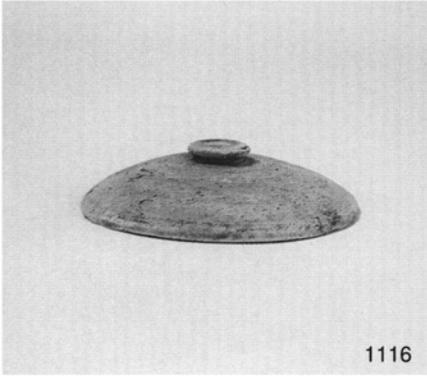
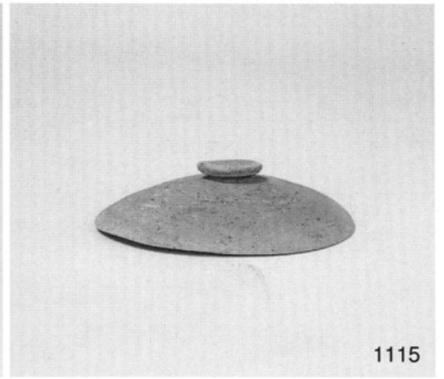
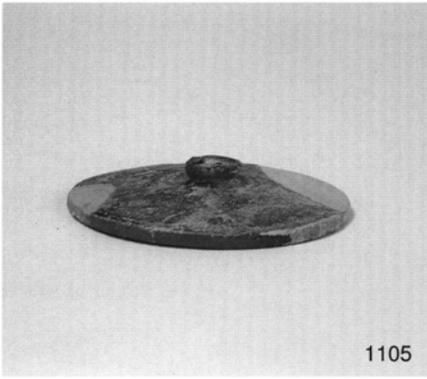


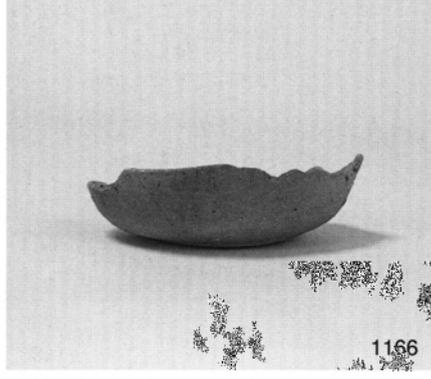
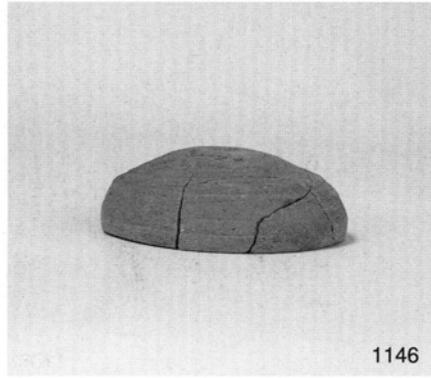
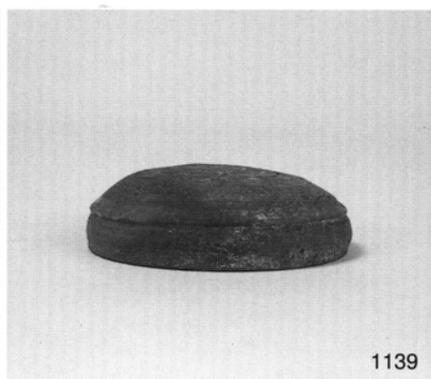


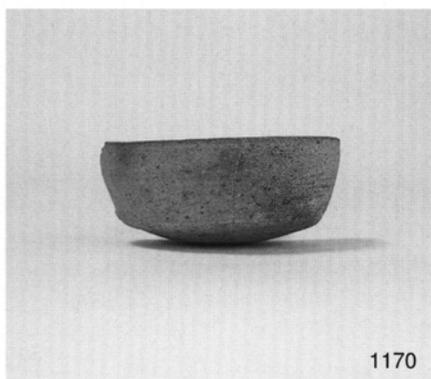


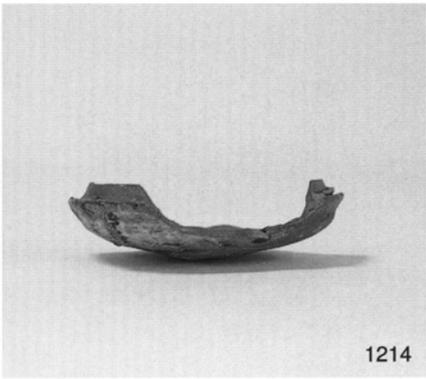
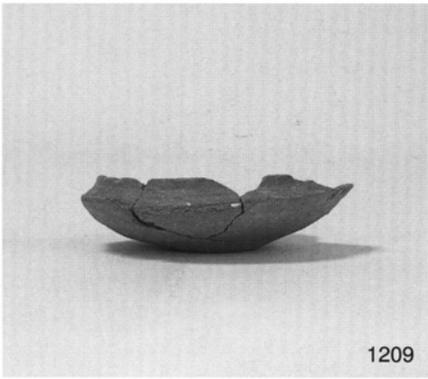


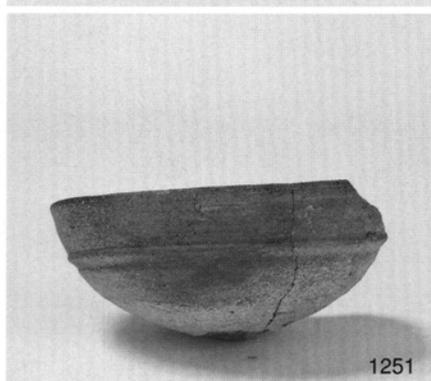
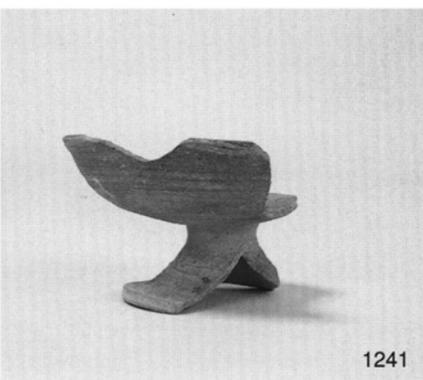


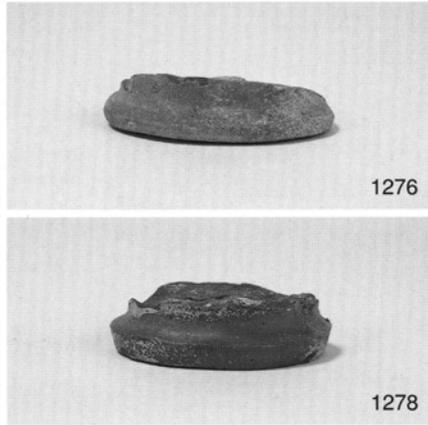


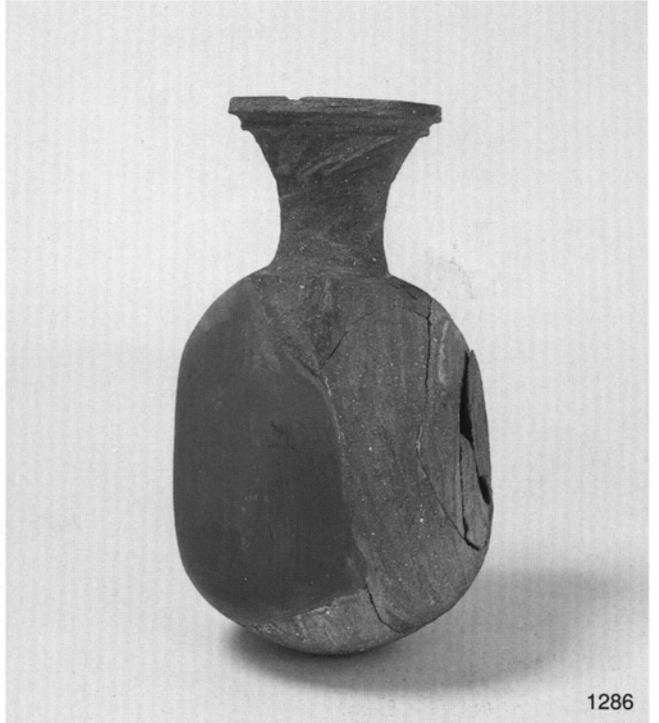


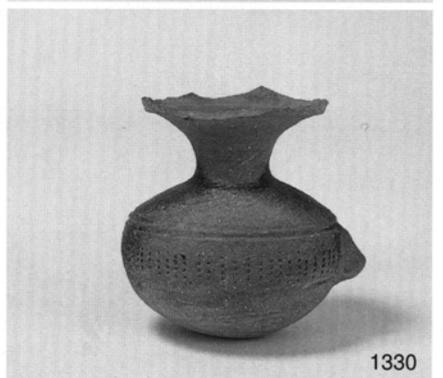
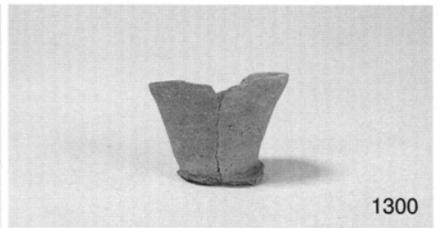


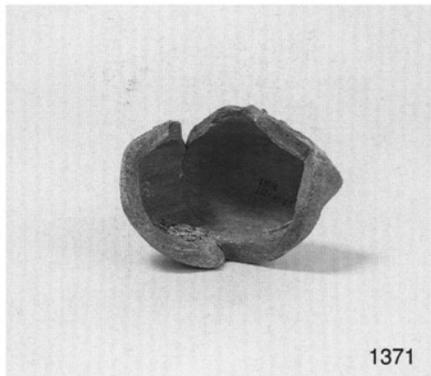
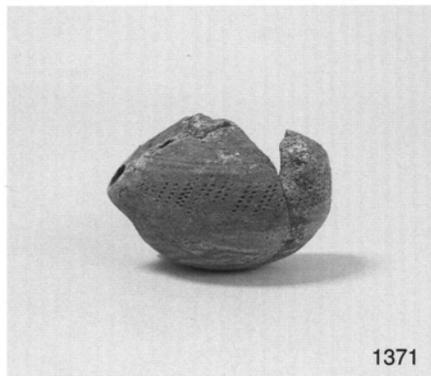
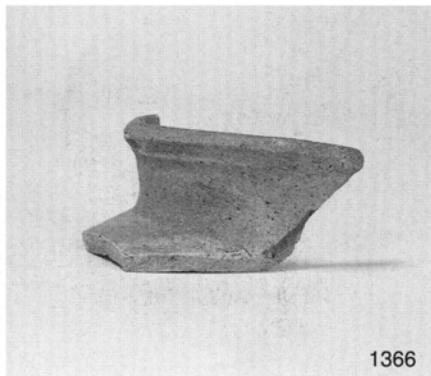
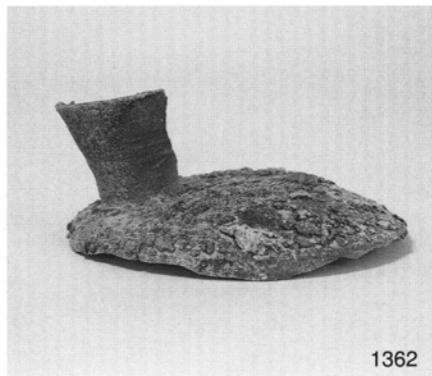
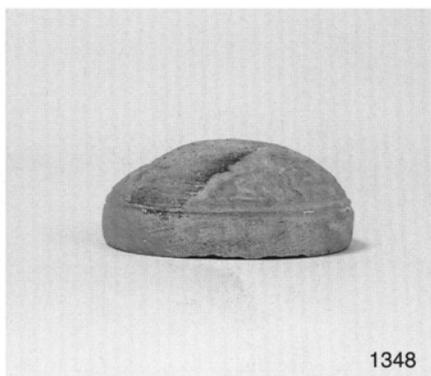
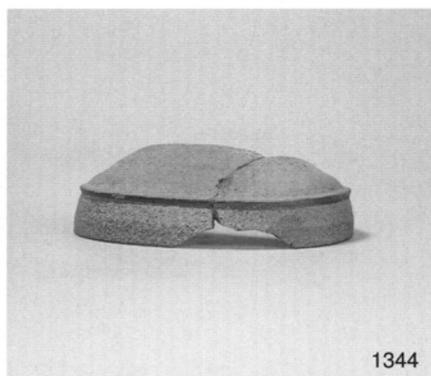


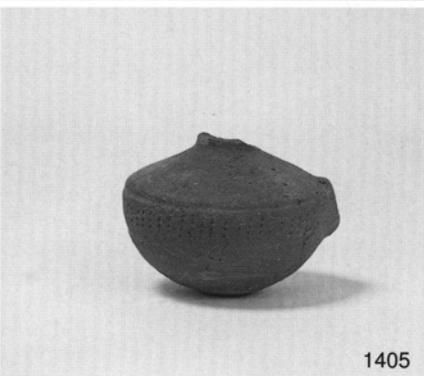
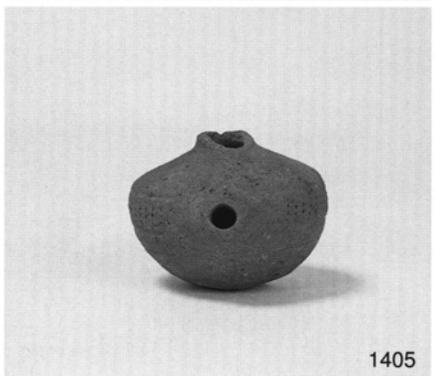
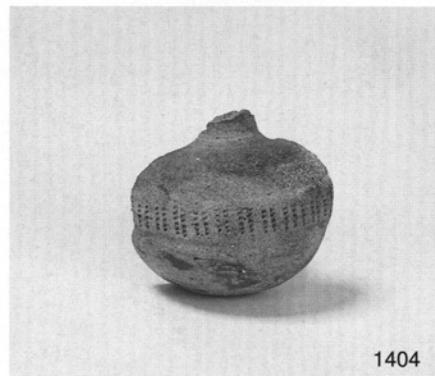
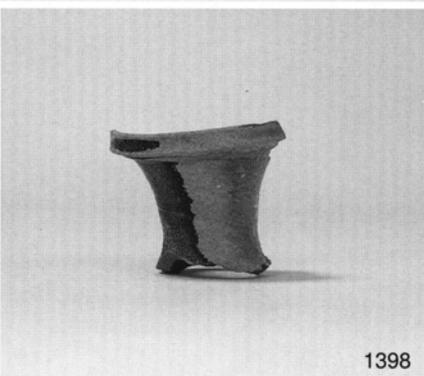
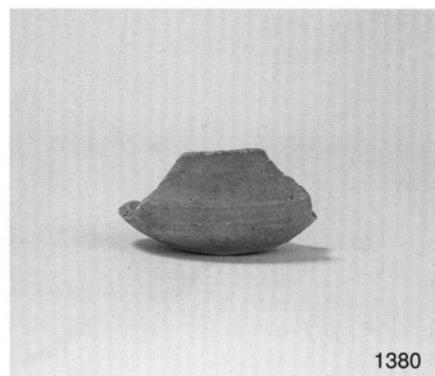


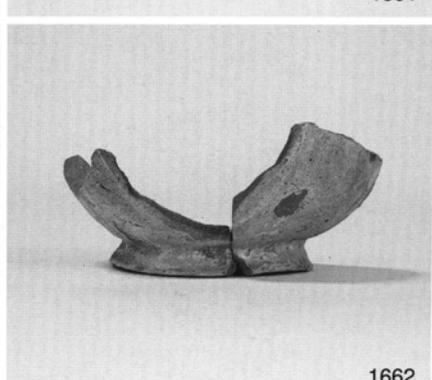
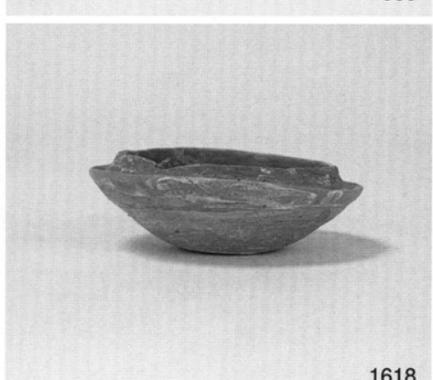
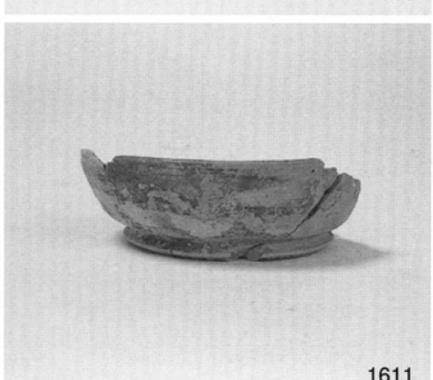
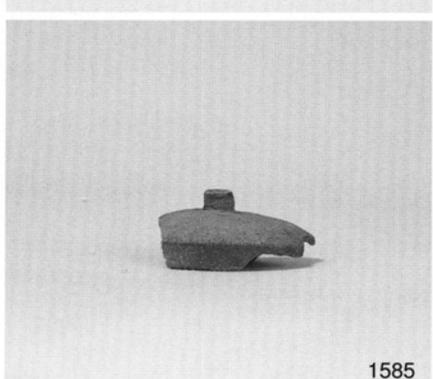
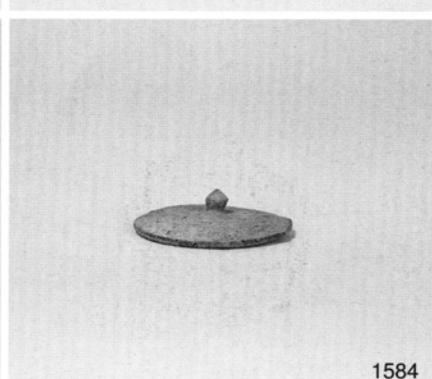
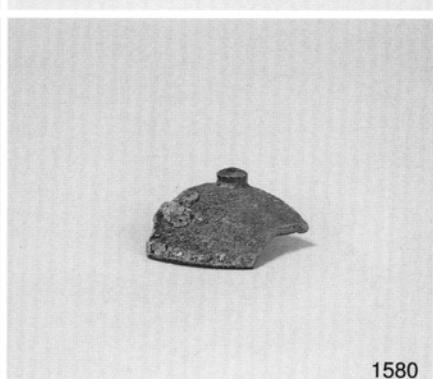
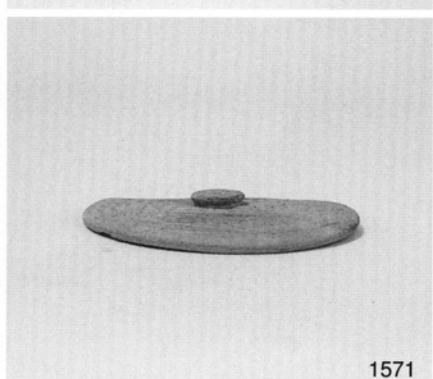
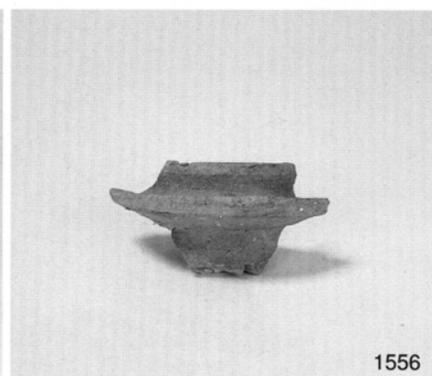
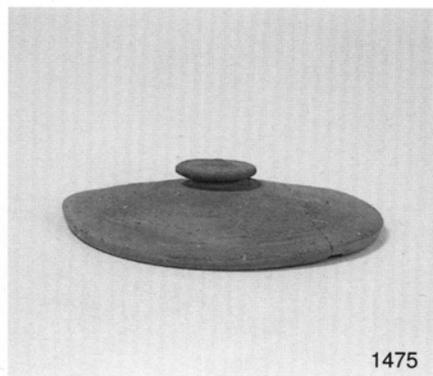


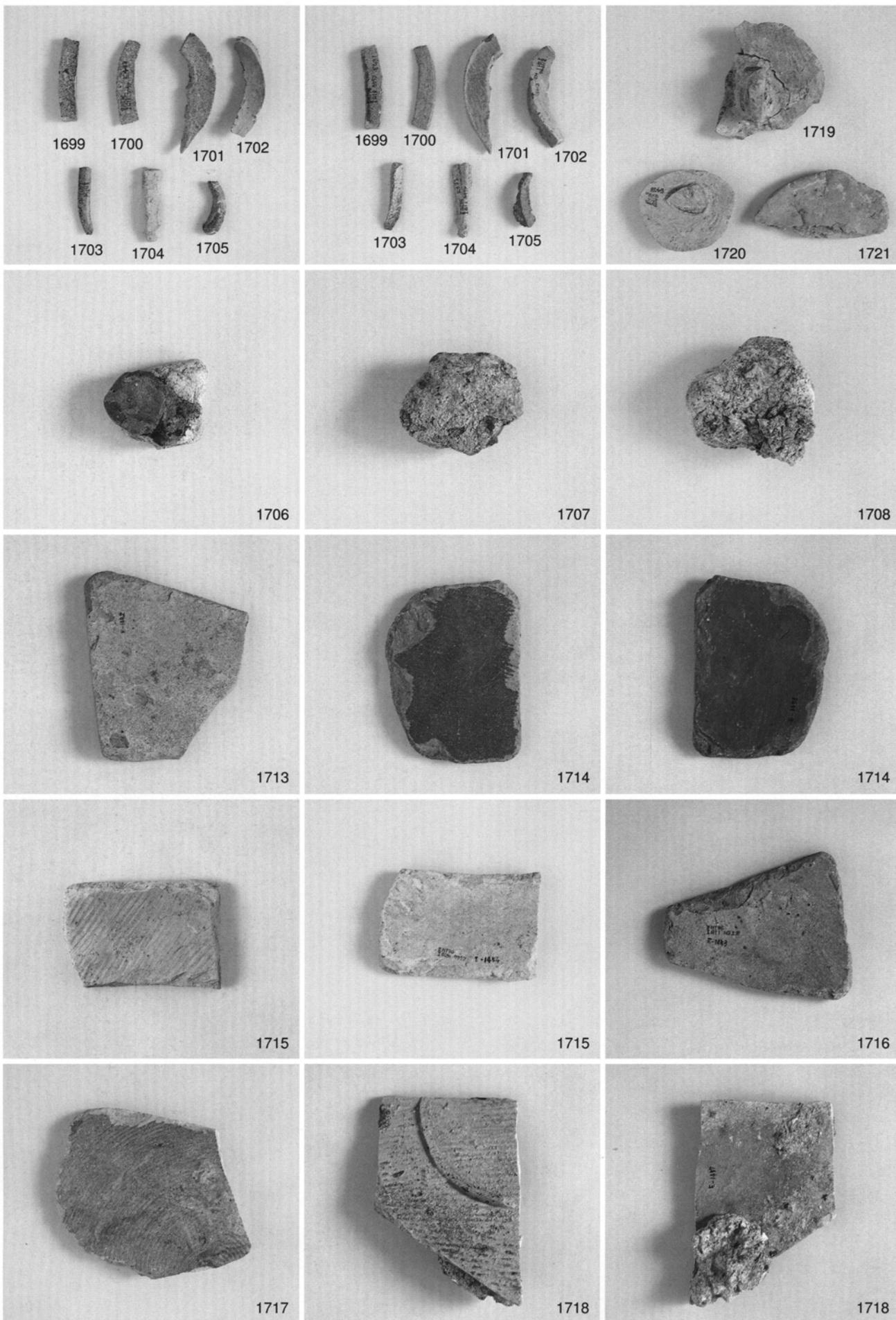


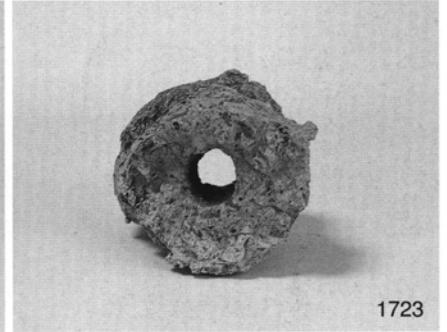
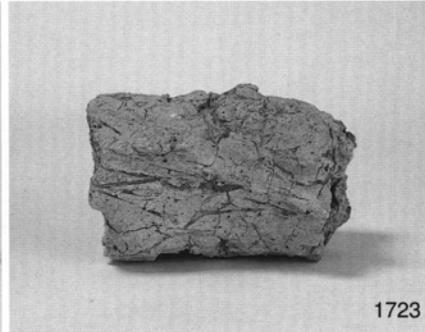
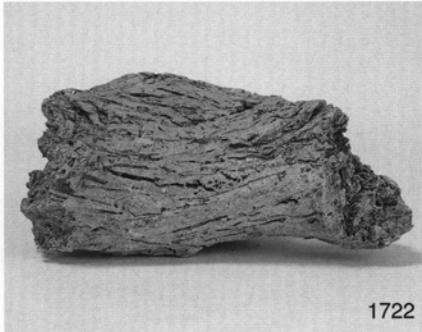
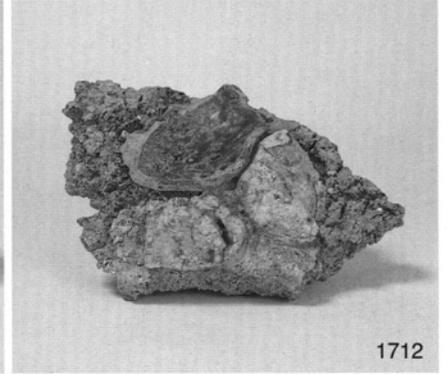
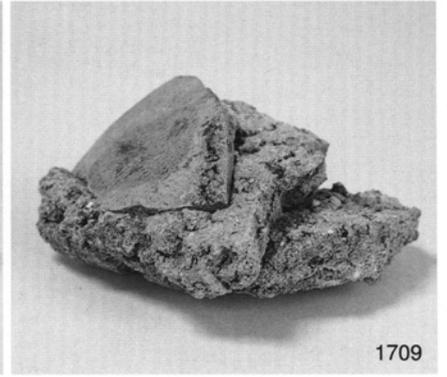
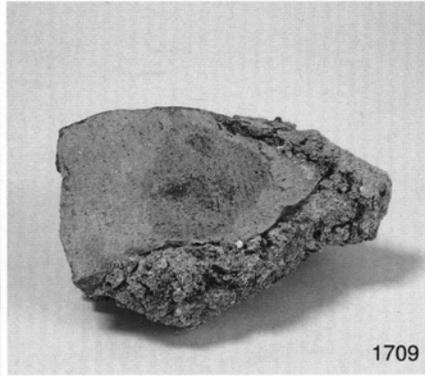
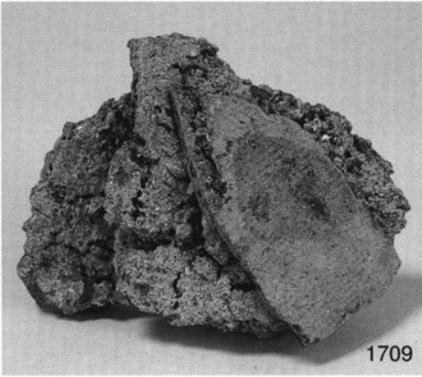












報告書抄録

ふりがな	ほそぐちしたいちごうよう・こうのすこよう・たかばりはらいちごうよう							
書名	細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第81集							
編著者名	池本正明・阿部佐保子・八木佳素実							
編集機関	財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田 TEL0567-67-4163							
発行年月日	1999年8月31日							
収蔵遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
		市町村	遺跡番号					
ほそぐちした 細口下1号窯	なごやしてんぱくくなかひら 名古屋市天白区中平	23110	01-10046	35度 6分 49秒	137度 0分 11秒	19960418 ～ 11960519	200㎡	道路建設
こうのす 鴻ノ巣古窯	なごやしてんぱくくうえだ 名古屋市天白区植田	23110	01-10005	35度 8分 22秒	137度 0分 9秒	19960921 ～ 19961110	300㎡	道路建設
たかばりはら 高針原1号窯	なごやしめいとうくたかばりはら 名古屋市名東区高針原	23104	01-4045	35度 8分 35秒	137度 0分 9秒	19960520 ～ 19960920	1000㎡	道路建設
収蔵遺跡名	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
細口下1号窯	平安時代～鎌倉時代	窯体		灰釉系陶器			床下施設	
鴻ノ巣古窯	平安時代	灰原		灰釉陶器・須恵器				
高針原1号窯	飛鳥時代	窯体・灰原		須恵器			大規模な灰原 刻書土器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第81集

細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯

1999年8月31日

編集発行 財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社